# 上越教育大学年次報告書

ー第19集：平成15年度版ー

上越教育大学

# ま　え　が　き

本年次報告書は，平成15（2003）年度における本学の活動状況を年次報告と自己点検・評価としてまとめたものであり，通算では第19号に当たる。

第１号は，昭和60年度版として昭和61年12月に発行され，その目的を辰野千壽初代学長は次のように述べている。

１　大学は公共的投資に支えられた社会的存在であるので，大学の活動状況を社会に明らかにすることは開かれた大学としての責任である。

２　大学が自己の研究・教育・その他の活動状況を自ら点検し，評価することは，大学自体の改善・充実・発展のために必要である。

３　他の大学や研究・教育機関と情報を交換したり，研究・教育上の連携を進めたりするのにも役立つ。

以来，国立大学としての本学の活動状況を示す最後の年次報告書となる本号まで刊行を重ねてきた。この間，大学を巡る諸環境は大きく変容しているが，年次報告書の目的は，基本的には変わっていない。細部における掲載内容については，随時見直しを行ってきた。

現在，開学以来の大改革といえる平成16年４月の国立大学法人化を経て，今後予定されている国立大学法人として中期目標に係る業務の実績に関する評価並びに大学の教育研究水準の向上に資するための認証評価に適切に対応し，さらには，本学の諸活動を社会に積極的にアピールできるよう自己点検・評価基準を再構築すると共に，年次報告書の在り方についても検証を行っている。

本年次報告書をご覧になった方々から，忌憚のないご意見をお寄せいただくことを祈念する次第である。

平 成 17 年 1 月

上越教育大学長

渡　邉　　隆

# 目　　次


ま え が き

序　章…… 1
　創設の理念と目的 …… 1

第一章　年 次 報 告 …… 3
　１　年度のハイライト …… 3
　２　平成15年度の大学運営 …… 3
　３　管理運営の概要…… 4
　　⑴　運営諮問会議…… 4
　　⑵　運営評議会…… 5
　　⑶　国立大学法人化対策室…… 5
　　⑷　教授会…… 5
　　⑸　大学院学校教育研究科委員会…… 5
　　⑹　企画委員会…… 6
　　⑺　大学評価委員会…… 6
　　⑻　連合大学院委員会…… 7
　　⑼　セクシュアル・ハラスメント対策委員会…… 7
　　⑽　附属学校運営委員会…… 7
　　⑾　地域連携推進室…… 8
　　⑿　学長補佐の会…… 8
　　⒀　全学教職員集会…… 9
　　⒁　教員人事…… 9
　　　①　人事委員会…… 9
　　　②　その他…… 10
　　⒂　財務・環境…… 11
　　　①　学内予算配分…… 11
　　　②　概算要求…… 11
　　　③　環境保全…… 11
　　　④　構内交通対策…… 11
　　⒃　広報活動…… 12
　　　①　情報・広報委員会…… 12
　　　②　その他の広報活動…… 12
　　⒄　教員組織…… 12
　　　①　第一部…… 12
　　　②　第二部…… 13
　　　③　第三部…… 13
　　　④　第四部…… 13
　　　⑤　第五部…… 14
　　⒅　施設整備…… 14
　　⒆　事務局…… 15

① 事務連絡会…… 15
② 各課の主な業務（特記事項）…… 15
**４ 教育・研究活動**…… 15
(1) 各講座・各分野の教育・研究…… 15
① 学習臨床講座…… 15
② 幼児教育講座…… 16
③ 生徒指導総合講座…… 17
④ 心理臨床講座…… 17
⑤ 障害児教育講座…… 18
⑥ 言語系教育講座（国語）…… 18
⑦ 言語系教育講座（外国語）…… 19
⑧ 社会系教育講座…… 20
⑨ 自然系教育講座（数学）…… 21
⑩ 自然系教育講座（理科）…… 21
⑪ 生活・健康系教育講座（保健体育）…… 22
⑫ 生活・健康系教育講座（技術）…… 22
⑬ 生活・健康系教育講座（家庭）…… 23
⑭ 芸術系教育講座（音楽）…… 23
⑮ 芸術系教育講座（美術）…… 24
(2) 大学院学校教育研究科…… 25
① 入学者選抜…… 25
② 教務関係…… 26
③ 教育実習…… 27
④ 学術研究…… 27
(3) 学校教育学部…… 28
① 入学者選抜…… 28
② 教務関係…… 30
③ 教育実地研究…… 31
④ フレンドシップ事業…… 32
⑤ 保育実習…… 33
(4) 国際交流…… 33
① 国際交流委員会…… 33
② 国際交流推進室…… 34
(5) 研究集会等…… 35
**５ 学 生 指 導**…… 45
(1) 学生生活…… 45
(2) 就職指導…… 48
**６ 附属施設等**…… 49
(1) 附属図書館…… 49
(2) 学校教育総合研究センター…… 51
(3) 保健管理センター…… 54
(4) 情報処理センター…… 56
(5) 心理教育相談室…… 58
(6) 附属実技教育研究指導センター…… 60
(7) 附属障害児教育実践センター…… 61

(8) 附属小学校…… 63
(9) 附属中学校…… 65
(10) 附属幼稚園…… 69

**第二章 自己点検・評価**…… 73
**1 自己点検・評価の実施**…… 73
**2 自己点検・評価結果**…… 73
(1) 各教員の教育活動，研究活動及び社会との連携に関する状況調査の概要…… 73
(2) 調査のデータ集計結果…… 75
(3) 総括的な点検・評価（調査結果の前年度との比較等）…… 78
(4) 各教員のデータ…… 79

**第三章 資 料 編**…… 293
**1 管 理 運 営**…… 293
(1) 管理運営機構…… 293
① 組織図…… 293
② 運営図…… 294
(2) 運営諮問会議…… 295
① 第７回議事概要…… 295
② 第８回議事概要…… 307
(3) 職員数等…… 321
① 定員・現員…… 321
② 教員の任用状況…… 322
(4) 予算及び決算…… 324
① 国立学校特別会計…… 324
② 一般会計（歳出）…… 324
(5) 広報刊行物一覧…… 325
(6) 土地・建物の概要…… 326
**2 教育・研究活動等**…… 327
(1) 平成16年度入学者選抜試験状況…… 327
① 大学院学校教育研究科…… 327
② 学校教育学部…… 331
(2) 在学者数…… 333
① 大学院学校教育研究科…… 333
② 学校教育学部…… 335
③ 科目等履修生等…… 337
④ 外国人留学生…… 337
(3) 修了者・卒業者数…… 340
① 大学院学校教育研究科（専攻・コース別）…… 340
② 学校教育学部（専修・コース別）…… 341
(4) 休学者・退学者数…… 342
① 大学院学校教育研究科（専攻・コース別）…… 342
② 学校教育学部（専修・コース別）…… 343
(5) 各教員の担当授業科目・授業時間数一覧…… 344
(6) 平成15年度学位論文・卒業研究…… 387

① 大学院学校教育研究科修了者の学位論文題目一覧…… 387
② 学校教育学部卒業者の卒業研究題目一覧…… 397
(7) 教育職員免許状取得状況…… 403
① 平成15年度大学院学校教育研究科修了者…… 403
② 平成15年度学校教育学部卒業者…… 403
(8) 科学研究費補助金等…… 404
① 科学研究費補助金…… 404
② 各種研究経費…… 406
③ 奨学寄附金…… 406
(9) 上越教育大学研究プロジェクト採択状況…… 408
(10) 教員の外国出張等…… 409
① 外国出張・海外研修…… 409
② 内地研究員…… 415
(11) 非常勤講師等…… 416
① 非常勤講師…… 416
② 教員養成実地指導講師…… 418
③ ティーチング・アシスタント…… 424
④ リサーチ・アシスタント…… 427
(12) 公開講座等実施状況…… 428
① 公開講座…… 428
② 文化講演会…… 429
③ 出前講座…… 430
(13) 厚生補導事業実施状況…… 431
(14) 学生団体一覧…… 432
(15) 奨学金受給状況…… 433
① 日本育英会…… 433
② 日本育英会以外の奨学事業団体…… 434
(16) 授業料及び入学料免除実施状況…… 435
① 授業料免除…… 435
② 入学料免除…… 435
(17) 学生宿舎・国際学生宿舎入居状況等…… 436
① 入居状況…… 436
② 居室状況…… 437
(18) 平成15年度修了者・卒業者就職状況…… 438
① 大学院学校教育研究科（現職教員を除く）…… 438
② 学校教育学部…… 439
③ 都道府県別公立学校教員就職者数…… 440
(19) 学生健康診断受診・精神衛生相談実施状況…… 441
① 定期健康診断…… 441
② 特別健康診断…… 442
③ 精神衛生相談…… 442
(20) 附属図書館蔵書数・利用状況…… 443
① 蔵書数…… 443
② 利用状況（前年度比）…… 444
(21) 附属学校在学児童・生徒・幼児数 …… 445

３　兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科…… 446
(1)　平成16年度入学者選抜試験状況…… 446
(2)　構成大学別配属学生数…… 447
(3)　配属学生別指導教官…… 447
(4)　平成15年度修了者及び学位論文…… 448
①　修了者…… 448
②　修了者の学位論文題目一覧…… 448
４　自己点検・評価関係規程等…… 449
(1)　上越教育大学大学評価委員会規程…… 449
(2)　上越教育大学大学評価委員会大学評価専門部会細則…… 450
(3)　上越教育大学大学評価委員会ﾌｧｶﾙﾃｨ・ﾃﾞｨﾍﾞﾛｯﾌﾟﾒﾝﾄ推進専門部会細則…… 451

第四章　大学評価・学位授与機構の大学評価…… 453
１　大学評価・学位授与機構が行う大学評価について…… 453
２　評価報告書…… 453
全学テーマ別評価
平成12年度着手　「教育サービス面における社会貢献」…… 455
平成12年度着手継続分　「教養教育」…… 465
平成13年度着手　「研究活動面における社会との連携及び協力」…… 477
平成14年度着手　「国際的な連携及び交流活動」…… 491
分野別教育評価
平成13年度着手　「教育学系（学校教育学部）」…… 505
平成13年度着手　「教育学系（大学院学校教育研究科）」…… 519

あ　と　が　き

大学評価委員会委員名簿

# 序　　章

# 序　　章

## 創設の理念と目的

今日の教育は，広く国民の大きな関心を集め，教育の制度や内容は大きく発展してきた。

しかし，その中心となる学校教育を担う教員に対しては，教育者としての使命感と人間愛に支えられた広い一般的教養，教育の理念・方法及び人間の成長や発達についての深い理解，教科に関する専門的学力，優れた教育技術など，専門職としての高度の資質能力が要求されている。

上越教育大学は，このような時代の要請にこたえて，主として初等中等教育教員に研究・研鑽の機会を提供することを趣旨とする大学院修士課程と，初等教育教員を養成する学部を持ち，学校教育に関する理論的・実践的な教育研究を推進する国立の教育大学として，昭和53年10月１日に設置された。

大学院は，学校教育研究科（修士課程）とし，主として初等中等教育の実践にかかわる諸科学の総合的・専門的研究を行うとともに，初等中等教育教員に高度の学習と研究の機会を与え，その理論的・実践的な能力の向上を図ることをねらいとしており，そのために，入学定員の３分の２程度は，初等中等教育における３年以上の教職経験を有する者を入学させることとしている。

学部は，学校教育学部とし，初等教育教員養成課程を置き，児童等の成長と発達に関する総合的な理解の上に，全教科・領域にわたる優れた指導能力を備えた初等教育教員を養成することを目的としており，人間の生涯を通ずる教育の基礎とされる初等教育と，これに携わる教員の養成の重要性にかんがみ，学生の人間形成についても重視することとしている。

また，教員養成系としては初めて，兵庫教育大学に設置された「大学院連合学校教育学研究科（博士課程）」は，本学，兵庫教育大学，岡山大学及び鳴門教育大学の４大学が，それぞれの大学院修士課程における実績の上に，連携協力して教育・研究組織を編成し，学校教育における教育活動や教科の教育に関する実践的研究を行い，それを踏まえた高度の研究・指導能力を備えた人材を育成することを目的としている。

# 第一章　年　次　報　告

# 第一章　年　次　報　告

## 1　年度のハイライト

平成15年度の大学運営上の主要事項を時間の経過に従って記載する。

**①〈新学長・副学長の就任〉**

平成15年４月１日付けで大澤健郎学長に替わって，渡邉　隆学長が就任し，同日付けで小宮三彌及び高田喜久司の両副学長が発令された。

**②〈法人化への移行対策〉**

国立大学法人への移行年度として，法人化対策室を中心に中期目標・中期計画の策定，法人運営組織の構築，労働安全衛生法対策，就業規則・会計規則等関係法令の改正及び企業会計システムの導入等の諸準備を行った。

**③〈地域貢献特別支援事業〉**

文部科学省が公募を行った「地域貢献特別支援事業」において，昨年度に引続き「現職教員支援のための総合的「学校コンサルテーション」推進事業」が採択され，同事業を実施した。

**④〈学外スクールカウンセラーの採用〉**

保健管理センターでは，従来からカウンセラー等として学内教官を委嘱し，精神衛生相談業務を実施していたが，平成16年10月から新たに学外スクールカウンセラーを採用し，相談体制の充実・整備を図った。

**⑤〈新潟県大学連合知的財産本部等の設置〉**

文部科学省が公募を行った「知的財産本部整備事業」において，本学を含む新潟県内５大学（代表機関：新潟大学）が連合組織として申請した「新潟県大学連合知的財産本部」構想が「特色ある知的財産管理・活用機能支援プログラム」対象機関に選定され「新潟県大学連合知的財産本部」が設置された。なお，このことに伴い本学に上越教育大学知的財産本部を設置した。

**⑥〈総合情報セキュリティ対策〉**

平成15年11月に学長による「総合情報セキュリティ対策実施宣言」を実施し，本学の情報セキュリティポリシーが承認された。このことにより，平成16年４月から情報セキュリティポリシーに定める組織を設置するとともに総合的かつ継続的にセキュリティ対策を実施していくこととした。

**⑦〈附属中学校校舎改修工事の実施〉**

附属中学校耐震補強等の校舎改修工事を実施し，平成16年２月に竣工した。

**⑧〈大学評価・学位授与機構の全学テーマ別評価の実施〉**

大学等（大学及び大学共同利用機関）の評価に関する事業を実施する機関として設置された大学評価・学位授与機構の全学テーマ別評価「国際的な連携及び交流活動」が行われ，本学に係る評価も含め大学評価結果が３月に公表された。

## 2　平成15年度の大学運営

平成15年度は，渡邉　隆学長の新体制のもとで，平成16年４月の国立大学法人化に向けた様々な準備が進められていった。中期目標・中期計画，組織・運営，就業等ついては，国立大学法人化対策室及び運営評議会において集中的に審議し，その結果を全学集会において全教職員に説明し，理解を深めてもらうとともに，教職員から意見等を聴取し改善に反映した。これらにより，学内外の大学人は，国立大学法人に生まれ変わろうとしている大学をこれまでにない緊張感とともに感じないわけにはいかなかった。

一方，本学は平成12年度に始まった大学改革における成果として学校教育学部の学年進行が完了し，改革後初め

ての卒業生を送り出した。また，地域連携・地域貢献事業では，本学地域連携推進室と学校教育総合研究センターが実施する「総合的学校コンサルテーション」が本格的に活動を開始した。本事業は，法人化後も地域連携・地域貢献活動の中心的活動として，さらなる意味をもってくると予想される。

## 3　管理運営の概要

### (1)　運営諮問会議

#### ①　設置の趣旨（目的）及び組織

運営諮問会議は，大学が社会からの意見を聴取し，社会的存在としてその責任を明らかにするとの観点から，次の事項について，学長の諮問に応じて学外有識者が審議し，学長に対して助言又は勧告を行うもので，国立学校設置法の規定により，平成12年４月から全ての国立大学に設置されたものである。

ア　大学の教育研究上の目的を達成するための基本的な計画に関する重要事項

イ　大学の教育研究活動等の状況について当該大学が行う評価に関する重要事項

ウ　その他大学の運営に関する重要事項

また，本学の運営諮問会議は，各界の有識者11名で構成されている。

#### ②　開催状況及び主な審議事項

平成15年度においては，次のとおり２回開催された。

第７回　期　日：平成15年６月13日㈮　出席委員９名
　　場　所：如水会館（東京都千代田区）
　　議　事：１）諮問事項「国立大学法人としての上越教育大学の中期目標・中期計画について」
　　２）その他

第８回　期　日：平成15年12月16日㈫ 出席委員８名
　　場　所：ホテルセンチュリーイカヤ（上越市）
　　議　事：１）諮問事項「国立大学法人上越教育大学の在り方について」
　　２）その他

#### ③　運営諮問会議委員名簿

平成15年度における運営諮問会議委員（職名は平成15年４月１日現在）は，次のとおりである。

井　内　慶次郎　東京国立博物館運営協力会会長
小　原　芳　明　学校法人玉川学園理事長・玉川大学長
副委員長　加　藤　　章　盛岡大学学長
黒　羽　亮　一　常磐大学教授
木　浦　正　幸　上越市長
佐久間　昇　二　株式会社ＷＯＷＯＷ代表取締役社長兼会長
佐々木　正　峰　独立行政法人国立科学博物館長
髙　橋　信　雄　高助合名会社社長
委員長　蓮　見　音　彦　和洋女子大学特任教授
林　　尚　彦　新潟県中学校長会会長（H15．６．16から）
平　山　征　夫　新潟県知事
山　岸　　宏　新潟県小学校長会会長（H15．６．15まで）

〈五十音順・敬称略〉

### (2) 運営評議会

運営評議会は，国立学校設置法施行規則の一部改正により，当該大学の事情により評議会を置いている一個の学部のみを置く国立大学に，国立学校設置法に掲げる評議会の審議事項（一部を除く。）を審議するため「運営評議会」を置くことが規定されており，学長，副学長，附属図書館長，学部主事，学校教育総合研究センター長及び学長が指名する教授若干人で組織し，原則として毎月第２水曜日に開催している。なお，運営評議会には専門的事項について調査検討を行うため，４つの常置の専門委員会が置かれている。

平成15年度においては，17回（第46回～第62回）開催し，主な審議事項は，①国立大学法人化対策，②中期目標・中期計画等，③特色ある大学教育支援プログラムへの応募，④新潟県大学連合知的財産本部，⑤情報セキュリティポリシーの策定，⑥大学院修士課程定員充足のための対応策・大学院長期履修学生制度，⑦養護教諭養成開設準備委員会の設置，⑧学則の改正，⑨平成16年度概算要求及び平成15年度歳出予算学内配分，⑩大学院授業科目の履修基準の変更，⑪大学院学校教育研究科のコース改編，⑫名誉教授の選考，⑬大学評価・学位授与機構への対応及び自己点検･評価，⑭奨学寄附金の受入れ，等であった。（各回の議題については，学報第84号～第88号参照）

### (3) 国立大学法人化対策室

国立大学法人化対策室は，国立大学法人化に向けた検討を行い，必要な事項を実施するため，平成14年４月に設置され，運営評議会委員，学長が指名した事務局職員及びその他学長が指名する者の計15人で構成している。

また，国立大学法人化対策室に，法人化に係る諸作業を進めるため，企画調整部会，組織業務・人事部会，目標・評価部会及び財務・会計部会の４部会を設置し，基本方針等の原案作成に向けた精力的な検討を行った。

平成15年度においては，国立大学法人化対策室会議を15回（第４回～第18回）開催し，①中期目標･中期計画，②国立大学法人上越教育大学の組織業務及び人事制度の概要，③国立大学法人上越教育大学の学内規則等，国立大学法人化に係る諸事項について取りまとめの上，学長へ報告した。

### (4) 教授会

教授会は，学部の教育研究に関する重要事項を審議し，及び教育公務員特例法の規定によりその権限に属することとされた事項を行うために設置されており，学長，副学長及び教授で組織し，原則として毎月第４水曜日に開催している。なお，教授会には専門的事項について調査検討を行うため，８つの常置の専門委員会が置かれている。

平成15年度においては，15回（第301回～第315回）開催し，主な審議事項は，①教員人事，②役職員の選考，③専門委員会委員の委嘱，④教育課程の一部変更，学年暦及び教育実習実施計画，⑤学生募集要項，⑥大学入学資格の個別審査，⑦入学者選抜試験の実施及び合格者の判定，⑧進級判定及び卒業判定，⑨学生の休学及び退学，⑩科目等履修生及び特別聴講学生の受入れ，⑪外国人研究者の受入れ，等であった。（各回の議題については，学報第84号～第88号参照）

### (5) 大学院学校教育研究科委員会

大学院学校教育研究科委員会は，大学院（学校教育研究科）の教育研究に関する重要事項を審議するために設置されており，研究科長（学長），副学長及び研究科担当を命じられた教授で組織し，原則として毎月第４水曜日に開催している。なお，委員会には専門的事項について調査検討を行うため，８つの常置の専門委員会が置かれている。

平成15年度においては，18回（第302回～第319回）開催し，主な審議事項は，①大学院担当教員の判定，②専門委員会委員の委嘱，③教育課程の一部変更及び学年暦，④学生募集要項，⑤大学院入学資格の認定，⑥入学者

選抜試験の実施及び合格者の判定，⑦学位論文総合審査，⑧修了判定，⑨学生の休学，退学及び除籍，⑩ティーチング・アシスタントの選考，⑪派遣特別研究学生の派遣，⑫私費外国人留学生（研究生）の受入れ方針，⑬科目等履修生及び研究生の受入れ，⑭学生の表彰，等であった。（各回の議題については，学報第84号～第88号参照）

### (6) 企画委員会

企画委員会は，本学の将来計画等について検討することを目的に設置されており，運営評議会委員，附属実技教育研究指導センター長，運営評議会委員以外の附属学校長及び事務局長の計16人で構成している。

平成15年度においては，10回（第23回～第32回）開催し，主な審議事項は，①平成15年度特色ある大学教育支援プログラムへの対応及び応募，②大学院学校教育研究科の発達臨床コースの分野の改編，③法人化に向けた人事計画，④大学院共通科目及び専攻科目の履修基準の変更，⑤学部授業科目「同和教育」の対応，⑥大学院長期履修学生制度の導入，⑦養護教諭養成コースの開設，⑧施設利用計画，⑨企画委員会に係る開設授業科目の責任体制等であった。

### (7) 大学評価委員会

#### ① 設置の趣旨（目的）及び組織

大学評価委員会は，本学の教育研究水準の向上並びに本学の目的及び社会的使命達成のため，教育研究活動等の状況について点検及び評価を行うとともに，本学の授業の内容及び方法の改善を図るための基本方針を策定し教育方法等の改善の推進を図ることを目的に設置されており，運営評議会委員，附属実技教育研究指導センター長，運営評議会委員以外の附属学校長及び事務局長の計16人で構成している。また，本委員会に，大学評価に関する事項を調査検討するため大学評価専門部会を，ファカルティ・ディベロップメントの推進に関する事項を調査検討するため，ファカルティ・ディベロップメント推進専門部会を置いている。

#### ② 開催状況及び主な審議事項等

平成15年度においては，５回（第13回～第17回）開催し，

１）本委員会が実施組織となる項目に係る自己点検・評価の実施

２）平成14年度自己点検・評価の取りまとめ

３）平成15年度自己点検・評価事項等の決定

４）年次報告書（第19集：平成15年度版）の作成

５）大学評価・学位授与機構が行う大学評価への対応　等について，審議した。

その審議結果に基づき，

１）平成14年度自己点検・評価結果報告書の作成

２）年次報告書（第18集：平成14年度版）の発行

３）各教官への教育活動，研究活動及び社会との連携に関する状況調査

４）大学評価・学位授与機構が行う大学評価への対応　等を行った。

#### ③ 今後の課題等

平成15年度は，前年度とほぼ同様に審議が行われ，主として大学評価・学位授与機構への対応などであったが，平成16年度からは，新たに国立大学法人上越教育大学大学評価委員会が設置され，組織運営の状況や教育研究の状況について自ら行う点検・評価に関する専門的・具体的事項に関すること等を審議することとなり，本学の中期目標・中期計画や年次計画との関連において，文部科学省の国立大学法人評価委員会や認証評価機関（大学評価・学位授与機構など）の評価方法・基準等を考慮し，具体的な自己点検・評価システムを早期に検討・実行していくことが必要である。

### ⑻ 連合大学院委員会

連合大学院委員会は，本学が構成大学として参加する兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科（平成８年４月１日設置，以下「連合研究科」という。）と本学との連絡調整に関する事項並びに連合研究科の研究科委員会及び研究科代議委員会の審議事項に関する事項等について審議するために設置されており，学長，副学長及び連合研究科の主指導教官有資格者である教授で組織し，原則として毎月第４水曜日に開催している。

なお，平成14年６月26日㈬開催の第64回委員会において，連合研究科の科内情報ホームページの運用に伴い，委員会の議題等が代議委員会等の報告のみで各委員へのメール等による連絡で足りる場合は，委員会の開催を見合わせることとした。

平成15年度においては，６回（第68回～第73回）開催し，主な審議事項は，①ティーチング・アシスタントの選考，②リサーチ・アシスタントの選考，③連合研究科幹事の選出，④国立大学法人化後の構成国立大学法人間協定書等案，⑤連合大学院委員会規程，等であった。

### ⑼ セクシュアル・ハラスメント対策委員会

セクシュアル・ハラスメント対策委員会は，本学におけるセクシュアル・ハラスメントの防止及び救済に関する対策を総合的に取り扱い，快適な就学・就労環境を確保することを目的に設置された。平成13年度からは，セクシュアル・ハラスメントの防止に関する活動として，セクシュアル・ハラスメント防止対策専門部会を置いている。

平成15年度においては，セクシュアル・ハラスメント処分事案の発生もあり，委員会は４回開催し，セクシュアル・ハラスメントの相談に関する事項の審議及び平成16年度以降のセクシュアル・ハラスメント防止関係規程の検討を行った。

専門部会は，平成15年４月開催の学部・大学院の「新入生オリエンテーション」において前専門部会長が，平成15年７月25日㈮開催の「新任職員研修会」では，対策委員会委員長がセクシュアル・ハラスメントについて説明を行った。平成15年11月19日㈬には，外部講師を招き，学生及び教職員を対象とした「セクシュアル・ハラスメント講演会」を開催した。

さらに，昨年度から実施しているビデオ上映研修は，セクハラ相談員，新任教職員及び希望者並びに附属学校教員を対象に５月～７月に行い，10月には学部3年次生を対象とした教員養成課程学生合宿研修及び学部１年次生のコース分け説明会前におけるビデオ研修，並びに大学院学生を対象に院生協議会主催の研修会を実施した。11月には学部４年次生に教員免許申請説明会前の30分を使いビデオ上映研修を行っている。

また，新たに相談員等となった者を対象として，平成15年６月９日㈪に「セクシュアル・ハラスメント相談員等の任務等説明会」を，平成15年11月19日㈬には，外部講師による全ての相談員等を対象とした「セクシュアル・ハラスメント相談員等のための研修会」を開催した。

なお，平成15年10月に全学生・教職員を対象としたセクシュアル・ハラスメントに関するアンケート調査を実施，同報告書を作成し平成16年３月に学生・教職員に配付している。

今後の課題としては，法人化後の大学構成員一人一人のセクシュアル・ハラスメントに対する意識を高めるため，引き続いて講演会等を中心とした啓発・防止対策活動の一層の充実を図ることが必要であり，それらをとおして教育環境の整備を行っていく予定である。

### ⑽ 附属学校運営委員会

附属学校運営委員会は，附属学校の管理運営の基本方針及び本学と附属学校の連携等に関する事項について検討することを目的に設置されており，学長，副学長，学部主事，附属学校長，附属学校教頭及び事務局長の計15

人で構成している。

平成15年度においては，３回開催し，主として次の事項について協議した。

ア　附属中学校における教育相談体制

イ　附属学校園研究協議会

ウ　附属中学校わくわく大学ウィークの実施

エ　学校給食の在り方

オ　附属学校の安全管理体制

カ　附属学校の学校評議員会

キ　附属学校としての中期目標・中期計画

また，附属学校の在り方の検討として，本委員会に附属学校運営検討専門部会を設置した。部会においては，５回開催し，主として次の事項について検討した。

ア　附属学校としての中期目標・中期計画

イ　附属学校の学校給食

ウ　附属学校と大学教官との連携

エ　附属学校の安全管理

### ⑾　地域連携推進室

地域連携推進室は，地域との連携を組織的・総合的に取り組みかつ積極的に推進するため，平成14年５月に設置され，室長，次長及び室員の計15人で構成している。

平成15年度において地域連携推進室は，地域連携推進室会議を３回開催し，主な業務を以下のとおり実施した。

#### ①　地域貢献特別支援事業

新潟県内３国立大学並びに新潟県及び上越地域教育委員会との連携により，次の５事業を実施した。

- 現職教員支援のための総合的「学校コンサルテーション」推進事業
- 情報教育実践に関する指導力育成のための現職教員研修支援事業
- 障害児教育における指導・検査技術育成のための現職教員研修支援並びに教育相談事業
- 地方分権化時代に即応した自律的な学校経営力育成のためのスクールリーダー研修支援事業
- 学校教育相談研修システム構築支援事業

#### ②　新潟大学と上越教育大学との教員養成・現職教員研修の在り方に関する連携協議会

上越教育大学と新潟大学が連携して，これまでの両大学の教育研究の成果をもとに，今後の新潟県における教員養成・現職教員研修に関し先進的な研究と実践を推進することを目的に実施した。

#### ③　上越地域教育委員会と上越教育大学との連携推進協議会

現職教員の高度研修機関である上越教育大学の特質を活かし，高度な臨床的指導力の向上を図る人材養成及び教育相談等を中核に，組織的・継続的な地域貢献を推進し，上越地域を中心とする教育委員会（上越市，柏崎市，糸魚川市及び新井市の教育委員会が参加。）と上越教育大学との一層の連携協力を行うことを目的に実施した。

### ⑿　学長補佐の会

学長補佐の会は，学内の諸課題に対応するため，副学長と連携して，教育研究，自己点検評価，大学評価，入学試験，その他に関し，学長の職務を補佐するため設置されており，学長の諮問する事項に関し，情報の収集・調査分析を行い，学長に意見具申することとされている。平成15年度は，加藤（哲）教授，鈴木（情）教授，下

西教授，加藤（雅）教授，佐藤（芳）教授，小林教授，茂手木教授，川崎教授の８人が学長補佐に指名され，計８回開催され，主に大学の将来計画について討議が重ねられた。

### ⑬ 全学教職員集会

全学教職員集会は，学長団（学長，副学長，事務局長）が大学の将来に関する方針・展望について説明し，出席した教職員からの質問等について，学長団がそれに応じるという形で開催し，それぞれの時点における情報伝達，特に教授会構成員でない教官・事務官の意見・要望の吸い上げを行っている。

平成15年度においては，以下のとおり６回開催し，平成16年度からの国立大学法人後の将来構想，組織・運営，就業等について，教官・事務官との間で活発な意見交換が行われた。

① ４月23日：講堂（参加者約250名）
- ア 大学運営の基本方針
- イ 国立大学法人化対応の基本方針と中期目標・中期計画（案）の概要
- ウ 国立大学法人法案の概要

② ７月16日：講堂（参加者約200名）
- ア 国立大学法人化対応の基本方針と中期目標・中期計画（案）の概要
- イ 国立大学法人法案の概要

③ 10月29日：講義棟301教室（参加者約200名）
- ア 国立大学法人化後の組織及び人事制度の中間報告

④ 12月17日：講義棟301教室（参加者約200名）
- ア 国立大学法人上越教育大学の組織業務及び人事制度の概要

⑤ ２月18日：講義棟301教室（参加者約250名）
- ア 上越教育大学の組織・運営の基本的な考え方
- イ 上越教育大学の事務組織
- ウ 上越教育大学の就業規則

⑥ ３月16日：講堂（参加者約250名）
- ア 上越教育大学の運営組織
- イ 上越教育大学の就業規則関連規程

### ⑭ 教員人事

#### ① 人事委員会

教授会に置かれる専門委員会として，教員の人事に関する事項を審議するため，人事委員会が設置されており，副学長及び各部から選出された教授16人（第一部，第二部及び第三部から選出された教授各３人，第四部から選出された教授５人，第五部から選出された教授２人）の計18人並びに臨時委員（選考案件ごとに当該部から選出される教授２人）で構成している。

人事委員会は，教員の選考に当たっては，選考案件ごとに教員選考審査会を設置して，候補者の業績審査等を付託し，同審査会の審査報告を基に審議を行っている。

委員会は，毎月１回，定例教授会開催日の１週間前の開催を原則としており，平成15年度は11回開催した。

教員任用の審査件数は次のとおりである。

| 職名 | 平成15年度 | | | | | | 平成14年度 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 件数 | 採用 | 昇任 | 異動 | 配置換 | 併任 | 件数 | 採用 | 昇任 | 異動 | 配置換 | 併任 |
| 教授 | 9 | 3 | 6 | | | | 10 | 2 | 5 | 2 | 1 | |
| 助教授 | 3 | | 3 | | | | 5 | | 4 | | 1 | |
| 講師 | 5 | 3 | 2 | | | | 1 | 1 | | | | |
| 助手 | | | | | | | | | | | | |
| その他 | 51 | − | − | − | − | − | 57 | − | − | − | − | − |
| 計 | 68 | 6 | 11 | | | | 73 | 3 | 9 | 2 | 2 | |

（注）・「採用」には，転任を含む。

・「異動」は，副学長から教授への任用を示す。

・「その他」は，外国人教員（任期更新），非常勤講師，外国人教師，客員研究員及び生活科担当教員を示す。

② **その他**

ア 役 職 員

平成15年度役職員は，次のとおりである。

(ア) 部 局 長 等

学長 渡邉 隆
副学長 小宮三彌
副学長 髙田喜久司
附属図書館長 若井彌一
第一部学部主事 大悟法 滋
第二部学部主事 星名信昭
第三部学部主事 齋藤九一
第四部学部主事 川崎直哉
第五部学部主事 風巻孝男
学校教育総合研究センター長 戸北凱惟
保健管理センター所長 佐藤 誠
情報処理センター長 室谷利夫
附属実技教育研究指導センター長 下西善三郎
附属障害児教育実践センター長 我妻敏博
附属小学校長 加藤泰樹
附属中学校長 田中 博
附属幼稚園長 大山美和子

(イ) 運営評議会委員

学長 渡邉 隆
副学長 小宮三彌
副学長 髙田喜久司
附属図書館長 若井彌一
第一部学部主事 大悟法 滋

第二部学部主事　星名信昭
第三部学部主事　齋藤九一
第四部学部主事　川崎直哉
第五部学部主事　風巻孝男
学校教育総合研究センター長　戸北凱惟
教授　田中博
教授　中川清隆

イ　名誉教授

上越教育大学名誉教授称号授与規則に基づき，平成15年度は次の者に名誉教授の称号が授与された。

大澤健郎（元学長）

### ⑮ 財務・環境

本学の「学内予算配分」，「概算要求」については，運営評議会の審議事項となっている。

また，運営評議会に置かれる専門委員会として，学内の予算配分・調整，環境保全（廃棄物管理を含む。）及び構内交通対策に関する事項等を検討するため，副学長，附属図書館長，学校教育総合研究センター長，講座代表，連合研究科幹事及び事務局長で組織する財務・環境委員会が設置されており，平成15年度は6回開催した。

#### ① 学内予算配分

平成15年度の学内予算配分及び連合研究科学内予算配分は，財務・環境委員会で審議の後，平成15年７月９日開催の第50回運営評議会で承認された。

学内予算配分では，競争的な環境の創出と教育研究基盤の充実のために平成14年度に引き続き，基幹的経費である教育研究基盤校費による重点配分を行った。

なお，平成15年度の重点配分項目は「研究プロジェクト経費」，「教育研究支援経費」，「図書充実費」，「教育研究用設備充実費」，「教育施設等研究助成費」及び「心理教育相談室運営経費」であり，「教育研究用設備充実費」において，本学の安全衛生管理の改善を図った。

#### ② 概算要求

ア　平成15年度の概算要求において認められた事項は，次のとおりである。

・事務機構の整備　一般事務体制の充実　専門職員２人（一般職員２人の振替）

イ　平成16年度からの国立大学法人化に伴う本学の中期目標・中期計画との整合性を図るため，概算要求方針について見直しを行い，平成15年１月15日開催の第43回運営評議会で承認された。

ウ　国立大学法人の初年度となる平成16年度の概算要求は，平成15年６月18日開催の第49回運営評議会において主な要求事項が承認された。

その後，文部科学省から示された一定のルールに基づき平成16年度収入･支出概算要求書を作成し，文部科学省へ提出した。

#### ③ 環境保全

国立大学法人化後に適用される労働安全衛生法対策について，財務・環境委員会で４回（第３回～第６回）審議し，施設設備の改善計画及び経費等について検討を行った。また，労働安全衛生法に準拠するための改善整備及び実験廃液，不用薬品等1,340点を専門業者に委託し処分した。

#### ④ 構内交通対策

構内の交通安全対策及び指導方針については，財務・環境委員会で２回（第５回，第６回）審議し，構内交通事故防止対策，適宜事務局職員・警備員による駐車違反車両のチェック，入構違反車両の排除のための指導の

実施等の対策を講じた。

### ⑯ 広報活動

#### ① 情報・広報委員会

情報・広報委員会は，本学に関する情報の公開及び宣伝広告活動等に係る広報の在り方を策定するとともに学内における情報の伝達・交流を促進することを目的として設置されており，学長，副学長，附属図書館長，学部主事，情報処理センター長，事務局長で組織されている。また，委員会には専門的事項について調査検討を行うため，電子情報専門部会，事務電子情報専門部会，出版専門部会，情報公開・開示専門部会が置かれている。

平成15年度においては，３回（第10回～第12回）開催し，審議事項は，広報誌の発行，公式ホームページの更新，法人化に向けた広報体制等であった。

また，出版専門部会においては，学部・大学院における学生の生活・教育研究の現況及び本学の活動を学内・学外に紹介する「上越教育大学学園だより」のNo.59，No.60を編集発行し，また，本学ホームページに，大学改革の取組状況，就職，教育研究活動等の最新情報等を「上越教育大学 News Letters」として３回掲載した。

電子情報専門部会においては，公式ホームページの更新及び教育研究スタッフプロフィールの拡張（発生源入力化）等を行った。

#### ② その他の広報活動

ア　広報刊行物

本学の学生募集や各種事業に関する広報活動は，各委員会，センター・附属学校等の部局及び事務局の担当部署が行っている。平成15年度に本学が発行した広報刊行物は，第三章資料編「広報刊行物一覧」のとおりである。

イ　新教育大学紹介コーナー

本学，兵庫教育大学及び鳴門教育大学の３大学が共同で教員研修センター（茨城県つくば市）と国立特殊教育総合研究所（神奈川県横須賀市）の２か所に新教育大学紹介コーナーを設置しており，写真パネルや広報刊行物等の資料を展示し，両施設に研修に訪れた現職教員等に本学の情報を提供している。

ウ　広報室分室

情報公開法（平成13年４月１日施行）の対応窓口として広報室分室を設置しており，専用コンピュータから情報検索が行える。また，各種広報刊行物を置き情報提供を行っている。

### ⑰ 教　員　組　織

#### ① 第　一　部

第一部は，学習臨床講座，幼児教育講座，学校教育総合センターで構成され，年度当初所属する現有教員数は，それぞれ17，５，６であった。その後，採用人事４件（教授採用：学習臨床講座２，講師採用：幼児教育講座１，学校教育総合センター１），昇任人事４件（助教授から教授：学習臨床講座１，学校教育総合センター１，講師から助教授：学校教育総合センター１，助手から講師：幼児教育講座１），幼児教育講座から生活科専任への担当変更，学校教育総合センターより心理臨床講座への担当変更がおこなわれた。また，学習臨床講座の公募案件１が継続中である。

第一部の教員会議は，第１回が４月６日に開催され，部の教員の研究室等の分散の現状などから，議決等を必要とする場合を除き，学内メールにて情報の徹底を行うこととした。15年度は，No. １～No.17の学部主事からの公式メールを配信し，会議報告，連絡事項，学期初めの学生指導に係わる注意事項等を伝え，各教員か

らの連絡等も学部主事宛のメールで行い，交信記録を部の記録として保存した。

② 第 二 部

第二部は生徒指導総合講座，心理臨床講座（学校心理，心理教育相談室），障害児教育講座（障害児教育実践センター）で構成され，所属する現有教官数はそれぞれ，11，11，12であった。本年度中の異動は転出と採用がそれぞれ１名であった。大学院修士課程は発達臨床と障害児教育でスタートし，発達臨床コースの中が生徒指導と心理臨床に分かれていたが，本年度からさらに再編して生徒指導総合，臨床心理学，学校心理の３分野となり，在籍院生数は順に44，18，７およびＭ２の心理臨床30の計99名となった。そして障害児教育が43名である。（なお，平成17年度より大学院修士課程発達臨床コースは，学校心理，生徒指導相談，学校経営，学校社会環境の４分野に改編することが運営評議会で決定された。）博士課程の第二部の院生総数は５名であるが，連合講座の分類とのねじれ現象があり，連絡調整や事務処理に苦慮する部分があった。

第二部の運営会議（学部主事と部内の３講座の講座代表で構成）を本学運営評議会の次の日（定例には第二木曜日）の12時から実施した。本年度は法人化移行の年であったため，その他に３回臨時の運営会議を持った。この会の主な内容は，①学部主事が構成員となっている運営評議会，企画委員会，附属学校運営委員会等，及び部から１名だけ代表が参加する各種委員会等，で審議対象となった全学的重要事項についての報告と意見交換，②第二部の運営にかかわる基本的事項の協議，③教務部や学生部に関連する業務や教官や学生に関する協議と情報交換，であった。部としての業務を処理することは勿論，部および講座の教官と学生の教育・研究活動の充実と発展のための検討は意義が大きかった。なお，カリキュラムと教官定員，学生定員充足と新設や定員増の院生研究室等の環境整備，学校心理士やスクールリーダー養成システムの構築，心理教育相談室と障害児教育実践センターの充実発展，大学院と学部教育の充実発展，障害児教育の教育実習や心理臨床の臨床実習の充実発展，などが今後取り組む課題として検討されていた。

必要に応じて開催することになっていた第二部所属教官全員による協議会は，本年度は７月16日に実施された。また，教官人事や入学試験，教務事項等については，各講座単位での細部にわたる審議・検討を基本として，必要に応じて部運営会議で取り上げ協議した。

③ 第 三 部

第三部は，言語系教育講座（国語分野，英語分野），社会系教育講座，および実技教育研究指導センター（言語系教育分野）で構成されている。三分野それぞれの会議に加えて，第三部教員会議を開催して運営評議会および企画委員会の報告等を行うとともに，必要に応じて学部主事，両講座代表および両主任が集まる部運営会議を行っている。特に平成15年度は，法人化直前ということで全学教職員集会が比較的多く開催されたことも考慮して，毎月の運営評議会報告等は可能ならばメールによって行い，速報性と省力化に配慮した。

第三部教員会議において，平成15年度は，労働安全衛生法対策，教育研究の質の向上のための新たな取り組みの学内公募，大学院定員充足の方策，大学院長期履修制度の導入などが話題となり，また，主事・講座代表・主任による部運営会議では，文部省在外研究員（長期・短期）の第三部からの推薦順序や，第三部選出各種委員の割り振りなどが話し合われた。

各講座・分野における人事および教育・研究活動については，当該項目を参照いただきたい。

④ 第 四 部

平成15年度は第四部教官会議を10回開催した。開催日は，４月30日，５月21日，６月25日，７月16日，９月17日，10月15日，11月12日，１月21日，２月18日，３月15日であった。12月についても事前資料等を配布して12月17日に開催を計画していたが，当日開催された教授会が予定より大幅に延びたため，やむを得ず中止とし

たものである。会議の開催は原則として，運営評議会の次の水曜日としたが，時間については他の会議や学内行事のため昼休み等の時間帯になることもあり，十分な時間が取れない場合も見られた。作成した会議資料をあらかじめＰＤＦファイルとして電子メールで各教官に配布し，当日各自でプリントして持参する方法により，内容の事前理解を図ったが，配布が会議の直前となることもあり意図が完全に達せられたとは言えなかった。事前の会議資料の作成および会議後の議事要旨の電子メール配布の際には，会議を欠席した場合にもその概要がある程度把握できるよう，記載内容にも配慮した。

教官会議では，運営評議会，企画委員会，大学院定員充足検討特別委員会，大学評価委員会，附属学校運営委員会等の報告が主であったが，国立大学法人化に向けての大学の対応等に関する事項について，第四部としての意見の取りまとめ等，内容により協議題として審議を行った。

また，第四部を構成している自然系教育講座および生活・健康系教育講座についても，各講座ごとに講座会議をそれぞれ必要に応じて開催した。

#### ⑤ 第 五 部

第五部は音楽，美術の二分野から成る芸術系教育講座及び音楽教育，美術教育の二分野担当の実技教育研究指導センターに所属する教官，計25名によって構成されている。

芸術系部会は，毎月１回，運営評議会の翌週水曜日，12時30分からの開催を原則としたが，法人化を控えての全学教職員集会，各種講演会等により，しばしば日程の調整を余儀なくされた。本年は，本学部主事の入院・療養のため，６，７月は講座代表がその代行を勤めた。学部主事，講座代表，音楽，美術両分野主任の連携によって部会運営はスムーズに進められた。本年度は9回の月例部会が開催され，2回の未開催の月には書面での報告が行われた。なお平成16年３月には部会開催と共に，書面での報告もなされた。部会の内容は主として，学部主事参加の運営評議会，企画委員会，大学評価委員会，情報・広報委員会，附属学校運営委員会，大学院定員充足検討特別委員会等や，講座代表参加の財務・環境委員会，部から１名選出の学術研究委員会やセクシャル・ハラスメント防止対策委員会等の報告等であり，協議事項に関しては活発な議論が交わされた。また学部主事辞任に係る臨時部会が平成16年２月４日に開催されて5名の選挙管理委員が選出され，同12日に部全教官の投票によって新学部主事候補者が決定された。

芸術系教授会は，人事案件や在外研究員候補者選考等を審議するため数回開催された。人事案件は，音楽分野での教授昇任と美術分野での講師採用の２件があった。

### ⑱ 施設整備

#### ① 施設整備状況

ア　平成14年度第３次補正施設整備事業として，附属中学校校舎の老朽化対策，耐震性能向上，狭隘対策，安全対策等改修及び増築工事を行なった。平成15年７月17日着工，平成16年３月19日完成。

イ　附属幼稚園の安全対策のため，園舎から死角となる部分についてフェンスの改修を行った。

ウ　国立大学法人化移行に伴い，労働安全衛生法対策のための労働安全コンサルタントによる現地調査を実施した。また，調査報告に基づき整備計画を策定すると共に改善整備を行った。

エ　身障者対策として，山屋敷団地構内美術棟等手すり，スロープを設置した。

オ　老朽化対策として，経年により不具合が生じていた受変電設備機器等の更新及び改修を行った。

カ　学生支援施設の整備として，世帯学生宿舎の木製床，壁等の内装改修と洗濯機パンの設置等室内リニューアルを行った。（平成15年度整備17戸，整備済総数40戸）

キ　保全業務として，消防設備，昇降機設備，高圧受変電設備，生活排水処理施設等14件の事業を実施した。

ク　山屋敷宿舎結露対策・北城宿舎他屋根防水等居住環境改善事業を行った。

### ⑲ 事務局

#### ① 事務連絡会

事務連絡会は，本学運営の連絡調整とその円滑な運営を図ることを目的として設置されており，事務局長，各部課長・主幹，課長補佐及び専門員で組織されている。なお，事務連絡会要項（９月３日事務局長裁定）が制定され，原則毎月第１，第３木曜日に定例開催することとした。

平成15年度においては，15回開催し，①法人化後の事務組織，②施設の法人化対策，③各種委員会等の審議事項及び構成員等の確認等，④労働安全衛生法対策，⑤中期目標・中期計画（素案）に係る具体的事項及び年度計画（案），⑥国立大学法人上越教育大学の学内規則，等についての審議を行ったほか，各課・主幹等における事務の連絡調整を行った。

#### ② 各課の主な業務（特記事項）

ア　新教育大学協議会

平成15年度新教育大学協議会を本学が当番校となり，10月17日㈮にＫＫＲホテル東京において開催し，新教育大学における学生確保等について協議された。

イ　会計検査院実地検査

平成15年度会計検査院実地検査が平成15年４月７日㈪～９日㈬に実施され，会計事務全般にわたって検査を受けた。

ウ　消防訓練

平成15年11月19日㈬に上越南消防署の指導を得て，学長以下職員，学生が参加し，通報，避難誘導，救護等の消防訓練，消火栓・消火器の取扱訓練を実施した。

エ　企業会計・国立大学法人会計研修

国立大学法人化に伴い，平成15年11月17日㈪～21日㈮に外部講師を招き事務職員を対象に会計実務研修を実施した。

## ４　教育・研究活動

### (1) 各講座・各分野の教育・研究

#### ① 学習臨床講座

**【講座・分野の概括】**

平成12年に開設された本講座には，教育方法臨床，学習過程臨床，情報教育，総合学習の４つの教育研究の領域からなる分野によって構成されているが，分野ゼミ研究室ごとに，教育研究を通して，個々の独自性を発揮してきた。

本講座は教官20名（うち教授定員12名）の定員で構成される。今年度は教授昇任１名，教授新採用１名，この他，退官者による人事補填の新採用もあったが，着任は年度末に繰り越した。この結果，20名の教官定員は確保されている。ただ，大学院の院生数はＭ２が57名，Ｍ１が56名で，合計113名であり，この他に学部生も，１学年標準定員20名で，３学年分の約60名が在籍しており，わずか20名の教官が講座開設以来，研究指導に当たっているが，すでに限界を超している。

なお，完成年度ともいうべき４年目で最初の学部卒業生20人を輩出したが，教員としての就職は13名であった。また，100名を超える院生については，把握するには余りにも多い人数のため，講座代表と各分野の世話人の５名と院生の代表者10名による「教官・院生協議会」を毎月，開催して，コース・分野の運営や研

究環境，院生の研究指導の問題等を，定期的に協議しながら，改善の努力を図ってきた。

次の16年度は講座５年目は法人化の元年である。４年間を総括して，12年度改革の見直し評価をした上で，講座・コース体制の組織修正を考慮する必要があり，４年間を一巡した次の段階に入ると思われる。

**【講座・分野における教育・研究の特色】**

本講座は，従来の実践的な研究をさらに教育現場に密着して，じどう・生徒を臨床的に研究し，教育実践に応えられる教育研究を創造することを目指している。大学院の教育研究活動は，教育方法臨床，学習過程臨床，情報教育，総合学習の４つの教育研究領域の分野で，学習臨床の研究内容とその研究方法を，実践場面分析演習を通して集団的に取り組んでいる。

研究室ゼミ単位での演習を通して，院生自身が現場の教育実践に取り組み，課題を明らかにしながら，授業分析をはじめとする研究活動を行っている。また，４分野ごとの組織単位で，修士論文の構想発表と中間発表を公開のかたちで実施し，分野だけの狭さを超えて，隣接分野からの成果と刺激を吸収できるようにした。この結果，論文提出後の修士論文発表会は，各分野単位ではなく，４つの分科会形式で行われ，学習臨床研究の共通基盤の構築を意図して，分野相互の研究動向を確認する場ともなっている。

学部に関して，本年度は最初の卒業論文であった。大学院と同様の経過を踏まえ，方向性を模索しながら２会場で発表会を開催したが，４分野相互乗り入れで，学習臨床の成果を確認できた。

### ②　幼児教育講座

**【講座・分野の概括】**

平成15年度の幼児教育講座では，木村助教授の生活科担当専任教官への異動，それに伴う幼児教育学の後任人事，平成16年末日退官予定の南舘教授の後任人事という３件の人事が進められた。その結果，木村助教授については平成15年12月付けで，幼児教育学の後任人事，幼児心理学の後任人事についてはともに平成16年４月付けで昇任及び採用が認められた。平成16年度は幼児教育学，生活科教育，幼児心理学，そして保育内容という４本柱で新たな出発を行うこととなった。教授，助教授，講師がそれぞれ２名ずつという陣容である。なお，大山教授が附属幼稚園園長に指名され，その任についた。

講座運営の要となる講座会議については，隔週開催を原則とし，臨時の会議を除き25回を重ね，すべて全員出席のもとに密な検討がなされた。年間を通じての主な話題は，大学院定員充足，保育実習に関わるカリキュラム等の検討，現場との連絡・交渉，等である。

その他としては附属幼稚園との相互協力関係に関する会議が催され，今後新たな協力関係を構築することで合意を得た。

**【講座・分野における教育・研究の特色】**

今年度の教育・研究面での最大の特徴は保育実習専門部会（旧）のメンバーを中心として行われた保育実習の準備作業であった。保育園との連絡・交渉，学内関係教官への時間割の依頼，「保育実習の手引き」（専門部会が中心となった）の作成，事前・事後指導の計画等である。

実践場面分析演習については，次年度よりⅠとⅡとを通じてより包括的かつ内容に一貫性のあるものを作成しようと構想作りを行った。Ⅰでは実践のための広範囲にわたる基礎作りを，Ⅱではそうした基礎を活かし学生・院生の研究構想を具体化するという案に落ち着いた。なお，今年度より保育園での観察を増やすよう工夫を加えた。実践場面分析演習の成果については従来通り冊子にまとめている。

４年次に行われる幼稚園専修教育実習の事前・事後指導を新たに構想し，講座の教官が分担して指導する試みも新たに導入した。

### ③　生徒指導総合講座

**【講座・分野の概括】**

本講座の教官構成において，４月に大前敦巳氏が助教授に昇任され，教授４名，助教授６名，助手１名となった。また，大学院修士課程在籍者は，２年次学生 19 名，１年次学生 23 名であった。

**【講座・分野における教育・研究の特色】**

第一に，本講座の内部を次の三つの授業科目群に緩やかに区分して日常の教育・研究活動を展開しつつ，なお講座としての統合性を追求する指導体制を採っている。すなわち，(1) 社会の変化と学校が置かれている状況を客観的に理解し，保護者や地域の教育への関心やニーズの分析・把握をめざす「学校文化」の科目群，(2) 不登校やいじめ等，生徒指導の今日的問題に個別的に対応するだけでなく，チーム・ガイダンスのコーディネータとして総合的に問題解決を図る教員の育成をめざす「生徒指導」の科目群，そして (3) 開かれた学校や特色ある学校づくり等，自主的・自律的な学校経営をめぐる現代的課題にスクール・リーダーとして対処しうる教員の育成をめざす「学校経営」の科目群である。これら三つの科目群それぞれの専門分化を許容しつつ，併せて学校教育の実践的な諸問題に対する総合的かつ臨床的な研究活動を学内研究プロジェクト等の推進を通して展開している。

第二に，大学院発達臨床コース生徒指導総合分野としての統合性のある教育活動を展開するために，特に研究セミナーと実践場面分析演習の授業運営に独自的な工夫・配慮をしている。つまり，研究セミナーについては日常の個別教官による指導の発展形態として，４月に大学院２年次学生の「修士論文第２次構想発表会」（１年次学生も全員出席），10 月に「修士論文中間発表会」（同），そして 12 月には１年次学生による「修士論文第１次構想発表会」を開催して，所属教官全員による多面的かつ詳細な指導を実施している。また，実践場面分析演習については，学校教育に関する実践的諸問題への広い視野の習得と分析的考察能力の向上を意図して，ディベートによる追究・討議の機会を設定し，学部３～４年次学生（「実践セミナー」の授業）を含めた意欲的な学習を促した。なお，この実践場面分析演習の授業記録については，本年度も報告書にまとめ公表した。

第三に，本講座所属の教官多数が会員となっている日本学校教育学会の運営に力を注ぐとともに，特に現職教員の大学院学生に研究大会での研究発表や機関誌への論文投稿を積極的に行うよう指導し，広くわが国教育学界の発展・向上にも貢献している。

### ④　心理臨床講座

**【講座・分野の概括】**

心理臨床講座として３年目に入ったが，講座の運営状況については昨年度とほぼ同様であった。すなわち，講座の構成員は，教授２，助教授７，講師２，助手１の陣容で，大学院のコース内に臨床心理学分野と学校心理分野を構成し，入学試験の方式や教育課程を分離した形態で運営した。本講座教員が指導を担当した修士課程の学生数は，１年次生 25 名（うち１名は進路変更のため退学），２年次生 30 名であった。臨床心理学分野は，次年度にコース昇格が予定されており，学校心理分野担当のスタッフとの「心理学」を共通基盤としたカリキュラムの一層の創意工夫が必要となる。

**【講座・分野における教育・研究の特色】**

大学院教育については，臨床心理学分野と学校心理分野ともに学生の研究ニーズにそって行われ，特に，学校の問題や児童生徒に関する臨床心理学的及び教育心理学的な研究テーマが中心となった。また，両分野の学生の学習ニーズに対応するため，臨床心理学を専門とするスタッフは，学校心理分野学生のカウンセリングや教育相談等の学習を保障するためにこれらの講義や演習を開講し，また学校心理を専門とするスタッフは，臨

床心理学分野学生の基礎的な心理学の学習を保障するための講義や実習を開講し相互に補完し合った。

学部教育では，心理臨床分野の専攻生に対して全教員で指導にあたった。特に，卒論指導や実践場面分析演習では，基礎的心理学と臨床心理学との連関を理解させるために連携体制をとった。研究関連では，各教員スタッフが心理学に関する研究を積極的に行っており，その成果は各心理学系学会誌や本学紀要への掲載にみられている。また，臨床心理系スタッフは本学心理教育相談室紀要「上越教育大学心理教育相談研究」へも多数の論文を掲載している。

### ⑤ 障害児教育講座

**【講座・分野の概括】**

平成15年4月に小宮三弥教授が副学長に就任したため，平成15年度は，教授4名，助教授2名，講師2名で講座は構成された。また，障害児教育講座は，障害児教育実践センターの教授，助教授，講師（平成16年2月採用），助手の各1名と緊密な連携をとりながら運営がなされた。講座の教官と障害児教育実践センターの教官全員による講座会議を定期的に開催し，講座及び障害児教育実践センターの運営に関する種々の問題について検討した。また，教授による講座教授会において人事計画について検討し，平成16年2月に障害児教育実践センターの講師として採用された丸山昭生氏の人事に関与した。直面する課題の解決に向けて講座内に6つのワーキング・グループを組織し，院生募集・支援，カリキュラム，予算，人事，障害児教育実践センターの運営，地域貢献に関して，その改善策を検討した。

**【講座・分野における教育・研究の特色】**

本講座は大学院修士課程だけの講座であり，障害児教育の現場に直結した高度な専門的知識と実践的技能を備えた教員の養成を目標として掲げている。このため，講義，演習とともに，障害児教育実践センターにおける臨床実習をカリキュラムの中に組み込んでいる。また，昨年度と同様に，盲学校教諭，聾学校教諭，養護学校教諭の専修免許状，一種免許状の取得に必要な授業科目を開設した。これに関連して，新潟盲学校，高田養護学校，上越養護学校，柏崎養護学校の協力を得て教育実習を実施し，各指導教官が実習校に出向いて指導を行った。さらに，平成15年度は特に小・中学校の通常の学級に在籍する障害のある子どもたちのための特別支援教育に対応できる教員の養成に向けて，科目の新設を含むカリキュラムの整備について検討した。平成15年度に在籍した大学院生は，1年生21名，2年生22名，研究生6名であった。修士論文の作成に向けた指導として，各研究室において定期的なセミナーが開催された。また，講座全体での発表会も，障害児教育実践センターを会場に年3回（4月，9月，11月）開催された。それらの成果は，修士論文抄録第19号として平成16年2月に刊行された。研究内容は，障害児・者に関する歴史，行政・制度，指導法，心理特性など多岐に渡っており，各教官の専門分野に関連した研究がなされた。なお，講座の教育・研究内容や教官に関する情報は，リニューアルしたホームページ（http://www.juen.ac.jp/handi/index.html）上において随時公開された。

### ⑥ 言語系教育講座（国語）

**【講座・分野の概括】**

人　事：平成15年9月　中里理子講師が助教授に昇任した。

学　会：上越教育大学国語教育学会（国語講座教官・学部学生・大学院生・卒業生・修了生，その他学会の承認にした者で構成）第19回総会・第40回例会を平成15年6月に，また第41回例会を平成16年2月に開催した。6月の例会には高本條治助教授，および卒業生・修了生の研究発表があり，2月の例会では，渡辺洋一郎講師の研究発表および学部生の卒業論文，大学院生の修士論文の成果が

発表された。

刊行物：学会誌『上越教育大学国語研究』第18号（上越教育大学国語教育学会）を平成16年２月に刊行した。執筆者は，有沢俊太郎（本学教授），中原秀樹（長野県飯田市立松尾小学校教諭），飯室毅（山梨県立日川高校教諭），厳大漢（筑波大学大学院博士課程），牛腸聖子（新潟県新井小学校教諭），野村真木夫（本学教授）の各氏である。

**【講座・分野における教育・研究の特色】**

○当講座では，教育現場における母語としての国語の通汎性に鑑み，その基礎力・応用力にもとづく「教育実践学国語」の構築をめざして，各分野の取り組みの統合をはかっている。座学における理論研究を重んじると同時に，ひろく実践的な教育と研究の展開を心がけるようにした。

○「実践場面分析演習Ⅰ・Ⅱ」は，各ゼミ（または合同ゼミ）での運営とし，院生・学部生の共同による授業開発，教育実習事前・事後指導，教材開発・授業分析のカンファレンス，実地踏査研究等を実施している。国語分野全体の取り組みとして研究成果をとりまとめるには至っていない。

○各分野がそれぞれの分野特性にしたがって専門的な研究・教育に従事しつつ，「国語」としての総合的・統合的な教育・研究のあり方を模索して，本年度は，各ゼミ単位および複数ゼミの融合単位において，院生・学部生の協同による相互啓発を心がけ，現職院生の模範授業を学部生が体験するなどの試みがおこなわれている。文学を専攻する研究室では，実地踏査研究をおこなっており，本年度は，近代文学研究室では東京の文学，古典文学研究室では，源氏物語ー宇治・京都の旅を学部・院の共同企画としてとりおこなった。

○修士論文作成の階梯として，国語講座全体による２年次中間発表会（平成15年９月），１年次構想発表会（平成15年11月）を本年度も開催し，全所属教官の指導・助言を受けて完成に至るような指導体制をとった。同趣旨による卒業論文中間発表会は，平成15年10月に開催した。

○教育実習の一層の充実のために，国語全教官が国語コース所属学生の実習配当校に出向いて指導・助言にあたり，事後，各ゼミ等に於いて参加学生とともに反省研究会をもった。なお，当講座では，３年次・４年次生の教育実習に，各ゼミの学部生・院生が観察参加する。

### ⑦　言語系教育講座（外国語）

**【講座・分野の概括】**

外国語分野のスタッフは附属実技教育研究指導センター所属教官と外国人教師を含めて10名（教授５，助教授１，講師３，外国人教師１）であったが，酒井英樹講師が転出され，現在は９名である。各教官の教育・研究活動等は第二章の当該項目を参照のこと。

平成14年７月26日には，言語系外国語講座が事務局となっている「上越英語教育学会」の第７回大会が本学ＬＬ教室で開催された。実践報告・研究発表を行うとともに，機関誌『上越英語研究』第４号を刊行して，地域・社会との教育・研究分野での連携を図っている。

「教育研究の質の向上のための新たな取り組みについて」（学内公募）に応募し，「小学校英語教育分野」新設のための新規定員１名が承認された。これに伴い，「小学校英語教育」担当教員の公募を行い，現在採用人事の審議を行っている。また来年度「小学校英語教育分野」開設するために，夜間公開講座開催の開催準備や上越市教育委員会との連携・協力体制確立を念頭に準備を進めている。

**【講座・分野における教育・研究の特色】**

学校教育学部では，英語の基本的な力を身につけさせるとともに小・中・高等学校及び社会のニーズに対応できる能力の育成を目指して創設された言語系英語コースの３年目にあたり，２年生11名，３年生10名，４年生９名が在籍した。11月に卒業論文中間発表，平成15年２月には卒業論文発表会を開催した。本年度は言

語系英語分野としてはじめての卒業生９名を送り出すことができた。

大学院言語系英語コースでは，英語教育に関する指導力・教科専門性・実践的技能をあわせもった人材の育成を目指している。平成 15 年度は，１年生が８名，２年生が 10 名在籍した。２年生は４月の修士論文構想発表会，10 月の修士論文中間発表会，１月末の修士論文審査・試験を経て，３月に巣立っていった。１年生は，前期において様々な授業を履修しつつ９月末には論文指導教官を確定し，次年度の構想発表に向けて本格的な研究活動に入った。大学院は新カリキュラム３年目にあたり，共通科目・実践場面分析演習Ⅰ・Ⅱ「英語」が学部の実践セミナーⅠ「英語」とジョイントしたことを受けて，演習の内容・方法ともに一新された。

### ⑧　社会系教育講座

**【講座・分野の概括】**

平成 15 年度の社会系講座の構成員は教授７人，助教授６人，講師１人，助手１人の計 15 人であった。

本年度，社会系教育講座会議は計 13 回開催された。ここでは，各種委員会委員と講座代表による報告と提案，及びそれらに対する質疑と検討を行った。学部教育と大学院教育における指導理念と指導体制についても継続的な話し合いがなされた。特に，学部生の卒業研究における指導体制は一教官上限２名とし，また院生の修論指導については原則２名を指導する体制とし，一層丁寧な指導を行う事が確認された。実践セミナーⅠ・実践場面分析演習Ⅰについては，学部３年生と院１年生が合同で行う体制が定着し，実践セミナーⅡ・実践場面分析演習Ⅱも開講され，後者の最終の２回を前者と合同する事でさらに本セミナー・場面分析の教育効果を高める事に配慮した。懸案の学部４年生の学生控室設置に関しては，系会議で合意を得た方針で副学長と交渉したが「本学には学部生のための学生控え室はない」との回答であった。学部生の教員採用試験の結果は，12 人受験し一次の合格は 11 人，二次は９人で合格率は 75％であった。

なお平成 15 本年度の当講座の学部卒業生は 15 人，大学院修士課程修了者は 16 人であった。

**【講座・分野における教育・研究の特色】**

当講座では，教育内容にかかわる地理学，歴史学，法学，経済学，社会学，倫理学，宗教学などの専門諸科学，その教育方法にかかわる社会科教育学を研究し教育する体制をとっており，学部生や院生は自らの研究課題に基づいて各研究室に所属し，基本的には各指導教官の下で卒論や修論を作成する。しかしながら，当講座では，研究室単位だけではなく，全教官が協力･連携して学生や院生の教育･研究指導にあたるという共通認識が確立されている。院生を例にすれば，放課後の時間帯を用いて，全教官参加の下，修論構想発表会１回と修論中間発表会３回が実施されている。したがって，学生や院生の研究の中には，専門研究，社会科教育実践，専門研究の内容研究を教材化するという視点で再構成したものや，いわゆる学際的・総合的な研究に取り組んだりしたものなど多様でゆたかな成果を生み出している。これは，当講座の教育・研究指導における奥行きの広さと深さを示している。

当講座の全教官が会員となっている上越教育大学社会科教育学会では，「学会だより」や学会誌の発行，巡検，例会や研究大会の開催等の研究活動を継続して行っている。本年度の研究大会は 10 月４日に，当講座の大学院修了生の参加も得て本学で開催され，活発な討議がなされた。

当講座では，地域の教育や文化・行政活動にも積極的に取り組んでいる。初等・中等教育学校の教員研修会，地方公共団体の審議会・委員会，医療機関の倫理審査会委員（外部），上越市史の編纂などにおいて，当講座の教官の専門性を生かした地域貢献がなされている。

### ⑨　自然系教育講座（数学）

**【講座・分野の概括】**

数学分野の教官スタッフは教授４名，助教授２名，講師１名，助手１名の計８名である。研究に関しては，代数学，幾何学，解析学，数学教育学の各分野において積極的に研究が行われた。ただ，教官研究費の削減の影響を受けて，国際学術雑誌の大幅な講読中止を余儀なくされた。数学の性格上，文献の収集が困難になることは，教育・研究の活力に多大な影響があることを危惧する。

岡崎正和助手が平成 16 年１月 31 日に開催された平成 15 年度全国数学教育学会において，学会奨励賞を受賞した。

**【講座・分野における教育・研究の特色】**

学部教育の特徴として３年前期から数学・数学教育に関する専門セミナーが２年目を迎えた。２年間の継続のため，従来よりも数学的な基礎知識を深め，教材の数学的な背景を学び，算数・数学教育に生かす方法を学ぶことができるようになった。

大学院の教育の特徴として，院生各自の希望に応じて，数学や数学教育を研究している。「実践場面分析演習（数学)」では，授業実験を通じて，高度な実践指導能力を高める研究を行っている。また学部の「実践セミナー」と役割分担をし，学部と大学院の連携した演習に取り組んでいる。

### ⑩　自然系教育講座（理科）

**【講座・分野の概括】**

平成 15 年７月に，学長から「各講座における教育研究の質の向上のための新たな取り組みについて」の提案募集の呼びかけがあり，理科内部で種々議論の結果，教育現場等各方面からニーズの高い「理科野外観察指導者育成」をテーマに，上越教育大学自然系教育講座理科分野「理科野外観察指導者養成部門」の新設と同部門による上越教育大学「野外観察指導員認定制度」構想を提案した。この新部門は，専任教官 ( 教授 )1 名と野外観察指導実習を担当する兼担教官６名，および若干名の非常勤講師で構成し，カリキュラムのうち，理科野外観察指導実習 10 講座を地域の理科担当教員を対象に公開し，野外観察指導員の認定を行っていくというものである。

応募の結果，本提案が採用され，平成 16 年度からの実現に向けて教授定員１が認められた。これを受け，専任教官 ( 教授 ) の候補者について，理科の内部で理科野外観察の実績がある教官に応募を呼びかけ，応募者の中から候補者が決定され，平成 16 年４月１日から任用予定である。また，本提案が平成 16 年度からスタートできるように，カリキュラムの整備，免許法認定公開講座の準備を行った。

日本教育大学協会北陸地区会理科部門研究協議会が 10 月 23 日・24 日の新潟大学で開催され，中川清隆教授，小林辰至教授が代表として参加し，協議題，照合事項等について協議を行った。

**【講座・分野における教育・研究の特色】**

本講座は，自然に興味関心を持ち，積極的に研究に取り組む意欲を育て，科学研究の体験を踏まえて自分自身を発見し，次世代の教育に生かす人材の育成を目指している。本講座は，平成 13 年度より学部および大学院修士課程における教育･研究指導体制を「物質・エネルギー」,「生命・地球」,「理科総合」の３グループとし，学生はいずれかに所属し，講義，演習，実験，ゼミナール等の指導を受けながら，理科の教材研究やその指導方法および自然現象の基礎的研究を行っている。

本年度理科コースの所属の学部学生は２年生 10 名，３年生８名，３年生８名，大学院修士課程学生は１年生 12 名，２年生６名である。学部４年生，および大学院修士課程２年生全員，無事，卒業・修了した。

### ⑪　生活・健康系教育講座（保健体育）

**【講座・分野の概括】**

本分野の教育研究は，スタッフ 12 名によって推進された。本年は日本教育大学協会北陸地区会保健体育部門研究協議会の当番校であることから，平成 15 年度会合を平成 15 年 11 月６～７日（於：赤倉温泉，ホテル太閤）に開催し，有意義な議論の場を提供した。その際，法人化に向かう各大学の相互理解と今後の情報交換の必要性が確認された。また，砥堀雅信教授と三浦望慶教授の退官に当たり，退官記念事業実行委員会を立ち上げ，退官者の最終講義と退官記念祝賀会の開催，及び記念誌の発刊を行った。全国で活躍している本分野並びに当該研究室の多くの卒業生，修了生に，退官記念事業に賛同，参加を頂き，両教授の本学における長年の教育研究上の功績を充分に讃えることができた。後任人事に関しては，学校保健に関わる定員１名が確保され，手続きの関係から，次年度後期より，下村義夫氏が着任することとなった。15 年度，本分野で学んだ学生は，学部が 41 名（４年次：11 名，３年次：14 名，２年次：16 名）であり，大学院が 38 名（２年次：21 名，１年次：17 名）であった。このうち教員採用により院生２名が中途退学，そして１名がハルピン師範大学へ留学中である。

**【講座・分野における教育・研究の特色】**

本分野の教育研究は二つの方向で特徴づけることができる。ひとつは学内への方向で，大学院の「実践場面分析演習Ⅰ・Ⅱ」と学部の「実践セミナーⅠ・Ⅱ」の融合カリキュラムの積み重ねから新しい教員養成カリキュラム開発と教育研究体制の構築の可能性が生まれていると言うことである。もうひとつは，学外への方向で，法人化に向けて，本学の新構想に沿った保健体育分野としての新しい在り方を模索することが近年の課題とされ，本年も大学院研究プロジェクトへの参加や出前講座を始め，様々なスポーツ教室の開催，あるいは地域スポーツへの支援活動等の積極的活動を展開した。その動きの中で，地域貢献という点での貢献可能性の手応えを大いに感じている。そして地域との連携をスムーズに行うための一本化した窓口機能を法人化後の実技教育研究指導センター構想にどのように絡めるのかが具体的な課題として浮かび上がっている。

### ⑫　生活・健康系教育講座（技術）

**【講座・分野の概括】**

技術分野の教官６名で，技術教育学，木材加工学，金属加工学，機械工学，電気工学，電子工学，情報工学を担当した。技術分野には，学部の２年生６名，３年生４名，４年生６名，大学院修士課程の１年生３名，２年生９名，合計 28 名が所属した。修士課程の院生には，都道府県派遣の現職教員の１年生１名（福岡県から），２年生４名（新潟県から３名，秋田県から１名）が含まれる。また，留学生の１年生１名，２年生３名が含まれ，いずれも中国国籍である。年度末には，学部４年生と大学院２年生の全員が卒業・修了した。卒業生の進路は，本学大学院２名，公立中学校の臨時採用教員３名及び臨時採用職員１名であり，派遣現職教員４名を除いた修了生の進路先は，新潟県公立中学校正採用教諭１名，東京都公立養護学校正採用教諭１名，中国への帰国２名であった。なお，分野会議を１回／月開催し，その運営を行った。

**【講座・分野における教育・研究の特色】**

実習を重視し，ものづくりとコンピュータ活用に関する教育・研究を行った。従来，講座での修士論文の指導は，構想発表会，中間発表会，審査発表会での発表・討論を中心に行われてきたが，昨年度から構想発表会と中間発表会を研究室単位で必要に応じて公開で行うことにし，学会発表を重視し，外部評価による質の向上を図っている。学部４年生と修士課程１年生の一部と，修士課程２年生全員とが日本産業技術教育学会第 46 回全国大会（北海道教育大学旭川校），日本産業技術教育学会第 16 回北陸支部大会（新潟大学教育人間学部），等で発表を行った。

### ⑬　生活・健康系教育講座（家庭）

**【講座・分野の概括】**

家庭科教育，家庭経営学，児童学，食物学，被服学の教官８名が，家庭分野の教育・研究を担当した。特に今年度は，新カリキュラムに開設された実践セミナー及び実践場面分析演習の開始年度であった。そのため，分野では前年度から効果的な授業展開について精力的に研究会議を開き，授業の目的・方法などに関する教官相互のコンセンサスを図ることに努めた。

研究面においては，大瀧ミドリ教官・滝山桂子教官・得丸定子教官・立屋敷かおる教官・藤木一浩教官が科学研究費補助金 ( 科学研究費 ) を，大瀧ミドリ教官・滝山桂子教官・光永伸一郎教官が上越教育大学プロジェクト研究費の交付を受けた。また，得丸定子教官は，日本教育大学協会研究助成及び田辺アールアンドディー・サービスから研究費の助成を得た。

**【講座・分野における教育・研究の特色】**

本分野では 21 世紀を生きる子どもたちが，個人や家族の発達と生活の営みを総合的に捉え，日々の生活活動の中で主体的に判断し，生活環境･文化を創造する力を培うことを可能とする教師の養成を目指し，ミニマム･エッセンシャルとなるべき家庭科教師を養成するためのカリキュラムを構築した。つまり，「生まれてから死ぬまでの人間の発達」と「生活を支える科学」，これらを結びつける「生活の経営」の視点に立ち，教科である家庭を担当する教師の養成にふさわしい科目を平成 12 年度から開講している。

特に，本年度は，前述した実践セミナー及び実践場面分析演習を新しく構築するために，分野の全教官が精力的に関わった。まず，授業展開の中心に学部３年生及び大学院１年生による「模擬授業」を設定する等，綿密な授業計画を立てた。また，学生の意見等を授業運営内容に効果的に反映させるため，毎授業終了時に学生から授業評価を求めると共に教官による自己評価の機会を設定した。このような即時的教育評価は，柔軟に「学生と共に創る授業」へのダイナミックな対応を可能とした。来年度は，本授業科目開設後に入学した学部３・４年生と大学院１・２年生による最初の合同授業の年となる。本年度の反省を踏まえ，更なる発展・充実を期待し，全教官で来年度の授業準備を既に進めている。

本年度の学部４年生 12 名は，新カリキュラム開設後に入学した最初の４年生であり，彼らの卒業後の進路は，教員７名，企業３名，進学１名，その他１名であった。

また，本年度，家庭分野に入学した院生は６名であり，その内訳は，現職教員２名（小学校教諭１名，中学校教諭１名），社会人１名，学部からの進学者３名と，多様なキャリアを持つ学生の入学は最近の傾向となっている。いずれの学生も教師としてのキャリアアップを目指しており，彼らが教師として社会的ポストを確保できるよう，分野としても具体的に支援する方策を検討する必要性を痛感している。

修了生及び在学生による本年度の研究成果の発表は，学会誌４編（指導教官：滝山２編，得丸２編）及び学会発表３件 ( 指導教官：佐藤１件，立屋敷１件，細江１件 ) であった。

### ⑭　芸術系教育講座（音楽）

**【講座・分野の概括】**

今年度，音楽分野の大学院生は，１年６人，２年 15 人の合計 21 人。その中に，現職８人，ブラジル人留学生１人，中国人留学生１人が含まれ，バラエティに富んだ学生構成であった。留学生を含んだことは，研究や授業の面で院生室に良い効果をもたらし，実践場面分析演習を始めとする多くの授業における積極的な意見交換，課外活動面などで異文化理解の場となり，学生相互の人的交流に良い影響を及ぼした。また，海外からの研究生２人については，今後の研究生受け入れについての課題を残した。平成 15 年度は，学部生全員および院生 14 名が卒業・修了した。過去の卒業生，修了生を含めて，採用試験合格者が増えるなど，卒業生の就職

状況が比較的好転したことは特筆に価する。

分野教員は，欧米，韓国への海外研修や出張など国際的な研究活動，および大学教育における国際教育活動に参画した。植村助教授の場合は，本学と韓国教員大学校との研究プログラムの引率者となり，同校との交流におけるコーディネーター役を勤めた。

平成15年10月には，教大協全国音楽部門大学部会の地区大会を本学で開催し，平成16年５月26日～27日開催予定の教大協全国音楽部門大学部会全国大会（上越大会）のための準備に取り掛かった。

しかし，今年度は声楽２人（工藤・山形両教授），音楽教育１人(重嶋教授)が退官となり，今後の厳しい教育状況も予想される年度でもあった。

**【講座・分野における教育・研究の特色】**

音楽分野の研究活動は，様々な演奏・作曲などの実践活動なくして成立し得ない。また同時に，演奏行為のみならず，教育における音楽の役割や意義について社会に対しての説明責任を果たす義務もある。よって，音楽教育分野のどの専攻においても，「演奏による表現」と「言語による表現」のバランスをとることが大きな課題である。この点でも，本分野は他教科にない特色を持っている。現職院生・教員ともに，この点を生かした教育・研究活動を如何に継続し，教育現場との共同研究を開発するかが，今，分野の大きな課題であろう。本分野には，全国の教育大学にはない，多様な音楽文化の学習の場が用意されている。ヨーロッパ（ドイツ・イタリアなど），アメリカ，アジア(韓国・インドネシア)，日本(沖縄音楽も含む)の音楽の専門的な学習ができる点である。これらの点を含め，地域との連携や学校コンサルテーションに生かすことができるような教育活動を目して，分野構想の検討を始めたことも，今年度の成果であった。

### ⑮　芸術系教育講座（美術）

**【講座・分野の概括】**

平成15年度の美術分野は，教授６名，助教授４名，計10名の教官によって運営された。内２名は実技教育研究指導センターの所属，分野全体としての教官の異動はなかった。本講座は，美術科教育，美術理論・美術史，絵画，彫塑，デザイン・工芸の６専門領域から成り，さらに，実技については，洋画，日本画，版画，木工，陶芸等に分かれている。非常勤講師による科目の開講には，造形心理学等があった。

在学生は，大学院修士課程２年次13人，１年次８人，学部４年次５人，３年次６人，２年次５人，研究生４人，この他，兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科（博士課程）３人，以上計44人であった。平成15年度大学院修士課程修了生は，派遣現職教員２人，教員等10人，研究生１人，計13人。　学部卒業生は，進学・研究生等２人，教員等４人，計６人であった。

本年度の日本教育大学協会美術部門北陸地区会（信州大学，６月12日，13日）には，山ノ下堅一，太田將勝が出席。分野会議は，原則として，月１回開催され，年度計16回開催。各種委員会委員および分野主任の発議・提案をもとに，議題・報告については，毎回慎重に検討・審議された。

**【講座・分野における教育・研究の特色】**

大学院修士学位論文の研究指導については，分野全教官が院生全員の研究内容を周知，指導できるように，１年次最終２月に構想発表会，２年次10月に中間発表会を行い，研究水準の維持を図っている。実技の修練にも，留意しているが，以下に展覧会等での発表等成果を一覧する。

展覧会入選　―　新制作展（東京都美術館）：２／　独立展（東京都美術館）：１／　創画会展（日本橋高島屋）：１／　国画会展（東京都美術館）：１／　昭和会展：１／　フィレンツエ賞展：１／　上越市展：市長賞１，奨励賞３／　新井市展：市長賞１，奨励賞１

展覧会開催　―　卒業修了展　／　院生展　／　個展　／　グループ展

### ⑵ 大学院学校教育研究科

#### ① 入学者選抜

ア　大学院入学試験委員会

大学院入学試験委員会は，大学院の入学者選抜に関する事項を審議するため，大学院学校教育研究科委員会の専門委員会として設置されており，各部から選出された研究科担当を命じられた教授又は助教授（講師を含む。以下同じ。），その他学長が指名した教授又は助教授若干人の計15人で構成している。

平成15年度においては，委員会を11回開催し，主に平成16年度入学者選抜試験に係る実施計画の策定・実施，合否案の作成，第２次学生募集要項の作成，個別の入学資格審査及び平成17年度学生募集要項等について審議した。なお，国費外国人留学生については，今年度志願者がなく，選抜を実施しなかった。

今年度特筆すべき事項としては，合格者受験番号一覧のホームページ掲載，大学院入学定員充足のための入試方法の改善，選抜方法の多様化実施に係る検討が挙げられる。また，平成17年度学生募集要項については，所属する都道府県教育委員会から派遣教員として同意を受け出願する者は，「発達臨床コース」並びに「臨床心理学コース」を志望する者を除き筆記試験を免除することを検討した。

イ　学生募集要項の公表

㋐　平成16年度大学院学生募集要項　平成15年４月

㋑　平成16年度大学院第２次学生募集要項　平成15年12月

ウ　試験実施状況

平成16年度の入学者選抜は，前期募集・後期募集と更に第２次募集の計３回を次のとおり実施した。応募者数等の３回の合計は，応募者 311人，受験者 298人，合格者 255人，入学者 215人であった。

㋐　前期募集

a　募集人員　255人

b　出願期間　平成15年７月22日㈫～８月１日㈮（消印有効）

c　選抜方法　学力検査の成績及び成績証明書の内容を総合して選抜する。

d　学力検査の日程　平成15年８月23日㈯ 筆記試験，口述試験

８月24日㈰ 口述試験

e　合格者の発表　平成15年９月１日㈪ 午前10時

f　応募者数等　応募者 230人，受験者 225人，合格者 192人，入学者 166人

g　個別の入学資格審査　申請者なし

㋑　後期募集

a　募集人員　114人

b　出願期間　平成15年10月28日㈫～ 11月６日㈭（消印有効）

c　選抜方法　学力検査の成績及び成績証明書の内容を総合して選抜する。

d　学力検査の日程　平成15年11月29日㈯ 筆記試験，口述試験

e　合格者の発表　平成15年12月５日㈮ 午前10時

f　応募者数等　応募者 71人，受験者 63人，合格者 55人，入学者 42人

g　個別の入学資格審査　申請者 ３人，入学資格を認定された者 ３人

㋒　第２次募集

a　募集人員　62人

b　出願期間　平成16年２月26日㈭～３月１日㈪（必着）

c　選抜方法　学力検査の成績及び成績証明書の内容を総合して選抜する。

d　学力検査の日程　平成16年３月11日㈭ 筆記試験，口述試験

e　合格者の発表　平成16年３月15日㈪ 午前10時

f　応募者数等　応募者 10人，受験者 10人，合格者 ８人，入学者 ７人

g　個別の入学資格審査　申請者なし

エ　国費外国人留学生の選抜状況

国費外国人留学生の選抜については，本年度志望者はなかった。

オ　今後の課題等

今年，入学定員に対する充足率は約72％となり，現職教員等の教職経験者の充足率についても目標とする約67％（入学定員の３分の２程度）に対して50％を下回っていることから，定員充足，特に学部卒業見込み者の確保のため，入試広報の充実及び入学定員充足のための有効な方策の検討が必要である。また，方策の一つとして，平成14年度学生募集から，入学定員を分割した募集人員を設定して，前期・後期の年２回学生募集を行うこととし，従来は欠員のある専攻・コースについて第２次募集を行っていたものを，すべての専攻・コースについて年２回の受験機会が確保され，受験機会の複数化が計れることになったが，学生数の増加に数字が現れていない。なお，平成17年度入学者から対象にした長期履修学生制度の導入をすることが機関決定されており，これに付随した魅力有るプログラム等を関係者へ広く知らしめることが必要である。

今後は，教職経験年数３年以上の者並びに外国人留学生に対しての受験機会の多様化の検討も必要である。

**②　教務関係**

教務委員会は，学部及び大学院の教務に関する事項を審議するため，教授会及び大学院学校教育研究科委員会の専門委員会として設置されており，各部から選出された研究科担当を命じられた教授，助教授及び講師計15人で構成されている。

平成15年度においては，教務委員会を13回開催し，主な審議事項は以下のとおりである。

ア　学生の除籍

イ　学生の退学

ウ　学生の休学・休学期間延長

エ　科目等履修生の受入れ・期間延長

オ　研究生の受入れ・退学

カ　特別聴講学生の受入れ

キ　派遣特別研究学生の派遣

ク　平成15年度開設授業科目

ケ　平成16年度授業時間割

コ　平成16年度学年暦の作成

サ　修了判定

シ　平成15年度非常勤講師担当配分時間数

ス　平成16年度以降の非常勤講師担当授業科目

セ　平成15年度ティーチング・アシスタントの選考

ソ　放送大学及び長岡技術科学大学との単位互換協定に係る履修科目

タ　試験における不正行為の防止

チ　授業科目の責任体制

ツ　長期履修制度を利用した初等教員免許プログラムの導入

テ　教務に係る中期目標・中期計画

### ③　教育実習

大学院教育実習専門部会は，大学院学生の教育実習に関する事項を審議するため，教育実習委員会の専門部会として設置されており，教育実習委員会委員及び障害児教育講座又は附属障害児教育実践センターから選出された助教授の２人で構成している。

専門部会は２回，内１回は協力校を交えた評価会議，及び事前打合せ会議を開催した。

実習は8名が新潟県立新潟盲学校外３校で10月～ 11月の12日間実施した。

### ④　学術研究

ア　学術研究委員会

(ｱ)　設置の趣旨（目的）

学術研究委員会は，本学の学術研究等の推進を図るための具体的事項を検討することを目的とする。

(ｲ)　組織

学長が指名した副学長，附属図書館長，学校教育総合研究センター長，各部から選出された教授又は助教授各１人，学長が指名した教授又は助教授若干人により構成されている。

(ｳ)　開催状況

平成15年度においては，学術研究委員会を３回開催した。

(ｴ)　主な審議内容

・学術研究の推進に関する基本的事項

・研究紀要の発行に関する事項

・公開講座及び文化講演会等の生涯学習の推進に関する事項

(ｵ)　審議結果により実施した主な事項（企画）

・研究紀要第23巻を発行した。

・公開講座を11講座実施した。

・文化講演会を上越市と共催で２回実施した。

・東京都教育委員会への出前講座を６講座実施した。

・にいがた連携公開講座に参加し，２講座実施した。

・上越地域を対象に出前講座（地域貢献事業）を20回実施した。

・上越市と共催で上越市まちづくり市民大学を実施した。

(ｶ)　今後の課題等

教育委員会，義務教育諸学校及び高等学校等との連携を深め，本学の多彩な人的資源を活用して地域社会の多様なニーズに対応し，本学の研究成果を広く地域社会に還元するため，公開講座及び出前講座等の充実推進を図る必要がある。

イ　スペース・コラボレーション・システム事業

a　スペース・コラボレーション・システム事業利用計画策定専門部会は，スペース・コラボレーション・システム事業利用計画策定に関する事項を調査検討することを目的とし，学術研究委員会副委員長，情報処理センター長，教務委員会委員長，各部から選出された教授又は助教授各１人，学長が指名した教官若干人により構成されている。

b　平成15年度は，講義56回（157時間），講演会10回（45時間），会議２回（６時間），その他３回（６時間30分）を利用した。

ウ　研究プロジェクト

a　研究プロジェクト専門部会は，教育実践学領域での共同研究に一定の期間研究費等の重点配分を行い，教育実践学の構築を図るとともに，その成果を大学院の教育プログラムとして活用することを目的とする，上越教育大学研究プロジェクトを実施している。

b　平成15年度は，特定研究２件・一般研究14件の応募があり，特定研究１件・一般研究７件を採択した。

### ⑶ 学校教育学部

#### ①　入学者選抜

ア　入学試験委員会

入学試験委員会は，学部の入学者の選抜に関する事項及び大学入試センター試験の実施に関する事項を審議するため，教授会の専門委員会として設置されており，学長が指名した副学長，各部から選出された教授又は助教授（講師を含む。以下同じ。），教務委員会委員長，国際交流委員会委員長，その他学長が指名した教授又は助教授若干人の計18人で構成している。なお，年度当初は保健管理センター所長が，役職指定の委員であったが，「上越教育大学職員の入学試験業務等に関する要項」第４項に該当したため，本委員会委員を辞任した。

平成15年度においては，委員会を12回開催し，主に入学者選抜の基本方針の策定，個別学力検査等の実施計画の策定・実施，学生募集要項等の作成，合否判定基準・合否案の作成，大学入試センター試験の実施，大学説明会の実施，次年度以降の入学者選抜方法等に関する懸案事項について審議した。今年度特記すべき事項は次のとおりである。

・　入試情報開示に関する方針の改正
・　大学入学資格の個別審査（朝鮮高級学校在学生からの入学資格認定申請を含む。）
・　平成18年度からの大学入試センター試験科目の選定

イ　学生募集要項等の公表

㈠　平成16年度入学者選抜要項　平成15年７月

㈡　平成16年度学生募集要項　　平成15年11月

ウ　試験等実施状況

㈠　大学入試センター試験

a　試 験 日　平成16年１月17日㈯・18日㈰

b　志願者の割当て　874人

c　受験者数　外国語 798人，地理歴史 613人，理科① 445人，理科② 341人，理科③ 333人
国語 769人，数学① 657人，数学② 575人，公民 546人

㈡　個別学力検査等［前期日程］

a　募集人員　77人

b　出願期間　平成16年１月26日㈪～２月４日㈬（必着）

c　選抜方法　大学入試センター試験（５教科６科目）及び実技検査等の成績並びに調査書の内容及び健康診断の結果を総合して，入学者を選抜する。

実技検査等は，小論文及び実技検査（音楽，美術，体育のうちから１科目を選択）とする。

大学入試センター試験と実技検査等の配点比率は，５：１とする。

配点内訳は次のとおり。

| 大学入試センター試験 | | | | | | 実技検査等 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 国　語 | 地歴・公民 | 数　学 | 理　科 | 外国語 | 計 | 小論文 | 実　技 | 計 |
| 200 | 100 | 200 | 100 | 200 | 800 | 80 | 80 | 160 |

d　試験の日程　平成16年２月25日(水)　小論文，実技検査

e　合格者の発表　平成16年３月８日(月)午前10時

f　応募者数等　応募者 321人，受験者 278人，合格者 86人，入学者 83人

(ウ)　個別学力検査等［後期日程］

a　募集人員　33人

b　出願期間　平成16年１月26日(月)～２月４日(水)（必着）

c　選抜方法　大学入試センター試験（５教科６科目）の成績並びに調査書の内容及び健康診断の結果を総合して，入学者を選抜する。

配点内訳は次のとおり。

| 大学入試センター試験 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 国　語 | 地歴・公民 | 数　学 | 理　科 | 外国語 | 計 |
| 200 | 100 | 200 | 100 | 200 | 800 |

d　合格者の発表　平成16年３月23日(火)午前10時

e　応募者数等　応募者 212人，受験者 212人，合格者 53人，入学者 36人

(エ)　推薦による選抜

a　募集人員　50人

b　推薦要件　平成16年３月高等学校等を卒業見込みの者で，次の①から③までのすべてに該当し，かつ，入学を許可された場合は，必ず本学に入学することを確約できる者。ただし，各出身学校長が推薦できる人員は，「面接内容」１つにつき１人とし，合計12人まで。

①　出身学校長が，初等教育教員になるためにふさわしい意欲，資質，能力，適性等を有する者として，責任をもって推薦する者

②　平成16年度大学入試センター試験（５教科６科目）を受験する者

③　調査書の全体の評定平均値が 3.5以上の者

c　出願期間　平成15年12月12日(金)～ 18日(木)（必着）

d　選抜方法　面接及び大学入試センター試験（５教科６科目）の成績並びに推薦書・調査書の内容及び健康診断の結果を総合して，入学者を選抜する。

e　試験の日程　平成16年１月31日(土) 面接

f　合格者の発表　平成16年２月12日(木)午前10時

g　応募者数等　応募者 283人，受験者 279人，合格者 50人，入学者 50人

(オ)　私費外国人留学生の特別選抜

a　募集人員　若干人

b　出願期間　平成15年12月８日(月)～ 12日(金)（必着）

c　選抜方法　日本留学試験，ＴＯＥＦＬ（Test of English as a Foreign Language）及び最終学校の成績並びに本学の実施する小論文，面接及び健康診断の結果を総合して，入学者を選抜す

る。

d　試験の日程　平成16年１月31日(土) 小論文，面接

e　合格者の発表　平成16年２月12日(木)午前10時

f　応募者数　本年度応募者なし

(カ)　大学説明会

a　期　日　平成15年７月19日(土)

b　会　場　講堂　ほか

c　参加者　572人

エ　入学者選抜方法の研究

(ア)　入学者選抜方法研究専門部会

入学試験委員会入学者選抜方法研究専門部会は，入学者選抜に関する追跡調査及び入学者選抜方法の改善に関する調査研究をするため入学試験委員会の下に置かれている。

(イ)　調査研究事項

a　平成11年度入学者の学内成績の追跡調査（入学者選抜方法別比較）

推薦入試，前期日程，後期日程の各選抜方法別に調査を実施した。

b　平成４～15年度志願者の入学者選抜方法別大学入試センター試験得点分布

推薦入試，前期日程，後期日程の各選抜方法別に調査を実施した。

c　本学に対する大学説明会参加者の意識（アンケート調査）

大学説明会の機会を利用してアンケート調査を実施した。

(ウ)　調査研究結果の公表

本専門部会での調査研究結果は，「平成15年度入学試験委員会入学者選抜方法研究専門部会報告書」として取りまとめ，入学試験委員会及び教授会に報告の上，学内外に公表した。

オ　今後の課題等

・　アドミッション・ポリシー（入学者受入方針）を策定し，学生募集要項に記載を開始し３年目となり，受験者に対し本学の入学者受入方針が浸透しつつある。今後も常にこの方針を点検・評価し，これにそって選抜方法の工夫・改善を重ねていく必要がある。

・　平成17年度以降の入学者選抜における大学入試センター試験（５教科７科目）と個別試験との配点割合の検討，平成18年度入試に係る分離分割方式の弾力化の検討，ＡＯ入試についてが今後の課題となる。

**②　教務関係**

教務委員会の設置趣旨及び組織等は，(2) 大学院学校教育研究科②教務関係の項で述べたとおりである。

平成15年度における，主な審議事項は以下のとおりである。

ア　学生の休学

イ　学生の退学

ウ　科目等履修生の受入れ及び期間延長

エ　第１年次生の専修・コース分け

オ　学部１年次生及び３年次生の進級判定

カ　平成15年度非常勤講師担当配分時間数

キ　平成16年度以降の非常勤講師担当授業科目

ク　平成16年度教員養成実地指導講師授業実施計画

ケ　放送大学及び長岡技術科学大学との単位互換協定に係る履修科目

コ　平成15年度開設授業科目

サ　平成16年度授業時間割

シ　平成16年度学年暦

ス　卒業判定

セ　試験における不正行為の防止

ソ　授業科目の責任体制

タ　教務に係る中期目標・中期計画

### ③　教育実地研究

教育実習委員会は，教授会に置かれる専門委員会であり，教育実習の運営及び評価等を行うことを目的に設置されており，各部から選出された教授・助教授・講師，学校教育総合研究センター長，学校教育総合研究センターの助教授，各附属学校の教頭の計21人で構成している。

委員会は，年間３回，及び，協力校との打合せ会議を３回開催した。

審議し，実施した教育実習の事項を整理すると，以下のとおりである。

ア　平成15年度教育実習の実施

実施計画に基づき，大学においてオリエンテーション及び事前・事後指導等を行うとともに，教育実習協力校（園）及び附属学校（園）において，各実習種別ごとに次のとおり教育実習を実施した。

○１年次－観察・参加（175人）は，５月23日㈮～５月29日㈭の５日間実施

・小規模小学校６校（浦川原村，牧村，三和村）

・特殊教育諸学校６校（上越市，新井市，柏崎市）

○２年次－観察・参加は，Ａグループ（85人）が５月26日㈪～５月30日㈮，Ｂグループ（87人）が９月22日㈪～９月29日㈪のそれぞれ１週間実施

・幼稚園12園（上越市，新井市）

・附属幼稚園

○３年次－初等教育実習（161人）は，６月２日㈪～６月６日㈮，９月16日㈫～10月３日㈮分離方式で３週間実施

・小学校31校（上越市，新井市，柿崎町，大潟町）

・附属小学校

○４年次－中等教育実習（137人）は，５月19日㈪～６月６日㈮の３週間実施

・中学校17校（上越市，新井市，浦川原村，牧村，柿崎町，大潟町，頸城村，板倉町，三和村）

・附属中学校

○４年次－専修教育実習（幼児教育専修）は，Ａグループ（５人）が10月23日㈭～11月５日㈬，Ｂグループ（５人）が11月10日㈪～11月20日㈭の２週間実施

・附属幼稚園

イ　教育実習協力校会議の計画・実施

ウ　教育実習協力校への学生配当

エ　教育実習成績評価

オ　次年度の教育実習実施計画等

### ④　フレンドシップ事業

フレンドシップ事業実行委員会は，教員養成学部における教職を志す学生の教員としての実践的指導力育成に資するため，学生が種々の体験活動を通じて，子ども達とふれあい，子どもの気持ちや行動を理解できるような機会を設けることを目的に設置されている。

ア　平成15年度実施事項

ａ「体験学習」は，勤労・生産・自然・物づくり体験の乏しい１年生に対して，教職を目指す上での意義ある基礎的体験を必修として位置付けている。教育活動創造のベースとなる体験活動11コースを設定し，経験の不足を補完するとともに，個性の伸長，得意分野の育成という意味から，選択して履修させている。教官27名が共同で展開し，履修記録簿からは「体で学ぶことの大切さと自らの経験の乏しさ，教職を目指して大学生活の中で求めて学ぶ必要性」等が記述され，アンケート調査でも90％の学生が充実した授業として極めて高い評価を得ている。学習を通して，学習素材研究，教材化の手法も学んできている。

ｂ「ボランティア体験」は，企画運営協議会に参加している関係機関との連携の上に，年間不定期で社会・学校教育活動にボランティアとして学生は参加し，子ども達の指導補助に当たりながら，触れ合いと子ども理解を進めてきた。地域に根ざした大学の礎として定着してきた。何よりも素顔の子ども達と触れ合うことで，その後の教育実習に積極性が出てきた，子ども達との接し方が変容してきたなど，多くの成果が報告されている。

また，多様な子ども達向けの活動を習得できること，時間を守る，子どもに親しみながらも注意すべき所はきちんと注意する，あいさつや言葉かけは大きい声でなど，社会性も培われ，学社連携の成果は極めて大きいものがある。年間延べ参加学生数：450名

ｃ「学びのひろば」は，上記ａ・ｂの経験を土台に，学生達自身が企画・準備・運営する触れ合い活動である。平成14年度より年２回のイベント型活動から，年間を通した活動を視野に入れた継続型の活動「学びクラブ」に展開した。大学での触れ合い活動はキャンパスで４回，妙高少年自然の家での２泊３日の活動（８月25～27日）を展開した。地元児童の申し込みは定員を大幅に上回り，地域の期待は年々高まっている。学生達の企画力と実践力は教員の指導の下，事業計画，細部計画，案内状の作成，名簿づくり，参加への通知など諸活動を通して，目を見張るほどに培われてきている。

・学びのひろば　学びクラブ　第１回６／14，第２回７／19(キッズのみ)，第３回10／５，第４回12／６　参加者各215名

・学びのひろば　学びクラブ　第２回（アドベンチャー，青空，サイエンス，クラフト）８／25～27　参加者138名

ｄ「シンポジウム」は，12月20日に学生達だけの討論会を開催した。学生のたて前ではなく本音で，一人ひとりの学生が自らの子ども達との関わりを通した具体的な事例に基づく意見交流がなされた。

イ　企画運営協議会

企画運営協議会は，新潟県教育庁上越教育事務所社会教育課長，独立行政法人国立少年自然の家国立妙高少年自然の家事業課長・主任専門職員，上越市教育委員会社会教育課長，新井市教育委員会社会教育施設長，妙高高原町教育委員会教育課主査，新潟県青少年赤十字上越地区指導者協議会長（国府小学校長）及び実行委員会で構成されている。

４月は年間計画，受け入れ事業の確認，人数調整，10月は参加学生の状況や成果についての意見交換，３

月は年度の総括と次年度への要望事項等の意見交換を主として展開してきた。

ウ　今後の課題

教員養成課程に子ども達と触れ合える場と機会が位置付けられることは，素晴らしいことであり，教職への確かな決意が生まれると共に，自己の課題が浮き彫りになる。今年度も，年間を通して，同じ子ども達との触れ合いが展開でき，より深い子ども理解につながった。

３年次は授業が多く，４年次は卒論・教員採用試験とあわただしいが，引き続き子ども達と関わっていくようにしたい。

また，引き続き子ども達と関わった学生達がそれを単なる経験に終わらせずに，経験と学問の統合を何処まで図っていけるかに今後の課題がある。

体験学習は１コースを増設し，11コースとなった。昨年同様まとまった時間が必要で，週のコマ内で展開することは容易でなく，土曜・日曜・夏休み等の集中で展開せざるを得ないのが現状である。

４年間を通じて，子ども達と関わる触れ合い活動をという学生の要望に対応するため，学びのひろばの更なる充実に取り組む。

### ⑤　保育実習

保育実習専門部会は，保育士資格取得希望学生の教育実習に関する事項を審議するため，教育実習委員会の専門部会として設置されており，教育実習委員会委員及び幼児教育講座並びに障害児教育講座から選出された教授・助教授・講師の計５人で構成している。

専門部会は２回，実習先となる施設長との打合せ会を１回，開催した。

## (4)　国際交流

### ①　国際交流委員会

国際交流委員会は，学術・文化の国際化に伴い，異文化に対する理解と関心を一層深めるために，主として国際交流の推進に関する基本的事項，研究者の国際交流に関する事項，大学等との国際交流協定に関する事項，学生の留学及び外国人留学生に関する事項，その他国際交流に関し，学長が必要と認めた事項を審議する委員会で，各部から選出された研究科担当を命じられた教授又は助教授各２人，日本語・日本事情担当専任教員の計11人の委員から組織されている。

平成15年度においては，国際交流委員会を10回，更に委員会内に設置した学生交流専門部会を７回，留学生専門部会を６回開催した。審議内容は以下のとおりである。

ア　大学間交流協定

アイオワ大学（アメリカ合衆国）：平成15年５月に「教育・研究に関する交流協定書」「学生交流に関する協定書」を更新し，新たに90日以内の「短期プログラムによる学生交流に関する同意書」に調印することとした。

イ　短期留学推進制度（派遣）

平成15年８月から平成16年７月まで，ブランドン大学（カナダ）へ本学４年生１人を，平成15年９月から平成16年８月まで哈爾濱師範大学に大学院２年生１人を派遣することとした。

ウ　短期留学推進制度（受入れ）

平成15年10月から平成16年９月まで，北京師範大学（中国）から特別聴講学生１人を受け入れることとした。

エ　外国人留学生の受入れ

平成15年10月から，研究生として３人，特別聴講学生として３人，平成16年４月から研究生として10人を受け入れることとした。

オ　外国人研究者の受入れ

８月１日㈮から９月10日㈬まで，ロシア科学アカデミー極東地質研究所から主席研究員１人を受け入れることとした。

カ「海外教育（特別）研究」

平成15年度は，前年度に引き続きオーストラリア（ウエストミンスタースクール）において９月15日㈪から９月23日㈫までの９日間の日程で実施した。〔参加学生：学部学生16人，大学院学生６人〕

なお，実施後，成績評価について審議するとともに，研究報告書を発行した。

また，授業成果を公開するため，ホームページを作成した。

キ　留学生スキー教室

平成16年２月19日㈭から20日㈮まで赤倉温泉スキー場（妙高高原町）において実施し，スキーを通じて留学生との交流を図った。〔参加留学生：23人〕

ク　国際交流のつどい

平成16年３月８日㈪に本学を会場として，留学生の体験発表及び懇親会を開催し，留学生と学生及び地元国際交流関係者等との交流を図った。〔参加者：留学生及びチューター等日本人学生32人，地元国際交流関係者並びに支援者33人を含め，学内外からの参加者約100人〕

ケ　ＳＡＲＳに係る「派遣及び受入れのガイドライン」

平成15年６月に，近隣諸国で発生したＳＡＲＳ（重症急性呼吸器症候群）の状況を踏まえ，本学学生の派遣及び外国人留学生の受入れ等について検討し，「派遣及び受入れのガイドライン」を定めた。

コ　私費外国人留学生（研究生）の受入れ方針

平成15年12月に，優秀な外国人留学生確保のために「私費外国人留学生（研究生）の受入れ方針」を定めた。

### ②　国際交流推進室

国際交流推進室は，本学の教育と研究を国際的視野に立って推進し，異文化理解マインドを持った教員を養成していくため，平成14年度に学内措置により設置され，コーディネーター部会，留学生支援部会，研修プログラム部会によって構成されている。

各部会は，協定校との交流推進，外国人留学生に対する修学・生活支援，日本語・日本文化研修プログラム，教員養成プログラム等に関する業務を担当する。

15年度に実施した主な業務は以下のとおりである。

ア　コーディネーター部会では，学長裁量経費により各コーディネーターが協定校を訪問し，情報収集や交流協定締結に関する調整等を行うとともに，平成16年３月17日㈬から３月21日㈰まで哈爾濱師範大学公務委員会委員長他２人を招へいし，哈爾濱師範大学から本学大学院への正規学生受入れの際の入試方法等について検討した。

イ　留学生支援部会では，外国人留学生の日本語能力支援体制の充実に向けて検討を行うとともに，「留学生との意見交換会」等の交流事業を企画・実施した。

ウ　研修プログラム部会では，教員研修プログラム及び日本語・日本文化研修プログラムを見直すとともに，短期留学推進制度プログラムにより，韓国教員大学校に平成15年10月17日㈮から10月30日㈭まで本学学生14人を派遣した。

（資料）

外国人研究者の受入れ

| 氏　　名 | 国　名 | 所属・職名 | 受入教官 | 期　　間 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| クーディック・ウラジミール<br>Khudik,Vladimir | ロシア | ロシア科学アカデミー極東地質研究所・主席研究員 | 天野　和孝 | 平成15年８月１日～<br>平成15年９月10日 | 私　費 |

### (5) 研究集会等

平成15年度に本学を会場として開催された学会等のうち，主なものは次のとおりである。

#### ①　日本カリキュラム学会第14回

（大会実行委員長：高田　喜久司，事務局長：和井田　清司）

期　日：平成15年７月４日(金)，５日(土)，６日(日)

会　場：上越教育大学山屋敷キャンパス

参加者：200名

内　容：第１日目の理事会をかわ切りに，課題研究と公開シンポジウム及び自由研究発表で構成された第２日目そして２つの課題研究と学会総会及び自由研究発表で構成された第３日目を通して，学力の定着と「総合学習」の発展という二重の課題に応えうる，カリキュラム研究の最新成果の発表・交流が行われた。なお，公開シンポジウムでは，本学が立地する新潟県及び上越地域における実践及び研究成果をもとに活発な議論が展開された。

１．公開シンポジウム（テーマ：カリキュラム開発における地域との連携）

司会（上越教育大学：西穣司　静岡文化芸術大学：有園格）

・パネリスト及び発表題目　新潟県における連携の取り組み（上越教育大学：小林毅夫）　糸魚川市糸魚川東小学校における連携の取り組み（当日代理発表）　わが国全般の連携をめぐる課題（名古屋大学：的場正美）

２．課題研究

課題研究Ⅰ（テーマ：学力評価とカリキュラム評価）　司会（京都大学：田中耕治　東北大学：小泉祥一）

・パネリスト及び発表題目　カリキュラム評価の観点から（東京学芸大学：浅沼茂）　学力評価の観点から（鳴門教育大学：西岡加奈恵）　カリキュラム評価経営の観点から（東北大学：小泉祥一）

課題研究Ⅱ（テーマ：総合学習と教科学習のカリキュラム）　司会（国立教育政策研究所：工藤文三　愛知教育大学：寺西和子）

・パネリスト及び発表題目　総合的学習と教科学習の関連―学力の構造を軸に―（東京学芸大学：児島邦宏）確かな学力をはぐくむ教育課程の創造―知のネットワークを図って（上越市高田幼稚園：臼井一郎）　ふるさとＥ．Ｌ．の学びを各教科の学びへ（埼玉県杉戸町杉戸中学校：藤崎顕孝）

課題研究Ⅲ（テーマ：臨床の知とカリキュラム研究）　司会（福岡教育大学：中野和光　上越教育大学：高田喜久司）

・パネリスト及び発表題目　ケアリングカリキュラム（新潟大学：齋藤勉）　バフチンからみた臨床の知…「対話」の意味（名古屋女子大学：澤田稔）　学習臨床研究の方法とその事例（上越教育大学：戸北凱惟）

３．自由研究発表：60件

② 平成１５年度全国地学教育研究大会／日本地学教育学会第５７回全国大会 上越大会

（大会委員長：渡邉　隆，事務局長：中川　清隆）

期　日：2003年（平成15年）８月１日㈮～８月４日㈪

会　場：上越教育大学（上越市山屋敷町１番地）

A 会場：講義棟２階３０１号室

B 会場：講義棟２階２０１号室

ポスター会場：附属図書館１階ライブラリーホール

控室兼展示会場：講義棟１階１０１号室

参加者：166名

内　容：　平成15年８月１日～４日の日程で，平成15年度全国地学教育研究大会／日本地学教育学会第57回全国大会が，新潟県上越市の上越教育大学で開催された。前半２日間には，記念講演，シンポジュームを含めて，山口大会を上回る60件の発表が行われるとともに，６件の展示ブースが出展された。後半の２日間には，フォッサマグナや油田・ガス田等，上越の特徴を充分に活かした２コースの巡検が実施された。研究発表会には，展示業者，アルバイト学生を含む166名が参加し，２つの巡検には，案内者を含めて合計29名が参加した。

昨年（平成14年）度の山口大会は，教育課程が変わる年を地学教育復権のための絶好のチャンスととらえて，「新教育課程における地学教育の活性化をめざして」というテーマを掲げ，記念講演，シンポジュームを含む活発な発表が行われた。この度の上越大会では，山口大会のテーマを発展させて「新指導要領を踏まえたこれからの地学教育」というテーマを設定した。

大会初日の午後には，新指導要領を１年間実施した結果小中学校では地学教育にいかなる問題点が生まれたのか，本年度から新指導要領が実施された高校地学ではどのようにして科目「地学」の建て直しがはかられているのか，そして指導要領の変更が教員養成系大学・学部の地学教育のあり方にいかなる影響を与えているのか，というような点に焦点を当てた長時間にわたるシンポジューム「どうする学校地学の教育体系」を開催した。

大会二日目の午前には，渡邉　隆上越大会実行委員長が，上越教育大学で構築を試みてきた地学教育の体系について「粘土屋の地学教育畑の開拓」と題する記念講演を行った。これらの特別企画だけでなく，一般発表においても，真剣で活発な議論が交わされた。

また，大会３日目～４日目には，フォッサマグナや油田・ガス田等，上越の特徴を充分に活かした巡検２コースを実施した。

１．記念講演

日　時：８月２日　10：50 ～ 12：00

講演者：渡邉　隆（上越教育大・学長）

題　目：粘土屋の地学教育畑の開拓

演者の渡邉　隆上越教育大学長は，安保紛争の真最中の1959年に朝永振一郎先生が学長の東京教育大学理学部に入学され，日本の粘土鉱物学の創始者，須藤敏男教授の門下生となられた。朝永学長および須藤教授からそれぞれ賜った言葉「常に，科学者的存在であれ‼」および「If you would a teacher be, by your students you will be taught」が座右の銘であり，それらが渡邉学長の教育観の原点となっているようである。東京教育大学で理学博士の学位を取得し九州大学理学部地質学教室に奉職され，さらに上越教育大学に赴任された後も，一貫して粘土鉱物の研究を継続されており，イライト／スメクタイト混合層粘土鉱物の生成と成長を判定する Watanabe's Diagram の提唱者として国際的に知られている。

1978年，学部定員200名，研究科定員300名うち200名は現職教員という，教員養成と教員の再教育を目的とする上越教育大学が開学した。渡邉学長は，菅野三郎名誉教授および今大会事務局長を務めた中川清隆教授とともに上越教育大学自然系地学教室の設計に参画され，1982年4月には実際に上越教育大学に赴任された。それ以降，渡邉学長は教員養成に実際に関わり続け，現在では，独立法人化に向けて激変中の上越教育大学の舵取り責任者として奮闘中である。「新指導要領を踏まえたこれからの地学教育」を大会テーマとする本大会には最適であるとして，記念講演の演者となっていただいた。

記念講演「粘土屋の地学教育畑の開拓」は，理学部出身で理学部で研究活動をしていた演者が，教員養成系大学の構想段階から参画し，実際に赴任して実践してきた教員養成系大学における地学教育体系の構築の歩みを総括するものであり，言わば，演者の上越教育大学における最終講義の趣を呈するものとなった。

開学当初，演者は，教員の資質向上は修士レベルで行うべきであり，そのために科学基礎はしっかりとしたものを作るべきだと考え，当時の理学部のシステムを基本にし，教育へ応用を広げていこうと考えた。当初の地学のカリキュラムを，１年の「地学」で一般的基礎を学び，２年で「岩石・鉱物」「層位･古生物」「天文・気象」３分野の基礎を修得し，３年で「地学原書講読」と「野外実習」を修得するとともに３分野のうちのどれかのゼミに所属し，４年で「地学実習」を修得し卒論を製作する流れにした。各学年で，「講義」+「実験・実習」を対とした教育を意識し，「卒論の作成」を大学の最も大切なものとして位置づけるところに，このカリキュラムの特徴があった。

卒論は3年の12月に，修士は1年の9月に第１回（構想発表）の発表を行い，5月，９月，12月に中間発表を行い，最終学年の９月の発表後，論文執筆を開始する。卒論も修論も12月に論文を提出し，その論文を回覧しながら口頭発表を行い，「地学分野」としての評価を受ける。成果はなるべく公開し批判を受けるという考えのもとに，この発表会を「ハンマー祭」と呼び地域の「地学」関係者に公開している。

12月に完成した卒論・修論をもとに2月上旬の「理科」分野での発表に備え，「地学」という専門分野での研究をまとめ，その素材を「理科」という教育課題へ変換させることを図る。地学の一分野の研究課題とその成果を，理科の物理，化学，生物，地学，理科教育全スタッフの前で発表し理解を得るには大変な努力が必要であったが，この「地学」→「理科」への転換は，専門から「教育」への第一歩を踏み出すのに重要なステップであると確信していた。

地学の専門分野の学会活動と地学教育分野の活動を同時に行いながら日常の教育・研究活動を行うという二足の草鞋を履きながら，いつしか二足を一足の草鞋にする構想のもとで，自然系理科の教育と研究指導が行われ20数年の時が流れたが，「教科専門」と「教科教育」の間を埋められないという現実が出てきた。専門領域の学会の中に教育に関する研究活動分野は少なく，あっても高等教育の分野であり，初等・中等教育分野の教育フィールドはほとんど無い一方で，日本地学教育学会誌「地学教育」には専門領域からの投稿論文は少なく，両方の学会で同一人物が活躍している現実はほとんどなかったためである。

1997年秋の「教員養成系大学・学部定員5000人削減計画」に対応して，上越教育大学では演者を含む「上越教育大学大学改革構想特別委員会」が設置され，実践教育の研究と指導者の育成を目指す大学に再構築する目的を定めた。その目的遂行のために，人間理解，教科基礎，実践教育研究を３つの柱とする教育実践学の構築が打ち出され，今までよりもっと教育の実践場：教室に近いフィールドで教育実践学を研究していこうというグループを既存の「教科領域専攻」から離して別の専攻に移動させ「学習臨床講座」という新しい分野が創出された。演者は，この新分野に期待されるのは，「事例研究案」のまとめとそのデータの公開，発信であり，その反応から出てくるさらなる「事例研究案」の集積とその財産から生み出される共通・普遍性を持つ「テーマ」の研究法の追求である，と主張する。

演者は，1995年～1999年文部省科学研究十点領域研究「全地球史解読」プロジェクトで生み出された「仮説ころがし」という新しい研究方法を，上越教育大学の新しい分野「学習臨床講座」で確立されるべき研究法として導入すべき時である，と主張する。複数の作業仮説を学校現場に持ち込み，学校現場の現象が「どう解釈されるか」;「どう説明されるか」;「説明するには何が不足か」;「この仮説は限界か」などを検証し，そのなかで仮説を再構築していくのが，「仮説ころがし」であり，「教科実践学のアプローチ」そのものである。またその「仮説ころがし」は，受講者と意見交換をやりながら話の展開ができる「コラボレーション型授業」が是非とも必要である，としている。

演者による最近の実践研究では，第一段階でまとめた「岩石・鉱物ゼミ」における卒論･修論をもとに，「地学」さらに「理科領域」へと段階的に成果発表の対象を広げてゆくプロセスにおいて，研究データの「切り口を変えていく」ことを重要視した。例えば，「火山灰中の鉱物の結晶成長」という岩石・鉱物学的テーマの切り口は「眼―虫眼鏡その先？」に変え，「新潟第三系の続性作用の粘土鉱物学的研究」は「砂を固めると砂岩になるだろうか？」,「XXX　地方のロームの鉱物学的研究」は「火山のない町で『火山』を研究する」に変えた。これらでは，あくまで基礎研究を基本とした自然界からの「データ」を基本に「解析」と「結論」を出すプロセスを，教育という実践場を視点に，子供たちが興味を持つ「Key Words」で「データ」を「別の切り口」で料理し，味を変えることを実践した，と主張した。

最後に，個々の専門の「研究」と「教育」はかけ離れたものではなく，両者は互いに助け合うものであり，それなくして科学の進歩はありえない，という演者の信念を披瀝して講演を締め括った。

2．シンポジューム

日　時：8月1日　13：00～17：30

テーマ：どうする学校地学の教育体系

オーガナイザー：渡邉　隆（上越教育大・学長）

趣旨説明：渡邉　隆（上越教育大）

第1部：学習指導要領の改訂で地学単元はどのように変わったのか。新たな教育課程を1年間実施した経験から地学教育の問題点を指摘し改善策を探る。

司　会　益田裕充（埼玉県深谷中）

大山賢一（新潟県大手町小）：小学校における地学教育の課題と提言

田中哲也（新潟県柿崎中）：中学校における地学教育の学習と課題

コメンテーター　下野　洋（前国立教育政策研）

第2部：高等学校地学にはどのような問題点があるのか。本年度から実施された学習指導要領をうけて，これからの教育課程ではどのように地学履修者を増やしたらよいかを探る。

司　会　高橋康明（千葉県立沼南高）

坪田幸政（慶応義塾高）:高等学校地学における課題と提言（急病により欠席，予稿集原稿のみ）

永田　洋（東京都立雪谷高）：高等学校地学における課題と提言―主として岩石・鉱物の領域について―

齋藤敦史（新潟県立新潟東高）：新潟県（高等学校）における地学教育の現状

藤井英一（東京都立晴海総合高）：地球科学の重要性アピールの方法

コメンテーター　北原祐一（長野県立丸子実業高）・林 慶一（甲南大学・理工）

第3部：教育職員免許法の改正が平成10年に行われ，この教員免許法下の学生が卒業するようになった。教員養成系学部・大学の地学を受講する学生の実態を紹介し，教員養成における地学の授業のあり方を探る。

司　会　林　武広（広島大・院・教育）

椚座圭太郎（富山大・教育）：科学リテラシー向上のための先行研究としての地学教育

岩崎博之（群馬大・教育）：気象担当から見た学生の実態と講義の工夫

横尾武夫（大阪教育大）：天文担当から見た学生の実態と提言

コメンテーター　榊原保志（信州大・教育）

総合討論：司会　渡邉　隆（上越教育大）　以上の発表およびコメントの後，休憩を挟んで，約１時間行われた総合討論は，次の３点にまとめられた。

１）地学の重要性

物理や化学と横並びにできない科学としての地学の必要性が多く語られ，子供たちにとって必要かつ重要な科学であることが再認識された。特に「時」の哲学的科学の意味付けが重要で，地学は，物理や化学とは「時」という異質の概念によって区別される。また地学の学習は自然の恩恵，破壊，災害または「時」を自然から学び，認識させてくれる大きな教育領域である。

２）組織的な取り組みの必要性

地学教員の採用，受験生や履修生の現象などの課題は多い。また教師の研修や一般社会人への宣伝など多くの課題を認識した。

３）何を学ばせるか

何を学ばせるかの議論の中で，地学は自然現象をそのまま認識する，つまり「モノ」や「現象」をそのまま学ぶ教科としての位置づけが重要であると理解できた。多くの大学で，教師養成カリキュラムの見直しの時期に来ている現在，この認識は重要な意味を持っている。

３．研究発表

本大会の研究発表は，口頭発表43件，ポスター発表７件，合計50件であった。口頭発表は，小･中学校分科会，高校･大学･一般分科会，ジュニアセッションの３分科会に分かれて，８月１日９：30～８月２日16：00に実施された。

○８月１日㈮

Ａ会場：小学校・中学校分科会Ⅰ（9：30～12：10）　８件　座長　槇嶋誠太郎（新潟県新井小）・小森栄治（埼玉県蓮田南中）

Ｂ会場：ジュニアセッション（9：30～9：50）　１件　座長　高橋修（東京学芸大）

Ｂ会場：高校・大学・一般分科会Ⅰ（9：50～12：10）　７件　座長　林慶一（甲南大・理工）・五島政一（国立教育政策研）

○８月２日㈯

Ａ会場：小学校・中学校分科会Ⅱ（9：00～10：40）　５件　座長　遠西昭寿（愛知教育大）

Ｂ会場：高校・大学・一般分科会Ⅱ（9：00～10：40）　５件　座長　小林辰至（上越教育大・自然）

Ａ会場：小学校・中学校分科会Ⅲ（13：00～16：00）　９件　座長　天野和孝（上越教育大・自然）・長瀬美香子（新潟県新井南中）

Ｂ会場：小学校・中学校分科会Ⅳ（13：00～14：00）　３件　座長　渋江靖弘（兵庫教育大・自然）

Ｂ会場：高校・大学・一般分科会Ⅲ（14：10～15：50）　５件　座長　小出良幸（札幌学院大・社会情報）

○８月１日㈮および２日㈯

附属図書館ライブラリーホール：ポスターセッション（12：00～13：00）　７件

以前と比べると，専門領域の学会と同じ内容の発表が，かなり少なくなり，教育実践を含む内容に

なった。これは近年のこの学会の発表の傾向で，地学教育学会の独自性・存在意義を示す上でも重要なことだと思われる。

4．展示ブース

8月1日～2日の間，控室兼展示会場において，渡辺教具製作所，北辰光器製作所，伊藤忠テクノサイエンス，資源・環境観測解析センター，ESRIジャパン，上越ＧＩＳ利用環境整備協議会の6業者が展示を行った。

5．巡検

8月3日～4日には，1泊2日のＡコース1，日帰りのＢコース1，合計2コースの巡検が実施された。参加者20名で採算が取れる参加費を設定し，定員25名で参加を募ったが，Ａコース，Ｂコース，いずれも，採算ラインを割る小数参加となったのは残念であった。しかし，天候不順なこの夏にあっては久しぶりの夏らしい天気の元で実施することができ，充実した巡検となった。参加者各位には，新潟県上越地方の地学的特徴を充分にご理解いただけたものと考える。

○Ａコース：西頸城・フォッサマグナ

8月3日(日)～4日(月)，1泊2日，上越市泊

案内者：天野和孝・大場孝信（上越教育大・自然系）

参加者：10名（事前登録11名，欠席1名）

8月3日午前8：15に大学玄関前を出発し，午前8：30に直江津駅で参加者全員集合した後に柿崎町黒岩へ向かった。黒岩の砕石場では中新世の小萱層中に貫入した鮮新世の安山岩の岩脈を観察し，柱状節理を観察した。みごとな柱状節理に歓声が挙がっていた。また，捕獲岩としてのハンレイ岩や角閃石の巨晶の見られる安山岩が採集された。さらに，予察時に見られなかった母岩と岩脈の接触部が思いがけず観察できた。ここから糸魚川のフォッサマグナ・ミュージアムへ直行し，午後1：15まで，ミュージアム周辺に滞在し，学芸員からヒスイなどの解説をいただき，昼食を取った。また，希望者は館外の石灰岩中より古生代のコケムシ，腕足類化石を採集した。ミュージアムの展示については比較的好評だったようである。その後，フォッサマグナ・パークに行き，主に糸魚川・静岡地質構造線の露頭と枕状溶岩を観察した。糸魚川・静岡地質構造線の露頭については，よくある事だが，展示方法などについて不満や期待外れの点があったようである。観察後，青海海岸でヒスイ採集を行った。数名の参加者が幸運にもヒスイを複数採集でき，採集できなかった参加者にも1人1個づつ配付できた。最後に，親不知のピアパークでヒスイの原石などを観察し，ほぼ予定通りに宿泊地のくわどり湯ったり村に向かった。

8月4日午前8：30に宿を出発し，大淵の桑取川沿いの露頭で鮮新統名立層より貝化石を採集した。壊れやすい化石が多かったが，主な特徴種はほぼ採集できた。その後，金谷山に向かい，レルヒ像で記念撮影，また，金谷凝灰岩中から高温石英の採集を行った。比較的大型の石英が採集できたようである。ここから，春日山城址に向かった。春日山が海底土石流堆積物からなること，生痕化石が見られることなどを解説，観察しながら頂上をめざした。晴天ながら，あいにくと見通しがきかず，山々の姿が見れなかったが，高田平野などのようす，南葉山などを観察できた。下山中に海綿化石であるマキヤマ・チタニイを採集した。昼食後，五智球場で下部更新統居多層より貝化石を採集した。幸い，採集地まで整地されており，保存の良い貝化石を採集できた。その後，郷津海水浴場にて車窓から向斜構造を観察し，これが更新世前期以降に形成されたことを解説したところ，驚きの声が挙がった。電車の時間の都合を考慮して予定より若干早い時間に終了し，直江津駅にて解散した。

○Ｂコース：新潟油田地域標準層序

８月３日(日)，日帰り

案内者：栗田裕司（新潟大・理学部）・中川清隆（上越教育大・自然系）

参加者：13名

２年前まで国内石油産出企業に所属しておられた栗田裕司（新潟大・理学部）氏の案内のもと，新潟堆積盆のうち多くのガス田・油田群が発見されている「西山油帯～中央油帯」と呼ばれる地域を中心に，油田施設と石油根源岩および貯留岩となっている地層の露頭を観察した。まず，帝国石油株式会社・長岡鉱業所越路原プラントを訪問し，同プラント長の大西清文氏から，石油鉱床，油井掘削，精製，パイプライン等について説明を受けた。貯留岩となっている裂け目のあるグリーンタフのボーリングコアを見学したり，現地圧だけで加圧することなく直接都市ガスの末端までガスが供給されることの説明を受けた。その後，海岸線に平行に走る４本の背斜と尾根，向斜と谷が一致した褶曲構造をバスで横断しながら日本海海岸に出て，グリーンタフ新潟地域の代表低な石油貯留岩の一つである観音岬の椎谷層の砂岩泥岩互層の露頭を観察した。水着姿の女性が闊歩する海水浴場の一角に全く場違いな一団が登場した形になったが，海底の乱泥流による堆積作用を特徴づけるブーマシーケンスを構成するすべてのシーケンスが揃ったタービダイトに歓声があがった。昼食は，出雲崎の民宿料理を楽しんだ。午後は，中永峠で新潟堆積盆地の埋め立て期の堆積物である灰爪層の露頭を観察し，貝化石密集層や凝灰岩鍵層，そしてこの地域の激しい地殻変動を受け層理面がほぼ垂直に直立している様を観察した。最後に，大河津分水・野積橋畔で有機物の含有量が３％を越え石油根源岩となっている寺泊層の薄い砂岩層を頻繁に夾有する泥岩層の露頭を観察した。あいにく当日が人出40万人を超える長岡花火大会と重なり当初の解散予定地 JR 長岡駅周辺の交通渋滞が深刻であったため，急遽，JR 見附駅で解散することとなり，あわただしい最後となったが，我が国ではめったにお目にかかれない石油地質に直に触れる機会が得られ，参加者には好評であった。

６．大会宣言

昨今の科学技術の進歩や高度情報化社会の到来により，便利さと物質的な豊かさを享受できるようになったものの，地球規模での環境問題や生命倫理に係わる未だかって経験したことのない難題と直面することにもなった。

また，少子・高齢化，都市化の進展や産業構造の変革，グローバリゼーションや価値観の多様化等によって家族や地域社会等と個人との係わり方が大きく変わりつつある。このような急激な社会・経済状態の変化に伴い，生活や社会活動等の面で直接的な体験の機会が失われ，人間関係の希薄化も広がっている。

21世紀を担う子どもたちにとって，自然環境を科学的に理解し，その学習過程で得られた知識や技能を活用してさらに日常の学習や生活とかかわる新たな課題解決に取り組んで行ける「生きる力」を獲得していくとともに自然との共生を図るための意志決定能力をもつことが期待される。本大会では，「新指導要領を踏まえたこれからの地学教育」のテーマの下に情報交流や議論された中から今後の課題を取り上げるとともに学会としてこれらの一層の充実，発展を目指して焦点化した活動を推進することを宣言する。

⑴　地学を学ぶ目的と地学の大切さと楽しさを知らせること

地学を学習する目的は，初めは素朴な疑問を解決したり知的好奇心を満足させるものであろうが，次第に真理を探究し，ひいては大自然についての理解を深め，有限な地球上での人類の生存や幸福に貢献することでなければならない。また，地学は人間生活にとって重要な役割を果たしているだけでなく，そこには楽しさのあること，地学にはそれ特有の科学的な見方・考え方があることを伝えたい。

地学を学習する目的は，初めは素朴な疑問を解決したり知的好奇心を満足させるものであろうが，次

第に真理を探究し，ひいては大自然についての理解を深め，有限な地球上での人類の生存や幸福に貢献することでなければならない。また，地学は人間生活にとって重要な役割を果たしているだけでなく，そこには楽しさのあること，地学にはそれ特有の科学的な見方・考え方があることを伝えたい。

⑵　自然体験的な活動を問題解決的な学習に高めること

情報化など社会の変化に対応していかなければならないものもあるが，時代が変わっても「地球の自然環境」は実物を通して体験的に感性を磨き，その過程で発見した疑問を問題解決的に学習し理解することが大切だと考えられる。

⑶　地学教育のカリキュラムとその教師教育のプログラム開発への資料提供ができること

全国理科センター研究協議会の調査によると，初等理科を担当する教師は地学領域の指導が最も苦手であるという。将来の地学教育にとって適切な地学領域のカリキュラム構成や教師教育の在り方について，国内外の情報収集や共同研究に参加するとともに，積極的に提言できるような研究・実践を推進する。

**③　第４回自立活動研究フォーラム**

期　日：平成15年8月9日(土)・10日(日)

会　場：講義棟301教室，第２講義棟202教室

参加者：全国の特殊教育担当教員及び特殊教育研究者及びスタッフ(本学障害児教育専攻大学院生)約230人

主催者：自立活動研究ネットワーク

（代表：安藤隆男〈筑波大学〉　事務局：藤井和子・笠原芳隆〈上越教育大学〉）

内　容：①シンポジウム

テーマ：「今，改めて特殊教育諸学校のセンター的役割を問う－就学前・卒業後の関係諸機関との連携に着目して－」

話題提供者　　小杉　敏勝（新潟県立高田養護学校）

山本なつみ（富山県教育委員会）

涌井　幸夫（知的障害者授産施設みのわの里「工房こしじ」）

野口　裕子（柏崎市元気館子ども課）

齊藤まり子（仙台市立第一中学校）

②教育講演

演題：「今後の特別支援教育の在り方について」　講師　西川　公司（国立久里浜養護学校）

③実践研究発表

発表１　齊藤　博之（山形県立新庄養護学校）

テーマ：一人ひとりの「いま」を見つめ，自立を目指した学習を支援するために

～自立活動の指導の展開～

発表２　河西　晃・保坂　俊行（山梨県立甲府養護学校）

テーマ：本校の指導計画作成システムを問う

発表３　石政　佳恵・林　美由紀（富山県立富山ろう学校）

テーマ：実態に応じた自立活動の指導について

発表４　高橋　誠衛（新潟県立高田養護学校）

テーマ：Ｓさんの発達課題をどう見つめるか－Ｓさんの心の叫びに耳を傾けて－

発表５　小川　久子・永井　恵（新潟県大潟町立大潟町小学校）

テーマ：個別の指導計画を生かした「総合的な学習の時間」の実践

発表６　黒地　良子（富山県立高志養護学校）

テーマ：ムーブメント活動を取り入れた自立活動の取組

発表７　佐囲東　彰（上越市立春日新田小学校）

テーマ：通常学級に在籍する特別な支援を必要とする子どもたち

発表８　関原　一成（新潟県立村上養護学校）

テーマ：個を生かした授業づくりはどうあるべきか

発表９　松田　竜司（長崎県立川棚養護学校）

テーマ：個別の指導計画を作成し指導実践をしていく上でのポイント

発表10　中川　修一（横浜市立新治養護学校）

テーマ：個別の指導目標に基づく授業づくりとその課題

－重度重複障害児の集団授業づくり－

＊　以上のシンポジウムや実践研究発表は，現場教員はもとより本学障害児教育専攻学生にとっても実践的指導力を高めるための重要な資料となったものと考える。

**④　日本教師教育学会第13回研究大会（大会実行委員長：西　穣司，事務局長：安藤知子）**

期　日：平成15年10月４日(土)～５日(日)

会　場：上越教育大学山屋敷キャンパス

参加者：180名（正会員155名，臨時会員25名）

内　容：今回の第13回研究大会では，会場の上越教育大学が1978年に創立されてすでに30年を経たことを強く意識しつつ，大会メインテーマを「日本の教師教育における『不易流行』を見定める」と設定した。その趣旨は，時代社会の大規模な変化に対応した教師教育の制度・内容・方法の各側面での修正・改編が不可避であることは否めないが，それらを単なる技術的修正の域にとどめるのではなく，わが国教師教育の歴史的経緯のなかで培われてきた思想的基盤や教師文化にも視野を広げつつ，今後の教師教育に期待される方向と課題をより深く探求することとした点にある。

本研究大会の主要プログラムは，次の通りであった。

１．自由研究発表（10月４日(土)9：00－12：00）

第１室「教員養成の内容・方法」，第２室「教師教育の国際研究」，第３室「教師教育のカリキュラム開発」，第４室「教師教育におけるジェンダー問題」，第５室「教育実践と教師の資質」，第６室「教師の専門性と職能発達」，第７室「教師像・教職観」，第８室「教師教育の制度・政策」の８室に分かれ，計32件（内共同研究は11件）の発表及び共同討議が行われた。

２．公開シンポジウム（10月４日(土)14：30－17：30）

テーマは「教師教育における臨床的アプローチの可能性と課題」で，次の題目・提案者（敬称略）による提案があり，その後活発な討議が行われた。①福井大学における大学院レベルでの実践事例（福井大学：森　透），②上越教育大学における学部レベルでの実践事例（上越教育大学：濁川明男），③わが国教師教育の歴史的視野からみた臨床的アプローチの位置（東北大学：水原克敏），④臨床教育学構想におけるエスノグラフィーの可能性（お茶の水女子大学：酒井朗）

３．課題研究（10月５日(日)9：00－12：00）

①課題研究Ⅰ「国際比較研究『大学改革と教育専門職の養成』」，②課題研究Ⅱ「教科教育の専門性と教師教育」，③課題研究Ⅲ「大学院における教師教育の現状と課題－現職研修に焦点を当てて－」

４．インカレ・シンポジウム（10月５日(日)13：30－16：00）

このプログラムは，「今，求められている教師の資質と教職課程での学びの在り方」をテーマとして，本学及び信州大学の学部学生，さらに本学卒業者で現職教員の方々の参加を得て，次の内容で展開された。

⑴　全体会－基調体験発表「フレンドシップと教員養成課程での学び」（発表者４名）

⑵　分科会討論「現場の先生と共に語ろう」－－－第１分科会：「総合的学習と教師に求められる力量」，第２分科会：「多様化する子どもたちと教師に求められる力量」

以上の通り，本研究大会は全国各地から参加された会員はじめ関係者の意欲的な発表・討議が展開され，無事終了することができた。

### ⑤　日本進路指導学会第25回研究大会

（大会委員長：三村隆男〈上越教育大学〉　事務局長：内藤研一〈新潟県立高田商業高校〉）

期　日：平成15年10月11日㈯，12日㈰

会　場：上越教育大学山屋敷キャンパス

参加者：約197名

内　容：「学校生活から職業生活への移行支援としての進路指導」を研究大会テーマに設定。学校生活におけるキャリア形成，職業生活におけるキャリア・カウンセリングを含めた就労支援システム，及びこの間の移行支援の問題など，進路指導は再検討を迫られている。そこで，これまでの進路指導を総括し今後の在り方を検討するため，シンポジウム「日本における進路指導の過去・現在・未来」を設定するなどし，研究大会テーマに迫った。

１．大会実行委員会・研究推進委員会共同企画シンポジウム

テ　ー　マ：「日本における進路指導の過去・現在・未来」

司　会　者：三宅　章介（東海学園大学教授・学会副会長）

山崎　宗義（福岡県中学校進路指導研究協議会顧問・学会常任理事）

シンポジスト：仙﨑　　武（文教大学名誉教授・学会名誉会長）

「学校進路指導の足跡と展望」（基調提案）

鹿嶋　研之助（千葉商科大学助教授・前文部省教科調査官・学会員）

「進路指導にかかわる行政の動向とこれからの研究・実践の課題－進路指導からキャリア教育へ－」

菊池　武剋（東北大学教授・学会常任理事）

「日本における進路指導の過去・現在・未来－進路指導に関連する理論をめぐって－」

木村　　周（拓殖大学客員教授・学会理事）

「日本における進路指導の過去・現在・未来－職業行政・職業研究の立場から－」

記　　録：古川　雅文（兵庫教育大学･学会理事･研究推進委員会副委員長）

横山　明子（帝京大学・学会員・研究推進委員）

２．会員企画シンポジウム

３演題　①「小学校のキャリア教育」　②「養護学校における就労支援」　③「大学生へのキャリア支援」

「小学校のキャリア教育」では，わが国で初めて学校を挙げてキャリア教育に取り組んだ静岡県沼津市立原東小学校の実践は，参加者からの関心を集め，質問や要望が数多くだされた。「養護学校における就労支援」では，障害をもつ児童生徒の進路保障について，進路指導に当たっている教師と受け入れる企業の代表者で支援の可能性について検討された。「大学生へのキャリア支援」では，従来の就職課からキャ

リア・センターへと変容する大学のキャリア支援への関心も高く，大勢の参加者から活発な質問や意見がだされた。

3．個人発表　：　42件

4．キャリア・カウンセラー養成研修講座

「わが国における最近のカウンセリングの現状とキャリア・カウンセリングの関係」

吉田　辰雄（東洋大学）

「アメリカにおけるスクール・カウンセリングの最新の動向」　中野　良顯（上智大学）

## 5　学生指導

本学における学生指導は，正課教育活動はもちろんのこと，また，人間形成を目的として行われる正課外教育活動においては，学生の資質の向上及び教養を高めるなど，豊かな人間性を涵養する上でとても重要であることに鑑み，同活動に対する援助・助言及び指導をきめ細かく行っている。これを効果的に推進するため，学生指導関係の各種専門部会を設置し，それぞれ計画的に活動している。また，具体的な業務の実施に当たっては，関係教職員が学生と意思の疎通を図り適切かつ迅速に処理している。

### (1)　学生生活

#### ①　学生委員会

ア　設置の目的及び組織

学生委員会は，学生の厚生補導，学生宿舎，国際学生宿舎及び大学会館に関する事項等を審議するため，教授会及び大学院学校教育研究科委員会の専門委員会として設置されており，各部から選出された教授又は助教授，保健管理センター所長及び教務部長の17人で構成されている。

また，本委員会の下に「学生宿舎専門部会」，「大学会館専門部会」，「新入生合宿研修専門部会」，「教員養成課程学生合宿研修専門部会」，「課外活動団体リーダーズ・トレーニング研修専門部会」，「大学祭専門部会」及び「学生指導研究会専門部会」が置かれ，具体的検討及び企画の実施を行った。

イ　開催状況及び主な審議事項

平成15年度においては，委員会を７回開催し，主として次の事項について審議した。

なお，「学生宿舎専門部会」及び「大学会館専門部会」は，本委員会に置かれる「常置専門部会」であり，部会の決定をもって学生委員会で了承されたものとして扱われているため，ここでは記載せず，ウの実施した主な事項等で示す。

(ｱ)　入学料免除等及び授業料免除等該当者の選考

(ｲ)　日本育英会奨学生の推薦・選考

(ｳ)　学生団体の設立（継続）許可及び課外活動団体の認定

(ｴ)　教員養成課程学生合宿研修及び課外活動団体リーダーズ・トレーニング研修の企画・立案

(ｵ)　学生指導研究会の企画・立案

(ｶ)　平成16年度新入生オリエンテーション及び新入生合宿研修の企画・立案

(ｷ)　課外活動共用施設における喫煙対策

(ｸ)　国立大学法人化に伴う学内規則等の制定

ウ　実施した主な事項等

(ｱ)　新入生オリエンテーション

新入生が，大学という新しい組織・生活環境に早く馴染み，適応することを目的として，４月10日

㈭・11日㈮に，本学の組織及び大学生活に必要な事項等について説明を行った。

㈠　新入生合宿研修

学部の新入生を対象に，集団活動を通じて，新入生相互並びに教職員との親和を図り，お互いの理解を深め，その後の学業上・生活上の安定・充実を図ることを目的として，４月22日㈫・23日㈬に国立妙高少年自然の家で１泊２日の日程で実施した。

㈡　教員養成課程学生合宿研修

学部の３年次生を対象に，教育実習での体験を相互に発表・討議することで，教師としての職務や活動に対し一層の理解を深め自主的な判断力や行動力を養い，また，今後の学習や，進路・就職にむけた学生生活の方向づけを行うことを目的として，10月14日㈫・15日㈬に国立妙高少年自然の家で１泊２日の日程で実施した。

㈢　学生指導研究会

クラス担当教官，学生委員会委員，教務職員及び参加希望職員を対象に，学生指導に関する情報交換及び研究を行い，当面する大学の課題等について教職員の認識を深め，学生指導の充実及び円滑な運営を図ることを目的として，２月26日㈭に本学大会議室で実施した。

平成15年度は，①「教育相談の現状と課題－私の体験から－」，②「学生の相談に対する対応の仕方」をテーマとした講演を実施した。

㈣　課外活動団体リーダーズ・トレーニング研修

課外活動団体のリーダー，副リーダー，マネージャーを対象に，その任務の認識と基本的知識の習得を図るとともに，課外活動団体相互の親睦と理解に基づき，課外活動の発展向上を図ることを目的として，３月４日㈭・５日㈮に国立妙高少年自然の家で１泊２日の日程で実施した。

㈤　課外活動共用施設における喫煙対策

健康増進法の施行に伴い課外活動共用施設における喫煙対策（受動喫煙防止対策を含む。）として同施設内を禁煙とし，喫煙場所は出入り口の外側とする空間分煙を実施した。

㈥　国立大学法人化に伴う学内規則等の制定

平成16年４月からの国立大学法人化に伴い，大学の設置根拠が異なるため，現在の上越教育大学学生関係規則等を廃止し新たに制定するため，運営評議会等に付議した。

㈦　学生居住施設

〈学生宿舎及び国際学生宿舎〉

a　設置の趣旨（目的），運営方針

学生宿舎は，学生に良好な勉学と生活の場を提供し，自律的な生活を体験させることを目的とし，国際学生宿舎は，日本人学生及び外国人留学生並びに外国人研究者に生活の場を提供し，併せて国際交流の事業の用に供することを目的として設置されている。

この目的に沿って，学生宿舎及び国際学生宿舎の管理運営に関する事項は，学生委員会（学生宿舎専門部会）において審議の上実施する。

また，入居者自身においても，単身用では各棟の代表者で構成する「棟長連絡会」で，世帯用では「自治会（町内会）」を設けて，それぞれが入居者の立場で諸問題を討議し，自律的に処理することとしている。

b　学生委員会学生宿舎専門部会

○　開催状況

平成15年度は４回開催し，主として次の事項について審議した。

・入居者による安全点検
・学生宿舎における喫煙対策
・学生宿舎経費執行計画
・入居者の指導の現状とその対応
・平成16年度に引き続き在学する学生の入居者選考
・平成16年度新入生の入居者選考

○　実施した主な事項

・単身用学生宿舎の入居者の防災意識を高めるため，安全点検カードを作成し，各階連絡員了承の下，実施することとした。
・学内・研究ゾーンでの建物内喫煙対策（空間分煙）の実施に伴い，学生宿舎における同対策について，喫煙可能場所を審議し各階連絡員会の意見を聞いた上で，11月１日から居室のみ実施することとした。
・学内予算の学生宿舎経費執行計画の大枠について，世帯棟の居住環境整備のための居室補修工事を重点に，単身用談話室の内装工事その他を計画していくこととした。
・平成16年度に引き続き在学する学生の入居者選考を行い，学生宿舎単身用450人，同世帯用28人，国際学生宿舎の日本人学生10人の入居を許可した。また，国際学生宿舎の外国人留学生については，単身用７人，夫婦用２人の入居を許可した。
・平成16年度大学院新入生の入居者選考を行い，学生宿舎単身用90人，同世帯用25人，国際学生宿舎の日本人学生７人の入居を許可した 。また，国際学生宿舎の外国人留学生の入居者選考を行い，単身用５人，夫婦用１人の入居を許可した。

なお，大学院博士及び外国人留学生（研究生等）並びに学部合格者の入居者選考については，合格発表後，本部会を開催する時間的余裕がないため，部会長及び事務局に一任することとした。

・上越教育大学学生宿舎及び国際学生宿舎の暫定取扱規程について，見直しを検討し廃止することとした。

c　運営状況

○　入居状況

平成15年度は，学生宿舎単身用と世帯用を合わせた収容人員800人に対して749人が入居し，収容人員に対する入居率は93.3％であった。国際学生宿舎の収容人員42人に対して37人が入居し，収容人員に対する入居率は88.1％であった。また，在籍学生1,202人に対する入居率は65.4％であった。

○　施設・設備の整備

学生宿舎の設備等を次のとおり整備し，宿舎の安全管理及び居住環境の充実を図った。

〈単身用学生宿舎〉

・居室備品一部更新 ( 椅子，ベッド )
・談話室一部内装補修及び窓に格子取付，カーテン・椅子等更新
・宿舎内各所修繕

〈世帯用学生宿舎〉

・空室であった居室の内装補修，床修繕，壁塗装，畳替等（17戸）
・洗濯機パン取設（17戸）

(ケ)　大学会館

a　運営方針

大学会館には，学生及び教職員の福利厚生のため，食堂を始めとした12の業者が寄与しており，これらの業者はサービスセンターにより統括されている。

この統括により，大学からの指導助言並びに業者側の意見意思等の伝達経路が一体化され，福利厚生事業の円滑な運営が図られている。

また，改善指導は，学生生活実態調査等の学生・利用者の意見・要望を踏まえ，利用しやすい大学会館とするよう改善充実に努めている。

b　概要及び利用状況

大学会館の諸施設概要及び利用者数は次表のとおり。

| 区　　分 | 内　　容 | 面積(㎡) | 平成15年度利用者数(人) |
|---|---|---|---|
| 第１食堂 | 310席（朝・昼・夜の食事等）カフェテリア形式 | 477 | 82,328 |
| 第２食堂 | 28席（昼の食事等） | 48 | |
| 売　　店 | 食料品，日用品，文房具，書籍，クリーニング，チケット販売，写真現像，スポーツ用品等 | 189 | 150,255 |
| 喫　茶　室 | 40席（喫茶・軽食） | 77 | 8,500 |
| 理　容　室 | ２席（調髪等） | 13 | 1,092 |
| 美　容　室 | ２席（パーマネント・カット・ヘアカラー・着付等） | 13 | 1,882 |
| 第１集会室 | 30席 | 38 | 426 |
| 第２集会室 | 15席 | 25 | 186 |
| 第３集会室 | 15席 | 25 | 264 |
| 第４集会室 | 和室（12畳），15～20名収容 | 29 | 260 |
| 第５集会室 | 和室（６畳），５～10名収容 | 17 | 80 |

c　施設・設備等の充実

例年のとおり大学会館全体の定期害虫駆除，定期清掃を実施し衛生管理に努めているほか，平成１５年度は電撃殺虫機の更新等により衛生管理に努めた。設備面では，美容室の加湿器の更新，大学会館の玄関マットを購入をした。

d　その他

カレーフェア・スパゲッティフェアを行った。また今年から夕食限定メニューとし，温かい焼きたてのステーキ等，メニューをより一層充実させるようはかって利用者の期待に応えている。

エ　今後の課題

学生委員会では，学生指導事業年間計画を立て，企画・実施してきた。その中でも，学生の各種合宿研修については，研修参加学生と事前の打合せ会や実施後アンケートを実施し学生の希望や意見を聴取したり，必要により関係委員会と打合せを行い，より充実した企画内容となるよう改善してきた。今後も，学生のニーズを調査し，時代に合った企画内容となるように努めていく必要がある。

## (2)　就職指導

### ①　就職委員会設置の趣旨（目的）及び組織

就職委員会は，教授会及び大学院学校教育研究科の専門委員会として，就職対策についての企画・立案に関する事項等を検討することを目的に設置されており，各部から選出された教授又は助教授15人（第一部及び第五部から選出された教授又は助教授各２人，第二部及び第三部から選出された教授又は助教授各３人及び第四

部から選出された教授又は助教授５人）及び教務部長の計16人並びに学長指名の教授又は助教授若干人で構成している。

② 就職委員会の開催状況及び主な審議事項等

平成15年度においては，委員会を４回開催した。主な審議事項は，①平成15年度就職指導計画に基づく各講座を実施するための具体の検討，②今後の就職支援策，③平成16年度就職指導計画等であった。

また，審議結果により実施した事項は，①平成15年度就職指導計画に基づく各講座の実施，②教員採用試験受験予定者の奮闘をたたえるための激励会の開催，③教員採用試験受験率の低下等の要因を調査するため，学部４年次学生を対象にアンケート調査を実施した。

③ 今後の課題等

大学教育の成果は，学生を通じて社会に還元されるとするなら，大学にとって就職は大きな意味を持つものであり，就職を大学教育の問題として正面から考える必要が生じてきた。本学においても，教員採用試験受験率の減少，教員採用試験合格率の低迷が，教員就職率の不振という形で表れている現状を厳しく受け止め，対策を講ずることが急務である。

平成16年４月の国立大学法人化及び今年度学部４年次学生を対象に実施したアンケート調査結果等を踏まえ，教員就職率向上のための具体策等について検討しなければならない。

## ６ 附属施設等

### (1) 附属図書館

① 設置の趣旨（目的），運営方針・状況

附属図書館は，教育及び研究活動に資するため，図書・雑誌・その他の資料を一元的に収集・整理・保存し，本学の学生及び職員の利用に供することを目的として設置されている。

現在，学術情報の電子化が急速に進展しており，とくに電子ジャーナルへのアクセスの拡充と安定的供給が急務となっている。また，大学の教育支援機能の強化が必要とされている中で，授業と関連した資料の網羅的収集はもちろんのこと，教育者を目指す本学の学生が幅広い教養を身につけるための図書を提供していくことが課題となっている。さらに，地域の学術情報提供の中核として市民の要求に応えていくことが求められている。

このような状況の下，学術情報流通の基盤的組織である附属図書館は，平成12年度に策定された「図書館資料整備計画」に基づき，学習図書館機能，研究図書館機能の強化，電子図書館的機能の整備充実を進めている。

② 附属図書館運営委員会

ア 設置の趣旨（目的）

館長の諮問に応じ附属図書館の運営に関する重要事項を審議するために置かれている。

イ 組織

第１部から第５部までの各部から選出された教授又は助教授１名と附属図書館長の計６名により構成され，附属図書館長が委員長となる。

ウ 開催状況・主な審議内容

平成15年度は３回開催し，次の事項について審議した。

第１回：平成14年度図書購入費決算，附属図書館の中期目標，上越市立図書館との相互貸借，EBSCOhost の購入コレクションの変更，平成15年度の検討課題について

第２回：平成15年度図書購入費予算，附属図書館の年次計画，電子ジャーナル対象誌の講読確保，法人化移行に伴う準備作業

第３回：附属図書館電子計算機システムのリプレース，実習期間中の指導書の貸出禁止，附属図書館関係規則の改定

エ　審議結果により実施した主な事項（企画）

(ア)　基本学術研究図書・学習用図書の選定及び収集

全学の教官に対して推薦依頼を行い，それに基づき基本学術研究図書，学生用図書及び雑誌バックナンバーを収集した。また，シラバス掲載図書について全学教官に推薦依頼を実施し収集を強化するとともに，図書課選書 W.G. は，学生用図書，学生リクエスト図書，参考図書，寄贈資料を中心に選定を行った。

(イ)　上越市立図書館との相互貸借

地域貢献の一層の充実を図るため上越市立図書館との間で相互貸借の協定を結び，本学所蔵図書の上越市立図書館を通じた市民への貸出及び本学構成員に対する上越市立図書館蔵書の団体貸出を実施した。

(ウ)　電子ジャーナルへのアクセス可能タイトルの拡充

電子ジャーナルへのアクセス可能タイトルの拡充を図るため，EBSCOhost 社の Professional Development Collection（教育学分野）と Psychology & Behavioral Sciences Collection（心理学分野）を，より収録タイトル，対象分野の広い Academic Search Elite に変更し，アクセス可能タイトル数を約900タイトル増加した。また，Klu w er 社のコンソーシアムへの参加を決定し，平成16年度には同社の約600タイトルへのアクセスを可能とした。

(エ)　附属図書館の中期目標・中期計画及び年度計画

法人化に伴う附属図書館としての中期目標・中期計画案を検討・策定し，さらに大学全体の中期目標・中期計画が決定されたのをうけて，附属図書館として年度計画案を策定・提出した。

オ　今後の課題等

(ア)　図書館資料整備計画の実施

平成13年度からの第４次図書館資料整備計画において，学習用図書，基本学術研究図書，コア・ジャーナル及び電子的学術資料の整備・充実を図ることとなっており，そのための財源を安定的に確保することが重要である。とくに電子ジャーナルについては，コンソーシアム等の新たな購入形態が模索されているが，冊子体と異なる契約条件が提示されていることもあり全学的な見地からの収集体制を確立する必要がある。

(イ)　学術情報の電子化への対応

利用者が電子化された各種の学術情報を入手するための情報環境を整備するために，マルチメディア・コーナーの情報機器を計画的に更新するとともに，利用者のための情報リテラシー教育に積極的に関与していく必要がある。さらに，本学で生成される学術情報の発信・提供機能の実現について検討する必要がある。

(ウ)　地域社会への貢献

地域の学術情報拠点として公共図書館との連携・協力を推進するとともに，来館した地域住民へ所蔵資料を直接貸し出すことにより，地域社会への貢献を一層拡大する必要がある。

(エ)　所蔵資料の効率的収納と施設整備

当館の資料収容力は約30万冊であり，所蔵資料の増加スペースからすると早晩書架の収容力の限界に達することが予想される。一方，図書館の増改築は昨今の財政状況からすると早期実現は困難と考えられる。そこで将来的に増改築が実現されるまでの間，保存すべき所蔵資料の再検討を行うとともに，館

内施設の整備と合わせて効率的な収納により対応する必要がある。

### ⑵ 学校教育総合研究センター

#### ① 設置の趣旨（目的），活動の方針・状況

学校教育総合研究センターは，学校及び地域社会と連携しながら，学校教育の実践に関する諸課題を把握し，本学教官，現職教員，学部・大学院学生及びその他の関係者と共同して，当該課題に関する臨床的・実践的・開発的研究を推進することによって，学校教育の改善，充実及び発展に寄与することを目的とする。また，学校教育総合研究センターは，教育実践研究部門と教育開発研究部門の２つの部門で構成されており，教育実践研究部門には，情報教育研究分野，教師教育総合研究分野，教育臨床研究分野の３分野，教育開発研究部門は，学習環境開発分野，カリキュラム開発研究分野，大学教育開発研究分野の３分野で構成されている。

#### ② 運営委員会

ア　設置の趣旨（目的）

学校教育総合研究センターの運営に関する基本方針を審議する。

イ　組織

学校教育総合研究センター長，教育実習委員会委員長，教育実践研究部門及び教育開発研究部門から選出された教授又は助教授，各部から選出された教官，附属学校長又は教頭の計12名

ウ　開催状況・主な審議内容

平成15年度は，２回開催し，次の事項について審議した。

第１回（平成15年４月23日開催）

平成15年度研究活動計画，教育活動及び事業活動計画

教育実践研究編集専門部会

第２回（平成16年３月16日開催）

平成15年度研究活動報告，教育活動報告及び事業活動報告

#### ③ 研究・教育・事業の概要

ア　研究関係

⑺　各部門・分野における研究プロジェクト

【教育実践研究部門】

〈情報教育研究分野〉

・情報活用の実践力に学習者の形成するメンタルモデルの差異が与える効果

・総合的学習「森と環境」を支援する地域連携志向のネットワークサービス

〈教師教育総合研究分野〉

・総合的学習のための総合的基礎研究プロジェクト－関川と水と生活と－

・子どもが自ら進んで社会的事象にかかわろうとする授業の展開

・新採用教員研修と大学学部の教員養成カリキュラムとの関係

〈教育臨床研究分野〉

・教育臨床における効果的なコンサルテーションのモデル構成と効果測定法の開発

【教育開発研究部門】

〈学習環境開発研究分野〉

・作品の構造に着目した映像視聴能力・映像製作表現能力育成プログラムの開発と評価

・授業映像記録に関するメタデータと VOD 配信システムの開発

・学習環境開発におけるヒューマンインターフェース改善のための研究

〈カリキュラム開発研究分野〉

・地域に根ざしたカリキュラム開発とスクールリーダーの役割について

・佐渡の未来を切り開く学力とカリキュラム開発に関する総合的研究

(イ) センター内全体で取り組む研究プロジェクト

・上越教育大学における教員養成モデルの構築

・情報教育実践に関する指導力養成のための現職教員研修支援システムの開発

(ウ) 他大学と共同で取り組む研究プロジェクト

・ＳＣＳを用いた大学間遠隔共同講義のプログラム開発と評価

・情報通信手段を用いた教員養成系大学院の教育方法モデルの開発

イ　教育活動関係

(ア) 学部

カウンセリング基礎実習，カウンセリング基礎演習，教育実地研究指導Ⅰ，Ⅲ，Ⅵ，教育実地研究Ⅱ，体験学習，ボランティア体験，総合的学習カリキュラム開発論，体験学習と総合学習，教育情報演習，情報科学概論，情報教育演習，情報教育論，情報教育セミナーⅠ，実践セミナーⅠ，Ⅱ，教育工学，教育メディア演習，情報メディアの活用，教育情報演習，総合学習セミナーⅠ，Ⅱ

(イ) 大学院

臨床心理基礎実習Ⅰ，Ⅱ，臨床心理実習Ⅰ，Ⅱ，発達臨床心理学特論，臨床心理研究セミナーⅠ，地域環境学習特論，地域環境学習演習，実践場面分析演習Ⅰ，Ⅱ，基礎研究セミナーⅠ，Ⅱ，応用研究セミナーⅠ，Ⅱ，情報教育特論，情報表現教育演習，情報教育研究セミナーⅠ・Ⅱ，教育工学特論，教育メディア特別演習，教育実践研究方法論特講，情報教育方法特論

ウ　事業関係

(ア) 公募研究の推進

(イ) 学部・大学院教育改善のための事業の推進

a　授業ビデオテープライブラリーの整備充実

b　授業記録電子ファイリングシステムの利用の推進

c　学部・大学院生に対する施設・設備・機器利用の指導

d　教員養成実地指導講義「教育機器の利用方法」の実施

e　フレンドシップ事業の事務局としての推進

f　教育実地研究Ⅱの改善と推進

(ウ) 附属学校園との連携の推進・支援

・教育実地研究Ⅱにおける学習指導案の作成指導

・体験学習Ｂ・Ｋにおける教育活動，行事等への参観・参加

(エ) 公開講演会等の実施

a　シンポジウム（新潟県教育委員会後援）

・期日　平成15年６月29日(日)

場所　上越教育大学講堂

演題「新教育課程２年目！トークイン上越　－子どもに確かな力をつける総合的学習を考える－」

ｼﾝﾎﾟｼﾞｽﾄ　嶋野　道弘（文部科学省視学官）

中野　重人（日本体育大学教授（前文部省視学官））

小林　毅夫（上越教育大学学校教育総合研究センター講師）

受講者　約250名

b　研究フォーラム：客員研究員・研究員講演会

・期日　平成15年11月15日(土)

場所　上越教育大学学校教育総合研究センター・平面活動型授業演習室

演題「より効果的なスクールカウンセリングの発展をめざして」

講師　中田　栄（愛知学院大学心身科学部助教授：当センター客員研究員）

宮下　敏恵（上越教育大学心理臨床講座助教授：当センター研究員）

受講者　約40名

c　公開講演会

・期日　平成15年12月13日(土)

場所　上越教育大学学校教育総合研究センター・平面活動型授業演習室

演題「人の視点から音声インタフェイスを考える：その問題と可能性」

講師　原田　悦子（法政大学社会学部教授：当センター客員研究員）

受講者　約15名

d　いじめ防止学習研修会・客員研究員講演会（上越市教育委員会共催）

・期日　平成16年２月20日(金)

場所　市民プラザ第４会議室

演題「判決に学ぶ学校教育のあり方－いじめと暴力のない人間関係を求めて」

講師　梅野　正信（鹿児島大学教育学部教授：当センター客員研究員）

受講者　約50名

e　マルチメディアセミナー

・期日　平成16年２月28日(土)

内容「e-Learningにおけるマルチメディア教材」

講師　日本ｱｲ・ﾋﾞｰ・ｴﾑ研修サービス（株）　青木　和彦

受講者　約10名

(オ)　施設・設備の利用サービス

a　保管する機器，教材，資料の貸出，閲覧

b　施設・設備の利用（ビデオ機器関係，コンピュータ関係）

c　公開講座，各種研究会，委員会及び会議等への施設・設備の利用

d　放送大学（ＣＡＴＶ放送）の視聴

e　エル・ネット（教育情報衛星通信ネットワーク）の利用

(カ)　教育・研究関係資料の収集・整備充実

a　当センター発行の研究物との資料交換の推進

b　授業研究及び情報関係図書・雑誌等の整備

(キ)　刊行物の発行

a　センターニュース№３

b　学校教育総合研究センター年報第３号（平成15年度版）

c　平成15年度客員研究員研究報告

d　教育実践研究第14集

e　センター要覧2003

f　インターネットによる情報公開（http://www.juen.ac.jp/educ/）

④　**今後の課題**

上越教育大学学校教育総合研究センターは二部門６分野で７名の専任教官とセンター 長，事務官（事務補佐員含む）２名で運営されている。専任教官は全学的なセンター運営委員会で承認された研究計画と事業計画に基づいて，その実施を中心に活動している。同時に，全員が学部及び大学院の研究指導を兼担で行っている。各分野の掲げるプロジェクト研究には客員教授との連携により充実した企画と運営につとめている。

もとより，当センターは教育実践的研究を具体的に推進・支援する，大学のフロントランナー的性格を持つ。事業の多くは，教育実践研究に必要な公開講座やシンポジウムの企画や，教員を主とした実践発表の場を設け，地域の要望に応える視点を持っている。

今後，独法化に向けて，当センターの大学における位置づけを明確にすることが必要である。大学の構造改革の中で，教師キャリア教育のニーズ調査を踏まえた企画運営評価を担当する部として，教師研修やスクールリーダー養成や，教育実践を支える地域貢献を視野において，センターの目標と役割を鮮明にする事が重要になる。そのためには，大学内外のスタッフを活用し，真に教育力向上に寄与するセンターとして，独自の企画運営が生きるシステム作りが課題である。

### ⑶　保健管理センター

①　**設置の趣旨（目的）**

保健管理センターは，本学における保健管理に関する専門的業務を行い，もって学生及び教職員の心身の健康の保持及び増進を図ることを目的として設置されている。

当センターの運営については，保健管理センター運営委員会の議を経て，所長が管理・運営を行っている。

②　**活動の方針・状況**

ア　方針

業務については定期健康診断を中心に，日常的には，内科・外科的に応急措置を行い，希望者に対して精神衛生相談を行っている。平成15年度の活動方針としては，学生及び職員の健康管理を重点に定期健康診断を行うとともに，特別健康診断として，例年同様に学部１年次学生全員に心電図検査を，学部４年次学生全員に心電図検査・血液生化学検査及び血液検査を実施した。

イ　活動状況

学生定期健康診断の受診率は94.9％で，前年度同様極めて良好である。また，職員については65.4％で，前年度とほぼ変わらない。学生に比べ職員の受診率が低いのは，人間ドック受診者（35.8％）が多いためと思われる。当センターの利用状況については，疾病・外傷の応急措置の利用は，前年度と比べ殆ど変わりがなかった。精神衛生相談については，前年度より相談者数が増加している。

③　**保健管理センター運営委員会**

保健管理センター運営委員会は，当センターの運営等に関する諸問題について審議を行う機関として位置づけられている。

委員長には保健管理センター所長が務め，委員には，学生委員会委員長，各部からの選出された教授又は助教授，学長が指名した教授又は助教授（カウンセラー），総務部長及び教務部長の10人で構成している。

ア　開催状況・主な審議事項

第１回：平成16年度学生の健康診断計画（案）について

平成16年度職員の健康診断計画（案）について

国立大学法人化に伴う学内規則の制定改廃（案）について

イ　審議結果により実施した事項

(ア)　学生の健康診断計画

学生の定期健康診断は，新学期開始と同時に実施し，検査の時間帯については，授業時間との関係から昼食時の休憩時間が利用できるよう配慮し，学生の所属する専修・コース，クラス別等に実施した。健診については，学生各自が記入した健康調査票を参考にして問診を行うとともに，聴打診などによる内科健診を学部生には１，４年次生に大学院生には１，２年次生に実施し，その他眼科及び耳鼻咽喉科のスクリーニング健診を実施し，異常所見者及び希望者については，眼科及び耳鼻咽喉科の専門医である各学校医により精密健診を実施した。胸部Ｘ線検査については，上越地域総合健康管理センターの検診車による間接撮影を行い，検診担当医が診断した。今年度より学部１年次生を対象にツベルクリン反応検査を実施した。他学年については希望者とした。精神衛生に関しては，新入生に対しＵＰＩ（University Personality Inventory：大学生精神健康調査）調査により所見の多かった学生について，面接・相談を行った。

教養基礎科目の体育実技科目として，学部１年次学生にマリンスポーツ，並びにスノースポーツを課しているが，当該実習中及び課外活動中の健康管理の観点から，特別健康診断として学部１年次学生全員に心電図検査を実施し，事故の発生防止に努力している。また，学部４年次学生全員に対し生活習慣病予防の保健教育・保健指導を兼ねて，心電図検査及び血液生化学（GOT・GPT・γ-GTP・血液脂質），血液検査を実施し，有所見者には所見に応じて事後措置を行った。

(イ)　職員の健康診断

職員の健康診断は，全職員を対象に胸部Ｘ線検査・自覚症状・身長・体重・視力・聴力・血圧・尿検査を実施し，受診対象年齢者及び希望者を対象に血液検査・心電図検査・便潜血反応検査・喀痰細胞診検査・胃検診・子宮がん検診・乳がん検診を行った。また，各業務従事者を対象とした運転手業務検診・給食従事者検診・VDT 作業従事者検診についても実施した。

(ウ)　利用状況等

当センターの利用については，職員の勤務時間内において常に対応できるようにしている。精神衛生相談は学生からの申込みがあった際カウンセラーがインテークを行い，その後，担当するカウンセラーに引き継いでいる。当センターの利用者総数は1,016人（学生847人，教職員169人）であった。

(エ)　精神衛生相談体制

精神衛生相談業務に関する申合せにより本年度のアドバイザーを新たに委嘱した。10月より新たに学外カウンセラーを委嘱し相談を開始した。曜日を決めた事，カウンセラーが学外者であるという事で学生が気軽に相談に訪れるようになった。精神衛生相談の窓口が拡大することにより学生にとってより充実したキャンパスライフをおくることができるものと思われる。

**④　今後の課題**

ア　学生支援体制（精神衛生相談）の強化・充実，カウンセリングルームの新設

精神衛生相談体制を新たに確立し，学内カウンセラー・学外カウンセラーの他にアドバイザーを設置し充実を図ってはいるが，相談を希望し「藁をも掴む思い」で保健管理センターの窓口にくる学生のためにも，専任の臨床心理士（カウンセラー）の配置，幅広い学生相談内容に対応できるスタッフの配置・研修等を含め精神衛生相談体制の強化・充実を図り，よりよい学生支援体制を目指すものである。将来的には，他の学内相談体制等との連携を含め，全学体制による学生支援体制が構築されるよう推進しなければならないであろうと考える。

また，当センターにはカウンセリングを専用とする部屋がなく，相談時間が重なった時には，休養用の

ベットが置いてある部屋でカウンセリングを行っている状態である。精神的に敏感になっている依頼者（クライアント）と密室状態の中でのカウンセリングとなるため，精神衛生上好ましくなく早急に専用のカウンセリングルームの新設（増設）による対応が必要である。

イ　電子媒体の整備

ホームページをはじめとした電子媒体の活用，電子カルテ化を含めた定期健康診断データの電子化，健康診断証明書の即日自動発行等の電子媒体の整備が必要であると考える。

今後とも，学生及び職員の健康管理に関する認識向上に努めるとともに，更に，当センターの活性化を図り学生及び職員の健康管理に万全を期す必要がある。

### (4) 情報処理センター

#### ①　設置の趣旨(目的)

情報処理センターは，学内共同利用施設として，本学の学術研究及び情報処理教育に資するほか，学内の情報処理の推進を図ることを目的として設置された。

#### ②　活動の方針・状況

情報処理センター運営委員会を必要に応じて開催することにより，センターの抱える諸問題の処理を，できるだけ運営委員会の審議結果に基づいて処理するよう努めると共に，構成する各委員を通じて，もしくは電子メール等で必要な情報を速やかに全学へ提供している。また，必要に応じて目的委員会や作業部会等を組織し，当面の課題に対応している。

#### ③-1　情報処理センター運営委員会

ア　運営委員会設置の趣旨(目的)

センター長の諮問に応じ，情報処理センターの運営に関する重要事項を審議するため設置されている。

イ　組織

情報処理センター長，各部から選出された教授または助教授1名，その他学長が指名した者若干名で構成されている。

ウ　開催状況

必要に応じて開催し，第59回から第61回まで3回開催した。

エ　主な審議内容及び審議結果

(ア)　業務支援システムの改良，アンケートシステムの開発

情報処理センター業務合理化の柱である「業務支援システム」への機能追加（アンチウィルスソフト入力チェック機能を追加，申請拒否されたものを再申請できるようにする，期限切れの端末の制御機能を加える等）と，「アンケートシステムの開発」について承認された。

(イ)　情報処理センター組織･体制の見直し

第60回委員会において，今後の情報処理センター組織･体制の見直し，情報処理センター規則，利用規程の見直しが行われ，センターの名称を「情報基盤センター」に改めること，「情報セキュリティポリシーの運用」を新しく機能として加えることが承認され，学生用のガイドラインとシステム管理者ガイドラインの二つの実施手順書が策定された。

(ウ)　NPO 法人上越地域学校教育支援センターとの相互接続

地域貢献事業との関係で所要経費を今年度のセンター経費から支出することにより，NPO 法人上越地域学校教育支援センターとの相互接続を実施することが承認された。

㈡ その他

上記の他，予算，センターの運営に必要な事項の審議等が行われた。

### ③-2 情報セキュリティポリシー策定専門部会

ア 設置の目的

第44回運営評議会（平成15年２月12日開催）において，本学における情報セキュリティポリシーの策定主体として，情報処理センター運営委員会規程第６条の規程に基づき，同運営委員会の専門部会として「情報セキュリティポリシー策定専門部会」の設置が承認された。

イ 組織

情報処理センター長，センター配置教官及びセンター長の指名する教官の計７名で構成され，センター長が部会長となる。

ウ 開催状況・主な審議内容

第44回運営評議会（平成15年２月12日開催）における設置の承認から，構成員の選出その他の準備期間を経て，平成15年４月25日から本格的に策定作業に着手した。平成15年度における開催状況・主な審議事項は以下のとおりである。

【第１回（平成15年４月25日）】 上越教育大学情報セキュリティポリシーの策定

【第２回（平成15年５月21日）】 上越教育大学情報セキュリティポリシーの策定

【第３回（平成15年７月２日）】 上越教育大学情報セキュリティポリシーの策定

【第４回（平成15年７月25日）】 ①上越教育大学情報セキュリティポリシーの策定
②上越教育大学情報セキュリティ講演会の開催

【第５回（平成15年10月１日）】 上越教育大学情報セキュリティポリシーの策定

【第６回（平成15年10月15日）】 上越教育大学情報セキュリティポリシーの策定

【第７回（平成16年１月20日）】 ①情報セキュリティポリシーの管理運用に対応した情報処理センターの組織・体制（情報処理センター規則等）の見直し
②情報処理センター利用規程等の見直し
③実施手順書の策定

エ 審議結果により実施された事項（企画）

①学長による総合情報セキュリティ対策実施宣言（平成15年11月５日実施）

②上越教育大学情報セキュリティポリシー（平成15年11月５日運営評議会で，今後，国立大学法人化後の本学組織構成に対応した修正を加えることを条件に承認し，平成16年４月１日から運用開始予定）の策定

③上越教育大学情報セキュリティ講演会（平成15年12月３日開催）

### ④ 今後の課題

ア 遠隔教育システムの導入

平成16年度の教育特別設備費で「遠隔教育教材開発・学習環境システム」を導入する予定である。上越教育大学の中期計画の中でも，大学院修士課程における現職教員研修について，教員の多様性に応じて地理的・時間的制約を超えた研修が可能となる遠隔授業システムとこれを活用した履修制度の導入を具体的に検討することとなっている。このためはどのような遠隔教育システムを導入すればよいか，今後，詳細に検討して導入する。

イ 学生のＰＣ所有の推進・利用環境の整備

教育の情報化の進展に伴い，教員として必要になる情報活用能力を高めるためには，大学が学生向けに設

置している教育情報訓練室等の共用PCによる利用だけでは不十分であると考えられる。より高い情報活用能力を習得するためには，たとえば，大学側から必要なPCの仕様を提示し，それを学生に購入させる等により，学生に個人専用のPCを所有させ授業等で活用していく必要がある。その際，無線LANなど情報環境の整備と学生へのサービスの提供の方法（ヘルプデスク，学内への対応窓口の設置等）を検討する必要がある。

ウ　情報セキュリティ監査の実施・情報セキュリティポリシーの充実

インターネットという新しいメディアの恩恵を受けるためには情報セキュリティ対策を整備し，コンピュータやネットワークに関する情報セキュリティ対策を徹底的かつ継続して行なう必要がある。平成15年度に情報セキュリティ対策の根幹となる「情報セキュリティポリシー」を策定し，平成16年4月1日から情報セキュリティポリシーに定める組織を設置し，総合的かつ継続的にセキュリティ対策を実施してゆくこととしたが，いかにこれを充実し，定着して監査に耐えるようにして行くかが課題。

エ　情報基盤センターの組織・運営体制の整備

情報処理センターの機能は「情報を処理する」ことではなく，「学内情報基盤の管理・運用」が中心となっており，事務局システムや附属学校システムの導入に際しても，ネットワーク面の調整の必要性から指導的立場で関与せざるを得ず，今後も組織･体制を早急に整備して，各種計画に参画しつつ，学内情報基盤の整備を行ってゆく。

オ　情報教育関連

学際的な分野や二分野以上にわたる大学全体の授業科目について，責任体制を明確にし，授業内容の水準維持等を図るため，教職科目について担当する「教職科目関連運営部会」が新たに設置された。平成17年度より情報教育のための専門部会をこの「教職科目関連運営部会」に移行することを検討する。

### (5) 心理教育相談室

#### ① 設置の趣旨（目的），活動の方針・状況

上越教育大学心理教育相談室（以下，心理教育相談室）は，心理臨床に関わる相談に対する社会的要請に応じるとともに，本学の大学院生等の心理臨床に関わる相談活動に関する教育訓練を行うことによって，心理臨床における実践的な教育及びその研究の推進に寄与することを目的として平成12年12月に開所した。

活動の方針としては，以下の５項目を中心とした業務を円滑に進めることとしている。

ａ）心理臨床に関わる相談に関すること，ｂ）心理臨床及びその周辺領域に関わる学術調査・研究及びその成果の発表と刊行に関すること，ｃ）臨床心理学の実践的活動とそれに基づく理論の体系化に関すること，ｄ）大学院学校教育研究科学校教育専攻発達臨床コース・学校カウンセリング領域の臨床心理実習の指導に関すること，ｅ）学校及び地域社会などへのコンサルテーションに関すること等である。次に，これらの業務における本年度の状況について述べる。

ａ）心理臨床に関わる相談に関すること

平成15年４月～平成16年３月までの相談室の利用状況は次の通りである。まず，新規相談の受理数は50件であった。また，学齢・年齢等の区分による延べ相談件数は，就学前41件，小学生357件，中学生245件，高校生161件，大学生11件，社会人97件，成人208件で，総計1120件であった。以上のように，相談対象は，小学生を中心とした学齢期が多いが，社会人等の相談も増加している。平成12年12月の相談室の開所以来，相談の申し込みが増加し，８名の相談室相談員が担当する相談業務も増加の一途をたどっている。また，相談業務の内容としては，問題を有している本人に対して行われる継続的な面接である「臨床心理面接」（482件）が最も多く，次いで，保護者等を対象として行う「心理教育相談面接」（383件），幼

児や児童を対象として行われる継続的な面接である「遊戯面接」(195件)，問題を有している人に関わっている人（教員など）への助言等の面接である「教育相談面接」(69件）などが行われた。

今後も，相談件数の増加が予想されるが，このような地域のニーズに対応するためには，スタッフや相談施設の充実が必要となる。

b）心理臨床及びその周辺領域に関わる学術調査及びその成果の発表と刊行に関すること

平成16年３月に，相談室の紀要（「上越教育大学心理教育相談研究」第３巻第１号）を刊行し，相談室スタッフを中心とした執筆者が９編の研究論文を掲載した。また，上越教育大学心理教育相談室の概要および平成15年度修士論文題目一覧及び論文概要を掲載した。相談室の紀要は，今後も本相談室の研究成果を公表するとともに，上越地域を中心とした専門機関や施設等との研究交流や連携を深めるための情報誌としても期待される。

c）臨床心理学の実践的活動とそれに基づく理論の体系化に関すること

平成15年度は，「臨床心理実習のカリキュラム開発に関する実践的研究」として，昨年度から継続して，上越教育大学研究プロジェクト経費を取得し研究を進めた。本研究では，臨床心理士養成のため，臨床心理基礎実習および臨床心理実習を実施しながら，望ましい臨床心理実習カリキュラムについて検討し，カリキュラム開発を行うことが目的とされた。平成13年度より実施されている臨床心理基礎実習および臨床心理実習の授業内容を洗練し，カリキュラム開発を行ってきた。その内容の一部は，平成15年7月の研究プロジェクトセミナーなどを通じて，本学大学院生に対して還元した。臨床心理の教育・訓練とその効果について検討した研究は少ないため，今後もカリキュラム開発や効果的な教育方法の検討が精力的に進められる必要があろう。

d）大学院学校教育研究科学校教育専攻発達臨床コース・学校カウンセリング領域および臨床心理学領域の臨床心理実習の指導に関すること

平成15年度は，当領域の大学院生（１年17名，２年14名，研究生４名；計35名）に対する臨床実習指導を行った。実習の中心は，心理教育相談室における臨床心理基礎実習で，学生は「相談研修生」として登録した後に，模擬面接実習，相談場面の観察・陪席，ケースカンファレンスを経て，心理教育相談室に来所するケースに対して，スーパーバイザーである相談員の指導のもと，相談業務を行ってきた。また，精神神経科等の専門病院，家庭裁判所，児童相談所，保健所，少年院などでの短期間の実習も行った。以上のように，発達臨床コース・臨床心理学分野の学生は，２年間の間に，臨床心理基礎実習及び臨床心理実習を中心とした“実務実習”が課せられ，これらに費やす時間は，２年間を通してほぼ恒常的に受講するもので莫大になる。したがって，それらを責任を持って指導する８名の教官が担う，教育研究指導も莫大なものとなっている。さらに，修士論文の作成が必修となっており，学生は，２年間にわたりほぼ毎週課せられている臨床心理実習を行いながら臨床心理学研究を進めなければならず，学生及び指導教官にかかる負担が増大していることも事実である。今後，“臨床心理士養成”に特化した専門大学院構想を念頭においた教育指導態勢が必要となるだろう。

e）学校及び地域社会などへの支援業務

心理教育相談室のスタッフは，新潟県教育委員会から委嘱されるスクールカウンセラー業務を始めとして，地域市町村教育委員会や教育センター等が主催する教員研修会講師を担当しており，地域における心理臨床へのニーズの高まりを反映している。今後も，このような地域からの支援の要請は増加するものと思われ，８名のスタッフの業務の負担が予想される。今後，心理教育相談室を核として，地域の専門職や，教育相談業務等の経験を有する教職員との連携を密にして，“非常勤相談員”なる制度による専門的社会資源の有効活用をめざした計画の策定が急務となろう。

② **運営委員会設置の趣旨（目的），組織，開催状況，主な審議内容，審議結果より実施した主な事項（企画），今後の課題等**

平成15年度は，「心理教育相談室運営委員会」が３回開催された。

第１回運営委員会（平成15年５月）では，心理教育相談室の運営及び予算，臨床心理士に関わる教育課程，相談研修生の利用及び種別変更，専門部会の設置等について，配付資料に基づき説明され承認された。

また，臨床心理学コースへの改変に伴う指定協会への変更申請を行ったが変更届の提出のみで，平成19年３月31日までの指定大学院の認可を受けたことが報告された。

第２回運営委員会（平成15年10月）では，心理教育相談室の運営及び予算，相談研修種別変更，臨床実習（病院実習），臨床心理士養成に関する指定大学院連絡協議会の参加報告などについて，配付資料に基づき説明され承認された。

第３回運営委員会（平成16年３月）では，相談研修生の種別変更，相談室相談員等人事，相談室関係規則の改正について，配付資料に基づき説明され承認された。

### ⑹ 附属実技教育研究指導センター

① **設置の趣旨（目的），活動の方針・状況**

生涯にわたる人間教育の基礎を培う初等教育教員には，各教科・領域の専門的知識は勿論，すべての教科・領域に関わる優れた実践的指導力が要請されているが，特に，実技を伴う音楽・美術・体育・外国語及び書写書道の分野では，それらの 実技指導能力の向上が求められている。このような社会的要請に応えるために，当該センターは，音楽・美術・体育・外国語及び書写書道の各分野に係る教育研究及び指導技術の開発を行い，併せて，それらの成果を具体的に教育運営に生かす実践的指導能力を身につける場と機会を，学生たちに提供することを目的として，設置された。

② **運営委員会設置の趣旨（目的）**

センター長の諮問に応じ，センターの管理運営の基本方針に関する事項等を審議するために，運営委員会が設けられている。

ア　組織

当該センターの教員構成は，８名の教官（音楽教育分野２名，美術教育分野２名，体育教育分野２名，言語系教育分野２名）が配置されている。

運営委員会の組織は，センター長及び音楽教育分野，美術教育分野，体育教育分野，言語系教育分野から各１名ずつ並びに各部から選出された５名の委員，合計10名の委員で構成されている。

イ　開催状況

平成15年度の運営委員会は，平成15年９月25日㈭に開催した。

ウ　主な審議事項

運営委員会の審議事項は，センターの管理運営の基本方針に関する事項，実技教育のあり方の研究・具体的指導技術の開発に関する事項，実技教育の企画・運営に関する事項及び学生の実技指導に関する事項とされている。

平成15年度の審議事項の内容は，平成15年度センター運営予算及びセンターセミナー実施計画について審議された。

エ　審議の結果により実施した主な事項（企画）

平成15年12月６日㈯に尾陽木偶師　九代　玉屋庄兵衛先生を講師にお迎えして「ものづくりの原点－からくり　玉屋庄兵衛－」と題しセミナーを開催した。

オ　今後の課題

(ｱ)　大学の理念・目的に沿ったセンターの目的（機能）の見直し・将来構想

従来どおり，学生の実技能力の向上とともに，実技指導能力の向上にも，より一層の努力が必要である。また，当該センターに関わる施設設備及びセミナーを地域にも開放し，生涯学習を支援できるようなシステムを構築していくことも考えられる。

(ｲ)　センターの教育研究・管理運営の状況

各分野において，施設設備の改善に努力しているが，学生がより使いやすく，より効果の期待できるような充実，更新が求められている。

**(7)　附属障害児教育実践センター**

**①　設置の趣旨（目的），活動の方針・状況**

本センターは，障害児教育に関わる教育臨床等を通して院生の実践的指導力の育成と向上を図るとともに，教育相談や指導者研修により地域の教育・福祉に資することを目的としている。

本センターは上記の設置目的に照らして，「臨床」（教育相談，教育臨床），「研究」，「研修」（指導者研修，教材教具の開発）の３部門５領域に関わる事業を展開している。

以下，本年度の活動状況をまとめる。

ア　教育相談・教育臨床活動

年間相談件数は64件であった。そのうち本年度新たに教育相談を開始した新規相談件数は20件あり，残り44件が継続相談である。全体では昨年度より２件の増加であった。障害種別でみると，「知的障害・ダウン症」が最も多く，新規・継続合わせて21件であった。ついで「難聴・聾」が新規・継続合計で11件であった。なお，「難聴・聾」は聴力検査のため本センターを訪れる場合が多い。年間相談・指導回数は新規・継続の合計で637回であった。そのうち継続指導の回数は569回あり，継続的に指導するケースが大半を占めている。なお，昨年度の合計は783回であり本年度は回数が減少した。年間相談・指導時間の合計は1027.5時間であり，１回の相談・指導時間の平均は1.6時間であった。

イ　研修活動

平成16年２月７日㈯に第67回障害児教育実践センターセミナーを開催した。講師は畠山卓朗教授（星城大学）で題目は「障害のある人のＱＯＬと自立を高める支援機器の活用と今後の課題：コミュニケーション支援を中心に」であった。また，平成16年２月23日㈪に第68回障害児教育実践センターセミナーを開催した。講師は藤田継道教授（兵庫教育大学）で題目は「特別支援教育への行動分析的アプローチ」であった。

次に，本センターで開催された研究会・研修会は以下のとおりである。上・中越視覚障害に関する講演会及び教育相談会（7/3），上越地区特殊教育懇談会（7/16），新潟県認定講習会（７～８月），地域貢献事業検査法講習会（8/1），平成15年度附属学校初任者研修会（8/5），上越障害児教育研究会主催研修会（9/17），上越自立活動者研究会（隔月），通級担当者学習会（隔月），上越青年の休日を充実させる会（月１回），新潟県特別支援教育学習会（7/1・2/21）。

ウ　地域貢献活動

新潟県から３名（期間１年），鳥取県から３名（期間６ヶ月）の研究生を受け入れた。研究生にはそれぞれ指導教官がつき，それぞれの研修テーマにもとづいて指導を受けるとともに，障害児教育講座の授業を聴講し，臨床実習へ参加した。

他に以下のような活動を行った。新潟県就学指導委員会委員，新潟県教育職員認定講習会講師，新潟県初任者研修講師，新潟県内特殊教育諸学校職員研修会講師，新潟県教育相談運営会議委員及び教育相談員，新潟県保健所療育教育講師，上越障害児教育研究会顧問・講師，上越市こども発達相談室講師及び保育所巡回

指導，新井市障害児通園事業「ひばり園」の職員研修講師，大潟町第２保育所保育士研修講師，上越市障害者福祉推進連携協議会会長，同障害児部会長，同社会参加部会委員，三和村障害者福祉計画策定委員，富山県宇奈月障害児を持つ親の会教育相談講師，長野聾学校校内研修講師，松本聾学校校内研修講師，新潟県障害のある子どものための教育相談体系化推進事業運営会会長。

エ　研究刊行物

上越教育大学障害児教育実践センター紀要第10巻を平成16年３月に刊行した。

オ　センターの利用状況

(ｱ)　教育臨床実習

障害児教育講座の授業科目「障害児教育臨床実習Ⅰ・Ⅱ」及び「障害児応用臨床実習Ⅰ・Ⅱ」はその多くを前述の教育相談活動と関連づけて本センターで実施している。上記４科目は，盲，聾，養護学校それぞれの分野で実施するため，週当たり合計12コマの教育臨床実習が組まれた。教育臨床実習では臨床後に本センター内のビデオ分析装置などを活用して行動分析を行い，ケースカンファランス室にてカンファランスを行った。このほかにも，センター及び障害児教育講座の教官が教育臨床実習とは別にセンターの施設設備を利用して個人的あるいは公的に依頼された教育相談や指導を実施した。

(ｲ)　実習授業

本学大学院の必修科目である「実践場面分析演習」（障害児教育）では，地域の養護学校等において授業を実施し，本センターのＡＶ機器を活用して授業分析を行った。授業科目「障害児心理・生理検査法」では本センターにある教材や検査用具，施設設備を活用して様々な検査法や心理学的実験を実施した。

(ｳ)　講義やセミナー

情緒障害児指導法，障害児研究法，障害児研究セミナーなどの講義・セミナーが本センター研修室及びカンファランス室を利用して実施された。

**②　運営委員会設置の趣旨（目的），組織，開催状況，主な審議内容，今後の課題等**

ア　障害児教育実践センター運営委員会は，主に本センターの管理運営の方針に関する事項，障害児教育における教育実践のあり方の研究及び具体的指導技術の開発に関する事項，障害児教育における教育実践の企画及び運営に関する事項，学生の実践指導に関する事項を審議する目的で設置されている。

イ　平成15年度における本運営委員会の委員は本センター長の外に，本センター教員１名，障害児教育講座教員２名，第一部から第五部までの教員１名，第二部心理臨床講座１名（学長指名）で組織された。

ウ　運営委員会

平成15年度の障害児教育実践センター運営委員会が7月10日に開催され，平成15年度の事業計画，同予算について協議された。

エ　センター紀要編集委員会

平成15年7月15日に障害児教育実践センター紀要編集委員会が開催され，センター紀要第10巻の編集について協議された。

**③　その他**

平成15年９月22日に東北大学で開催された日本特殊教育学会第41回大会の折りに，「国立大学障害児教育関連施設・センター連絡協議会」が開催され，本センターから惠羅修吉助教授が参加した。

平成16年２月１日付けで丸山昭生氏が本センター講師として着任した。

## (8) 附属小学校

### ① 本校の活動

ア　国立教員養成系大学の附属小学校として公立学校と同じく，文部科学省の定める学習指導要領に則って義務教育を行う。

イ　上越教育大学の改革構想を踏まえて，教育の新しい理論や方法について大学と一層連携して研究を行う。

ウ　上越教育大学学校教育学部学生の教育実習を指導し，次代を担う教育者の育成に努める。

エ　大学と共同で行う実証的研究のほかに，本校の主体的立場から研究主題を設定して，教育活動に関する各種の研究を行い，地域の教育現場に寄与できる資料を提供する。

オ　教育誌「教育創造」を発刊し，本校教官の研究をはじめ県内外の教師の研究発表の場とする。

### ② 平成15年度の活動方針

ア　教育目標

生き生きとした子供

イ　教育目標具現のための方策

(ア)　子どもが自ら学びをつくりひろげる教育活動を推進すること

(イ)　事前指導に重きをおく生徒指導を推進し，学級経営を充実させること

(ウ)　開かれた学校づくりに努め，学校への保護者の理解・協力を一層得ていくこと

### ③ 活動の概要

ア　子どもの学びに着眼した教育課程開発の推進

学びを生成する子どもの姿に着眼し，そうした姿を生み出す要因分析・検討を通した教育課程開発を進めてきた。

(ア)　研究を進める基本的な考え

a　教師一人一人が日常の教育実践を子どもの姿から問い直し，学びに即した教育活動を構想・展開する。

b　実践レポートの集積・検討を通し，継続的・複眼的にカリキュラムを評価改善し，教育課程を改善する。

(イ)　研究の方法

a　教諭一人一人のもつ問題意識をもとに実践を継続しながら，その取組の状況を実践レポートに整理した。

b　自らの主張を明確にした授業研究を実施し，外部評価を取り入れながら，実践者の考えを多様な観点から検討し，評価を行った。

c　大学教官には研究協力者として，理論面での整理の仕方，授業展開の在り方等について指導を受け，カリキュラムの評価改善を行った。

d　子どもの日々の記録，調査活動のまとめ，作文，作品等を分析し，集積しながらその変容をとらえ，継続的な指導に生かした。

e　５月30日に春の研究会，11月28日に冬の研究会と年２回の研究会を開催し，研究の一端を広く学校関係者に紹介するとともに，様々な意見や考えをもとに研究の深化を図った。

イ　共通理解に基づく生徒指導体制の確立と保護者の協力体制

子どもを見つめ，その実態をとらえながら機を逸しないように支援・指導していくことが生徒指導の基本であるとの認識に立って，情報交換を密にし全校体制で取り組む。とりわけ，予防的な指導に力を入れ，事前の，早めの情報収集と情報交換を行う。

(ア)「ひとりぼっちにならない」を合い言葉に，異学年交流活動の構成，気になる子どもを見逃さない体制づくりに努めてきた。

(イ) 子ども一人一人の結び付きを深めるという立場から，プロジェクト集会，サークル活動を設定した。

(ウ) 保護者との連携を密にするため，連絡帳や学年だより等を有効に活用したり，学級ＰＴＡ，学年懇談会等を実施したりして理解を深めてきた。

ウ　体験的な活動への家庭や地域の人々の協力

子どもは体験を通して様々なもの・人・ことと出会い，自らの学びをつくりひろげながら学ぶ喜びを実感してきた。こうした体験を中核にした教育活動を構成するために，次のことに取り組む。

(ア) 年度当初に各学級担任がカリキュラム概要を保護者に説明し，年間の活動の流れと共に，具体的なかかわり方を提示し，保護者と協働して活動に取り組んだ。

(イ) 老人ホームや養護施設への訪問等，地域の施設やサークルに依頼し，子どもの活動が広がる仕組みを整えた。

(ウ) ＰＴＡが主催する子どもフォーラム，ウィークエンド体験事業等，休日を利用したふれあいの場を設け，保護者との連携を密にした。

エ　教育誌「教育創造」の発行

「子どもの学びをつなぐ」を特集テーマに，「学力と評価－説明責任にどう応えるか－」をシリーズテーマに，大学教官の論文，附属小学校の主張や実践例，県内公立小・中学校の実践等で編集，発行する。

**④　自己点検・評価結果**

ア　教育課程開発にかかわる成果

(ア) 各担任が作成する「学級カリキュラム」に基づく実践が確実に実施され，実践を通してカリキュラムの修正や付加が継続的に行われた。

(イ) 外部評価を取り入れたカリキュラム評価改善のシステムを確立し，その成果の一端を研究紀要「Curriculum」にまとめた。

(ウ) 30分間モジュール授業，英会話・からだみつめ（健康教育）の単元開発を継続し，特色のある教育課程編成やその運用の改善を図った。

イ　生徒指導体制の確立にかかわる成果

「ひとりぼっちにならない」を合い言葉に，異学年交流活動の構成，気になる子どもを見逃さない体制づくりに努めてきた。また，保護者，関係機関の協力を得ながら，全職員で生徒指導に取り組んでいる。こうした取組の成果をまとめると，次のとおりである。

・生徒指導部を中心に子どもの生活にかかわる情報を収集し，円滑な連絡・相談・指示がなされた。

・孤立してしまいがちな子どもへの声かけや，休み時間における子どもの活動の把握等，心のサインを見逃さない体制が確立された。

・保護者との情報交換が円滑に行われ，連携した取組がなされた。

ウ　実践的な指導力の育成を目指す教育実習にかかわる成果

教師への道は，現状の採用状況からいってますます狭まってきている。しかし，教育実習を通して，ほとんどの実習生は教師になることへの期待を膨らませ，子どものすばらしさを実感して大学へ戻っていく。

また，年間を通した継続的な教育実習体制により，上越教育大学と附属小学校との研究・協力体制が整備され，実践的な指導力を育成する環境が整えられた。

エ　家庭，地域との連携強化

総合単元活動，総合教科活動，心の活動，学校行事等に対する保護者や地域の人々の積極的な協力が得ら

れ，成果を得ている。具体的には動物飼育や畑作への農家の人達や農業共同組合等の協力，学校行事に対するＰＴＡの総力を上げての協力などがあり，教育活動の充実のために大きな力となっている。年度始めや準備段階で活動の意図や計画を的確に説明してきた結果と考える。

今後も，より一層，子どもの具体的な姿が見える教育活動を通して，家庭・地域との連携を図る。

オ　職員会議及び学校評議員会にかかわる成果

(ｱ) 校長の意思決定をもとに，共通理解に基づく学校運営が円滑に実施されるよう，定期的に年５回職員会議を開催し，共通理解を図ってきた。こうした共通理解を基盤に，学校生活のあらゆる場面で「生き生きとした子供」の姿がみられた。

(ｲ) 教育に関する識見を有する方から，国立教員養成系大学の附属校としての使命を果たす学校運営の在り方について意見を聞く学校評議員会を年２回開催した。独立大学法人化後の学校運営にかかわる数多くの情報を得ることができた。

### (9) 附属中学校

#### ① 設置の目的

ア　義務教育の学校として，教育基本法等の教育関係法規に基づき，生徒の心身の発達に応じた中等普通教育を行う。

イ　上越教育大学学校教育学部学生の教育実習（参観・参加・実習）の場として学生の指導に当たる。

ウ　大学と一体となり，教育理論及び実践に関する研究を行う。さらに，中学校独自の立場から研究・実践し，地域の教育現場に寄与できる資料を提供する。

#### ② 学校運営の方針

ア　義務教育の学校として

(ｱ) 教育目標

「民主社会の発展に寄与する，人間性豊かな，たくましい生徒を育成する。」

a　美しいものや崇高なものに感動する心をもち，真理を不断に追求しようとする生徒を育てる。

b　広い心と向上心をもち，求めて共に実践する生徒を育てる。

c　自ら目標をもち，気力，体力の充実に努める生徒を育てる。

(ｲ) 教育目標具現のための方策

a　教育課程や学習指導などの教育研究の推進

b　教員の資質向上のための研修の充実

c　多面的な生徒理解とふれ合いを大切にした生徒指導の確立

d　家庭・地域との連携の強化

イ　教育実習受入校として，学部学生の教育実地研究を指導し，次代を担う教育者の育成に努める。

(ｱ) 基礎的な資質を具備した４年次学生の教育実習

第１～３年次の教育実地研究の経験を積み，中学校教員の免許状の取得を希望する学生の教育実地研究の指導を行う。

a　中学生の発達特性についての的確な実態把握と理解

b　中学生の心理を生かし，自己指導能力を高める生徒指導の研究と実践

(ｲ) 大学学部生の講義を担当したり，卒業論文や修士論文作成に協力し資料を提供する。

a　３・４年生を中心とした実地研究の講座の担当

b　アンケート協力や授業データの提供

ウ　研究校として大学教官と連携を図り，教育に関する実証的研究を推進する。また，教育活動に関する各種の研究を展開し，地域の教育現場に寄与できる資料を提供する。

(ア)　大学教官からの指導

(イ)　大学教官への資料提供

(ウ)　大学教官との共同研究

(エ)　年１回の教育研究協議会の開催と研究物の出版

(オ)　学校訪問の受入

**③　管理運営組織と教員配置の状況**

ア　管理運営組織

(ア)　研究を中心に据えた組織の編制

(イ)　教育活動が円滑に運営される組織の編制

(ウ)　ＰＴＡ，地域に開かれた組織の編制

イ　教員配置数

(ア)　校長，副校長，教頭，教諭14名，養護教諭１名

(イ)　講師６名

**④　実施した主な事項**

ア　教育課程の開発研究

昨年度より「自分を知り，世界とのかかわりを深める教育の創造」を研究主題として，教育課程研究を進めている。第２年次の今年度は，10月10日(金)に約400人の参会者を得て研究協議会を実施した。

イ　国際交流の推進

今年度は，８月22日(金)～25日(月)の三泊四日の日程で，韓国ソウル市の水洛中学校へ，生徒17人，引率３人の計20人が訪問し，交流を深めた。水洛中学校の生徒と一緒に授業に参加したり，受入れ家庭宅にてのホームステイや史跡見学体験するなど，充実した４日間を過ごした。

ウ　教育実習の実施

学部４年生及び大学院生合わせて38名の実習生を迎え，５月20日(火)～６月６日(金)の３週間実施した。

**⑤　自己点検・評価結果**

ア　大学の理念・目的に沿った附属中学校の目的（機能）の見直し・将来構想

(ア)　大学との連携

当校の研究の面でも大学の講座の面からも，大学の各研究室と当校との間に緊密な連携が図られている。また，当校教官が中心となって活動している地元の研究サークルの指導者として，大学教官からも積極的に月例会等に参加してもらっている。

大学の附属学校として，大学教官による中学校における授業や大学院生の研究授業の受入を実施している。また，学部生や院生の卒論・修論にかかわるアンケート等の資料取りに協力している。

大学教官と当校教官の協同研究（プロジェクト研究）が幾つかの教科で行われている。

(イ)　教育実習

教科によって実習生の人数にばらつきがあることと，当校教官数との兼ね合いから，実習生によって担当時数の片寄りが予想されたので，実習生同士のティーム・ティーチングによる実習を取り入れた。

今後，大学改革に伴い教育実習も大きく変わろうとしている現状を踏まえ，実施時期の検討と実習カリキュラムの開発を，大学と連携し，さらに進めていく必要がある。

⑼ 学校訪問の受入

研究の成果発表の場である教育研究協議会に参加できない教員，教育関係者に対して，学校訪問を受け付けている。県内はもとより，全国各地から年間を通して，来校者が絶えない。本年度は校舎改修工事によりやや少なく，40人程度であった。

⑽ 学校説明会の実施

児童数の減少に伴い，当校に入学を希望する児童の数も年々減少傾向にある。従来，ＰＲ活動を特別行わなくても定員を確保できたが，このままの状態が続けば定員割れを起こすことも予想される。そこで，広く当校の教育活動について理解を図り，関心をもってもらうことを意図して，児童と保護者向けの学校説明会を公立小学校，附属小学校に分け，担当者を１名から３名に増やして実施した。

イ　附属中学校の教育研究・管理運営の状況

⑴ 教育研究の状況

ａ　研究の概要

・研究主題　「自分を知り，世界とのかかわりを深める教育の創造」

・研究内容

前年度，教科と未来ゼミを一連の流れで行ったことの成果を確認した私たちは，「自分を知り，世界とのかかわりを深める」ため，平成15年度は更に両者の関連を強め，教科と未来ゼミを一つのまとまりとした新たな学びの場としての大教科である総合社会科，科学技術科，生活健康科を教育課程に位置付けた。一方，これからの時代を生き抜く上で特に重要な力である情報活用力や表現力，英会話力を重視することが必要であると考えたことから，これらを身に付ける学びの場として三つの大教科，情報活用科，表現創造科，オーラルアクティビティを取り入れた英語科を位置付け，より切実感をもって学ぶことができるようにした。

ｂ　教育研究協議会の開催

10月10日に行った研究協議会では，上記の大教科を中心に，国語，数学，人生ゼミによる計14の授業を公開した。例えば総合社会科は，市町村合併の問題を，地理・歴史・公民野視点からとらえながら，調査活動を生かして新生「上越市」の姿を追究した授業を行った。また，科学技術科では，グループごとに多様な方法でミニ発電所を製作したことを基に，様々な発電方法の特徴や問題点について話し合う授業を公開した。

その後の協議会では，「新しい教科教育の在り方について」と題し，教科のそれぞれの大教科や教科等のねらいや大事にしたい学力について，実際の授業を基にして活発なご意見をいただいた。

⑵ 管理運営の状況

ａ　研究推進のための体制づくり

・週１回の研究委員会と研究会議の実施

４年次研究の２年次の研究を，４人の教官からなる研究委員会を中心に全教官で推進してきた。研究内容を毎週月曜日に研究委員会で検討し，それを木曜日の全教官出席の研究会議に諮る体制を取っている。

・大学教官からの指導の場の設定

当校の研究については，日ごろから本学教官に指導を仰いでいるが，特に研究協議会開催に向け，指導をいただく場を設定している。本年度は，４月に１回目の打合会を行い，その後，随時指導を受けるようにした。

・研究協力体制の整備

当校の研究推進に当たり，大学の教官だけでなく，教育事務所の指導主事，公立学校の教員からも指導を受ける機会を設けている。

b　情報教育環境の整備

生徒は，総合社会科，科学技術科，表現創造科などの大教科や選択教科の授業で，インターネットを通じて検索や資料収集を行っている。また，情報活用科の授業では，電子メールの送信や，ホームページの作成を取り入れている。

ウ　附属中学校の活性化・充実のためのこれまでの取組

附属中学校の伝統をふまえ，教育活動のキャッチコピーを「確かな学力，響く歌声，あふれる探求心」と定め，下に述べる取組を行った。

(ア)　潤いと達成感のある学校運営の工夫

授業時数確保のため，ともすれば生徒にとって潤いのない学校生活になりがちであるが，当校では時間割の工夫等で授業時数を確保し，行事をできるだけなくさないように努めている。伝統となっている年２回の校内合唱コンクールや体育祭，学習成果発表会，スキー合宿等を実施し，生徒の活力を引き出し，達成感を味わわせることができた。

(イ)　大学教官の支援を受けた「附属中学校，わくわく大学ウィーク」の実施

生徒の知的好奇心や進路意識を高めるねらいを持って，夏季休業日中に，大学教官の専門研究に触れる「特別授業」を当校生徒に実施いただいた。昨年度から取り組まれた事業であったが，今年度は期間を１週間に延長し大学挙げての支援を受け，受講生徒の多くは新鮮な感動を持ち，所期の目的に近づくことができた。

(ウ)　総合的な学習と関連を強くした修学旅行

当校の修学旅行は，総合社会科（社会科と総合的な学習の時間を組み合わせた大教科）と密接な関連をもって計画・実施されている。２学期後半から始まった平和・人権学習の総仕上げとして，沖縄・長崎への修学旅行を実施した。事前学習，現地学習の中で生徒一人ひとりが自分の課題を追求する姿は，まさに「あふれる探求心」を具現していた。

(エ)　国際理解教育の推進

平成６年度から始まった韓国ソウル市の中学校との交流は10年目を迎えた。本年度は８月22～25日に生徒17人・引率教師３名で訪問した。訪問先の水洛中学校では，授業や給食での交流，ホームステイなどで言葉の障害を乗り越えた親密な触れあいができた。また，史跡見学を通して，異文化を受け入れる態度を培うことができた。

(オ)　家庭・地域との連携の強化

a　PTA の発案になる「アカペラ大会の実施」，「親子での学校整備活動」は，家庭と学校の連携の強さを物語っている。

b　総合社会科の「市町村合併」をテーマとした学習など，多くの大教科の学習において，積極的に近くの市立図書館を始めとする施設設備の利用や施設への訪問取材を行っている。また，地域の人材を活用した講演会や授業を実施している。

エ　職員会議及び学校評議員会の開催

(ア)　校長の意思決定に基づく学校運営が円滑に実施されるよう，定期的に年19回職員会議を開催し，共通理解を図ってきた。

(イ)　教育に関する識見を有する方から，国立教員養成系大学の附属校としての使命を果たす学校運営のあり方について意見を聞く学校評議員会を開催した。

### ⑽ 附属幼稚園

#### ① 本園の任務

ア　教育基本法，学校教育法等に基づき幼児を保育し，適当な環境を与えてその心身の発達を助長するとともに，保育に関する研究を行う。

イ　学部学生および大学院生の実地教育，実地研究に協力し指導に当たる。

ウ　大学および附属小・中学校と連携し，教育理論および実践に関する研究を行う。

エ　地域社会における幼児教育の振興に寄与する。

#### ② 平成15年度の活動方針

ア　教育目標

⑺　元気な子　　（体）

⑴　やさしい子　（徳）

⑼　考えぬく子　（知）

イ　年度の重点目標とその方策

⑺　のびのびと体を動かし精いっぱい遊ぶ子

・子どもの興味関心に基づく自由感ある遊びを保障する。

・遊びを誘発し，高める環境構成を工夫する。

・安全に配慮した環境づくりに留意する。

⑴　自然に親しみ友達と仲よく遊ぶ子

・園裏手に広がる里山に続く「緑の小道」の積極的な活用を図る。

・異年齢交流を促進する。

・年齢に応じた飼育栽培活動を工夫し実践する。

⑼　感じたことや考えたことを自分なりに表現する子

・「賞賛」「激励」「見守り」「共感」を大事にした援助に努める。

・帰りの会等で，歌ったり話したりする経験を積ませる。

・保護者や地域の人との触れ合いの場を積極的に設け，人とかかわる楽しさや喜びを味わわせる。

#### ③ 教員の配置状況

ア　園長，副園長，教諭３名，養護教諭１名，非常勤講師２名の計８名である。

イ　学級に担任１名と副担任１名を配置。ティーム保育を行っている。

#### ④ 活動の概要

ア　教育課程改善研究の推進

平成12年度より３年間，文部科学省の研究開発学校の指定を受け，附属小学校・上越市立高志小学校と共に幼小連携における教育課程・指導方法等の研究開発を行ってきた。そこでの研究は，「遊び」に重点が置かれていたため，今年度は，園生活のもう一方の重要な部分である「生活行動」「集団的な活動」に焦点を当てて研究を進めてきた。10月21日の第11回幼児教育研究会でその成果を発表した。

イ　保育の質の向上を目指した職員研修の推進

毎日の終礼時における子どもの様子についての情報交換，実践レポートを持ち寄り子どもの様子や保育の在り方について話し合う週１回の「幼児を語る会」などを通して，学級の保育を見直し改善を図ってきている。今年度は，近隣の幼稚園を訪問したり外部講師を招聘したりして，より広い視野から実践的な指導力を身に付ける研修を実施した。

ウ　家庭と連携し，同一歩調で進める保育の実現

保護者との連携を密にするため，登降園時における明るい挨拶の励行と言葉掛けを基本に，連絡帳や学級だより等の活用に努めた。

保育参観日と教育相談日を毎月１回設定しているが，保育参観日には８割以上の参加がある。今年度初めて祖父母参観日（１月21日実施）を計画し，祖父母から伝承遊びを教わった。祖父母が幼稚園を知るよい機会となった。

PTA との共催による「ふぞくフォーラム」（子育て学習会）を年間２回実施している。今年度１回目は，大山園長による講演会『幼児教育とは？～幼児教育と私～』（５月22日開催）。第２回目は，上越市学校訪問カウンセラー鈴木裕子氏による講演会『あせらず，あわてず，ゆったり子育て～子どもの声に目と耳を傾けて～』（12月３日実施）。講演会の後，保護者同士で活発な意見交換が行われた。附属小学校，附属中学校にも案内をし参加を呼びかけたところ，少数ではあったが参加をいただくことができた。

エ　大学との連携・協力

学部２年生の教育実習（春と秋の２回）と学部４年生（幼児教育専修）の教育実習を受け入れるとともに，専修教育実習の事前指導の１コマを本園教官が担当している。

法人化に向けた中期目標・中期計画達成のための第１回協議を幼児教育講座教官との間で行った。（ 1月26日実施）

オ　近隣の幼稚園・保育所との連携

第11回幼児教育研究会での意見交流のほかに，明星大学教授　諏訪きぬ氏を囲んだ『保育について語る会』（ 2月 3日実施。参加者80名）で，日頃の保育の問題点やこれからの幼児教育の方向などについて協議を深めた。『保育について語る会』では，比較的少人数でじっくり話し合うことを大事にしたため，上越地方の幼稚園・保育所を対象に案内状を配布した。

カ　安全管理の徹底

子どもたちが安全にのびのびと過ごせるよう，日々の保育前・後の安全点検，月２回の安全点検を実施している。また，PTA の交通安全委員と協力して，登降園時の安全指導を行っている。

年６回の避難訓練を実施している。そのうちの１回は，学内の協力を得て不審者対応の訓練を行った。訓練後，警備員を講師にした職員研修を実施した。

**⑤　自己点検・評価結果**

ア　幼稚園教育の機能の見直しと将来の構想

(ア)　学校教育法第77条の幼稚園教育の目的を十分果たすとともに，保育に関する研究に鋭意取り組んだ。この両者が調和のとれた運営は相乗効果をもたらしているが，研究だけが先行しないよう配慮している。研究発表の回数は１年に１回でもよいし，２回でもよく柔軟な考えで行っている。

今年度は，10月に幼児教育研究会を，２月に「保育について語る会」で講演会を行った。「保育について語る会」でも公開保育をしてほしいとの要望があったが，この件については職員の負担も考えて検討していきたい。「保育について語る会」は好評であったので，次年度以降も開催していく。

(イ)　教育実習の受け入れは附属としての本務の一つであると認識しているが，受け入れ数については，子どもへの影響や教師への過重負担にならないように配慮しなければならない。

２年次教育実習については，現状では特に問題はない。専修教育実習については，質の高い実習になるよう人数・期間・内容について，参加した学生の意見も聞きながら，幼児教育講座との連携を密にして検討していきたい。

(ウ)　本学及び他大学の学生や院生の調査研究に協力しているが，結果の報告を義務づけている。調査研究依頼状等の形式をホームページに掲載している。

イ　附属幼稚園の教育・管理運営の状況

(ア) 平成15年度の教育研究の実際

a　第11回幼児教育研究会（10月21日開催） 研究主題「幼児期・児童期の発達の連続性を踏まえた教育課程の創造～遊びを中核とした園生活における生活行動と集団的な活動の在り方～」

当日は，公開保育，全体発表，分科会（年齢別），東京家政大学助教授　戸田雅美氏をメインパネリストに迎えパネルディスカッションを行った。これまで取り上げることの少なかった「遊び以外の活動」について本園の考え方や取組の実態などを発信することができた。参加者は約200 名。小学校からも多数の参加があり，幼小連携について協議するよい機会ともなった。

b　附属小学校の２回の研究会にポスターセッション等で参加し，幼稚園の教育についての理解を深める努力をしているが，興味関心を示してくれる人が少ないのが現状である。できるだけ多くの人に理解してもらえるよう，ポスターセッション等の内容や方法について工夫する必要を感じている。

c　（財団法人）新潟県教育公務員弘済会・新潟日報社共催「第３回特色ある教育実践校・園」論文に応募し，優良賞を得た。

(イ) 管理運営の状況

a　研究推進のための体制

(a) 幼児教育研究会に向けた年４回の研究保育の実施（園外の指導者招聘）

第１回は６月に園の環境や研究の全体計画，研究の方向等について。第２回は９月に全国公開に向けての協議題や運営方式について。第３回は10月に全国公開し約200 人参加。第４回は12月に研究会の反省・研究のまとめについて協議を行った。

(b) 週５回ある終礼に，その日の幼児の様子を報告し合い，園全体の幼児理解を図り明日の保育計画の参考にしてきた。職員室では，子どものことがよく話題になった。

(c) 週１回，研究主任を中心に全員で研究推進委員会を実施

研究主任を中心に計画的・継続的に研究を進めている。また，小規模・少人数の特性を生かして，柔軟な対応を心がけている。

(d) 定期的に「幼児を語る会」を開き，保育のＶＴＲ，実践レポートや遊びの履歴を持ち寄りながら保育にかかわるカンファレンス，情報交換を行った。会を通して，一人一人の子どもの発達特性を見る目が養われ，実践的指導力が身に付いている。

(e) 一人一人の指導過程や発達特性が分かるカルテファイル（遊びの履歴）の作成

身体的発達や日々の指導の記録のみならず，幼児を語る会や参観者等の多角的な情報をファイルし，保護者との教育相談や指導計画作成の参考資料としている。

b　安全管理の徹底を図る体制

(a) 非常時に迅速・的確に対応できるよう，避難訓練の内容と方法を工夫している。今年度は，避難後の子どもたちを保護者に引き渡す訓練を初めて行った。事前に保護者に周知しておいたため，混乱もなくスムーズに実施できたが，突然の訓練も今後必要になると考えている。

(b) 保育中の警備については，警備員と十分連絡をとりながら対応している。登降園時の送迎者が変更になる場合は予め保護者に「変更届」を提出してもらうようにした。

(c) 鳥インフルエンザへの対応は迅速・的確にできた。想定される危機や予想外の危機にも的確に対応できるよう，日頃から職員の危機管理意識を高める努力を怠らないようにする。

ウ　附属幼稚園の活性化・充実のためのこれまでの取組

(ア) 毎月１回定例職員会議を行い，園の教育活動について職員の共通理解・連絡調整を図った。それに基づき月毎の教育計画を作成し，月末には全職員が評価内容を記録・集積し，次に生かすようにしてきた。

a　教育計画に取り上げた項目

園行事，クラス別期のねらいと月毎の主な内容，研修内容，教育実習関係，保健関係，交通安全関係，安全点検日の作業，動植物の世話，清掃分担，大学との連絡関係，ＰＴＡ活動計画，その他

b　様々な面から幼稚園の活動を共通理解し，見通しを立てて行ってきた。

・教師間の相互理解と協力体制を築き，教育の充実を図ってきている。

・担任と副担任のきめ細かな打ち合わせによるティーム保育を実施している。

(イ) 教育環境の見直しと充実

a　子どもの情操を高める視聴覚教材の充実（図書の購入充実，パネルシアターの購入など）

b　子どもとのかかわりを深める小動物の飼育と飼育環境の整備

(ウ) 自然体験を重視し，年間を通した園裏手に広がる里山に続く「緑の小道」の活用と学年に応じた活用方法についての検討

(エ) 地域の教育力の活用

園行事に地域や大学の人材を活用することにより，子どもの興味関心の幅を広めることができた。

(オ) 園内異年齢交流の促進

春と秋の遠足，豆まき会などの園行事と関連づけて意図的に交流の場を多く設定してきた。年少中児は年長児の行動様式をモデルとして学び，遊びの面でよい刺激を受けている。また，年長児はリーダー性を発揮する機会となり，年少中児に思いやりの気持ちをもって接することもでき，互いに好ましい関係を築いている。普段の遊びの中にも異年齢のかかわりが広がっている。

(カ) 確かな連続性を図った附属小学校との連携

a　互いの研究会への参加を通した相互理解と連続した研究推進

b　連絡入学についての綿密な打ち合わせと入学後の対応の仕方についての検討

(キ) 幼小の滑らかな連続を目指す上越市立高志小学校との交流活動の推進

a　年間３～４回の実施を目途にしている。

b　幼稚園の５歳児と小学校１年生の交流を行っている。学年だよりの交換を年間を通して行った。

c　交流を通し，幼児・児童及び職員の意識改革を期待している。

(ク) 実践と理論とのかかわりを重視した大学との連携

年間を通して，幼児教育講座教官から指導助言をいただくことができた。

(ケ) 学校評議員会の開催

５名の学校評議員より年２回にわたり学校運営の基本方針及び活動に対する意見等を伺った。

・第１回会議　平成15年７月15日　「生きる力をはぐくむ『生活行動』と『集団的な活動』の在り方について」

・第２回会議　平成15年12月３日　「地域に必要とされる附属幼稚園の在り方について」

(コ) 食教育の一環として，平成14年12月より大学学生食堂から給食を提供してもらっている（ハッピーランチ）。平成14年度は月１回であったが，今年度は月２回実施した。子どもたちにも保護者にも好評であった。次年度は週１回の実施を考えている。

# 第二章　自己点検・評価

# 第二章　自己点検・評価

## 1　自己点検・評価の実施

自己点検・評価の目的においては，①本学が常に教育研究活動の現状を客観的に把握するとともに，学部・大学院等の理念・目的との関連において，その現状を点検・評価し，改善すべき点を明らかにし，更には，将来的改革の方向をも検討し，それに沿って不断に改善･改革を行うこと。②本学の誇るべき長所を明らかにし，これを維持･伸長していくことの２点が重要である。

平成15年度の自己点検・評価は，国立大学法人移行期の自己点検・評価であり，法人化前の「上越教育大学大学評価委員会規則」及び「上越教育大学大学評価委員会大学評価専門部会細則」に基づき，大学評価委員会が当該年度に実施する点検・評価項目を選定して，各実施組織（各種委員会等）にその実施を指示し，法人化後の「国立大学法人上越教育大学大学評価委員会規程」に基づき，大学評価委員会が実施組織からの評価結果を全学的見地から取りまとめた上で，「年次報告書」により公表することとした。また，自己点検・評価結果に基づき，改善を要する事項を経営協議会又は教育研究評議会等で決定し，その改善を学長が実施組織等に指示することとしている。

平成15年度においては，各教員の教育活動，研究活動及び社会との連携についてのみ自己点検・評価を実施し，それ以外について，特に大学評価委員会で新たにテーマを設定して点検・評価は実施しないこととした。

## 2　自己点検・評価結果

### (1)　各教員の教育活動，研究活動及び社会との連携に関する状況調査の概要

各教員の教育活動，研究活動及び社会との連携については，大学評価委員会が下記の調査項目に関して各教員に調査を実施し，平成16年度において同委員会がこれを取りまとめた。

①　調査項目

ア　教育活動

(ｱ)　授業・研究指導・その他の教育活動の実施状況（学外を含む。）

◎特色ある点等

イ　研究活動

(ｱ)　研究成果の発表状況

- 著書
- 論文
- 作品・演奏発表，競技・指導・審査歴
- 教育実践に関する業績
- 学会等における口頭発表等
- 上記以外の研究成果の発表状況

(ｲ)　共同研究（幼・小・中・高等学校及び特殊教育諸学校教員との共同研究を含む。）の実施状況

(ｳ)　国際研究プロジェクトへの参加状況

(ｴ)　学会活動への参加状況等

- 参加状況
- 学会役職
- 国際学会，国内学会（シンポジウム，フォーラム含む。）の企画
- 学会誌の編集　等

(オ) 国内外の学術賞の受賞状況

(カ) 在外研究の状況

◎特色・強調点等

ウ 社会との連携

(ア) 教員の社会的活動状況

◎社会への寄与

② 調査対象期間

平成15年４月１日～平成16年３月31日

③ 調査対象教員数

172人（学長・副学長及び平成15年度途中転出者，休職者を除く。）

④ 調査票提出教員数

171人（回収率 99.4％）

### (2) 調査のデータ集計結果

① 授業・研究指導以外の教育活動の実施状況及び研究成果の発表状況

| 区　分 | 調査対象教員数 | 調査票提出教員数 | 授業・研究指導以外の教育活動の実施状況 | 研究成果の発表状況 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | a 著　書 | b 論　文 | c 作品・演奏発表，競技歴等 | d 教育実践に関する業績 | e 学会等における口頭発表 | f その他 |
| 学習臨床講座 | 19 | 19 | 32 | 12( 3) | 49( 22) | 0 | 6( 3) | 47 | 9 |
| 幼児教育講座 | 6 | 6 | 7 | 2( 0) | 8( 8) | 0 | 2( 0) | 3 | 3 |
| 学校教育総合研究センター | 7 | 7 | 13 | 9( 2) | 16( 5) | 0 | 0( 0) | 15 | 17 |
| 生徒指導総合講座 | 11 | 11 | 14 | 6( 0) | 22( 16) | 0 | 9( 0) | 15 | 19 |
| 心理臨床講座 | 12 | 12 | 20 | 5( 2) | 17( 6) | 0 | 0( 0) | 7 | 6 |
| 障害児教育講座 | 12 | 12 | 20 | 9( 2) | 22( 8) | 0 | 4( 3) | 36 | 9 |
| 言語系教育講座（国語） | 9 | 9 | 7 | 1( 0) | 16( 11) | 2 | 3( 1) | 4 | 1 |
| 言語系教育講座（外国語） | 8 | 8 | 4 | 1( 1) | 14( 10) | 0 | 0( 0) | 7 | 0 |
| 社会系教育講座 | 15 | 15 | 26 | 9( 2) | 29( 14) | 0 | 4( 1) | 18 | 11 |
| 自然系教育講座（数学） | 8 | 8 | 8 | 4( 1) | 5( 4) | 0 | 1( 1) | 7 | 0 |
| 自然系教育講座（理科） | 14 | 14 | 22 | 4( 0) | 49( 2) | 0 | 1( 0) | 38 | 1 |
| 生活・健康系教育講座（保健体育） | 13 | 13 | 25 | 1( 0) | 13( 3) | 3 | 0( 0) | 14 | 2 |
| 生活・健康系教育講座（技術） | 5 | 5 | 3 | 0( 0) | 9( 4) | 0 | 0( 0) | 21 | 0 |
| 生活・健康系教育講座（家庭） | 8 | 8 | 8 | 1( 0) | 24( 4) | 0 | 2( 0) | 19 | 6 |
| 芸術系教育講座（音楽） | 15 | 15 | 25 | 5( 2) | 7( 7) | 44 | 2( 2) | 6 | 13 |
| 芸術系教育講座（美術） | 10 | 9 | 7 | 0( 0) | 4( 4) | 27 | 0( 0) | 3 | 1 |
| 合　計 | 172 | 171 | 241 | 69(15) | 304(128) | 76 | 34(11) | 260 | 98 |

注） 著書，論文，教育実践に関する業績については，単著を（ ）書き内数で示す。

② 共同研究の実施状況等

| 区　　分 | 調査対象教員数 | 調査票提出教員数 | 共同研究の実施状況 | 国際研究プロジェクトへの参加状況 | 学会活動への参加状況 | 国内外の学術賞の受賞状況 | 在外研究の状況 | 社会的活動状況 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 学習臨床講座 | 19 | 19 | 37 | 3 | 72 | 0 | 5 | 80 |
| 幼児教育講座 | 6 | 6 | 3 | 0 | 18 | 0 | 0 | 25 |
| 学校教育総合研究センター | 7 | 7 | 13 | 0 | 13 | 0 | 0 | 45 |
| 生徒指導総合講座 | 11 | 11 | 13 | 0 | 50 | 1 | 0 | 74 |
| 心理臨床講座 | 12 | 12 | 10 | 2 | 23 | 0 | 0 | 58 |
| 障害児教育講座 | 12 | 12 | 18 | 0 | 27 | 0 | 3 | 102 |
| 言語系教育講座（国語） | 9 | 9 | 3 | 0 | 25 | 0 | 1 | 25 |
| 言語系教育講座（外国語） | 8 | 8 | 5 | 0 | 45 | 0 | 0 | 7 |
| 社会系教育講座 | 15 | 15 | 22 | 3 | 34 | 1 | 2 | 53 |
| 自然系教育講座（数学） | 8 | 8 | 8 | 0 | 25 | 1 | 0 | 13 |
| 自然系教育講座（理科） | 14 | 14 | 17 | 3 | 49 | 0 | 0 | 29 |
| 生活・健康系教育講座（保健体育） | 13 | 13 | 12 | 0 | 41 | 0 | 0 | 51 |
| 生活・健康系教育講座（技術） | 5 | 5 | 5 | 0 | 17 | 0 | 0 | 12 |
| 生活・健康系教育講座（家庭） | 8 | 8 | 10 | 1 | 19 | 1 | 0 | 21 |
| 芸術系教育講座（音楽） | 15 | 15 | 10 | 4 | 20 | 0 | 3 | 46 |
| 芸術系教育講座（美術） | 10 | 9 | 6 | 0 | 12 | 0 | 2 | 43 |
| 合　　計 | 172 | 171 | 192 | 16 | 490 | 4 | 16 | 684 |

③　最近５年間の状況

ア　調査対象教員数

| 区　　分 | 11 年度 | 12 年度 | 13 年度 | 14 年度 | **15 年度** | 前年度比較 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 対象教員数 | 179 人 | 179 人 | 170 人 | 172 人 | **172 人** | － |

イ　調査票提出教員数

| 区　　分 | 11 年度 | 12 年度 | 13 年度 | 14 年度 | **15 年度** | 前年度比較 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 提出教員数 | 169 人 | 176 人 | 169 人 | 170 人 | **171 人** | 増加 |
| 回収率 | 94.4% | 98.3% | 99.4% | 98.8% | **99.4%** | 増加 |

ウ　各調査項目の調査結果

(ｱ)　授業・研究指導以外のその他の教育活動の実施状況（学外を含む。）

| 区　　分 | 11 年度 | 12 年度 | 13 年度 | 14 年度 | **15 年度** | 前年度比較 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 総件数 | 139 件 | 174 件 | 184 件 | 232 件 | **241 件** | 増加 |
| 一人当たりの平均件数 | 0.8 件 | 1.0 件 | 1.1 件 | 1.4 件 | **1.4 件** | － |

(ｲ)　研究成果の発表状況

| 区　　分 | | 11 年度 | 12 年度 | 13 年度 | 14 年度 | **15 年度** | 前年度比較 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| a　著書 | 総件数 | 79 件 | 81 件 | 80 件 | 79 件 | **69 件** | 減少 |
| | 一人当たりの平均件数 | 0.5 件 | 0.5 件 | 0.5 件 | 0.5 件 | **0.4 件** | 減少 |
| b　論文 | 総件数 | 239 件 | 288 件 | 320 件 | 269 件 | **304 件** | 増加 |
| | 一人当たりの平均件数 | 1.4 件 | 1.6 件 | 1.9 件 | 1.6 件 | **1.8 件** | 増加 |
| c　作品・競技歴等 | 総件数 | 153 件 | 77 件 | 63 件 | 57 件 | **76 件** | 増加 |
| | 一人当たりの平均件数 | 0.9 件 | 0.4 件 | 0.4 件 | 0.3 件 | **0.4 件** | 増加 |
| d　教育実践の業績 | 総件数 | 46 件 | 36 件 | 55 件 | 38 件 | **34 件** | 減少 |
| | 一人当たりの平均件数 | 0.3 件 | 0.2 件 | 0.3 件 | 0.2 件 | **0.2 件** | － |
| e　学会等口頭発表 | 総件数 | 197 件 | 268 件 | 256 件 | 287 件 | **260 件** | 減少 |
| | 一人当たりの平均件数 | 1.2 件 | 1.5 件 | 1.5 件 | 1.7 件 | **1.5 件** | 減少 |
| f　その他 | 総件数 | 68 件 | 93 件 | 60 件 | 64 件 | **98 件** | 増加 |
| | 一人当たりの平均件数 | 0.4 件 | 0.5 件 | 0.4 件 | 0.4 件 | **0.6 件** | 増加 |

(ｳ)　共同研究（小・中・高等学校教員との共同研究を含む。）の実施状況

| 区　　分 | 11 年度 | 12 年度 | 13 年度 | 14 年度 | **15 年度** | 前年度比較 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 総件数 | 169 件 | 189 件 | 163 件 | 168 件 | **192 件** | 増加 |
| 一人当たりの平均件数 | 1.0 件 | 1.1 件 | 1.0 件 | 1.0 件 | **1.1 件** | 増加 |

(ｴ)　国際研究プロジェクトへの参加状況

| 区　　分 | 11 年度 | 12 年度 | 13 年度 | 14 年度 | **15 年度** | 前年度比較 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 総件数 | 17 件 | 15 件 | 12 件 | 15 件 | **16 件** | 増加 |

(ｵ)　学会活動への参加状況

| 区　　分 | 11 年度 | 12 年度 | 13 年度 | 14 年度 | **15 年度** | 前年度比較 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 総件数 | 367 件 | 399 件 | 446 件 | 447 件 | **490 件** | 増加 |
| 一人当たりの平均件数 | 2.2 件 | 2.3 件 | 2.6 件 | 2.6 件 | **2.9 件** | 増加 |

(ｶ)　国内外の学術賞の受賞状況

| 区　　分 | 11 年度 | 12 年度 | 13 年度 | 14 年度 | **15 年度** | 前年度比較 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 総件数 | 3 件 | 3 件 | 3 件 | 2 件 | **4 件** | 増加 |

(ｷ)　在外研究の状況

| 区　　分 | 11 年度 | 12 年度 | 13 年度 | 14 年度 | **15 年度** | 前年度比較 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 総件数 | 9 件 | 20 件 | 17 件 | 11 件 | **16 件** | 増加 |

(ｸ)　社会的活動状況

| 区　　分 | 11 年度 | 12 年度 | 13 年度 | 14 年度 | **15 年度** | 前年度比較 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 総件数 | 640 件 | 727 件 | 605 件 | 642 件 | **684 件** | 増加 |
| 一人当たりの平均件数 | 3.8 件 | 4.1 件 | 3.6 件 | 3.8 件 | **4.0 件** | 増加 |

### ⑶ 総括的な点検・評価（調査結果の前年度との比較等）

① 観点

本学は，昭和53年に「教員に開かれた大学院」として開学し，以来，教員養成と現職教員の高度研修・研究を通じて学界と社会に貢献してきたが，平成８年には兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士課程を設置し（構成大学），そして，平成12年度には更に高度な教育研究を創造的に推進する人材養成を目的とした新たな，学習と発達に関わる臨床系の教育研究体制を立ち上げた。平成13年度の調査から調査項目を整理するとともに，「ア教育活動」については「特色ある点等」，「イ研究活動」については「特色・強調点等」，「ウ社会との連携」については「社会への寄与等」の項目を新設し，本学教員の成果を積極的に社会に公表することをも意図している。なお，点検・評価項目の整理にあたっては，平成10年の大学審議会答申『21世紀の大学像と今後の改革方策について－競争的環境の中で個性が輝く大学－』及び大学評価・学位授与機構の「自己評価実施要項」を参照した。平成15年度も同内容を継承した。

② 調査票の提出状況

提出教員数は171人，回収率は99.4％であった。（前集計表参照）

③ 各調査項目の調査結果（概要）

データの集計結果から見ると。

ア 「授業・研究指導以外のその他の教育活動の実施状況（９件の増加）」は，前年度と比較して若干ではあるが増加している。

イ 「研究成果の発表状況」について，前年度と比較して増加している項目は，「論文（35件の増加，一人あたり0.2件）」，「作品・競技歴等（19件の増加，一人あたり0.1件）」，「その他（34件の増加，一人あたり0.2件）」である。

「著書」，「教育実践の業績」，「学会等口頭発表」の項目は，前年度と比較して減少傾向であった。

ウ 「共同研究の実施状況（24件の増加）」，「国際研究プロジェクトへの参加状況（１件の増加）」，「学会活動への参加状況（43件の増加）」，「国内外の学術賞の受賞（２件の増加）」，「在外研究の状況（５件の増加）」，「社会的活動状況（42件の増加）」と全ての項目で前年度集計より増加している点が，今回の特徴点と言える。

そして，特に注目すべき点として挙げられるのが，「授業・研究指導以外のその他の教育活動の実施状況」が平成11年度から連続して増加しており，更には「学会活動への参加状況」に関しては，平成９年度から６年連続して増加している点であろう。

④ 今後の改善点等

調査項目・内容等は，先にも述べたとおり，平成13年度調査から項目の追加等を行い実施した。平成16年４月から国立大学が法人化され，国立大学法人評価委員会や認証評価機関の評価を受けることとなるが，これらに対応するためには，各教員の教育活動，研究活動及び社会との連携等に関するデータを含めた大学情報のデータベースシステムを構築しなければならない。そして本学が中期目標の達成状況について，自己点検・評価を行い，中期目標の各項目について，その達成に係る学内の責任の所在を明確にして，その推進体制を確立するとともに，達成状況を示すための指標を学内で創意工夫しながら開発することが必要である。特に定性的な指標について，達成状況を判断する評価手法の検討が必要である。

### (4) 各教員のデータ

【凡　例】

① 掲載は，平成15年度の各講座等ごとに，教授，助教授，講師，助手の順とし，それぞれ五十音順とした。

② 職名は，平成16年３月31日現在である。

③ 「授業」には，助手が授業の補助を行っている場合を含むこととした。

④ 「その他の教育活動の実施状況」には，学外を含むこととした。

⑤ 「研究成果の発表状況」の該当項目は，次のとおり省略した。

**著】**‥‥著書

**論】**‥‥論文

**作】**‥‥作品・演奏発表，競技・指導・審査歴

**業】**‥‥教育実践に関する業績

**発】**‥‥学会等における口頭発表

☆印は，国際学会，国内学会（シンポジウム，フォーラム含む）で，ゲストスピーカー等として招待を受けて講演（パネリスト含む）や議長を行った場合を示す。

**他】**‥‥上記以外の研究成果の発表状況

⑥ 「共同研究の実施状況」には，幼・小・中・高等学校及び特殊教育諸学校教員との共同研究を含むこととした。

⑦ 上記のほか，原則として各教員から提出されたデータのとおり掲載した。

⑧ 学部，大学院修士課程，大学院博士課程に係る授業科目及び担当教員については，第三章資料編に掲載した。

⑨ 学部卒業生に係る卒業研究題目及び指導教員，並びに大学院修士課程修了生，大学院博士課程修了生に係る学位論文題目及び指導教員については，第三章資料編に掲載した。

【学習臨床講座】

川　村　知　行（教　授）

〈教育活動〉

授　業

総合学習分野の大学院の講義・演習では，「地域教育演習」「地域教育特論」などで，学外の実地研究指導によって，座学では理解できない体験学習を身近な地域素材を開発しながら，理解を深める努力をはらった。また，学部では総合学習の他，学芸員養成のための博物館学を担当し，フレンドシップ事業の「体験学習Ｊ」の実践指導に加わった。

研究指導

12年度以来，総合学習分野の大学院生にゼミ指導・修士論文指導に当たっている。この他，従来通りの美術教育分野の講義・演習や，博物館学も担当している。

その他の教育活動（学外を含む。）

①15年７月：山形大学大学院教育学研究科非常勤講師として「日本美術史特論」（集中講義）を担当した。

②10月17日～30日：協定校である韓国教員大学校への本学短期留学生14名を引率し，大韓民国清州市周辺およびソウル市の史跡見学の指導に当たり，両校の交流促進に貢献した。

③11月：上越教育大学公開講座「越の文化を探るⅨ」として，近江の寺社・遺跡の見学を実施した。

◎特色ある点等

文化・美術の「かたち」から歴史を考察することを専門としてきたが，美術教育の枠を出て，地域の文化財と歴史を活用した総合学習において，美術史の応用として地域学習を展開することを特徴としている。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

論】①平成16年３月：共著「醍醐寺所蔵仏教絵画総合目録Ⅳ－白描図像－」（『醍醐寺文化財研究所研究紀要』第20号）醍醐寺文化財研究所

共同研究の実施状況

①「国際理解を中心とした総合的学習の内容構成に関する基礎的・実践的研究」科学研究費補助金（基盤研究Ｂ）　研究代表者：二谷貞夫（上越教育大学教授）

学会活動への参加状況

①15年５月25日～27日：美術史学会出席（関西学院大学）　②６月７・８日：日本国際理解教育学会出席（桜美林大学）　③12月１日～２日：密教図像学会出席（宝仙学園短期大学）

在外研究の状況

①５月７日～14日：大韓民国清州市　韓国教員大学校および周辺の文化施設の把握調査　②９月19日～30日：ワシントン，ボストン，ニューヨークの博物館・美術館施設の調査　③15年３月20日～31日：ローマ，フィレンツェ，パリ，ブリュッセル，アムステルダムの博物館・美術館施設の調査

◎特色・強調点等

醍醐寺の美術工芸調査，上越市の文化財調査や世界各地の美術館・博物館の活用など，つねに目に見える実態を把握することによって，本質に迫ろうと努力していることは，美術史研究はもとより，総合学習でも有効である。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①上越市文化財調査審議委員（上越市教育委員会），②上越市史編さん委員（上越市），③新潟市文化財調

査審議委員（新潟市教育委員会），④會津八一記念館運営委員会委員（新潟市會津八一記念館），⑤加茂市史編集委員（新潟県加茂市教育委員会），⑥醍醐寺文化財研究所研究員（京都市伏見区　総本山醍醐寺）

◎社会への寄与等

・文化財の調査・保護について，新潟県内の市の審議会委員等として文化政策形成に積極的にかかわった

大悟法　　滋（教　授）

〈教育活動〉

授　業

学部，大学院ともに，素朴な疑問から始まる考える力の育成に重点を置き，特に日常的な事象の見直しを通して，子どもの視点からの学習課題の再発見を促すような，講義・演習内容を取り上げるように努めている。

授業評価では，個々の学生がどのような考えを持って課題に取り組んだかを大切にし，知識より，物の見方，考え方を重視することを明示している。

教員を志望していない学生が増えつつあるが，教員としての資質向上の学びが，どのような進路にも行かされるよう配慮している。

研究指導

Ｍ２－９名，Ｍ１－１名，学部３年－２名の指導を行った。

まず自分自身の体験や実践を見直し，こだわりを捨てて視野を広げること，特に，地域における子ども対象の活動の理解と参加体験を奨めている。

その他の教育活動

図書館司書講習にて講義の一部を担当。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

著】①平成15年８月；「茶花の図鑑　秋」 四季の茶花を楽しむ　pp.91-98　世界文化社

②平成15年11月；「茶花の図鑑　冬」 四季の茶花を楽しむ　pp.91-98　世界文化社

③平成16年２月；「茶花の図鑑　春」 四季の茶花を楽しむ　pp.89-98　世界文化社

論】①平成16年２月：A New Variety of *Schoenoplectus mucronatus* (L.)Palla(Cyperaceae)from Japan　J.Jap.Bot. 79:1-3

発】①平成16年３月：ユズリハは無融合種子形成をする（共）日本植物分類学会第3回大会研究発表

共同研究の実施状況

①平成15年度　フレンドシップ事業

学会活動への参加状況

①平成16年３月：日本植物分類学会第3回大会参加，②平成15年９月18～30日：米国東海岸　博物館等に関する調査研究

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①平成15年10月18日：にいがた連携公開講座講師〈新潟県教育委員会〉，②平成15年５月23～15日：ボランティア講習会講師〈妙高少年自然の家〉，③平成15年度各種委員会委員：上越市史専門委員，上越市環境審議会委員，上越市環境影響評価会議委員，上越市指定管理者選定委員会委員，リージョンプラザ上越運営協議会委員，上越市文化財調査審議会委員，河川水辺の国勢調査アドバイザー，関川流域委員会，妙高少年

自然の家施設業務運営委員会委員，

**戸　北　凱　惟**（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

大学院生７名と学部生２名の指導を行った。連合講座の博士課程では２名の指導を行った。講義の多くはゼミ展開にしているのが特徴である。ゼミは学部と院の連携したものが週２回，学部生のみのものが週１回で，他に個人ゼミがあり，授業はフィールドに出かけて毎週聴講できないものがいるので集中で行った。修士２年は学会参加をゼミの義務としているので夏から秋にかけて各種の学会へ参加し発表する。修士１年はこのような２年の姿を見て，自己の将来の姿の見通しをもった研究計画を立てる。学部生はこうした院生の教育実践研究の方法や課題意識から直接，間接に学ぶところが多い。このような研究室文化形成をテーマとして，プロジェクト研究につなげている。昨年に引き続き，ゼミの公開を学会形式で行い，学内外から約80名の参加者があった。

**◎特色ある点等**

教育実践研究にとまどいのある学部生にとって，現職教師が在籍していることのメリットは実に多い。また，小，中，高校の校種や各県からの教師が在籍しているので，多種多様の課題があることに気づく。その中から，具体的に研究のテーマになりうることにも気づく。学部３年から４年への成長は大きいものがあり，教員の正式採用と臨時採用を合わせて100％の就職率である。学部生も現職員生も教職へのキャリア意識化が研究室のテーマとなっている。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**著】**①戸北凱惟「理科カリキュラム研究の課題」『中学校理科教育実践講座』所収，pp.40-45，ニチブン，2003. 9

②戸北凱惟「簡易炭焼き実験から考える」濁川明男編著『里山から学ぶ』所収，pp.203-211，北越出版，2003.12

③戸北凱惟「中学校理科：はどめ規定にどう対応するか」教職研修，pp.44-45，教育開発研究所，2003.11

**発】**①戸北凱惟「課題研究：臨床の知とカリキュラム研究」日本カリキュラム学会，上越教育大学，2003. 7

②青山康郎，戸北凱惟「発話を促す話し合いの場に関する研究」日本コミュニケーション学会，青森公立大学，2003.11

③佐藤誠也，戸北凱惟「学習ノートを活用した生物授業のカウンセリング」日本科学教育学会，金沢工業大学，2003. 7

④吉田正，戸北凱惟「理科授業における学びのカウンセリング」日本理科教育学会，北海道教育大学札幌校，2003. 8

⑤久保田，西川，戸北「ローカル発話による科学的共同体の成立」日本理科教育学会，北海道教育大学札幌校，2003. 8

⑥池田仁人，戸北凱惟「生活科の会話中に存在する知的な気付きに関する研究？メタファを用いた表現に注目して?」日本教科教育学会，筑波大学，2003年11月

⑦池田仁人，戸北凱惟「生活科におけるメタファの機能とその表れ方に関する研究」臨床教科教育学

会，上越教育大学，2004年，１月

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①新潟県いきいきわくわく科学賞審査委員　新潟県教育センター　15.11.12

②「学びの専門家育成」の先に見える「確かな学力」兵庫教育大学附属中学校　15.11.21

③フロンティア講演「学びの専門家をどう育てるか－そこから培われる学力－」会津若松市本郷第一小学校　15. 2.23

## 中　野　靖　夫（教　授）

〈教育活動〉

授　業

学部：授業計画，評価方法を事前に示し，学習への取り組みや計画を立てやすくした。

大学院修士課程：教育情報学特論ではこれまでの研究成果をもと教育と情報の境界領域における研究手法について授業を展開した。

研究指導

学部：卒業論文は計画的に指導し，12月末に完成させた。特にコンピュータと相対する学習者特性に視点を置き，臨床的立場で考察させた。

大学院修士課程：論文を作成するにあたり，論文の文脈，教育情報の処理方法について指導した。処遇の入口，出口調査，個人特性の詳細化に重点を置いた。

◎特色ある点等

・研究室所属の一名の学生が教員採用試験を受験し合格した。

・教員採用試験は平成10年度から15年度まで９名の学生が受験し，６名が２次試験まで合格している。

・卒業研究は２年次に教材作成，３年次にデータ収集，分析，学会研究報告で発表し，この資料を教員採用試験受験時に添付している。

・問題解決力，教師の力量の育成をめざし，時間を確保して指導している。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

論】①コンピュータ操作過程の解明（７）－情報探索における学習者特性－，上越教育大学研究紀要第23巻第２号，pp.775-788，2004. 3）

発】①平成15年10月：知識の理解（２），日本教育工学会第19回研究大会

共同研究の実施状況

①学校教育総合研究センター研究員として研究課題「情報活用の実践力に学習者の形成するメンタルモデルの差異が与える効果」に取り組む。

学会活動への参加状況

①平成15年10月11日：日本教育工学会19回研究大会，②平成15年11月22～23日：日本教育実践学会第６回大会

◎特色・強調点等

コンピュータ使用時の学習者特性を継続的に研究している。同様の研究を進めている研究者は少ない。情報教育は国の重点目標に掲げられ，教育は実践段階に進んできたがコンピュータと相対する学習者特性を解明することは不可欠であり，研究成果は他の研究及び教育実践に寄与できる。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①日本教育実践学会監事

◎社会への寄与等

教育現場と共同研究を行い，情報教育に関する学習者特性の測定法と研究成果のまとめ方について情報をフィードバックし教育研究手法を提案した。教育現場における教育実践研究に適用できる。

西　川　　純（教　授）

〈教育活動〉

授　業

初期段階は教師主導の講義を主体としているが，後半では課題を与え，主体的に学び発表する機会を与えている。発表で，授業者はもとより，他の学習者との相互の意見交換を重視している。その発表の成果を通して評価を行っている。

研究指導

基本的に学部の卒業研究においても，大学院レベルの研究成果を求めており，学部・大学院の差を設けていない。しかし，現職院生と学卒者では，中・長期の学校現場の協力を得られるか否かに大きな差があるため，研究テーマの設定に配慮がいる。研究指導では，研究室での異学年学習を重視し，相互の啓発を高める環境を保証している。

学部４年の卒業生の内，２名が正規採用となっている。また，修士論文，卒業研究の成果が多くの学会において発表，掲載となっている。

その他の教育活動（学外を含む。）

福井県，新潟県，山形県，群馬県の教育センターに講師として招かれ講演を行った。また，各種教員研修団体，学校に招れ講演を行った。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

論】①小林秀樹，西川純 (2003)：中学校理科における異学年の学び合い，臨床教科教育学会誌，臨床教科教育学会，２( １)，pp.18-28

②辺土名智子，西川純 (2003)：中学生の教科学習への参加構造と学びの関連性，臨床教科教育学会誌，臨床教科教育学会，２( １)，pp.29-37

③水落芳明，西川純 (2004)：他の学習者の学習状況を見えやすくすることによるコンピュータリテラシーの間接的伝播と効果，相互作用を軸とした異学年学習の実践から，教育工学雑誌，日本教育工学会，27(Suppl.)，pp.177-180

④湯本文洋，西川純 (2004)：理科実験における学習者の相互行為の実態と変容に関する研究，理科教育研究，44( ２)，pp.83-93，日本理科教育学会

⑤三崎隆，西川純（2004）：学習者の置かれる社会的状況と固有の認知型との関係に関する研究，理科教育研究，44(3)，pp.13-20日本理科教育学会

⑥久保田善彦，西川純（2004）：小集団における科学的意味の構築，小集団発話の特徴としてのオーバーラップ発話から，理科教育研究，44(3)，pp.1-12日本理科教育学会

発】理科教育学会，学校教育学会，教科教育学会等において十数件の口頭発表を研究室として行った。

**学会活動への参加状況**

①理科教育学会，②学校教育学会，③教科教育学会に参加，④理科教育学会編集委員会事務局担当，⑤科学教育学会編集委員

学会活動を年間計画の基本と位置づけており，それと連動させた研究指導計画を行っている。その成果は，上記の通りである。

**〈社会との連携〉**

**◎社会への寄与等**

・各種教育団体より，多くの講演依頼を受けた。今後も，講演活動を通じて，大学の研究成果を社会に還元する。

## 二　谷　貞　夫（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

大学院：「総合学習原論」現代の課題をＮＩＥでとりくみ，小レポートを課す。

学部：選択者少数のため，ゼミ形式を取り入れる。

**研究指導**

学部では，３人の卒論指導にあたり，全員が教員志望であり，教採の面接・小論文など練習を兼ねて，卒論指導を行う。

大学院：現職５人，留学生１人，現役１人は，本人の問題関心を醸成し，指導に当たる。また，博士課程１人，留学生（韓国教員大学校博士課程）１人の指導に当たる。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

金沢大学文・法・経済学部「社会科教育法Ａ」「同Ｂ」を担当。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**著】**①平成15年６月：『忙しい現代人のためのものがたり世界史65篇』（共著）一橋出版

②平成15年８月：『歴史教育・社会科教育年報2003年版：教育の危機と社会科教育の課題』（共著）三省堂

**業】**①平成15年４月：『文部科学省検定高等学校地理歴史科教科書世界史Ａ』（共著）一橋出版

②平成15年７月「社会科が面白いとき－いまの世界を読み解くとき－」，『上越教育大学社会科教育学会だより』第51号

**発】**①平成15年11月：韓国国際理解教育学会にて「日本における国際理解をめざす社会科教育実践」を報告

**他】**①平成15年12月『恐る恐る社会の木鐸に贈る』（単著）私家版

**共同研究の実施状況**

①基盤研究Ｂ⑵「国際理解を中心とした総合的学習の内容構成に関する基礎的・実践的研究」代表者二谷貞夫　科学研究費補助金

②基盤研究Ｂ⑴「グローバル時代に対応した国際理解教育のカリキュラム開発に関する理論的・実践的研究」代表者米田伸次（帝塚山学院大学教授）科学研究費補助金の研究分担者

**学会活動への参加状況**

①６月６日～８日：国際理解教育学会出席，②平成15年度国際理解教育学会理事（編集担当），③平成15年度日本社会科教育学会会長，④７月５日～６日：日本カリキュラム学会出席，⑤８月２日～３日：日本学校教育学会出席，⑥平成15年度日本学校教育学会理事，⑦10月11日～12日：日本社会科教育学会出席，⑧10

月24日～26日：全国社会科教育学会出席，⑨全国社会科教育学会理事，⑩平成15年度日本教科教育学会理事

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①歴史学研究連絡委員会歴史教育小委員会委員（第19期日本学術会議），②上越市男女共同参画審議会委員（上越市），③上越映画鑑賞会中国映画「生きる」学習会講師，④上越市男女共同参画フォーラム助言者，⑤上越市あすなろ学級講師（「シルクロードの世界」を講演），⑥上越映画鑑賞会「チョムスキー９・11 POWER　AND　TERROR」上映・学習会講師（「世界をどう読み，どう捉えたら良いのか」を講演）

藤　岡　達　也（教　授）

〈教育活動〉

授　業

【観　点】教育方法及び成績評価面での取組

教育に限らず，様々な変化が著しい今日，教官側が学生の将来にとっても，ゆるぎない知識等を一方的に与えるという形式の講義は必ずしも効果的ではない。むしろ，一つだけの正解がない，さらには問題そのものを自ら設定する必要のある時代に対応するための授業が必要と考えている。そのため，学生自らが考え，自ら学ぶために，自分達で問題設定し，それに対するアプローチをレポート，発表，ディスカッションする方法を積極的に取り入れた。

成績評価については，最初にこちらの評価規準を明らかにし，上の観点から，知識，技能，思考・判断力，考察・分析力，発表能力（プレゼンテーション力）の他，興味・関心・意欲についても評価した。

研究指導

【観点１】学部

今日の学校のおかれた状況を踏まえ，「開かれた学校」づくりに必要な教員の意識・力量，つまり，従来の教科，生活・進路のインストラクター的な指導力だけでなく，地域連携等のコーディネーター的な企画力・調整力の育成を目指した指導を行った。具体的には「地域学校協議会」や「学校自己診断力」等に対する在り方と教員の取り組むべき姿勢の提示など，今日の学校の新たな課題が研究対象になることを取り上げた。さらに，教員採用試験だけでなく，教職に就いたときに必要な基礎知識の習得も意識した指導を行った。

【観点２】大学院

自分の担当した学生の研究上の課題として，学生自身も高度な臨床的な実践力を獲得するために，授業分析や授業記録等視野の狭い取組に追われがちであることに気付いた。そのため，現在の教育現場の課題解決方法を探る一環として，普遍的な研究方法の展開についても再教育を行った。

その他の教育活動（学外を含む。）

①大阪市立大学理学部・非常勤講師「理科教育法Ⅰ」「理科教育法Ⅱ」（集中）

②奈良教育大学大学院・教育学研究科「理科教材特論」（集中）

◎特色ある点等

従来の講義中心の授業を脱却すべく，学生自身が能動的な姿勢で講義に臨むことができるように，参加体験型の授業を心がけた。その中で，基本的な知識や現状と課題についての解説も必要なため，何が現在の学生にとって重要であるかを，こちらも考えるための機会となった。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

**著】**①平成15年９月：『CD-ROM 版中学校理科教育実践講座』（共著） ニチブン

**論】**①平成16年１月：『理科教育と考古学的な内容との関連性について』（単著）理科教育学研究 Vol.44,No.2 pp.1-10

②平成16年３月：『環境教育をテーマとした教員研修を担う環境 NPO 等の条件について』（共著） 環境教育 VOL.13-2 pp55-62

③平成16年３月：『多様化する高等学校における「理科」についての一考察』（共著） 科学教育研究 Vol.28 No.1 pp.8-17

④平成16年３月：『現職教員への科学・技術・社会相互関連理解の機会としての民間企業体験研修について』（共著） 科学教育研究 Vol.28 No.1 pp.60-71

⑤平成15年５月：『総合的な学習としての地学教育』（単著） 地球惑星科学関連学会「地学教育の昨日・今日・明日」 pp.54-57

**業】**①平成15年５月：『平成16年度使用教科用図書選定の手引き』（共著）大阪府教育委員会

**発】**①平成15年６月：『地域における環境教育学会・学習パートナーシップ構築の展開』（単） 日本環境教育学会 第14回大会

②平成15年６月：『環境学習への NPO 等の派遣効果について』（共） 日本環境教育学会 第14回大会

③平成15年７月：『地域における科学教育パートナーシップの展開と課題』（単）日本科学教育学会 第27回年会

共同研究の実施状況

①パートナーシップを重視した教員研修での自然体験プログラムの開発とその評価 代表者：藤岡達也 科学研究費補助金，②水質評価指標および閉鎖系水域の水質浄化を主題とした環境教育プログラムの開発 代表者 橘淳治（大阪府教育センター），③「学習内容と日常生活の関連性に関する教材の作成」 国立教育政策研究所 文部科学省委嘱研究

学会活動への参加状況

①５月31日～６月１日：日本環境教育学会出席，②７月24日～26日：日本科学教育学会出席，③日本地学教育学会評議員，④日本環境教育学会運営委員，⑤日本科学教育学会評議員・編集委員・研究会運営委員

◎特色・強調点等

本年度も自分の専門領域である環境教育やＳＴＳ（科学・技術・社会相互関連）教育の実践的な研究を中心に行ったが，むしろ，学校教育界において関心を持たれたのは，これからのパートナーシップが求められる学校教育・行政について焦点を当てた研究といえる。これからの「開かれた学校づくり」にパートナーシップは不可欠であるが，学校・行政ともその方法については現在模索中と言える。本大学では，最先端の実践教育に取り組み，教育界への貢献が期待されているため，それに適った研究成果を上げることができたと考える。なお，本年度から２年間で科研費「パートナーシップを重視した教員研修での自然体験プログラムの開発とその評価」が採択され，一層この方面での研究が進むことが期待できる。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①「OECD-PISA 生徒の学習到達度調査研究2006」の科学的リテラシー国内専門委員（国立教育政策研究所）

②サイエンス・パートナーシップ・プログラム事業「教員研修」講師（大阪府教育センター）

**◎社会への寄与等**

・小・中学校，盲・聾・養護・高等学校の初任者，10年目研修，管理職研修等において，研修の企画・立案・講師を務め，現在のそれぞれの学校教育の課題等について指導した。また，前職の立場では，教育課程の説明会を実施し，これからの教科の在り方，指導・評価について講演を行った。

## 増　井　三　夫（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

学部：学生が経験してきたclassroomを舞台にし，ここから教育改革の歴史を辿り，今日のclassroomに展開される授業改革の課題について検討する（必要に応じて一般学校とオープンスペースをとる附属小学校を観察する）。近代ヨーロッパ史における市民社会と公共性を歴史教育と歴史学の最前線で検討した。

大学院：教育改革を具体的な学校改革の次元で検討する。更に授業や問題行動場面における複雑な相互行為を解釈する方法を開発する。いずれも具体的なケースを例題として論議する方法をとっている。

**研究指導**

大学院：学級コミュニケイション行為を具体的な授業場面において理解－解釈する方法をトレイニングし，それを授業で実践し，その方法の妥当性を検証していく。アクションリサーチによって専門性を形成していく。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

・平成15年度日本教育大学協会シンポジウム「教員養成のカリキュラムの在り方と教育体制－小学校教員の養成を中心に－」で報告「教員養成の組織及び責任体制の在り方」

・平成15年10月31日熊本大学教育学部教務委員会より本学平成12年度のカリキュラム改革調査対応

・平成16年１月9日和歌山大学教育学部教務委員会より本学平成12年度のカリキュラム改革調査対応

・平成16年１月21日滋賀大学教授大嶋彰氏の本学平成12年度のカリキュラム改革調査対応

・平成16年２月17日～18日和歌山大学教育学部「教員養成カリキュラム改善研究会」講師

**◎特色ある点等**

・初等中等教育改革の先端的課題について理論研究と実践研究を統合している。

・教員養成カリキュラムの改革について大学間交流を行った。

・教育史研究の方法及びドイツ近代農村社会史研究の最先端の研究を行っている。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**発】**第３回比較教育社会史研究会　平成16年３月28日：中谷猛立命館大学教授(フランス政治思想史）と共同合評

**共同研究の実施状況**

①越境する歴史教育　　代表者　加藤章（盛岡大学学長），②佐渡の未来を切り開く学力とカリキュラム開発に関する総合的研究　　代表者　小林毅夫（上越教育大学教育総合研究センター講師）上越教育大学研究プロジェクト，③学級コミュニケイション研究　　代表者　増井三夫（上越教育大学教授）

**学会活動への参加状況**

①平成15年９月５日～８日：教育史学会出席，②平成15～16年度教育史学会理事，③平成15年９月５日～８日：教育史学会研究大会でコロキュウム「ドイツ教育史研究の現状と課題」を山内芳文筑波大学教授と共

同企画，④平成16年３月26日：教育史学会理事会「教育史学会員調査ＷＧ」代表

**◎特色・強調点等**

教育史及び歴史研究の最先端の課題に関わっている学際的な研究者との交流を深めると同時に，さらに，現在の喫緊の教育課題についても現職教員との共同研究に参画及び企画した。

## 山　崎　貞　登（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

全授業において，学習者の主体的な課題解決力や学習過程力，学び合う力を育成するために，元ポートフォリオ及び凝縮ポートフォリオ制作と，ポートフォリオ評価法や同検討会の実施を工夫した。

**研究指導**

学部の卒業論文では，県内公立中学校で技術分野のポートフォリオ制作研究を，修士論文研究では，附属小・中学校において総合的学習のカリキュラムのデザイン，博士論文研究では，附属中学校で技術分野カリキュラムのデザインを研究テーマにして，臨床的な教育実践力育成のため，アクション・リサーチを指導した。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

平成15年12月：群馬大学教育学部教育学研究科非常勤講師「技術科教育特論」

**◎特色ある点等**

教育研究活動において「ポートフォリオ評価法」の臨床的研究と教育実践を重視し，授業を反省的に実践し，自己評価するように努めた。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成15年４月：『A Comparative Study on National Curricular Scopes and Sequence of Technology Education between Japan and England (共著) Proceedings, International Council of Associations for Science Education (ICASE) 2003, Penang, Malaysia, ICASE, pp.758-764

②平成15年６月：『イングランドOCR試験局の中等教育修了一般資格試験”Design and Technology”の評価規準とポートフォリオ』(共著) 日本産業技術教育学会誌第45巻２号，pp.1-10

③平成15年６月：『Program of Study for ‘Design and Technology’ in 1999’s Revised National Curriculum in England』(共著) Proceedings, Pupils’ Attitude Towards Technology (PATT) - 13 Conference, 2003, Glasgow, U.K., PATT, pp.199-210

④平成15年７月：『A Comparative Study on Assessment Criterion in Technology Education between Japan and England』（共著）Proceedings of the Fourth International Primary Design and Technology Conference, Birmingham, U.K., Centre for Research in Primary Technology, pp.77-82

⑤平成15年７月：『Curriculum Design for Japanese Lower Secondary Technology Education and Its Assessment with Pupils’ Self-reflective Thinking』（共著）Proceedings of the Fourth International Primary Design and Technology Conference, Birmingham, U.K., Centre for Research in Primary Technology, pp.83-88

⑥平成16年３月：『Evaluation Criteria for “Developing, Planning and Communicating ideas” for ‘Design and Technology’ in the Revised National Curriculum of 1999 in England』（共著）International Journal of Curriculum Development and Practice, 6(1), pp.1-7

発】①平成15年７月：『北アイルランド４～11歳の‘Science and Technology’の学習プログラム』（共著）日本科学教育学会年会論文集27, pp.319-320

②平成15年８月：『イングランドと日本の技術科教育における評価規準の比較分析』（共著）日本産業技術教育学会第46回全国大会講演要旨集，p. 9

③平成15年11月：『学習者による授業評価と学びの内省を生かした授業改善研究システムの構築』（共著）日本教科教育学会第29回大会講演論文集　p. 159-160

**共同研究の実施状況**

①自己評価システムを利用した技術科カリキュラム開発に関する教育実践研究　代表者：山崎貞登　科研費，②未来社会に求められる科学的資質・能力に関する科学教育課程の編成原理　代表者：小倉康（国立教育政策研究所総括研究官）科研費，③科学技術・職業教育カリキュラム開発の現状と課題に関する国際比較研究　代表者：名取一好（国立教育政策研究所総括研究官）科研費

**学会活動への参加状況**

①４月６日～８日：国際科学教育会議 (ICASE) 出席，②６月21日～ 24：PATT 国際技術教育学会出席，③６月27 ～７月１日：CRIPT 国際初等技術教育学会出席，④７月24日～ 26日：日本科学教育学会出席，⑤８月９日～ 10日：日本産業技術教育学会全国大会出席，⑥11月１～２日：日本教科教育学会全国大会出席，⑦11月８日：日本産業技術教育学会北陸支部会出席，⑧12月13日：日本産業技術教育学会技術教育分科会出席

**◎特色・強調点等**

カリキュラムと評価規準研究を重点に行い，日本の評価規準研究へ還元するように努力した。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①全国的かつ総合的な学力調査の実施に係る研究指定校企画委員会協力者（国立教育政策研究所），②教科等の構成と開発に関する調査研究協力者（国立教育政策研究所），③エネルギー教育調査普及事業推進委員会委員（エネルギー環境教育情報センター），④上越市ＩＳＯ環境マネジメントシステム市民オブザーバー専門委員，⑤６月16日：糸魚川市立下早川小学校研修講師

**◎社会への寄与等**

・国立教育政策研究所との協同研究と，地域の学校研修講師の依頼に積極的に応じた。

**小　林　　恵**（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

学部では「教育課程論（総合的学習を含む。）」，「教科・教材基礎論」，「教育課程論セミナーⅠ，Ⅱ」等を担当。大学院では「現代教育課程特論」「教育方法学研究セミナーⅠ，Ⅱ」等を実施する。

学部の「教育課程論（総合的学習を含む。）」は２年生全員必修の科目である。科目履修生を含めると170名以上の学生が受講しているため，履修生全員を講義に集中させるのに相当苦労した。なお，教養及び教育的関心を高めさせる意図で，毎週テーマを課してレポートを提出させた。また，４～５月の連休と夏期休暇においては教育専門書を指定し，長文の報告書を書かせた。現在の学生の学力，意識，興味等を知る良い機会ともなった。

「教科・教材基礎論」では教育課程に関する書物を輪読して，学生の意識を高める工夫をした。

大学院の「現代教育課程特論」は実践 ( 臨床 ) と理論との融合性に配慮する一方，教育課程に関わる今日

的諸問題について講義を進めた。受講生が比較的少人数であったので，院生の生の声が聞けて有意義であった。

なお，平成16年１月，主に学部３年生対象の「教職講座」で「教育課程・学習指導要領」を講義した。

**研究指導**

学部４年生（１名）の卒業研究を指導し，無事，完了させた。

大学院院生３名(１，２年)の修士論文指導を行う。指導にあたり，院生が入学当初から抱いていた問題意識を最大限に尊重するというスタンスを大前提とした。その上で，その問題意識の根源にあるもの(一種の哲学)を自覚できるように努めた。最終的には，２年生１名の修了をみた。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成15年６月：『転換期における教員養成に関する研究ーデューイの教師像を再認識する試論ー』（単著）日本デューイ学会編，日本デューイ学会紀要，第44号，pp.69-75.

②平成15年７月：「新学習指導要領における成立過程とその問題点に関する一考察」，「あるエセンシャリストの思い描くアメリカ教育振興のための綱領」（W.C.バグリー著，全訳）

これは，上越教育大学研究プロジェクト（平成12年度～平成14年度，研究代表者：高田喜久司）「学校における教育研究システムの構築を指向した大学院カリキュラムの開発に関する萌芽的研究」の研究成果報告書『転換期における学校教育研究の可能性と課題』の中の第１部・第２章（pp.22-35.），第３章(pp.37-50.)である。第２章は単著，第３章は小林個人が訳したもの。

なお，上記「あるエセンシャリストの思い描くアメリカ教育振興のための綱領」について，全文を訳してパブリックになったのは初めてと思われる。

**発】**①平成15年10月：『大学における一般教育に関する考察ーデューイにおける「教養」を手がかりとしてー』（単），日本デューイ学会第47回研究大会（岡山大学教育学部）

**共同研究の実施状況**

①科研「高校総合学習の研究」（基盤C-2：代表者，和井田清司）に参画

**学会活動への参加状況**

①平成15年７月５～６日　日本カリキュラム学会第14回大会出席（上越教育大学）　②平成15年10月11～12日　日本デューイ学会第47回大会(岡山大学教育学部）出席・発表

**その他**

①平成15年７月６日まで，日本カリキュラム学会第14回大会準備委員会副委員長を務める。　②平成15年７月６日，日本カリキュラム学会第14大会，自由研究Ⅱ－１，司会を務める。　③平成15年４月～平成16年３月：前年に続き，高田カトリック教会の協力のもと，「ダブルの子ども」の実態調査・研究を行う。④平成16年３月22日～30日，イタリア，フランスの小・中学校を視察し，意見交換をする。

**田　島　弘　司**（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

学部・大学院ともに，まず学生のニーズ調査を実施し，次に授業の評価基準を明示し，それに沿った評価を行った。また，自律学習能力の伸長を意図して，グループ活動，学生による活動の企画運営等を積極的に取り入れた。

**研究指導**

ゼミにおいては，ゼミ生全員参加の中で各人の定期的な研究発表を課して相互に啓発される場を確保した。Ｍ２のゼミ生に対しては，毎週個別指導を実施した。また，他のゼミ生も必要に応じて個人面接による指導を行った。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

①平成15年７月６日：石川県ユネスコ協会主催のスタディツアーに関するワークショップにおけるコーディネータ，②11月30日：上越国際交流協会主催「外国人スピーチコンテスト」の審査員，③12月３日：近江町公民館において国際交流の出前講座を実施，④12月10～13日：オーストラリア「セントジョージクリスチャンスクール（教員２名，生徒３名）」の上越市におけるホームステイ受入支援，⑤平成16年１月20日：マルチメディア教材開発ソフト「キリハリ教室」を使った教材作成のための研修会（学校教員対象）の実施，⑥２月19～20日：「留学生スキー合宿」での引率指導，⑦３月10日：中国人民大学附属中学校（珠海校区）にて日本語教育を実施。

**◎特色ある点等**

①学生の個性，ニーズに合わせられる可変型のシラバスを採用，②学生に評価基準を明示，③グループ活動，プロジェクト活動の活用等により学生間のインターアクションを促進し自律学習のための教育環境を整備

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**発】**①平成15年５月：「教師のための学びの共同体作り－アクション・リサーチ－」上越教育大学附属小学校「2003春の研究会」ポスターセッション

②平成15年11月：「超高齢社会における『生きる力』とその教育について」上越教育大学附属小学校「2003の研究会」ラウンドテーブル

**他】**①平成15年11月：「日本語プレースメントテスト」鹿児島大学日本語教育研究会（メディア教育開発センターにおける共同研究の成果の発表）

②平成16年３月：「平成15年度留学生経費実績報告書」を文部科学省へ提出

**共同研究（幼，小，中，高等学校及び特殊教育諸学校教員との共同研究を含む）の実施状況**

①「プレースメントテストの開発に関する調査研究」 代表者：小野博（メディア教育開発センター教授）メディア教育開発センター研究費，②「共用サーバー用マルチメディア日本語教材の共同研究開発」代表者：田島弘司　文部科学省「特別配分」必要事業，③「国立国語研究所 e-Japan 研究に付随する『地域・海外学校交流』研究」代表者：任都栗新（東京学芸大学助教授）国立国語研究所研究費，④「国際理解を中心とした総合的学習の内容構成に関する基礎的・実践的研究」代表者：二谷貞夫，科学研究費補助金（基盤研究Ｂ）

**学会活動への参加状況**

①平成15年６月７～８日：日本国際理解教育学会大会出席，②平成15年11月21～24日：日本語国際理解教育学会のメンバーとして韓国国際理解教育学会出席，③平成16年１月23～24日：日本国際理解教育学会実践研究会出席

**◎特色・強調点等**

メディア教育開発センターとの協同研究で大学におけるリメディアル教育のための「日本語プレースメントテスト」の評価は高く，次年度から全国の大学等でリメディアル教育のためのプレースメントテストとして活用されることとなった。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①上越国際交流協会幹事

◎社会への寄与等

・上越国際交流協会の学校支援部会長として学校と地域の連携に貢献

・出前講座の実施（１回）

中　村　光　一（助教授）

〈教育活動〉

授　業

学部，大学院の授業を通じて，学校現場で子どもの様子，授業の様子のデータを参照し授業を構成する。

研究指導

学部，大学院を通じて，学校現場での算数・数学の授業とのかかわりをもった研究指導を行った。

その他の教育活動（学外を含む。）

山梨大学教育学部大学院非常勤講師，金沢大学教育学部大学院非常勤講師

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

論】①平成15年10月：『算数授業におけるシンボル化の過程の分析：個人と集団のかかわりを考慮して』（単著）日本数学教育学会　第36回数学教育論文発表会論文集　pp.277-282.

②平成15年10月：『ある算数の授業におけるきまりの構造過程に関する分析：対象と方法の観点から』（単著）日本数学教育学会第36回数学教育論文発表会「課題別分科会」発表集録　pp.118-125.

③算数・数学とのかかわりについて考える』(共著) 今こそ Do Math!. Pp.15-24. 不二印刷 .

業】①平成15年6月：『子どもの活動と算数とのかかわりを考える研究』（単著）新しい算数研究，No.389, pp.34-35.

発】①平成15年７月：『日豪の授業における学習の文脈の比較』（単）日本科学教育学会年会論文集27, pp.153-154.

共同研究（幼，小，中，高等学校及び特殊教育諸学校教員との共同研究を含む）の実施状況

①平成15年度　上越教育大学研究プロジェクト　代表者：中村光一　②平成15年度　日本教育大学協会研究助成「授業における子どもの学習の様相に基づく算数・数学のカリキュラム開発にかかわる基礎的研究　代表者：中村光一

学会活動への参加状況

①日本数学教育学会誌（算数教育）編集部幹事

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①６月12・19日：小学校教育方法研修講座講師（新潟県教育センター）②８月25日：中里村学習意欲向上事業研修会講師，③10月25 日：新しい算数研究全国大会授業講師，④10月29日：平成15年度小学校算数科指導発展講座講師（新潟県教育センター），⑤２月16日　東京都教育研究員・地区発表会講師（東京都教育委員会），⑥学力向上フロンティア事業，学習指導カウンセラー：青海中学校，⑦柿崎中学校，学力向上フロンティア事業，研究会講師

布　川　和　彦（助教授）

〈教育活動〉

授　業

学部「算数科指導法」においては大人数の講義ではあるが，例えば糖度計でジュースを作る活動を通して比の利用を考えるなど，学生の活動を契機として講義内容へ移行するよう努めた。学部「解析学と探求過程」ではコンピュータを利用するとともに，解析学の初歩的な内容と小中学校の内容との関連性を意識して題材を開発した。

研究指導

大学院修士課程１年生２名，２年生２名の研究指導を行い，２編の修士論文の指導を行った。他に，富山県からの研究生（３ヶ月間），名古屋市からの研究生（２日間）の研究指導を行った。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

**論】**①印刷中：『Solvers' making of drawings in mathematical problem solving and their understanding of the problem situations』（単著）*International Journal of Mathematical Education in Science and Technology*

②印刷中：『Students' appropriation process of mathematical ideas and their creation of hybrids of old and new ides』（共著）*International Journal of Science and Mathematics Education*.

③印刷中：『What students do when hearing others explaining』（共著）*Proceedings of the 28th Conference of the International Group for the Psychology of Mathematics Education*. Bergen, Norway.

**業】**①平成16年３月：『文部科学省検定小学校算数科教科書（１～６年)』（共著）　学校図書

②平成15年10月：『有効な迂回路としての算数・数学』　上越数学教育研究会Σ会 ( 編 ), 今こそ Do Math!(pp. 25-34). 上越数学教育研究会

**他】**①平成15年12月：『算数の理解を支える比喩』　新しい算数研究，No. 395，pp. 30-31.

共同研究の実施状況

①授業における子どもの学習の様相に基づく算数・数学のカリキュラム開発に関わる基礎的研究　代表者：中村光一（上越教育大学助教授）日本教育大学協会研究助成

②子どもの学びの過程に対応する基礎・基本学習カリキュラムと教育実践の総合的研究　代表者：松本健義（上越教育大学助教授）科学研究費補助金

学会活動への参加状況

①日本数学教育学会資料部幹事，②『Educational Studies in Mathematics』誌（オランダ）Editorial Board

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①５月：柏崎市立教育センター専門研修講座講師（「算数・数学における少人数指導」を講演），②６月～３月：柏崎刈羽地教委連絡協議会「発展的な学習指導資料」作成委員，③６月：文科省学力向上フロンティアスクール（六日町小学校）研究授業指導者，④７月：文科省学力向上フロンティアスクール（羽茂小学校）職員研修会講師，⑤８月：鳥取県教育センター研修高等学校数学講師（「問題解決と数学の学習」を講演），⑥９月～ 10月：文科省学力向上フロンティアスクール（田尻小学校）中間発表会指導者，⑦９月～ 12月：文科省学力向上フロンティアスクール（糸魚川東小学校）研究授業指導者，⑧10月：新潟県立教育センター中学校数学科講座講師（「中学校数学科で身につける学力」を講演），⑨10月：文科省学力向上フロンティアスクール（羽茂小学校）中間発表会講師（「発展的な学習と理解の深まり」を講演），⑩１月：新潟県高等学校教育研究会数学部会講師（「高校数学における平面図形の指導」を講演），⑪１月：文科省学力向上フロン

ティアスクール（糸魚川東小学校）中間発表会講師（「確かな学力を目指す算数授業の改善」を講演），⑫１月：文科省学力向上フロンティアスクール（富山県西条小学校）研究会講師（「学習内容を支える算数的なアイデア・イメージ・好奇心」を講演），⑬２月：長野県木祖小学校校内授業改善研究会指導者

**北　條　礼　子**（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

・多文化社会論では，世界の英語を取り上げ，英語の諸相を学生に示した。国際教育概論では，国際理解並びに小学校英語に関する最新話題を提供し，小学校英語については上越市内の小学校の授業参観を実施し，学生の理解を深めた。

・英語科教育評価特論の授業では，評価に関する理論ばかりでなく実際のテスト問題作成における注意事項や実際の作成にも重点をおき，ポートフォリオも取り上げた。英語科教育研究方法演習においては，特に調査研究の方法として実際にアンケート調査項目を作成し，実施し，分析結果を解釈して，発表するという工夫ををを行った。さらに，国際理解教育演習においては，受講者のうち国際理解教育の授業経験のある現職派遣教員がそれぞれの授業実践を発表し，小学校英語に対する理解を深めるため上越市内の小学校の授業参観を行い，授業記録を取った上で小冊子にまとめ，意見の交換を行った。また，２名１組で小学校英語活動の小活動を工夫・考案し，授業内で実演を行った。最後に，国際理解教育特論においては，国際言語としての英語の諸相を話題として取り上げた。なお成績の評価については，上記のいずれの授業においても開始時に学生にその方法を明示した。

**研究指導**

修士論文の指導においては，研究テーマの設定時から研究計画，実施，結果の分析，結果の解釈，考察まで段階を踏んで，指導，助言を行った。また，修士論文の予備調査結果を学会発表するための指導を行った。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

①平成15年４月～平成16年３月：国立療養所新潟病院附属看護学校非常勤講師として，「外国語（英語）」を担当した。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成15年７月：『Instructional Tool in EFL Writing Classes of Japanese Junior High School Students: A Survey on the Relationship between Wrting Ability, Learing Strategies, and Affective Factors』（共著）上越英語研究　第４号　pp.23 ～ 32

②平成15年９月　『小学校英語教育に対する生徒・保護者の意識調査：山梨県Ｉ中学校の場合』(共著）上越教育大学研究紀要　第23巻 第１号　pp. １～ 10

③平成16年３月『公立小学校における『英会話活動』に関する意識調査－公立小学校教諭初任者に対するアンケート調査をとおして－』(共著）小学校英語教育学会紀要　第４号　pp.33 ～ 39

④平成15年３月　『中学校社会科の追究活動における教授ツールとしてのポートフォリオを活用した事例研究』（共著）教育実践研究第14集　pp. １～８

⑤平成15年３月　『ＥＦＬ表現活動における教授ツールとしてのポートフォリオのガイドラインの設計に関する研究』（共著）　上越教育大学研究紀要　第22巻 第２号　pp.395 ～ 406

**発】**①平成15年６月：『公立小学校における「英会話活動」に関する意識調査－千葉県沼南町の６年生児

童・保護者に対するアンケート調査をとおして－』（共）日本児童英語教育学会(JASTEC)第24回全国大会研究発表

②平成15年７月：『公立小学校における「英会話活動」に関する意識調査－小学校英語活動指導者講座参加者に対するアンケート調査をとおして－』(共）第７回上越英語教育学会研究発表

③平成15年８月：『外国語(英語）のライティング学習における教授ツールとしてのポートフォリオの有効性』(共）第29回全国英語教育学会南東北研究大会研究発表

④平成15年８月：『公立小学校における「英会話活動」に関する意識調査－公立小学校教諭初任者に対するアンケート調査をとおして－』(共）第４回小学校英語教育学会京都大会研究発表

⑤平成15年10月：『中学校社会科の追究活動におけるポートフォリオの活用』(共）上越教育大学社会科教育学会第18回研究大会研究発表

⑥平成15年11月：『中学校国語科の書く活動における教授ツールとしてのポートフォリオの効果についての事例研究　』(共)2002年日本教育工学会第19回全国大会研究発表

⑦平成15年11月：『公立小学校における「英会話活動」に関する意識調査－千葉県沼南町の中学１，２年生生徒・保護者に対するアンケート調査をとおして－」2002年日本教育工学会第19回全国大会研究発表

⑧平成15年11月『公立小学校における「英会話活動」に関する意識調査－公立小学校教諭10年経験者に対するアンケートをとおして－」(共）日本教科教育学会第29回全国大会（筑波大会）研究発表

**共同研究（幼，小，中，高等学校及び特殊教育諸学校教員との共同研究を含む）の実施状況**

①公立小学校への英語教育導入に伴う諸問題とその対策　代表者：斎藤九一（本学）　科学研究費補助金　②言語学習における自律学習を目指す教授ツールとしてのポートフォリオ利用に関する研究　代表者：北條礼子　科学研究費補助金　③小学校における英語教育カリキュラムの開発研究　代表者：北條礼子　本学研究プロジェクト研究　④国際理解を中心とした総合的学習の内容構成に関する基礎的・実践的研究　代表者：二谷貞夫(本学）　科学研究費補助金

**国際研究プロジェクトへの参加状況**

①2003年度アジア・太平洋地域教育工学東京セミナー／ワークショップに参加日本ユネスコ国内委員会・教育工学センター連絡協議会・東京学芸大学主催

**学会活動への参加状況**

①平成15年６月29日：日本児童英語教育学会(JASTEC)第24回全国大会出席　②平成15年7月26日：第７回上越英語教育学会出席　③平成15年８月10日：第29回全国英語教育学会南東北研究大会出席　④平成15年８月22日：第４回小学校英語教育学会京都大会出席　⑤平成15年10月４日：上越教育大学社会科教育学会第18回研究大会出席　⑥平成15年10月11～12日：2002年日本教育工学会第19回全国大会出席　⑦平成15年11月2日：教育学会第29回全国大会（筑波大会）出席

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①平成15年４月～平成16年３月　本学附属小学校研究会研究協力者　②平成15年６月　新潟県立教育センター平成15年度小学校英語活動指導者講座　③平成15年８月　上越市教育委員会主催平成15年度国際理解教育・英語活動等研修会指導者　④平成15年12月　上越市立春日小学校校内研修(小学校英語教育について）講師

松　本　　修（助教授）

〈教育活動〉

授　業

大学院「学習と言語」では，授業における話し合いデータの分析方法をわかりやすく示すため，俳句解釈の話し合いを講義の中で行い，その録音をデータとしてその場で分析するという実演型授業を試みた。学部「国語科と学習過程」でもミニティーチングをビデオにとり，その場で分析するという授業を行っている。

研究指導

院生・学部生ともに十分な話し合いによって研究上の関心を焦点化し，研究方法についても本人の関心のありように基づいて自由にその立場を選択できるようにしている。また，ゼミ生の他ゼミへの参加，他ゼミ生のゼミへの参加を開放し，オープンな運営になるようにしている。教材研究の力量を高めるため教材研究ゼミを行った。

◎特色ある点等

教科書研究センターの科学研究費研究における教科書研究や教科書編集の現場での取り組みを活用し，講義に反映させている。ナラトロジーを基盤とした教材・学習研究，授業分析研究については研究の最前線にあるものとして素材を提供している。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

著】①平成15年12月：『学校図書館司書教諭養成通論』（共著）上教大学校図書館司書教諭養成研究会　三恵社

②平成15年12月：『芥川龍之介新辞典』関口安義編（共著：項目「教科書と芥川文学」「トロッコ」）翰林書房

論】①平成15年６月：「文字の学習から語彙の学習へ」（単著）『実践国語研究』243　明治図書　pp.5-10

②平成15年９月：「教室における話し合い活動の活性化」（単著）『月刊国語教育研究』No.377 9　明治図書　pp.4-9

③平成15年９月：「読みの交流における話題と話し合いの様相」（単著）『国語科教育』第54集　全国大学国語教育学会　pp.11-18

④平成15年12月：「池波正太郎「剣客商売」における語り」（単著）『Groupe　Bricolage 紀要』No.21 Groupe　Bricolage　pp.12-19

⑤平成15年12月：「「語り」に焦点化した読みの交流における話し合い活動の内容と形式」（単著）『Groupe Bricolage　紀要』No.21 Groupe Bricolage　pp.20-29

⑥平成15年12月：「授業参観者の授業の見方の違いについて－ビデオ撮影におけるフレーミングと主観」（単著）『Groupe　Bricolage 紀要』No.21 Groupe Bricolage　pp.30-38

⑦平成16年２月：『「小・中学校の教科書の読みやすさ・わかりやすさに関する調査研究」教科別最終報告書　国語科』（共著）平成12～15年度文部科学省科学研究費補助金　特別研究促進費(1)課題番号12800005　研究代表　藤村和男　教科書研究センター

⑧平成16年３月：『「小・中学校の教科書の読みやすさ・わかりやすさに関する調査研究」最終報告書』（共著）　平成12～15年度文部科学省科学研究費補助金　特別研究促進費(1)課題番号12800005　研究代表藤村和男　教科書研究センター 2004. 3

発】①平成15年５月：「読みの交流における話題と話し合いの様相」第104回全国大学国語教育学会発表

②平成16年１月：「話し合いプロトコルの質的三層分析」第２回臨床教科教育学セミナー　発表

**共同研究の実施状況**

①「小・中学校の教科書の読みやすさ・わかりやすさに関する調査研究」平成12～15年度文部科学省科学研究費補助金　特別研究促進費(1)課題番号12800005　研究代表　藤村和男　教科書研究センター

②連合大学院特別プロジェクト研究「教師コミュニティーの創成を通じての教員養成・現職再教育プログラムの開発研究」 研究代表　戸北凱惟

**学会活動への参加状況**

①５月10日：日本国語教育学会高校部会出席　②５月22～23日：全国大学国語教育学会第104回大会出席　③８月10日：日本読書学会第47回研究大会出席　④８月11～12日：日本国語教育学会第66回国語教育全国大会出席　⑤10月11～12日：全国大学国語教育学会第105回大会出席　⑥１月10日：第２回臨床教科教育学会臨床教科教育学セミナー出席　⑦全国大学国語教育学会理事

**◎特色・強調点等**

ナラトロジーを基盤とした教材・学習研究，授業分析研究については研究の最前線にあるものであり，全国大学国語教育学会の論文は巻頭に掲載された。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①教科書研究センター特別研究員　②５月～６月：本学公開講座講師「教科書の中の文学」 ③11月：見附市立有明台小学校研究会講師

**◎社会への寄与等**

学校現場の教材研究・単元開発などの相談に幅広く応じている。自主的研究団体の研究活動にも積極的に参加し，研究と実践を相互につなぐよう日々活動している。

**松　本　健　義**（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

学部・大学院を通じ，幼児の遊びと造形的表現の成立過程，児童・生徒の学びの成立過程について事例に基づく臨床的理解を図ると共に，表現活動演習，学習場面分析演習を行い，臨床的理解と実践的資質の向上を図った。評価は小レポート，レポート報告，演習により行った。卒業生及び修了生は，幼稚園，小学校に就職し活躍している。

**研究指導**

学部では，小学校及び中学校教育実習と卒業研究を連携して事前指導，教材開発，学習活動分析を行う臨床的な研究指導を行った。大学院では，新潟，長野，東京，神奈川，栃木等の小中学校での校内研究会と連携した観察調査や実践開発研究を行い，子どもの実践を通した学びの成り立ち，教科間に通底する子どもの知の生成過程の在り方とその支援について，現象学的視点から臨床的な実践研究法を指導した。

**◎特色ある点等**

近年，教師の資質として求められている，子どもの遊びや学びの活動過程に共に臨みこれをとらえ支える「学習臨床学」,「学習カウンセリング」の構造について，現象学，エスノメソドロジー，状況的認知，認識の社会的構成論，精神病理学等の学際的見地から，臨床的な研究調査と実践開発の一体的化した在り方を新たに開発した。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

論】①平成16年３月：「つくり表す行為，つくり表されるもの，つくり表す行為者の相互的生成過程」，大学美術教育学会「大学美術教育学会誌」第36号 ,pp.417-424( 単 )

発】①平成15年６月：「子どもの学びの過程の認知的・社会的成り立ち」第10回日本子ども社会学会 ( 単 )

②平成15年８月：「子どもが学んでいるということと学習過程の臨床的なカリキュラム」第７回日本芸術教授学研究会 ( 単 )

他】①平成16年３月：「学びのつながりが描き出す教育課程」，上越教育大学学校教育学部附属小学校高田教育研究会編『教育創造』第146号，pp.14-17

②平成15年度放送大学学園科目 ( 番組 ) 名「教育社会学」「第４回幼児教育の意味」において「できごとの協同形成過程における幼児の造形的行為の認知的・社会的役割に関する研究」に関する研究報告 (20分間：16 ～ 36分，全45分 )

③平成16年３月：「 子どもの学びの過程に対応する基礎・基本学習カリキュラムと教育実践の総合的研究 」，平成13-15年度科学研究費補助金基盤研究 ( Ｂ )(1) 平成14年度研究成果報告書『子どもの学びの過程に対応する基礎・基本学習カリキュラムと教育実践の総合的研究〔Ⅲ -1〕』( 研究代表者上越教育大学教授西野範夫，課題番号13480058)，pp.25-80.

共同研究の実施状況

①子どもの学びの過程に対応する基礎･基本学習カリキュラムと教育実践の総合的研究　代表者：松本健義（上越教育大学助教授）科学研究費補助金

学会活動への参加状況

①６月29 ～ 30日：第10回日本子ども社会学会出席，　②８月９～ 10日：第７回日本芸術教授学研究会出席，

③８月18日～ 19日第5回美術教育実践学会出席，シンポジウム「芸術の他者⇔教育の他者 : 行為すること，いま紡がれる教育と社会」企画及びコーディネーター，同副理事長，④大学美術教育学会学会誌委員

◎特色・強調点等

子どもの学びの過程としての臨床的カリキュラムの認知的・社会的在り方について，現象学，エスノメソドロジー，状況的学習論，現代美術等の視座から明らかにし，その臨床的研究開発の在り方について研究開発を行った。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①平成16年２月：第44回新潟県児童生徒絵画・版画コンクール審査員

和井田　清　司（助教授）

〈教育活動〉

授　業

多様な学生・院生のニーズに対応する工夫をこらした。特論履修者の研究を集約し，研究報告書（「日本における学習指導論の系譜」全246頁）を作成した。

研究指導

学部生３名，大学院生15名，教職員留学生１名を担当した。また，現場実践に学ぶため，各地に学校訪問調査を行った。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

武蔵大学・長岡大学で教科指導法や学校論の講義を担当した。教育実習では，訪問指導を行った。また，学外において種々の講師を担当した。

**◎特色ある点等**

授業や研究指導をとおして，①今日的な教育課題と相対する姿勢の重視，②広い視野から今日的問題を考察できる参照軸の拡大，③データの収集と分析による手堅く地道な研究姿勢の堅持，を重視した。

また，研究交流のネットワーク構築をめざし，「学校臨床コロキウム」（毎週一回），「総合学習の明日を拓く連続セミナー」（平成11月～12月に３回，延べ100人以上の参加）を主宰した。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**著】**①平成16年３月『中学校・高等学校公民教育』（分担執筆）第一学習社

**論】**①平成15年７月「公民科における授業改革の課題と教員養成」武蔵大学『教職課程研究年報』第17号 pp.23-32

②平成15年７月「戦後総合学習の源流」武蔵大学人文学会『武蔵大学人文学会雑誌』第35巻1号 pp.17-51

③平成15年８月「高校総合学習の特質と実践方向に関する一考察」学校教育学会『学校教育研究』18号 pp.170-183

④平成15年８月「「土佐の教育改革」の連続と不連続」日本教育学会『教育改革の総合的研究』第三集 pp.152-157

⑤平成15年10月「学校改革における学校参加の可能性と課題」教師教育学会『研究年報』第12号 pp.77-87

⑥平成16年２月 「未完の教師修行」武蔵大学『武蔵大学人文学会雑誌』第35巻3号 pp.117-156

**発】**①平成15年７月「戦後総合学習の源流」（日本高校教育学会報告）

②平成15年８月「土佐の教育改革の連続と不連続」（日本教育学会報告）

③平成15年10月「"水俣病授業"再考」（日本社会科教育学会報告）

**他】**雑誌論文を数本執筆した。

**共同研究の実施状況**

①教育改革の総合的研究（日本教育学会特別課題研究），②地方分権改革下の教育改革に関する研究（科研費），③高大連携をめざした高校総合学習の研究（科研費），④高校総合学習の実践状況と初期評価に関する総合的調査研究（代表者和井田，科研費），⑤高校総合学習に関する研究（代表者和井田，教大協委託研究）

**国際研究プロジェクトへの参加状況**

①中国教師研修支援事業（東北師範大学附属小学校訪日研修団支援，平成16年２月8日～２月21日），②日中開放式個性化教育研究会準備打合せ（長春，平成16年２月29日～3月11日）

**学会活動への参加状況**

①平成15年7月　日本カリキュラム学会運営（会場校・上越教育大学・準備委員会事務局長を担当），②平成15年10月　日本教師教育学会運営（会場校・上越教育大学・準備委員を担当）

**在外研究の状況**

①平成16年２月15日～２月18日 韓国のカリキュラム改革の現状と課題に関する現地調査，②平成16年2月29日～3月11日 中国のカリキュラム改革の現状と課題に関する現地調査

◎特色・強調点等

①典型的な授業実践への歴史的研究と今日的な視点からの再評価，②学校教育をめぐる今日的な課題へのアクセス，③東アジアの教育課程改革と総合学習の特質と現状に関する研究，が指摘できる。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

要請に応じ，以下のような指導を行った。

①学力フロンティア事業講師（六日町中学校，平成15年５月～），②看護実習指導者講習会講師（平成15年８月），③山梨県教育センター研修会講師（平成15年８月），④北頸城郡授業研究会講師（平成15年11月），⑤高校生ディベート指導（上越市教育委員会社会教育課，平成15年12月）。また，コンサルテーション事業にて相談実務のスタッフを担当した。

◎社会への寄与等

・上記の活動により，社会への寄与を行った。

髙　野　浩　志（講　師）

〈教育活動〉

授　業

１．学部１年対象の教育情報演習では e-mail の利用，ホームページ作成など，情報教育に必要なコンピュータ技能を身に付けさせる演習を行った。これは学部一年必修の課目であり，情報教育専門部会の責任で行われるものであるから，年に４回の会合をもち，他教官との連携をもちながら演習，成績評価等を行っている。

２．学部２年対象の情報教育演習や，学部４年生対象のネットワーク演習では，コンピュータ演習が中心となっているので，全員の進捗状況を把握しながら演習を展開していった。評価項目をわかりやすく設定し，それに基づく成績処理を行った。

３．情報教育実践演習（大学院）では，情報教育を進めるのに必要なコンピュータスキルを身に付けさせる演習をおこなった。学生の希望も取り入れた演習テーマを設定し，学生のニーズに応えた演習となった。

研究指導

学習臨床講座情報教育分野の院生（修士２年）に対して「専門教科「情報」・ネットワークシステム実習教材の開発」をテーマとして研究指導をおこなっている。

学部生（４年生）３人に対してそれぞれ「教育情報化コーディネータ試験のネットワーク技術支援 Web サイトの製作と活用」「専門教科「情報」における動画編集学習支援 Web サイトの作成と評価」「高校「情報Ａ」における表計算ソフトのスキル支援 Web サイトの製作と活用」というテーマで卒業研究指導をおこなっている。学部生（２年生）対して，卒業研究に向けての基礎知識・技能の習得指導を行っている。

それぞれの学生に対し，最低一週間に一こまを議論・演習の時間と設定し，指導を行っている。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

発】①平成14年11月：「集合的自己触媒ネットワークの自己生成膜による区分化シミュレーションに向けて」第７回新潟大・山形大素粒子論研究室合同研究会

共同研究の実施状況

①「学習者による授業評価と学びの内省を生かした授業改善研究システムの構築」代表者　山崎　貞登

尾　島　　卓（助　手）

〈教育活動〉

授　業

実践場面分析演習Ⅰ「教育方法」および研究セミナー「教育方法」では，基礎学力形成の取組と総合的な学習の時間の充実との間で揺れる学校における授業をめぐる状況を視座に入れ，伝統的な学級教授組織を見直す視点としての学級づくりと授業づくりの新しい連関の在り方にかかわって指導・助言を行った。

研究指導

学習臨床コース教育方法臨床分野の修士論文構想発表会および中間発表会において，戦後授業研究の成果と課題を学院論文に反映させるよう指導・助言を行った。

その他の教育活動（学外を含む。）

①平成15年９月～12月：国立療養所新潟病院看護学校非常勤講師として「教育学」を担当した。

②平成15年８月：金沢大学文学部・法学部・経済学部非常勤講師として「教育課程論」を担当した。

◎特色ある点等

とりわけ「その他の教育活動」の学外での講義では，戦後のカリキュラム開発史におけるトピック的な教育実践の成果を身体を通して体験できるプログラムを準備した。例えば，信州の白紙単元や総合で取り組むべき現代的な課題を話題にする際にビデオ教材を用いたり，学力の国際比較で用いられた実際のテストを教材として使用した。

また，「授業」と「研究指導」では，現職院生が囚われている「学校的常識」が通用しなくなってきた背景を提示し，教育における目標，内容，方法及び組織の間の連関を問い直す視点として，学級づくりと授業づくりの新しい関係を理論的に示唆している点に先進性がある。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

論】①「授業における共同探求過程成立を志向した教材開発の試み⑴」『上越教育大学研究紀要』第23巻２号815～828頁

共同研究の実施状況

国語科および算数科の教材開発を通して，様々な格差のある学級集団における授業づくりの新たな展開に関する理論的検討を新潟県下の小学校教員の自主サークル，また本学附属小学校教官との共同研究において行った。

学会活動への参加状況

①７月４日～６日：日本カリキュラム学会第14回大会出席，②８月２日～８月３日：日本学校教育学会18回研究大会出席，③８月26日～27日：日本教育学会第62回大会出席，④９月27日～９月28日：日本教育方法学会39回大会出席

本学で開催された日本カリキュラム学会では準備委員会委員を務める。また日本学校教育学会，事務局幹事として学会ホームページ作成の準備作業に携わる（平成13年９月以降）。

◎特色・強調点等

「人間関係形成能力」や「交わり能力」の低下や地域・家庭の変容をも視野に入れ，これまでの学級の授業における集団づくりを検討することは，授業研究運動の成果を継承するうえで重要な理論的・実践的課題である。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①新潟県下の教員による自主的な授業研究サークル「新潟学習集団サークル連合」における研究推進のための指導・助言を行った。

②新潟大学教育学科の教官・学生と共同で，上記サークルの所属する小学校で年４回の授業研究を実施した。

③民間研究団体「現代学習集団授業研究会」理事として運営と研究に対して助言を行っている。

④広島県下の教員が組織している授業研究サークルの研究大会などにも参加している。

【幼児教育講座】

大　山　美和子（教　授）

〈教育活動〉

授　業

学部の授業では保育指導者の協力を得ながら，シラバスに掲載した内容に沿って進めた。教育実践力を高める目的で授業内容と関連させて教育現場での観察を行い，学生に学習意欲を持たせた。音楽技術の習得は教材分析を通してその力量を高める工夫を行った。出席状況ならびに授業態度，筆記と実技試験，必要に応じてレポートの提出などから総合的に評価を行った。

大学院の授業では最近の研究成果から得られた幼児音楽に関する情報を提供し，その諸問題について各人で文献及び教育実践を通して明らかにした。また教育現場を通して音楽活動内容の検討も行った。レポート発表及び基礎的な音楽表現技術等から総合的に評価を行った。

研究指導

学部生については幼児の音楽表現に関する文献研究と教育現場での約３ヶ月に渡る観察調査のデータをもと専門的な指導を行った。また論文作成にも日常的な助言を行い全員卒業するように配慮した。

大学院生については幼児のリズム構築を文献研究から導き出し，それをもとに約１ケ年の継続調査を教育現場で行っている。調査方法・資料の分析方法等についての専門的な指導を行っている。

その他の教育活動

附属幼稚園長を併任

◎特色ある点等

教育現場で展開される保育と音楽表現活動の関係についてより深く幼児理解することを通して，学生が自ら積極的に課題を見つけることが出来るよう指導者を交えて様々な視点から討論を行い，成果をあげる努力をした。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

著】①平成15年５月：『楽しく遊べるこどものうた』(改訂版)(共著) すずき出版

共同研究（幼，小，中，高等学校及び特殊教育諸学校教員との共同研究を含む）の実施状況

①「保育実践に役立つ，幼児の音楽的表現力を高める方法の構築」に関する研究代表者：角藤智津子(埼玉県立大学短期大学部助教授) 埼玉県立大学短期大学部奨励研究

②『かかわり合いの中でつくる園生活』－幼小の発達の連続性を踏まえた教育課程の開発－　代表者：大山美和子（上越教育大学附属幼稚園)，平成16年２月　県教育公務員弘済会・新潟日報社主催の第三回「特色ある教育実践校・園」の論文審査で優良校賞受賞

**学会活動への参加状況**

①５月17日～18日：日本保育学会第56回大会出席，　②９月20日：ペース・メソッド日本支部研究会出席(特別参与)，　③比較舞踊学会会員，　④日本音楽教育学会会員，　⑤日本木琴協会会員

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①平成15年４月～平成16年３月　上越市総合計画審議会委員，　②平成15年７月～平成15年９月　大潟町統合保育園・児童館設計業務委託業者選定委員会副委員長

**◎社会への寄与等**

・保育研究者及び保育実践者を対象に，「保育について語る会」（講師　諏訪きぬ明星大学教授・保育学会理事）を附属幼稚園・幼児教育講座で共催し代表を務めた。

## 鈴　木　情　一（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

今後数年間を授業方法と内容との質的な再検討をおこなう時期として設定することとした。今年度はその授業内容の提示方法について，口頭による解説，ＯＨＰ等による要点の呈示，授業に必要な資料（事前に入手する）の指示と入手法の教示，レポート課題の提出，参考文献の紹介，配布するレジュメ，等について，その配当を試験的に行った。これに伴い，評価の方法も若干ではあるが変更した。なお，各授業のオリエンテーションにおいて授業の進め方や評価の方法（試験とレポートの採点方法，等），前年度の評価結果について説明している。

**研究指導**

学　部　卒業論文の指導は１名であった。前年度の実践セミナーで観察・調査したテーマを継承・発展させる形で卒論にまとめることで合意した。実践セミナーでの観察結果をカテゴリーとして具体化し，そのカテゴリーを用いて複数の幼稚園観察を実施し，「幼稚園の掲示物」の実態を〈子どもにとっての見やすさ〉といった観点から評価したものである。

大学院　２名の院生を送り出した。修士１年生は１名である。２名とも観察法による修士論文を計画したことから，幼稚園・保育所での事前観察・予備観察を奨励し，１名には求めに応じて保育所を紹介した。論文執筆の時点では教育・保育実践への提言を盛り込むよう指導した。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

・信州大学繊維学部において「発達と教育」について非常勤講師を務めた。

・学校図書館司書教諭講習会の講師を務めた。

・幼稚園専修教育実習の引率で４つの幼稚園に赴き，挨拶と教育・保育参観を行った。

・保育実習専門部会のメンバーとして保育実習計画等の立案を行った。

**◎特色ある点等**

職務に追われ大胆な授業改革を断行できなかった。学生の専門的な知識やスキルを適正に評価し，彼らの実践的な興味・関心の対象を的確に把握する必要性を今更ながらに自覚した。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**他】**①平成15年２月：『頭で，考える？』（単）『風』（株）おもちゃ箱

学会活動への参加状況

①平成16年３月20日～24日：発達心理学会出席

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①平成15年11月25日：妙高村教育委員会主催後援会，②その他あり（省略）

◎社会への寄与等

・上記の〈その他〉で大学での研究・教育の成果を地域に還元した（が，公表はできない）。

南　舘　忠　智（教　授）

〈教育活動〉

授　業

学部では「子どもの心理・発達概論」「保育の心理と行動」「生活」「生活科指導法」等を，修士課程では「子どもの発達心理学」「子ども理解の実践演習」等を担当した。これらを含めて，いずれの講義演習についても，教育実践現場の動向を把握しつつ，受講者の問題意識の掘り起こしと幼稚園（保育所）小学校教育現場への積極的な接近に一層の留意を払いながら展開した。

研究指導

学部学生４人の卒業論文と修士課程院生１人の修士論文の指導に当たった。このうち，修士論文は病棟保育士の現状と課題について追究した興味深いものであった。いずれの研究もテーマは実践現場に密着したところに設定されており，それぞれ幼児を巡る今日的実態の解明に迫るものであった。この他，修士課程研究生（留学生）１人の指導教官としてかかわった。

◎特色ある点等

講義演習の展開に際して「活動」の組込みに引き続き留意した。幼児・児童の発達・教育を扱う講義演習であるだけに，この点を強く意識し工夫を凝らしながら展開した。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

論】①・平成16年３月：『ブリッジ科目Ⅰ「生活」の今とこれからを考える－小学校生活科経験済み学生の出現を視野に入れながら－』（単著）　大学における << 生活科教育 > 教育 > の探究　第12集

◎特色・強調点等

幼稚園から小学校にかけての教育現場で生じつつある新しい動向及びその背景を視野に収め，問題の所在及び今後の可能性等について考察を深めた。

〈社会との連携〉

◎社会への寄与等

幼稚園教育と小学校教育の連携をキーワードに，幼稚園教育・小学校教育に携わる教職員に向けて発言を行った。

木　村　吉　彦（助教授）

〈教育活動〉

授　業

学部の授業で特筆できることは，「幼稚園参観」（２年次），「保育所参観」（３年次）を今年度も導入したことである。現場の実態と乳幼児のありのままの姿に触れたことは，学部生達に新鮮な感動を与え，その

後の学習への大きな動機付けになったようである。また，「生活」「生活科教育法」では，80名という大人数にもかかわらず，今年度も受講生達に意見発表の場を多く設け，授業に対する積極的な参加を得ることができた。一方，大学院の授業「幼小関連論」では，少人数の利点を生かして討論中心の授業を展開した。このように，授業においては，常に「現場主義」を徹底させ，学生との「双方向」のやりとりを伴う「参加型授業」によって，臨床的な実践力の育成を目指した。

また，成績評価においては，大人数授業ではなるべく授業の都度感想等を書かせ，一人一人の理解力・思考力・批判力等をチェックしている。少人数の場合は，私とのやりとりのなかで受講生理解に努めている。最終評価は，収集した多くの評価材料を駆使し，出席・レポート・作品等全ての要素を加味し，総合的に行っている。

**研究指導**

学部３年生４人，大学院修士１年生１人について論文指導を行った。主として「セミナー」の時間を用い，ルソー著『エミール』を購読した。また，それぞれの卒業論文・修士論文に向けた指導も行った。テーマは，「子育て支援」「幼保一元化」「異年齢保育」「幼小連携」「固定遊具の保育援助」と多岐にわたっている。卒業・修了該当者はなし。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

①平成15年９月：信州大学教育学部非常勤講師として「幼児教育学概論」を集中講義で担当した。

②平成15年６月：「教職直前講座『生活』」担当，同年11月：「教職講座Ⅰ『生活』」担当。受講者各約25名。

③平成15年前期：１年次必修科目「体験学習」に参画。「体験学習Ｂ」（濁川教授・阿部靖子助教授と）担当。

○「社会教育」関係については，〈社会との連携〉欄に別記。

**◎特色ある点等**

「現場主義」を可能な限り貫こうとしている。教育・保育現場にできる限り足を運び，具体的な子どもの姿をもとに教育・保育を語り，子どもの学びを語るという研究スタイルを授業実践にもそのまま生かしている。この姿勢は，この数年間変わっておらず，授業者自身の学校現場との強いつながりを前提にして，受講生達に実践的な力量を付けようとしている。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成16年２月：「学びの連続性－幼小の相互理解のために－」（単著）全国国公立幼稚園長会編『幼稚園じほう　2004年２月号』pp.12-18.

②平成16年３月：「生活科を再び学校変革の起爆剤に！～今，生活科教師の課題とは～」（単著）学校図書『小学校指導シリーズ　新しい生活科の扉を開けよう』pp.15-20.

③平成16年３月：「生活科教師の今日的課題－「子ども理解」の在り方を中心に－」（単著）愛知教育大学生活科教育講座紀要『生活科・総合的学習研究第２号』pp. 1 -10.

**業】**①平成16年１月文部科学省検定合格：小学校教科書『平成17年度用　みんなとまなぶ　しょうがっこうせいかつ』上・下（共著）

②平成16年３月：上越教育大学幼児教育講座生活科研究グループ実践報告書『大学における〈〈生活科教育〉教育〉の探究　第12集』（共著）

**発】**①平成15年６月：「遊びから学習へ」（単）日本生活科・総合的学習教育学会第11回研究大会　研究発表

②平成15年11月：「『遊び』のなかの『学び』～『ものづくり』活動のなかの『学び』～」（単）日本生活科・総合的学習教育学会第２回シンポジウム・ワークショップ　研究発表

③平成16年３月13日・14日：「教育実践研究と教師教育改革－上越教育大学の場合」（単）学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2004　基調提案

**他】**①平成16年３月：責任編集『新学習指導要領一部改正の真を語る！』（嶋野道弘文部科学省初等中等教育局視学官による新潟県生活科・総合的学習研究会第10回大会講演冊子）

**共同研究の実施状況**

①生活科で育った学力についての調査研究　代表者：野田敦敬（愛知教育大学助教授）科学研究費補助金

**学会活動への参加状況**

①日本生活科・総合的学習教育学会地域世話人，②新潟県生活科・総合的学習研究会事務局長，③平成15年５月17日～18日：日本保育学会出席（静岡市），④６月21日～22日：日本生活科・総合的学習教育学会出席・研究発表（山口県・萩市），⑤11月12日：日本生活科・総合的学習教育学会第２回シンポジウム・ワークショップ出席・研究発表（東京都・立教大学文学部），⑥平成16年１月11日：新潟県生活科・総合的学習研究会第10回研究大会出席（長岡市），⑦３月13日・14日：学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2004出席・基調提案発表（福井大学教育地域科学部）

**◎研究活動の特色**

これまで培った「教育思想」研究の成果を踏まえつつ，教育の本質に依拠しながら，現場主義に基づく教育学研究を推し進めている。それは，具体的な子どもの姿をもとに教育を語り，子どもの学びを語る，という研究スタイルである。「生きて働く教育学」の構築を目指し，「教育学の基本」に忠実な研究活動を今後とも推進したい。

**〈社会との連携〉**

文部科学省（初等中等局小学校課）関係

①平成15年10月～：全国的かつ総合的な学力調査の実施に係る研究指定校（小学校生活）企画委員会委員

学校教育に係る公開研究会指導者等

①平成15年５月30日：上越教育大学学校教育学部附属小学校公開研究会ワークショップ提案者

②平成15年９月24日：山形県鶴岡市立朝暘第二小学校公開研究会指導者・記念講演講師

③平成15年10月10日：山形県羽黒町立第二小学校公開研究会指導者・記念講演講師

④平成15年10月17日：山形県南陽市立中川中学校公開研究会指導者・記念講演講師

⑤平成15年10月24日：山形県羽黒町立泉幼稚園公開研究会指導者・記念講演講師

⑥平成15年11月28日：上越教育大学学校教育学部附属小学校公開研究会ワークショップ提案者

⑦平成15年12月８日：静岡大学教育学部附属静岡小学校公開研究会（指導助言者）

⑧平成16年２月７日：高知大学教育学部附属小学校公開研究会（指導助言者）

地方自治体主催研修会講師

①平成15年７月４日：山形県上山市校長・教頭研修会「私が見たスイスの教育事情」，②７月22日：高知県教育センター研修会「幼児教育から小学校教育へ－生活科を通して－」，③７月30日：山形県上山市生活科・総合的学習研究部会研修会「ペスタロッチと日本＆幼児教育から小学校教育へ」，④８月21日：千葉県八街市全市研修会「連携教育に求められるもの」，⑤８月27日：新潟県小千谷市教育委員会研修会「男女共同参画社会実現に向けて～それを妨げている要因を探る～」，⑥10月23日：山形県酒田市教育委員会「幼保小連携」研修会「発達段階を踏まえた連携の在り方」，⑦11月４日：東京都福生市教育委員会「総合的な学習」研修会「幼小中連携を意識した総合的な学習の実践」，⑧11月20日：新潟県教育センター「生活科」研修会「生活科における指導と評価」，⑨平成16年３月23日：山形県上山市福祉事務所主催全市保育士研修会「発達指標の活用について」

校内研修会講師等

平成15年度山形県南陽市学校アドヴァイザーを務める。山形県・新潟県・富山県内５市町にある８つの校・園について計15回の校内研修会を担当した。

社会教育分野

①平成15年度文部科学省委託嘱事業「男女の家庭･地域生活充実支援事業（女性の社会参画支援促進事業）」（わいわいフォーラム上越主宰）顧問，②山形県上山市社会福祉協議会平成15年度運営委員，ほか１件

**◎社会への寄与等**

新潟県をはじめ，出身地である山形県，高知県・静岡県・千葉県・東京都・富山県など日本全国に活動が広がっている。研修内容は，生活科・総合的な学習・幼小連携・学校間連携に関わる学校教育論，保育所保育・子育て支援・ジェンダー問題に関わる幼児教育論や家庭教育論など幅広い分野にわたっている。とりわけ，生活科については，平成11年以来文部科学省の委員を連続して務めており（在外研究時を除く），生活科教育の政策決定に貢献している。

**丸　山　良　平**（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

保育内容の授業であるため，幼稚園・保育所の保育実践の映像資料で情報を提供して，乳幼児の生活と園環境，保育者の指導援助の実態を具体的に理解できるようにした。さらに最新の研究成果を取り上げ，それを討論することで能動的な理解をめざした。リポート作成を通して実践力，観察力の育成が促されるような課題を与え，その意図を同時に伝えた。さらに幼児向けのオリジナル絵本の製作を課し，それを幼稚園現場で読み聞かせし，その様子の映像資料を示して解説し，幼児理解と指導法，さらに絵と文章の役割，ファンタジー技法の理解を図った。授業中の課題と試験の評価基準を明示することで達成目標を明らかにし，それに従って評価した。

**研究指導**

学部では乳幼児の発達と園における指導法に関する主要文献を精読してまとめ，口頭発表と討論を行い理解を深めた。さらに学生の問題意識に基いて質問紙よる調査を行ってデータを収集して統計処理を行い，それを報告書にまとめる実地演習を行った。大学院では学生の研究計画の立案と観察して収集した資料の処理，結果の読み取りを行い，報告書作成の方法を指導した。学生の研究に関連して分析資料と文献に基づき討論して理解を深めた。

**◎特色ある点等**

幼稚園，保育所，学校での実践を意識して内容を精選している。長年にわたって蓄積した保育実践の多様な場面の映像により学習への動機付けは高いし，それを理論的に裏付けて解説している。学生が自分の問題として課題を捉えて分析し，それをまとめて口頭発表し，討論を行い能動的に深く考察できるように努力している。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**著】**①平成15年５月：『保育内容としての遊びと指導』（共著）建帛社

**論】**①平成15年10月：『幼稚園に就園する３年間で幼児が構成する数の保存概念の実態』(単著) 上越教育大学研究紀要 第23巻第1号 pp.11-22

②平成16年３月：『幼稚園に就園する３年間で幼児が獲得する計数技能の実態』(単著) 上越教育大学研

究紀要 第23巻第２号 pp.379-P392

③平成16年３月：『幼児教育におけるインフォーマル算数習得の支援プログラムと指導法の開発』(単著) 平成14年度～平成15年度科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)）研究結果報告書 全111p.

**学会活動への参加状況**

①5月17日～18日：日本保育学会第56回大会出席，②８月23日～25日：日本教育心理学会第45回総会出席

**◎特色・強調点等**

科学研究費などの補助により，長年にわたって実施してきた幼児期の数量能力の発達に関する研究をさらに発展させることができた。これにより幼児の数量理解の実態と指導法の研究として実践的な視点を加えて推進できた。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①新潟県保育事業第49回研究大会分科会助言者 (新潟県保育園連盟)

**◎社会への寄与等**

研究協力園において科学研究費補助による研究の推進や授業で使用する映像資料の収集の際に，多くの保育者から教育実践に関するさまざまな疑問，質問を受ける。それに対する見解を述べるとどまらず，関連した問題，課題を具体的に取り上げて解説し，教育実践に活かせるような配慮をした。また研究成果を協力園の実践に積極的に反映できるように努力した。

**杉　浦　英　樹**（助　手）

**〈教育活動〉**

**授　業**

「子どもの発達理解研究セミナー」「教育実践場面分析演習〈幼児〉」「課題研究」の指導補助

**研究指導**

研究発表，研究報告書作成等を通した論文指導の補助を行った。相談に来た院生，学生がまず教育臨床的な問題意識と学術的な関心のいずれをより強くもつかを理解したうえで，各自が経験に即した研究テーマを設定できるように努めた。また文献検索等の方法について知らせた。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成16年３月：「プロジェクト・アプローチにおけるプロジェクトモデルの妥当性－レッジョ・エミリアの理論と実践による検討－」『上越教育大学研究紀要』第23巻，第２号，2004, pp.393-427

**他】**①平成16年３月：『幼年期におけるプロジェクト学習のために－L. カッツ＆C. チャード「プロジェクト・アプローチ」（抄訳）－』，2004

**学会活動への参加状況**

①５月17日～18日：日本保育学会第56回研究大会出席，②７月５日～６日：日本カリキュラム学会第14回大会（大会事務局次長），③９月27日～18日：日本教育方法学会第39回大会出席

**◎特色・強調点等**

幼小連携を念頭にプロジェクト・カリキュラムの意義や特性等について探究している。今年度はアメリカの幼小の実践に影響力をもつプロジェクト学習論であるプロジェクト・アプローチの包括的な検討を行い，試案的なプロジェクトモデルを示した。

【学校教育総合研究センター】

内　田　一　成（教　授）

〈教育活動〉

授　業

【観点１】教育方法及び成績評価法に関する取り組み状況

学部授業

①カウンセリング基礎実習（４年次　前期　２単位　30コマ　木１・２限）: カウンセリングの理論と実際についての視聴覚教育（プロジェクタ，VTR）を行った後，ペアを組んで試行カウンセリングを行い，受講生全員がカウンセラーとクライエントの立場を体験するとともに，カウンセラーには自らの面接の逐語録の作成と対話分析を行い，それをまとめたレポートを提出させ，それに対するコメントを行った。

②カウンセリング基礎演習（４年次　後期　２単位　15コマ　木２限）: カウンセリング基礎実習での試行カウンセリングの逐語録，ならびに実際のカウンセリングの逐語録等を使って，対話分析ならびに面接技術の向上を図った。特に試行カウンセリングの逐語録に基づく対話分析のスーパーバイズは，カウンセリング技能を身につけさせるうえで非常に効果的であった。また，熟達者によるカウンセリングの逐語録との対比によって，さらに大きな学習効果があったと考えられる。

大学院授業

①臨床心理基礎実習　Ⅰ・Ⅱ（１・２年次　前期・後期　２単位　30コマ　木３・４限）: 臨床心理士の受験資格取得を目指す臨床心理学分野の院生に対して，事例検討会および施設（病院施設，教育施設，福祉施設）における臨床実習などを通して，基礎的な臨床心理学の知識・技能の習得を図った。

②臨床心理実習Ⅰ・Ⅱ（１・２年次　前期・後期　２単位　30コマ　木３・４限）: 臨床心理士の受験資格取得を目指す臨床心理学分野の院生に対して，心理教育相談室の来談ケースへのインテーク面接や継続面接を通しての臨床技術の向上，ならびにインテークカンファレンスやケースカンファレンスを通じての臨床技術の向上を図った。ゼミ生４名に対する臨床指導としては，火曜日～金曜日を中心に週あたり８ケース（１ケースあたり週１回60分）に対する臨床的介入と毎週３～４時間のグループスーパービジョンを行った。

③臨床心理援助法（１年次　後期　２　２単位　１コマ　火１限目）: 学校における子どもの心の問題への理解を深め，教師として適切な対応を学習するために，子どもの心の問題に対する見立てと理解の方法，および適切な援助方法について解説した。

④発達臨床心理学特論（１年次　後期　２単位　15コマ　木５限目）: 就学前，学齢期，青年期，成人期，老年期といった一生涯にわたる人間の心理的側面の問題に対する臨床心理学的アプローチについて検討した。

【観点２】教育の達成状況

臨床心理学が社会の要請に応え，科学性と実践性を兼ね備えた真の実践科学として社会に根付いていくためには，実践から有効なモデルや理論の構成を行い，その客観的な有効性を社会に向けて提示していくことが必要となる。真に社会の発展に寄与できる臨床心理学の地位確立のためには，「実践家－科学者（Practitioner-Scientist）モデル」の立場に立脚した心理臨床家の養成が必要不可欠である。こういう視点に立ち，学部としての一応の完結教育を尊重しつつ，臨床心理学についての学部・大学院の６年一貫教育の発想に立脚した授業の展開を心がけた。

研究指導

平成15年４月１日本学赴任のため，修士課程１年生だけの担当であったが，院生４名に対して「実践家－科学者（Practitioner-Scientist）モデル」に立脚し，教育，医療，福祉を中心とした心理臨床活動に関係する

さまざまな臨床心理学研究法を実践的に修得し，修士論文の研究計画の作成を行った。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

①福岡教育大学教育学部教育専攻科の集中講義「障害児の就労支援」を担当した。

**◎特色ある点等**

大学院教育において衛星通信を用いて三十数大学が参加して行う，年間９回の教育臨床特別講義『SCS を用いた大学間遠隔共同講義のプログラム開発と評価』への参画。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**著】**①平成14年４月：編著『福祉臨床心理学』コレール社（全228頁）

②平成14年５月：監訳『ヒルガードの心理学』ブレーン出版 ( 全1540頁 )

③平成15年11月：共著『行動療法』・『認知行動療法』上里一郎監修『心理学基礎事典』至文堂 ( 全408頁 )

**論】**①平成16年３月：単著『自閉症をともなう児童・青年の発達過程に関する比較研究：Ⅰ . 発達の遅れとその規定要因』 上越教育大学研究紀要 第23巻第２号 pp.329-345

**発】**①平成15年８月：『科学的論理性と社会的妥当性の高い応用行動分析学の発展に向けて : 教育…福祉現場と異文化交流の視点から』日本行動分析学会第21回大会シンポジウム話題提供

**他】**①平成16年３月完結 : 小林重雄 ( 監修 )『講座臨床心理学』( 全五巻 ) の座談会参加

『総説臨床心理学』第８章 臨床心理学の課題と展望〈座談会〉 pp.217-230

『発達臨床心理学』第５章 発達臨床心理学の課題と展望〈座談会〉pp.207-219

『教育臨床心理学』第６章 教育臨床心理学の課題と展望〈座談会〉pp.203-212

『福祉臨床心理学』第６章 福祉臨床心理学の課題と展望〈座談会〉pp.209-222

『医療臨床心理学』第７章 医療臨床心理学の課題と展望〈座談会〉pp.205-219

②平成16年３月：共著『スクールカウンセリングにおける教師へのコンサルテーションの現状と課題 : コンサルテーションによる支援チームの介入をめぐる諸問題』平成15年度客員研究員研究報告 ( 印刷中 )

**学会活動への参加状況**

①平成15年３月８日：日本福祉心理学会常任理事会出席，②平成15年８月４日～５日：日本行動分析学会第21回大会出席

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①平成15年４月～平成16年３月：新潟県スクールカウンセラー活用事業の派遣スクールカウンセラー ( 柏崎市立第１中学校280時間 )，( 高田西小学校１回，高士小学校１回，頸城中学校２回，計８時間 )，②平成15年４月：『現職教員支援のための総合的「学校コンサルテーション」推進事業』( 文部科学省地域貢献特別支援事業費補助 . 代表者：戸北凱惟 ) でのコンサルタント活動

**南 部 昌 敏**（教 授）

**〈教育活動〉**

**授 業**

授業形態，学習指導法等の教育方法，及び成績評価法等に関する取組状況は次の通りである。

学 部：学部２年生対象の「情報科学概論」では，まず，赤堀・鈴木・南部ら (2000) が開発した教育情報化推進指導者養成研修プログラムの到達目標113項目に関するチェックリストを用いた受講者自身による

内省的自己評価法を導入し，自分自身の到達度と課題の確認をさせるとともに，１年次に身に付けた情報メディア活用スキルを実際の授業場面で活用する際の授業実践に関する方略と具体的方策について，学校現場で実際に行われている具体的実践事例を紹介しながら解説し，解説内容に関するレポートで評価した。学部２，３年生全員対象の「教育実地研究Ⅱ（授業基礎研究）」では，教員養成実地指導講師（現職の校長・教頭・教諭）と協力して，情報メディアを活用した指導案作成・教材作成グループ演習と模擬授業演習を取り入れた指導プログラムの実践を行い，作成された指導案とそれを用いた模擬授業を分析して評価した。３，４年生対象の教職専門科目である「教育工学」では，後期集中講義形式で，授業の設計・実施・評価に関する力量形成，教材やメディア選択・構成・活用に関する力量形成，問題解決に必要な情報活用に関する力量形成に関する15項目の学習課題を設定し，テキスト・参考図書・Ｗｅｂ等を用いて個人毎に調べ学習をさせ，レポートを執筆させるとともに，２人１組の班によるプレゼンテーションと参加者全員による討論によって理解を深めさせる方法を取り入れた。評価は，各自のレポート，プレゼンテーション，討論後の改訂レポートで評価した。３，４年生対象の学校図書館資格取得科目「情報メディアの活用」では，教育情報化の方向性と学習情報環境の整備の状況，情報メディアの分類と各情報メディアの特性・機能，学習指導における情報メディア活用のストラテジーとタクティックス，学習情報センターとしての学校図書館の役割等について，情報化の進展の中で先進的に取り組んでいる全国の学校図書館の具体的事例をＣＤ－ＲＯＭで紹介しながら解説した。この科目においては，学生による授業評価を取り入れた次のような授業改善の新しい試みを行った。自分自身の授業改善の方策を探るために，授業者と受講生96名全員との間でコミュニケーションカード「大福帳」を用いた伝言とコメントのやり取りを毎週継続して行うとともに，受講生からの意見を次の回の授業の改善に反映させる試みを行った。アンケート調査の分析の結果，①受講生から寄せられた理解できたこと，疑問に思ったこと等に対して授業者が確認，訂正，補足説明等をコメントしたことが履歴として蓄積されており，学びの連続性の認識とともに学習内容の理解が促進され，次の学習への意欲向上につながった，②受講生からの授業方法に関する問題点の指摘を受けて，授業者はその次の回に即時に授業方法の改善に反映させたことで受講生との間に信頼関係が生まれ，毎回の授業を授業者と受講生全員で創造しているという風土が醸成された，③教職を目指す受講生にとって，教師の役割を再認識し，授業実践に対する考え方を再考させるきっかけを与えることができたことが明らかとなった。本学においても，学期末に受講生による授業評価を取り入れている。しかし，受講生がそのアンケートにさまざまな疑問や意見，改善策を提案しても，その授業の受講生にとっては，「次週の授業の改善」のためのフィードバック情報として直接活用されることはない。その点，筆者が試みた，「コミュニケーションカードを用いた伝言とコメントのやり取りを継続し，受講生からの意見を次の回の授業の改善に反映させる方法」は，授業者と受講者が協働して授業を作り上げるという視点からも，授業改善の有効な方法の一つであると考える。

大学院：大学院修士課程対象の「教育工学特論」，「教育メディア特別演習」であるが，これは５年前から継続しており，本年度も，通信衛星を用いた大学間ネットワーク「ＳＣＳ」を用いた大学間遠隔共同講義「教育工学特講１，２」のプログラムの改訂と同期型遠隔教育システムの開発と実践に取り組んだ。受講登録大学数はそれぞれ26大学であった。毎回15から18大学，150名前後の大学教官，学部・大学院生，現職教員等が参加した。特に，前者は授業研究及び教師教育に焦点を当て，後者は教育メディアとその活用及び情報教育に焦点を当て，それぞれ教育工学的アプローチに関する理論と実践場面の課題を解決するための具体的適用方法について，全国の大学に所属している教育工学研究者の有志が連係して大学間で協同講義を行うとともに，それぞれの大学大学院の受講者同士の討論を取り入れた，遠隔教育と協働講義の方法を取り入れた新しい大学教育方法の改善に取り組んだ。また，講義資料等は，岐阜大学のサーバに事前

に保存し，そのＵＲＬをメーリングリストで周知することで，各自がダウンロードして利用できるように工夫した。大学院修士課程対象の「教育実践研究方法論特講」であるが，これは３年前から継続しており，本年度も実証的研究，質的研究，開発的研究という３つの主要な研究方法論について，鳴門，兵庫，上越，岡山の４大学の教育方法関連の教官を中心に，名古屋，岐阜，茨城大学の教官の協力を得て，遠隔協同して講義・演習を行った。これは，通信衛星を利用した遠隔教育システムを用いた大学間連携と単位互換を含む大学教育方法の改善に向けての実践的研究である。実践場面分析演習「情報教育」Ⅰ・Ⅱでは，これまでと同様に，学校現場で行われている情報教育実践をグループで調査し，その目的，内容，方法及び意義について演習形式で検討した。情報教育研究セミナーⅠ・Ⅱについても，これまでと同様に，情報教育関連の研究の推進に向けて，文献研究，調査研究，実験研究，開発研究等について所属大学院生とともに検討するとともに，情報教育分野所属院生で週１回通年で協同討論を継続的に行った。

**研究指導**

大学院２年生１名を対象に，小学校４年生の総合的な学習の時間における情報活動の実態とその変容を，量的データと質的データの収集と分析によって実証的に明らかにすることを目的として，情報教育，教育工学の観点から専門的な研究指導を行った。大学院１年生２名を対象に，メディアリテラシーに関する諸外国の現状の分析と概念規定，さらには，小学生を対象としたＷｅｂリテラシー，ヴィジュアルリテラシーの達成基準の策定とそれを育成するための学習プログラムの開発について，情報教育，メディア教育，教育工学の観点から専門的な研究指導を行った。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

①平成15年４月から7月毎週火曜日５限，新潟大学非常勤講師として「教育メディア論Ⅱ」を担当した。

②平成15年10月から平成15年2月毎週火曜日２限，北陸学園非常勤講師として「情報機器の操作」を担当した。

③平成15年８月，上越教育大学学校図書館司書講習「情報メディアの活用」（２単位）を担当した。

④平成15年８月，新潟大学学校図書館司書講習「学校経営と学校図書館」（１単位分）を担当した。

**◎特色ある点等**

①衛星通信（ＳＣＳ）を用いて26大学が参加して行う，遠隔協同講義，前期２単位（３０時間），後期２単位(30時間)，各週（17時50分から21時）の研究実践，並びに，鳴門教育大学・兵庫教育大学・岡山大学と上越教育大学を中心として，大学院における教育研究方法に関する講義演習，後期２単位（３０時間）の研究実践を継続的に行い，その有効性を検証したことは，大学院における教育方法の改善への取り組みとして評価できる。

②学生による授業評価を取り入れた授業改善の新しい試みを行った。授業者と受講生96名全員との間でコミュニケーションカード「大福帳」を用いた伝言とコメントのやり取りを毎週継続して行うとともに，受講生からの意見を次の回の授業の改善に反映させる試みを行った。その結果，教職を目指す受講生にとって，教師の役割を再認識させ，授業実践に対する考え方を再考させるきっかけを与えることができた。大学教官がこのような試みを自ら実践して受講生に経験させることによって，これがモデル経験としての意味をもち。受講生に対して，授業を児童生徒といっしょに創っていくことの必要性を実感させることができたことは評価できる。

③学部における教育方法の改善への取り組みとして，その講義において達成してほしい目標に関するチェックリストによる受講者自身による内省的自己評価法を導入したが，自分自身の到達度と課題の確認をさせることができ，学習への動機付けに有効であるという知見を得たことは評価できる。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

**論】**①平成16年3月：『作品の構造に着目した映像視聴方法の検討－幼児教育教材のシーン分割とキーショット・キーワード抽出に基づく映像作品の分析的視聴－』，上越教育大学研究紀要，第23巻第２号（共著）

**発】**①平成15年10月：『教員養成における映像作品制作能力育成プログラムの開発と試行』（共），日本教育工学会第19回大会研究発表

②平成15年10月：『映像カテゴリー・理解要素マトリックスを用いた番組理解のための分析的視聴の試み－ＮＨＫ学校放送番組「くらしの歴史・五人組」を用いて－』（共），日本教育工学会第19回大会研究発表

③平成15年11月：『教員養成における番組理解のための分析的視聴の試み－ＮＨＫ学校放送番組「くらしの歴史・五人組」を用いて－』（共）日本教育メディア学会第10回大会研究発表

共同研究の実施状況

①「作品の構造に着目した映像視聴能力・映像制作表現能力育成プログラムの開発と評価」 代表者：南部昌敏（上越教育大学教授）平成14，15年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(2)）による共同研究（研究代表者） ②教育情報化推進指導者養成研修事業（所轄：日本教育工学振興会）（共同研究） ③新潟大学・長岡技術科学大学・上越教育大学3大学連携地域貢献特別支援事業「情報教育実践に関する指導力養成のための現職教員研修支援事業」（共同研究） ④メディア教育開発センターにおける高等教育機関の教官を対象にした研修事業「フレキシブルラーニング環境における授業づくり－実践的な「授業の設計・実施・評価・改善」の試み」（共同研究）

学会活動への参加状況

①平成15年６月７日：日本教育工学会総会・シンポジウム出席， ②平成15年９月13日～14日：日本教育工学会夏の合宿研究会（岡山）出席・座長， ③平成15年10月11日～12日：日本教育工学会第19回全国大会（岩手県立大学）出席・研究発表

◎特色・強調点等

①遠隔教育，情報教育，メディア教育に関する研究に取り組んだ。

②研究成果を紀要等に投稿するとともに，全国大会で積極的に発表した。さらに，平成14，15年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(2)）研究成果報告書を刊行した。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①メディア教育開発センター客員教授・共同研究員，②日本教育工学会理事，③日本教育メディア学会理事，④日本教育工学協会理事，⑤日本科学教育学会会員，⑥日本理科教育学会会員，⑦日本教育情報学会評議員，⑧国立大学教育実践研究関連センター協議会副会長，⑨教育情報化推進指導者養成研修指導講師（北海道会場，長崎会場，群馬会場，長野会場，千葉会場の５会場），⑩長野県教員評価制度検討委員会委員長，⑪文部科学省委託研究「e-Learning 教員研修システム開発プロジェクト」国語部会主査，⑫ＩＣＴ 教育推進プログラム協議会「ＩＣＴスキルアッププログラム開発プロジェクト」主査

◎社会への寄与等

・所属学会の理事，教員評価制度検討委員会委員長，情報教育に関する研究開発プロジェクトの委員等を積極的に引き受け，助言指導を行った。

・教育情報化推進指導者養成研修に焦点を当て，全国各地で行われた研修講座における講師を積極的に引き受

け，講義・演習指導を行った。

**濁　川　明　男**（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

【観点１】教育方法及び成績評価面での取組

○授業形態，学習（研究）指導法等の教育方法に関する取組状況

・教育実地研究Ⅱの「話し方指導」においては15名程度の小集団編成とし，自己紹介，設定場面における話し方，低・中・高学年向け国語教材での朗読等の実技演習を取り入れ，個別指導を重視した授業展開を工夫した。

・「体験学習」及び総合的学習に関する授業にあっては，体験的，実践的実習と講義とを連動させ，教職を目指す上で科目内容がどのような意味をもつのかを常にガイダンスし，自己の考えを発表する機会を盛り込んで学習者の主体的な取組を促す配慮を行った。

・大学院の総合分野の授業にあっては，フィールド学習と講義を連動させて，総合学習における実践的な内容に特化して取り上げる配慮を行った。

○成績評価法に関する取組状況

・「体験学習」，「ボランティア体験」にあっては，全員に履修記録簿を配布し，授業の記録，授業感想，事後学習を記述させ，それに朱を入れつつ，その努力と成果を評価するように配慮した。

・総合的学習に関する学部の２講義，大学院の２講義では，フィールドワーク後に必ず授業構想のレポート作成を課題として提出させ，それらの蓄積の上で総合的に評価するように配慮した。

【観点２】教育の達成状況

○進学や就職などの卒業（修了）後の進路の状況から判断した取組状況

・大学の講義が教育現場に出て有効に機能するように，経験知と学習知の統合を図る意味から，フィールドワークと講義を連動させた学習プログラムの立案と推進に努力した。

**研究指導**

【観点１】学　部

現在総合分野所属の３年次学生３名を担当しているが，様々な総合的学習の実践事例を相互に学習しあい，附属学校の総合的学習の授業参観を通して授業分析を行い，教育現場で生きて働く身近なテーマで設定させ，基礎調査や文献学習を通して，学習材としてのトピックを抽出し，学習プログラム開発を目指させている。

【観点２】大学院

現職教員の大学院教育は再教育と教育現場でのリーダー養成にある。その意味から，総合的学習を創造できる力量形成を課題として，学習素材研究やカリキュラムの研究開発，授業を通じた実証的研究に力点をおいて指導に当たっている。

**その他の教育活動**

・教職講座

学部４年次対象の「総合的学習入門講座」，３年次対象の「教育課題集団討論」を担当した。

・教育実習

平成14年度に初等教育実習の質的向上を図るために，分離方式教育実習を導入した。初年度は学生の意識の希薄さが問題視されたこともあり，４月に３年次学生全体に対して，「分離方式初等教育実習ガイダン

ス」を位置付け，研究期間内での教材研究の進め方等について周知徹底を図る一方，本実習直前での実態調査，実習期間中の巡回調査，実習終了後のアンケート調査によって，分離方式の導入の効果を確認することができた。

・フレンドシップ事業

「体験学習」，「ボランティア体験」，学生の自主活動「学びクラブ」のコーディネーターとして努力した。

**◎特色ある点等**

本学のフレンドシップ事業の一つである「学びクラブ」は平成10年に立ち上げ，現在では年間を通して登録した学生と児童が触れあい，子供理解と対応の仕方を学ぶ場として定着し，全国的にも注目を浴びる存在となってきた。入学時から児童と関わることで，単に知的学習だけすれば教職に就けるという概念を打破し，真に実践的指導力の大切さを自覚させることに有効に機能している。まさに，経験知と学習知の統合を目指している。しかし，学生の組織化，年間計画や毎回の企画内容の吟味，安全面の点検，経費の執行，保護者への対応，教育委員会とり連携など，学生だけではできない面での具体的な支援活動に多くの時間を割いてきた。本年度は，特に経験だけに終わることなく自らを内省し学習知との統合を図るために，学生シンポジウムを２回位置付け，より質的改善に迫った。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**著】**①平成15年10月：『野山での草花あそび』（単著）北越出版

②平成16年１月：『里山から考える』（単著）北越出版

**論】**①平成16年１月：高田平野における谷内と皿池の珪藻群集からみた水質と水循環－特に水田地帯における生物多様性の観点から－（共著）上越市史研究 第９号 79－64

②平成16年２月：国立の教員養成大学・学部における４年次教育実習カリキュラムの編成動向と課題（共著）新潟大学教育人間科学部紀要 第６巻 第２号 405－421

③平成16年３月：初等教育実習への分離方式の導入の効果（共著）教科教育研究 第22集 117－129

**会】**①平成15年８月：☆「学校教育における評価の現状と課題」日本学校教育学会シンポジウムパネリスト

②平成15年10月：☆「学部教育における臨床的アプローチ」日本教師教育学会公開シンポジウムパネリスト

**学会活動への参加状況**

①８月２日～３日：日本学校教育学会出席　②10月４日～５日：日本教師教育学会出席

**◎特色・強調点等**

４年間の里山問題に対する研究成果を１冊の著書としてまとめることができた。特に，里山問題が内包する様々な環境問題，生活の近代化と森林荒廃などについて論述すると共に，現在の総合的学習の現状と課題，総合的学習実践の進め方，具体的な学習プログラムまで深めて論述したことから，教育現場からは極めて高い評価を得ている。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①「にいがたスクールエコ運動」審査会座長（新潟県），②独立行政法人国立妙高少年自然の家企画運営評価委員会副委員長，③新井・頸南地区環境保全審議会副委員長，④上越市立潮稜中学校，谷浜小学校学校評議委員，④新潟県中学校教育研究会板倉中学校教育課程研究会全体指導者，⑤教員研修会での総合的学習に関する講演（上越市城東中学校職員研修会，北魚沼郡教育センター教員研修会，長岡市立教育センター教員

研修会，中頸城郡板倉町学校教育研究会，新井市学校教育研究会），⑥上越地区社会教育主事等研修会三和大会にて「子どもの現状と社会教育の課題」講演，⑦総合的学習に関する児童・生徒向け講話（西頸城郡名立町立名立中学校，上越市立城西中学校，新井市立中央小学校），⑧保護者向け子育て講演（三和村立美守小学校，里公小学校，上杉小学校，上越市立戸野目小学校）

**◎社会への寄与等**

・企画から関与してきた新潟県教育委員会主催の県内小・中学校の「にいがたスクールエコ運動」は，極めて多くの実践校が得られ成功裡に事業が推進している。平成15年度は県の特別予算が配当され，実践校を集めての「子どもエコサミット」が朱鷺メッセで開催され，座長として全体指導に当たった。

・総合的学習の進め方に関して教職員研修会での講演，総合的学習での環境問題に対する児童・生徒向け講演，ＰＴＡの子育て講演など，可能な限り地域の依頼に応える努力を行った。

**井　上　久　祥**（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

【観点１】教育方法及び成績評価面での取組

○授業形態，学習（研究）指導法等の教育方法に関する取組状況

文部科学省の「教育の情報化」に関する提言を踏まえ，高等教育の情報化を指向し授業においては積極的な情報通信機器の活用を図った。本学の「講義支援システム」を積極的に活用し授業を展開した。

○成績評価法に関する取組状況

従来の出席日数，レポート提出，試験に加え，電子媒体の成果物についても評価の対象とした。電子媒体の成果物は，デジタル・ポートフォリオとして扱った。つまり，単に完成作品を評価するだけでなく，製作過程についても中間発表の場を設け，評価を行うようにした（例えば，学部の教育情報演習）。

**研究指導**

【観点１】学　部

学部３年次前期までに，自分の卒業研究のテーマと研究の方向性について明確にするよう指導している。学生は早い時期から研究について問題意識を持ち学校現場における様々な臨床的な場面（教育実習や体験学習などを通じた）に臨むようになる（ひいては教員採用試験時の面接や集団討論においても的確な意見が述べられるなど，就職活動においても有効に作用する）。

【観点２】大学院

研究仮説の検証においては，学校現場をフィールドとして臨床的な場面から得られたデータを必ず用い，質的な分析を中心に行っている。さらに得られた研究成果については最低１回学会の場で発表するよう指導している。これにより自分の研究をより客観的，批判的に振り返ることができ，研究の完成度を高める契機となっている。

**◎特色ある点等**

特に，授業における実習の形態として，グループでの協働を重視している点が特色である（例えば，学部の教育実地研究Ⅱ（授業分析），大学院の情報教育特論）。これは教師が集団で問題解決にあたる場面を想定してのもので，将来「学校を基盤としたカリキュラム」を開発していくことのできるプロジェクト運営資質を身につけることをねらいとしている。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

論】①平成15年８月：協調学習事例共有のための事例ベースシステムの開発～協調学習における学習者間相互作用の記述～（単著）教育システム情報学会第28回全国大会講演論文集，No.B4-6,pp203-204

②平成15年10月：情報教育における観点別評価のための目標系列記述ツール（単著）日本教育工学会第19回全国大会講演論文集 ,Vol.2,No.2a-105-1,pp663-664

③平成15年10月：教師コミュニティによるルーブリックの開発作業の有効性（共著）日本教育工学会第19回全国大会講演論文集 ,Vol.2,No.2a-105-2,pp665-666

④平成15年10月：学校の情報化のための学校経営における方略についての調査（共著）日本教育工学会第19回全国大会講演論文集 ,Vol.2,No.2a-105-3,pp667-668

⑤平成15年11月：遠隔学習環境での集団の意思決定を効果的にするグループ形成支援システムの開発研究－学習者の特性に着目したグループ形成方法－（共著）信学技報 ,Vol.ET2003,No.52,pp1-6

⑥平成15年11月：意見交換の活性化を目的とした視覚情報をもつ電子掲示板システム（共著）信学技報 ,Vol.ET2003,No.52,pp7-12

共同研究の実施状況

① e-Learning 環境での協調学習支援のためのメタデータ化と知識共有の研究　代表者：岡本敏雄（電気通信大学大学院教授）科学研究費補助金　②作品の構造に着目した映像視聴能力・映像制作表現能力育成プログラムの開発と評価　代表者：南部昌敏（本学教授）科学研究費補助金

学会活動への参加状況

①平成15年度：情報処理学会・グループウェアとネットワークサービス研究会委員会委員

◎特色・強調点等

e-Learning 環境で，遠隔学習をより効果的に進めていくための研究を行っている。特に，システムを実際に運用し実証的に評価していく手法は，研究成果をそのまま大学や学校現場へと反映させることができ有用性に優れている。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①平成16年３月：本学遠隔研修会講師，地域貢献特別支援事業「情報教育実践に関する指導力育成のための現職教員研修支援事業」の一環として

◎社会への寄与等

・地域貢献事業を通じて，周辺地域の教師の情報教育実践に関する指導力育成に貢献した。

石　川　　真（講　師）

〈教育活動〉

授　業

教育情報演習（学部）では，基礎的なコンピュータスキルの修得を行なった。また，予習復習を支援するために Web も積極的に活用した。講義科目においては，適切なテキストがないため，また，最新の情報を提供するために，各回ごとに資料を作成し配付した。さらに，後期では，e-learning 環境にも学生に親しんでもらうため，VOD システムを導入し活用した。

情報教育方法特論（大学院）では，ディスカッションの時間を設け，実践的な事例などについて議論を深めた。

**研究指導**

情報教育分野における合同ゼミにおいて，学部生，院生に対して助言を行なった。その他，随時，研究方法を中心として助言を行なった。

**◎特色ある点等**

随時，授業に関するアンケートを取り，できる限り個別のニーズを把握した上で授業を進めた。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成15年５月：『学生のニーズを考慮した授業評価尺度の有効性について－心理学系科目の受講生を対象として－』（共著）大学教育学会誌，25⑴，pp. 57-63 .

②平成15年９月：『対人認知の印象形成モデルに関する研究』（単著）上越教育大学研究紀要，23⑴，pp.23-33 .

③平成16年３月：『大学の授業における社会的環境の分析－授業改善のためにCUCEIを適用して－』（共著）日本教育工学会雑誌，27(suppl.)，pp. 129-132 .

④平成16年３月：『協同編集作業場面における顔画像付加インタフェースの及ぼす影響』（単著）上越教育大学研究紀要，23⑵，pp. 367-378 .

**発】**①平成15年９月：『動画像を用いた笑いの認識について』（共著）日本社会心理学会第44回大会発表

**共同研究（幼，小，中，高等学校及び特殊教育諸学校教員との共同研究を含む）の実施状況**

①“人間科学”授業アーカイブの開発とケーブルテレビ網を利用した生涯学習への適用　代表者：野嶋栄一郎（早稲田大学教授）科学研究費補助金，②異文化間コミュニケーションにおける感情表現の認知　代表者：齋藤美穂（早稲田大学教授）科学研究費補助金

**学会活動への参加状況**

①９月16日～18日：日本社会心理学会第44回大会出席

**◎特色・強調点等**

学習環境開発という観点から協同作業や対人関係に関する基礎的な研究を進めている。また，授業を中心とした学習環境をさまざまな角度から評価する技法について検討を行なっている。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①平成16年２月：「小学生の保護者を対象とした情報教育セミナー」講師（学校教育総合研究センター事業），②情報教育実践に関する指導力育成のための現職教員研修支援事業（代表者：南部昌敏）

**釜　田　　聡**（講　師）

**〈教育活動〉**

**授　業**

教育実地研究Ⅱでは，最初に，先輩の教育実習でのつまずきや失敗事例を説明し，教育実習に向けての今後の見通しを把握させた。その上で，教育実習までに準備すること(身に付けること)を理解させ，学生一人一人が具体的な目標をもてるように努めた。学習指導法については，初歩的な指導案の作成方法と授業の進め方等の指導を小集団で行ったり，学生同士の相互評価を実施したりした。

体験学習Ｋ(中学校体験と学びのクラブ体験)では，附属中学校の教育活動への観察参加と学びクラブへの参加を設定した。それぞれの体験活動の節目には，体験発表会・意見交換会，レポート作成を通じて，自らの教職観を見つめ直すことができるように，指導助言を行った。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

・教育実習の事前・事後指導，実習中の巡回指導等。

・学生企画の「学びのクラブ」の指導。

・韓国教員大学校との交流会・受け入れ指導（附属小中学校コーディネート，受入学生指導等の）

・韓国教員大学校への訪問（訪問学生指導と引率，訪問計画の企画立案等）

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**著】**①平成15年４月：「学級にドラマを創る人・もの・コト，100選」『総合的学習を創る５月号 No.155』（共著），明治図書 ,pp.34-35

②平成15年８月：「ふるさと学習どんな戦略で迫るか」『総合的学習を創る９月号 No.159』（共著），明治図書 ,pp.36-37

③平成16年３月：「日韓両国における朝鮮通信使の授業実践について」『国際理解を中心とした総合的学習の内容構成に関する基礎的実践的研究』（共著），科研費研究成果中間報告書 ,pp.19-22

④平成16年３月：「中学校総合学習の実践状況と課題」『高校総合学習の可能性と課題』 科研費研究成果中間報告書 ,pp.13-22

**論】**①平成15年３月「初等教育実習への分離方式の導入の効果」『教科教育学研究』第22集，（共著），日本教育大学協会第二常置委員会 ,pp.117-128

**発】**①平成15年６月「日韓の歴史認識の共有化に向けた「いろいろな歴史」の導入～中学校社会科「歴史的分野」を中心に～」，日本国際理解教育学会第13回研究大会「自由研究」発表

②平成15年８月「中学校における「総合的な学習の時間」の実践上の課題～上越教育大学学校教育学部附属中学校の事例を中心に～」，日本学校教育学会第18回研究大会「自由研究」発表

③平成15年８月共同研究発表 「What The “Friendship Program (Friendship-Jigyou)” Has Brought for The Pre-Service Students-An Attempt to Evaluation」日米教師教育学会

④平成15年10月「日韓歴史認識問題への提言－歴史教科書問題と歴史教育交流－」，日本社会科教育学会第53回全国研究大会「自由研究」発表

⑤平成15年11月「日韓両国における朝鮮通信使の授業実践について」，韓国国際理解教育学会，自由研究発表

**共同研究の実施状況**

①「国際理解を中心とした総合的学習の内容構成に関する基礎的実践的研究」代表者：二谷貞夫 科研費（基盤研究 B(2)），②「高校総合学習の研究」代表者：和井田清司 （基盤研究 C-2)

**学会活動への参加状況**

①平成15年10月：日本教師教育学会参加・運営

**◎特色・強調点等**

「初等教育実習への分離方式の導入の効果」『教科教育学研究』第22集では，本学の初等教育実習への分離方式の導入が，どのような効果をもたらしたかをアンケート調査，聞き取り調査等を基に論述した。特に実習生の教材研究の質的変化，児童を意識した授業作り，指導教諭と実習生の関係の変容，分離方式に対する実習校の評価，大学における臨床的研究条件の拡大等の視点から記述した。

小　林　毅　夫（講　師）

〈教育活動〉

授　業

教育実地研究Ⅱでは，「生活科を中心とした低学年の授業づくり」を担当し，低学年児童の発達的な特徴と指導の要点を把握させた上で，個人単位での小単元づくりに取り組ませた。低学年児童の視点でフィールドを歩かせ，価値ある教材を発見させるとともに，地域の自然や社会とのかかわりを深め，自分とのかかわりに気付かせる「具体的な活動案」を提案させ，学生同士で相互評価させた。

休日等を利用した教材発掘・活動案づくりを通して，単元開発の重要性と地域学習の必要性に気付かせることに効果があった。

その他の教育活動（学外を含む。）

①平成15年６月29日：上越教育大学学校教育総合研究センター主催シンポジウム　シンポジスト
「教育課程２年目！トークイン上越～子どもに確かな力をつける総合的学習を考える」

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

発】①平成15年６月７日：☆日本教育工学会（会場：東京工業大学）公開シンポジウムシンポジスト
「地域に根ざしたカリキュラム開発の現状と課題－新潟県の場合」

②平成15年7月５日：☆日本カリキュラム学会（会場：上越教育大学）公開シンポジウムシンポジスト
「カリキュラム開発における学校と地域の連携－新潟県における連携の取り組み」

③平成15年12月25日：総合的な学習の時間調査研究会（会場お茶の水女子大学）発表
「総合的な学習の単元設計のポイントと指導体制」

他】①平成15年5月：「今求められる評価改善の重点は何か－大らかなバランス感覚が大切」（単著）『絶対評価の実践情報５月号』所収　明治図書　pp.5

②平成15年５月：「確かな学力の育成に向けた総合的な学習の時間の取り組み」（単著）『新潟県教育月報５月号』所収　新潟県教育委員会　pp.6-11

③平成15年６月：「提言：公教育の再生は「学力保障」にある－地域住民参加で学力向上についての議論を」（単著）『現代教育科学６月号』所収　明治図書　pp.17-18

④平成15年７月：「いま，校長に問われる経営手腕－教育目標・計画（ビジョン）をどう設定するか」（単著）『教職研修７月号』所収　教育開発研究所　pp.62-65

⑤平成15年７月：「子どもの集団力をどう生かすか－個を生かす多様な集団編成を」（単著）『悠７月号』所収　ぎょうせい　pp.12-15

⑥平成15年９月：「ふるさと学習関連のキーワード－地域・風土・故郷・郷土・・・私の使い分け基準はここだ」（単著）『総合的学習を創る９月号』所収　明治図書　pp.9

⑦平成15年９月：「10年目研修に望む・教師教育の課題を問う－次なる10年を見据えて，この研修は重要である」単著　『現代教育科学９月号』所収　明治図書　pp.14-16

⑧平成15年９月：「補充的指導で学力低下を確かめる－教職員のティームワークを高めよう」（単著）『授業研究２１：９月号』所収　明治図書　pp.10

⑨平成15年９月：「キャリア教育をどう進めるか－体験的活動をどう工夫・活用していくか」（単著）『教職研修９月号』所収　教育開発研究所 pp56-59

⑩平成15年11月：「『関心・意欲・態度』の評価で何を深めたいか－主体的な学びの成立を看取る」（単著）『絶対評価の実践情報11月号』所収　明治図書　pp.6

⑪平成15年11月：「中教審・諮問内容の論点－何が課題でどう考えるか－地方の視点からの教育改革が大切である」（単著）『学校運営研究臨時増刊号』所収　明治図書　pp.49

⑫平成15年11月：「総合的学習－そもそも不要論をどう論破するか」（単著）『総合的学習を創る11月号』所収　明治図書　pp.10-11

⑬平成15年5月：「新課題に対応する『学校評価』の改善点－カリキュラムの問題点が分かる・項目とチェックポイント」（単著）『学校運営研究11月号』所収　明治図書　pp.34-35

⑭平成15年12月：「学習指導要領の見直しについて，教職員の共通理解を図り保護者に説明するチェックポイント」（単著）『総合教育技術12月号』所収　小学館　pp.46-47

⑮平成16年３月：「地方発の躍動する生活科を！」（単著）『小学校指導シリーズ新しい生活科の扉を開けよう』所収　学校図書　pp.1-6

**共同研究の実施状況**

①「佐渡の未来を切り開く学力とカリキュラム開発に関する総合的研究」代表者：小林毅夫，上越教育大学研究プロジェクト（一般研究）

②「地域に根ざしたカリキュラム開発とスクールリーダーの役割について」代表者：小林毅夫，学校教育総合研究センタープロジェクト研究

③「高等学校『総合的な学習の時間』の実践状況及び初期評価に関する総合的調査研究」代表者：和井田清司（科学研究費）補助金基盤研究　小学校総合学習の視点から見た高校総合学習の研究を分担

**学会活動への参加状況**

①平成15年６月７日：日本教育工学会出席，シンポジスト，②平成15年６月20，21日：日本生活科・総合的学習教育学会出席・部会指導者，③平成15年7月５日：日本カリキュラム学会出席，シンポジスト

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①新潟県三島郡教育研究会講演，②神奈川県中教育事務所教育講演会講演，③柏崎市教育センター専門研修講話，④上越市校長会講話，⑤新潟大学附属長岡小学校ＰＴＡ子育て講演会講演，⑥糸魚川市早川地区子どもを考える親の集い講演，⑦県立教育センター 12年経験者研修「教育課程コース」講義，⑧学校栄養士協議会上越支部研修会講演，⑨豊栄市教育委員会教育課程研究集会講演，⑩妙高少年自然の家「総合的な学習の時間」と体験活動シンポジウム：講演とシンポジスト，⑪上越市立高志小学校研究会シンポジスト，⑫十日町市・中魚沼郡教育振興会総合学習部会講演，⑬相模原市旭小学校研究発表会講演・研究指導，⑭北蒲原郡南部郷校長研修会講演，⑮中頸城郡小・中学校長会懇談会講演，⑯栃木県芳賀教育事務所学力向上推進協議会講演，⑰石川県加賀市立橋立中学校研究指導

**◎社会への寄与等**

①現職教員のための総合的「学校コンサルテーション」推進事業のコーディネーターを務める（地域貢献特別事業費－文部科学省－受給）

②平成15年12月　総合的学習の明日を開く連続セミナー「地域に根ざしたカリキュラム開発と小学校総合学習」講話

③平成16年２月　新潟県における「スクールリーダー養成・研修に関する研究協議会」設立に向けた準備会議主管

【生徒指導総合講座】

**杵　淵　俊　夫**（教　授）

〈教育活動〉

授　業

大学院・教育研究法特論では，（統計処理を伴なう）実験や質問紙法に依らない，教育諸問題の研究手続きについて考察し，それに基づいた研究事例として，①小学校低学年における〈みんな（学級集団）〉意識の形成過程と，それに働きかける教師の基本的な手立て，②〈わざ〉習得の過程としての子どもたちの生活世界の学校生活への浸透，③〈みんな〉に向かって〈書く〉ということは，子どもたちの反省的思考のにとってどのような働きを及ぼすことになるか？等，自らの研究を提示して，議論し検討し合った。他方，発達臨床思想特論では，〈子ども理解〉，または子どもとの働きかけ合い＝コミュニケーションのメカニズムを分析的に考察し，その研究事例として，①〈子どもの視点〉に立つとは一体どうすることか：〈理解し合う〉こととしての子ども理解，②学校（教育）で子どもたちに「直接体験」を与えることができるか，等の，自らの考察を提示した。両講義のまとめとして，研究室研究誌『教育学論集　第16集』，600部を12月に刊行し，受講生・院生のリポートと，拙稿「〈みんな〉に向かって〈書く〉ということは，子どもたちの反省的思考の再構成にどのような働きを及ぼすか？」を掲載し，全国各地の教育現場の院生 OB，300名に送付した。

学部では，教育本質論，発達臨床思想，総合演習：子どもの校外生活と地域父母組織を担当した。発達臨床思想（後期・集中講義）は児童・生徒とのコミュニケーションのあり方について考察した。総合演習では，７月22～26日，岐阜県益田郡萩原町山之口に学生29名を引率して，当地の子ども育成連絡会の活動にボランティア参加した。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

**論】**①平成15年６月：「J.Dewey における〈知覚〉の理論の問題点――『経験と自然』：「８存在，観念，意識」を中心として――」，『日本デューイ学会紀要』，第44号，pp.124－129.

②平成15年９月：「教師たちは，〈個〉（一人ひとりの子ども）とどのようにして出会っているか？――〈みんなの話し合い〉が個々の成員の思考に働きかける場合のメカニズム（その３）――」，『上越教育大学研究紀要』，第23巻第１号，pp.35－59.

③平成16年３月：「〈わざ〉習得の過程としての子どもたちの生活世界の学校生活への浸透――学習活動における子どもたちの自発性・能動性の成り立ちをめぐって――」，『上越教育大学研究紀要』，第23巻第２号，pp.429-454.

学会活動への参加状況

①平成14年10月11～12日：日本デユーイ学会第47回大会出席，研究発表。　②平成14年10月18～19日：教育哲学会第46回大会出席，研究発表。

**古　賀　一　博**（教　授）

〈教育活動〉

授　業

【観点１】教育方法及び成績評価面での取組

○授業形態，学習（研究）指導法等の教育方法に関する取組状況

事前に作成・公開した授業シラバスに則り，学部の「比較教育学」では，戦後日本の公教育に多大な影

響を及ぼしてきたアメリカ合衆国を比較対象国として取り上げる意義を概説するとともに，その歴史的変容と今日的態様を通観した。その後，それら米国公教育と戦後我が国における公教育との比較分析を意識しつつ，各教育段階・分野（初等教育，中等教育，高等教育，さらには教員養成や教科書等）ごとに，我が国における現行システムの現状を整理し，その直面する諸課題を明確化し，あわせて今後我が国における教育改革の具体的方向性も展望した。その際，日米公教育に関する基礎的な知識の効果的修得のために，視聴覚教材の積極的活用や定期的なレポートの提出を求めるとともに，毎時間授業直後にリフレクション・シート（自己省察ノート）の記載とその提出を課した。

大学院の「比較教育制度学特論」でも，事前に作成・公開した授業シラバスに沿いつつ，比較教育制度学的視点から最近の米国教育改革に関する「関係一次資料」を使用して，教育制度を取り巻く今日的な改革動向の理解を高める工夫を行った。とりわけ，米国公立学校教員人事行政の今日的態様とその内包する課題については，その「最新の研究成果」（教授者の学術研究論文等）に基づきつつ，対象となるテーマを討論し合い，我が国教員人事行政への比較教育制度学的示唆という観点から内容の深まりに努めた。同様に，「教育内容行政特論」でも，「教授者の学術研究論文等」をもとに，米国における教科書行政・制度に関する関係判例及び制定法規定の分析を通じて，その法的基本原理や権限関係を明確化し，米国教科書行政・制度の意義と特質を明らかにした。次に，それら米国の実態と我が国における教科書行政・制度の歴史的変遷や現状とを比較検討することによって，「公教育行政の一環としての教科書行政の役割」について講義した。その際，最新の教科書行政事情に関して，講義者が会長を務めた「新潟県教科用図書選定審議会」における採択業務過程の実態をはじめ現実的な素材を積極的に用いながら講義内容の展開に務め，本講義の説得性と実践有効性に関して留意した。

○成績評価法に関する取組状況

学部，大学院とも，第１回目の講義開始時に，当該講義の内容・目標さらには講義者の受講者への期待を開陳するとともに，展開予定の授業計画と成績評価基準を具体的に説明した。これらの説明後，講義の内容と方法，成績評価基準等を了解した学生から聴講票を受け付け，当該講義を展開した。成績の具体的な評価方法は，シラバスにも記載した通り，毎時間の出席回数（学部及び大学院）と学期間中の定期的な課題レポートの内容（学部及び大学院），学期末における最終課題レポートの内容（大学院）・期末テストの結果（学部）をそれぞれ総合した上で，厳格な成績評価を行った。

【観点２】教育の達成状況

○進学や就職などの卒業（修了）後の進路の状況から判断した取組状況

本年度の学部卒業生は，なく，大学院修了生２名であった。それぞれの研究関心を尊重しながらも，その内容は当該専門領域の基礎的知識の習得とその実践有効性に留意しつつ，論文作成を指導した。修了生２名の内１名は，現職派遣のため所属県へ帰任することとなったが，残り1名は特段の進路先を確定できなかった。もとより，当該学生の進路相談は，修了後も継続維持する予定である。

**研究指導**

【観点１】学部

教育行政・学校経営に関する基礎的知識を修得させるために，学部ゼミ生１名に対して，関連基本文献の講読を行った。あわせて，同分野における各自の卒業研究に関わる学術研究論文を渉猟させ，その報告を行わせるとともに，内容に関する議論を深めた。

【観点２】大学院

教育行政・学校経営に関するより高度な臨床的な実践力を育成するために，喫緊の教育改革諸課題を論文テーマとさせ，実証的データの綿密な収集に当たらせるとともに，データの客観的な分析にとどまらず，

具体的な改善政策・施策の提言を含めた結論の導出に努めさせた。これらの作業は，とりわけ現職院生が派遣元へ帰任後，教育行政や学校経営の実際的場面に直結した職務に着任する際，大いに貢献することとなろう。

◎特色ある点等

講義内容全般における「学術的水準確保」の側面と「臨床的な実践力育成」の側面，さらには講義方法における「受講者の主体的参加の側面」を特に意識して，上記「教育方法及び成績評価面での取組」において下線を付した諸点を遂行した。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

**著】**①平成15年４月：『これからの学校と組織マネジメント』（共著）教育開発研究所

②平成15年10月：『教職員の職能発達と組織開発』（共著）教育開発研究所

**論】**①平成15年６月：「アメリカにおける教員の人事評価と職能開発－その新しい動向－」（単著）『教職研修』教育開発研究所　pp.128-131.

②平成15年10月：「教員養成・研修の再構築－大学と教育委員会との連携－教員研修充実方策の視点」（単著）『日本教育行政学会年報』第29号　pp.240-250.

③平成16年３月：「米国カリフォルニア州における同僚教員支援・評価システムの特質と意義－ポーウェイ統合学区の事例分析を通して－」（単著）『上越教育大学研究紀要』第23巻第２号　pp.455-472.

**発】**①平成15年６月：「日本版チャータースクール『新研究開発学校』制度の特質と課題」（単）西日本教育行政学会第24回大会研究発表

②平成14年10月：「教員養成・研修の再構築～大学と教育委員会との連携～③教員研修充実方策の視点」（単）日本教育行政学会第37回大会研究発表

共同研究の実施状況

①教員の人事評価と職能開発プログラムに関する国際比較研究　代表者：八尾坂修（奈良教育大学教授）科学研究費補助金

学会活動への参加状況

①平成15年度日本学校教育学会常任理事（事務局長），②平成15年度日本教育行政学会研究推進委員，③平成15年度上越教育経営研究会会長，④平成15年６月：日本教育経営学会第43会大会出席，⑤平成15年８月：日本学校教育学会第18会大会出席，⑥平成15年10月：日本教育行政学会第38回大会出席，⑦平成15年11月：日本教育制度学会第11会大会出席

◎特色・強調点等

米国の教員人事行政制度に関する研究を継続して行っているが，その中で特に「同僚教員評価制度」に着目してその法的原理と実際的態様を研究している点は，他に例を見ない先進的なものであり，我が国教員人事行政の展開を考究する上で極めて有効であるといえる。又，本年度学会報告した「新研究開発学校制度」に関する研究は，我が国における同制度に関する最新動向を紹介・分析したものであり，その学術的意義は大きいといえる。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①日本教育大学協会第一常置委員会委員（会長委嘱），②日本教育大学協会第一常置及び第二常置合同小委員会委員（会長委嘱），③日本教育大学協会評価に関するプロジェクト委員会委員長（会長委嘱），④新潟県教育委員会「学校の評価システムの確立に関する調査研究にかかわる協力者会議」委員長（新潟県），⑤新

潟県教育委員会「教員評価に関する有識者会議」委員（新潟県），⑥新潟県教育委員会「指導が不適切な教員の審査検討委員会」委員長（新潟県），⑦各種講演

◎社会への寄与等

・新潟県の各種審議会委員として学識経験者の立場から教育行政に関する政策形成に積極的にかかわった。

・全国及び新潟県の教育センターや公立学校事務職員研究会の取り組んでいる諸研究・研修活動に対して学識経験者の立場から専門的な知識を提供し，それら活動の積極的な展開を援助した。

西　　穣　司（教　授）

〈教育活動〉

授　業

学部・大学院を通じて，授業方法については一方的な講義にならないよう受講学生との討議を組み入れて，彼らの興味・関心を喚起するよう努め主体的な学習を促した。また，成績評価法については，平常の出席・学習状況を基礎とし，受講学生の学習成果を事前に提示した課題（採点基準も明示）についてのリポート（各授業科目ごとに２回）の提出を求め，その採点結果についても個別に知らせるよう工夫した。

研究指導

学部学生４名，大学院修士課程学生５名，大学院博士課程学生２名の研究指導を担当した。そのうち３名の大学院学生については，研究テーマに即した事例研究法としてのエスノグラフィー（民族誌）の方法を採用するよう指導し，教育活動の実際に埋め込まれた実践知を導出した優れた研究成果を収めるよう配慮した。

その他の教育活動（学外を含む。）

①平成15年７～８月：富山大学教育学部非常勤講師として「学校経営」（文系）を担当した。

②平成15年８月：学校図書館司書教諭講習のうちの「学校経営と学校図書館」を担当した。

③平成15年９月：山形大学農学部非常勤講師として「教育経営学」，及び山形大学大学院教育学研究科非常勤講師として「教育経営学演習」を担当した。

④平成15年12月：富山大学教育学部非常勤講師として「学校経営」（理系）を担当した。

◎特色ある点等

一般的・抽象的な学校経営論に陥らないよう，日頃から意識的に努力して具体的実践事例を収集し，受講学生が明快に理解でき，しかも学校組織の一員としての貢献意欲を高め得るよう授業内容・方法を工夫している。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

論】①平成15年10月：「学校や生徒の実態」及び「教師の協力的な指導」，安彦忠彦編『校長・教頭　教育課程・学力向上の最新課題』教育開発研究所，pp.206-207, pp.210-211.

②平成16年１月：「組織を動かすリーダーシップのための自己研修」，高階玲治編『教職生活安心ＢＯＯＫ“けんしゅう”編』教育開発研究所，pp.78-80.

③平成16年１月：「教員研修のあり方について－個々の教師の『自由と責任の感覚』の育成を基底として－」（単著）　教育と文化　第34号　pp.45-53.

④平成16年３月：「スクールリーダーの養成・研修をめぐる課題と展望－大学院修士課程プログラムの有効性の検討を中心にして－」（単著）　教育経営研究　第10号　pp.59-68.

発】①平成16年３月27日：大阪教育大学と大阪府教育委員会の共催による「第３回スクールリーダー・

フォーラム」（テーマ「スクールリーダー養成の必要性と可能性－専門職大学院づくりを軸に－」）のシンポジウム提案「スクールリーダーに求められる力量とその形成－現職教員のための大学院づくりの経験から－」（提案内容は，同フォーラム冊子の30-40頁に収録）

**共同研究の実施状況**

①日本教育経営学会・スクールリーダーの資格・任用に関する特別委員会　委員長：小島弘道（筑波大学教授）

**学会活動への参加状況**

①６月６日～８日：日本教育経営学会第43回大会出席，②７月４日～６日：日本カリキュラム学会第14回大会出席，③８月２日～３日：日本学校教育学会第18回研究大会出席，④日本教師教育学会第13回研究大会出席，⑤平成15年度日本教育経営学会理事（常任），⑥平成15年度日本学校教育学会理事，⑦平成15年度日本教師教育学会理事

**◎特色・強調点等**

わが国の学校改革の諸施策が多様に展開されるなかで，とくに各学校での教育課程の開発的取組と，個々の教師の職能発達の促進に力点を置いた研究を特色としている。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①10月24日：東京都教職員研修センター平成15年度10年経験者研修大学等公開講座講師（「学級経営」講義・演習），②12月５日：高知県教育センター平成15年度任用２年次教頭研修会講師（「これからの学校経営」を講話），③２月11日：新潟大学と上越教育大学との教員養成・現職教員研修の在り方に関する連絡協議会（第４部会）主催の「新潟県におけるスクールリーダーの養成・研修に関する研究協議会」（仮称）設立準備会議での講師（「スクールリーダーの養成・研修をめぐる課題と展望－新潟県での新たな共同的取組の可能性を求めて－」講演）

**若　井　彌　一**（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

【観点１】教育方法及び成績評価面での取組

学部の授業では，受講生の「法律学」，「行政学」，及び「教育学」等についての基礎的知識・理解・関心の実態を考慮し，興味を持つことができる授業，何が大切であるかのポイントが理解でき，心に残る授業となるように特に意を用いた。

また，大学院の授業では，受講生の多くが現職の小・中・高等学校等教員であること，学部段階では「法律学」，「行政学」などの科目について学んでいない者が多くを占めることを考慮して，学問的基礎事項を適度に盛り込むこと，学校という教育現場にとって卑近な事例及び裁判事例を多く含めることに特に意を用いた。

【観点２】教育の達成状況

学部の授業科目については，学問的興味・関心を喚起・維持・向上させることが相当な難題である。授業展開の仕方についてさらに可能な工夫を試みる必要があるように思われる。

大学院の授業科目については，受講生の授業に対する意欲が強く，上記［観点１］に基づく試みは概ね達成できたと判断している。

研究指導

【観点２】大学院

研究指導は，学生に対する共通的事項の指導を目標とする「研究室ゼミ」と，各学生（院生）の研究作業の発展・進捗状況に応じての「個別指導」を併用して行った。理論的基盤に支えられた，実践的課題を展望するという精深な程度の修士学位論文をまとめる水準にまで指導することができたと判断している。

◎特色ある点等

学部の授業については，上述の通り，学生の学問的関心の喚起・維持・向上に特に留意して指導を行っている。

大学院の研究指導では，教育現場における実践的な諸問題の解明・解決を目指す院生の論文構想を尊重しつつ，修士論文として求められている学術的に精深な程度にまでどのように引き上げていくかを工夫している。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

**著】**①平成 16 年２月：「教師と教育行政」，「教育行政に関する論争と論点」，「学校教育の量的発展と学校の機能」，「障害児の教育」，「教育改革の動向と課題」，高橋靖直，牛渡淳，若井彌一共著『教育行政と学校・教師』，玉川大学出版，PP．117 ～ 162，163 ～ 204，205 ～ 215，223 ～ 230，236 ～ 252。

②平成 16 年３月：「学校事務」，「学校教育の目的・目標」，「指導要録・調査書・通知票」，「性行不良による出席停止」，「児童生徒の懲戒」，「各種学校」，「生活科，総合的な学習の時間」，「人権教育・人権啓発」，「就学奨励」，「教育振興」，「学校図書館」，「公務員の定義」，「設置」，「教職員の任用」，「分限」，「懲戒」，「教職員の研修」，「教職員の給与」，「共済組合」，「教職員の資格および免許」，「中央の教育行政組織」，「情報公開制度」，下村哲夫・杉原誠四郎監修，葉養正明・結城忠・若井彌一編，『必携学校小六法 2005 年度版』。執筆頁については多岐に及ぶため省略。

**他】**①平成 15 年４月～平成 16 年３月：「学校経営の法律指南」（第 210 回～ 256 回），『週刊教育ＰＲＯ』に原則として毎号掲載（毎回 1100 ～ 1200 字），日本教育総合研究所。

②平成 15 年６月～平成 16 年３月：「教育と時事－解説・提言」（第１回から第 10 回），『教職研修』平成 15 年６月号～ 16 年３月号（毎回約 3600 ～ 4000 字），教育開発研究所。

③平成 15 年４月～平成 16 年３月：「法規で読む教育の今」（第１回～第 12 回），『悠』平成 15 年４月号～平成 16 年３月号），（毎回約 2400 字），ぎょうせい。

④平成 15 年４月～平成 16 年３月：「教職研修資料・学校経営版」（第 57 回から第 80 回），毎月２回，最新の教育重要事項について解説・提言（毎回約 1200 字），教育開発情報センター。

学会活動への参加状況

①日本教育行政学会理事（常任），②日本学校教育学会理事（常任），③日本教育経営学会理事，④日本生徒指導学会理事，⑤日本教育制度学会理事，⑥日本人権教育学会会員。

◎特色・強調点等

判例研究の成果をまとめ，公刊に向けて作業を続けている。文部科学省の委嘱研究「生徒指導等に関わる訴訟についての調査」を代表者として担当した。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①独立行政法人教育研修センターの研修会（通称「中央研修」）講師，「教育と法規」担当，　②上越市等の情報公開・個人情報保護審査会委員，　③全日本大学準公式野球連盟評議員，　④北信越大学準公式野球連盟

会長，　⑤日本教育都々逸研究会会長。

**◎社会への寄与等**

・上記の研修会講師や委員等としての活動を通して研究・教育活動や成果を社会に還元することに努めた。

## 石　田　美　清（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

【観点１】教育方法及び成績評価面での取組

○授業形態，学習（研究）指導法等の教育方法に関する取組

学部「教育実地研究Ⅳ（特別活動の指導法）」は，教職教養を学習した上で，20－30歳半ばまでの教職を支える特別活動の基礎基本的な理論の修得を中心に，最新の情報を加味して，変革しつつある学校教育に対応できる資質能力を育成することを目的としている。また，特別活動の教育的意義を踏まえて，学生の自治的能力の育成，learning by doing による資質形成を図ることもねらいとしている。最初２回の授業で，授業の目標，内容，日程だけでなく，評価方法・基準，授業評価に基づいて過去に行ってきた授業の改善点，本学の教育課題などの情報を開示し，説明した上で，学生にアンケートを実施し意見を取り入れて，教育内容，教育方法，評価方法・基準等を説明し，選択して，同意を求めた上で授業を開始している。

平成14年度は，①教育内容の全国的な水準化を図る，②教育方法等に関するアンケートを複数回実施してより学生の意見を取り入れ，インフォームドコンセントを徹底して，学生参画型の授業を目指した。しかし，学生と相互に約束して同意した「遅刻をしない」ことさえも守られず，毎回遅刻者が続出するという結果となった。これまで４大学で常勤として教職課程の授業を担当したが，担当科目の教育的意義を生かした教育方法を用いて，授業開始後３回目以内で「遅刻」をなくするよう教育を行ってきたが，本学の学生にはこれまでの教育経験は全く通用せず，授業を進める以前の問題に大変苦慮した。

上記の反省に基づいて，平成15年度は，学生参画型を継承し，最初２回の授業で，出欠・遅刻の取扱，教育内容，評価方法・基準，授業改善の希望について学生にアンケートを実施し，その結果に基づいて受講ルールを決め，教育内容・評価方法・基準を選択して，学生の同意の上で講義を行なった。また，学生の自主的自律的な学習を促進するために昨年度と同様に「学生自己評価表」を配布し，学生自身の授業中の取組，学習の理解度，準備学習・復習の状況等についてチェックを求めて，「確かな学力の向上」が図れるよう配慮した。さらに，口頭による注意では改められない遅刻について，遅刻者が続出し始める５月より，毎回，振り返りのための小テストを実施し（昨年度は毎回授業のチェックポイント表を配布したのみ），遅刻者は受験を禁止した。また，昨年度は授業終了後，毎回，「授業についての質問，意見，提案」を受け付けたが，本年度は「後出しジャンケンはなし」をキャッチフレーズに，形成的に授業改善を図るため，毎回小テストにおいて「提案，意見」を求め，意見や質問等があった場合には，次回の授業終了後に学生一人一人に対して回答や解説を行った。なお，授業前に成績の評価方法・基準を公開しているため，学生が述べた意見や提案等が成績に影響を与えることは全くないことを周知徹底した。配付資料は，学生１名につきＡ３判13枚（両面），Ａ４判１枚であった。（昨年度はＡ３判14枚（両面），Ａ４判２枚）

課題としては，「遅刻」に関して，事前に教務委員を通じて提出した書類に記載した例年使用の教室を，何の連絡もなく無断で変更されていたため，結果的に大学教職歴22年目にして初めて，授業者本人が「遅刻」となった。この事件のために緊張感が喪失したためか，授業の総準備時間が約25時間（昨年度は約57時間）に激減したことは残念であった。教育内容の全国的なスタンダードは維持する一方で，内容の約２割を最新情報に改定した。

大学院「特別活動特論」「生徒指導演習」においては，受講生が基礎基本的な内容を学習した経験がないため，基礎基本の徹底を図るとともに，教育実践における特別活動の実際をもとに討論を行った。

○成績評価法に関する取組状況

平成10年の大学審議会答申をまつまでもなく，従来より評価基準の明示，厳格な評価，多元的な評価機会の設定を心がけてきた。さらに公平な評価にも心がけており，結果的に評価基準に満たない場合，例えば卒業年次の学生に対しても授業者の裁量によって特別な配慮することはない。結果の開示に関しては，従来より最終的な評価を確定する前に，学生一人一人が自己の成績を確認し異議申し立てができるように，できるだけ個人情報が識別できないように配慮し，また学生本人の意思を確認して慎重に実施してきた。しかし平成13年度に１人の学生より開示方法について反対意見があったため（意見を述べた本人が特定できないためその真意は不明であるが，恐らく開示手続きの説明した時間に欠席したものと考えられる），代替案を検討したが受講学生数が多いため対応できず，成績評価の開示が必要な学生は，いわゆる情報公開法によって成績評価の開示を求めるよう指示した。

成績の評価方法に関しては，これまで同等の受講生数を対象とした行ってきた教育実践経験（鳴門教育大学・岡山大学：①毎時間小テスト，②中間テスト・最終テスト，③追試験のいずれか１つに合格すること，平成13年度：中間試験（６月中旬），前期試験（９月），追試験（９月），追々試験（９月）。），平成14年度：中間試験（６月中旬），前期試験（９月）の平均点）を明示して選択と同意を求めた結果，本年度は，中間試験（６月実施）と前期試験（９月実施）の２回の平均点に，教職教養に関するプレテストの成績を加算して算出することとした。

今後の授業改善の課題として，授業者として，教育目標，教育内容，教育方法，評価方法・基準を公開し，公平かつ厳格に運用し，教室で行う時間だけでなく，学生の教室外における準備学習・復習の徹底を図るとともに，教育内容において他科目との関連性を重視して精選に取り組みたい。また，卒業時における学生の質の確保を図るために，教員採用試験合格者からの授業評価を最も重視すること，米国における厳格な成績評価方法に見られるように成績の改善の見込みのない学生に対する履修制限や退学勧告などを提案していきたい。さらに，学習環境の整備として，従来より要望している教室の質的改善や教材準備機器の整備だけでなく，受講生数の制限や，ティーチングアシスタントの配置などを関係者に強く要望することによって授業の質を高めていきたい。

【観点２】教育の達成状況

○進学や就職などの卒業（修了）後の進路の状況から判断した取組状況

学部教育では，国立大学教員養成学部の責務として，各年次卒業者の５割が教員採用試験に正規合格することを努力目標として，担当する科目の教育内容・方法を設定して，学生に対して教育指導を行っている。

大学院教育においては，指導的立場の教員の資質育成を目標として授業及び研究指導を行っている。

**研究指導**

【観点１】学部

平成14年度研究指導学生なし

【観点２】大学院

現職教員については，データ等に基づいて教育実践の事実を再認識させ，公教育としての学校の意味を問うことを基本として，教育課題の解決に向けて各人の研究テーマについて指導を行った。

**その他の教育活動**

学内教職講座（生徒指導・教育相談）担当

◎特色ある点等

学部教育においては，教員採用試験に合格できるとともに，教員として必要な基礎基本的な資質能力を修得できるよう，また，特別活動の教育的意義を踏まえて，実践的な資質能力が身に付くよう，大学の授業の実態を機会あるごとに学会や教員研修会で報告しながら，指導主事，学校長，教員等より改善点等の意見を聞き教育を行っている。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

**著】**①平成15年７月：『生徒指導上の諸問題の推移とこれからの生徒指導』（共著） ぎょうせい

**論】**①平成15年８月：「生徒指導」「特別活動」（単著） 教職研修８月増刊号『管理職のための学校改革プロジェクト第２巻学校を変える校長の裁量権』 教育開発研究所 pp. 116-123

②平成15年12月：「ピア・レビュー（同僚同士による授業の観察・評価）の導入」「指導案の作成をどうサポートするか」（単著） 教職研修12月増刊号『管理職のための学校改革プロジェクト第４巻学校を変える校長の裁量権』 教育開発研究所 pp.204-211

③平成16年２月：「今，高等学校の生徒指導に求められていること」（単）『新潟県教育月報』 pp. 6-9

**発】**①平成15年８月：「教科以外の活動における教師の指導能力に関する研究」（単） 日本特別活動学会第12回大会

②平成15年11月：「課題研究Ⅱ カリキュラム開発と生徒指導」（単） 日本生徒指導学会第４回大会

学会活動への参加状況

①日本カリキュラム学会第14回大会（７月５日，６日），②日本特別活動学会第12回大会（８月18日，19日），③日本教育行政学会第38回大会（10月18日，19日），④日本生徒指導学会第４回大会（11月８日，９日）

◎特色・強調点等

学内プロジェクトの最終年度の調査研究を実施した。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①文部科学省初等中等教育局「教育課程の改善のための教育研究開発に関する教育研究開発企画評価会議」協力者，②高知県教育センター「10年経験教員研修『生徒指導研修』」講師，③新潟県教育庁義務教育課「サポートチーム等地域支援システムづくり推進事業評価検討委員会」委員長，④東京都教職員研修センター「10年経験者研修大学等講座」講師

◎社会への寄与等

・平成15年度上越教育大学公開講座「スクールリーダーのための総合的な生徒指導の実践と理論」において，「全国及び新潟県の生徒指導の動向」を講演し，「チェック法による生徒指導の取り組みの留意点」の演習を行った。

**大 前 敦 巳**（助教授）

〈教育活動〉

授 業

教育社会学特論（大学院）では，昨年度に引き続き「社会化」と「選抜・配分」の問題を念頭に置きながら，子どもの生活環境の変容について問題に取り上げ，それに対応した生徒指導の支援システム作りについ

て議論した。小テーマ毎に３回分の時間を割り当て，最初２回を講義に充て，３回目をディスカッション中心とし，双方向的な理解の深化を図った。授業終了時にリアクション用紙を配布し，質問，意見，感想などを記入してもらい，授業改善とディスカッションの参考資料に使用した。最終回に公開討論会を開催し，受講生以外の方も交えて授業の成果を公表した。成績評価は，討論への積極的参加程度を重視した平常点と，教育現場における支援システム作りに関するレポートによるものとし，レポートの内容は公開討論会の議題に取り上げて学生へのフィードバックを行った。

教育実地調査分析演習Ⅰ（大学院）では，生徒指導総合分野の修士論文を作成するための研究法を習得させると同時に，質問紙調査，観察，インタビュー，プログラム開発，授業参画などによる現地調査の基本的な技法について概説した。後期の同演習Ⅱにおいて，質問紙調査（大前敦巳担当）と観察・インタビュー調査（藤田武志担当）の２班に分かれて，実際の教育実地調査の過程を実習形式で体験的に学習する授業を行い，年度末に調査結果報告書を作成した。

生涯学習概論Ａ（学部）では，現代社会の変化に柔軟に対応することのできる生涯学習の施策および支援体制作りについて，レジュメ・プリント・ＯＨＰ等の複数のメディア教材を利用して講義した。乱数表を用いてランダムに学生に発言をさせ，リアクション用紙への記入を求め，それを平常点とすることで授業の緊張感を高めた。加えて論述試験による評価を行い，生涯学習の具体的取り組みに対する考えを展開してもらうことで問題への理解度を評価した。

**研究指導**

①学部３年と修士１年，②学部４年と修士２年の組み合わせによる，２つのゼミを開講した。

前者①のゼミでは，子ども支援の教育社会学とジェンダーに関するテキストの講読を行った。また，卒業論文・修士論文のテーマを確立し，自ら課題を見つけ問題解決を図るためのディスカッションを行った。現職院生の問題意識を学部学生に話してもらい，現場で生起する諸問題をめぐって意見交換をすることにより，論文作成に向けた内発的モチベーションの向上に努めた。また，レジュメの作成，聞き方・話し方，プレゼンテーションなどの技法を習得する機会を複数回設けた。

後者②のゼミでは，各学生の研究テーマにそくして論文を作成するための指導と助言を行った。特に，既存統計資料の再分析と現地調査法の指導に十分な時間を費やし，教育現場との関わりを重視した臨床的・実践的な研究を推進した。

**◎特色ある点等**

教育を取り巻く社会や文化の変容の問題に関して，ステレオタイプ的な理解にとどまらず，データや資料を用いながら自分で問題を吟味し判断する力をつけることに，教育の重点を置いている。学生自身の教育現場での経験に基づいて，社会学的な理論と方法を適切に用いることにより，自らの研究テーマについて考え深め，事実に根ざした問題解決や対応策を導き出すことを目指した。修士論文の作成にあたっては，教育実地調査分析演習を通じて修得した，現地でのデータ収集と分析の技法に基づく指導を行った。また，ディスカッションを通じて双方向的なコミュニケーションができるよう指導の工夫をした。さらに，公開ゼミ，ティームティーチングなどを行うことにより，教育内容の公開性を高め，ゼミ外の多くの方々に意見やアイデアを求めることで授業改善に努めた。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**著】**①平成15年４月：『大学界改造要綱』（共著，アレゼール日本編）　藤原書店

**論】**①平成15年９月：「高等教育進学者における学習経験の同質性と多様性－関西と北陸の文科系学生を対象とする調査結果の探索的分析－」（単著）　上越教育大学研究紀要　第23巻第１号 pp.61-75

②平成16年３月：「大学進学者における学習経験と学習性向－ユニバーサル・アクセスに向けた『新しい時代の教養教育』の文化的条件－」（単著）　教育経営研究　第10号

③平成16年３月：「大学改革をめぐるフランス的例外と日本的例外－市場化・グローバル化・地方分権化の狭間で－」（単著）　日仏教育学会年報　第10号

**発】**①平成15年９月：「日仏大学改革比較論－アレゼールの提言を巡って－」（共）　日仏教育学会2003年度研究大会

②平成15年６月：「高等教育進学者における学習経験の同質性と多様性－関西と北陸の文科系学生を対象とする調査結果から－」（単）　上越経営研究会

③平成15年７月：「（教育）社会学の「理論」から「場」へ－山下雅之氏の報告を受けて－」（単）　関西教育社会学研究会

**他】**①平成16年２月：「大学・短大生の生活と文化についての調査2003年　調査結果報告書－上越教育大学と関西の私立大学・短期大学の１年生の比較－」（単著）　平成15～17年科学研究費補助金若手研究（Ｂ）自主出版報告書

**共同研究の実施状況**

①アレゼール日本（高等教育と研究の現在を考える会）事務局会員　代表者：岡山茂（早稲田大学助教授）

**学会活動への参加状況**

①９月２０日：日仏教育学会出席，②９月２１日：日本教育社会学会出席

**◎特色・強調点等**

2003～2005年度科学研究費補助金若手研究（Ｂ）「日本型高等教育における学生の文化習得過程とその社会的支援に関する研究」（代表者：大前敦巳）の計画に基づき，上越教育大学と関西私立大学・短大の１年次生を対象に第１回パネル調査を実施し，その結果を年度末に報告書にまとめた。前年度までと同様，フランスとは異なる日本の学習経験の特質を分析するとともに，それに基づく文化習得過程についての調査分析を開始した。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①５月24～25日：本学公開講座講師，　②６月14日：県立六日町高等学校進路説明会での大学模擬講義の実施，　③日仏教育学会理事，年報編集委員長

**◎社会への寄与等**

・生徒指導総合講座で企画組織した公開講座に参加した。

・平成15年10月より，上記学会理事・編集委員長の活動を通じて，他大学の研究者との連絡交流を図っている。

**荻　原　克　男**（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

現代社会と学校では，変動する社会のなかでの教師の意識変容や，マスコミで報じられている「教育問題」の実像について，具体的なデータを示しながら検討した。マスコミ報道だけから捉えられる「問題」状況と，実際の調査データに当たってみた上での「問題」把握とのズレを受講者自身が学習・経験できるよう配慮した（なお，これに関して安藤知子，藤田武志両氏より実質的な協力を得た）。大学院の教育政策特論では，学校現場から見ると「上の方」にある疎遠なものと考えられがちな「教育政策」という事象が，実際

には各学校レベルの実践的問題に深く関連していることを，具体的な題材を通して考察することをねらいとした。授業形態としては，講義と受講者による報告・討議とをほぼ半分ずつ行った。

**研究指導**

大学院修士課程の１年生（現職院生）と，現場における素朴で直感的な問題関心を研究課題へと絞り込むための種々のアプローチについて検討・討議を行った。本年度はとくに，教育における「規模」の問題（学区規模，学校規模，人工規模，財政規模等）について内外の先行研究を検討した。２年生とは，調査研究途上での随時の検討・討議を密に行うとともに，実際の論文作成過程を指導した。

**◎特色ある点等**

いずれの教育活動においても，各自が主体的に課題をみつけ，それについて調査・考察し，その結果を他者に分かるよう提示し討論する経験をもつことを重視した。実際に，これらの学習機会，経験機会を多角的に設ける工夫を行った。それらを通じて，立場や意見を異にする他者と適切にコミュニケーションすることができる力を身につけることがねらいである。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①「教育行政学の自己観察」日本教育学会『教育学研究』70巻４号，2003年12月，109 ～ 117ページ。

**発】**①「文部省の組織と人事に関する研究（その２）－政策環境の変動と官房機能－」（青木栄一との共同発表）日本教育行政学会第38回大会，自由研究発表，2003年10月18日，於，愛知教育大学

②「中教審『今後の学校の管理運営に在り方について（中間報告)』について」日本教育学会課題研究・学校選択制度研究会報告，2004年３月13日，於，如水会館

**共同研究プロジェクトへの参加状況**

①国立教育政策研究所，共同研究プロジェクト「戦後教育法制の形成過程に関する実証的調査研究」研究委員。2003年12月13日，第２回研究会（於，国立教育政策研究所)。②日本教育学会課題研究プロジェクト「『学校選択問題』の理論・比較・実証研究」研究委員。2004年３月13日：第２回研究会（於，如水会館)。

**学会活動への参加状況**

①2003年８月２日～３日：日本学校教育学会第18回研究大会（富山大学)。②2003年10月18日～ 19日：日本教育行政学会第38回大会（愛知教育大学）③日本学校教育学会理事（機関誌編集委員会副委員長）

**◎特色・強調点等**

現代日本の教育改革政策の展開とその特質を究明する作業を継続中。戦後の日本型福祉国家の下での公教育の組織化・提供形態が大きく変容しつつあるなか，その変容が何を意味するのかを明らかにすることを通じて今後の展望を得ようとするものである。刻々と変動する教育改革動向を対象とするため，下手をすると単なる現象の後追いに陥りかねないので，独自の理論枠組みの提案・検証作業と平行して研究を進めている。当分，現実追跡と理論（再）構築との往復作業を繰り返すことが求められる。

**林　　泰　成**（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

〔学部〕「道徳の指導法」では，初回に詳細なシラバスを用意し，講義のねらい，内容，成績評価の方法を明示した。また，指導案の作成や，エクササイズの導入，授業ビデオの視聴を取り入れるなどして，学生が実際に教壇に立ったときに役立つ内容になるように工夫した。「学校モラルトレーニング基礎演習」では，同様のシラバスを準備し，ロールプレイングの技法をワークショップ形式で教授し，教師としての実践力が

身に付くように工夫した。

〔大学院〕「道徳教育特論」では，すでに基礎的な知識を身につけていることを前提に，コールバーグ理論とその授業への応用について講義し，討議の時間を取るなどして，より深い理解に達するように工夫した。「学校モラルトレーニング演習」では，カウンセリングのエクササイズと道徳教育を融合させた学習指導案の提案を，ワークショップ型式で行い，実践力を高めるよう工夫した。特論も演習も，ともにシラバスを用意し，授業のねらい，内容，成績評価の方法を明示した。

**研究指導**

学部生については，卒業論文の指導のほかに，臨床的な実践力を身につけさせるためにグループワークなどを実施した。大学院生については，修士論文の指導のほかに，学会発表の指導などを行った。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

①平成15年９月：富山大学非常勤講師として「道徳教育論（文系）」（集中講義）を担当した。

②平成14年11月：教職講座「道徳教育・同和教育」を開講した。

③平成16年２月：富山大学非常勤講師として「道徳教育論（理系）」（集中講義）を担当した。

**◎特色ある点等**

講義演習ともに，教官サイドからの一方的な講義ではなく，参加体験型のワークショップを取り入れて実施するように心がけた。論文指導についても学校現場に生かせるような臨床的なものになるように指導を心がけている。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**他】**①平成16年３月：「スクールカウンセラーとしての活動のまとめ」（研究代表米山直樹『学校教育相談におけるスクールカウンセラーの位置づけと活用に関する臨床的研究』上越教育大学研究プロジェクト報告書）

**共同研究の実施状況**

①学校教育相談におけるスクールカウンセラーの位置づけと活用に関する臨床的研究　代表者：米山直樹（上越教育大学講師）　学内研究プロジェクト，　③ＮＨＫ道徳教育番組のデジタル化に関する共同研究（ＮＨＫとの共同研究）

**学会活動への参加状況**

①６月14日～15日：日本道徳教育方法学会出席，　②８月２日～３日：日本学校教育学会出席，　③８月７日～８日：日本道徳性発達実践学会出席，　④８月18日～20日：日本特別活動学会出席，　⑤10月18日～19日：日本教育哲学会

**◎特色・強調点等**

道徳教育とカウンセリングを結びつけた新しい「心の教育」の開発研究に取り組んでいる。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①新潟県心の教育推進会議委員（座長），②新潟県立教育センター中学校道徳教育基礎講座・実践講座講師，③上越市立教育センターカウンセリング研修会講師，④日本道徳教育方法学会理事，⑤日本道徳性発達実践学会常任理事，⑥上越市立城北中学校スクールカウンセラー（１回８時間／週），⑦新潟県学校派遣カウンセラー，⑧福井県教育研究所道徳教育研修会講師，⑨広島県立教育センター道徳教育研修講師，⑩日本道徳教育学会新潟支部副支部長，⑪上越市立城北中学校学校評議員，⑫上越市立八千浦中学校学校評議員，⑬ＮＨＫ「虹色定期便」番組委員，⑭長岡市立深沢小学校校内研修会講師，⑮頸城村立南川小学校校内研修

会講師，⑯頸城村立大濱小学校校内研修会講師，⑰牧村立牧小学校校内研修会講師，⑱柿崎町立柿崎中学校校内研修会講師，⑲柿崎町立柿崎小学校校内研修会講師，⑳上越市立飯小学校校内研修会講師，㉑柏崎市立鏡が沖中学校校内研修会講師，㉒富山県朝日町教育センター研修会講師，㉓開志学園高校ＰＴＡ講演会講師，㉔三条市立大崎中学校校内研修会講師，㉕上越教育大学公開講座「ロールプレイングで家族関係を考える」講師，㉖日本教育哲学会編集委員，㉗日本特別活動学会理事

**◎社会への寄与等**

・新潟県心の教育推進会議座長として県の道徳教育の推進に積極的にかかわった。

・大学と小中学校の連携を目指して，研修会講師や学校評議員として積極的に学校現場にかかわるよう努めた。

**藤　田　武　志**（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

学部における教育方法として，学習への動機づけを高めたり，学習内容のより深い理解を促進したりするために，次の８つの工夫をしている。①講義の初回に講義の目標や各回の講義内容，評価の方法などを記したシラバスを配布すること，②内容をより深く理解するための参考文献を適宜紹介すること，③身近な題材や，教育現場において必ずかかわる題材を通して，学問的な概念や理論，方法論を理解させること，④図表などの資料，ビデオなどの視聴覚教材を多く用い，具体的な理解をはかること，⑤毎回の講義の終了時に，質問や疑問，自分の意見や感想などを「リアクション・ペーパー」として書かせ，その一部を，次回の講義の初めに紹介してコメントをしたり，講義内容に反映させたりすること，⑥ホームページ上に作った受講者のページに，毎回の講義の概要，リアクション・ペーパーの紹介とコメントなどを掲載すること，⑦レポートによって評価をする講義の場合，添削・採点済みのレポートを返却すること，⑧受講者の多い講義の最終回には，無記名の授業評価アンケートを行い，次年度以降の教育方法の改善をはかること，である。

大学院における教育方法として工夫しているのは，次の４点である。①講義への参加意欲を高め，多様な意見の存在に気づくことによって理解を深めるため，ディスカッションを多く取り入れること，②ディスカッションの成立に不可欠な共通の知識基盤を参加者に持たせると同時に，講義時間以外における学習を促進させるため，複数の論文を課題として講読させること，③毎回の講義の終了時に，質問や疑問，意見や感想などをリアクション・ペーパーに書かせること，④ホームページ上の受講者のページに講義の概要や，リアクション・ペーパーの紹介とコメントを掲載すること，である。

学部と大学院の共通授業として行われている実践セミナーと実践場面分析演習を企画・運営し，自ら学び考える教員を養成・再教育するために以下のような工夫をした。①学部生と大学院生の混成チームで活動を行うことによって，世代や立場の違いを意識しながらコミュニケーションをはかること，②教員として必ず直面する切実な問題を題材に，チームとして広範なリサーチをすること，③リサーチに基づき，他のチームとディベートを行うことによって，論理の組み立て方や議論のしかたを体験的に学ぶこと，④リサーチやディベートに先立ち，リサーチの方法，論理的思考法，議論の組み立て方などに関する講義を行うこと，⑤これらの活動を通して，さまざまな意見の存在に気づき，それらを論理的に組み立てながらコミュニケーションをはかる力を育成すること，である。

**研究指導**

学部３年生に修士１年のゼミに参加させ，現職の院生とのディスカッションを通して，現職の院生の問題意識や，現場で生起する諸問題などに関する理解を促すようにした。また，自分の考えを筋道立てて分かり

やすく提示したり，他人の意見に耳を傾ける態度を育成するため，ゼミにおけるプレゼンテーションの機会を複数設けた。さらに，自らの問題関心を自発的に深め，広げていくことができるような指導・助言に努めた。

大学院では，修士１年の入門期には理論と方法論に関する基礎的な文献を題材に，それぞれの院生の課題と関わらせた発表とディスカッションを行うことによって，理解を深めるとともに，それぞれの問題関心も掘り下げていくことができるよう配慮した。また，修士１年の後半では，院生それぞれの問題関心に基づいた発表とディスカッションを行うことで，多様な現職院生の見解も取り込めるようにした。さらに，修士２年においては，修士１年までの指導法を踏襲しつつ，それぞれの課題を自ら追究していくことができるよう，方法論や論理構成，先行文献などに関する指導・助言に努めた。

**◎特色ある点等**

講義やゼミについて，次のつの４点を特色として挙げることができる。①双方向性：講義においてリアクション・ペーパー方式を採用することにより，一方的ではなく，学生・院生の意見や疑問などを取り入れた双方向的な講義を行っている点。②公開性：学生・院生のリアクションを講義やインターネットで公開することを通して，さまざまな意見の存在に気づかせ，自らの考えを相対化・深化させられるように工夫するとともに，講義概要の公開によってアカウンタビリティに応えようとしている点。③日常性：リアクションの公開やディスカッションを日常的に行うことよって，自分の意見の公表，他人の意見への傾聴に対する前向きな態度を育成するようにしている点。④自主・自発性：研究指導においては，教え込みや押しつけの指導を廃し，自ら考え，学ぶ姿勢を育成するようにしている点。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成15年10月：「戦後日本の受験社会の変遷に関する社会学的考察」（単著）『上越教育大学研究紀要』第22巻第２号，pp.475-491

②平成15年10月：「書評　新堀通也編『臨床教育学の大系と展開』」（単著）『教育社会学研究』第73集，pp.93-95

**共同研究の実施状況**

①「中等教育における部活動の実態と機能に関する実証的研究」代表者：西島央（東京大学助手）科学研究費補助金，②「代替システム評価ユニット」代表者：苅谷剛彦（東京大学教授）東京大学基礎学力研究開発センター（文部科学省21世紀ＣＯＥ）

**学会活動への参加状況**

①８月２～３日：日本学校教育学会出席，②９月20～21日：日本教育社会学会出席

**◎特色・強調点等**

部活動をめぐる一連の研究は，部活動を単なるスポーツ・文化的活動の場としてだけ見るのではなく，学校の活動として部活動がどのような機能を果たしているのか，社会的不平等という問題との関係で部活動はどのような意味を持っているのか，といった新しい観点から研究したものであり，部活動研究のみならず，学校社会学的な研究にも新たな地平を拓くものである。また，代替システム評価ユニットにおける共同研究は，進行しつつある教育改革の動向が学校にどのような影響を与えうるのかを考察する一方で，学校現場に対する研究者の貢献や学校現場との協働のありかたを模索しており，新しい臨床研究のスタイルを実践的に案出しようとする点において優れたものといえる。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①東京都教職員研修センター平成15年度10年経験者研修講師（「現代学校論・子ども論」を講演）

②平成15年度新潟県高等学校ＰＴＡ指導者研修会講師（「学校・家庭・地域の連携とＰＴＡに期待すること－高校生の『生きる力』を育むために－」を講演）

③糸魚川市・西頸城郡　中・高生徒指導連絡協議会講師（「中・高が連携した生徒指導への期待　－子どもたちを「おとな」にするために－」を講演）

④新潟県中頸城郡吉川町親子ふれあいのつどい家庭教育講演会講師（「子どもの成長をどう支えるか　－大人の役割を考える－」を講演）

⑤上越教育大学出前講座（新潟県上越市立直江津東中学校・新潟県立小千谷高等学校にて「社会の常識は非常識？　－社会について調べよう」を講演）

◎社会への寄与等

・大学の地域貢献事業の一環として行われている出前講座を担当し，中学生や高校生の総合的な学習の時間における出前講座，および，東京都の現職教員研修（10年研修）の講師を担当した。また，中学校と高等学校の生徒指導に関する連絡協議会や，自治体における研修会の講師を務めるなどの社会的活動を行った。

三　村　隆　男（助教授）

〈教育活動〉

授　業

（学部）大人数授業では座席指定制および遅刻の厳密な把握を試み授業効率をあげた。授業内容は，シラバスに明記した進度で進めたが，毎回授業レポートを提出させ，学生の授業へのニーズを知り，質問への回答を行うことで双方向型の授業創造を試みた。授業形態としては，カウンセリング実習，上越ハローワーク見学，グループワーク実習など体験的な活動を取り入れながら進路指導・キャリア教育の理解を深める努力を行った。評価は毎回の授業レポート，発表状況，遅刻を正確に把握した出席状況をもとに学生が納得のいく方法での評価を試みた。

（大学院）現職教員とストレートマスターとの理解のギャップを埋めるため教育実践における進路指導が具体的なイメージとしてつかめる様々な資料を用意し，進路指導研究への理解が促進されるよう工夫した。さらに，文部科学省が進めるキャリア教育については，現場に戻った院生，あるいは新に教師になる学生が学校現場で指導的な立場で推進していける力量の育成を試みた。

研究指導

卒業論文３名指導。修士論文４名指導。研究対象領域の焦点化までのプロセスとし，関心領域のブックレポート及び調査研究方法の検討を中心に行った。ゼミにおいては，学部生と院生との合同研究指導を行い，それぞれの研究領域への理解を示しながら各自の研究を進めるように配慮した。進路指導実践研究資料が少ない中，日本進路指導協会の指定校資料の分析，文部科学省の推進するキャリア教育を最初に取り入れた小学校の導入過程の研究とそれぞれ新たな課題を創出して意義深い研究を行った。

その他の教育活動（学外を含む。）

①上越市立春日中学校カウンセラー　②新潟県カウンセラー学校派遣事業として，上越市立城東中学校及び上越市立春日小学校に派遣される。　③新潟県教育職員免許法認定講習講師　④東京都10年経験者研修「大学等公開講座」「進路指導」「特別活動」講師　⑤新潟大学工学部非常勤講師（職業指導）　⑥上越教育大学公開講座講師　⑦埼玉県高等学校進路指導研究会顧問

◎特色ある点等

職業観，勤労観の欠如，フリーターの急増のなかで学校教育における進路指導・キャリア教育が強く求められている。そこで，こうした状況を十分把握し，現場において進路指導・キャリア教育の積極的な推進が可能な，理論と実践双方において力量のある教師の育成に念頭を置き研究及び教育活動を行っている。平成15年度から始まった文部科学省の「キャリア教育推進の手引き」作成に大学院における「進路指導特論」「進路指導演習」の修了生が２名加わっていることからも，日本の進路指導・キャリア教育において先導的な活躍ができる力量を身につけることができていると判断している。一方，進路指導・キャリア教育の教育書への執筆を通し，全国の教師の教育実践力を高めることができた。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

論】①平成15年７月：「『少年職業紹介ニ関スル件』依命通牒の学校生活から職業生活への移行支援における意義」『産業教育学研究第33巻第２号』日本産業教育学会　17頁～24頁

②平成15年１月：「『少年職業紹介ニ関スル件』依命通牒の進路指導における意義－職業行政と学校教育の連携による移行支援の嚆矢として－」『産業教育学研究第34巻第１号』日本産業教育学会　18頁～19頁

③平成15年３月：「学校教育への職業観・勤労観形成の導入過程における教科外活動の役割」『日本特別活動学会紀要第12号』日本特別活動学会　23頁～32頁

業】①平成15年４月：「新・キャリア教育基礎講座」『キャリアガイダンス最新ノウハウブック４月号』リクルート　７頁～13頁

②平成15年６月：「『全体研究協議－キャリア教育における職業観・勤労観の育成－』（２日目午後）の新たな取り組み」『進路指導第76号第６号』日本進路指導協会　16頁～19頁

③平成15年６月：「新・キャリア教育基礎講座　総合的な学習編」『キャリアガイダンス最新ノウハウブック６月号』リクルート　７頁～14頁

④平成15年８月：「激変する社会とこれからの進路指導－進路指導の不易と流行をもとに－」『教育ながさき　第54巻　第633号』長崎県教育センター編集，長崎県教育研究協議会発行　６頁～１１頁

⑤平成15年９月：「新・キャリア教育基礎講座　個別指導編」『キャリアガイダンス最新ノウハウブック９月号』リクルート　７頁～14頁

⑥平成15年９月：「『キャリア教育』時代の到来に向けて」『進路指導第76巻第９号』日本進路指導協会　３頁～６頁

⑦平成15年11月：「新・キャリア教育基礎講座　年間計画編」『キャリアガイダンス最新ノウハウブック11月号』リクルート　７頁～16頁

⑧平成15年11月：「誌上　年間計画コンサルティング」『キャリアガイダンス最新ノウハウブック11月号』リクルート　31頁～40頁

⑨平成16年２月：「『小・中・高等学校の連続性を配慮した進路学習』のこれから－「全米キャリア発達ガイドライン」のあゆみを参考に－」『進路指導第77巻第２号』日本進路指導協会　14頁～19頁

発】①平成15年８月：「スクール・カウンセラーにおけるキャリア・カウンセリングの可能性」日本進路指導学会第21回進路指導研究セミナー

②平成15年10月：「特別活動における自己効力と質的研究」日本進路指導学会第25回研究大会

③平成15年10月：「『少年職業紹介ニ関スル件』依命通牒の進路指導における意義－職業行政と学校教育の連携による移行支援の嚆矢として－」日本産業教育学会第44回研究大会

**他】**①平成15年４月：「『進路先への適応』をテーマにした小・中・高等学校のモデルを拝見して」『進路指導第76巻第４号』日本進路指導協会　42頁～43頁

②平成15年７月：「進路情報の活用－上級学校調べ－」『進路指導第76巻第７号』日本進路指導協会　40頁～41頁

③平成15年８月：「『進路指導』第76巻第6号の「『全体研究協議－キャリア教育における職業観・勤労観の育成－』（２日目語義）の新たな取り組み」の内容に対する修正－大日本職業指導協会（現，日本進路指導協会）の発足年について」『進路指導第76巻第8号』日本進路指導協会　51頁～52頁

④平成15年９月：「適性検査をどうフォローしていくか」『キャリアガイダンス最新ノウハウブック９月号』リクルート　20頁～21頁

⑤平成15年９月：「生徒の情報を大学ノートで簡単に整理」『キャリアガイダンス最新ノウハウブック９月号』リクルート　27頁

⑥平成15年10月：「勤労体験学習（職場体験・就業体験）の今後の方向性」『進路指導第76巻第10号』日本進路指導協会　41頁～42頁

⑦平成15年10月：「学校生活から職業生活への移行支援－進路指導学会の研究大会」『週刊教育資料第822号』　９頁

⑧平成16年１月：「選択・決定能力をいつどのように育成するか」『進路指導第77巻第１号』日本進路指導協会　41頁～42頁

**共同研究の実施状況**

①日本労働政策研修・研究機構「企業と連携した若年者のキャリア準備活動に関する研究会」委員

**学会活動への参加状況**

①日本進路指導学会常任理事②日本進路指導学会研究推進委員長③日本進路指導学会名称選定委員④日本特別活動学会紀要編集常任委員⑤平成15年８月：日本進路指導学会第21回進路指導研究セミナー⑥平成16年10月日本進路指導学会第25回研究大会⑦日本産業教育学会第44回研究大会

**国内外の学術賞の受賞状況**

①７月29日日本進路指導協会賞受賞（日本進路指導協会）受賞対象となった研究実践のテーマ「進路指導における実践・実証研究」

**◎特色・強調点等**

進路指導・キャリア教育が推進されるなかで，具体的な教育実践活動を行う上で必要な理論や海外の事例を論文などを通して示した。一方，わが国における職業指導の成立過程を職業観，勤労観形成の視点研究することで進路指導・キャリア教育推進の歴史的意義の研究を行った。こうした「進路指導における実践・実証研究」に対し，日本進路指導協会より「日本進路指導協会賞」を受賞した。同賞の個人での受賞は初めてである。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」委員②新潟県カウンセラー学校派遣事業新潟県上越市立城東中学校研修会『キャリア・カウンセリングに関する事例研究会』③上越公共職業安定所研修会講師（『ハローワークにおけるキャリア・カウンセリング』を講演）④上越市立春日中学校 PTA 講演会（『受験期における親のあり方』を講演）⑤関根学園 PTA 講演会（『わが子の理解と進路　－キャリア社会の到来のなかで－』を講演）⑥上越市立春日中学校研修会（『キャリア・カウンセリング実習』を講演・実習指導）⑦日本進路指導協会主催進路指導研究協議全国大会（パネルディスカッション『キャリア教育における

職業観，勤労観の育成』パネラー及び司会）⑧新潟県教育職員免許法認定講習講師（8月4～6日）⑨沼津市立原東小学校研修会（『総合的な学習の時間におけるキャリア教育の立ち上げと実践について』を講演）⑩関根学園高等学校進路指導研修会（『なぜ今インターンシップか－わが国の就業体験の歴史から学ぶ－』を講演）⑪埼玉県高等学校進路指導研究会キャリア学習委員会第５回研修会（『今，学校進路指導をどうとらえるか』を講演）⑫埼玉県立桶川高等学校進路指導研修会（『高等学校教育における職業レディネス・テストの機能』を講演）⑬京都府私立高等学校進路指導研究会（『進路指導の組織と体制について』を講演）⑭埼玉県高等学校ＰＴＡ講演会（『現代高校生の理解と進路』を講演）⑮沼津市立原東小学校研修会『今年度キャリア教育実践の反省と来年度の方向』⑯柏崎刈羽小中学校進路指導合同研修会『小･中･高等学校12年間のキャリア教育における小中連携を考える』⑰埼玉県立日高高等学校全校講演会（『オンリーワンを目指し，自分の進路を踏み出そう！』を講演）⑱平成15年奈良県中学校教科等研究会進路指導部研究大会（『職業観，勤労観の育成を基盤にした進路指導のありかた』を講演）⑲浦和実業学園高等学校職員研修会（『中学校と高等学校を連携したキャリア・ガイダンスを考える』を講演）⑳福井県立坂井農業高等学校進路指導研修全体会「キャリア教育の登場と学校進路指導」

**◎社会への寄与等**

学校教育にキャリア教育の導入が推進される中，学校や研究会等における進路指導・キャリア教育理論や実践方法へのニーズが高く研修会等の講師として参加する機会があった。特に，学校訪問により，直接学校の教育活動や進路指導活動へのコンサルテーション活動を行ったが，評価されている。特に，静岡県沼津市立原東小学校にてキャリア教育立ち上げの支援を行い，わが国初の全校的小学校キャリア教育実践の実現に寄与した。

**安　藤　知　子**（助　手）

**〈教育活動〉**

**授　業**

実践場面分析演習・実践セミナー（生徒指導）では，院生・学部生自身が主体的に学び，実践場面を分析する力を身につけられるように授業内容を工夫し，授業評価により受講者の要望を把握するよう試みた。

**研究指導**

生徒指導総合分野の院生全体に対して論文作成のための補助作業を行った。また，構想発表会，中間発表会等での指導・助言や，個別の相談に応じるなどの形で，論文作成への支援を行った。

**◎特色ある点等**

教育活動，研究指導いずれについても，生徒指導総合分野の院生全体に対する指導と支援を行い，個々の院生の要望を把握し，要望が生徒指導総合分野のカリキュラム全体の中で反映されるよう配慮した。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**他】**①平成15年６月：「社会人活用の現状とこれから」 教職課程　第29巻第９号　pp.30-33.

②平成15年７月：「会議運営を円滑化するコミュニケーションスキル」（チェックポイント・学校評価No. ２）学校の組織設計と協働態勢づくり　木岡一明編集　教育開発研究所　pp.108-111.

③平成16年２月：「（第３章情報提供の内容）生徒指導・進路指導」学校における「情報提供」と「外部評価」の進め方　小島弘道編集　教育開発研究所　pp.58-61.

④平成16年３月：「学級経営のスキル向上を図る職能開発の課題」（チェックポイント・学校評価 No. ６）学年・学級の指導点検とカリキュラム開発　木岡一明編集　教育開発研究所　pp.46-49.

⑤平成16年３月：「教育研修体系における10年経験者研修制度化の意味」教員の人事評価と職能開発プログラムに関する国際比較研究　平成14～15年度科学研究費補助金研究成果最終報告書　pp.245-256.

**共同研究の実施状況**

①教員の人事評価と職能開発プログラムに関する国際比較研究　代表者：八尾坂修（奈良教育大学教授）平成14～15年度科学研究費補助金，②学校指導職の養成・研修システムとカリキュラム開発に関する比較研究　代表者：古賀一博（上越教育大学教授）　平成15～17年度上越教育大学研究プロジェクト

**学会活動への参加状況**

①６月６日～８日：日本教育経営学会第43回大会出席，②８月２日～３日：日本学校教育学会第18回研究大会出席，③11月22日～23日：日本教育制度学会第11回大会出席，④10月４日～５日：日本教師教育学会第13回大会出席（開催校），⑤日本教育経営学会研究推進委員会委員

**◎特色・強調点等**

Ｓ県Ｓ市立M中学校における長期観察調査によって，子ども理解規範と学校の組織成員としての行動規範との調整の有り様を探究した。学校の存立構造を変えるような教育改革の最中にあっても，目の前の生徒一人一人の実情に応じた生徒指導が最重要課題として意識されざるをえない学校現場の状況を，具体的な場面に即して緻密に捉えた点に研究の意義と独自性がある。

**【心理臨床講座】**

**加　藤　哲　文**（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

大学院担当授業の「心理アセスメント演習Ⅰ」では，18名の学生に心理アセスメントの実践的な演習を行った。特に，知能検査や投影法による心理テストを始めとする様々なアセスメント方法を準備し，検査器具やシュミレーションビデオテープを用いて実習を行った後，各データの集計，まとめ及び分析方法を説明し，個々の学生に対して演習を行った。さらに，各グループ毎にケースの解釈や治療や支援への見立てを検討させ，グループ間での討議を経て全体の講評を行い，各検査毎にレポートを課し添削を行った。また，「臨床心理基礎実習」及び「臨床心理実習」では，実際の心理臨床業務に準拠した実習を中心とした内容で，臨床心理学分野担当教員とチームティーチング形態で授業を行った。さらに，今年度から新設した「応用行動分析学特論」では，発達臨床コースの学生を始め，障害児教育コース，幼児教育コースの学生を対象として，応用行動分析学による臨床的な技法の具体的な事例を交えてその全貌を紹介した。そして，「発達障害学特論」では，近年学校教育現場で注目されている軽度発達障害について，その概要を精神医学，臨床心理学，学校教育の各立場から紹介し，彼らの適応に向けた様々な支援アプローチを紹介した。さらに，主として学校心理分野等の学生を対象とした「臨床心理基礎演習」や「発達臨床心理学特論」においても，学生のニーズをふまえて，事例を取り入れた具体的な教材を用いた講義形態と演習形態を交互に繰り返す方法で授業を展開した。成績の評価については，各課題毎に出したレポートの内容，及びグループ間での討論等で示された個々の学生の表現技術について評価した。レポートの作成基準はあらかじめ明示しそれに基づいた作成を求めた。

平成15年度大学院ゼミ修了生（４名）は，現職教員２名と他大学出身の心理学科の学部出身者２名で，研究や臨床活動の研修に積極的に取り組んだ。修了後は，２名の現職教員は教育現場に復帰し，他の２名はいずれも新潟県派遣のスクールカウンセラーとして採用された。いずれの学生も臨床心理学，教育相談やカウンセリング等に関する専門的な知識や技術を習得し，臨床心理士受験の準備をしているところである。

**研究指導**

平成15年度は大学院２年生４名及び大学院１年生３名，学部４年生１名及び学部３年生１名をゼミ指導した。大学院生についてはいずれも臨床心理学，教育相談やカウンセリングに関する臨床的な研究を希望しており，その希望を実現化するために年度当初より心理教育相談室における臨床実習指導や，地域の学校へ出向き教育相談やスクールカウンセリングの実習を行ってきた。特に大学院２年の４名についてはいずれも，学校場面におけるスクールカウンセリングの在り方や，学校・教師コンサルテーションに関する研究テーマをもち，学校現場に入りながら研究を進めてきた。その結果，それぞれが学校支援や教師へのコンサルテーションに関する実用的な知見を得るに至り，学会発表や紀要への論文の投稿へと結実した。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

①富山大学教育学部大学院（教育学研究科）において「障害児研究法」，②富山大学人文学部おいて「生徒指導論」，③新潟県立看護大学において「心理学」を担当した。

**◎特色ある点等**

臨床心理学と学校心理学の双方を生かした教育研究活動指導を進めていった。そのために実際の学校に出向き，教師へのコンサルテーションや，児童生徒と教師との相互作用を重視した分析方法を指導した。これらの方法論は，学生のみならず，学校現場の教師へ寄与するものと思われる。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成16年３月：『集団社会的スキル訓練が児童の対人行動に及ぼす効果』（共著）上越教育大学心理教育相談研究　第３巻　pp.1-12

②平成16年３月：『学校教育相談におけるスクールカウンセラーの位置づけと活用に関する臨床的研究』（共著）　平成14年度・15年度上越教育大学研究プロジェクト報告書

**発】**①平成15年９月：特別支援教育における行動コンサルテーションの役割(2)（共）第41回日本特殊教育学会自主シンポジウム企画・発表

②平成15年11月：学校での支援のために「応用行動分析」をどのように生かしていくか？（共）日本ＬＤ学会第12回大会自主シンポジウム企画・発表

**共同研究の実施状況**

①学校教育相談におけるスクールカウンセラーの位置づけと活用に関する臨床的研究　代表者：米山直樹　平成15年度上越教育大学研究プロジェクト

**学会活動への参加状況**

①５月23日～29日：Association for Behavior Analysis 29th Annual Convention(San Francisco)出席，②９月20日～22日：第41回日本特殊教育学会出席，研究発表，③11月22日～23日：日本ＬＤ学会第12回大会出席，研究発表

**◎特色・強調点等**

通常の学級における特別な教育ニーズのある児童生徒，軽度発達障害のある児童生徒を担任する教員や学級全体を支援するための行動コンサルテーションの技法やシステム構築に関する臨床的研究を行った。ここ数年の研究成果の蓄積を整理し，学校や臨床現場に普及させるためにシンポジウムを開催した。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①平成15年４月～16年３月：新潟県スクールカウンセラー派遣事業における非常勤派遣職員（新井市教育委員会），②平成15年４月～16年３月：埼玉県上尾市就学指導委員会委員，③平成15年４月～16年

３月：新潟県上越市就学指導委員会委員，　④平成 15 年４月～ 16 年３月：新潟県糸魚川市保育士研修会講師，　⑤６月 25 日：新潟県立教育センター自閉症児教育講座講師，　⑥７月 12 日：柏崎市教育センター教職員研修会講師，　⑦７月 22 日：新潟県保育士会障害児保育研修会講師，　⑧７月 31 日：新潟県教職員 12 年研修会講師，　⑨８月５日：埼玉県特別支援教育研究協議会講師，　⑩上越市教育センターカウンセリング研修会講師，　⑪９月 17 日：新潟県特別支援教育推進員養成研修会講師，　⑫ 11 月 25 日：東京都小平市心身障害協議会研修会講師，　⑬ 12 月 25 日：石川県立教育センター初任者研修特殊教育基礎講座講師

◎社会への寄与等

・主として，学校，教育センター，教育委員会等の主催による教員研修に携わってきた。不登校等のある児童生徒への教育相談や，軽度発達障害のある児童生徒への支援方法をテーマとした講演を行ってきた。これらは，いずれも学校における重要な問題であり，また教職員の研修としてニーズの高い内容であったことから貢献度が大きかったと思われる。

田　中　　敏（教　授）

〈教育活動〉

授　業

実践的なデータ解析の方法を中心に教えている。

研究指導

学部４人，大学院６人を指導した。うち学部２人が卒業論文を作成し，大学院５人が修士論文を作成した。

◎特色ある点等

実用性を第一に授業内容・指導内容を開発している点。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

他】①平成15年12月：『JavaScript-STAR version 3.5.0』（http://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/index.htm）

◎特色・強調点等

上記の統計分析プログラムはフリーウェアである。

新たにメニューに加えた「直接確率計算１×２（母比率不等）」は他の類同ソフトに例を見ない。

同様にメニューに加えた「自動集計検定２×２」は探索と検定を同時実行する独創的な方法であり，オリジナルに開発したもの。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①平成15年７月：青森県八戸市教員研修会講師

◎社会への寄与等

・Ｅメール等で学内・学外者のデータ分析の相談に応じている。

阿　部　　勲（助教授）

〈教育活動〉

授　業

受講者が，講議した内容の一つひとつをただ単に暗記したり，理解するだけでなく，その内容をめぐっ

て，自分なりに考え，問題を発見するよう努力してきた。

**研究指導**

学部，大学院ともに自分で問題意識をもち，自分で研課題を設定し，自分でその解明に努力するよう，こちらからの指示を極力さけて，学習支援に努めた。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

他大学などの非常勤講師

①上越保健医療福祉専門学校「発達心理学」

②信州大学人文学部「発達と教育」（集中講義）

**〈研究活動〉**

**学会活動への参加状況**

①９月13日～ 15日：日本心理学会第67回大会（東京大学）出席

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①新潟労災病院倫理委員会委員，②新潟労災病院試験委員会委員

**五十嵐　透　子**（助教授）

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**著】**①平成15年６月：『自分を見つめるカウンセリング・マインド：ヘルスケア・ワークの基礎と展開』（単著）医歯薬出版

**論】**①平成15年12月：『入院中の患者の自殺を体験した看護師へのコンサルテーション』（単著）心理臨床学研究　第21巻　pp. 101-113

②平成16年３月：『我が国のメンタルヘルス・サービス領域における援助要請行動研究の課題と方向性の検討』（共著）上越教育大学心理教育相談研究　第３巻　pp. 53-65

③平成16年３月：『青年期における対象喪失の積極的意義に関する研究』（共著）上越教育大学心理教育相談研究　第３巻　pp. 67-79

**他】**①平成15年10月：『「困った患者さん」とあきらめる前に……　問題行動対処法　なぜ？どうすれば？ケーススタデイ』　ナース専科　pp.62-71

②平成16年１月：『対人関係のストレスと対処①：相手をわかろうとすること』（単著）　臨床老年看護　第11巻１号，pp.116-123

③平成16年３月：『対人関係のストレスと対処②：相手を尊重することとアサーション』（単著）　臨床老年看護　第11巻２号，pp.53-58

**共同研究（幼，小，中，高等学校及び特殊教育諸学校教員との共同研究を含む）の実施状況**

①流産した女性の悲嘆体験と精神的苦痛尺度の考案　代表者：島田啓子（金沢大学）　科学研究費補助金

**学会活動への参加状況**

①平成15年５月31日－６月１日：日本精神保健看護学会，②９月11日－15日：日本心理臨床学会

越　　良　子（助教授）

〈教育活動〉

授　業

大学院および学部の授業は，教師行動や学級集団を対象とする内容であることから，院生や学生が自らの問題として考えられるように，現場における自身の実践を分析させ，それを教材として利用した。院生・学生自身の省察を促すとともに，教育実践研究における新たな視点の獲得を促した。

研究指導

院生に対して，修論研究のための要因計画，調査紙の作成，結果の分析について共に検討を重ね，修了後にも必要であろう実践研究力の向上を念頭において指導を行った。

◎特色ある点等

研究力・実践力が真に院生や学生自身の身に付き，現場においてそれを活用・応用できるようになることを念頭においた教育活動である。

その他の教育活動（学外を含む。）

①上越保健医療福祉専門学校「人間関係論」非常勤講師

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

翻訳（分担）】①平成16年３月：男性と男らしさの心理学：研究の現状と将来の方向　アンガー（編著）森永・青野・福富（監訳）女性とジェンダーの心理学ハンドブック　北大路書房　pp.240-255

◎特色

ジェンダー領域における初めてのハンドブックの完訳であり，ジェンダーに関する心理学的あるいは社会学的研究をすすめるうえで有用な知見と材料を提供しうる。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①６月～７月：本学公開講座講師「中・高生のための心理学入門」

内　藤　美　加（助教授）

〈教育活動〉

授　業

【観点１】教育方法及び成績評価面に関する取組状況

○授業形態，教育方法に関する取組状況

教育心理学特論（大学院）では，自閉症を中心とする発達障害や社会性の発達に関する最近の認知発達心理学の研究成果を取り込んで内容構成を行い，子どもの発達についての心理学的理解を促すよう工夫した。心理学特殊実験（大学院）及び心理学実験（学部）では，実験レポートの添削およびその解説を行って心理学的データの分析方法と研究報告書の作成方法を習得させた。教育心理学概論（学部）では，心理学の面白さを体験させることを目標とし講義内容の理解に重点を置いた。講義３回に一度の割合で学生に質問票を提出させ，質問の解説に十分な時間をあてた。認知心理学（学部）では週ごとに模擬実験と講義を交互に実施し，認知現象を実体験させた後その理論的背景について解説するという方法をとった。

○成績評価法に関する取組状況

教育心理学特論および概論では，試験によって講義内容の理解度を評価した。認知心理学では，模擬実験と講義のセットからなるトピック２つごとに１回，合計３回のレポートによって評価することを初回の授業

でシラバスとともに明示し，各レポートの成績ならびに模擬実験への出席を総合的に評価した。心理学実験および特殊実験では，提出されたレポートが基準点に達しない場合には再提出を課し，心理学のレポートとして最低限の形式と内容を備えたものを評価対象とした。

**研究指導**

【観点１】大学院

当研究室所属の２名の大学院２年生に対して不定期にゼミを行い，修士論文の研究及び論文執筆指導を行った。特に，データの収集と分析，結果の解釈について助言を与え，また原稿には丁寧に朱を入れて，論文の向上を図った。大学院１年生１名に対しては，１月末まで定期的に国内外の心理学雑誌論文を講読させることにより，心理学論文の読み方とその内容把握の技能を修得させ，同時に関心領域に関わる国内外の心理学的な研究の状況を展望させた。２～３月には，関連論文をさらに集中的に読ませてその知見と問題点を把握させ，研究テーマの絞り込みと研究計画を策定する助言を与えた。

【観点２】学部

当研究室所属の１名の学部生に対して，週１回定期的に書籍講読を行い，当該学生の関心領域である記憶の研究方法とその知見を理解させた。

**◎特色ある点等**

以上の教育活動を通じて，以下のような特色を持たせた。講義では模擬実験を頻繁に導入して心理現象の面白さを実感させた上で，それを理解するための心理学的な捉え方や説明の枠組みを修得させた。実験の授業では，レポートをなるべく詳しく添削して解説することにより，心理学の具体的な方法論を理解，修得させた。さらに研究指導では，各学生が抱いている問題意識を具体的な研究のレベルに落とし，実証的に検証するための方法を考えさせ，同時に関連する先行研究の知見を批判的に再考させて，検証すべき問題をより具体的かつ客観的に捉える能力を養った。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成15年８月：『The relationship between theory of mind and episodic memory: Evidence for the development of autonoetic consciousness』（単著）Journal of Experimental Child Psychology，85，312-336.

**発】**①平成15年８月：日本発達心理学会国際ワークショップ出席，口頭発表『The development of false belief understanding in Japanese children』

**◎特色・強調点等**

論文では，心の理論（人の信念や知識の由来を理解する能力）とエピソード記憶との関連をみた。特に，心の理論のうち自己の信念の変化を理解する能力を測る特定の課題の得点のみが自分の過去経験を主観的に思い出す出典記憶の得点と相関し，さらにこの相関は４～５歳では現れず６歳になって初めて観察されることを示した。本研究は，ある特定の年齢になって初めて心の理論の一部の側面のみが主観的な記憶の意識と統合されることを示した点で先進的であるといえる。国際ワークショップでの口頭発表は，誤信念の理解が日本の子どもでは欧米の報告に比べ著しい遅れを示すことを報告した。

**中　山　勘次郎**（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

大学院「学習心理学特論」では，最新の研究成果をとり入れながら，学校教育への適用を意識して講義し

た。また，過去のレポートへのコメントをＷｅｂ上に掲載し，発展学習やレポート作成の参考にできるよう配慮した。

学部「学習心理学」では，学習領域に限らず教育心理学全般にわたる心理学の基礎概念について講義を行い，さらに，最新の研究を実際の授業へと結びつけるため「授業の心理学」を開講し，体系的な学習を支援している。

**研究指導**

学校現場の実践的な問題意識や発想をできるだけ活かしながら，それを心理学の視点から理論的に裏づけ，実際の学習指導や生徒指導に適用していく，という方針で指導にあたっており，本年度は「教員のストレスを緩和する要因」と「子どもの自律を促す親の態度」に関する修士論文が生み出された。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

・平成15年度新潟県看護職員臨地実習指導者養成講習会講師（教育心理）

**◎特色ある点等**

学校での実践という視点を常に意識しながら，内容を構成している。また，受講生の質問を積極的に汲み上げ，フォローしたり授業改善に役立てるよう努力している。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**著】**①平成16年１月：『たのしく学べる最新教育心理学』（共著）図書文化

**論】**①平成15年９月：『児童の「調べ学習」における情報資源の分類』（単著）上越教育大学研究紀要，23(1)，77-90.

**他】**①平成16年１月：『結果ばかり気にする子』（単著）児童心理，58(1) 60-64.

**学会活動への参加状況**

①日本教育心理学会理事，②日本教育心理学会『教育心理学研究』常任編集委員，③日本教育心理学会学校心理学実行委員会委員，④日本学校心理士会新潟支部副会長

**◎特色・強調点等**

児童生徒の自律的達成行動の一種としての「質問行動」と，彼らの達成関連動機づけとの関係を究明する研究に関して，第１回目の調査研究のデータの分析を進め，成果の一部を本学研究紀要に発表した。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①公開講座「こころの不思議を探検しよう～高校生のための心理学入門」の企画運営および講師，②奈良県立教育研究所授業改善研修会講師，③カウンセラー学校派遣事業に基づく派遣カウンセラー（柏崎市立荒浜小学校・柏崎市立松浜中学校），④附属中学校教育相談体制に基づく相談員

**◎社会への寄与等**

・前年度に引き続き，心理学に関する高校生への教育活動を積極的に展開した。また本年度から，新たにカウンセラーとして臨床的な面でも地域への支援を行っている。

**藤　生　英　行**（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

「臨床心理学特論Ⅰ」では，不足しているカウンセリング手法の演習も含め，臨床心理学に関する事柄をわかりやすく説明した。体得しやすいように，適宜実践を取り入れて現職教員に理解しやすい形態に工夫し

た。「学校臨床心理学特論」においては，学校現場で出会う，不登校，行為障害などを取り上げ，その発症，最新の対応方法などをわかりやすく説明する工夫を行った。「臨床心理基礎実習１」は，藤生が中心となってカリキュラム整理をしカウンセリングの基礎となる，コミュニケーションスキルについて，ロールプレイを交えながら実施し，定着をはかった。また，全学選択必修授業「臨床心理援助法」のオーガナイズし，授業運営を担当し，実際に一コマ担当した。全学選択必修授業「学校心理解析法」の一コマを担当した。そのほか，共同担当授業も多く行った。シラバスへの授業内容の明記は，すべての担当授業科目において実践した。成績基準もシラバスに掲載した上，授業での説明を行い実施した。現職教員と学卒から大学院生が構成されているので，それぞれに有益であるよう，目的意識を持たせ指導を行った。

それぞれの，成績評価基準についてはシラバスに明確化し，それに基づいて評価した。

**研究指導**

平成15年度は４年生が２人おり，各卒論テーマに関わる専門文献の購読を行った。４年生に対しては，先行研究の確認，実際の調査のプランニング，結果をまとめなどを通して卒論指導を行った。臨床的な実践力を修得させるために，適宜学校教育相談事例などの検討もおこなった。

また，大学院においては修士１年４名，２年３名の研究指導を行った。それぞれの関心領域の文献購読などを行った。１年生は，多彩な関心があったがそれぞれについての，文献購読，予備調査などを指導した。２年生にはそれぞれの関心領域である先行研究の確認，実際の調査のプランニング，結果をまとめなどを指導した。また，大学院生については，相談室において受理した相談事例への実際の対応を通して，相談の進め方，見立て方，介入の仕方，症状への知識の獲得などを，サブゼミで行った。また，カリキュラム外で，サブゼミとして大学院生および学部生に対して「登校拒否への心理的介入方法」に関わる基礎文献の英文購読を行った。このほか，富山県からの現職派遣短期内地留学生２人に対して，論文指導を行った。内地留学生２名が，その成果の一部を心理相談室紀要に論文として投稿し掲載された。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

①筑波大学大塚地区心理・心身障害教育相談室非常勤相談員として，相談場面を通しての指導を行った。

②筑波大学大学院教育研究科カウンセリングコース非常勤講師として，「学校カウンセリング特論」を担当した。

③上越市立八千浦中学校において，ピアカウンセリング導入基礎として，１，２年生対象のカウンセリングスキル訓練の講義を大学院生とともに２回に分けて実施した。その際の一部は，上越タイムズに掲載された。

**◎特色ある点等**

授業，研究指導以外に，相談室事例を通した実際の介入方法などを中心に指導を行うことで，現場で役立つ知識・技能を獲得させることができたと考えられる。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**著】**①平成15年４月：『はじめて学ぶ人の臨床心理学』（共著）　中央法規

②平成16年３月：『こころへのアプローチ（改訂版）』（共著）　田研出版

**論】**①平成15年10月：『行為障害』　児童心理，55（平成15年11月増刊号）,pp.14-15.

②平成15年３月：『中学生の自己効力感 (self-efficacy) をもとにした学校適応状況の把握』（共著）上越教育大学心理教育相談研究，３，13-26.

③平成15年３月：『小学生児童における学校生活満足度の把握と児童のニーズにあった教師援助について』（共著）上越教育大学心理教育相談研究，3，27-40..

発】①平成14年９月:『マルチメディア・グループ・カウンセリングの研究－マルチメディア・カウンセリグによるグループ・カウンセリング，グループ・スーパービジョンの構成検討』（共著） 日本心理学会第67回大会発表

**共同研究の実施状況**

①行為障害傾向を持つ子どもへの介入プログラム開発のための基礎研究　代表者：藤生英行（上越教育大学助教授）科学研究費補助金，②危険行動の予防　代表者：勝野伸吾（兵庫教育大学教授）連合大学院研究プロジェクト

**国際研究プロジェクトへの参加状況**

①北京師範大学臨床心理教員との摂食障害の日中比較研究を実施中であり，平成16年度に北京で開催される国際心理学会において共同発表する運びとなっている。

**学会活動への参加状況**

①５月　日本学生相談学会出席，　②９月　日本教育心理学会出席，　③９月　日本心理学会出席，　④学会誌カウンセリング研究の編集

**◎特色・強調点等**

大学院生に強調しているように，心理学における臨床実践は，実践のみならず，研究・教育も必要であるという観点から，研究での成果もあげる必要がある。研究的観点から絶えずその実践が有益であるかどうかを客観的に評価するためである。そのような趣旨から，特に実践上役に立つことに焦点を当て，それについて研究を行った。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①４月から３月　リケン柏崎事業所健康保険組合循環器系疾患予防講座担当，　②４月から３月　新潟県学校派遣スクールカウンセラー（八千浦小，中），　③上越教育大学保健管理センター精神衛生カウンセラー（学生カウンセラー），　④上越教育大学心理教育相談室相談員として，地域の教育・心理相談，　⑤上越教育大学心理教育相談室運営委員会委員，　⑥上越教育大学心理教育相談室専門部会部会長，　⑦筑波大学心理・心身障害教育相談室非常勤相談員として，地域の教育・心理相談，　⑧非営利組織であるＮＰＯ国際カウンセリング研究所において「心理アセスメント」担当，　⑨２月　上越教育大学学生指導委員会講師「学生相談」，　⑩臨床心理士養成大学院連絡協議会への本学代表として参加，　⑪連合大学院ＣＯＥプロジェクト申請メンバー

**◎社会への寄与等**

・地域への知識普及の拠点として，上越教育大学があるとの観点から，業務上差し支えない範囲で知識普及に勢力を注いだ。また，現場のニーズとして，こころの問題についての知識や技能への要望が高い。しかしながら，今後このような多忙な状態が続くと，研究上差し支えると考えられ，今後は対応をへらさざるを得ない状況である。

・教育相談への要望も高く，そちらへの対応でも地域貢献ができたと考えられる。しかしながら，当相談室へ来談するケースの多くは，この地域での相談機関を転々としてくるものが多く，地域全体での臨床専門家の臨床技能や知識の向上が必要であると考えられる。このための，活動も今後大学として対応する必要があろう。

## 宮　下　敏　恵（助教授）

### 〈教育活動〉

#### 授　業

「教育実地研究Ⅴカウンセリング論」では，学校現場においておこりうる疾患の概説をはじめ，不登校，いじめなどの問題について，事例をあげて講義を行い，具体的理解をはかった。さらに，カウンセリングの基本的技法についての実習も行い，現場ですぐに対応できるように実習を行った。「臨床心理学特論Ⅱ」では，ユング心理学をベースにイメージや象徴について講義を行い，さらにコラージュ，風景構成法など臨床現場ですぐに役立つ方法についても実践的に行った。

授業内容については，シラバスに明記し，より実践的な教育相談，カウンセリングの知識を身につけるために，実習をおこなったり，最新の状況や具体的な事例を調べ，発表させるなど，教育現場で生かせるための体験的授業を行った。成績についても，シラバスに明記した通りに実施した。

#### 研究指導

平成15年度は学部３年生２人，４年生２人，大学院１年生１人，大学院２年生３人の計８人にゼミ指導を行った。学部３年生については，養育環境と幼児の発達の研究など，それぞれの関心領域の文献購読を行った。学部４年生については，小学校・中学校における居場所について，特性不安と欺瞞時のコミュニケーションについて文献購読を行った。大学院１年生については，教員の指導態度・行動を向上させるにはどのようにしたらよいか，自己研修方法を中心に文献購読，予備調査などを指導した。大学院２年生については，身体の動きと気分との関係について，また小学生に対して，不安を低減したり，身体の感覚に気づきを促し，感情の制御を行うためのプログラム開発についての文献購読，予備調査などを指導した。

学校現場における教育相談の実践力を習得させるために，学部生，院生ともにカウンセリング技術をはじめ，様々な臨床技法の実習を行った。大学院においては，上記の技法実習に加えて，心理教育相談室において受理した事例への関わりを通して，事例の見立て，面接の進め方，面接技術，介入方法，さまざまな病理や症状の知識について指導を行った。

#### その他の教育活動（学外を含む。）

①富山大学教育学部非常勤講師（「生徒指導論」を担当）

②新潟県立看護短期大学専攻科非常勤講師（「パーソナリティの諸問題」を担当）

③放送大学教養学部非常勤講師（「臨床心理学実習」を担当）

④新潟県立上越テクノスクール非常勤講師（「高齢者への心理的援助」を担当）

### ◎特色ある点等

おもに，教育相談を中心とした実践力を習得させるために，授業，研究指導等をおこなった。学校現場で直接役立つ技術の指導をおこない，実際に学校現場に出向いていき，学校との連携を図った。また児童，生徒への関わり方，児童，生徒が生きていく力をつけるための見方について指導をすすめた。

### 〈研究活動〉

#### 研究成果の発表状況

**著】**①平成16年２月：『感情・感覚・行動に及ぼす否定形暗示文の作用過程』（単著）　風間書房

**論】**①平成15年10月：怒り感情の表出制御と精神的健康及び対人不安との関係（共著）　上越教育大学研究紀要　第23巻第２号　pp.487-499

**発】**①平成15年９月19日～21日：『否定形暗示文の作用からみた感情の調整について－特性不安との関係から』（単）　日本催眠医学心理学会第49回大会研究発表

**学会活動への参加状況**

①９月19日～21日：日本催眠医学心理学会出席，②平成15年度日本催眠医学心理学会理事（学会誌の編集，研究担当）

**◎特色・強調点等**

研究としては，否定文「～ない」の作用を通して，感情，感覚，行動の制御方法についての基礎的知見を得た。特に感覚と感情の制御方法について研究を進めている。また教師のメンタルヘルスの研究も行っている。臨床実践としては，自己肯定感を高める方法について検討をすすめている。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①平成15年４月～平成16年３月　新潟県スクールカウンセラー活用事業によるスクールカウンセラー（上越市立城西中学校），②平成15年８月，11月　新潟県カウンセラー学校派遣事業による派遣カウンセラー（上越市立谷浜小学校），③平成15年８月，12月　新潟県カウンセラー学校派遣事業による派遣カウンセラー（上越市立小猿屋小学校），④平成15年８月　上越市立教育センター主催カウンセリング研修会講師「ことばにならないことばを聴くテクニック」，⑤平成15年８月　上越生徒指導研究会「今，改めて不登校問題を考える」研修会講師，⑥平成15年10月　上越市立城西中学校「生き方講演会」講師，⑦平成15年10月　上越市立城北中学校「職場体験」講師，⑦平成15年12月　津南町生徒指導研究会講師「不登校問題について」，⑧平成16年２月　上越市立大和小学校小学校６年生ＰＴＡ研修会講師「小学校から中学校への発達課題」，⑨平成16年３月　上越市立大町小学校区青少年健全育成協議会講師「中１ギャップについて」

**◎社会への寄与等**

・主として上越地域の学校にスクールカウンセラー，学校訪問カウンセラーとして直接訪問し，教職員の研修に関わった。不登校をはじめとする事例への対処方法，職員研修のありかた等についてコンサルテーションを行った。また上越地区を中心として，心理的悩みを抱えて心理教育相談室に来談する児童，生徒，成人に対して，心理療法を行い，地域のメンタルヘルスのために寄与した。また，総合学習における職場体験などを積極的に受け入れ，地域の教育活動に寄与した。

**井　沢　功一朗**（講　師）

**〈教育活動〉**

**授　業**

現在の受講生はノートを取るということをしない傾向があり，それを是正する必要がある。さらに，講義内容を一方的に受け取るだけではなく，それを材料にして学生が自分なりに独自の考えを展開するための働きかけも重要である。授業内で扱われた知識を正しく認識していることに加え，学生が自分なりの問題意識を持ち，独自の力で考えるという積極的姿勢も評価の対象となる。

**研究指導**

復職直後のために，学部生・大学院生に対する直接的な論文指導は担当しなかったが，他の研究室と連携して心理査定の所見及び論文作成のための個別相談や助言，臨床実習のための個別指導を行った。

**◎特色ある点等**

学部生対象授業では専門領域の基礎知識や現在入手できる客観的データ(白書統計など)を用いてリアルタイムの問題を積極的に取り上げ，学生自身の身に引き寄せて問題意識を持ってもらうように働きかけた。大学院授業では，臨床心理学領域における基礎知識とともに，海外の最先端の研究についてまとめ，国内で出版されている書籍や論文からは獲得できない情報の伝達を講義の柱とした。また，臨床実習においては，実際の事

例を提示し，アセスメント実習の材料とした。さらに，希望者には特別に時間を設け，個別指導も行った。

〈研究活動〉

共同研究の実施状況

①「第４次非行ピーク」以後の青少年の逸脱行動の背景要因に関する包括的研究　代表者：浅野千晶 ( 横浜少年鑑別所 )

②弁証法的行動療法の国内実践にかかわる精神保健制度諸問題の検討　代表者：大野裕 ( 慶應義塾大学保健管理センター )

国際研究プロジェクトへの参加状況

① TOSCA(Test of Self Conscious Affect) の国際活用に関する研究　代表者　Craig T. Nagoshi(Department of Psychology, Arizona State University)

◎特色・強調点等

2003年度は2004年度以降の本学内での臨床実習の教科書として使用するための著書である境界性パーソナリティ障害のための「弁証法的行動療法」(M.Linehan 著 ) および，「 自傷行為とつらい感情に悩む人のために」(L.Bell 著 ) の２冊 ( 原著で合計約1000頁 ) の翻訳，及び2004年度に出版される「新・心理学の基礎知識」の原稿作成，その他多数の共同研究プロジェクトのために自分の研究のためのほとんどの時間を費やした。今年度にはそれらが活字となり，学内指導や社会貢献の形で実現する。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①吉川町立吉川中学校開催「思春期教室」講師 (「思春期の心の問題」とのテーマで講演 )

② Emotion Anonymous( 感情に障害を持つ匿名者自助団体 ) オープン・ミーティングにおける講演およびシンポジウムにシンポジストとして出席 ( 於東京都新宿区，聖アルフォンソ教会 )

◎社会への寄与等

アルコール等の依存症，摂食障害，感情障害といった精神障害者の匿名自助団体についての誤解 ( 例えば，政治的・宗教的・営利的団体ではないのかとの誤解 ) を払拭するために，そこで行われている治療的アプローチ ( 定期的なミーティング ) の具体的な進め方などについての説明を専門家の立場から行った。

米　山　直　樹（講　師）

〈教育活動〉

授　業

授業参加者の意欲を引き出させるため，演習を多く導入したり，学校現場に即応した形で臨床心理に関する事例を用いて説明するなどの工夫を行った。また，授業中に講師の説明に集中させるため，毎回授業内容をまとめたレジュメを配布し，それに従って授業を進めた。成績評価も出席点とレポートにより行い，客観性を保つ形で行った。

研究指導

学部における研究指導については，教師として学校現場に入った時に，児童生徒の問題へ即応的に取り組める教育実践力を修得させるため，学級現場で問題となっている事象に関する教育研究に取り組ませた。特に学習意欲や抑うつに関する研究を中心に行った。大学院における研究指導では，現場で生じている様々な問題に対して具体的対応法を習得させるために，即効性の高い内容の臨床研究を進めさせた。特に臨床心理学という学問の特殊性から，単に机上の理論だけでなく，臨床実践を重視した。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

①富山大学教育学部非常勤講師（『障害児精神保健学・発達精神保健学』を講義），②新潟県立上越テクノスクール非常勤講師（『心理的援助方法』を講義：新潟県），③本学公開講座講師（『ストレスとつきあう』を講義：本学），④上越市立教育センターカウンセリング研修会講師（『カウンセリング面接の基本と演習』を講義：上越市），⑤上越市立教育センターカウンセリング冬季研修会講師（『カウンセリング面接の基本と演習』を講義：上越市）

**◎特色ある点等**

臨床心理学という観点から，学校現場で生じている様々な問題への対応法を学部，大学院，及び学校現場の教師に対し伝達した。特にその際，心理学に関する理論を伝えるだけでなく，実際の臨床事例に即応できる具体的かつ効果的な講義内容になるように留意した。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成16年３月：『自動車恐怖の女子児童に対する系統的脱感作の適用事例』（単著）上越教育大学心理教育相談研究　第３巻第１号　pp.41-52.

②平成16年３月：『中学校における非行問題を抱える生徒への教師による指導・援助体制に関する研究』（共著）上越教育大学心理教育相談研究　第３巻第１号　pp.95-105.

③平成16年３月：『中学校での学校教育相談に対する生徒の認識について』（共著）上越教育大学心理教育相談研究　第３巻第１号　pp.81-94.

④平成16年３月：『学校教育相談におけるスクールカウンセラーの位置付けと活用に関する臨床的研究』（共著）平成14年度・平成15年度上越教育大学研究プロジェクト報告書

**発】**①平成15年11月：『ＬＤを伴った不登校状態の児童生徒に対する応用行動分析的支援～教師への行動コンサルテーションにおける注意点～』　日本ＬＤ学会第12回大会自主シンポジウムシンポジスト

②平成16年３月：『スクールカウンセリングにおける行動コンサルテーション』　日本行動科学学会第20回ウインターカンファレンス話題提供

**共同研究（幼，小，中，高等学校及び特殊教育諸学校教員との共同研究を含む）の実施状況**

①学校教育相談におけるスクールカウンセラーの位置付けと活用に関する臨床的研究　代表者：米山直樹（上越教育大学講師）　上越教育大学研究プロジェクト，②公立中学校における軽度発達障害をもつ生徒への特別支援教育システムの開発　代表者：米山直樹（上越教育大学講師）　科学研究費補助金，③教育臨床における効果的なコンサルテーションのモデル構成と効果測定法の開発　上越教育大学学校教育総合研究センター研究プロジェクト，④行動障害傾向を持つ子どもへの学校をベースとした介入プログラムの開発　代表者：藤生英行（上越教育大学助教授）　科学研究費補助金

**学会活動への参加状況**

①５月23日～29日：Association for Behavior Analysis 学会出席，②９月12日～15日：日本心理臨床学会出席，③11月22日～23日：日本ＬＤ学会出席，④３月７日～９日：日本行動科学学会ウインターカンファレンス出席，⑤日本行動分析学会学会賞（実践賞）選考委員

**◎特色・強調点等**

スクールカウンセラーに関する研究を軸に，学校教育相談に関するシステム構築や，不登校に関する対応法，軽度発達障害に関する研究等を網羅する包括的な研究を行ったことは，従来の枠組みを脱却した非常に先進的な試みだと思われる。いずれの項目においてもその中心概念は「学校支援」であり，この観点から教育臨床活動を進めている点が特色といえる。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①スクールカウンセラー活用事業に基づくスクールカウンセラー（新井市立新井中学校：文部科学省及び新潟県１／２事業），②カウンセラー学校派遣事業に基づく派遣カウンセラー（新井市立新井南中学校・新井市立水原小学校・上越市立古城小学校：新潟県），③本学心理教育相談室相談員，④新井市１歳６ヶ月児健診心理相談員（新井市），⑤６月：本学公開講座講師（『ストレスとつきあう』を講演），⑥８月：新井市立新井中学校教職員研修会講師（『学校教育相談』を講演），⑦12月：新井市立矢代小学校子育て支援講演会講師（『幼児期・児童期における子育てのあり方』を講演），⑧２月：公孫会高田支部青年部講演会講師（『不登校の捉え方と接し方』を講演）

◎社会への寄与等

・新井市における福祉・教育活動（１歳６ヶ月健診，カウンセラー学校派遣事業に基づく派遣カウンセラー，スクールカウンセラー）に関わることで地域連携のモデル構築を推進した。
・スクールカウンセラー活動を通じて，学校現場が抱えている問題に積極的に関わった。
・本学心理教育相談室相談員として，上越近郊に在住する方達の精神衛生向上に寄与した。
・児童生徒の保護者に対し，子育て支援に関する講演会を開催し，上越地域の子育て支援向上に寄与した。

吉　田　真　弓（助　手）

〈教育活動〉

授　業

大学院授業「臨床心理基礎実習Ⅰ」の指導補助として，面接技法の習得のためのトレーニングに参与し，適宜指導を行った。「臨床心理基礎実習Ⅱ」の学外見学実習について実習先との調整を行った。学外見学実習に際しては，自発的な学習と理解のために「施設の機能と役割」，「対象者の特殊性」，「心理職の役割と業務」，「他機関，他職種との連携」，「理解と感想」の各項目に留意したレポートの作成を求め，指導を行い，また，実習先に報告を行った。

「臨床心理基礎実習Ⅰ，Ⅱ」「臨床心理実習Ⅰ，Ⅱ」の指導補助として，インテイク・カンファレンスおよびケース・カンファレンスに参与し，臨床実践にかかる助言と指導をおこなった。学外臨床実習については，学外実習先および大学内での実習指導を行った。学外臨床実習に際しては，「毎日の記録」，「実習項目ごとのレポート」，「受け持ちクライエントに関するレポート」，「まとめのレポート」などのレポートの作成を求め，適宜，理解の深度を把握の上，指導を行った。

研究指導

卒業論文，および修士論文の作成にかかわる発表・審査会において，助言と指導を行った。また，適宜，学生のニーズに応じた助言と指導を行った。

その他の教育活動

放送大学「臨床心理学実習」の非常勤講師として，臨床心理学の実践にかかる実習授業を行った。

◎特色ある点等

臨床心理学的なケース理解に重要なアセスメントの観点から，心理相談面接にあらわれる家族力動，防衛機制，精神病理の深さによる葛藤・衝動の内的処理の差異に留意し，また，そうした観点からのケース理解を援助することを目的とした臨床的助言と指導を行っている。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

論】①平成15年12月：『精神科看護者の患者とのかかわりに関する研究－精神科看護者の内省と属性との関連について－』（共著）　こころの健康　第18巻　pp.50－61.

②平成16年３月：『精神科入院治療において看護者役割を保つこと－投影同一化・逆転移の観点から－』（単著）　上越教育大学心理教育相談研究　第３巻第１号　pp.107－115.

学会活動への参加状況

①平成15年９月12～15日　日本心理臨床学会第22回大会出席　②平成15年10月10～12日　第49回日本精神分析学会出席

◎特色・強調点等

臨床心理士の育成においては，精神科での入院治療にあらわれる精神力動のあり方への理解は重要である。発表論文においては，精神科における入院治療においてもっとも患者と身近にかかわる看護者が体験しやすい患者とのかかわりの難しさと，それを治療に活用するために役立つ理論的理解を精神分析的観点から論じている。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①新潟県立高田高校　心理相談員（月２回，２時間），教師対象の心理相談研修会講師　②能生町健康福祉課　育児支援事業「３歳児健診」，「１.５歳児健診」，「乳児育児教室講師」　③医療法人社団うえくさ小児科　心理相談員（月３回，７時間）　④新潟県カウンセラー学校派遣事業　三和村立里公小学校（２回），三和村立里公中学校（２回）　⑤新潟県立高田北城高校　「こころの健康教育」講演　⑥新潟県臨床心理士会　平成15年度第３回定例研修会「臨床心理士による子育て支援」パネル・ディスカッション話題提供

◎社会への寄与等

・学内外での心理相談業務および，カウンセラー学校派遣事業，高田高校教師対象の心理相談研修での教員へのコンサルテーション，乳幼児を育てる養育者への教育・相談活動を通じて，地域の健康福祉の増進に寄与した。

【障害児教育講座】

我　妻　敏　博（教　授）

〈教育活動〉

授　業

講義では補足資料やビデオなどを頻繁に用いてわかりやすい授業を心がけた。臨床実習では学生に実際の障害児の指導に当たらせ，事前打ち合わせ，事後反省会，ケース会議等で実践的な指導力の育成に努めた。

学生に対する評価は出席の他に授業中の質疑応答や小テスト・期末テストなどで評価した。

研究指導

テーマの設定，実施，結果の分析，論文の執筆まで研究セミナーの時間以外にも個別に指導した。さらに，年間３回の合宿指導も行った。

その他の教育活動（学外を含む。）

愛媛大学非常勤講師（集中講義），富山大学非常勤講師（集中講義），独立行政法人国立特殊教育総合研究所非常勤講師，新潟県認定講習会講師，長野県認定講習会講師

◎特色ある点等

受講生が少ない授業が多いので，一般的な内容に加えて受講者の個別的なニーズに配慮した内容での授業を実施したり，個別的な質問や疑問に対応してきた。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

著】①平成15年７月：『聴覚障害児の言語指導～実践のための基礎知識～』（単著） 田研出版株式会社

論】①平成15年９月：『在米日本人障害児の教育の実情－保護者に対する調査－』（単著） 特殊教育学研究 第41巻 第３号 pp.335-343

②平成16年１月：『聾学校における手話の使用状況に関する研究(2)』（単著） ろう教育科学 第45巻 第４号 pp.53-65

学会活動への参加状況

①平成15年度日本国際聾教育学会編集委員長，②５月24日～25日：日本聴覚障害児教育実践学会出席，③９月18日～19日：北陸ろう教育研究会指導助言者，④９月20日～22日：日本特殊教育学会出席，⑤10月６日～８日：全日本ろう教育研究大会出席

在外研究の状況

①11月16日～11月24日：中国 中国黒竜江省における障害児教育の現状調査

◎特色ある点等

在米日本人障害児の実情に関する研究は我が国でも例のない調査であり意義深いものであった。研究活動の中で本学の協定校である中国・哈爾濱師範大学との交流ができたことは今後の連携にとって有意義であった。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①上越市障害者福祉推進連携協議会会長，②上越市障害者福祉推進連携協議会障害児部会長，③新潟県教育委員会「障害のある子どものための教育相談体系化推進事業運営会」委員長，④上越障害児教育研究会顧問，⑤新潟聾学校運営評議会委員，⑥松本聾学校校内研修会講師，⑦宇奈月地区教育相談講師，⑧長野聾学校校内研修会講師

大 庭 重 治（教 授）

〈教育活動〉

授 業

大学院修士課程の授業では，障害児心理学論，視覚障害児心理学論，障害児研究法演習，障害児心理・生理検査法，障害児教育臨床実習などを担当し，障害児の心理学及び指導法に関する内容を扱った。演習では他の教官と連携して院生の指導にあたり，実習では障害児教育実践センター等において臨床研究の場を提供した。また，教育研究入門セミナーを担当した。大学院博士課程の授業では，障害児発達支援心理学特別研究を担当した。

研究指導

研究室に所属する大学院生８名の指導を継続的に行い，４名については修士論文作成の指導も行った。特に，他の研究領域の教官と連携することにより，院生による研究の質的向上を図った。

その他の教育活動

新潟県立新潟盲学校における教育実習の指導を行った。

◎特色ある点等

院生の研究テーマに即して継続的かつ総合的な研究支援を行った。その成果は修士論文に反映されており，学会においても発表されている。また，それら院生の研究成果をホームページにおいて公開することに努めた。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

論】①平成16年３月：『知的障害児・者を対象とした余暇活動支援事業の実施に伴う検討課題』（共著）上越教育大学障害児教育実践センター紀要　第10巻　pp.1-6

②平成16年３月：『高等教育における障害学生支援：アメリカの支援システムに学ぶ』（単著）上越教育大学障害児教育実践センター紀要　第10巻　pp.41-49

発】①平成15年９月：『点字使用者における画面音声化ソフトによる同音異義語の漢字変換に関する研究』（共）第41回日本特殊教育学会発表

②平成15年９月：『肢体不自由養護学校における居住地校交流の実施方法に関する研究』（共）第41回日本特殊教育学会発表

③平成15年９月：『書字学習困難児における漢字の指導方法に関する検討：原型保存型の誤りが顕著な事例を対象として』（共）第41回日本特殊教育学会発表

他】①平成16年３月：『障害学生の学習・研究を支援する：支援システムの構築に向けて』（単著）平成14-15年度上越教育大学研究プロジェクト報告書（研究代表者　大庭重治）

②平成16年３月：『触図における３次元空間表現の利用可能性に関する実験的研究』（共著）平成13-15年度科学研究費補助金研究成果報告書（研究代表者　藤井聰尚）

共同研究の実施状況

①障害児における書字指導プログラムの作成に関する基礎的研究　代表者：大庭重治　科学研究費補助金，②発達障害児における聴覚的ならびに音韻的短期記憶の評価に関する基礎的研究　代表者：惠羅修吉（本学助教授）科学研究費補助金，③大学入試センター試験の視覚障害受験生に対する特別措置と問題作成の改善に関する研究　代表者：藤井聰尚（岡山大学教授）科学研究費補助金，④大学における障害学生の受け入れシステムの構築に関する研究　代表者：大庭重治　上越教育大学研究プロジェクト，他

学会活動への参加状況

①９月20日～22日：日本特殊教育学会第41回大会出席

在外研究の状況

①10月19日～11月１日：オレゴン大学，ワシントン大学，レイン・コミュニティーカレッジにおいて調査

◎特色ある点等

地方国立大学における障害学生の受け入れシステムの構築に関する研究を進めた。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①新潟県，長野県，富山県，福井県免許法認定講習講師，②新潟県教育研究集会共同研究者，他

◎社会への寄与等

障害児教育実践センター，小学校，盲学校における発達支援活動に努めた。また，研究室のホームページを通して，研究成果を社会に対して広く公開した。

## 土　谷　良　巳（教　授）　※附属障害児教育実践センター

### 〈教育活動〉

#### 授　業

授業設計に当たり，講義に関しては課題図書・資料として数点の文献を指定し，講義の進展と関連させて，シラバスにそれらの文献を読むべき時期を示した。受講者全員が効率よくそれらの文献を読むことができるように，それぞれの資料を数部ずつコピーしてファイル化し，置き場所と貸し出しのルール（ワンデイ／オーバーナイト等）を定めて，受講者の自主的管理が可能なようにした（本来は附属図書館の業務と考える。）臨床に関する科目では，障害のある子どもに対する教育臨床の場面を見学させると共に，交代でビデオ撮影を担当させ，臨床後に受講者全員でビデオ記録を視聴しながら徹底したカンファレンスを実施した。そのなかで臨床の解説を受けるだけではなく，ビデオ記録の撮り方を通じて，観察の視点，臨床のポイントを体験的に学ぶ機会を設けた。また後日その記録を提出させることで，指導の定着を図った。

#### 研究指導

教育臨床活動に関する研究指導では，受講者5名それぞれに臨床活動の対象として事例を担当させた。いくつかの事例に関しては障害児教育実践センターをフィールドとし，またいくつかの事例は上越市内と長野市内の盲学校，養護学校，保育園に協力を依頼した。それぞれの対象事例に関する臨床は週に1，2回程度実施されたが，障害児教育実践センターにおいては毎回の臨床に立ち会い，臨床の場やカンファレンスを通じて実践的な指導を行った。また他機関をフィールドとする場合は，２週間あるいは月に一回程度訪問して臨床の場での実践的な指導を行い，またビデオ記録を視聴しながらのカンファレンスを大学において個別に毎週行い，受講者の臨床実践が単なる体験として流れてしまうことのないように配慮した。

#### その他の教育活動（学外を含む。）

①横浜国立大学教育人間科学部臨時教員養成課程及び専攻科において「重度知的障害児の心理」を担当した（集中講義）

②群馬大学教育学部において「重複障害児の心理」を担当した（集中講義）

③福井大学教育地域科学部において「盲ろう児の教育」を担当した（集中講義）

④新潟県教育職員免許法認定講習において「心身に障害のある幼児，児童又は生徒の教育課程及び指導法に関する科目」を担当した（平成15年８月19日）

⑤独立行政法人国立特殊教育総合研究所平成15年度短期研修重度・重複障害教育コースで「重度・重複障害児と探索活動」を担当した（平成15年９月19日）

#### ◎特色ある点等

講義・演習等にあたっては筆者自身の教育臨床・実践を見学させる，あるいはビデオ記録を視聴させることで，具体的・実際的な資料を提供し，受講者の教育実践力の向上を図っている。

### 〈研究活動〉

#### 研究成果の発表状況

**論】**①平成16年３月：視覚聴覚二重障害教育の現状と担当教師の専門性の課題（共著）国立特殊教育総合研究所重複障害教育研究部一般研究報告書 pp. 5 - 6　国立特殊教育総合研究所

②平成16年３月：栃木県立盲学校における学校コンサルテーションの取り組み（共著）国立特殊教育総合研究所重複障害教育研究部一般研究報告書 pp.12-15

③平成16年３月：東京都立葛飾盲学校における学校コンサルテーションの取り組み（共著）平成15～16年度科学研究費補助金基盤研究（C）⑵「学校コンサルテーションによる重複障害教育担当教員の専門性支援に関する研究」報告書 pp.25-27　国立特殊教育総合研究所

④平成16年３月：川崎市立小学校たんぽぽ学級における学校コンサルテーションの取り組み（共著）平成15～16年度科学研究費補助金基盤研究（C）(2)「学校コンサルテーションによる重複障害教育担当教員の専門性支援に関する研究」報告書 pp.28-30　国立特殊教育総合研究所

**発】**①平成15年９月：日本特殊教育学会大41回大会自主シンポジウム「重複障害教育の動向と今後の課題」話題提供

②平成16年３月：「ネゴシエーションと意味の共有に関する研究」（共）日本発達心理学会第15回大会ポスター発表

**他】**①平成16年３月：カレンダーボックス（単著）上越教育大学障害児教育実践センター紀要第10巻 pp.63-66

**共同研究の実施状況**

①独立行政法人国立特殊教育総合研究所重複障害教育研究部重複障害教育第一研究室一般研究「視覚聴覚二重障害教育の現状と担当教師の専門性の課題」研究代表者：菅井裕行（国立特殊教育総合研究所重複障害教育研究部重複障害教育第一研究室主任研究官）研究協力者

②平成15～16年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)「学校コンサルテーションによる重複障害教育担当教員の専門性支援に関する研究」 研究代表者：菅井裕行（国立特殊教育総合研究所重複障害教育研究部重複障害教育第一研究室主任研究官）分担者

**学会活動への参加状況**

①平成15年９月20日～22日：日本特殊教育学会第41回大会出席　②平成16年３月20日～22日：日本発達心理学会第15回大会出席

**◎特色・強調点等**

視覚聴覚二重障害の子どもは，その教育研究に実践的に取り組む研究者は極めて限られている。また個々の教育実践が蓄積され相互に活用されることも稀で，教育実践現場においてはリソースとなる指導内容・方法の知見や教材・教具も乏しく，相互に連携しあうことも困難で，孤立無縁ともいえる状況が生じている。先天性の視覚聴覚二重障害の子どもはその数が少ないだけに，その教育は特異な研究分野あるいは実践領域のように受け取られるむきがある。だがその研究は，障害のある子どもを理解しその教育を開発することに普遍する，あるいは通底すると考えている。このような状況を踏まえ，先天性視覚聴覚二重障害児の教育実践現場を支援する学校コンサルテーション活動とその障害の本質的な困難となるコミュニケーション開発に関して，教育臨床的・実践的研究に取り組んでいる。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①川崎市教育委員会専門員（障害児学級担当）として，川崎市立東桜本小学校，川崎市立大戸小学校，川崎市立稲田小学校，川崎市立麻生小学校のたんぽぽ学級（重複障害児を受け入れている特殊学級）における授業研究の指導・助言を行った。実施日：川崎市立東桜本小学校（平成15年９月29日，平成16年１月26日），川崎市立大戸小学校（平成15年10月30日，平成16年２月13日），川崎市立稲田小学校（平成15年５月23日，７月11日，８月25日，９月18日，10月27日，11月10日，11月14日，12月５日，平成16年２月12日），川崎市立麻生小学校（平成15年６月20日，10月17日，11月７日，平成16年１月16日，２月20日），合同研修会指導・助言（平成15年８月26日）　②国立特殊教育総合研究所重複障害教育研究部重複障害教育第一研究室「視覚聴覚二重障害教育における教師の専門性に関する研究」研究協力機関である東京都立葛飾盲学校の視覚聴覚二重障害児が在籍している学級を対象に，学校コンサルテーションによる指導・助言を行った。実施日は平成15年４月25日，５月９日，６月12日，７月４日，７月28日～29日，９月５日，10月10日，11月

17日，12月26日，平成16年１月30日，３月26日～27日である。　③国立特殊教育総合研究所重複障害教育研究部重複障害教育第一研究室「視覚聴覚二重障害教育における教師の専門性に関する研究」研究協力機関である栃木県立盲学校の視覚聴覚二重障害児が在籍している学級を対象に，学校コンサルテーションによる指導・助言を行った。実施日は平成15年５月16日，６月13日，６月27日，10月３日，12月19日，平成16年１月９日，２月２日，３月８日である。　④国立特殊教育総合研究所重複障害教育研究部重複障害教育第一研究室「視覚聴覚二重障害教育における教師の専門性に関する研究」研究協力者として東京都立久我山盲学校の視覚聴覚二重障害児が在籍している学級を対象に，学校コンサルテーションによる指導・助言を行った。実施日は平成15年６月６日，９月30日，12月15日，平成16年１月16日，２月20日である。　⑤国立特殊教育総合研究所重複障害教育研究部重複障害教育第一研究室「視覚聴覚二重障害教育における教師の専門性に関する研究」研究協力者として東京都立八王子盲学校の視覚聴覚二重障害児が在籍している学級を対象に，学校コンサルテーションによる指導・助言を行った。実施日は平成15年５月15日である。　⑥国立特殊教育総合研究所重複障害教育研究部重複障害教育第一研究室「視覚聴覚二重障害教育における教師の専門性に関する研究」と関連させて新潟県立新潟盲学校の視覚聴覚二重障害児が在籍している学級を対象に，学校コンサルテーションによる指導・助言を行った。実施日は平成15年５月22日，７月14日，９月４日，10月16日，12月8日，平成16年２月６日である。　⑦地域の盲，ろう，養護学校等との連携の一貫として，新潟県立上越養護学校の重複障害児の在籍している学級を対象に，学校コンサルテーションによる指導・助言を行った。実施日は平成15年６月10日，７月３日，９月10日，10月30日，11月６日，11月13日，11月20日，12月４日，12月18日，平成16年１月６日，１月29日，２月５日である。　⑧地域の盲，ろう，養護学校等との連携の一貫として，長野県長野盲学校の重複障害児の在籍している学級を対象に，学校コンサルテーションによる指導・助言を行った。実施日は平成15年10月23日，11月27日，12月11日，平成16年２月９日である。　⑨地域の盲，ろう，養護学校等との連携の一貫として，長野県長野養護学校の重複障害児の在籍している学級を対象に，学校コンサルテーションによる指導・助言を行った。実施日は平成15年７月24日，11月10日，平成16年２月６日である。　⑩新潟県立新潟盲学校の学校評議員を務めた。　⑪福島県立養護教育センター「盲，聾，養護学校経験者研修」:「『教育的かかわり合いから子どもを理解する』ということ」（平成15年５月29日）　⑫千葉県立君津養護学校校内研究会：「障害の重い子どもとのコミュニケーション」（平成15年７月28日）　⑬千葉県立袖ヶ浦養護学校校内研修会：「障害の重い子のコミュニケーション」（平成15年８月１日）　⑭東京都立盲学校長会平成15年度視覚障害教育専門研修講座：「視覚障害児教育の指導の実際」（平成15年８月７日）　⑮福井県立福井東養護学校重度・重複障害部教員研修：「事例研究に関する指導」（平成15年８月21日）　⑯川崎市教育委員会たんぽぽ学級設置4校夏季合同研修会：「状況の構造化と子どものイニシアチブーネゴシエーションの意味するもの－」（平成15年８月26日）　⑰東京都立久我山盲学校校内研究会：「盲ろう児のコミュニケーション」（平成15年９月30日，平成16年２月20日）　⑱神奈川県立座間養護学校研修会：「授業研究」（平成15年11月14日）　⑲長野県長野養護学校自立教育講演会：「その反応をコミュニケーションに」（平成16年２月16日）　⑳福島大学教育学部附属養護学校教育講演会：「児童生徒と本当に交渉しながらかかわっているのか」（平成16年２月24日）

**◎社会への寄与等**

・重度ないしは重複した障害ある子どもの授業研究の視点から，特殊教育諸学校，特殊学級を対象にして，指導・助言を行った。とくにいくつかの学校，学級では継続的に授業研究を実施することで，担当教員の教育実践力の向上と定着とに貢献するとともに，教育現場の課題を広く深く捉えることができ，今後の教育や研究の基礎資料を得ることができた。また教育センター等での講議を通じて，教育臨床・実践研究の知見を教育現場に還元しその資質の向上に貢献できた。さらに先天性視覚聴覚二重障害児の教育実践現場を支援する

学校コンサルテーション活動を継続的に実施することで，その教育に係わる教師の実践力及び専門性の向上に貢献できた。

**藤　原　義　博**（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

「情緒障害児指導法」の授業では，特に自閉症児・ADHD・学習障害児の行動問題に関する最近の研究成果を取り入れ，パワーポイントとそのコピー資料を事前配付し，また事例のビデオを活用することで授業内容の理解を深める工夫を行った。また，「障害児臨床実習Ⅰ・ⅡC」「障害児応用教育臨床実習Ⅰ・ⅡC」では，実際に障害児の臨床指導を実施するだけでなく，その過程で知的障害児のアセスメントとそれに基づいたプログラムの立案，実施，そしてビデオ分析による評価を繰り返すことで，プログラムの立案力・指導力の習得を高める工夫を行った。

**研究指導**

修士課程２年次生４名及び１年次生５名について，情緒障害及び知的障害児・者の保育所，特殊学級，家庭，施設における行動問題の改善や適応支援，健常児との交流支援，及び親や保育者への専門的支援方法に関する研究・指導を行った。また，兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科１年次生１名について，自閉性障害児のコミュニケーション支援方法に関する研究指導を行った。新潟県から派遣された内地留学生（現職）に対して，軽度重度の情緒障害や知的障害児に対する行動の見方考え方，支援方法について専門的な研修の実施と研究指導を行った。

**その他の教育活動**

立命館大学大学院応用人間科学研究科の「障害学研究Ｈ」の非常勤講師を担当し，主として知的障害児，情緒障害児の教育的支援方法について講義を行った。

**◎特色ある点等**

臨床実習を軸に観察・分析・立案・実施・評価の一連の作業を繰り返すことによって，高度な知識と洞察力・実践力がバランスよく獲得され，高い問題意識も培うことができたと考える。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**著】**①平成15年８月：『発達障害白書－2004年版－』（共著）日本文化科学社　Ⅵ．自閉性障害の教育（71-72頁）

**論】**①平成15年９月：『知的障害児における課題従事順序の選択が課題従事行動に及ぼす効果』（共著）　上越教育大学研究紀要　第23巻第１号　pp.115-127

②平成16年３月：『知的障害児に対する日常生活技能の指導における子どもと家族に即した指導プログラムに関する検討』（共著）　上越教育大学障害児教育実践センター紀要　第10巻　pp.13-24

③平成15年４月：『教育・福祉現場における積極的行動支援の確実な成果の実現に関する検討』（共著）行動分析学研究　第18巻２号

**業】**①平成15年９月：『特別支援教育の今後と自閉症への対応』（単著）　発達の遅れと教育　第553巻　pp.26-27

②平成16年１月：『情緒障害への支援』（単著）　発達の遅れと教育　第557巻　pp.30-31

③平成16年３月：『自閉症の指導－校内研修ポイントはここだ－』（単著）　学校運営研究　第43巻

**発】**①平成15年７月：『保育所における気になる・困っている行動を示す子どもの実態調査(1)－気になる・

困っている行動の生起状況について－』（共） 日本発達障害学会第38回大会（秋田）

②平成15年７月：『保育所における気になる・困っている行動を示す子どもの実態調査⑵－保育活動への参加と対応の困難性について－』日本発達障害第38回大会（秋田）

③平成15年７月：『保育所における気になる・困っている行動を示す子どもの実態調査⑶－最も気になる・困っている行動とその対応および支援体制について－』（共）日本発達障害第38回大会（秋田）

④平成15年８月：自主企画シンポジウム『科学的論理性と社会的妥当性の高い応用行動分析学の発展に向けて－教育・福祉現場との異文化交流の視点から－』（共）日本行動分析学会第21回大会（岡山）

⑤平成15年９月：『知的障害児者の家庭場面における自己決定・選択機会に関わる要因』（共） 日本特殊教育学会第41回大会発表

⑥平成15年９月：『発達障害児の家庭場面における日課活動の形成』（共） 日本特殊教育学会第41回大会発表

⑦平成15年９月：『一重度知的障害障害児の課題場面における要求選択行動の形成』（共） 日本特殊教育学会第41回大会発表

⑧平成15年９月：『小集団指導において視覚的手掛かりが課題遂行行動へ及ぼす効果』（共） 日本特殊教育学会第41回大会発表

⑨平成15年９月：『小集団指導における不適切行動の低減：課題参加時間の分布状況の観点から』（共） 日本特殊教育学会第41回大会発表

⑩平成15年９月：自主シンポジウム『行動問題のある発達障害児者のＱＯＬの向上を目指した積極的行動支援（４）－効果的なプランニングに向けたアセスメントと介入決定の方法－』日本特殊教育学会第41回大会（仙台）

**他】**①平成15年12月：『乳幼児期の高機能自閉症児の生活実態と支援体制に関する研究』（共著） 財団法人みずほ福祉助成財団平成14年度社会福祉助成研究成果報告書

**共同研究の実施状況**

①乳幼児期の高機能自閉症児の生活実態と支援体制に関する研究 （西南女学院大学との共同研究） 財団法人みずほ福祉助成財団，②行動問題のある自閉性障害・知的障害児者に対する機能的アセスメントに基づく支援方法の学校や福祉施設への効果的な導入に関する研究 （西南女学院大学との共同研究） 西南女学院大学保健福祉学研究所研究費

**学会活動への参加状況**

①７月5日～６日：第38回日本発達障害学会研究大会出席，②８月4日～５日：日本行動分析学会第21回年次大会出席，③９月20日～22日：日本特殊教育学会第41回大会開催（大会準備委員長・事務局長），④日本特殊教育学会編集委員，⑤日本発達障害学会評議員・編集委員，⑥日本行動分析学会常任理事

**◎特色・強調点等**

我が国において研究蓄積や対応方法の普及が遅れている発達障害児者が示す行動問題の改善と QOL の向上を目指した積極的行動支援方法について継続的な研究を行い，研究レベルの向上と共に教育・福祉現場への理解・啓発及び家庭支援において着実な成果を上げ，中心的な役割を果たしたと考える。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①４月～３月：柏崎市元気館こども課早期療育事業指導者，②４月～３月：新井市障害児通園事業派遣専門講師，③４月～３月：上越市早期療育事業指導講師，④４月～３月：柏崎市就学相談検討会指導講師，⑤新潟県教育委員会教科用図書選定審議会委員長，⑥見附市立養護学校平成14年度研究開発学校運営指導委員会

委員長，⑦加茂市公立保育園研修会講師，⑧新潟県中越地区障害児教育研究大会講師（『主体的で豊かな生活を育む特別支援教育』），⑨国立特殊教育総合研究所短期研修講師（『自閉症児の保護者との連携』），⑩札幌市教育センター研修講師（『通常学級において特別な支援を必要とする児童生徒の理解と対応』），⑪富山県立しらとり養護学校専門性向上推進モデル事業講師（『児童生徒がわかって動ける環境作り』），⑫鳥取県立米子養護学校校内全体研究会講師（『子どもが主体的に動ける授業づくり』），⑬新潟県教育職員免許法認定講習講師（『心身に障害のある幼児，児童又は生徒の心理，生理及び病理に関する科目』），⑭山梨県立甲府養護学校校内研修会講師（『肢体不自由養護学校における知的代替の考え方』），⑮富山大学教育学部付属養護学校授業実践講師，⑯京都府総合教育センター夏期研修講座講師（『自閉症児の教育的対応』），⑰広島県立広島北養護学校校内教職員研修会講師（『「個別の指導計画」とアセスメント』），⑱新潟県立月ヶ丘養護学校研修会講師（『自閉症の児童生徒への支援』），⑲上越障害児教育研究会講師（『通常学級において特別な支援を必要とする児童生徒の理解と対応』），⑳東京都立あきる野学園養護学校文部科学省研究開発に関わる研修会の講師（『児童生徒がわかって動ける環境作り－主体的な参加を促す環境的配慮－』），㉑新潟県立小出養護学校ふれあいの丘分校公開研修会講師（『自閉症とその教育について』），㉒東京都立南大沢学園養護学校校内研修会講師（『個別の指導計画に基づく自立活動の取り組み』），㉓石川県立七尾養護学校研究協議会講演会講師（『児童生徒がわかって動ける環境作り』），㉔NPO 法人えじそんくらぶ新潟「きらら」研修会（『軽度障害児の“困った”行動の理解と対応－どうしてそんなことをするの？どうしたらいいの？－』），㉕新潟県障害児教育研究会知的障害部講演会講師（『特別支援教育における自立活動－個別の指導計画の生かし方－』），㉖LD 指導者養成セミナー講師（『行動面の指導Ⅰ：基礎』），㉗青森県立第二養護学授業実践研究会講師，㉘新潟県歯科医師会障害者歯科研修セミナー講師（『発達障害－のある子どもの理解と適切なかかわり方』），㉙西南女学院大学公開講座講師（『家庭における気になる・困っている行動の理解と対応』），㉚冨山大学付属養護学校教育実践研究会講師（『子どもの生きる力を育む教育的支援の在り方－個別の教育支援計画における連携と移行を中心に－』），㉛福岡市発達教育センター研修講座講師（『障害児にある子どもへの教育相談の在り方と家族支援』），㉜第42回全日本特別支援教育研究連盟全国大会（岩手大会）分科会助言者（情緒障害への支援）

**◎社会への寄与等**

・新潟県教育委員会審議会の委員長として寄与した。

・近隣市町村の早期療育事業の指導・助言者として，その機構整備と質の向上に寄与した。各種の障害児教育に関わる研修会の講師として多数の後援，参加研修，実践指導を行い，知的障害及び情緒障害教育現場の質の向上及び教員の指導力の向上に寄与した。特に知的障害教育の質の向上と行動問題の理解・啓発に多大の貢献を行った。

## 星　名　信　昭（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

大学院（修士）：障害児教育のうち主として聴覚障害に関すて実験実習を含めて基礎的内容を講じ，聾学校教員免許（一種，二種及び専修免許状）取得の条件を習得させている。特に臨床的実践的な力の向上に努めている。日々の授業毎に評価を行い。トピックスごとにまとめとレポートを課し，指導内容の習熟度を判定する。

大学院（博士）障害児のきこえと発音に関する論文講読を中心に研究指導をおこなう。なお，受講院生と研究生のために特に補聴器とその適合に関する課題に焦点をあてた。

**研究指導**

基礎的研修を踏まえて修士論文作成のための指導をセミナー中心に行い，院生時代または終了後には研究の成果を関連学会で発表させるように指導している。研究のレベルを評価の基本にしている。なお，他に院生と研究プロジェクトを計画実施して研究の実地指導とその内容の充実につとめた。

**その他の教育活動**

・国立特殊教育総合研究所短期研修非常勤講師

・新潟県教育委員会教員免許認定講習会講師

・障害児教育観察・参加および障害児教育実習を教育現場と共同で指導

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**著】**①平成16年３月：特別支援教育と特殊学級の今とこれから（編著）深堀印刷

**論】**①平成15年５月：人工内耳手術前のきこえに対する聴覚障害児と保護者の評価（共著）日本聴覚障害教育実践学会　Vol，３，pp45－49

②平成16年３月：聴覚補助としての音響振動の効果　その２，（共著）上越教育大学研究紀要，第23巻，第２号，pp.501-510

**発】**①平成15年９月：「聴覚障害児のための音楽を考える⑶－音楽とパフォーマンス（身体表現）」第41回日本特殊教育学会，シンポジュームの指定討論者

②平成15年９月：「聴覚障害児の６音メロディ弁別における調性感について」（共）第41回　日本特殊教育学会

③平成15年９月：「人工内耳装用に関する自己評価の検討（その１）」（共）第41回　日本特殊教育学会

④平成15年９月：「ことばの教室における口唇・口蓋裂の子どもの最近の教育支援」（共）第41回　日本特殊教育学会

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①新潟県就学指導委員会の委員長として県内の就学指導体制および県立校への就学についての審議に加わった。　②文部科学省委嘱事業「特別支援教育推進モデル事業」に関する調査研究運営会議委員長として審議し，調査研究をまとめた。

**恵　羅　修　吉**（助教授）　※附属障害児教育実践センター

**〈教育活動〉**

**授　業**

全ての授業において，初回に授業の進め方と成績評価方法のガイダイスを実施した。「障害児生理心理学論」では最新の研究を随時授業内容に取り込み，その理解に必要な基礎的知識を提供した。受講者の自主的な学習活動を促すため，授業で提示した図表などが記載された引用文献一覧を電子メールにて受講生全員に配信するとともに，授業で取り上げなかった情報の追加提供を行った。

**研究指導**

大学院学生１名の研究指導を主に行うとともに，その他８名の指導を補助的に行った。このうち５名については修士論文作成にかかわる指導を行った。大学院院生の研究上の必要に応じて，情報機器の使用法や統計的検定の実施方法に関する指導場面を設定した。修士論文にかかわる指導以外に，教育現場で必要なアセスメントに関する実践的技能の習得と向上を目指した指導の機会を随時設定した。

**その他の教育活動**

新潟県立新潟盲学校における教育実習の研究授業を参観し，反省会などの場において事後指導を行った。

**◎特色ある点等**

昨年度に引き続き，受講者とのインタラクティブな関係をつくることに努力した。全受講者に対してインターネットを利用して資料提供をしたこと，質問をメールで受けつけたことにより，受講者との対話が増大した。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成15年９月：『語想起課題における急速な検索効率の低下と持続的注意』（単著） 上越教育大学研究紀要　第23巻第１号　pp.105-113.

②平成16年３月：『聴覚オドボール・パラダイムの受動条件における事象関連電位 P3の再現性：弁別課題実施前後における passive P3の比較』（単著） 上越教育大学研究紀要　第23巻第2号　pp.527-535.

**発】**①平成15年９月：『点字使用者における画面音声化ソフトによる同音異義語の漢字変換に関する研究』（共）日本特殊教育学会第41回大会発表

②平成15年９月：『書字学習困難児における漢字の指導方法に関する検討：原型保存型の誤りが顕著な事例を対象として』（共）日本特殊教育学会第41回大会発表

**共同研究の実施状況**

①発達障害児における聴覚的ならびに音韻的短期記憶の評価に関する研究　代表者：惠羅修吉（上越教育大学助教授） 科学研究費補助金，②障害児における書字指導プログラムの作成に関する基礎的研究　代表者：大庭重治（上越教育大学助教授） 科学研究費補助金

**学会活動への参加状況**

①９月20日～ 22日：日本特殊教育学会第41回大会出席，②学会誌「日本発達障害支援システム学研究」の編集委員

**◎特色・強調点等**

日本特殊教育学会において本学修了生の研究発表を行い，本学における研究成果を他の学会会員へ積極的にアピールすることができた。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①平成15年７月：本学地域連携事業 WISC-III 講習会講師，②平成15年８月：上越市就学指導委員会 WISC-III 知能検査講習会講師，③平成15年８月：新潟県における教育職員免許状認定講習講師（特殊教育に関する科目）

**◎社会への寄与等**

・障害が疑われる児童・生徒の知的機能の評価に関する依頼に対して積極的に応じた。

・地域の小・中学校ならびに養護学校からの教育相談に積極的に応じた。

**河　合　　康**（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

「障害児教育行政制度論」（大学院）の授業では、「特殊教育」から「特別支援教育」へと移行しつつある国内の動向を取り入れて、内容を再構成し、比較教育学的視点から、わが国の障害児教育の実態を捉えら

れる工夫を行った。「障害児教育課程論Ａ」では，前年度に新学習指導要領が完全実施されたことを踏まえて，盲・聾・養護学校の学校要覧や教育計画等の教育現場での情報を取り入れながら授業を行う工夫をした。

「幼児障害児教育原理」（学部）では、学校現場のビデオ視聴を取り入れ、学習への動機付けを高める工夫を行うと共に、第１年次で実施済みの介護等体験と関連を持たせながら授業を展開することにより、障害児教育に対する意識を喚起する工夫を行った。

**研究指導**

脳性マヒの障害学生が１名とインドネシアからの留学生が１名いたため，研究室全体でのゼミの他に，２名に対しては随時個別指導を行った。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

介護等体験全般にわたる企画・運営を担当した。

**◎特色ある点等**

わが国の障害児教育が，「特殊教育」から「特別支援教育」へと移行しつつある現状を踏まえて，文部科学省の協力者会議の報告内容を取り上げながら，今後の方向性を明示できるように配慮した。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**著】**①平成15年４月：『障害者の発達と教育・支援』（共著）山海堂

②平成15年６月：『理解と支援の障害児教育』（共著）コレール社

③平成15年６月：『最新教育基本用語』（共著）　小学館

**論】**①平成16年３月：『インドネシアにおける障害児教育の史的発達と現状』（共著）　上越教育大学研究紀要　第23巻　第２号　pp.511-526

②平成16年３月：『インドネシアにおける障害児教育と国際教育協力』（単著）上越教育大学障害児教育実践センター紀要第10巻

**発】**①平成15年９月：日本特殊教育学会第41回大会にて自主シンポジウム『障害児教育担当教員（現職教員）の研修の充実に向けて』の企画者及び話題提供者となった。

②平成15年９月：日本特殊教育学会第41回大会にてポスター発表『インドネシアにおける障害児教育の史的発達』を行った。

③平成15年10月：インドネシア教育大学でのインクルーシブ教育セミナーにおいてゲストスピーカーとして『日本における障害児教育の動向』について講演を行った。

**共同研究の実施状況**

①学部カリキュラムにおける障害児教育関連科目の設定のあり方に関する研究　代表者：河合　康（上越教育大学助教授）　上越教育大学研究プロジェクト

②大学における障害学生の受け入れシステムの構築に関する研究　代表者：大庭重治（上越教育大学教授）　上越教育大学研究プロジェクト

③教員養成系大学の学部カリキュラムにおける障害児教育専攻以外の学生に対する障害児教育関連科目の設定のあり方に関する研究　代表者：河合　康（上越教育大学・助教授）　平成14年度日本教育大学協会研究助成（研究期間　平成15年２月６日～平成16年３月31日）

④民主社会実現手段としてのインクルーシブ教育の社会的背景と理論的基盤に関する研究　代表者：中村満紀男（筑波大学教授）　平成14-17年度科学研究費補助金基盤研究（Ａ）(2)

⑤インドネシアにおける障害児教育開発の国際協力に関する研究　代表者：中田英雄（筑波大学教授）　平

成15-16年度科学研究費補助金基盤研究（Ｂ）(1)

**学会活動への参加状況**

①６月14日：中部教育学会出席，②７月20日～21日：日英教育学会出席，③９月20日～22日：日本特殊教育学会第40回大会出席，④日本特殊教育学会教育システム研究委員会（外国班）委員

**在外研究の状況**

①平成15年10月９日～17日：インドネシア　インドネシアにおける障害児教育開発の国際協力に関する研究

**◎特色・強調点等**

途上国の障害児教育に対する国際教育協力について重点を当てた研究活動を行った。これまでの日本における障害児教育分野での国際教育協力は必ずしも組織的・系統的に行われてきたとはいえない状況にあり，わが国の国際教育協力の方向性について検討を行った。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①新潟県教育職員免許法認定講習（盲学校教諭免許状）講師，②福井県教育職員免許法認定講習（盲学校教諭免許状）講師，③上越市障害者社会福祉推進連携協議会委員，④三和村障害者福祉計画策定委員会委員

**◎社会への寄与等**

・平成14年12月に障害者基本計画が示され，それに基づいて各地域で障害者に関わる新しい計画を策定しているが，その際のアドバイザーとして２市村において活動し，その際の助言・提言が計画の中に取り上げられた。

**齋　藤　一　雄**（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

【観点１】教育方法及び成績評価面での取り組み

○授業形態，学習（研究）指導法等の教育方法に関する取り組み状況

授業の中で，特に考えてほしいこと，情報交換をしたいことなどについて，ミニアンケートを実施し，その結果をもとに，個々に発表してもらったり，グループ討議を取り入れたりしている。

○成績評価法に関する取り組み状況

授業の出席はもちろん，ミニアンケートで理解の状況を把握しつつ，授業で取り組んだことからテーマを設定し，小論文や知的障害児に有効な自作教材・教具の作成を課題とすることによって，評価を行っている。小論文や自作教材・教具の評価の観点は，テーマに沿った内容となっているか，授業で得たことが論文に生かされているか，論文の構成や記述がしっかりしているかなどである。

【観点２】教育の達成状況

○進学や就職などの修了後の進路の状況から判断した取り組み状況

現職教員にとっては，自校の校内研究の主任や学校運営の中核的な存在として力が発揮できるように，いろいろな想定をした課題を与え，トレーニングしてきた。また，学卒の院生については，これから就職していくだろう学校現場の様々な状況をイメージできるように，ビデオやスライドなど，視聴覚に訴えた教材を用意した。そして，現職と学卒の院生相互の交流から学べるようにも働きかけた。

**研究指導**

【観点１】学部　　・担当しなかった。

【観点２】大学院

自分の研究の例を示したり，院生と一緒にＫＪ法に取り組んだり，実際に行った授業を素材にして，分析と解釈を深めた。また，日本特殊教育学会や諸研究会への参加を通して，特別支援教育の研究の状況とこれからの実践の方向性について，資料を収集することができた。さらに，日本進路指導学会ではシンポジュームを企画・運営し，修士論文の作成に役立てることができた。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

・新潟県より派遣の研究生の指導を１年間に渡り行った。

・盲・聾・養護学校での教育実習について，全般的なオリエンテーションその他を行った。

・新潟県立上越養護学校における大学院生の教育実習の指導にあたった。

**◎特色ある点等**

学校教育現場や行政職の経験をもとに，学校現場の問題点からの発想と材料を提供し，学生自身で考えたり，体験したりできるようにした。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成16年１月：「特別支援教育に向けた教員養成カリキュラムと教員の研修」（単著）『特別支援教育と特殊学級の今とこれから』 第15回聴音研シンポジュウム報告書 pp.60-65

②平成16年３月：「養護学校用音楽科教科書の教材による授業」（単著） 上越教育大学研究紀要 第23巻第２号 pp.537-547

**業】**①平成16年３月：『障害児教育における授業分析（15)』（編）上越教育大学障害児教育講座

**発】**①平成15年８月：ラウンドテーブルＶ『障害児教育において音楽の教科書を有効に活用するにはどうしたらよいか』 日本学校音楽教育実践学会 第８回全国大会の司会

②平成15年９月：自主シンポジウム『障害児のリズム活動を考えるー教育実践の現場からー』 日本特殊教育学会第41回研究大会の企画・司会・話題提供

③平成15年10月：『養護学校における新しい職域に向けた就労支援』日本進路指導学会 第25回研究大会会員企画シンポジウムの司会

**学会活動への参加状況**

①日本学校音楽教育実践学会第８回大会に参加し，ラウンドテーブルの司会を行った，②日本特殊教育学会第41回大会に参加し，自主シンポジウムの企画・司会・話題提供を行った，③日本進路指導学会第25回研究大会の会員企画シンポジウムで司会を行った。

**◎特色・強調点等**

養護学校用音楽科教科書がどのように使われているか調査したり，実際に教科書掲載曲を使用して特殊学級で授業を行ったりして，使い方や有効性を示した。特殊学級の担任・児童・保護者も授業に楽しく参加することができた。また，知的障害養護学校における「総合的な学習の時間」についての現状と課題を分析するために，全国の附属養護学校の中・高等部を対象に調査研究を行った。さらに，今後の特別支援教育を視野に入れながら，地域における養護学校のセンター的役割について，市の教育委員会指導主事を対象に調査を行った。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①上越市就学指導委員会委員，②７月：埼玉県立総合教育センター「平成15年度特殊学級新担当教員研修会」講師，③８月：埼玉県立総合教育センター「平成15年度特殊教育諸学校５年次教員研修会」講師，④８月：新潟県教育委員会の認定講習講師，⑤10月：福島県養護教育センター「平成15年度専門研修講座」講師，⑥２月：埼玉県寄居地区指導委員研修会講師

◎社会への寄与等

・上越市就学指導委員会委員として，これからの障害児の就学指導について，担当指導主事とともに積極的に取り組んだ。また，新潟県内の３校の小学校特殊学級において，音楽やリトミックの授業をさせていただき，児童の見方や指導法を示すことができるとともに，学級経営の諸問題についての相談にのることもできた。

**笠　原　芳　隆**（講　師）

〈教育活動〉

授　業

【観点１】 教育方法及び成績評価面での取組

①授業開始の際，資料を配布して授業の目的や内容等についてシラバスの内容をより詳しく学生に説明するようにした。臨床実習では２年生と１年生が必ずペアを組むようにし，指導技法等が学びやすい環境を設定した。

②講義形式の授業においては，配点を明確にして筆記試験を行った。

【観点２】 教育の達成状況

①臨床実習では，特殊教育の現場における自立活動の指導を想定し，動作法を参考に，個別の指導計画を作成してグループで実習を行った。併せてカンファレンスの持ち方や保護者との関わり方等についてもアドバイスした。

②病弱・虚弱児指導法や肢体不自由児指導法の講義では，それぞれの養護学校に在籍する児童生徒の指導の実例（自身の実践例）や学校現場で現在抱えている課題等を提示し，その対処法を考える機会を設けた。また，自立活動論では，個別の指導計画作成に必要な実態把握を実際にビデオを用いながら行って実践力を高める工夫をした。

研究指導

【観点２】 大学院

現職の学生については，教育現場での課題を重視し，また，学卒学生には実際に教育現場を訪れて特殊教育の基礎的事項について見聞するようにし，そこから現実的な課題意識を高めるよう配慮した。

◎特色ある点等

授業も研究指導も，臨床的実践力や特殊教育の場における諸課題を解決する力を身に付けられるよう工夫した。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

**著】**①平成15年４月：『障害者の発達と支援』（分担執筆）

**論】**①平成15年９月：『学校卒業後における障害のある青年の余暇支援の意義と課題－上越地域における大学の余暇支援の実践から－』（共著）上越教育大学研究紀要　第23巻　第１号　pp.91-103

**発】**①平成15年９月：『病弱養護学校の概念と対象児童（生徒）に関する問題点について』（指定討論）日本特殊教育学会自主シンポジウム

共同研究の実施状況

①特別な教育的ニーズのある子どものための個別の教育支援計画作成の実践研究　代表者：藤井和子，上越教育大学研究プロジェクト

②自立活動と個別の指導計画の作成・活用・評価，特別支援教育のあり方に関する研究　代表者：安藤隆男

（筑波大学），自立活動研究ネットワーク（地域の特殊教育に携わる教員との共同研究）

**学会活動への参加状況**

①平成15年９月20日～22日：日本特殊教育学会第41回大会自主シンポジウム参加（指定討論者）

**◎特色・強調点等**

地域での実践や現場の教師との共同研究等をベースに，地域や特殊教育諸学校での具体的な課題を取りあげた。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①平成15年４月－平成16年３月：新潟県立上越養護学校非常勤講師（『動作法を参考にした自立活動の指導』について助言），②平成15年４月－９月：上越保健医療福祉専門学校非常勤講師（『障害者福祉論』について講義），③平成15年５月－平成16年２月：上越養護学校評議員，④平成15年４月：新潟県立高田養護学校職員研修会講師（『自立活動を基盤に据えた学習活動の構成と展開の仕方』について講演），⑤平成15年７月：新潟県寄宿舎指導員資格認定講座講師（『障害者の自立と福祉』について講義），⑥平成15年８月：新潟県教育職員免許法認定講習講師（『教育の基礎理論』について講義），⑦平成15年８月：新潟県教職12年経験者研修講師（『個別の指導計画と評価』について講義），⑧平成15年８月：富山県教職11年次研修講師（『自立活動と個別の指導計画』について講義），⑨平成15年８月：富山県訪問教育担当者講習会講師（『訪問教育における個別の指導計画の作成と活用』について講義），⑩平成15年５月－６月：本学公開講座講師（『作成して学ぶ個別の指導計画』），⑪自立活動研究ネットワーク事務局（『第4回自立活動研究フォーラム』を実施），⑫上越青年の休日を楽しむ会事務局（重度知的障害者を対象に『料理教室』を実施）

**◎社会への寄与等**

・特殊教育に携わる教師に対しては，研究の成果に基づき，個別の指導計画作成やその評価の方法について具体的な提案をした。また，地域で実際に障害者の余暇支援を行うことで障害者の地域福祉における課題について本人や保護者と考究することができたと考えている。

**藤　井　和　子**（講　師）

**〈教育活動〉**

**授　業**

【観点１】　教育方法及び成績評価面での取り組み

障害児の実態を把握してもらうために，ビデオや録音テープを適宜用い，講義だけでは伝わりにくい部分を補った。また必要に応じて，ロールプレイを取り入れ，講義内容に対する動機付けを高めるように工夫を行った。

障害児の指導において必要な知識，技術等についてポイントを明確に示し，事後の復習やレポート作成が行いやすいようにした。

【観点２】　教育の達成状況

現職院生においては，初任者を育て，リーダー的な役割やメンターとしての役割を果たせるような意識を持たせること，学卒院生においては，周囲の情報を集約して問題解決的な思考が出来るようにすることを意識した。また，院生同士で協働研究を実施させることにより，協働に必要なコミュニケーションの在り方を考え経験してもらうように工夫した。

**研究指導**

教育現場における課題が研究のテーマとなるよう，問題意識の掘り下げを行った。修士論文を作成して

いく中で，教育現場で生じている課題に影響している要因や課題解決の方法等を意識させるようにした。特に，論文の教育的意義については，十分に検討してもらうように指導を行った。

**その他の教育活動**

①新潟県立上越養護学校非常勤講師

**◎特色ある点等**

自立活動に関する指導について教員に指導・助言を行った。個別的，具体的な対応を行うことにより，教育現場における児童生徒や教員の問題に直に触れることができ，教員と共同して課題解決していくことができた。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**著】**①『口腔の成育をはかる　1，2，3巻』（共著）医歯薬出版

②『指しゃぶり　基礎から指導の実際』（共著）わかば出版

**上越教育大学研究プロジェクトへの参加状況**

①特別な教育的ニーズのある子どものための個別の教育支援計画作成の実践研究　代表者：藤井和子

**学会活動への参加状況**

①８月９,10日：第４回自立活動研究フォーラムの企画・運営に携わった。

**◎特色・強調点等**

自立活動研究フォーラムは，全国各地から，約150名の教員の参加を得た。現在，話題となっている個別の指導計画作成とその活用に関して，参加した教員に対し情報交換の場を提供することができた。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①早期療育事業講師（上越市，柏崎市），②新潟県立上越養護学校非常勤講師

**◎社会への寄与等**

・早期療育担当者に対し，年間を通して継続的に指導を行うことで，指導力の向上に寄与することができたと考える。

**丸　山　昭　生**（講　師）　※附属障害児教育実践センター

**〈教育活動〉**

**授　業**

平成16年２月１日付けの赴任であり，授業は行わなかった。

**研究指導**

平成16年２月１日付けの赴任であり，該当する事項はない。

**〈研究活動〉**

研究成果の発表状況

**発】**①平成15年９月：『私の「社会啓発入門」～社会啓発事業の係の仕事を通して～』 部落解放第20回新潟県研究集会第1分科会「部落問題入門」で発表した。

②平成15年６月～11月：『人が人として尊重される社会を』 上越市の10小学校区（国府小，黒田小，直江津南小，北諏訪小，南本町小，上雲寺小，直江津小，高田西小，飯小，大和小）で，人権・同和教育の社会啓発事業として講演を行った。

③平成15年９月～平成16年１月：『人が人として尊重される社会を』 県立特殊教育諸学校の３校（長岡

聾，柏崎養護，小出養護）の校内同和教育研修会で，講師として派遣依頼を受け，障害児の差別事件・事象にも触れながら講演を行った。

**他】**①平成15年8月：第11回新潟県同和教育研究集会第５分科会「同和教育入門」の司会を担当した。

②平成15年10月：新潟県内被差別部落（下越地区）の視察を行った。

③平成15年11月：潮陵中学校の「総合的な学習」人権・同和問題を考えるグループへの指導・助言を行った。

④平成15年11月：第55回全国人権・同和教育研究大会第４分科会「人権確立をめざす地域の教育力」で司会を担当した。

⑤平成15年4月～9月：同和地区（被差別部落）の白山会館で行われた現地講師による現地学習会において，その学習会の企画・運営と，VTR による現地説明などを約20回担当した。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①新潟県立柏崎養護学校の学校評議員として，病弱養護学校の存在や教育内容の啓発等について助言した。結果，「学校だより」の地域配布や学校行事へ参加依頼が進み，地域への学校の認識が高まった。

②新潟県立柏崎養護学校創立50周年記念事業の副実行委員長として，その計画・立案に参加した。柏崎養護学校は，昭和46年，筋ジス児のための高等部を我が国で初めて設置するなど，伝統のある学校であるが，平成16年度に行われる創立50周年記念事業について，そのレールを引くことができた。

**村　中　智　彦**（助　手）　※附属障害児教育実践センター

**〈教育活動〉**

**授　業**

障害児教育観察・参加Ａ，障害児教育観察・参加Ｂ，障害児教育観察・参加Ｃの授業では，受講生の学校及び社会福祉施設等の見学及び実習の補助を行った。

障害児教育臨床実習ＩＣ，障害児教育臨床実習ⅡＣ，障害児応用教育臨床実習ＩＣ，障害児応用教育臨床実習ⅡＣの授業では，臨床実習の補助を行った。

**研究指導**

知的障害・情緒障害教育関係教員のゼミに参加し，修士論文研究の補助を行った。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成15年９月：『知的障害者における課題従事順序の選択が課題従事行動に及ぼす効果』（共著）上越教育大学研究紀要第23巻１号　pp.115-127

②平成15年９月：『学校卒業後における障害のある青年の余暇支援の意義と課題：上越地域における大学の余暇支援の実践から』（共著）　上越教育大学研究紀要第23巻１号　pp.91-103

**発】**①平成15年９月：『知的障害児者の家庭場面における自己決定・選択機会に関わる要因』（共）　日本特殊教育学会第41回大会発表

②平成15年９月：『発達障害児の家庭場面における日課活動の形成』（共）　日本特殊教育学会第41回大会発表

③平成15年９月：『一重度知的障害障害児の課題場面における要求選択行動の形成』（共）　日本特殊教育学会第41回大会発表

④平成15年９月：『小集団指導において視覚的手掛かりが課題遂行行動へ及ぼす効果』（共）　日本特殊

教育学会第41回大会発表

⑤平成15年９月：『小集団指導における不適切行動の低減：課題参加時間の分布状況の観点から』（共）日本特殊教育学会第41回大会発表

**学会活動への参加状況**

①５月23日～27日：行動分析学会（国際学会）出席

②９月20日～22日：日本特殊教育学会第41回大会出席，研究発表

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①４月～３月：新井市障害児通園事業ひばり園職員研修講師（障害園児の教育相談及び療育システムづくりへの参加・助言），②４月～３月：上越市障害児通園事業たんぽぽ園職員研修及び上越市入園連絡会講師（障害園児の教育相談及び療育システムづくりへの参加・助言），③４月～3月：糸魚川市乳幼児発達指導相談事業講師（障害乳幼児の教育相談及び療育システムづくりへの参加・助言），④大潟町第２保育所保育士研修講師（障害児保育の研修，６月，10月，11月），⑤長野県上小地区教育研究集会共同研究者（「知的障害児の指導」分科会での指導・助言，10月），⑥寄宿舎主任指導員資格認定講座講師（障害児教育の研修，７月），⑦NHK 厚生文化事業団第33回母と子の療育キャンプ講師（療育講師，７月），⑧上越市公開保育研修会講師（障害児保育の研修，11月），⑨上越青年の休日を楽しむ会：障害のある青年の本人講座の主催（１回／月）

**【言語系教育講座（国語）】**

**有　澤　俊太郎**（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

学部の授業では，話し合い活動や書く活動などを通して，ゆっくりと丁寧に教えるようにした。修士課程の授業では，具体的な実践場面を観察，想定しながら，理論的な内容や事項に触れるようにした。評価については，国語科評価の特性に鑑み，総合的な視点を失わないよう心がけている。

**研究指導**

学部，大学院修士課程で，卒業論文，修士論文を指導した。大学院の５論文は，いずれも提案授業，検証授業などの実践的な場面に即して，筆者（現職院生）自身の実践力を高める内容となるよう指導した。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

①平成15年７月：金沢大学文学部講師（集中講義），②平成14年８月：学校図書館司書教諭講習講師

**◎特色ある点等**

学部１年生の担任として「人間教育学セミナー」を担当した。高校生に近い学生から現職院生まで20年以上の年齢差があるが，誰を教えるにしても，可能な限り実践事象の観察をベースにしながら理論的な考察に入るようにしている。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成16年２月：「読書カリキュラムの創造と展開（Ⅱ）－展開期における校内研究授業の検討」(単著)『上越教育大学国語研究』第18号１～27頁

②平成16年３月：「国語科実践学の研究Ⅲ－説明文における具体と抽象の関係をとらえる段落指導』（編著）　全36頁　有澤研究室

業】①平成15年12月：「国語科学習指導論」『学校図書館司書教諭養成通論』（編著） 38 ～ 45頁

②平成16年２月：『文部科学省検定小学校国語科教科書』（共著）東京書籍

**学会活動への参加状況**

①５月24 ～ 25日（早稲田大学）：全国大学国語教育学会大会，②８月11日～ 12日（青山学院大）：日本国語教育学会大会，③７月26日（富山電気ビル）：同学会富山支部会，④９月21日（アトリウム長岡）：同学会新潟支部会，⑤８月10日（筑波大学学校教育部）：日本読書学会大会

いずれの学会でも，役員（副会長，支部長，常任理事，理事，学会誌編集委員）として学会運営にかかわった。

**◎特色・強調点等**

『国語科実践学の研究』の第３号を出した。これは「実践場面分析演習」の報告書で，実践的・臨床的性格を強く打ち出すよう心がけている。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①上越市立図書館協議会委員長（上越市），②「盲導犬ベルナ」読書感想文コンクール選考委員会委員長，③４月：石鎚みすゞの会で講話，④８月：上越国語教育連絡協議会研修会出席（於赤倉），⑤９月：日本教育大学協会国語科書道科北陸地区会出席（新潟大学），⑥11月：日本教育大学協会北陸地区研究会出席（富山大学）

**下　西　善三郎**（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

参加型の授業運営を心がけ，受講者には，その旨，講義・演習等の初回ガイダンスにおいて周知をはかった。とくに，人に聴かせてわかる話し方，発表態度等，プレゼンテーションの訓練として毎回の授業に臨むことを要求し，将来的な臨床場面へのたしかな対応力，基礎力を培う事をめざした。講義科目では，一つのテーマを通時的に眺めわたす工夫をし，最近の研究成果を盛り込んで内容構成を図った。講読・演習の科目では，各人に事前に発表の指針を与え，レジュメの作成の仕方，読んでおくべき文献等について指示し，個人の事前学習における効果や内容の理解を深める工夫を行った。成績評価については，授業出席，積極的な発言，取り組みの態度，試験・レポート等を総合的に判定して評価することを伝え，各回の授業への積極的参加を促した。

**研究指導**

学部学生および大学院学生自身の興味・関心に基づく分野から，問題・課題の発見と解決の方法を自主的・主体的に身につけさせることを心がけ，日本古典文学領域における，文献の探索，読解，課題解決の手続き，発表，等を通じて基礎力の涵養につとめ，臨床的応用場面への対応力を育成できるように基礎研究の指導をおこなった。学部学生と大学院学生の合同ゼミ（今年度古典文学ゼミは，１２名）を開き，発表の仕方，レジュメの作成の仕方を学部学生が学ぶ場とした。発表についての互いの意見交換があり，相互啓発の有効な場となった。大学院生が指導的立場に立つことになり，院生自身の研究への自覚をうながすこととなり，学部学生は，院生の発表を通じて，多くのものを学んだ。また，現職員生の活用という観点から模範授業を試みた。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

著】①平成14年４月：『日本説話小事典』（共著），大修館書店

論】①平成15年２月：「本歌取りのもととかさね」（単著），『上越教育大学国語研究』第17号。pp １～11。

②平成16年３月：「古典文学の摂取における漱石・龍之介の位置」（単著），『上越教育大学研究紀要』第２3巻第2号。p.p.843～856。

学会活動への参加状況

①５月：中世文学会（於聖徳大学）　②６月および２月：上越教育大学国語教育学会　③３月：北陸古典文学研究会（於金沢兼六荘）

◎特色・強調点等

夏目漱石，芥川龍之介における日本の古典受容の方法と意識を探った。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①４月：高田文化協会伊東汎賞選考委員会。　②５月：伊東汎賞選評を『文藝たかだ』に掲載。

野　村　眞木夫（教　授）

〈教育活動〉

授　業

学部では，受講者の内省による言語直観を資料として文法法則を理解する授業を行った。３年前から「質問書方式」を導入し，評価もこれによっている。他に，談話の録画資料をもちいて分析を行わせた。大学院では，テクスト言語学の観点から現代日本語をとりあげ，社会システム理論の観点を導入しながら，テクストにおける関係性の検討を行った。大学院の演習科目では，現職大学院生の参加を得た。小中学校の授業実践の録画資料をとりあげ，これを一定の方法論の適用によってどこまで理解することが可能かを検討，議論した。言語学の談話分析とエスノメソドロジー，授業分析などの相互に関与する領域として展開し，既存の理論の批判にまで言及することができた。

研究指導

学部学生は，話し手が認知する言語意識を研究対象とし，大学生のロールプレイによる会話とフォローアップインタビューを資料とした。卒業後は教職にある。大学院は現職教員（中学校）と学部新卒学生である。前者は，中学生の日常的な会話において，「共話」がどのように生じるかという問題から出発し，会話の参加者が相互に救いの手を差しのべながらそれぞれの立場を維持してゆく現象を分析した。さらにこれを国語科教育にいかに応用できるかの展望をしめした。後者は上田秋成の物語作品をとりあげ，その表現効果について，複数の着眼点から分析をすすめた。

◎特色ある点等

講義・演習の内容については，学習材開発と分析，プロトコル分析の基礎研究およびその方法論としての機能をはたすように方向付けている。専門領域は日本語学であるが，母語教育ならびに日本語教育の基盤としての位置づけを明らかにし，応用言語学である言語教育への展開を可能にする。受講生の言語直観と内省的な疑問そのものを学習材やデータとする方法により，参与の度合いを高めている。先に述べた「質問書方式」に対する学生からの評価は，メリットとして，疑問点を自分で整理でき，次回にこれが解決され理解できること，他の学生の疑問や意見が分かる，直接質問しにくいこともカードならば記入しやすい，講義をしっかり聴いていなければならない等であり，デメリットとして，回答・説明が翌週になるため記憶が薄れる，無理に質問す

るのでつまることがある，回答のために時間がとられ，進度に停滞が生じる，等であった。これを行った実感としても，口頭での質問となりにくい事項が詳細に記入されており，授業者が気のつきにくい点についての指摘があって，きわめて有効性のたかい方法だと認識している。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

論】①平成16年２月「談話分析から見た主語」『言語』第33巻２号 pp.34-40.

②平成16年２月「談話における話題の導入と形成の方法」『上越教育国語研究』第18号　pp. 1 -14.

学会活動への参加状況

①５月17日～ 18日：国語学会出席 , ②10月４日～５日：機能言語学会出席 , ③11月15日～ 16日：国語学会出席等

◎特色・強調点等

今年度の発表論文は，テクスト言語学あるいは談話論の領域における新たな方法論の提唱と問題提起をはたすものである。特に，①は，あらたな研究の観点として，方法論的な提案もふくむ。一部に解説的な記述を行っているが，広く研究者や中高の教員の眼に触れる媒体によるため，今後のオリエンテーションとなるものである。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①表現学会理事，②表現学会ウェブページ担当運営委員，③北海道大学国語国文学会評議員

◎社会への寄与等

・所属学会の公式ウェブページを作製し運営中。個人のウェブページでは研究領域の普及と研究情報の公開を継続中。

押　木　秀　樹（助教授）　※附属実技教育研究指導センター

〈教育活動〉

授　業

国語（書写を含む）等の授業では，視聴覚機器を用いた書写実技の提示方法に加え，児童・生徒中心の書写学習活動という視点により内容を構成し，実習効果を高める工夫を継続して行った。また書写書道 I-II の授業等においては，教科内容と教科教育との関連を強化するために，教育実習の際のビデオなどを元に，学習内容に関わる理論と授業方法との関連をはかるなどの工夫をおこなった。なお，授業後の復習をおこなうための施設設備の不備についての指摘があるものの，その点を改善することができなかった。

研究指導

最新の研究状況など国内外への書写教育系学会の動向・案内等を紹介，各学生の課題に対する指導を行うとともに，必要に応じて個別指導をおこなった。なお，実技指導については，サークル活動である書道部の場を活用するなどして，必要に応じて指導をおこなった。この点は，ある意味では実習のための施設設備の不足を補うものともいえる。

◎特色ある点等

学部の授業では，学生自身が小中学生段階において学習者の立場として感じてきたことから問題意識を喚起し，小中学校段階において十分な学習活動をおこなってきたかどうかを確認し，自己の課題の明確化を意識した授業展開とした。この点は効果があったことから，次年度以降も継続して工夫していきたい。

また，研究指導においては，伝統的な書写指導とその研究方法の問題点を明確にし，教育理論としての書写

指導特に内容論の確立に向けた指導をおこなっている。この点は，他の教員養成大学等に比しても，先んじている特色ある点として，外部からの評価を待つとともに，継続していきたい。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

論】①平成16年３月：『概形特徴を用いた書字能力の変化に関する分析的研究』（共著）　書写書道教育研究第18号　pp.41-50

作】①平成15年７月：『一身為軽舟』第42回書象展　朝日生命ギャラリー（新宿センタービル）
②平成15年8月：『夕陽明乱流』第19回読売書法展　東京都美術館

発】①平成15年11月：「概形特徴を用いた書字能力の変化に関する分析的研究」（共同研究）　書写書道教育学会福岡大会

共同研究の実施状況

①筆順評価機能を持つ漢字学習支援システムの開発（中部大学研究資金による）に協力

学会活動への参加状況

①11月21日：全国大学書写書道教育学会福岡大会　出席　②11月20日：全国大学書道学会福岡大会　出席　③11月19日　日本教育大学協会全国書道部門会福岡大会　出席　④11月22日：全国高等学校書道教育研究大会福岡大会　出席　⑤全国大学書写書道教育学会常任理事

◎特色ある点

本年度は，平成８年から約７年間継続しておこなってきた概形特徴を用いた書字能力と認識に関する研究のまとめとなる口頭発表をおこない，その成果を踏まえた論文をあらわすことができた。発達段階，特に中学校段階における問題点と，それを効果的に解決するための指導方法についての指針を示し得たと考える。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①第10回東京都盲ろう養護学校書作展講師として講評　②新潟県書写書道教育研究会副会長　③石川県書写書道教育連盟副会長として研究大会に出席

小　埜　裕　二（助教授）

〈教育活動〉

授　業

担当全授業において詳細なシラバスを作成し，ほぼシラバスどおりに授業を行った。成績評価については，事前に示した方法に基づき行った。教員養成を目的とする本学学生に，小・中・高等学校の国語を担当する上での十分な能力・技能を身につけさせるため，教科書教材等を素材にした読解訓練を行った。また，読書に対する興味・関心を抱き，学校現場で児童・生徒達に豊かな読書生活の習慣を授けることのできる力を身につけさせるよう努めた。なお本年度は学部生３名・大学院生５名が卒業・修了した。

研究指導

学部学生には小・中・高等学校における国語の実践的能力を修得させるため，文学作品の解釈を中心とした共同討議を課外活動として毎週行った。担当の学生がレジュメを作成し，それに基づき話す・聞くの活動を重視しつつ，討議を行った。大学院学生にはこの共同討議に参加してもらい，学部学生への指導を通じ，より高度な読みの実践力を身につけることを図るとともに，修士論文の研究テーマに即した個別指導を行った。また学部・大学院学生合同の国文学実地踏査研究を２月に行った。行き先は東京（上野・浅草・両国）。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

①平成15年９月：新潟大学非常勤講師として「近代文学講義Ⅱ」（集中講義）を担当。

②平成15年５月～３月：放送大学非常勤講師として「人間の探究」（卒論研究の指導）を担当。

**◎特色ある点等**

学部の授業では系統性に配慮したカリキュラムを組み，教員養成大学に相応しい文学テクストの基礎的な読解技能が段階を追ってマスターできるよう工夫した。大学院の授業ではテクスト読解のための専門的技能を身につけることが出来るよう様々なアプローチの方法を提示した。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成16年２月：「井上靖『欅の木』について」（単著）イミタチオ　第41号　pp. 4-13

**発】**①平成15年７月５日：「宮沢賢治「二十六夜」論」日本近代文学会新潟支部会口頭発表

②平成15年12月３日：☆「三島由紀夫『海と夕焼』について」招請講演会講演（韓国釜慶大学）

**学会活動への参加状況**

①平成15年５月24日～25日：日本近代文学会春季大会参加（東京），②平成15年10月25日～26日：日本近代文学会秋季大会参加（金沢）

**在外研究の状況**

①平成15年11月30日～12月６日：韓国東亜大学及び釜慶大学との研究交流（平成15年度学長裁量経費による海外との研究交流事業）

**◎特色・強調点等**

三島由紀夫および宮沢賢治に関する研究を中心に行った。従来，見落とされてきた観点を掘り下げる作業を通じ，それぞれの作家の文学世界に新しい光を当てることが出来た。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①平成14年11月26日：三条市成人大学講座講師（「昭和の文学（藤枝静男）」），②平成14年11月８日：内灘町文芸スクール講師（「井上靖『欅の木』」），③平成11年７月より日本近代文学に対する興味を広く一般に喚起するためインターネット上にホームページを開設し，小説のあらすじ及び鑑賞のポイントを掲載してきた。平成15年２月完結。1001の作品（四百字詰原稿用紙換算総数約１万枚）。

**髙　本　條　治**（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

学部・大学院の授業を通じて，日本語の構造と使用との相互関係に関する問題，日本語の発話解釈の可能性と優先度に関する問題，言葉が介在する相互誤解と相互不達（ディスコミュニケーション）に関する問題等を相互に関連づけながら問題にした。いずれの授業においてもコンピューターやインターネットを積極的に活用し，なるべく学生の意欲を引き出すべくきめ細かいサポートと評価に努めた。

**研究指導**

学部学生に対しては，言語学の基礎的知識と応用的思考の両面を重視し，教育現場での実践力養成を常に視野に入れつつ，各自の研究課題を十分に掘り下げられるように配慮した。大学院学生に対しては，語用論の最近の研究成果に基づきながら，今後の学校教育にぜひ必要だと考える「プラグマティックな寛容性」を

自らの思考と表現の中に体現していく力を重視した。インターネットを利用した指導も日常的に行った。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

教職講座において「国語」を担当するとともに，教員採用試験や教育実習に向けた情報提供等のサポートを研究室のインターネットサーバーを用いて行った。また，岡山市立津島小学校等と連携して作文力の養成と評価のための「LaLa」（読み書き活動と言語意識）プロジェクトを開始した。

**◎特色ある点等**

用途別に独自のインターネットサーバーを運用し，WWW によるオーサリング，メーリングリスト，コラボレーションシステムなどを目的に応じて活用した。そのことによって，授業時間にとらわれない情報交換と学生サポートを円滑に行うことができた。卒業後・修了後も同様のサポートを継続している。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成15年７月：「名前の読み方今昔物語－「名乗り」について」『しにか』 第14巻第7号

②平成15年11月：「〈悪意解釈〉と〈善意解釈〉」『判例地方自治』 第243号

**他】**①「Cohen's Kappa Calculator」「P-tree Translator」など，言語研究用分析プログラムの作成・配布

**共同研究（幼，小，中，高等学校及び特殊教育諸学校教員との共同研究を含む）の実施状況**

①岡山市立津島小学校，お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター，ジャストシステム公共システム部等と連携し，「読み書き活動と言語意識」の向上を図る「LaLa プロジェクト」を開始。

**学会活動への参加状況**

①10月18日～ 19日：第28回関西言語学会出席，②11月22日～ 23日：日本言語学会第127回大会出席

**◎特色・強調点等**

語用論（pragmatics）の立場から，日本語の運用（理解と表現）のあり方がどのように私たちの心の問題や社会の問題と結びついているのかという問題について，学校教育現場での応用を視野に入れつつ継続的に事例研究を行っている。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①筑波大学国語国文学会学外評議員，ジャストシステムデジタル文化研究所 ATOK 監修委員

**◎社会への寄与等**

・パソコンや携帯端末での日本語運用には欠かすことのできない仮名漢字変換システムについて，その機能や操作性の向上に尽力するとともに，日本語ソフトウェア，学校教育用ソフトウェアの監修・評価にあたった。

**中　里　理　子**（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

学部の講義科目では，日本語の基礎知識の習得と言葉の歴史への理解を目指して授業を組み立てた。適宜意見を聞き，小テストを実施して，学生自身が主体的に参加できるようにした。演習科目では，各学生が調査・分析・グループ発表し，班別討議により考察と理解が深まるような授業形式にした。大学院の講義科目では，統一テーマのもとに各学生が課題を選択して調査・発表し，クラス全体で考察を進め，講義で補う形を取った。学習成果をレポートにまとめてもらい，成績評価した。

**研究指導**

学部学生については，卒業論文のテーマに関する文献を集めて先行研究を把握し，目的に添った研究方法を選択した上で自分の論を構築し，それをわかりやすく整理して学術的論文にまとめられるよう指導した。

大学院学生については，基礎的な知識の確認から始めて専門的な知識の拡充を図り，そこから得られた知識を研究内容へ応用・発展させて学術的論文にまとめられるよう指導した。

**◎特色ある点等**

授業においても研究指導においても，学生の自主的な取り組みを重視し，課題を与えて各人にそれについて考えさせ，自分の言葉で表現できるような指導を心がけている。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成15年５月：『オノマトペの語義変化－明治期の「うっとり」「うっかり」を中心に－』（単著）文学・語学　第176号　pp.14-25

②平成16年３月：『オノマトペの意味縮小－「わくわく」を例に－』（単著）上越教育大学研究紀要第23巻第２号　pp. 一五－二七

**学会活動への参加状況**

①６月７日～８日：全国大学国語国文学会学会出席，②11月15日～16日：国語学会出席，③12月７日：お茶の水女子大学国文学会出席

**渡　部　洋一郎**（講　師）

**〈教育活動〉**

**授　業**

大学院修士課程の授業では，１年生対象の「国語科教育演習Ｃ」において，教師の即時的な意思決定を把握する方法としての「刺激回想法」に関する講義を行い，実際の刺激回想記録に基づきながら，授業実施過程における教師の意思決定分析を実施した。また，「国語科教育特論Ａ」では，大正時代における随意選題論争に関する資料をもとに，特に発想・着想過程に関わる作文指導法の検討を行った。１・２年生対象の「実践場面分析演習」では，主な量的・質的分析にかかわるこれまでの国語科教育の取り組みを概観した上で，修論作成に向けての実質的な分析法の策定を行った。

学部２年生対象の「中等国語科指導法（課程論）」では，特に，中学校・高等学校の授業指導に関わって，具体的な国語教材に基づき実際の授業展開を考えた。また，金沢大学大学院教育学研究科において，国語科教育の集中講義を行った。

**研究指導**

学部では，先行研究の調査の方法とその整理・検討の方法を習得させるとともに，卒業論文作成のために必要な資料の考察の仕方について実地に指導を行った。また，大学院では，修士論文の作成にあたり，説明的文章教材の特徴分析のための新たなマトリクスの開発と，討議過程を質的に測定する方法として分析項目開発の指導を行った。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**業】**①平成15年12月：「学習情報センターとしての学校図書館と教科指導の実際」『学校図書館司書教諭養成通論』（単著）三恵社　49-61.

学会活動への参加状況

①８月10日：日本読書学会第47回研究大会出席

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①８月：学校図書館司書教諭講習会講師，②10月：上越国語教育連絡協議会秋季大会授業者，同協議会講師，③11月：上越市学校教育研究会国語部会講師，④早稲田大学国語教育学会役員，⑤金沢大学教育学部非常勤講師

## 迎　　勝　彦（助　手）

〈教育活動〉

授　業

「国語科教育基礎研究セミナー」における指導補助を行った。

「国語科教育応用研究セミナー」における指導補助を行った。

「実践セミナーⅠ『国語』」「実践セミナーⅡ『国語』」における指導補助を行った。

研究指導

学部４年生対象の「国語科教育基礎セミナー」「国語科教育応用セミナー」において，卒業論文作成のための助言と指導補助を行った。指導においては，国語科教育に関わる臨床的な実践力を習得させるために，主として，１）作文学習に関する指導内容，２）説明文読解（論理的思考力育成を中軸とした学習）に関する指導内容を専門的に扱った。

その他の教育活動

「教員採用試験直前講座」における「国語科指導法」の講義を行った（平成15年６月27日）。国語科の指導内容を「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」に分けて説述するとともに，中学校，高等学校受験希望者に対する指導を行った。また，面接・小論文対策，模擬授業対策についても解説を加えるとともに，希望者に対して個別指導を適宜行った。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

**論】**①平成15年６月「過程を重視した漢字学習の保証」（単著）『実践国語研究別冊　漢字を大切にした国語学習』No.243　全国国語教育実践研究会

②平成15年９月「学習者研究における質的アプローチの可能性－話しことば教育論的視点から－」（単著）『上越教育大学研究紀要』第23巻第１号　上越教育大学　pp.129-141.

③平成16年２月『平成12～15年度文部科学省科学研究費補助金／課題番号12800005「小・中学校の教科書の読みやすさ・わかりやすさに関する調査研究」教科別最終報告書』（共著）　pp. 7 - 9 .,pp.17-59.

④平成16年３月「『話し合い』学習指導における教材研究」（単著）『上越教育大学研究紀要』第23巻第２号　上越教育大学　pp.549-562.

共同研究の実施状況

○「小・中学校の教科書の読みやすさ・わかりやすさに関する調査研究」（文部省科研研究課題番号12800005／研究代表者・（財）教科書研究センター研究部長 藤村和男）における研究協力

学会活動への参加状況

○平成15年５月24日：第104回全国大学国語教育学会東京大会出席

〈社会との連携〉

社会的活動状況

○平成16年２月28日：上越国語同好会平成15年度第５回例会講師（演題「『聞くこと』を大切にするために」）

【言語系教育講座（外国語）】

加　藤　雅　啓（教　授）

〈教育活動〉

授　業

学部：「コミュニケーション英語 AI」，及び「コミュニケーション英語 BII」では最近の研究成果を取り込み，英語の４技能のうちリスニングとスピーキング能力の育成を重点目標とし，英語によるスピーチと質疑応答，及びペアワークやグループワークを通して積極的にコミュニケーションを図る態度の養成に工夫を凝らした。また，英語によるコミュニケーションが得意でない学生に対しては，本人の能力と興味に応じた補助教材を準備することにより学習への動機を高めると同時に，基礎的な英語の知識の習得，及び理解力の向上に意を尽くした。「英語学概論」では英語学の全体像を概説した上で，談話文法理論，機能文法理論の観点から英語を理解するための基本的な知識の体系である英文法をとらえなおし，「覚える文法」から「考える文法」，「コミュニケーションに役立つ英文法」への橋渡しを行った。「英文法」の授業では英字新聞や洋画などの生きた英語教材を活用しながら「母語話者の言語直感に迫る文法」の構築を目指した。

大学院修士課程：「談話文法特論」の授業では，教育現場における英文法指導について，談話文法理論における最近の研究成果を織り込んで内容を構成した。従来の記憶中心の学校英文法を脱却し，生徒にとって身近な話題を英字新聞や WWW の中に求め，コミュニケーションを重視した実践的な英文法指導への取り組み方を工夫した。「英語学演習」の授業では，語用論，特に関連性理論における最新の言語理論を取り込み，認知とコミュニケーションの観点から発話の理解，とくに橋渡し指示に関する理解を高める工夫を行った。これらの知見を応用し，談話における指示詞に関する実践的な教材開発を行った。

大学院博士課程：「英語表現・構造特別研究」（岡山大学駐中講義）では，談話文法理論の講義，及び関連性理論の文献研究を行った。

学部生の成績評価については，積極的にコミュニケーションを図る態度という観点からスピーチ内容・プレゼンテーション，質疑応答，およびレポートを重点的に評価した。大学院生については，教室で実践できる内容を盛り込んでいるかという観点から期末レポートを評価した。

研究指導

学部では従来の記憶中心の英文法指導の不備を指摘しながら，「英語ではなぜ同じ意味内容を伝えるのに複数の言い方が存在するのか（第３文型と第４文型，能動文と受動文）」というような「生徒のなぜに答えることができるような英文法指導」を実践し，大量の生きた英文データを与えて臨床的実践力の養成を行った。

修士課程では，教育現場において最新の言語理論がどのように応用できるかという観点により，「関連性理論の枠組みによる実践的コミュニケーション能力の育成」，「認知言語学による未来表現の分析と応用」等のテーマで実践研究を指導し，中学校・高校の英語教育現場におけるより高度な臨床的実践力の養成を行った。

博士課程では，副指導教官として博士論文指導を行った。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

平成15年９月15日～ 23日：オーストラリアのアデレードにあるウェストミンスタースクールにおいて「海外教育（特別）研究」を実施し，そのための引率・指導を行った。

**◎特色ある点等**

英語によるスピーチ，ペアワークやグループワークを通して，積極的にコミュニケーションを図る態度の養成に工夫を凝らした。学生のスピーチ原稿すべてを CD-R に焼き，全員に配布することにより，学生へのフィードバックを図った。また，「覚える文法」から「考える文法」，「コミュニケーションに役立つ英文法」への橋渡しを行い，英字新聞や洋画などの生きた英語教材を活用しながら「母語話者の言語直感に迫る文法」の構築を目指した。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成15年10月：富樫雅彦・加藤雅啓「関連性理論の枠組みを用いた教材開発」*International Journal of Pragmatics*, vol. 13: 1-16. ( 日本プラグマティックス学会 )

②平成15年11月 .「談話における分裂文と疑似分裂文の総記的含意」『言語学からの眺望』 福岡言語学会編 , pp. 199-210.　九州大学出版会

③平成16年３月 “Exhaustiveness Implicature of It-clefts and WH-clefts in Discourse.” *Tsukuba English Studies*, vol. 22: 101-115.

④平成16年３月『談話における倒置構文に関する総合的研究 - 関連性理論，認知文法による考察』科学研究費補助金（基盤研究 (C)）（課題番号 14510509）研究成果報告書

**共同研究の実施状況**

①平成15年７月：『公立小学校への英語教育導入に伴う諸問題とその対策』代表者：斎藤九一　科学研究費補助金 ( 基盤研究 ( Ｂ )

**学会活動への参加状況**

①平成15年７月：上越英語教育学会の企画・運営（事務局長）②平成15年10月：日本プラグマティックス学会出席（理事，評議員，編集委員），③平成15年11月日本英語学会出席（評議員）④平成15年12月日本語用論学会出席，⑤学会誌 *International Journal of Pragmatics* の編集

**◎特色・強調点等**

最新の言語理論である関連性理論を取り上げ，この理論が学校教育における英語学習にどのような形で応用できるかという観点から中学校英語教諭と共同研究を行い，これまでに例を見ない中学校英語教材を開発した。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①日本英語検定協会面接委員

**齋　藤　九　一**（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

学部の異文化理解科目「コミュニケーション英語」では，時事的な内容のテキストを採用し，今日的話題の英文を読む訓練を行った。授業形態は，毎回ほぼ受講生全員を指名して英文の内容把握・設問回答の作業を行わせるものであった。発音や読解の間違いを直すのはもちろんだが，いわゆる頭ごなしに訂正するので

はなく，なぜそのような発想になったかを共に考え，学生の年齢に相応しい一般常識を踏まえながら，より正確な読みに至るように進めた。

また，学部の言語系英語コース専門科目では，『イギリス小説入門』（英文学概論）とR. M. バランタインの『コーラル・アイランド（珊瑚島)』（英文学演習）をテキストにして講義・演習を行った。「英米文学応用セミナー」では，現代イギリス児童文学のフィリパ・ピアス著『トムは真夜中の庭で』の原文による精読と，それに関わる分析および論文執筆を指導した。成績評価は，いずれの場合も，当該学期で学んだ教材のほぼ全体を範囲とする期末試験と，普段の出席状況を総合的に判断して行った。大学院では，実践場面分析演習において，英語の多読・速読および精読の指導法に関する院生の発表・討議の指導を担当した。

**◎特色ある点等**

学部の「コミュニケーション英語」では，時事的な話題を取り上げるのに加えて，断片的な英字新聞の抜粋では扱うことができない歴史的な背景を記述したテキストを使用するように配慮した。具体的には，「国境なき医師団」を含む様々なNGOの歴史，活動状況，今後の課題などを平易な英語で記述したテキストを読むことに加え，SARSやイラク戦争など，日々発生するニュースを伝える英語記事のコピーをほぼ毎回配付して講読した。このような教材の併用によって学生の興味を引き出し，彼らが自学自習する動機づけになったものと思う。また，将来，小学校等で総合学習・国際理解教育を担当する可能性のある本学学生にとって意義あるものと考えている。

学部の「英文学概論」では，イギリス小説の流れと著名な作家・作品に関して，具体的なテキストの抜粋の読解も含めて，学生の調べ学習とその発表を中心に進めた。また，「英文学演習」ではバランタインによる児童文学の傑作長編『コーラル・アイランド（珊瑚島)』の原文を最後まで読み通した経験は学生にとって意義があったと考える。「英米文学応用セミナー」はイギリス児童文学の定評あるテキストを丁寧に味わい，その上で，単なる感想文ではない分析的な論文を書くことを指導した。

大学院の実践場面分析演習において具体的に考えたのは，英語を読む力に限って言えば，大学卒業段階で，実務的には，情報収集のために多量の英文を読む力・態度と，特定の文章を丁寧に吟味しながら読む力・態度と両方が必要で，その基礎は中学，高校から習慣づける必要があるのではないかということであった。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成15年４月：「トロロプ，エレン・ターナン，ディケンズ」（単著） 大塚英文学会 OTSUKA REVIEW 第39号

**共同研究（幼，小，中，高等学校及び特殊教育諸学校教員との共同研究を含む）の実施状況**

①公立小学校の英語科導入に関する包括的開発研究 代表者：齋藤九一 科学研究費補助金

**学会活動への参加状況**

①５月24日：教育改革フォーラム（ホテル新潟）出席，②６月７日：ディケンズ・フェロウシップ日本支部春季大会（弘前大学）出席，③７月26日：上越英語教育学会第７回大会（上越教育大学）出席，④８月３日：国際平和シンポジウム（広島国際会議場）出席，⑤10月４日：ディケンズ・フェロウシップ日本支部総会（甲南大学）出席，⑥10月12日：日本児童英語教育学会全国研究大会（常葉学園大学）出席，⑦11月16日：日本児童英語教育学会関西支部秋季研究大会（大阪商業大学）出席，⑧12月６日：シンポジウム「公立小学校での英語教育をめぐって」（慶應大学）出席

**◎特色・強調点等**

ディケンズを中心とする19世紀ヴィクトリア朝のイギリス文学を専門とし，近年，ディケンズとトロロプという同時代の二人の小説家のいわゆるインターテクスチュアルな関係，および，伝記的な相互関係に関心を寄

せて研究している。先行研究がほとんどない分野ゆえの苦労と喜びの伴う作業である。平成15年度の論文もこの分野に関わるものであり，学会誌に投稿し掲載された。また，教員養成大学の英語コース学生を指導する立場から，児童英語教育に関しても知見を深めるべく努めている。

## 平　野　絹　枝（教　授）

### 〈教育活動〉

#### 授　業

学部の授業では最近の研究成果を取り込んだ形で，効果的な英文読解方略を指導し，異なった読解問題形式にふれさせて学生の多様な読解能力を引き出すことを心がけた。主に英文の読解とコミュニケーション能力の育成に努めた。「中等英語科指導法」の授業では，限られた授業時間で教授法理論などを中心に理解させることに腐心した。また英語力の向上や発音の指導も行った。大学院では，ESL/EFL 及び応用言語学の理論と指導，多角的な視点にもとずいた教材分析に焦点をあてた。

学部，大学院の成績においてテスト，小テスト，レポート，予習状況，出席等を総合的に評価した。

#### 研究指導

第２言語習得理論，読解理論，方略，テスティングに関する文献の指導，データの収集，分析法，論文の構成，展開，考察について日本語と英文の指導を行った。

#### その他の教育活動（学外を含む。）

①平成１４年４月～２月：新潟大学（学部）非常勤講師として「英語１」を担当した。

#### ◎特色ある点等

学生が自主的に課題に取り組むように心がけている。

### 〈研究活動〉

#### 研究成果の発表状況

**論】**①平成１６年３月：「日本人大学生の読解におけるリコールテスト－－性差の影響－－」（単著）『中部地区英語教育学会紀要』 No. 33 pp. 239-246

②平成１６年３月：”Factors affecting reading recall (Part 1)（単著）『上越教育大学研究紀要』 第２３巻第２号 pp.563-570

**発】**①平成１５年６月：『リコールテスト－－読解力と性差の影響－－』（単）第37回中部地区英語教育学会岐阜大会研究発表

#### 学会活動への参加状況

①６月２８日～２９日：第37回中部地区英語教育学会岐阜大会出席，②８月９日～１０日：第29回全国英語教育学会南東北研究大会出席，③９月４日～６日：第42回2003年度大学英語教育学会全国大会出席，④平成１５年度中部地区英語教育学会運営委員，⑤大学英語教育学会評議員，⑥教大協外国語部門理事

#### ◎特色・強調点等

リコールテストに関する研究で，目標言語学習経験年数，性差などの諸要因がリコールテストとその妥当性に及ぼす影響について考察しているが，これまでの日本における研究では例がほとんどなく，独創的であると思われる。

### 〈社会との連携〉

#### 社会的活動状況

①新潟県英語スピーチコンテスト審査員

**平　野　七　濤**（教　授）　※附属実技教育研究指導センター

**〈教育活動〉**

**授　業**

ドイツ語コミュニケーション基礎Ⅰの授業は，相変わらず多人数であったが，学生一人一人が必ず各時間内に一回以上は質問に答える，あるいは発音する機会を持つように配慮しながら授業を進めた。それなりの成果を得たように思う。また，柿埼市にホームステイ中のドイツ人セバスチャン（高校生）さんを招いて，ドイツ語コミュニケーション基礎Ⅰ及びⅡの受講生の前で，故郷の町ミュンスターやドイツ全体について話をしてもらい，ドイツ語及びドイツに対する学生の興味をさらに喚起した。

**その他の教育活動**

本年も昨年に引き続き，音楽コースの大学院生（声楽専攻）数名にドイツ語，及びドイツ詩を読む自主ゼミを行った。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**著】**翻訳および論考　①平成15年５月：『病者カフカ』（単著）　論創社

**論】**①平成15年９月『ヘルダーリンの「希望」と『希望に寄せて』』(単著)　上越教育大学研究紀要　第23巻第１号　pp.155-166

②平成16年３月『ヘルダーリン，フランクフルト時代の短いオーデについて』(単著)　上越教育大学研究紀要　第23巻第2号　pp. 611-622

**発】**①平成15年７月：『カフカの短篇小説』　第７回上越英語教育学会

②平成15年11月：『ヘルダーリンの短い頌歌』　第24回日本独文学会北陸支部学会

**〈社会との連携〉**

**◎社会への寄与等**

・公開講座「楽しいドイツ語」で，９月４日から11月６日まで，計15時間の授業を市民相手に行った。

**前　川　利　広**（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

学　部　：　大きく分けて二通りの方針で英語教育を実施した。

⑴20人のクラスにおいて，基本的な英語力をつける指導をした。特に４技能のうち，発音と会話，そして英作文を指導した。

⑵40人強のクラスにおいて，アメリカ合衆国の歴史，地理，文化に関する資料を使用し，アメリカ文化の理解を促すとともに，英語を読む力の涵養，そして「自分でテーマを見つけ，文献を探し出してまとめる」という活動の基礎を学んでもらうことを目的とした。既存のテキストでは適当なものがみつからなかったため，毎回プリントを作成し，配布した。

大学院　：　⑴英文を読む力をつけることと，⑵異文化理解として上質の文化論を読み，アメリカ現代社会についての洞察を得ることを主たる目的として指導した。

使用したテキスト(前期) Roderic Frazier Nash, *Wilderness and the American Mind*; Frederic Jackson Turner, *The Frontier in American History*; 上岡克己，『アメリカの国立公園』，(後期) *The Norton Anthology of American Literature* (Vol. ２).

原文は前期・後期ともに読みやすいものを選択したが，学生の理解が満足のゆくものであったとは言え

ない。学生の英文読解力が年々落ちているように思う。アメリカ文化考察以前の問題として，あらためて日本の英語教育事情を考えさせられた。英会話熱は高まっているものの，それと反比例して読む力が落ちている。文化論・小説等，上質の英文を敬遠する嫌いがある。その結果が大学院生全般の英文読解力低下につながっているように思う。

**研究指導**

学部英語コースができ，第一期生が４年生として一年を送った15年４月から16年３月までに指導した内容は，次の通り。

⑴ 二人の４年ゼミ生は卒業研究の対象に，長編小説 *The Human Comedy* を選んだ。卒業論文としてあるテーマに沿ってまとまった分量の文章を論理的に書くという経験は，彼らにとって初めてであった。まず，論文とは何かという質問にわかりやすく答えることから始めた。そのためにはテーマをどのように見つけるかという指導もしなくてはならぬ。そののちに，どのように論理的に文章を積み上げ，傍証を加えていくかということを噛み砕いて，念入りに指導した。どちらも日本語で規定枚数を大幅に超える長編を仕上げたが，両学生の希望があったため，次にはそれらを英文に直す指導に移った。基本的な英作文力が不十分なため，添削と書き換え要求をたびたび繰り返し，冬期休暇をも返上して指導した。どちらも上越教育大学学部学生としては，立派な卒業論文になった。

⑵ ３年ゼミ生は二人である。彼らにも長編小説を一つ，きっちりと読了させることを目標として，Jean Webster, *Daddy-Long-Legs* を使った。内容はよく知られているだけでなく，英文も模範的であるがときおり難しい部分も含み，指導に時間がかかった。しかし内容は若い女性の精神的成長をテーマにしており優れた読み物であるため，学ぶ側も教える側も途中で放棄することなく続いた。読了したのは後期授業も終わって一月経過した，３月に入った時点である。

⑶ ３年ゼミ生には，別メニューで英語による表現力の訓練を施した。つまり発音，会話である。従って後期は週２回の授業になったが，学生はよく出席した。一年が終わる頃になると，始めた頃に較べて発音も表現力もかなり上達した。

**◎特色ある点等**

４年生は学部英語コース一期生であり，どうしても指導に熱がこもった。その成果が上がって，二人とも志望していた県の教員（中学英語，小学校）として採用された。英語コース９人のうち教員希望者７人，そのうち正規合格者は３人であり，そのなかの２人は私のゼミ生である。私としても初めての経験であったので確かとはいえないが，ゼミでの指導が学生の知的訓練，ひいては教員採用試験にとても影響があるように思う。ゼミ生教員採用試験合格率100パーセントを，今後も目指していきたい。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】** ①平成15年9月 「David Bergen の小説における自然と社会環境の影響」（単著）『上越教育大学研究紀要』pp. 143-154.

**学会活動への参加状況**

①５月：日本ヘミングウェイ協会， ②10月：日本アメリカ文学会， ③12月：「シンポジウム：公立小学校での英語教育をめぐって」（慶応大学21世紀 COE プログラム）

**◎特色・強調点等**

ネイチャー・ライティング研究の一環としてアメリカ・カナダ国境近辺，特にノース・ダコタ，モンタナ，マニトバの小説を集中的に読み始めた。気候と土地柄が文学にどのように描写されているかということに関心を抱いている。まとまった成果が出るにはもう少し年月が必要である。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

３月14日より提携校であるカナダ・ブランドン大学から教育実習生が来て，その実習・生活すべてにおいて世話をしている。その過程で小学校・中学校・高校の訪問を繰り返し，上越の児童・生徒との橋渡しをしている。また地元有志を募り，教育実習生の日本文化理解を手助けしてもらい，また逆にカナダ文化の理解を市民に与える機会を作った。

**大　場　浩　正**（助教授）

〈教育活動〉

授　業

（学部）「コミュニケーション英語」では，今年度は多人数のクラスのみを担当したこともあり，リスニング，リーディング，ライティングの３技能に焦点をあてた授業を展開した。最初の授業において全体の目的・目標，学習内容，成績評価方法を解説し，毎回の授業では個々の活動に関して何のために行なうのか（何に役立つのか），どのように行うのかを明確にし，学習への動機付けを促した。また，毎回の授業後，形成的評価としてその日の活動成果をチェックした。「中等英語科指導法（授業論）」でも同様に，学習内容や個々の活動の意義を明確にした。授業者が高等学校で行った授業のビデオを見せたり，中学生向けの模擬授業を行なったりして，学生がその後に行った模擬授業に対する具体的な指導を行った。また，中学校現場の教員による講義を組み込むことにより，学生への動機付けとなったようである。教育実習や現場に出てから役に立つ英語の授業の基礎技術を獲得させることに焦点をあてた。

（大学院）担当した２つの授業では，目的・目標を明確にし，より高度な，そして，専門的な知識を積極的に身につけることができるように指導を行った。テキストの内容把握に基づき，様々な立場からのディスカッションは，学生自身の深い理解と考え方の形成に役立ったのではないかと思われる。英語を指導する際，直接役に立つ背景知識の獲得と自己の英語教育に対する考え方を獲得させることに焦点をあてた。

研究指導

（学部）卒業論文の指導において，国内外の専門誌に掲載された論文や専門書を丁寧に読むことによって，専門的知識を修得させ（文献研究），日本人中学生の英語能力に関する実験を実際に行い，収集したデータの分析や考察（実験研究）を通して英語教育に関する洞察を深めさせ，臨床的な実践力を深めさせた。

（大学院）より高度な専門的な知識，および臨床的な実践力を修得させるために，国内外の専門誌に掲載された論文および専門書の内容を報告させ（文献研究），それに基づいて議論等を行い，設定した研究課題に取り組むための実験研究を通して修士論文を完成させるための指導を行なった。

◎特色ある点等

学部では，英語を専門外とする学生の指導において，将来，小学校の教員として子供たちに英語を教える機会もあることを踏まえ，英語に対して肯定的な態度が育つように心がけると同時に，小学校の英語指導で用いられる活動を紹介した。また，英語コースの授業では，最低限，教育実習における実践に役立つような基礎知識や活動を積極的に指導した。

大学院においては教授法や指導技術の基礎となる第二言語習得研究に関する理論的な背景や実験研究の成果を正確に理解させることに努めた。また，学会等でも積極的に発表してもらった。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

論】①大場浩正（2003）「日本人英語学習者における関係節と wh 疑問の形態的特徴の発達過程」『上越教育大学研究紀要』第23巻第１号，167-181.

② Ohba, H.（2004） Semantic 'blocking' effects of functional categories in Japanese EFL learners' interlanguage grammars. *Bulletin of Joetsu University of Education*, Vol. 23, No. ２，571-581.

発】①平成15年８月：「Preliminary Analysis of Grammatical Judgment Test: Dative Constructions and their Passive Forms」(共) The 8th Conference of Pan-Pacific Association of Applied Linguistics 研究発表

②平成15年８月：「日本人英語学習者の文法能力発達過程について：関係節の習得を中心に」(共) 第31回全国英語教育学会南東北大会研究発表

③平成15年９月：「SLA 研究とテスティング研究の有機的連携を目指して」(共) 大学英語教育学会（JACET）全国大会シンポジウム発表

④平成15年９月：「Semantic 'blocking' effects of functional categories in interlanguage grammars」（単）13th European Second Language Association 研究発表

共同研究の実施状況

①「日本人大学生の英語文法能力発達過程の研究とその測定方法の開発」代表者：木村真治（関西学院大学助教授）科学研究費補助金

学会活動への参加状況

①平成15年度北海道英語教育学紀要編集委員，②平成15年度日本第二言語習得学会運営委員・学会誌編集委員，③平成15年５月25日～26日：日本第二言語習得学会出席，④平成15年７月27日：第６回上越英語教育学会出席，⑤平成15年８月22日～23日：第30回全国英語教育学会出席，⑥平成15年９月２日～５日：大学英語教育学会出席，⑦平成15年９月18日～21日：13th European Second Language Association (Edinburgh, Scotland) 学会出席，⑧平成15年10月28日：日本第二言語習得学会秋季研修会出席，⑨平成15年10月25日：北海道英語教育学出席，⑩平成16年３月12日～13日：Tokyo Conference on Psycholinguistics 学会出席

◎特色・強調点等

前年度に引き続き，日本人英語学習者の関係節と wh 疑問における wh 移動の習得に関する実証的な研究を最新の生成文法理論を用いて行った。今年度は特に関係節に焦点をあて，国内および国際学会において発表する機会を得た。また共同研究の第二言語習得とテスティングの融合に関する研究に関しても国内および国際学会において発表する機会を得，その成果をまとめた。

〈社会との連携〉

◎社会への寄与等

・新潟県柿崎町立柿崎中学校学力向上フロンティア指導者

・日本英語検定協会二次試験面接委員

野　地　美　幸（講　師）

〈教育活動〉

授　業

学　部：「コミュニケーション英語」の授業では，ＬＬ等を活用し，学生の英語力・コミュニケーション能力の育成に努めた。「英語基礎研究」においては英語の統語論に関して日本語との比較を交えて講義を行

なった。「ことばと社会」においては，連濁という現象を取り上げ人間の言語知識が無意識の体系だった知識であることについて講義を行った。「英語音声学」は，英語の音を体系的に学び，学んだ内容が実践に結びつくようにドリルを取り入れる等内容を工夫した授業を行った。各授業の成績評価は学生にあらかじめ明示した方法で厳格に行った。

大学院：「英語学特論」においては生成文法理論の入門の講議を行った。「生成文法特論」においては生成文法の枠組みで書かれた特定の論文を読み解く形式で授業を行い，院生が修士論文執筆にあたって自らの力で議論が展開できるよう心掛けた。また，「教育実践場面分析演習」においては，英語の無生物主語構文について取り上げ，日英語の相違を考慮した英語の授業について討議形式の授業を行なった。

**研究指導**

学部学生に対しては，英語学の基礎的知識の養成を図る一方，与格構文の構造と習得という観点から小学校英語を考える取り組みを行った。院生に対しては，英語の迂言的使役構文について，また，英語の右方移動構文について，指導・助言等を行った。

**◎特色ある点等**

大学院の授業については受講生に現職院生もいることを踏まえ，また学部の授業も教員志望の学生が受けていることを考慮し，英語学（生成文法理論）から英語教育にアプローチすることを意識した授業を心掛けた。

**〈研究活動〉**

**共同研究の実施状況**

①「公立小学校への英語教育導入に伴う諸問題とその対策」代表者：斎藤九一（上越教育大学教授）科学研究費補助金

**学会活動への参加状況**

①平成15年５月24～25日：日本英文学会出席，②平成15年７月26日：上越英語教育学会出席，③ 平成15年11月15日～16日：日本英語学会出席，④平成16年３月12日：言語科学会出席

**◎特色・強調点等**

平成15年度は近隣の小学校をいくつか訪問したり，小学校英語に取り組んでいる実践家・研究者の話を聞く機会を得て小学校英語の現状と課題について理解を深めることができたことが大きな成果であった。

**若　山　真　幸**（講　師）

**〈教育活動〉**

**授　業**

ビデオ教材を使っての英語の聴き取りの練習，英語辞書を使った簡単なフレーズ(言い回し）を即興で言葉にする練習，ＷＥＢから集めた新聞記事を使った時事英語の学習などを取り入れた。また，コンピューターを使った英語分析を行い，実際に使用されているフレーズとこれまで学習してきた文法書や参考書との違いを考察させた。

**研究指導**

理論言語学に関する論文を，入門書を併読しつつ，集中的に講読した。また，論文・発表の構成や基本的な英語表現を今のうちから覚えるように指導している。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

平成13年４月から：上越医療福祉専門学校非常勤講師として「英語Ⅰ」，「英語Ⅱ」を担当した。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

論】①平成16年７月：『公立小学校への英語教育導入に伴う諸問題とその対策』研究報告書

②平成16年３月：Some Issues on Linking Theory: the Argument Structure of Reflexive and Experiencer Verbs『上越教育大学研究紀要』第23巻第２号（上越教育大学）

共同研究（幼，小，中，高等学校及び特殊教育諸学校教員との共同研究を含む）の実施状況

①『公立小学校への英語教育導入に伴う諸問題とその対策』代表者：齋藤九一　科学研究費補助金

学会活動への参加状況

①５月23日：近代英語協会第20回大会出席，②５月24日～25日：日本英文学会第75回大会出席，③７月26日：上越教育大学英語教育学会第６回大会出席，④10月18日～19日：日本英文学会中部地方支部第55回大会出席，⑤10月25日：日本英語コーパス学会第22回大会出席，⑥11月15日～16日：日本英語学会第21回大会出席，⑦３月23日：独立行政法人国立国語研究所第11回国際シンポジウム出席

◎特色・強調点等

自然言語における Voice (態) の具現方法の違いについての研究を始めた。例えば，心理動詞ト呼ばれるものは，日本語においては，いわゆる自動詞型で表されるが，英語においては受動態で表す。さらに，ロマンス諸語では再起目的語を使うなど，多様な具現方法がある。こうした違いを，意味論・形態論・統語論の側面から分析している。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①アップル社公認マッキントッシュユーザーグループ「教育と言語学　マッキントッシュユーザーグループ（ELMUG)」（運営・代表者）

【社会系教育講座】

赤　羽　孝　之（教　授）

〈教育活動〉

授　業

学部：地域と産業･社会，経済地理学，地理学実験，地理学野外実験，地域調査法Ｂ，実践セミナーⅠ，地理学専門セミナーⅠ・Ⅱ

大学院修士課程：人文地理学特論，実践場面分析演習Ⅰ，地理学研究セミナーⅠ・Ⅱ

大学院博士課程：

研究指導

社会系コースの大学院修士課程院生１人の研究指導。

その他の教育活動（学外を含む。）

非常勤：平成15年10月より半期，新潟大学教養科目「地域と経済」を週２コマ担当した。

非常勤（集中）：平成15年９月８日～12日，信州大学人文学部で「文化生態学特殊講義」を担当した。

◎特色ある点等

韓国への自主的な巡検旅行など，その際の各地で得た成果を，スライド映写・説明などの形で講義などの授業に生かすことが出来た。

〈研究活動〉

前年度に引き続き，中国東北地方の経済・図們江経済開発地域・中朝国境における貿易などの文献研究を

行った。また，８月に１週間，韓国旅行を行った。ソウルを基点に仁川・水原・利川などの諸都市を，ソウルの元学喜教授の案内で，港湾都市・歴史的都市・陶磁器の地場産地・定期市・山城などを回り，その際の各地で得た成果を，スライド映写・説明などの形で講義などの授業に生かすことが出来た。2004年３月には，５日間のアメリカ・ロスアンゼルスへの自主巡検旅行を行った。大都市のダウンタウン・郊外の実情，ハイウェイなどの交通事情，メキシコの国境都市などを見学し，撮影した多くの写真や旅行記等の文章を使って，講義などの授業に生かすべく準備を行っている。

新潟県の地理学研究者グループによる共同研究として，地形図を利用したガイドマップと文章の「新潟県ウォッチングマップ」の企画・立案に参加，平成16年度には，新潟県各市町村を網羅する形で調査・編集・出版の作業に入る予定である。現在，市町村の大規模広域合併を前にした時期であり，県内各地の諸施設・史跡・自然事象などを図上分布の形で記録し，市民向けの一般的な出版物として出す事には意義があろうと思われる。

**研究成果の発表状況**

**発】**①講演『現代中国の諸相』 第18回上越教育大学社会科教育学会大会，平成15年10月18日，於・上越教育大学

**学会活動への参加状況**

①日本地理学会・春季学術研究大会（於・東京大学，４月），②経済地理学会大会（於：法政大学，５月），③上越教育大学社会科教育学会に参加・出席し，研究者交流を行った。

**◎特色・強調点等**

大きな変貌がみられる韓国の経済と社会を直接，現地で観察し調査できたことは，大きな意義があった。特に，ソウル漢南・仁川などでは，国際化を睨んだ東アジアのセンターを目指した金融・行政・会議地区，24時間操業の国際空港と高速道路・港湾などに新しい変化が現われていた。また，韓国の定期市を見学できたことは，日本の定期市と比較する意味で大きな成果であった。また，アメリカ都市を観察できたことは，モータリゼーションの進んだ時代における日本の諸都市の将来を予測する事にもつながり，都市中心部の衰退，郊外社会の抱える諸問題について考えさせられた。地理学においては，現地での実地踏査が特に重要であり，その意味で，２回の海外行きは，日本の地域社会を海外と比較する意味で，大きな収穫となった。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①上越市史編集委員，②上越ＴＭＯ協議会委員（副委員長），③上越市公共事業評価監視委員会委員（委員長），④上越市景観審議会委員（副委員長），⑤関川流域委員会委員，⑥上越市商工会議所政策委員会（委員長），⑦上越市北陸新幹線建設促進期成同盟会顧問，⑧上越市・北東アジア友好都市地域経済交流研究会研究員，⑨自転車利便性向上検討委員会（委員長），⑩新潟地域文化デジタル化研究会（代表幹事），など

**大 嶽 幸 彦**（教 授）

**〈教育活動〉**

**授 業**

【観点１】教育方法及び成績評価面での取組

○ 授業形態，学習（研究）指導法等の教育方法に関する取組状況

学部での授業では講義だけでなく，作業学習や発表形式も取入れ，学生の話す力がつくようにした。特に３年生には教員採用試験や各種の試験に対応できるように毎回小論文を書かせ，添削して翌週返却した。

大学院は主に発表形式をとり，報告者を中心に討議すると共に現地討議を行なった。

○　成績評価法に関する取組状況

シラバスに明記したように，出席状況，発表状況，毎回の小テスト，最後の筆記試験を点数化して総合評価し，学生の納得のゆくように成績評価について事前・事後に説明している。

【観点２】教育の達成状況

○　進学や就職などの卒業（修了）後の進路の状況から判断した取組状況

学部１年次の授業から本学が教員養成大学であることを自覚させ，講義の中にワークを入れて作業させると共に，教員採用試験の出題個所との整合性についても言及している。授業時での成績と就職状況との相関もあることから日頃の授業形態が進路に貢献していると判断している。

大学院の修了生も指導的立場で活躍している者も多く，授業の方式が十分役立っていると考えている。

**研究指導**

【観点１】学部

どのような課題が与えられてもみずから考え，調査項目を決めて調査し，かつ教育現場に還元できるように教育の視点を意識させた研究指導を行なっている。

【観点２】大学院

専門の研究テーマを院生みずからが深めるのを手助けすると共に，教材化の視点からもテーマに取り組ませ，実践力をつけて教育現場に戻れるように指導している。

**◎特色ある点等**

学生，院生がみずから課題に取組み，教官はあくまでその手助けをして能力を引き出す役に徹するよう心掛けている点が以上を通底している。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**著】**①平成15年６月：『人文地理発想法入門－頸城野からの発信－』（単）　大明堂，97Ｐ.

**論】**①平成15年９月：地理学から見た『明治欧米見聞録集成』－澁澤榮一の場合－　上越教育大学研究紀要　第23巻　第１号　183～190頁

**他】**①平成15年９月：書評　朝太郎：　高校生へのメッセージ　上越社会研究　第18号　１～２頁

**学会活動への参加状況**

①10月11日～13日：日本地理学会出席

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①附属中学校，わくわく大学デーで中学生に授業，テーマ「地理学者はどんな仕事をしているのだろうか」（平成15年７月30日実施）

**佐　藤　芳　徳**（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

大学院の「自然地理学特論」では，地理学の最新の研究成果を取り入れているほか，教材化も念頭に入れて授業内容を構成している。また，学部の授業では，環境科学的側面を充実させたほか，地理学野外実験などの実験科目を中心に，学生が地理的現象を直接取り扱えるよう授業内容を工夫した。必要に応じてＩＴ機器も取り入れた。

**研究指導**

卒業研究においては，地理学関係，特に自然地理学を中心に指導を行った。また，修士論文作成においては，地理学的な見地からの助言を行った。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

信州大学教育学部において「自然地理学特論」，「自然地理学概論」を担当。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①日本水文科学会ハワイ火山水文巡検報告（その２）－マウイ島の自然環境と水利用－日本水文科学会誌第33巻第２号　pp.89－96

②日本水文科学会ハワイ火山水文巡検報告（その３）－マウイ島のUSGSの実験流域－日本水文科学会誌第33巻第３号　pp.215－227

**発】**①平成15年７月：「Use of stream-water isotopes to interpret groundwater hydrology on a volcano: Mt.Haruna,Central Japan」IUGG2003 札幌

**共同研究（幼，小，中，高等学校及び特殊教育諸学校教員との共同研究を含む）の実施状況**

①独立行政法人産業技術総合研究所の研究員と共同で，同位体水文学についての研究を行った。②日本水文科学会研究ワーキンググループ「日本の火山の地下水－性状と水文プロセスの体系化に向けて－」における共同研究。

**学会活動への参加状況**

①３月29日～30日 日本地理学会出席，②７月３日～４日 IUGG2003 札幌大会出席，③10月30日～31日 日本水文科学会出席

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①日本水文科学会評議員（編集委員長），②庄川扇状地水環境検討委員会委員（国土交通省），③新潟県自然環境保全審議会専門調査委員（新潟県），④上越市環境審議会委員（上越市），⑤上越市水道水源保護審議会委員（上越市），⑥第３水道水源開発検討委員会委員（上越地域水道用水供給企業団），⑦柿崎町環境審議会委員（柿崎町），⑧上越市史専門委員，⑨柿崎町史編さん自然編調査執筆委員

**◎社会への寄与等**

・５月22日 新井市において地下水涵養について講演。

**鈴　木　敏　紀**（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

１　授業形態：毎時間学生にテーマに即した研究発表を10～15分間行わせ，その後，テーマに即した資料を配布し，現状と理論の総合化を図り，理解を深めた。

２　成績評価：学生の授業出席率，研究発表の内容，筆記試験とで総合評価した。

３　付加価値：文献の読解力・要約力，資料の調査力・作成力，研究の構想力・発表力をつけさせた。

**研究指導**

１　学　部：テーマに即した文献の研究，統計資料の研究，及び現状調査を通して，総合的に把握できる指導を行った。

２　大学院：テーマに即した文献の研究，統計資料の研究，及び現状調査を通して，総合的に把握できる指

導を行った。特に中国経済の発展要因，新潟県及び上越地域の企業経営分析においてその成果は修士論文に纏め上げられた。

3　特　色：

①　中国経済の発展要因，新潟県及び上越地域における企業経営の現状分析を指導し，それらの実態を明らかにし，その成果を大学院修了後の進路に役立てた。

②　学部３年次の実践セミナーⅠ「社会」及び大学院１年次の実践場面分析演習Ⅰ「社会」における合同授業において社会系公民分野の教官五人による集団指導体制で教育実践能力強化のための授業案作成及び教材開発の指導を行い，その成果を「研究報告書」の形で残した。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成16年３月：「新潟県における産業空洞化の特質」（単著　上越教育大学研究紀要　第23巻　第２号　pp.633-649）

**業】**①平成15年８月：『実践場面分析演習Ⅰ「社会」・実践セミナーⅠ「社会」「公民」分野　研究報告書』（代表者：鈴木敏紀　教科・領域教育専攻社会系コース公民分野関係研究室　pp. 1-125）

**発】**①平成15年９月６日：にいがたまちづくり学会公開講座講演（「産業空洞化時代における中小企業の経営革新－新潟県経済の現状分析を通して－」）

**◎特色・強調点等**

新潟県経済の不況の実態を上・中・下越における４大広域生活圏を中心に分析し，中越と下越の広域生活圏においてその中心的産業がもっとも産業空洞化が著しいことを明らかにし，また上越地域における研究開発型中小企業の経営革新が上越地域経済全体の発展に寄与していることを具体的調査にもとづいて明らかにした。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①新潟県公共事業再評価委員会委員として県の政策形成にかかわった。　②高田郵便局主催の講演会で「金融商品開発とコンプライアンス」と題する講演を行った。（平成15年６月29日）　③上越市南本町３丁目のまちづくり委員会主催の講演会で「まちづくりの基本的視点」と題して講演した。（平成15年９月13日）　④大潟町商工会の商工会広域連携検討委員会のアドバイザーとして報告書の作成にかかわった。　⑤大潟町商工会青年部・女性部主催の講演会で「リサイクル商品開発」に関する講演を行った。（平成15年11月26日）　⑥上越市柔道連盟主催の少年柔道教室（高田スポーツセンター）の顧問として毎週月・木・土の週三回地域の小学生に柔道指導を行った。

**藤　澤　郁　夫**（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

学部授業では，「倫理学概説」において，社会科の教科専門科目としての内実を確保るよう努力した。将来の教員としての基礎教養はもとより，人間形成のための基礎学問として，学生に問題提起しながら授業をすすめた。

また，大学院の授業「倫理学特論」においては，カントほ永遠平和論をとりあげた。特に，ルソーとの関連を詳細にとりあげ，国際連盟の構想にいたる経綿を明らかにした。

**研究指導**

学部学生については，４年生の卒論指導として，丸田麻美『ベルクソンの『道徳と宗教の二つの源泉』に

おける道徳論』および川浪剛志『カントの道徳論の研究』が挙げられる。大学院では，修士１年伊藤葉子，金澤秀子，由井峰雄の指導に当った。

**その他の教育活動の実施状況（学外を含む。）**

①平成15年４月～９月：国立療養所新潟病院附属看護学校非常勤講師として「論理学」を担当した。

②平成15年10月～平成16年３月：新潟県立看護短期大学非常勤講師として「哲学」を担当した。

③平成15年10月～平成16年３月：新潟県立看護大学非常動講師として「哲学」を担当した。

◎指導においては，基本原理の徹底的理解を心がけることに鋭意努力している。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成15年３月：『倫理的信念と法のあわい－－『エウチユプロン』の主題導入の構成からの考祭』（単著）上越教育大学研究紀要　第22巻　第２号　pp.621-636.

②平成16年３月：『世界市民観念の想像力のためのノート－－ルソーからカントへ』（単著）上越教育大学研究紀要　第23巻　第２号　pp.651-673.

**学内プロジェクト】**

得丸貞子氏とともに「『いのち教育』における宗教性・スピリチュアリティーの関係性と具現について」という研究課題でプロジェクトを進めている。平成15年度にはルソーとベルクソンにおけるスピリチュアリティーの関連箇所を大学院の講義において紹介した。

**◎特色・強調点等**

平成15年度９月に年次休暇をいただいてギリシャを旅行してきた。ギリシャの哲学思想をこれまで学んできて種々思うところはあったが，今回ゆかりの場所を巡って，特にデルポイの神殿を訪れたとき，アポロンの神託の答えをめぐるソクラテスの哲学的遍歴を，ある具体的イメージに重ねて考える機縁を得たことは重要な経験となった。今後とも厳正なテキスト読解をすすめ，その成果を学生諸君に教授していきたい。

## 安　田　　尚（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

学部２年の社会学概説では，社会学の古典的著作をテキストとして宗教，政治，経済，歴史などについて概説し，最新の研究成果にもとづいてテキストの文献批判を行うなど，アカデミックな研究スタイルと問題発見の重要性を体得させる工夫をこらした。学部３年の社会学文献講読では，メディア・リテラシーの理解を深めるべく，英文テキストの読解とその内容に関する質疑討論を行い，章末の練習問題を解かせるなどメディア教育の実践的教育能力を高めるよう工夫を凝らした。大学院の社会学特論では，夙に教育社会学の古典として高い評価を得ているP.ブルデュー『再生産』（藤原書店，1991年）をテキストに教育による文化と社会構造の再生産のメカニズムについて考察を加えた。同時に，ソシュール言語学，フランスの教育事情，ブルデュー社会学の方法論，鍵概念等の解説を行い，ブルデューの著作に馴染みない学生への配慮を行った。

**研究指導**

大学院においては，教育現場における教師と生徒の「共依存的人間関係」について研究指導をおこなうとともに，調査計画の作成を指導した。社会調査の経験が浅い学生であることを念頭に置き，丁寧な指導を心がけた。また，高校における哲学教育の改善をテーマとする研究については，『学制120年』等によって日本における倫理，公民教育の制度的成立過程を検討させた。

**その他の教育活動の実施状況（学外を含む。）**

平成15年10月７日～平成１年11月25日において，新潟県立看護短期大学非常勤講師として「看護特論Ⅳ（女性学）」を担当した。受講生は20名であった。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成15年１月：「ブルデュー社会学における身体性と実践の論理」（単著）『幼児の教育』 102巻１号 pp.44-55.

②平成15年３月：「ブルデュー社会学における時間論と象徴資本」（単著）『幼児の教育』 102巻３号 pp.34-45

③平成15年５月：「ブルデュー社会学における支配の社会学」（単著）『幼児の教育』 102巻５号 pp.46-57

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①国立療養所犀潟病院倫理委員会外部委員を務める。平成15年12月３日（水)2件の申請について審査した。

**山　本　友　和**（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

学部では，各講義・演習内容の連続・連携に留意した指導を行い，その成果を『社会科教育法研究・2003年度』という冊子にまとめた。大学院では，社会科・公民教育の基本概念について習得させた上で，比較社会科教育研究の成果に基づいた模擬授業も行った。

**研究指導**

学部では４年生２名の学生に対する卒業研究指導を行い，大学院では５名（Ｍ１が３名，Ｍ２が２名）の院生に対する修士論文指導を行った。ゼミの初年次は各自の研究テーマとかかわる文献・先行研究の講読を中心に行い，研究課題を明確化させた。ゼミの２年次は各自の論文構成に沿って個別指導を行った。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

群馬大学非常勤講師として，「中学校社会科指導法Ｃ」の集中講義を担当した。平成15年度新潟県教育職員免許法認定講習において「教科の指導法－社会」の講師を務めた。また，本学では教職講座の講師も務めた。

**◎特色ある点等**

講義においても課題研究や授業ビデオの視聴等を取り入れ，能動的な学習となるよう留意した。演習・ゼミでは，受講生・ゼミ生の研究テーマに沿って各自の専門性を深められるように工夫した。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**著】**①平成16年３月：『中学校・高等学校公民教育』（共著）　第一学習社

**業】**①平成16年１月：『文部省検定済生活科教科書上・下　せいかつ』（共著）　学校図書

**他】**①平成16年３月：『課題研究②地域の国際化と社会科教育』　社会科教育研究　第91号

**共同研究の実施状況**

①日本教育大学協会「モデル・コア･カリキュラム」研究プロジェクト･ワーキンググループ　代表者：高城忠（東京学芸大学教授）

**学会活動への参加状況**

①10月11日～12日：日本社会科教育学会第53回全国研究大会出席，②平成15年度日本公民教育学会理事，③平成15年度日本社会科教育学会評議員・幹事，④平成15年度全国社会科教育学会理事，⑤平成15年度上越教育大学社会科教育学会会長，⑥日本社会科教育学会誌「社会科教育研究」の編集

**国内外の学術賞の受賞状況**

①８月26日：教育研究賞受賞（日本教育研究連合会）『オーストラリアの社会科教育研究ほか』

**◎特色・強調点等**

日本教育大学協会の研究プロジェクトで作成した「モデル・コア・カリキュラム」は，全国の教員養成大学・学部における教員養成カリキュラムに利用かつ応用可能なものであり，その意義は大きいと考える。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①教科書研究センター特別研究員，②新潟県上越市公民館運営審議会委員，③新潟県上越市女性サポートセンター運営審議会委員，④新潟県教育委員会教員研修会講師（『学習指導における今日的課題』を講演）

**◎社会への寄与等**

・公民館活動や女性支援活動，教科書の改善，教育現場の問題解決等に多少なりとも貢献したと考える。

**浅　倉　有　子**（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

日本史Ａでは，アニメ映画「もののけ姫」を教材として，近年の歴史研究の成果について講義をした。学生の関心を引き出すことに成功したものと考える。他の授業を含めて，ビデオ，ＯＨＰなどを用いることで，新味のある授業を行うよう努めた。大学院の日本史システム特論Ａでは，最新の研究動向を紹介するとともに，基本的な資料の扱い方や，学校現場における応用に付いて理解を高める工夫を行った。実践場面分析演習では，他の歴史系教官と共に春日山をテーマとした講義と巡見を行い，受講生から提出されたポスター教材をＣＤ化した。

**研究指導**

４名の修士論文の指導と３名の卒業論文の指導を行った。学部では3・4年生を一緒に，大学院では1・2年生を一緒にしてゼミを行い，研究へ取り組む姿勢，資料の分析方法をはじめとする研究の手法等が共有されるよう配慮している。また議論する能力の育成に努めている。そのほかに4年生と修士2年生については，資料読解など論文を完成させるためのゼミを個別に行っている。修士論文は，それぞれ雑誌に論文が掲載される予定である。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

東北芸術工科大学の非常勤講師として「歴史遺産応用演習Ⅰ」，「歴史遺産基礎演習Ⅰ」を，山梨大学教育人間学部の非常勤講師として「歴史学方法論Ａ」を，新潟産業大学の非常勤講師として「日本の歴史Ａ／日本事情ＡＡ」，「日本社会論ＡＡ」，「日本の歴史Ｂ／日本事情ＡＢ」，「日本社会論ＡＢ」を担当した。

**◎特色ある点等**

授業では，単調な講義にならないよう教材や授業方法に配慮している。研究指導については，学生の能力を引き出すように努めながら，懇切で厳しい指導を行っていると考える。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

著】①平成15年９月：「近世における女手形の発行と高田藩－関川関所を中心に」『上越教育大学研究紀要』 23- 1（単著）

②平成16年３月：『上越市史』通史編４　近世二　（共著）　上越市

論】①平成16年３月：「幕府の蝦夷地政策の展開とアイヌ観」『平成15年度　普及啓発セミナー報告書』（財）アイヌ文化振興・研究推進機構

②平成15年７月：「大名夫人の結婚・離婚白書」『歴史読本』764号　新人物往来社

他】①平成15年９月：『日本交通史辞典』（共著，「盛岡」他19項目執筆）　吉川弘文館

②平成15年12月：『日本史文献事典』（共著，１項目執筆）　弘文堂

共同研究の実施状況

①中世考古学のための日本中世・近世初期の文献研究　代表者：矢田俊文（新潟大学）　文部科学省特定領域研究，　②生涯学習時代における博物館教育・教育員養成および歴史展示に関する総合的研究　代表者：小島道裕（国立歴史民俗博物館）　科学研究費補助金基盤研究（B）(2)，　③教師コミュニティーの創成を通じての教員養成・現職再教育プログラムの開発研究　代表者：戸北凱惟　連合研究プロジェクト

学会活動への参加状況

①５月24日～25日：歴史学研究大会出席，　② 11月15日～16日：国際シンポジウム「歴史展示を考える－民族・戦争・教育」　歴史民俗博物館　出席

◎特色・強調点等

平成15年度は，大名家の史料を分析することで，従来の研究史を大幅に書き替える地域史研究の成果を刊行することができた。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①上越市文化財審議会委員，　②上越市史専門委員，　③青森県史専門委員，　④長野県文化財審議会委員，　⑤新潟市文化財審議会委員，　⑥平成56年８月８日（帯広会場）・９月８日（札幌会場）：「幕府の蝦夷地政策の展開とアイヌ観」（財アイヌ文化振興・研究推進機構普及啓発セミナー

◎社会への寄与等

・地域の文化や歴史の掘り起こしと，それらによる人々の歴史認識の形成について，また地域に存在する貴重な文化財や歴史資料の保持と活用等について，さらに先住民族の歴史とアイデンティティー，及び先住民族との共生についての認識と理解の進展に関して，一定の寄与を果たしていると考える。

茨　木　智　志（助教授）

〈教育活動〉

授　業

学部学生対象の社会科教育･歴史教育に関する教科教育の授業においては，教科内容の基礎的知識の充実，調査能力の向上に加えて，教育実践の場面における表現能力の向上に努めた。その成果の一部を公民教育の山本友和教授，地理教育の志村喬講師と共同で社会科教育学研究室紀要『社会科教育法研究2003年度』として発行した。

大学院学生対象の社会科教育･歴史教育に関する教科教育の授業においては，各国･各時代および特定の研究者の社会科教育･歴史教育の理論の紹介や検討等を通じて，各自の理論構築に向けた能力育成を目指し

た。受講生の探求の成果をレポート集にまとめ，各自の目標達成への参考とした。

**研究指導**

歴史教育等をテーマとする大学院学生（１年１名，２年１名）に対して，論文作成あるいは各自の課題への具体的な研究方法について，ゼミ等を通じて指導を行なった。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

①平成15年10月：新潟県立教育センターの平成15年度高等学校地理歴史科（歴史）講座において「歴史の指導法」の講師を務めた。②平成15年12月：本学の教職講座「社会科」に講師として協力した。③平成15年４月～平成16年３月：希望者を対象としたモンゴル語の勉強会を，大学院留学生ハスゲリレの協力のもとで，行なった。

**◎特色ある点等**

社会科教師としての実践能力と研究能力の育成に努めるなかで，学生が自己の習得した能力を自覚できる授業の在り方を工夫した。また実践場面分析演習等での学部生と大学院生との連携を模索し，一定の成果を収めることができた。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成15年７月：『モンゴルの歴史教科書・副教材について』（単著）総合歴史教育　第39号　pp.52－63

②平成15年10月：『国民学校初等科の国民科国史教科書『初等科国史』に対する基礎的考察』（単著）歴史教育史研究　第１号　pp.18－40

③平成16年３月：『モンゴル語版『蒙古喇嘛教史』の研究(9)』（共著）大正大学綜合佛教研究所年報第26号

**業】**①平成15年４月：『「新選世界史Ｂ」指導資料』（共著）東京書籍

②平成15年５月～平成16年２月：『新刊紹介』（単著）歴史と地理（世界史の研究）第195～198号（４回掲載）

**共同研究（幼，小，中，高等学校及び特殊教育諸学校教員との共同研究を含む）の実施状況**

①研究プロジェクト「地域認識を深めるための歴史的ランドスケープ教材の開発」に共同研究者として参加，②大正大学綜合佛教研究所モンゴル仏典研究会に参加，③笹川日中友好基金若手歴史研究者会議に参加

**学会活動への参加状況**

①８月２日：総合歴史教育研究会大会出席，②８月４日：アジア教育史学会大会出席，③10月４日：上越教育大学社会科教育学会第17回研究大会出席，④10月11～12日：日本社会科教育学会第53回全国研究大会出席

**◎特色・強調点等**

社会科教育・歴史教育の向上のために，歴史的研究および比較研究の観点からの基盤整備に努め，その成果の一部を公表した。さらに歴史教育史研究に関する検討の場を作ることに努力した。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①日本社会科教育学会幹事，②総合歴史教育研究会委員，③新潟大学と上越教育大学との教員養成･現職教員研修のあり方に関する連携協議会第２部会委員

小田桐　　忍（助教授）

〈教育活動〉

授　業

学部：日本国憲法や教育基本法を含む法的政治的知識は教採受験者にとって必須の基礎知識であるのみならず，人間社会において不可欠の構成原理である点にまで踏み込んで説明するよう努めた。（市）議会の傍聴を受講者に課し，レポートを提出させた。将来の教員として傍聴マナーを心得ておくことは，児童生徒を引率するときに有益であると考えたからである。

大学院：最初に法律学の起源について説明し，続いてディスカッションを行いながら，法と人間と社会の関係を考察した。とかく，法律学＝“条文暗記”と思われがちな偏見を排除し，私たちの周囲で“生きる”法の存在に気付いて欲しかったからである。

成績評価については学部においても大学院においても，厳格であることを宗とし，必要に応じた処置を講じながら，受講者各自の目標達成を支援促進した。例年通り，定期試験時の出題形式として，正誤問題・穴埋問題・論述問題を総合的に採用した。質・量ともにボリュームのある試験ながら，受講者は十分に準備をして臨み，良好な成績を収めていることを付言しておきたい。

なお，特に，学部の授業時には，当面の教採（公務員試験を含む。）対策と，近い将来教育現場で役立つ内容であることを心がけ講述している。

研究指導

卒業後，即戦力になれるよう，サブゼミを実施し，濫読すること，記録すること，発表することに慣れるよう指導している。また，必要最小限の英語力を身に付けさせる目的から，英字新聞の社説（17編）を読ませた。

その他の教育活動（学外を含む。）

①平成15年４月～平成16年３月：早稲田大学法学部非常勤講師「３・４年法学演習（法哲学）」担当

②平成15年４月～平成16年３月：帝京短期大学生活科学科非常勤講師「社会福祉概論」担当

③平成15年７月：新潟県立看護大学看護学部非常勤講師「法学」（集中講義）担当

◎特色ある点等

学部の授業がいかなる内容であるべきか常々考えさせられている。現時点では拙担当科目を履修することにより，国家Ⅱ種，地方上級程度の公務員試験問題が解けるよう指導することを重視している。また，拙研究室のこの一年間の成果の一端を外部に向けて公表するため，逐次刊行物『高田法学』第３号（ISSN 1347-2402）を発刊した。海外の研究者１名，本学の大学院修了者２名による書き下ろしの論説と解説，学部３年生のゼミ論文（協定校である北京師範大学からの留学生１名を含む。）を収録した。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

**論】**①平成15年３月：「法の時空論へのプロレゴーメナ：日本法哲学史の一断面から」比較法史学会（編）『比較法史研究』第11号，202－241頁，未来社。（刊行の遅れから，昨年度の年次報告書に掲載できなかった。御了承願いたい。）

②平成16年３月：「法学者の大学論：未完成の聖堂の完成に向けて」『帝京短期大学紀要』第13巻，49－66頁。

**発】**①平成15年９月：「第三の道の法理論：尾高朝雄の場合」（単）経済社会学会第39回全国大会，同朋大学。

学会活動への参加状況

上記（発】）の他に，日本法哲学会（平成15年11月，法政大学）などに出席した。

◎特色・強調点等

今年度の研究成果は，論】・発】のどちらも「法律学的領域」のものである。「福祉学的領域」については，平成16年４月からスタートする拙担当の保育士関連科目（社会福祉Ⅰ・Ⅱ）の中，主にⅡ（ケースワークの歴史と理論について講述する予定である。）のための準備に当てた。

河　西　英　通（助教授）

〈教育活動〉

授　業

学部「社会」の授業では，視聴覚教材を用いることに努め，ミニレポートを課して，理解の定着をはかった。

研究指導

学部４年生３名の卒業研究，大学院２年生１名の修士研究を指導し，全員が論文を提出した。

その他の教育活動（学外を含む。）

①本学教職講座「社会（歴史分野）」講師，②出前講座「名曲・ヒット曲でたぐり寄せる戦後日本史」（糸魚川高校）

◎特色ある点等

授業においては受講生と積極的に対話することを心がけ，ともに授業を作り出すことを追求した。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

著】①平成15年３月：『青森県史』資料編・近現代３「大国」と「東北」の中の青森県（共著）青森県

②平成15年３月：『上越市史』通史編５・近代（共著）上越市

③平成15年３月：北東北学構築基礎調査事業報告書『北東北学の構築を目指して』（共著）北東北学検討委員会

論】①平成15年９月：『可能性としての津軽』（単著）社会文学第19号，pp.24-34

発】①平成15年６月：☆『つくられた「東北」像』（単）岩手県一関市博物館・講座「北緯39度の文化学」通算第10回

②平成15年８月：☆『北方地域認識と日本海開放論』（単）アジア民衆史研究会大会（専修大学）

③平成15年８月：☆“Peripheral Regionalism and Nation-state Building”（単）3rd International Convention of Asia Scholars（シンガポール）

④平成15年10月：『高田事件－その記憶のされ方－』（単）第３回新潟県自由民権シンポジウム（上越市）

⑤平成16年２月：☆『分権化と地域文化：ブルターニュと東北の比較から』研究会におけるパネリスト（東京・日仏会館）

他】①平成15年６月：『東北からの近代史』（インタビュー）図書新聞第2635号，pp. 1 - 3

②平成15年12月：『日本史文献事典』（共著）弘文堂，pp.372

③平成15年12月：『資料紹介　福士幸次郎の地方主義について』（単著）青森県史研究第８号，pp.84-94

④平成16年１月：『「東北」は地名か？』（単著）日本歴史第668号，pp.85-87

⑤平成16年３月：『書評・大門正克ほか著『近代社会を生きる』（単著）図書新聞第2669号，p. 5

⑥平成16年３月：『書評・『渡辺信夫歴史論集・近世東北地域史の研究』（単著）日本史研究第499号，pp.101 ～ 107

**共同研究の実施状況**

①新潟県自由民権運動の研究　代表者：横山真一（新潟県立長岡明徳高校教諭）

**学会活動への参加状況**

①平成15年５月24・25日：歴史学研究会大会出席

**◎特色・強調点等**

ニュージーランド・オタゴ大学および弘前大学等の研究者との共同研究「Tsugaru and Otago」は２年目に入り，平成16年度内に日本語版と英語版の論文集が出版される予定である。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①新潟県立文書館運営協議会委員，②上越市史編さん委員，③上越市史専門委員，④青森県史専門委員，⑤新潟県帰国被害者等自立支援プログラム策定会議委員

**下　里　俊　行**（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

○教育方法に関して，学部「世界史研究入門」「総合演習（多文化社会論）」，大学院「国際理解教育特論」で受講者に小レポートを課し，その内容を次の授業に活用する形での対話型授業を行った。「ユーラシア認識論」では柏崎トルコ文化村への巡検をおこない体験学習を重視した。学部「外国史システム専門セミナー」と大学院「外国史システム研究セミナー」では，個別発表と問題発見型の討論に努めた。「ロシア語コミュニケーション」では反復学習・宿題等によるスキルアップを重視した。実践場面分析演習・実践セミナーで履修者作成のポスター教材を電子化し，ＣＤ教材として作成・配布した。

○成績評価面としては，事前に受講者に毎回授業時の小レポートへの評価を40点満点，期末課題レポートへの評価を60点満点とする評価基準を明示し，内容理解と自己表現を重視した成績評価を行った。

○教育の達成状況としては，学部セミナー４年次受講者１名が教員採用となった。

**研究指導**

学部では，学生の研究テーマに応じて海外でのフィールドワークを積極的に支援し語学面での指導を強化した。大学院では，大学院生の研究テーマに応じて，聞き取り調査や留学生の文献読解力の向上を重視して指導した。学部国費留学生に対して和文露訳演習を通して日本文化理解の支援に努めるとともに，日本人学生との討論によりコミュニケーション能力の向上を図った。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

上越高校社会科研究会・定例研究会での講演「ユーラシアの歴史と文化」（11月14日，直江津）

**◎特色ある点等**

教員による海外での国際交流の体験のビデオ映像の教材化や，近隣の外国文化に関するテーマパークでの巡検，留学生との討論により受講者の強い興味・関心を引き出すことができた。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**著】**①平成15年9月：『高等学校でのグローバル教育の新しい試みに関する一考察―衛星電話・テレビ電話による日本とアフガニスタンの高校生の直接対話』上越教育大学研究紀要　第23巻第１号

発】①平成15年９月：『ある画学生の世界風景－アジアとヨーロッパが交錯する現場－』ロシア思想史研究会研究大会（軽井沢）

**共同研究の実施状況**

①19世紀後半のロシアの絵入り新聞にみる東アジア表象にかんする基礎的研究　代表者：下里俊行　科学研究費補助金（基盤Ｃ）

②ロシア思想史の多面的包括的再構築：グローバリズムと民族主義の問題を軸に　代表者：御子柴道夫（千葉大学）　科学研究費補助金（基盤Ｂ）

**学会活動への参加状況**

①９月７日～８日：科研費プロジェクト「ロシア思想史の多面的包括的再構築」研究大会（軽井沢）にて研究発表

②10月25日～26日：ロシア史研究会大会（東京大学）に出席，コメンテーター

③２月14日～15日：ロシア思想史研究会・研究大会（市ヶ谷私学会館）に出席

**在外研究の状況**

①８月12日～８月31日：フィンランド・ヘルシンキ大学およびスウェーデン・ストックホルム大学の各図書館にてロシア思想史に関する文献調査および共同研究

**◎特色・強調点等**

共同研究としてフィンランド等でのロシア思想史に関する文献調査をおこない多元的な地域からの分析視点を獲得することができた。

**松　田　愼　也**（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

学部「宗教学概説」においては，各時間の講義内容と教科書との対応関係をシラバスにおいて明示し予習の便宜を図るとともに，ノートのとりやすい板書に心がけた。さらに，多くの学生にとって初めて触れる分野であるため，基礎知識を収得させることを目標とし，成績評価は多くの小問からなる試験を課して行った。また，その他の学部・大学院講義においては，毎回，講義概要を配布することによって講義内容の密度を高める工夫をした。

**研究指導**

学部においては発表能力を高めることを重点目標とし，まず資料を正しく読みとって要旨をまとめること，次にそれに基づいて報告を行うこと，またそれへ質問に的確に対応できること，そして他者の発表に際しては必ず発言をすることを指導した。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

公開講座「原語で読む原始仏典」を担当（５月から７月まで計10回）。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①上越市文化財調査審議会委員（上越市），②上越市史専門委員（上越市）

志 村　　喬（講　師）

〈教育活動〉

授　業

「初等社会科指導法」では本学内でフィールドワークを実施し，社会科教育・地理教育における体験の役割を実感させた。その他の講義・演習は『社会科教育法研究』（山本友和教授・茨木智志助教授と共編），『「実践セミナーⅡ「社会」」・「実践場面分析演習Ⅱ「社会」」実践報告書』（社会系コース編），『社会科教育特論Ａ実践報告書』に公開した。

研究指導

学部生１名，大学院生２名を指導するとともに，国費教員留学生（ミャンマー）を受け入れ研修報告書 *Comparison Study of History Teaching in Lower Secondary Level between Myanmar and Japan* の作成支援を行った。

その他の教育活動（学外を含む。）

①平成15年４月～平成16年３月：国費教員留学生を受け入れ指導，　②本学教職講座「社会」講師

◎特色ある点等

学部の授業では，学生の体験を重視することで基礎学力の定着をめざした。大学院では国費教員留学生とともに講義・ゼミ・学会参加を行うことで，院生・留学生とも国際的な研究視点を身につけられるよう配慮した。大学院「地理歴史科教育論」では，書評を各自が執筆し著者に送付することで，著者との双方向的な学習を図った。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

**著】**①平成15年11月：『21世紀の地理－新しい地理教育』（共著）　朝倉書店

**論】**①平成15年７月：「新学習指導要領における地図教育をめぐる課題」（単著）　地理教育フォーラム　第４号 pp.41-45。

②平成15年９月：「イギリスにおける地理テキストブック研究の展開」（単著）　上越社会研究　第18号 pp. ３-10

③平成15年９月：「ナショナル・カリキュラム地理」改訂にみる初等・中等地理カリキュラム編成原理－地誌的学習内容の変更を中心に－」（単著）上越教育大学研究紀要　第23巻　第１号　pp.225-243

④平成16年１月：「イギリスにおけるポストモダンと地理教育をめぐる最近の議論」（単著）地理科学　第59巻　第１号　pp.47-58

**発】**①平成15年８月30日：日本地理教育学会大会「イギリス GCSE 試験にみる中等地理教育カリキュラム」

②平成15年10月12日：日本社会科教育学会「ナショナル・カリキュラム地理 (ｲﾝｸﾞﾗﾝﾄﾞ) 改訂における地誌的学習内容の変化」

③平成15年10月26日：☆地理科学学会秋季学術大会シンポジウムパネリスト「英国ナショナル・カリキュラム (2000年版 ) 開発とジオグラフィカル・スキル」

④平成16年３月27 ～ 28日：☆日本地理学会春季学術大会シンポジウム「小・中・高一貫地理カリキュラムの方向性を問う」コメンテーター及び地理教育発表部門座長

**他】**①平成15年12月：日本地理教育学会第53回大会「巡検記録」（単著）　新地理　第51巻　第３号 pp.62-64

共同研究の実施状況

①「地図嫌いの発生要因の解明と推理教室による改善方法の検討」 代表者：志村　喬　科学研究費補助金

学会活動への参加状況

①日本地理教育学会編集委員（平成15年６月～），　②発表以外の学会参加　・６月７日人文地理学会地方特

別例会（準備及び大会発表座長）　・10月４日上越教育大学社会科教育学会　・11月15～16日：人文地理学会大会

**在外研究の状況**

①２月３日～18日：「英国地理教育調査に関する研究交流」（学長裁量）

**◎特色・強調点等**

「ナショナル・カリキュラム地理」の分析と現代英国地理教育思潮の検討から，英国地理教育カリキュラムの特質を具体的に示した。地図学習の改善について現行学習指導要領を基に考察するとともに，発達過程の観点から共同研究を進め，一貫した地理教育カリキュラムへの応用を試みている。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①上越市史現代史部会編集委員（上越市），②６月18～19日：新潟県立教育センター高等学校地理歴史科（地理）講座・巡検講師，③７月29日：全国地理教育研究会全国大会講師・シンポジウムコメンテーター，④10月17日：新潟県立教育センター中学校社会科講座Ⅰ講師

**◎社会への寄与等**

・高校の社会科・地理教員を主とした全国研究会での講師・シンポジウムコメンテーター，新潟県立教育センターでの教員研修講師として，現職教員の研修・実践力向上に寄与した。

**山　縣　耕太郎**（助　手）

**〈教育活動〉**

**授　業**

地理学に関わる実験，演習，調査法の授業補助を行った。地理学実験においてはビジュアル素材を多く提示することを心がけ，コンピュータを利用したＧＩＳ教材を開発し，活用した。

**研究指導**

地理学関係の卒業論文，修士論文研究について研究指導の補助を行った。

**その他の教育活動**

平成15年度４月～９月：新潟大学非常勤講師として「人と自然の地理学」を担当した。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成15年５月：Mountain permafrost on the north slope of Mt.Ushkovsky, Central Kamchatka, Russia. Zeitschrift fur Geomorphologie, Supplement.

②平成15年７月：Comparison between shear stress calculated from hydrological data and critical shear stress estimated from stratigraphy and grain-size distribution of river-bed and river-terrace deposit. Transaction, Japanese Geomolphological Union.

③平成15年12月：ナミブ砂漠，クイセブ川流域の環境変化と植生遷移・植物利用．アジア・アフリカ地域研究

④平成16年３月：石狩沢源流，石狩沢の氷河地形．平成12～14年度科学研究費成果報告書「北海道大雪山地域における第四紀後期の氷河・周氷河環境変遷」

⑤平成16年３月：石狩沢源流域の氷成堆積物．平成12～14年度科学研究費成果報告書「北海道大雪山地域における第四紀後期の氷河・周氷河環境変遷」13-15.

⑥平成16年３月：石狩沢源流，石狩沢の氷河地形．平成12～14年度科学研究費成果報告書「北海道大

雪山地域における第四紀後期の氷河・周氷河環境変遷」

⑦平成16年３月：石狩川最上流部で認められるテフラについて．平成12 ～ 14年度科学研究費成果報告書「北海道大雪山地域における第四紀後期の氷河・周氷河環境変遷」

⑧平成16年3月：大雪山東麓の岩屑なだれ堆積物．平成12 ～ 14年度科学研究費成果報告書「北海道大雪山地域における第四紀後期の氷河・周氷河環境変遷」37-39.

発】①平成15年５月：ナミブ砂漠クイセブ川中流域における古水文環境変動．地球惑星科学関連合同学会

②平成15年５月：ナミブ砂漠クイセブ川流域における最終氷期以降の環境変遷史．日本アフリカ学会

③平成15年８月：水文データより計算した河床剪断応力と河床堆積物限界掃流力の比較．日本地形学連合春季大会

④平成16年３月：ナミブ砂漠クイセブ川最下流部における水文環境と地形変化．日本地理学会春季大会

**共同研究の実施状況**

①北海道十勝地域における開拓期の人為的作用による自然環境への影響に関する検討　代表者：山縣耕太郎（上越教育大学助手）科学研究費補助金．②カムチャッカ半島における完新世古環境変動に関する地生態学的研究　代表者：山縣耕太郎（上越教育大学助手）北海道低温科学研究所共同研究経費．③寒冷陸域における植生，水，土壌の相互作用　代表者：原登志彦（北海道大学教授）北海道低温科学研究所共同研究経費．④日本全土を対象にした火山リスク評価のための被災年代マップの作成　代表者：早川由紀夫（群馬大学教授）．⑤遺跡と史料に残る歴史噴火の火山灰層序学的解明と古環境復元の研究　代表者：杉原重夫（明治大学教授）科学研究費補助金．⑥北海道大雪山地域における第四紀後期の氷河・周氷河環境変遷　代表者：高橋伸幸（北海学園大学教授）科学研究費補助金．⑦トキの野生復帰に向けた，佐渡島における中山間地環境問題の研究と地域環境保全の実践　代表者：本間航介（新潟大学助教授）新潟大学地域貢献プロジェクト計画書

**国際研究プロジェクトへの参加状況**

①カムチャッカ半島における植生動態と環境変動の相互作用過程の解明　代表者：原登志彦（北海道大学教授）科学研究費補助金．②アフリカの半乾燥地域における環境変動と人間活動に関する研究　代表者：水野一晴（京都大学）科学研究費補助金．③北東アジアの人間活動が北太平洋の生物生産に与える影響評価　代表者：成田英器（国立総合地球環境学研究所助教授）総合地球環境学研究所研究プロジェクト

**学会活動への参加状況**

**参加状況**

①平成15年５月26 ～ 29日：地球惑星科学関連合同学会．②平成15年５月31日～６月１日：日本アフリカ学会参加．③平成16年３月27日～ 28日：日本地理学会春季大会参加

**学会役職**

①日本第四紀学会編集委員，②日本第四紀学会 PAGES-PEP・対応委員会委員，③日本学術会議 PAGES 小委員会委員

**◎特色・強調点等**

従来の研究が少ない東アジア寒冷地域と南部アフリカの乾燥地域における古環境変動に関する研究を行っている。また，北海道，アムール川流域における人為作用の自然環境への影響に関する研究を開始した。これらの研究は，現在行われている国際的なプロジェクト（IGBP. PAGES，HITE）による汎地球的な規模での古環境変動の復元，人為活動の影響評価に寄与するものと考えられる。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①上越市史調査執筆委員

【自然系教育講座（数学)】

黒　木　伸　明（教授）

〈教育活動〉

授業

「算数」（１年）:⑴数学教材の見方（数学における多様性・自由性の感得）⑵数学活動の文章表現能力の育成を授業目標とし，この観点から期末試験・毎時間の演習・授業感想を含む演習レポートを含総合評価を行った。

「数学基礎演習Ⅰ」（２年）：数学の基礎的概念（集合・写像・演算・数の公理的的構成等）及び小中学校の指導内容の理解を授業目標とし，この観点から評価を行った。

研究指導

学部：適切な数学観の育成の立場からゼミ形式での指導

大学院修士課程：指導内容を構造的に見ることができるような教材の開発

その他の教育活動

鳴門教育大学大学院「数学授業特別研究」非常勤講師

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

発】①平成15年８月：『教材の構造的な見方について』第53回算数・数学教育研究全国大会（数学教育実践研究会）全体講演

②平成15年10月：『基礎の定着と数学的な思考力の育成をめざして－子どもの気づきを発展させた授業の実践－』（共）第37回全日本聾教育研究大会研究発表

共同研究

①聴覚障とと害生徒の言語表現および論理的思考能力の育成に関する研究代表者：黒木伸明（上越教育大学）科学研究費補助金

学会活動への参加状況

①平成15年度数学教育学会理事，②数学教育学会誌編集委員，③8月４日～５日：ろう教育科学会第45回大会出席，④「８月８日～10日：第53回算数・数学教育研究全国大会（数学教育実践研究会）出席，⑤10月７日～９日：第37回全日本聾教育研究大会出席

田　中　　博（教　授）

〈教育活動〉

授　業

学部の授業「確率論」では，教育現場で取り扱う課題や，教員採用試験に出題される問題等に多くの時間をあてた。これにより，教育現場での確率の考え方を指導するための実践的な力を養った。

研究指導

学部：解析学の主要な分野である関数論の基礎を研究した。解析的な考え方を培い，数学的な深い考え方に触れ，教材の背景となる数学について指導した。

大学院（修士課程）：関数論と複雑系に関する研究を指導した。コンピューターの発達に伴い急速に発展してきた分野なので，将来，新しい教材の開発を行うための実践的な力を養うことができた。

〈研究活動〉

学会活動への参加状況

①平成15年12月12日～14日：教育系大学・学部教官研究集会（奈良教育大学）に出席

〈社会との連携〉

社会的活動状況

第52回北陸四県数学教育研究（上越）大会（平成15年10月30日，31日）の実行委員長を務めた。研究主題は「学ぶ楽しさを味わい，創造的な態度をはぐくむ算数・数学教育」であった。北陸四県の小，中，高，高専，大の算数・数学教育に携わる教員が500名余り参加した。

**溝　上　武　實**（教　授）

〈教育活動〉

授　業

特に授業に対して，その動機付けに留意し彼らの興味と関心の持続に腐心した。

研究指導

連合大学院の学生の指導にあたり，フレックスタイム制を使って指導するために時間のやりくり等の差配，研究の先端を理解させるための指導に腐心した。特に博士課程3年次にあたり，学位論文(A study of generalized metric properties)の作成を完了させた。

その他の教育活動

教職講座で数学分野を担当した。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

**著】**① Encyclopedia of General Topology, Elsevier(North-Holland), 分担執筆，2003

**論】**① On finite-to-one open mapping of M-structures, JP Journal of Geo. Top. 3(2003), 245-255.

**発】**①2002, 6 The resolutions of generalized metric spaces, International Symposium of Topology in Matsue.

学会活動への参加状況

① The Editor of "Questions and Answers of General Topology" (General Topology Symposium, Japan), ② The Editor of JP Journal of Geometry and Topology(India), ③ Reviewer of American Mathematical Society(U.S.A), ④ Reviewer of "Zentralblatt Math" (European Math. Soc.)(2003年10月より開始), ⑤日本数学会秋季総合分科会，年会出席

◎特色・強調点等

Accept された論文（まだ publish されていない）の中で，General Topology 分野で，長年未解決問題として残されてきた問題の一つを解決することができた。

**森　　博**（教　授）

〈教育活動〉

授　業

学部の「基礎微分積分学」において，高等学校で数学Ⅲ，Ｃを履修してこなかった学生にも理解ができるように，講義の内容を確認するように，小テスト，演習を取り入れた。時間内で解答できない学生には，数

日間内でレポートという形で提出するような配慮をした。

**研究指導**

学部学生の幾何学セミナーⅠ，Ⅱにおいて，テキスト「微分方程式とその応用」を用いてセミナー形式で行った。微分方程式の解法だけでなく，物理的な意味等背景について理解を深めるように工夫した。

大学院の幾何学研究セミナーⅠ，Ⅱにおいて，空間内の図形についてシュタイナー対称化，ストークスの曲面，平均曲率一定の曲面等の，変分問題と密接に関連する幾何学的に美しい性質についてセミナー形式で理解を深めた。

**その他の教育活動**

教員採用試験の直前講座として４年次生，院２年次生を対象に試験直前の６月に実施した。前年度の北陸３県の実施問題を解答し問題の背景についても解説した。

**〈研究活動〉**

**共同研究の実施状況**

①高等数学から「教師に必要な数学」への橋渡し教材の開発研究　代表者：田中　博（上越教育大学教授）平成15年度上越教育大学研究プロジェクト

**学会活動への参加状況**

①９月24日～26日：2003年日本数学会秋季総合分科会に出席，②３月28日～30日：2004年日本数学会年会に出席

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①上越数学研究会（平成15年度冬期講座，平成16年１月10日開催）において「平面上の最速降下線について」のタイトルで講演。上越地域小・中学校教員約30名参加。

**岩　﨑　　浩**（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

【観点１】教育方法及び成績評価面での取組

○授業形態，学習（研究）指導法等の教育方法に関する取組状況

数学科指導法の授業では，研究成果の一部を教材として利用することを試みた。特に，その基となるデータである授業のビデオ記録を適宜活用することにより，現場の実践との関係を深める工夫を行った。また，数学教材開発論においては，開発した教材を如何に実現するかに関して，授業のビデオ記録と同時に，その筆記録も活用し，教師の発問を中心にしてその構造化を試み，ベテランの教師がどのように教材を授業において展開しているか，各場面における教師の意思決定の様子や教授行為の特徴を顕在化する工夫を行った。数学的経験と学習過程では，教育実習前ということに配慮し，実践場面というよりもむしろ教材の面白さを自ら体験できるような教材を工夫している。今年度は，その新しい題材として無理数を取り上げ，連分数を伴う具体的な計算や作図などの活動を取り入れながら，その表現の美しさ，その歴史的・哲学的意味について講義し，学生たちが学校で扱われる教材をみる視点を広げることを試みた。確率論と探究過程では，実験を伴う活動を取り入れ，確率の基本的な概念の意味と意義を現実事象とのつながりにおいて理解できるように工夫した。

○成績評価法に関する取組状況

今年度は特に，レポートの課題に焦点をあて，学生たちが何をどの程度まで学んだかを評価するために，

授業での学生たちの具体的な活動や取組が明確になるようレポート課題を工夫し，学生たちの達成状況をより的確に把握するとともに今後の授業改善に生かすことが出来るように努めた。

【観点２】教育の達成状況

○進学や就職などの卒業（修了）後の進路の状況から判断した取組状況

担当した大学院生3名は全て中学校の現職教員であった。3名とも現場での実践的問題やこだわりを追求し，その成果を修士論文として提出し，共に現職復帰を果たした。学部学生は2名で，そのうち1名は新潟県の教員採用試験に合格し，新潟県の小学校教諭として採用されることとなった。残り1名は教職以外の進路(会計士)を希望し，その準備をすることとなった。

**研究指導**

【観点１】学部

学部においては，身近にいる大学院生の研究における具体的事例や他の論文の具体的な実践場面を例として，講読している文献の著者の主張や学生各自の問題意識をより具体的に捉えることを促した。近隣で開催される授業研究会に積極的に参加することを促し，個々の授業場面についてディスカッションする機会を増やした。卒業論文の口頭発表を大学院生を交えて実施した。

また，学部学生一人一人の教育実習における研究授業をビデオで記録し，後にそれを視聴し，それについてディスカッションする機会を設けた。また，教師の教授行為だけでなく，その授業中の一人の子どもの活動を追いかけたビデオ記録も行い，子どもの立場に立った臨床的な指導力の向上に役立てたる工夫を行った。

【観点２】大学院

大学院では，院生の臨床的実践力向上のために，院生一人一人の「こだわり」に則して，特に，院生の実践的研究における，臨床的インタビュー及びそのプロトコル，フィールドノートに現れる事象の解釈・分析を通して，児童・生徒に寄り添った算数・数学の指導のあり方を具体的に捉えることを試みた。また，自らの研究の視点を広げたり修正したりする契機として，さらに第３者から評価される機会として数学教育関係の学会や研究会への参加発表を促進した。結果として，平成15年６月28日～29日に開催された全国数学教育学会 第18回研究発表会（広島大学）にＭ１生１名Ｍ２生２名が出席し，平成15年10月18日～19日に開催された日本数学教育学会 第36回数学教育論文発表会（札幌）では，Ｍ１生1名，Ｍ２生３名が出席し，Ｍ２生３名全員が論文発表を行った。平成16年１月31日～２月１日に開催された：全国数学教育学会 第19回研究発表会（愛知教育大学）には，Ｍ１生１名が参加した。その他，平成15年７月５日～６日に学外の研究者を招いて修士論文中間発表（妙高）を開催し，平成16年３月15日～16日には，Ｍ１生を中心として，主に筑波大学の教官，大学院生（その他，東京理科大学）と合同で修士論文の構想発表を行った。

**その他の教育活動**

①平成15年 5月：北陸四県数学教育研究大会に向けての校内研修（春日小学校）において指導者として参画し，講義および指導助言を行った。

②平成15年７月：「長岡の人材教育」中学校数学アカデミー（長岡市教育委員会）の講師を務めた。

③平成15年７月：学校図書館司書教諭講習（学習指導と学校図書館）の講師を務めた。

④平成15年８月：第85回全国算数・数学教育研究（愛知）大会 小学校部会において指導助言を行った。

⑤平成15年12月：本学教職講座の講師として『算数科教育』を担当した。

**◎特色ある点等**

講義や研究指導と学外で開催される授業研究会や特に大学院生の研究指導に外部評価を積極的に取り入れている点。特に，研究授業やその研究協議会に学部生，大学院生とともに参加し，その場で個々の授業場面につ

いてコメントしたり，ディスカッションするようにしている。また，その際，ビデオ等に記録した研究授業の中から典型的な場面を，その筆記録とともに，授業で取り上げるなどして，臨床的な実践力を目指した指導を心がけている。また，特に大学院生には，できる限り学会や研究会にも参加・発表することを促し，他の研究者との相互交流を図り，それらを外部からの評価として積極的に研究指導に生かすようにしている。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

**著】**①平成15年11月：√2の無理性の理解を図る Do Math ――問題の発展的展開と紙を折る操作活動によるアプローチ――」(単著), 上越教育研究会Σ会著『今こそ　Do Math!』第Ⅰ部 理論編　第４章, 35-44頁

**発】**①平成15年６月：「〈教室〉を見据えた協同的数学教材開発研究の構想」，シンポジウム：「21世紀における数学教育学研究の課題と展望」全国数学教育学会 第18回研究発表会.

②平成16年１月：「√2の「無理性」の理解を図る教材開発研究：問題の発展的展開と紙を折る操作活動によるアプローチ」，全国数学教育学会　第19回研究発表会.

共同研究の実施状況

①子どもの学びの過程に対応する基礎・基本学習カリキュラムと教育実践の総合的研究　代表者：　西野範夫（上越教育大学教授），科学研究費補助金，②高校数学から「教師に必要な数学」への橋渡し教材の開発研究」 代表者：田中博（上越教育大学教授），上越教育大学「研究プロジェクト[特定研究]」経費

学会活動への参加状況

①日本数学教育学会出版部幹事，②平成15年6月28日～29日：全国数学教育学会 第18回研究発表会出席，③平成15年10月18日～19日：日本数学教育学会 第36回数学教育論文発表会出席，④平成16年1月31日～2月1日：全国数学教育学会 第19回研究発表会出席

◎特色・強調点等

今年度は，中学校の平方根の単元をより魅力あるものへ改善すべく，現場の教員と協同で教育実践研究を行った。この研究は，理論と実践との実質的な相互作用的サイクルを展開しながら教室で実現可能な具体的な教材とその指導法を開発する点に特色がある：数学認識論，特に，メタ知識を視点として，現行の数学の授業を改善するための新しい授業実践を実践者と協同でデザインし，教室で実践する。そして，そこで起こっていることを，主に，マイクロエスノグラフィーの方法論によって記述する。特に，数学の授業における相互作用と学習との間の関係についての知見を教育実践へとフィードバックし，教育実践の更なる改善を図るのである。その成果として，中学生に無理性についての本質的な理解を図ることが可能であることとその具体的な指導法：問題の発展的展開と紙を折る操作活動によるアプローチを開発した。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①新算数教育研究会(東洋館)　理事・コメンテーター，②日本数学教育学会第85回全国算数・数学教育研究（愛知）大会 小学校部会の指導助言者，③第52回北陸四県数学教育研究（上越）大会準備委員会委員，④『教育実践研究』第14集（上越教育大学学校教育総合研究センター）における[算数・数学]部門の査読及び審査委員，⑤新潟大学と上越教育大学との教員養成・現職教員研修の在り方に関する連携協議会 第2部会（教育支援に関する部会）委員

中　川　　仁（助教授）

〈教育活動〉

授　業

基礎線形代数学，線形代数学，代数学Ａでは，具体例を多く挙げて解説することによって，線形代数，環論・体論に関する抽象的内容の理解を高める工夫を行った。

また，演習問題を解いてレポート提出させることによって，計算力の養成を目指した。代数学と探求過程では，毎回授業の後半に講義内容に関する作業的な課題を与えることによって，興味を持たせるようにした。

研究指導

修士2年の大学院生2名の研究セミナー指導を行った。修士1年の大学院生1名の研究セミナー指導を行った。学部4年生2名の専門セミナー指導を行った。学部3年生2名の専門セミナー指導を行った。

〈研究活動〉

学会活動への参加状況

①3月24日～26日：日本数学会年会出席，②9月24日～26日：日本数学会総合分科会出席

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①上越地区高等学校数学研究会顧問

髙　橋　　等（講　師）

〈教育活動〉

授　業

学部，大学院の授業ともシラバスに授業の方針を記載し，最初の授業のオリエンテーションで授業の日程や内容，評価の方法を示した。学部の授業では，必要に応じ実践でのトピックスを取り上げ，教材への視点と子どもへの視点の双方を扱うようにした。学部，大学院の授業ともできる限り学生が活動する時間を設け，学生の発言を取り上げ，議論の機会を設けた。成績評価にあたっては，期末の筆記試験のみならずレポートの内容を加味し，多角的に評価した。

研究指導

学部生には，数学教育の基礎理論に関する議論の機会を設けるとともに，算数，中学校数学，及び高校数学における実践的課題の明確化と解決に向けての方策の探究をさせ，教育実習を振り返る機会を設けた。修士課程院生には，実践事例を踏襲しつつ，数学教育の基礎理論を国内外の文献から読み取り，練り上げる機会を設けた。さらに，子どもの活動の見取りを練習するとともに，基礎理論と実践例とを結び付け理論枠組みを仕上げるための指導を行った。

◎特色ある点等

教員としての教養と実践力とを高めることに配慮した。授業で扱う内容が基礎的な知識である場合も，実践例を取り上げながらできる限り子どもの活動と指導とに関連づけた。その関連づけを通して，学生や院生の発言を引き出し，学生や院生の積極的な活動を促すようにした。学生や院生が同じ授業に参加し，その参加を通して学生と院生とが交流し，議論する機会を設けた。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

**著】**①平成15年10月：『数学的知識を創発させる教材開発』今こそ Do Mathl( 共著 )，Σ会出版，45-54.

**論】**①平成15年３月：『米国における最近の数学教育改革の方向：1989年，1991年，1995年のスタンダーズの考察から』（単著）上越数学教育学研究，19，1-16。

**業】**①平成15年８月：『算数・数学教育実践に役に立つ研究とは』（単著）明治図書 教育科学数学教育，99-103。

**発】**①平成15年10月：『数学的活動の意義に関する研究：響き合いと創発とを視点として』（単）第36回数学教育論文発表会研究発表。

**共同研究の実施状況**

①平成15年度上越教育大学研究プロジェクト『高校数学から「教師に必要な数学」への橋渡し教材の開発研究』（代表 田中博）。

**学会活動への参加状況**

①平成15年10月18日～19日：第36回数学教育論文発表会。

**◎特色・強調点等**

哲学的な考察からはじめ，人間の数学的活動を解釈し，新たな観点を導入している。この分野の研究としては先駆的で，独創性が高いと考える。さらに，実践につながる視点を設けた。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①平成14年４月から平成15年３月：上越地区の算数・数学教育研究会であるΣ会への参加（毎月１回から２回）

**岡 崎 正 和**（助 手）

**〈教育活動〉**

**授 業**

数学教育学特論演習では，海外の最先端の論文を皆で議論しながら講読し，内容の理解をはかる上で日本の学校の現状との比較検討を議論の中に取り入れる工夫をした。数学的経験と学習過程では，学生の活動を活発にするために，具体的な作業や日常的な話題を取り入れる工夫を行った。また，計算機数学演習では，学生の考え方に沿ってプログラムが完成するように助言をする努力を行った。

**研究指導**

数学教育学の修士論文作成において，文献紹介やデータの分析の仕方に関して助言を行った。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**著】**①平成15年10月：『算数と数学を架橋する図形の学習指導』（共著） 上越数学教育研究会Σ会，今こそDo Math！(pp.55-64). 上越数学教育研究会

**論】**①平成15年６月：『全体論的視座からの正負の数の加減の単元構成に関する研究－教授学的状況論と代数的思考のサイクルの視点から－』（単著） 全国数学教育学会，数学教育学研究 第9巻 pp.1-13

②平成15年７月：『Characteristics of 5th graders' logical development through learning division with decimals』（単著） N. Pateman, B. J. Dougherty, and J. Zilliox (eds.). Proceedings of the 2003 Joint Meeting of PME and PMENA Vol.3 pp. 413-419

③平成15年10月：『算数の式から代数の式への転換を促す正負の数の乗除の単元の再構成に関する研究』（共著） 日本数学教育学会，第36回数学教育論文発表会論文集，pp.157-162

**発】**①平成15年10月：『図形領域における算数から数学への移行過程について－図形の相互関係から図形の

作図への系統性－』 日本数学教育学会，第36回数学教育論文発表会,「課題別分科会」発表

**共同研究の実施状況**

①全体論の立場からの中学校数学の導入過程の構成に関する研究　代表者：岡崎正和（上越教育大学助手）科学研究費補助金，②算数を数学に接続する一般化に基づく教授単元の計画・実施・評価に関する開発研究　代表者：岩崎秀樹（広島大学教授）科学研究費補助金，③高校数学から「教師に必要な数学」への橋渡し教材の開発研究　代表者：田中博（上越教育大学教授）上越教育大学研究プロジェクト経費

**学会活動への参加状況**

①６月28日～ 29日：全国数学教育学会第18回研究発表会出席，②７月13日～ 18日：2003 Joint Meeting of PME and PME-NA 出席，③10月18 ～ 19日：日本数学教育学会第36回数学教育論文発表会出席，④第52回北陸四県数学教育研究（上越）大会出席，⑤１月31 ～２月１日：全国数学教育学会第19回研究発表会出席

**国内外の学術賞の受賞状況**

①１月31日：学会奨励賞（全国数学教育学会）（受賞論文）『全体論的視座からの正負の数の加減の単元構成に関する研究－教授学的状況論と代数的思考のサイクルの視点から－』（全国数学教育学会，数学教育学研究第９巻所収）

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①８月：名古屋市教育研究員の研究指導，②８月：日本数学教育学会第85回全国算数数学教育研究大会で指導助言者，③２月：平成16年尚数会研究発表会で指導助言者，③「教育実践研究」の査読者

**【自然系教育講座（理科)】**

**小　林　辰　至**（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

学部の授業では，小中学校で理科を担当する教諭として必要な実践的指導力の基礎となりうる知識や技能の確実な定着を目指した。評価については，レポート等の提出物のみならず，授業中の活動状況や模擬授業の内容等も加味して総合的に行った。大学院の授業では，より高度な教育実践力及び教材や教育課程開発能力の修得を目指した。評価は，開発した教材や教育課程をはじめ，討論等を総合的に判断して行った。

**研究指導**

学部については，総合的な学習の時間の教育課程開発能力を習得させるために，水族館等の社会教育施設との協同で教育プログラム開発の研究指導を行っている。大学院については，現職教員が長年の教育経験から抱いている問題意識が，実証的な研究として進められるよう，日々の議論を通して研究の支援を行っている。

**◎特色ある点等**

独立行政法人国際協力機構（ＪＩＣＡ）のガーナ小中学校理数科教育改善プロジェクト国内委員をつとめている。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**著】**①平成15年９月：『CD-ROM 版中学校理科教育実践講座　第１巻「理科カリキュラムと授業づくり」』（共著）ニチブン

②平成15年９月：『CD-ROM 版中学校理科教育実践講座　第８巻「教材・教具の開発と利用」』（共著）

ニチブン

**論】**①平成15年７月：『電子レンジを用いた「たたら製鉄」再現実験における課題解決の過程及びその教育効果－工業科「課題研究」における実践を通して－』（共著） 理科の教育，第52巻第８号

②平成15年９月：『光の屈折の原因を探るシャーレレンズの試み』（共著） 物理教育，51巻３号

③平成15年12月：『アミラーゼの酵素作用の検出を目的とした試験紙の開発』（共著） 理科の教育，第53巻第１号

④平成16年３月：『「遺伝子組換え技術の必要性」を考える「科学技術科」の試み』（共著） 理科の教育，第53巻第４号

⑤平成16年３月：『多様化する高等学校における「理科」についての考察－科目「総合理科」と定時制・通信制課程の高校生との関わりから－（共著） 科学教育研究，第28巻第1号

**業】**①平成16年３月：『文部省検定中学校理科教科書』（共著） 啓林館

**共同研究の実施状況**

①パートナーシップを重視した教員研修での自然体験プログラムの開発とその評価　代表者：藤岡達也（上越教育大学教授） 科学研究費補助金

**学会活動への参加状況**

①５月30日～６月１日：日本環境教育学会出席，②７月24日～26日：日本科学教育学会出席，③１月24日～25日：日本生物教育学会出席，④日本生物教育学会「生物教育」編集委員

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①新潟県学力向上検討会議委員（新潟県），②国際数学・理科教育動向調査（TIMSS2003）の国内専門委員（国立教育政策研究所），③関東甲信越地区小学校理科教育研究会指導者

**髙津戸　　秀**（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

学部の講義では，昨年度に引き続き，練習問題を取り入れるなど，内容の理解を深める工夫を継続して行った。

**研究指導**

修論生１名及び卒論生１名の研究指導を行った。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**① A Dwarf Mutant Strain of *Pharbitis nil*, Uzukobito (*kobito*), Has Defective Brassinosteroid Biosynthesis, *The Plant Journal* (Blackwell Publishing Ltd., The United Kingdom), (2003) **36**, 401-410 ( 共著 ).

② A Semidwarf Phenotype of Barley uzu Results from a Nucleotide Substitution in the Gene Encoding Putative Brassinosteroid Receptor, *Plant Physiology* (American Society of Plant Biologists), (2003) **133**, 1209-1219 ( 共著 ).

③ A Rice Brassinosteroid-Deficient Mutant, *ebisu dwarf (d2)*, Is Caused by a Loss of Function of a New Member of Cytochrome P450, *The Plant Cell* (American Society of Plant Biologists), (2003) **15**, 2900-2910 ( 共著 ).

④ CYP72B1 Inactivates Brassinosteroid Hormones: An Intersection between Photomorphogenesis

and Plant Steroid Signal Transduction, *Plant Physiology* (American Society of Plant Biologists), (2003) **133**, 1643-1653 ( 共著 ).

⑤ Cytochrome P450-Catalyzed Brassinosteroid Pathway Activation through Synthesis of Castasterone and Brassinolide in *Phaseolus vulgaris, Phytochemistry* (Elsevier Ltd.), (2004) **65**, 679-689 ( 共著 ).

⑥ 顔の表面から分泌される脂質中に含まれるコレステロールの検出・単離実験，化学と教育 ( 日本化学会 ), (2003) **51**(8), 508-509 ( 共著 ).

⑦ 接体験を通して酸化還元反応を学習することを目指した授業事例－電池教材を中核として－，科学教育研究 ( 日本科学教育学会 ), (2003) **27** (3), 203-211 ( 共著 ).

⑧ 光の屈折の原因を探るシャーレレンズの試み，物理教育 ( 日本物理教育学会 ), (2003) **51**(3), 193-197 ( 共著 ).

⑨ 直接体験を通して温度による物質の体積変化を学ぶことを目指した授業事例－空気温度計の作製を中核として－，科学教育研究 ( 日本科学教育学会 ), (2003) **27** (5), 345-353 ( 共著 ).

⑩他本学研究紀要１編。

**発】**学会発表14件（全て共同発表）省略。

**◎特色・強調点等**

「植物生長ホルモン，ブラシノステロイドに関する植物科学的研究」を，国内および海外の分子生物学者，植物生理学者，生化学者及び植物化学者との共同研究として継続して行っている。本年度の共同研究成果は，グローバルスタンダードの観点からの評価が確立している海外の学術誌に５編の論文として掲載された。また，「理科の教材開発およびその教育実践」について学校現場の教員との共同研究を行っている。本年度の共同研究成果として４編の論文が国内の学会誌に掲載された。

**中　川　清　隆**（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

【観点１】教育方法及び成績評価面での取組

○授業形態，学習（研究）指導法等の教育方法に関する取組状況

昨年度に引き続き学部を対象にして実施している「地学」および「気象学」の講義ノートをＨＰに掲示して，学生の学習を手助けとなるよう工夫するとともに，これらの講義に出てくる気象学的な計算をするための Java script 言語によるページを開設し，学生の理解の一助としている。少しずつ増ページしている。また，講義における説明において，微分方程式等による記載だけでなく，幾何学的な手法で説明する方法の模索を継続している。

○成績評価法に関する取組状況

「地学」および「気象学」の学習のためには，基礎的な概念の理解と基礎的な計算能力の習得が不可欠であるので，昨年同様に，これらの観点から評価できる試験問題を作成した。また，講義ノートをＨＰに掲載することにより，授業計画および目的を，シラバスの記載以上に具体的に明確にすることにより，達成度の評価基準が明確になるよう努力した。

【観点２】教育の達成状況

○進学や就職などの卒業（修了）後の進路の状況から判断した取組状況

大学院および学部ともに最高学年の学生が所属しなかった。

**研究指導**

【観点１】学　部

指導を受ける最高学年学生が所属しなかった。

【観点２】大学院

指導を受ける最高学年学生が所属しなかった。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

◎平成15年12月５日～６日東北大学大学院理学研究科の集中講義「自然地理学特別講義」の非常勤講師を務めた。

◎平成15年12月25日～28日金沢大学大学院教育学研究科の集中講義「気象学特論」の非常勤講師を務めた。

◎平成15年10月７日（火）～平成16年2月17日（火）の第１限，新潟県立看護大学の「環境生態学」の非常勤講師を務めた。

◎信州大学と上越教育大学の連携事業の一環として，下山紀夫長野地方気象台長，榊原保志信州大学教育学部助教授，熊木徹上越教育大学附属中学校教諭，山田徹上越教育大学附属中学校教諭とともに，平成16年３月22日（月），上越教育大学附属中学校において，独自に開発した気象情報画像ビュアーを用いた「前線の学習」の研究授業を行い，研究授業の成果を平成16年度日本地学教育学会において発表することとした。

◎平成15年７月５日（土），青海町総合文化会館「きらら青海」で開催された県立生涯学習推進センター主催の「にいがた連携公開講座」において，講師を務めた。

**◎特色ある点等**

気象現象をテーマにして，地球科学的な視点・手法により，自然観を体得させることに努力を傾注している。その努力の一つとして，榊原保志信州大学助教授および下山紀夫長野地方気象台長とともに任意団体「気象情報を教育に利用する会」を設立し，自作ソフト「気象情報画像の巡回･保存と観察ソフト」の普及活動を展開している。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**著】**①平成15年９月：『環境気候学 』（共）東京大学出版会

**発】**①平成15年５月：『気象教育支援のためのインターネット上気象画像の自動取込・観察ソフト』（共）日本気象学会2003年度春季大会発表

②平成15年５月：『海風侵入時刻の変動と気象条件の統計的関係』（共）日本気象学会2003年度春季大会発表

③平成15年８月：『天体日周運動に関するモデル教具の開発』（共）日本地学教育学会2003年度全国大会発表

④平成15年８月：『気象画像自動取込・観察ソフトの開発と「気象情報を教育に利用する会」の設立』（共）日本地学教育学会2003年度全国大会発表

⑤平成15年10月：『気象情報を教育に利用する会の活動状況』（共）日本地理学会2003年度秋季学術大会発表

⑥平成16年３月：『2003年気象情報画像データベース』（共）日本地理学会2004年度春季学術大会発表

**共同研究（幼，小，中，高等学校及び特殊教育諸学校教員との共同研究を含む）の実施状況**

①科学技術振興事業団戦略的基礎研究「メソ対流系の構造と発生・発達のメカニズムの解明」 ②科学技術振興事業団戦略的基礎研究「北東アジア植生変遷域の水循環と生物・大気圏の相互作用の解明」

学会活動への参加状況

①平成15年５月21日(水)～24日(土)：日本気象学会 2003年度春季大会出席　②平成15年８月１日（金）～４日（月）：日本地学教育学会第57回全国大会出席　③平成15年10月12日(日)～15日(水)：日本気象学会 2003年度秋季大会出席　④平成16年３月27日（土）～３月28日（日）：日本地理学会2004年度春季学術大会出席

西　山　保　子（教　授）

〈教育活動〉

授　業

昨年度に引き続き授業内容の見直しを行い，学生が積極的に参加できる授業を行うように努めた．また，「体験学習（科学の広場）」では，環境教育の一環として下水道センターや原子力発電所の見学を行っているが，施設見学の効果を高めるため本年度も放射線についての実験を取り入れたところ，多くの活発な意見や質問があった。

研究指導

学部４年生１人。教員志望で，学生の希望により実験に重点をおいた力学教材の研究を指導した。残念ながら教員採用試験には合格しなかったが，本学理科の大学院生として再挑戦に向けて頑張っている。

◎特色ある点等

高等学校での物理履修者が１割未満であること，履修者も事物や現象についての体験が不足していることなどを考慮し，演習や体験を多くして，自然科学の基礎的な考え方を身につけられるよう配慮している。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

論】①平成15年9月：『光の屈折の原因を探るシャーレレンズの試み』（共著）物理教育 第51巻第3号　pp.193-195.

②平成15年9月：『有機化学実験：グリニャール試薬を用いた求核置換反応によるコレステロールの合成』（共著）上越教育大学研究紀要（上越教育大学）第23巻第1号　pp.261-266.

共同研究（幼，小，中，高等学校及び特殊教育諸学校教員との共同研究を含む）の実施状況

①黒鉛炉表面の分光学的研究（今井昭二徳島大学助教授），②理科教材の開発研究（小池守長野県教諭）

学会活動への参加状況

①８月９日～10日：日本物理教育学会長岡大会において新潟支部副支部長として運営に参加．②12月６日：日本物理学会新潟支部例会に出席．③12月20日：日本物理教育学会講演会に出席．④３月27日～30日：日本物理学会第59回年次大会出席.

◎特色・強調点等

教育現場との共同研究により，実験教材の開発，評価が可能となった。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①リージョンプラザ上越運営協議会委員（上越市），②頸城村環境審議会委員（頸城村），③上越市環境審議会委員（上越市），④上越市バイオマス利活用推進検討委員会委員，⑤「環境科学セミナー」を共催（９月30日～10月１日）.

◎社会への寄与等

・運営協議会委員として，新潟県立上越科学博物館を含む施設の運営に貢献した。また，環境審議会委員とし

て頸城村および上越市の環境政策の形成に，バイオマス利活用推進検討委員会委員として上越市の新エネルギー政策の形成に積極的にかかわった。さらに，「環境科学セミナー」では，大学院生・一般人を対象として，放射線についての基礎知識と教材についての支援を行った。

### 室　谷　利　夫（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

学部の「物理学」では，内容を厳選し，また教壇でできる実験を取り入れ，高校で物理を履修してこなかった学生にも理解できる内容になるよう工夫した。学生が事前に行う準備学習のために，授業時間の終わりに，次の授業時間で取り扱う内容を説明し，資料等は事前に配布するようにした。また，学習内容の理解を深め，しっかりと定着させるためには自らの力で演習問題を解くことの重要性を説明し，演習問題を複数回レポート提出させた。レポートは添削して戻し，一人一人の目標が分かるようにすると共に，評価の基準も明らかにした。

**研究指導**

学部学生の卒業論文テーマとして，身近な物理学の課題である「卓球ボールによる水平反発係数の測定」をとりあげ，将来学生が教員になった時のことを想定し，教員としての実践力が身につくよう，自分の頭で考え，発見し，分析して，解決する方法を見出す一連のプロセスを繰り返しトレーニングすることによって，必要な力が養成されるよう工夫した。また，実践セミナー，実践場面分析演習では，「学習指導要領改訂による指導困難単元の問題点と対策―物理分野を中心に」に関して指導した。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

教員採用試験の直前講座として4年次生，院2年次生を対象に教職試験直前の６月に実施した。本学の学生は理科，中でも物理・化学を苦手とする学生が多いとの指摘があり，物理は若干多い３コマを担当し，前年度の各県の実施問題を中心に直前対策を実施した。

**〈研究活動〉**

**学会活動への参加状況**

①３月28日～31日：第51回応用物理学関係連合講演会出席

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）の技術委員として，「革新的次世代太陽光発電システム技術研究開発」に係る研究成果の評価を行っている。

### 森　川　鐵　朗（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

初等教育教員には，現場の多様な要請に応えるため科学的素養が必須である。理科の授業では，科学的素養の質的向上をめざして，最新の研究成果を取り入れた。

**研究指導**

現職教員向けの指導では，現場で使える指導案を作成し考察した。

**〈研究活動〉**

今年度は科学教育に関連しては，物理量としての「物質量」の指導法について研究開発をすすめた。

研究成果の発表状況

論】①2003年：Determination of Quasi-Single Bonds and Local Delocalization in Fully Arenoid Hydrocarbons (共著), Polycyclic Aromatic Compounds (ISSN 1040-6638), vol. 23, no. 3, pp. 307-313 (Taylor and Francis, Inc., Philadelphia)

②2003年：Local Confinement of Unpaired Electrons in non-Kekulean Benzenoid Hydrocarbons (共著), Chemical Physics Letters (ISSN 0009-2614), vol. 375, no. 1-2, pp. 191-195 (Elsevier Science B.V., Amsterdam)

③2003年：物質量とモルの授業計画 ― 方法と展開 ― について (共著), 上越教育大学研究紀要, 第22巻第2号, pp. 637-651

④2003年：物質量とモルの指導案 ― 考え方と授業実践 ― の研究 (共著), 上越教育大学研究紀要, 第23巻第1号, pp. 245-260

⑤2003年：電流とイオン流との間の「類推」の実験学習 (共著), 化学と教育 (ISSN 0386-2151), 第51巻第9号, pp. 569-570 (日本化学会)

⑥2003年：「物質量とモルは物理量である」について (単著), 化学と教育 (ISSN 0386-2151), 第51巻第2号, pp. 142-143 (日本化学会)

⑦2003年：Teaching Specification of Elementary Entities in Amount of Substance and the Mole (共著), KHIMIYA (ISSN 0861-9255), vol. 12, no. 2, pp. 107-110 (The Ministry of Education and Science, Bulgaria)

⑧2003年：Partial Structures of C60 Responsible for Its Lowest Electronic Absorption Band: Corannulene or Triphenylene? (共　著), Internet Electronic Journal of Molecular Design (ISSN 1538-6414), vol. 2, no. 2, pp. 86-95 (BioChem Press, Texas)

⑨2003年：図の同値関係を用いる「理解の程度」の測定―乾電池の「並列つなぎ」を例にとって ― (共著), 科学教育研究 (ISSN 0386-4553), 第27巻第5号 pp. 311-317 (日本科学教育学会)

⑩2003年：Analogous Odd-Even Parities in Mathematics and Chemistry (共　著), KHIMIYA (ISSN 0861-9255), vol. 12, no. 6, pp. 445-450 (The Ministry of Education and Science, Bulgaria)

発】①2003年：スパイラルアルゴリズムから得られる数列からシュレーゲルダイアグラムを作る方法 (共), 日本コンピュータ化学会 2003 春季年会 (北とぴあ, 東京都北区)

②2003年：コンシールド－ノンケクレアン－ベンゼノイドについての一考察 (共), 日本コンピュータ化学会 2003 秋季年会 (広島大学，東広島キャンパス，東広島市)

◎特色・強調点等

科学教育研究成果を海外英文雑誌に投稿した。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①第19回高校教育研究協議会「確かな学力の向上をめざして ― 個に応じた指導とその評価の試み」分科会教科「理科」発表研究（金沢大学教育学部付属高等学校，平成15年10月17日），②電子雑誌「化学教育ジャーナル (CEJ)」編集長（日本コンピュータ化学会）

天　野　和　孝（助教授）

〈教育活動〉

授　業

授業前に日程を含めた授業計画表を作成し，学部生，大学院に配付した。その際に到達目標についても明示した。地圏環境進化学関係の授業では，これまでの研究成果も資料として使用した。また，大学院の地学教材の授業では「地学教育」誌に掲載された化石教材に関する論文を用いている。

その他の教育活動（学外を含む。）

信州大学教育学部の非常勤講師を務めた。また，地域貢献事業の一環として市内の公立中学校から依頼され，上越市の大地の生い立ちについて講義した。

◎特色ある点等

体験学習や博物館資料論など専門科目以外の科目も含めて，日程を含めた授業計画を配付し，授業の目的を明示した。また，毎時間プリントや現物資料を用意し，視聴覚機器を用いて授業を行った。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

論】①平成15年５月：秋田県北部に分布する上部鮮新統～最下部更新統の石灰質ナンノ化石層序－後期鮮新世古海洋変動と関連して－（共著）　地質学雑誌 , 第109巻5号 ,pp.280-292.

② 平 成15年 ９ 月：Evolutionary adaptation and geographic spread of the Cenozoic buccinid genus *Lirabuccinum* in the north Pacific （共著）. Journal of Paleontology, vol. 77, no. 5, pp.863-872.

③平成16年１月：New fossil and Recent *Limopsis* (Bivalvia) from the northwestern Pacific （共著）. The Veliger (California Malacozoological Society), vol. 47, no. 1, pp.13-20.

④平成16年１月：Biogeography and the Pleistocene extinction of neogastropods in the Japan Sea （単著 ). Palaeogeography, Palaeoclimatology, Palaeoecology, vol. 202, no.3/4, pp.245-252.

発】①平成15年６月：富山県八尾町の中新統東別所層産軟体動物化石 . 日本古生物学会2003年年会（共）.

②平成15年８月：あの山に眠る大地からのメッセージ　－高田平野西側のグループ別野外調査と学びの共有化－　日本地学教育学会第57回全国大会 ( 共 ).

③平成15年８月：小中学校で使用する野外観察ルートの開発－上越地域を例として－. 日本地学教育学会第57回全国大会 ( 共 ).

④平成15年９月：北太平洋産化石および現生 *Limopsis* 属（二枚貝）の新種 . 日本地質学会第110年学術大会（共）.

⑤平成16年１月：大桑・万願寺動物群中の *Glycymeris* 属２種に見られる穿孔捕食痕 . 日本古生物学会第153回例会 .

⑥シロウリガイ属化石に見られる穿孔捕食痕 . 日本貝類学会創立75周年記念（平成16年度）大会 .

学会活動への参加状況

①６月27日～６月29日：日本古生物学会2003年年会出席，　②８月１日～８月４日：日本地学教育学会第57回全国大会出席（座長），　③９月19日～９月21日：日本地質学会第110年学術大会出席，　④１月24日～ 26日：日本古生物学会第153回例会出席，　⑤３月27日～ 28日：日本貝類学会創立75周年記念（平成16年度）大会出席（座長）

◎特色・強調点等

小中学生の発達段階に合わせて，どのような地層の観察ルートを選定すべきであるか明らかにした。また，日本産新第三紀の岩礁性腹足類化石の進化について明らかにした。さらに，これらの化石に基づいて氷期にお

ける日本海の成層構造と軟体動物の絶滅について総括した。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①日本古生物学会評議員，②日本地質学会古生物部会幹事，③上越市史編纂委員・同専門委員，④柿崎町史調査執筆委員，⑤上越市環境影響評価会議委員，⑥フォッサマグナ・ミュージアム協議会委員，⑦飯山トンネル特別委員会委員兼幹事

◎社会への寄与等

・日本古生物学会評議員，日本地質学会古生物部会幹事として学会活動に積極的にかかわった。

・地域の市町村史の執筆，博物館協議会委員など地域の文化向上に貢献した。

・新井市市役所から依頼を受け出前講座の一環として講演を行った。

大　場　孝　信（助教授）

〈教育活動〉

授　業

地球物質科学実験や地学実験で，身の回りの資源や岩石について知る目的で，大学の周りや高田公園まで行き，できるだけ実物をみる事に心掛けた。また，走査電子顕微鏡を用いて，鉱物などの表面など拡大してみると違った見方ができる事を観察した。これらの観察をもとにお互いに話し合うことにより理解を深め合えるよう試みた。大学院の授業「地学教材研究」では，今年も，現職の教員が岩石の実物をみたことが少ないことがわかり，実物を観察させることに努めた。

研究指導

学部３年生１人，学部４年生２人，大学院１年生１人，大学院２年生１人の研究指導を行った。

学生の教育実習には学生の研究授業を院生とともに見に行き，実践教育に参加する。また授業方法について話し合い，事後の相談，指導などをおこなった。

その他の教育活動（学外を含む。）

①「教職講座」，②「わくわく大学デー」講師，③出前講座（糸魚川高校，新井市白山神社公民館）で講演を行った。

◎特色ある点等

自主的に朝ゼミをおこない専門の基礎学力の強化をはかっている。単なる知識の増強だけでなく，広く体系づけてものを考える力や総合的にものを考える力がつくようトレーニングしている。そのため，大変時間がかかる。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

論】①平成15年４月『群馬県八王子丘陵の第三系含ザクロ石凝灰岩中のザクロ石』（共著）　群馬大学教育学部紀要，　自然科学編，　第51巻，55-70

②平成15年６月『飯縄上樽テフラと上越市周辺に分布する愛の風層中に産する鉱物の化学組成についての比較検討』（共著）　軽石雑誌，９号，1-17.

③平成15年９月『火山灰を利用した実践教育』（共著）　上越教育大学研究紀要，第23巻，第１号，267-274

発】①平成15年８月：『火山灰を利用した学習とその課題』（共）日本地学教育学会発表

②平成15年９月：『新潟第三系における続成作用にともなうスメクタイトの緑泥石について』（単）粘土

科学討論会発表

③平成15年９月：『北部フォッサマグナ地域に分布する西頚城火山岩類のＫ－Ar年代および岩石化学について』（共）岩石鉱物鉱床学会発表

④平成15年10月：『新潟焼山の噴火活動と岩石化学的研究』（共）日本火山学会発表

**共同研究（幼，小，中，高等学校及び特殊教育諸学校教員との共同研究を含む）の実施状況**

①ナピア地域太古代リソスフェアーの地球科学的研究　代表者：有馬真（横浜国立 大学教授）国立極地研究所共同研究

**学会活動への参加状況**

①平成15年８月１日～８月４日：日本地学教育学会出席，②平成15年９月24日～９月26日：粘土科学討論会出席，③平成15年９月29日～９月30日：岩石鉱物鉱床学会出席

**◎特色・強調点等**

北部フォッサマグナの第三紀の火成活動について，活動年代が明らかでないため一括して処理されていた。最近，Ｋ－Ar年代測定をおこない，高妻山，火打山など活動の時期を明らかにした。広範囲に北部フォッサマグナの第三紀の火成活動を明らかにした。また，Srの同位体を測り，マグマ供給源を明らかにしつつある。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①平成15年11月19日：いきいきわくわく科学賞審査委員（新潟県教育センター）

小　川　　茂（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

授業では，実験・検察をまじえながら講義を行った。大学院の実験では走査電子顕微鏡を用いて「学校現場で使える教材の開発」をテーマとして実際に教材の作製を大学院生に行わせた。学部の一部の授業では小テストを行い，総合的に成績を評価した。これら小テストを通じて。知識の定着をみるとともに，授業の改善にむすびつけた。

**研究指導**

大学院Ｍ２（１名），学部４年（１名），３年（１名）の指導を行った。研究を行う過程で，理科の教員として必要な実験器具の使用法，試薬の取り扱い方，生物の飼育・培養法などを習得するよう指導した。大学院の学生には。学術的研究テーマの他に，教材開発を目指したテーマを与えて指導した。

**その他の教育活動**

①「教職講座（直前講座）」，②「教職講座Ⅱ」，③「わくわく大学デー」講師

**◎特色ある点等**

大学院の授業（細胞学実験）では，教育現場に還元できる教材の作製を指導した。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成16年３月：『Spot-like area of F-actin associated with the migrating nucleus in post-mitotic cells of *Closterium moniliferum var. submoniliferum* (Zygnematales, Chlorophyta)』（共）　上越教育大学研究紀要　23巻２号　pp.705-712

**発】**①平成15年９月：『多核緑藻ハネモ（*Bryopsis*）の巨大１次核の分裂過程』（共）　第67回日本植物学会研究発表

**共同研究の実施状況**

①『自然観察教育における走査型電子顕微鏡データの活用の試み』 代表者：大場孝信　学内プロジェクト

**学会活動への参加状況**

①９月25日－28日：日本植物学会第67会大会（札幌）参加

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①上越地区理科教育センター研究協議会「近代化研修会」講師

**定　本　嘉　郎**（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

学　部

コンピュータを使った数式処理システムと実験とをうまく組み合わせた授業を行った。学生はこのような授業を受けたことがなく，新鮮で良かったと評価している。物理学の力学と電磁気学分野で教育系学生用に厳選した授業・演習・実験を行った。

大学院

高校物理の力学分野において，エネルギー保存則の理解を促す教材について議論と試作を行った。

**研究指導**

1）物理学理解に関する実態調査，2）実験教材の開発，3）教材の学校現場での実践とそれに基づく評価の３点を目標に掲げている。今年は，摩擦を含むエネルギー保存則と電場の概念との理解を促す教材の開発指導を行った。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成15年６月：『素朴概念の実態を基に開発した円運動教材を用いた授業実践』(共著) 物理教育　51 (2003) 79.

② 平 成15年 7 月："Advanced Material and High Performance Experiments on JFT-2M", 30th EPS Conference on Contr. Fusion and Plasma Phys., St. Petersburg, 7-11 July 2003, ECA Vol. 27A, P-2.143.

③ 平 成15年10月："High performance tokamak experiments with a ferritic steel wall on JFT-2M", Nuclear Fusion 43 (2003) 1288.

**共同研究の実施状況**

①トカマクに於ける静電プローブを用いた輸送過程の研究，代表者：定本嘉郎（上越教育大学助教授） 日本原子力研究所協力共同研究　②外部ポロイダル磁場による球状プラズマの研究，代表者：定本嘉郎（上越教育大学助教授） 宇宙科学研究所共同研究

**学会活動への参加状況**

①平成15年9月20～23日：日本物理学会2003年秋：「秋季大会出席　②日本物理学会誌「大学の物理教育」編集委員

**◎特色・強調点等**

「素朴概念の実態を基に開発した円運動教材を用いた授業実践」は，調査・教材開発・実践の一連の研究の１つであり，物理教育に大きく貢献している。

**中　村　雅　彦**（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

【観点１】教育方法及び成績評価面での取組

大学院授業では，現職院生の要望と現在の研究成果を取り込んで内容構成を研究し，ビデオ等の具体的資料を提示することで学習効果や内容の理解を深める工夫を行なった。学部授業では，最近の研究成果を取り込むとともに，野外に出て身近な生物を対象とすることで動機付けを与え，内容の理解を高める工夫を行なった。学部生・院生とも各授業における学習目標を周知徹底し，個人の具体的な達成度を評価基準とした。

【観点２】教育の達成状況

就職を希望した本年度の学部卒業生は２名，大学院修了生は１名であった。３名の内２名は教育関係の職業についたが，１名は明確な進路先を確定できなかった。当該学生の進路相談は，卒業後も継続維持する予定である。

**研究指導**

【観点１】学部

学部４年生２名，学部３年生１名の指導教官となった。研究テーマは学生の希望を尊重し，理科教育に関わる臨床的な実践力を取得させるため身近な生物を対象とする研究の指導を行なった。

【観点２】大学院

大学院２年生２名，大学院１年生２名の指導教官となった。研究テーマは学生の希望を尊重し，修士論文の作成を通して科学的問題解決能力の育成をはかる指導を行なった。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

①平成15年４月～９月：上越保険医療福祉専門学校非常勤講師として「生物学」を担当した。

②教職講座（直前講座），教職講座の「生物」を担当した。

**◎特色ある点等**

学部・大学院の授業では，上越教育大学構内に生息する身近な生物を対象とすることによって，受講者が学校現場で児童・生徒に即戦的な指導ができるよう配慮した講義及び指導を行なった。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**著】**①平成15年６月：『生態学事典』（分担）共立出版

**論】**①平成15年４月：『Response to manipulation of partner contribution: A handicapping experiment in the Barn Swallow』（共著）Ornithological Science 2: 65-72.

②平成15年４月：『Anatomical and histophysiological characterization of the male cloacal protuberance of the polygynandrous Alpine Accentor *Prunella collaris*』（共著）Ibis 145: E83-E93.

③平成16年２月：『Are Carrion Crows that congregate in spring roosts juveniles or adults?』（共著）Ornithological Science 3: 69-73.

④平成16年３月：『Effects of the Felling of Roosting Forest on Roost Size and Site of Crows』（共著）Journal of the Yamashina Institute for Ornithology 35: 149-154.

⑤平成16年３月：『The Diet of Adult and Nestling Sickle-billed Vanga *Falculea palliata*, an Endemic Species in Madagascar』（共著）Journal of the Yamashina Institute for Ornithology 35: 155-158.

**発】**①平成15年８月：『マダガスカル特産オオハシモズ類の種分化と適応放散』日本進化学会第5回大会

②平成15年９月：『春ねぐらに集結するハシボソガラスは若鳥か，成鳥か？』（共）日本鳥学会2003年度大会

③平成15年９月：『オオジシギの配偶システム』（共）日本鳥学会2003年度大会

**他】**①平成15年４月：「日本一のカラスのまち」 季刊 直江の津2003年春号（第３巻１号，通巻９号） pp. 12-15. なおえつ信金倶楽部

**共同研究の実施状況**

①学部カリキュラムにおけるブリッジ科目Ⅰ「理科」の問題点と今後のあり方，及びテキストの開発に関する研究　研究代表者：庭野義英（上越教育大学助教授）上越教育大学研究プロジェクト

②イワヒバリの雌の配偶者選択―父性，精子の運動，ホルモンレベルの統合―　研究代表者：中村雅彦（上越教育大学助教授）日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究 (B)(1)

③上越教育大学 自然観察ハンドブックの作成研究代表者：中村雅彦（上越教育大学助教授）上越教育大学研究プロジェクト

**学会活動への参加状況**

①平成15年９月19日～22日，日本鳥学会出席，②日本鳥学会評議員及び英文誌編集委員

**◎特色・強調点等**

高山鳥類イワヒバリの雌の配偶者選択を雌の行動，分子生物学的手法に基づく父性判定，精子の運動，ホルモンレベルといった各領域の知見を統合することで明らかにする研究に科学研究費補助金がつき，日本大学，国立科学博物館，日本歯科大学の研究者との共同研究を実施した。本研究は，異なる分野の専門的アプローチによって動物の行動を明らかにする点で独創的である。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①新潟県文化財保護審議会委員（新潟県），②河川水辺の国勢調査アドバイザー（国土交通省北陸地方整備局）

**◎社会への寄与等**

新潟県文化財保護審議会委員として平成15年度は，新潟県下の新沼・古沼，中峰湿原，群殿の池の三地点の恣意調査を行い，群殿の池の県文化財指定とその保護の施策に積極的に関わった。

**庭　野　義　英**（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

自分の意見を持って，物事を多角的に分析・考察できるような学生の育成を目指して授業を行った。考える力と表現する力を育成することを目的とした。

**研究指導**

自然観，科学観，自然科学の教育的価値・倫理的側面の研究，「理工系離れ，環境問題，学校の多くの問題」の解決に寄与する理科教育の研究，およびその指導をそれぞれ行った。

修士論文；奥田義将「小，中学校における生命倫理教育のカリキュラム開発に関する研究」，戸所雄彦「他教科との比較にみる，小・中学校理科の課題とその対処法の研究－演習の導入による子どもの意識の変容について－」の指導をそれぞれ行った。

大学院１年生（２名）に理科教育学基礎論，理科教育研究法の指導を行った。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

①小学校・中学校段階の教員養成に関して，アメリカでの実情を調査した。

②小・中学校や県・市教育委員会を訪問した。

③現場教師との共同研究を行った。

④教員採用試験対策を行った。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①2004,02：Recent trends of Japanese science education at elementary and junior high(第24回数学及び科学教育シンポジュウム，慶北大学，韓国）

**発】**①2004,03：Cooking Philosophy (The Science Education Center, University of Iowa, Iowa, USA)

**共同研究の実施状況**

①学部カリキュラムにおけるブリッジ科目Ⅰ「理科」の問題点と今後のあり方，及びテキストの開発に関する研究，代表者：庭野義英（上越教育大学助教授）上越教育大学研究プロジェクト

**国際研究プロジェクトへの参加状況**

① Collaboration in Science Education Research 2003(代表者：Dr. Robert E. Yager, The Science Education Center, The University of lowa)

**学会活動への参加状況**

①日本科学教育学会年次大会参加（金沢大学，平成15年７月）

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①日本理科教育学会研究紀要査読委員，②日本科学教育学会研究会運営委員会委員

**◎社会への寄与等**

・せんせいのたまご倶楽部を指導して，次の活動を行った。

大学近くの３小学校を中心に，第５回サマースクールを計画し実施した。８月４日から８日まで，１－６年生約300名を学生と共にそれぞれ指導した。

**五百川　　裕**（助　手）

**〈教育活動〉**

**授　業**

生物学実験の授業において，課題の説明だけでなく関連事項を整理して解説し，生物学および生物教育の中での当該実験の意義を理解した上で，実験に主体的に取り組めるように工夫した。中学校理科で行う実験との関連を考慮し，教育実習時を含めて実践的に役立ち易くすることを意識した。授業時間内に課題が終了しない昨年度の反省を踏まえ，実験手順や関連事項を整理したプリントを作成し，板書時間の短縮を図った。

**研究指導**

植物分類・生態学関連のテーマを卒業研究とする学部４年１名の研究指導の補助を行った。教師自身がまず科学的な見方，考え方のできる能力を確実に修得しており，その大切さと面白さを理解していることが，理科教育の目的であるその能力の養成には不可欠であるとの認識のもと，野外調査とそのデータ分析に共に取り組むことによって，自然観察のポイントや科学的推論法を体得させ，その面白さを実感出来るように努めた。

◎特色ある点等

高校の学習内容が定着していない，あるいは未履修の学生が多い実態を考え，高校の学習内容の復習を行い，授業内容の理解がはかり易いように配慮している。また，身近な生物を材料とすることによって，日常生活の中で学生達が生物に目を向けるきっかけができることを期待している。自然体験が少なく，人間以外の生物との触れ合い経験が不足している学生が，できるだけ生物への関心を深められるような話題の提供に努めている。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

**論】**①平成15年６月：『風穴地の維管束植物（1)』（共著）植物地理・分類研究第51巻 pp.13-26

②平成15年６月：『デジタルビデオカメラを用いた紫外線画像の観察と撮影』（共著）植物地理・分類研究第51巻 pp.69-72

③平成15年12月：『*Uraria poilanei* Dy Phon (Leguminosae), New to Myanmar』（共著）J. Jpn.Bot. 第78巻　pp.355-356

④平成16年２月：『A New Variety of *Schoenoplectus mucronatus* (L.)Palla (Cyperaceae) from Japan』（共著） J. Jpn.Bot. 第79巻 pp.1-3

**発】**①平成16年３月：『ユズリハは無融合種子形成をする』（共）日本植物分類学会第３回大会研究発表

国際研究プロジェクトへの参加状況

①ネパール・ムスタン地域植物相調査　（財）緑育成財団ネパール植物研究助成金

学会活動への参加状況

①９月26日～９月28日：日本植物学会第67回大会出席，②３月13日～15日：日本植物分類学会第３回大会出席

◎特色・強調点等

風穴地の維管束植物相を総括する第１報は，過去20年近くの地道な調査に基づくものであり，日本における寒冷地性植物の過去の分布変遷を推定する貴重な資料を提示する。カヤツリグサ科フトイ属の新変種の発表は，見落とされていた形質の分類学的意義を示し，近縁植物の研究に新たな視点を付与する。ネパール，ミャンマーの植物相調査は，アジア温帯域の種多様性研究に貢献し，日本の研究者が果たす責務の１つでもある。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①県下児童生徒生物標本・自然科学写真展示会審査委員（長岡市立科学博物館），②理友会研修会講師（秋の植物観察），③第21回上越の理科を語る会講師（上越科学技術教育研究会），④植物レッドリスト見直し調査調査員（環境省）

◎社会への寄与等

中学校教員が自然観察指導力向上を図る催しである理友会秋季研修会の講師として，植物観察の研修に協力した。ネパール植物相調査の成果を，上越の理科を語る会において講演し，学術研究を理科教育の場に還元するように努めた。児童生徒の自然環境への興味関心を高め，科学的視点を育む催しである県下生物標本・写真展示会の実施協力をした。植物レッドリスト見直し調査調査員として日本の植物保護活動に貢献した。

下　村　博　志（助　手）

〈教育活動〉

授　業

助手として化学実験の補助を行った。より一層学生の履修状況を配慮し，基礎的知識の確認をより多くの時間をかけて行ったほか，予習の課題として分析化学会が製作した教育用ビデオも活用した。化学実験の意味の理解と学習への動機付け，また環境教育実践力のある教員の養成に貢献するため，化学的環境計測を授業に採り入れた。屋外でのオンサイトセンシングによる基本水質項目の測定，パックテスト等による各種栄養塩類濃度のその場測定の他，キレート滴定の応用としての硬度測定，酸化還元滴定の応用としてCOD測定，吸光光度法による鉄イオンの定量を実試料を用いて実験を行った。これらはJISに定める方法を学生実験の時間と設備で行えるように検討し，変更したうえで実施した。

評価については授業の初回に評価方法を説明し，その方法に従った。

◎特色ある点等

分析化学の基礎的技術と基本的知識の修得だけでなく，実試料の分析をどのように行うのかという応用面についても修得することができるよう心掛けた。また化学系実験室の安全管理と試薬類の適切な取り扱いについては，教員採用試験においても近年頻繁に取り上げられている状況にも考慮し，学生実験において従来よりも一層詳しい説明を行った。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

論】①印刷中「ケナフの葉に含まれるステロールを活用する科学実験教材の開発　－ステロール類の同定とシトスタノールステアリン酸エステルの合成－」（共著）化学と教育

②印刷中　「学校現場で実施可能な自作光度計を用いる定量分析実験　－モリブデンブルー法による飲料水及び環境水中イオン状シリカへの応用－」（共著）化学と教育

共同研究（幼，小，中，高等学校及び特殊教育諸学校教員との共同研究を含む）の実施状況

①教員の身近な自然を教材化する能力の育成を目的とした教材開発マニュアルの開発及びその評価に関する研究　代表者：小林辰至　上越教育大学研究プロジェクト，　②教員養成課程における自然環境を知るための理科実験教材の開発と環境教育プログラムの開発　代表者：下村博志　上越教育大学研究プロジェクト

学会活動への参加状況

①日本分析化学会新潟地区部会ニュース編集担当，　②日本分析化学会新潟地区部会幹事会，ニュース編集会議（４月，７月，８月，12月），　③日本分析化学会新潟地区部会研究発表会（９月），　④日本環境化学会環境化学討論会（６月），　⑤日本環境化学会講演会（９月），　⑥日本化学会春季年会（３月）

◎特色・強調点等

昨年度に引き続き，研究内容，特に学生の指導に関わる部分については，環境教育の充実につながるものに重点をシフトさせつつある。特に公定法による化学的環境計測の実施体制の整備を進めている。また環境分析技術の学校教育への応用を教材開発として行っている。中学生による実験も実施し(わくわく大学ウイーク)，開発した教材の有効性の検討も行った。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①上越物理化学同好会（主に上越地域の中学校理科担当教諭で構成される）において，上越教育大学での話題提供担当者として吸光光度法による水道水中の溶存シリカの定量実験を主催した（12月）。

【生活・健康系教育講座（保健体育）】

青　木　　眞（教　授）

〈教育活動〉

授　業

【観点１】教育方法及び成績評価面での取組

学習形態については，受講生自身の自主的な取組を生かすために，受講生による問題別グループを編成し，グループの検討内容の発表と協議の形式で進めた。また，成績評価面では，出席状況と共に，授業過程における「問題提起と討議」，及び「学習のまとめとしてのレポート」の内容を成績評価の資料にしている。評価の観点は，「問題把握の深さ」と「授業を通した自己の脱構築性」である。

【観点２】教育の達成状況

ゼミ所属の学部４年次生（１名）は，翌年度４月から臨採として教員生活をはじめ，教職への意志を益々強めている。また，ゼミ所属であった大学院修了生（４名）は，それぞれ，地域の体育研究会の研究推進委員や校内分掌における体育部の主任等に就いている。このように，ここでの学習が修了後にも連続して生かされていると判断している。

研究指導

【観点１】学　部

実際の授業を対象とする授業観察を中心に指導した。そしてここでは，授業の「何を，どのように見ればよいのか」という観察の視点を主題化した。

【観点２】大学院

実際の授業を対象とし，そこでの学習の意味解釈について学生と共に検討した。そしてここでは，学習への規範的アプローチから解釈的アプローチへの広がりを主題化した。

その他の教育活動（学外を含む。）

・学部の直前教職講座及び３年次対象の教職講座で，体育領域を担当した。

・学部生の「実践セミナー」では，大学院の「実践場面分析演習」と連携した授業展開の定着を図った。その結果として，大学院生の教育力が大きく貢献し成果をあげることができた。

◎特色ある点等

学習の意味解釈から授業の構成を検討しょうとしているところに内容上の特色があり，一方，学部生の学習力と現職大学院生の教育力を生かし，両者の連携もしくは協同による進め方に方法上の特色がある。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

論】①平成 16 年３月：岡野昇，山本俊彦，青木眞共著：「かかわり論」を基軸とした体育学習に関する実践的考察－マット遊び（基本の運動）の授業実践事例を通して－，教科教育学研究第 22 集，日本教育大学協会

共同研究の実施状況

①仲間とかかわり，自ら運動の楽しさを求める体育学習　代表者：稲原　実（富山　小矢部市立蟹谷小学校校長）　富山県教育課程研究推進校

②仲間との関わりを大切にした体育学習　代表者：児島憲一（千葉　船橋市立大穴小学校長）　船橋市教育委員会研究推進指定校

◎特色・強調点等

体育授業における学習を関係論の立場で再編しようとするところに特色を持つ。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①新潟県立教育センター「学校体育実技指導者講習会講師」(『学習指導要領改定の趣旨を生かす学習指導の在り方』を講演すると共に，研究協議会の指導助言)

②新潟県立教育センター「高等学校体育指導者研修講師」(『高校体育の課題』を講演)

③上越教育大学出前講座「上越市立三郷小学校体育研究」(『新しい体育学習の考え方と進め方』をテーマに同校の教職員と協議)

◎社会への寄与等

・教育実践（体育授業実践）における現代的課題について問題提起ができた。

伊　藤　政　展（教　授）

〈教育活動〉

授　業

体育心理学，体育心理学特論の授業では，情報処理理論や生態学的知覚論等の運動の制御・学習に関する最新の理論と研究成果を取り込み，小学生を対象とした体育・スポーツの学習指導上の諸問題，運動意欲と運動の場（物理的環境）の関わりについて問い直す努力をするとともに，体力・運動能力の発達の臨界期について積極的な討論を行った。体育心理学実験では，体育に関する現場研究・現場実験を行う上で応用可能性の高い要因計画の中から4つの計画を精選し，データの収集を通してそれらの解析方法と解釈の仕方を理解させるとともに，作図や論文の書き方について学ばせた。

研究指導

卒業論文２件と修士論文３件の指導に当たった。卒業論文では，ボール運動におけるサービスの正確性と注意の焦点化，サービスコースの予測と視覚的探索の問題について検討を加えた。修士論文では，児童の走運動における蛇行現象，体育の学習意欲と運動量，運動学習における自己決定に基づくフィードバックの問題を追求した。また体育心理学を選択したゼミ生とともに，認知スキルの発達に関する文献の講読を行い，児童の発育発達のレベルを考慮した体育指導の在り方について積極的な討議を試みた。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

**論】**①平成16年３月：『Mental practice and variability of practice in the learning of a rapid force-control skill』（共著）上越教育大学研究紀要　第23巻第2号　pp.713-721

学会活動への参加状況

①12月３日～５日：日本スポーツ心理学会出席，②平成15年度日本スポーツ心理学会理事，③学会誌「スポーツ心理学研究」の編集，④平成15年度日本スポーツ心理学会学会賞選考委員

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①日本体育協会認定講習会心理学部門講師，②日本体育協会Ｃ級コーチ養成講習会講師（『スポーツ心理学』を講義），③上越教育大学出前講座（新潟県上越市立直江津東中学校にて『スポーツとあがり』を講義）

**加　藤　泰　樹**（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

学部の授業「体育哲学」では，体育・スポーツに関わる受講生個々人の興味・関心を基に，問題性の深化拡大を図って，授業展開の工夫に努めた。大学院の授業「体育学研究法」では，授業の世話係として，現職院生たちが研究活動へスムーズに移行できるような内容構成を工夫することとストレートマスターの学部時代の研究成果や課題等を効率よく確認をすることに努め，その際自己認識や自己開示に関わる演習をうまく組み込みながら行った。

**研究指導**

指導ゼミ学生４名，指導ゼミ院生３名について，各学年別「研究室ゼミ」とゼミ生一同による「合同ゼミ」の二本立てにより，それぞれの研究の発展段階に応じた個別指導と上下の研究交流による知的再生産効果をねらった全体指導に努めた。とりわけ，教育現場を機軸にした諸問題について効果的なディスカッションを期した。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

国立療養所新潟病院附属看護学校非常勤講師として，平成16年４月～平成16年３月まで「体育実技」を担当，並びに，平成16年３月８～９日に「教育研修ゼミナール」の企画運営を行った。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成15年５月：「STORIA 2003」上越教育大学学校教育学部附属小学校　pp.4-5

②平成15年７月：「教育創造」上越教育大学学校教育学部附属小学校高田教育研究会編　第144号，pp.6-9

**学会活動への参加状況**

①8月18～20日：日本体育・スポ－ツ哲学会第25回大会参加，②平成15年度日本体育・スポ－ツ哲学会理事

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①8月11日：出前講座「やさしい運動の指導法」（上越市直江津南小学校）講師，②9月5日：教育講演会「これからの教育環境の方向，小中連携教育と小中併設校を考える」（清里村教育委員会）講師

**佐　藤　　誠**（教　授）　※保健管理センター

**〈教育活動〉**

**授　業**

学　部：健康管理の観点から，「救急蘇生法」の実習，教員として知っておかなければいけない感染症およびその対処法について講義した。また，比較生理解剖学的な観点から，動物とヒトとの相違点を講義することによって，生きることの意義を討議した。

大学院：教員として知っておかなければいけない感染症およびその対処法，運動生理学の基礎について講義を行い，救急蘇生法及び運動負荷試験の実習講義を行なった。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

①新潟大学医学部非常勤講師として，「内科学・呼吸器病学」，②３学会合同呼吸療法認定士「更新認定のための講習会」講師，　③新潟県国際情報高校講演会「健康生活における睡眠の役割」講師

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

著】①平成16年２月：　睡眠時無呼吸症候群スクリーニングハンドブック (分担) 厚生科学研究所 ( 3-13頁，44-48頁 )

論】①平成15年６月：鼻マスク持続陽圧呼吸 (CPAP) が閉塞型睡眠時無呼吸症候群の日中の血圧に及ぼす影響，（共著）日胸　62巻：６号 (553-560項 )

② 平 成15年11月：Nasal Continuous Positive Airway Pressure Improves Quality of Life in Obesity Hypoventilation Syndrome.（共著）Sleep and Breathing　７巻：１号 (3-12項 )

学会活動への参加状況

①平成15年度日本呼吸器学会評議員，肺生理専門委員会委員，②６月12日～ 13日：日本睡眠学会シンポジスト，　③６月29日～７月３日：７th World Congress on Sleep Apnea, Helsinki, Finland 参加研究発表，④11月29日：第４回 CPAP 研究会基調発表，⑤保健全国大学保健管理研究集会出席，　⑥新潟在宅呼吸療法研究会幹事

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①上越ケーブルテレビ番組（健康医学関係）コメンテーター

②睡眠と健康生活について考える市民講座講師（水俣市，八代市，岡山市，高松市），として「いびきと睡眠時無呼吸症候群」の講義を行った。

③新潟在宅呼吸療法研究会講師，新潟県糸魚川地区医師会学術講演会講師，新潟県上越小児医師会学術講演講師，日本ポリソムノグラファー研究会講師，実践睡眠医療講座講師，関東呼吸器研究会講師，三重県呼吸不全研究会講師として「睡眠時無呼吸症候群」の講義を行った。

④職場の安全管理と産業医学の関係から，日本曹達二本木工場，新潟産業保健推進センター，運送事業者安全セミナー講師として，「居眠りと睡眠時無呼吸症候群」の講義を行なった。

**砥　堀　雅　信**（教　授）

〈教育活動〉

授　業

方法論では，知識から行動を導き出す方法ではなく，様々な行動における「気づき」を糧に，知識を求める方法を採った。すなわち，新しい知識を数多く伝達することよりも，健康を維持するために人間が本来持っている適応力や仕組み，およびそれらを応用した知恵を，自分の生活の中から見つけだす方法を用いた。内容論では，現象の量的な増減よりも，なぜ現象が変化したかを追求することに視点を置いた。そして，教授内容はマニュアル化した指導の方法や技術を極力避けるために内容を精選し，伝達する方法として視聴覚機器を用いる工夫をした。成績評価は毎時の学習内容について，その時間終了時に簡単なレポートを提出させ，その内容と出席状況から総合的に評価した。

研究指導

部生，大学院生（修士課程）が相互に臨床的な実践力を習得するたことをねらいに，大学院のカリキュラムである実践場面分析演習への学部生の見学参加，及び学部学生の教育実習時に大学院生（現職）の指導的参加を試みた。

その他の教育活動（学外を含む。）

①普通教育実習の指導を行った。

◎特色ある点等

本学は初等中等教育に貢献する付加価値の高い教員を養成する施設として存在することから，それらを支え援助することを強く意識して日常の教育活動を行った。すなわち，教師としての教養や資質の向上を目指して，よりよい教師像を予測しながら，担当授業科目及び学生の日常生活指導を行った。

〈研究活動〉

共同研究の実施状況

①「中学生の健康観と健康行動」に関する実践的研究（本学大学院修了生との共同研究），②「中学生の疲労」に関する実践的研究（本学学部，大学院修了生との共同研究）

学会活動への参加状況

①第51回日本学校保健学会出席，②日本教育実践学会理事

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①上越市スポーツ・健康都市宣言検討委員会委員，②上越市谷浜地区公園計画検討委員会委員

長　澤　靖　夫（教　授）　※附属実技教育研究指導センター

〈教育活動〉

授　業

授業においては，最近の研究成果を取り込んだ内容で構成し，これまで見落としてきた点がないのかの動きの観察を中心に進めた。

もし見落としがあるとすれば，どうして，見落とされたのか，自分自身の身体を使って確認させ，教材研究・開発にどのように反映させるべきかを検討した。

研究指導

学部，大学院ともに，実践的な研究が可能なデータ収集，フィードワークを中心とした方法を用いて，研究指導を行った。

その他の教育活動（学外を含む。）

・出前講座を行った。

・教職講座：講義及び実技指導と器械運動実技の特別授業を開講実施した。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

他】①『体操競技研究』学会誌の裏表紙に技術写真を提供した。

学会活動への参加状況

①日本体育学会，②スポーツ運動学会，③体操競技・器械運動研究会に参加した。

三　浦　望　慶（教　授）

〈教育活動〉

授　業

講義では，バイオメカニクス研究成果に基づく動作原理を学生自らの運動技術の学習指導に生かせることを目標として，OHP や資料を作成し参加型授業への工夫をした。授業期間の最後にはまとめを行い，成績の評価基準を明示し試験を実施した。

研究指導

ゼミナールをおこない，博士課程の学生に先行研究をもとに研究課題，研究方法を発表させ，資料整理，学会発表，論文執筆の指導をした。

その他の教育活動（学外を含む。）

① 平成15年７月：新潟県立看護大学　非常勤講師 「運動科学」担当

② 平成15年12月：福井大学　教育地域科学部　非常勤講師 「共通教育科目（集中スキー）」担当

③ 平成16年２月：本学留学生スキー教室を担当し指導した。

◎特色ある点等

授業においては身体運動の学習指導の基礎となる動作のメカニズムについて実技指導との関連で実践的な立場から取りあげた。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

論】①平成16年３月：「スキー研究の足跡」三浦望慶教授退官記念論文集，（単著）上越教育大学三浦研究室ＩＯＭ出版

発】①平成15年９月：「ジュニア・スキー選手の体力に関する横断的研究」（共）第15回冬季スポーツ科学フォーラム

②平成15年10月：「アルペン及びクロスカントリースキー選手の体力の発達」（共）新潟県体育学会平成15年度大会

③平成15年10月：「高校生アルペンスキー選手におけるシーズン前後の体力の変化」（共） 新潟県体育学会平成15年度大会

④平成15年10月：「スキー指導における研究成果の活用」（単）新潟県体育学会平成15年度大会シンポジューム

学会活動への参加状況

学会出席　①９月26日～27日：日本体育学会第54回大会（熊本大学）②９月28日～29日：第15回冬季スポーツ科学フォーラム（熊本大学）③10月１日～３日：Internationales Ski-Kolloquium (Hintertux Austria) ④10月18日：新潟県体育学会平成15年度大会新潟大学　⑤３月27～31日：International Congress on Skiing and Science (Aspen Colorado, USA)

学会役職　①日本体力医学会評議員②日本スキー学会副会長　③冬季スポーツ科学研究フォーラム運営委員　④新潟県体育学会評議員　⑤ Internationa Congress on Skiing and Science steering member.

◎特色・強調点等

スキーに関する研究としては，雪上でのスキー競技中の三次元動作分析およびジュニアスキー選手の体力科学的研究は独自の研究であり，スキー動作の三次元解析や，スキー選手のシーズン前後における体力変動などを明らかにした点に特色がある。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①社団法人盛田スポーツ財団顧問②大学スキー研究会幹事　③財団法人新潟県体育協会評議員　④日本体育協会公認スポーツ指導者養成講習会講師　⑤新潟県学校スキー研究会顧問　⑥上越市民エクササイズ（市民体操）監修　⑦上越市運動普及推進員育成研修会講師　⑧上越市総合運動公園設置検討委員会委員長

市　川　真　澄（助教授）　※附属実技教育研究指導センター

〈教育活動〉

授　業

学部授業の「ブリッジ科目Ⅰ（体育）」については，初等教育教員としての基本的な心構えや考え方について導入的な指導を行うことをねらいとした。体育実技の内容に関しては，実技コースを3コース設定し，受講生に選択させることにより授業を行った。実践的人間理解科目の「スノースポーツ」においては，スノーボードコースの指導内容を充実するために，事前に専門のインストラクターに依頼して指導担当者の研修を行った。スノーボードの指導実践においては，基礎技術の正しい理解と，基本的な指導法の習得に重点をおいた。専門科目である「陸上競技」では，小学校における教科内容の指導を中心にカリキュラムを設定し，中学校および高等学校の教材も含めて指導を行った。大学院修士課程の「運動方法学演習Ｂ（陸上競技）」の授業においては，バイオメカニクスに関する知見をマルチメディアを活用して呈示する授業実践方法を中心に講義を行った。それぞれの授業において，事前に達成すべき目標を設定し，受講生全員がその目標を達成できるような指導を行い，実技テストおよびレポートにより評価を行なった。

その他の教育活動（学外を含む。）

名古屋工業大学において，健康運動科学演習（スキー）の非常勤講師を行い，スキーおよびスノーボード実技の指導を行った。また，名古屋リゾート＆スポーツ専門学校において，運動生理学およびバイオメカニクスの講義を行なった。さらに，学内では教職講座Ⅳの講師として，陸上運動および陸上競技の指導を行った。

◎特色ある点等

運動生理学およびバイオメカニクスの客観的知見について，マルチメディアを活用した手法を用いることによって実技授業に応用し，実技授業内容の理解をより深めるように授業実践したところに特色がある。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

論】①平成15年10月：『重心動揺における幾何学的な指標の物理学的意味』（共著）Equilibrium Res 62(3), 168-180

発】①平成15年８月：『視運動刺激時立位姿勢反応に対する反復刺激の影響』（共）第11回日本運動生理学会大会

②平成15年11月：『長時間運動がヒトの体平衡機能に及ぼす影響とその回復過程』（共）第62回日本めまい平衡医学会総会

学会活動への参加状況

①第11回日本運動生理学会出席，②第62回日本めまい平衡医学会総会出席，③第51回東海体育学会研究出席

◎特色・強調点等

平衡機能は，小学校期において顕著に発達する身体機能のひとつであり，運動時においても重要な身体的能力となる。本研究では，主として視覚情報が姿勢調節に与える影響について基礎的な検討を行ったところに特色がある。これは，バーチャルリアリティが身体に及ぼす効果に関する研究にも関連する研究課題である。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①全日本スキー連盟教育本部ブロック技術員，②愛知県スキー連盟教育本部専門委員

◎社会への寄与等

・日本陸上競技連盟のＡ級公認審判員として，上越教育大学陸上競技記録会をはじめ各種公認陸上競技大会

の審判を行い，地域の陸上競技振興に寄与した。

・全日本スキー連盟教育本部ブロック技術員として，全日本スキー連盟の指導員研修会の理論講師および実技講師として指導員および準指導員を指導した。

### 榊　原　　潔（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

学生が将来小学校の教員になることを想定し，授業を構成した。授業用ノートを作成し授業の初回に配付することによって，事前の準備学習と事後の復習をしやすいようにした。また，学習カードを用い，授業後に学生が自己の学習活動を振り返る機会を設けた。

**研究指導**

大学院では，ビデオ撮影した運動場面や録画した映像を資料として，運動観察を行いそこに現れた運動を評価する検討会を行った。

**◎特色ある点等**

スポーツ実践（サッカー）では，小学校の体育授業を疑似体験できるように授業を構成した。その上で，サッカーの集団的スポーツとしての特性に焦点を当て，『チームの仲間とのかかわり方を学ぶ』ねらいのもと構成した授業を紹介した。現在の体育授業の課題を理解する上で有効であったと思われる。また，身体表現の基礎では，手近にある材料を使ってフリスビーを作り，作って遊ぶ体験をした。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**他】**①平成16年３月：『小学校体育のカリキュラムに関する実践的検討－サッカー単元を対象として－』上越教育大学研究プロジェクト報告書　代表者：榊原潔

**共同研究の実施状況**

①小学校体育のカリキュラムに関する実践的検討－サッカー単元を対象として－　代表者：榊原潔（上越教育大学助教授）上越教育大学研究プロジェクト

**学会活動への参加状況**

①10月：新潟県体育学会平成15年度大会出席（座長）

**◎特色・強調点等**

運動を熟練者のように「できる」，「できない」ではなく，形態発生として捉え指導方法や授業展開の改善に結びつけている。研究設備が不十分な学校等でも可能な研究方法である運動観察法を用い研究を進めている。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①８月：第24回北信越国民体育大会サッカー競技成年女子監督，②８，９月：上越教育大学出前講座「運動遊び」　上越地区公立保育園職員研修会，③11月：上越地区体育研修会師範授業及び講演　上越地区小学校体育連盟連絡協議会，④２，３月：上越地区公認少年少女サッカー指導員養成講習会講師　日本サッカー協会

**◎社会への寄与等**

・新潟県サッカー協会及び上越サッカー協会と連携して，サッカーの普及，競技力の向上にかかわった。

清　水　富　弘（助教授）

〈教育活動〉

授　業

【観点１】教育方法及び成績評価面での取組

○授業形態，学習（研究）指導法等の教育方法に関する取組状況

学部授業では「スポーツ実践」「マリンスポーツ」「野外運動Ａ・Ｂ」を担当しているが，すべてスポーツ実技系に関係しており，学生の技術・能力レベルが授業開始時点で大きく異なっている。またそれが，学生相互にも認知しやすい特徴がある。各レベルの学生個々の動気づけを高めるため，授業での進化・変化を明確にする「到達度評価」を毎授業で受講生に示している。また，授業では能力レベル別のグループを作り，各グループごとに達成可能な課題を提案している。

また，スポーツ実践の中の「水泳」では，夏休みに補講を実施し，泳ぐ技術に自信のない受講生に対し，個別指導を行うことで教員と学生のコミュニケーションを深め，自己の課題に挑戦し，その結果を出すことを重視している。

大学院でも上記と同様の「到達度評価」を実施しているが，特に指導理論と自己の能力との融合を重点的にとらえさせている。また，自己の課題も学部より多岐にわたるよう工夫している。

○成績評価法に関する取組状況

「到達（達成）度評価」を実施している。これは，授業開始時に学生の能力レベルが大きくことなるため，技術・能力レベルおよび知識レベルにおける観点について開始時から終了時までにいかなる変化が生じたかを評価の大きな観点とし，その客観的変化を毎回の授業ごとに，受講生に公開した。また，受講生の行う授業評価については，大学側アンケートの他，独自で作成した授業評価チェックリストを授業最終回に無記名式で実施した。

【観点２】教育の達成状況

○進学や就職などの卒業（修了）後の進路の状況から判断した取組状況

特に学部授業の「スポーツ実践」において「水泳」を担当しているが，前期授業において水泳初心者には100m（クロールおよび平泳ぎ）泳げることを達成基準としている。最初の授業の段階でこの基準を既に達成している者には，200m（クロールおよび平泳ぎ）泳げることを達成基準としている。またおよび５分間泳のパフォーマンス向上を最終課題においている。本学の学生は，当授業終了時までに水泳の能力を必ず身に付けることになる。また，その過程における支援的教授により，水泳能力が未熟な学生にとっては不可能と思える課題を系統的に挑戦することで，段階的に克服する体験を味わい，さらに成果を上げることを重視している。

また，夏期休業期間には基準の未達成者に対し４－５日の補講を実施している。

研究指導

【観点１】学　部

研究指導を開始する時点で，１年間の最終目標を明確にし，その目標の達成のために，毎月の活動がどのような意味をもつのかを学生自身が自己評価することを重視することで，学生の研究に対する動気づけを高める指導を行った。

【観点２】大学院

研究課題となる内容について，院生自身が実験・調査のために必要な環境を具体的に明確にし，その交渉自体を院生の手によって行わせる。研究目的の明確化（GOAL）→現状の把握・問題の認識（Reality）→選択肢の創造（Option）→具体的スケジュール（Will）という「問題解決をめざすＧＲＯＷモデル」を院生

自身が推進するためのコーチング（教官は直接指示することなく，質問・傾聴・提案・要求・承認により院生に気づかせる手法）を主体にコミュニケーションをとることを重視した。このようなゼミを前期は週に１回，後期は週に２回慣行した。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

他大学の非常勤講師は，新潟県立看護大学にて『健康スポーツ学』（講義及び実技）を，前期及び後期担当した。

教職講座では，水泳を担当し，受験する都道府県の出題傾向に応じた実技（特に水泳）指導を行った。個別の指導により，短期間で技術（泳法技能，スタート，ターン）の改善に成功した。

**◎特色ある点等**

上記 (1) ～ (3) を通じて，学生とのコミュニケーション及び教授過程において，「コーチング」手法を導入した。コーチングとは，教官は直接指示・指導することはなく，質問を多用し，状況に応じ提案や要求を提示することに徹し，学生・院生自身に気づかせ，「自問自答」する習慣をつくることを目的とした支援型コミュニケーション法である。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成15年７月：『アクアジムを利用した水中運動の運動効果と主観的評価に関する研究』（共著） 玉川大学体育・スポーツ科学研究紀要第４号　pp.35-43

②平成15年９月：『Effects of Deep Seawater Bathing on the Immune Cell Distribution in Peripheral Blood from Healthy Young Men』（共著） Environmental Health and Preventive Medicine 8 pp.161-165

③平成15年12月：『Changes in Plasma Lactate and Pyruvate Concentrations after Taking a Bath in Hot Deep Seawater』（共著） Tohoku Journal of Experimental medicine 201　pp.201-211

**発】**①平成15年９月：歩行支援タイツの生理応答　第58回日本体力医学会大会

②平成15年9月：アライメント教育を支援するタイツの開発　第58回日本体力医学会大会

**共同研究の実施状況**

①海洋深層水に関する研究　代表者：山本正治（新潟大学教授）「新潟県海洋深層水利活用技術先導研究開発事業」研究助成金

「海洋深層水に関する研究」は，新潟大学医学部との共同研究で海洋深層水による人体への健康に及ぼす影響を生理学的見地・免疫学的見地からアプローチしており，他に例をみない先進的研究と評価されている。この研究プロジェクトとして通年４年目となる。

②新井市健康福祉事業「いきいき高齢者脚力アップモデル」のプロジェクト研究　代表者：清水富弘（上越教育大学助教授）

「いきいき高齢者脚力アップモデル」は，プロジェクトの代表として，１年間の健康啓蒙活動の実践および参加者のエビデンスを報告書にまとめた。参加メンバーは，渡會公治（東京大学助教授），細江容子（上越教育大学助教授）を含む７名であった。

③社団法人民間活力開発機構「温泉療養ネットワーク事業推進委員会」 代表者：里敏行（(社) 民間活力開発機構理事長）

ワーキンググループの研究員として大学，民間研究所および民間企業の研究者とともに予防医学・健康科学としての温泉入浴，運動，栄養の処方的実証調査・研究を実施した。

**学会活動への参加状況**

①平成15年５月15～17日：第68回日本温泉気候物理医学会総会に出席　②平成15年９月19～21日：第58回日本体力医学会大会に出席・発表　③平成15年３月29～31日：第27回日本体育・スポーツ経営学会出席・発表

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①文部省認定・日本体育協会公認Ａ級スポーツ指導者養成講習会講師（日本体育協会）　②(財)日本水泳連盟競技力向上コーチ委員会委員（日本水泳連盟）　③社団法人民間活力開発機構「温泉療養事業推進委員会」委員　④平成15年度「海洋深層水利活用技術先導研究開発事業」委託研究者（新潟県）　⑤平成15年度新井市地域リハビリテーション推進会議委員長（新潟県新井市）　⑥平成15年度温泉療養ネットワーク事業推進委員会委員（(社)民間活力開発機構）

**直　原　　幹**（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

学部ブリッジ科目や大学院の教科専門における実技を伴う授業では，授業形態は，運動技能の上達過程における身体の内的変容に対する問いかけを重視した示範型の一斉授業の形式で実施した。また，指導方法では，運動技能の上達に伴う身体的実感の意識・言語化を学習目標とし，受講者の運動指導における臨床的な指導実践能力と結びつくよう配慮して授業内容を工夫した。特に，大学院については学校現場における対人的な危機管理能力を啓蒙する視点から，武道論を基盤とした専門的な知識と技能の拡充および得られた知識の指導実践への応用可能性について指導した。

**研究指導**

運動学，武道学，障害児体育，ストレスマネジメント等の領域に関わる卒業研究（１名）および修士論文（６名）の研究指導を担当した。各研究テーマ上の専門的な知識の拡充および教育現場における臨床的課題に関わる学術的な論文が纏められるよう指導したが，全員が現職教員あるいは教職希望者であることから，教育現場での指導実践に関わるフィールドワークを重視した調査研究やマルチメディア教材の活用可能性を重視して指導した。結果，指導した学部卒業生１名および大学院生２名については教職に正式採用となり，その他２名は臨時採用教員として小・中学校に勤務している。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

①平成15年７月：全国教育系大学学部学生剣道セミナー講師（指導法，審判法）

②平成15年５～７月：上越教育大学公開講座（少年剣道教室）講師

③平成15年10月～平成16年１月：学校コンサルテーション事業（小学生剣道の指導）

④課外活動（剣道部）顧問として，年間を通じ稽古指導および合宿・大会の引率

**◎特色ある点等**

運動学の研究内容，授業内容等において教科臨床的視点に立った専門内容の再構成化を試み，①日本の型文化からみた現代の子どものからだにおける拘束性，②武道教育からみた「いじめ」と「フザケ」，③東洋的体育の再構成化と身体開発，④学校現場における対人的な危機管理能力の育成等，東洋的な身体運動文化の学校教育における今日的意義を検討している点に特色がある。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

論】①平成15年３月：「剣道経験者の形態学的特性と腰痛症」（共著）上越教育大学研究紀要，23(2), (2004)

発】①平成15年８月：「視運動刺激時立位姿勢反応に対する反復刺激の影響」(共) 第11回日本運動生理学会大会

②平成15年９月：「少年剣道指導におけるマルチメディア活用の実践的研究」（共）第36回日本武道学会

③平成15年９月：「剣道の試合観戦時における「面白さ」に関する調査」（共）第36回日本武道学会

④平成15年９月：「中学校剣道部における礼法指導の実践的研究」（共）第36回日本武道学会

⑤平成15年10月：「脳性麻痺児の歩行訓練におけるマルチメディア機器を用いた評価の有効性」（共）新潟県体育学会平成15年度大会

学会活動への参加状況

①平成15年９月：第36回日本武道学会出席，②平成15年10月：新潟県体育学会平成15年度大会出席，③平成15年度日本武道学会評議員，④平成15年度日本運動生理学会評議員，⑤平成15年度新潟県体育学会理事

◎特色・強調点等

大学院生の研究志向に応じて，教科「体育」における教育現場の今日的課題を教科教育学的，体力学的，運動学的視点から幅広く取り扱っている。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①平成15年４月～16年３月：上越地区小・中・高校生剣道強化練成会指導（年間24回），②上越市内在住の幼児・児童の剣道指導（高田スポーツ少年団，週2回／年間），③平成15年７月29日～８月２日：新潟県夏季剣道講習会（新潟県剣道連盟）指導講師，④県内の各種剣道大会に審判員として協力参加、⑤その他：全日本学生剣道連盟理事，北信越学生剣道連盟評議員，全上越剣道連盟常任理事

◎社会への寄与等

・上越地域の児童の健全育成に関し，剣道を通じたフレンドシップ事業の試みとして，本学学生と共に年間を通じて小学生，中学生の剣道指導を継続した。また，全上越剣道連盟における青少年育成事業として，小・中・高校生の錬成稽古会（隔週土曜日）を年間を通じて企画・指導した。

土　田　了　輔（助教授）

〈教育活動〉

授　業

学部教育においては授業計画や評価基準については事前に説明をした。大講義室での講義は板書の限界を考慮してパソコンからプロジェクター投影するスタイルを積極的に導入したが，提示する情報量が過多になる旨学生の授業に対する意見があったので，プロジェクターの使用を最小限にとどめた。授業の流れに沿った書き込み式の資料を用意して授業の流れが事前にわかるように配慮した。大学院修士課程においては現職教員に配慮し，専門的な球技指導のみならず，チーム内，チーム間の２つのグルーピング方法を用いて課題解決型授業を導入した。

研究指導

学部の研究指導に関しては，自分で研究対象を見つける楽しさを味わわせるために先行研究の検討に時間を割いた。大学院教育に関してはフィールドでの指導経験に基づくテーマ設定を尊重し，研究に対して意欲が持続するよう努めた。

**その他の教育活動**

課外活動において専門であるバスケットボールの指導に従事し，北信越地区選抜チームのアシスタントコーチとして同チームを全国大会３位に導いた。また，新潟県の学生バスケットボールを盛んにするために，新潟県選抜チームを結成し，上記北信越選抜チームとの親善試合を開催した。新潟県選抜チームではヘッドコーチを務めた。

近隣の中学校や高校と合同練習や練習試合を積極的に行い，地域のバスケットボール普及に努めた。

**◎特色ある点等**

今年度も昨年度に引き続き週２回，近隣の小学校で研修を行い，児童の活動に直接触れる機会を設けた。また専門であるバスケットボールに関しては正課外でも積極的に現場指導に出向いた。今年度は特に初心者指導に時間を割いた。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成15年12月：『ゲームの構造からみた球技分類試論』，体育・スポーツ哲学研究，25，7-23.

**共同研究の実施状況**

①球技あそびにおいて児童が発生させるローカルゲームの研究　代表者：土田了輔，共同研究者：江口克也教諭（上越市立桑取小学校）.

②球技教材の分類論　代表者：鈴木理（宮崎大学），共同研究者：廣瀬勝弘（鹿児島大学），鈴木直樹（埼玉大学）.

**学会活動への参加状況**

①平成15年11月28日：埼玉県東松山市立新宿小学校授業研究会発表.

**◎特色・強調点等**

児童の遊びの中に直接入って長期間参与観察したことは，教育現場からの実践的な研究が，常に指導者，あるいは第三者の目線からなされる事が多い中で，あまり例のないものである。また，小規模校を調査対象にしたことから，現代ではめずらしい異年齢集団の遊びを観察することができた。球技の分類論はゲームを外から観察した形態の分類論ではなく，競争課題を念頭においた現場指導者のための分類論をめざしており，一定の成果をあげている。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①北信越学生バスケットボール連盟理事，②北信越男子学生バスケットボール選抜チームアシスタントコーチ，③甲信越学生バスケットボール定期戦大会理事，④新潟県学生バスケットボール連盟副理事長，⑤上越市３on ３ストリートバスケットボール大会実行委員，⑥新潟県バスケットボール協会公認審判員，⑦新潟県体育学会理事

**◎社会への寄与等**

・新潟県学生バスケットボール連盟副理事長として，県内の大会企画運営で新潟県の学生バスケットボールの普及と対外的な活動の企画を行った。

・毎年おこなわれている市内のミニバス大会実行委員として，上越市青年会議所のメンバーとともに地域の青年交流に寄与した。

・上越市小体連主催のバスケットボール大会等に審判員として参加し，大会の運営に貢献した。

大　橋　奈希左（講　師）

〈教育活動〉

授　業

学部教育では，将来学生が指導者になったときの実践力，特に課題設定とその解決のための指導・支援に焦点を当て，授業を展開した。大学院教育では，新学習指導要領で新たに加わった「体ほぐし」・「リズムダンス」に着目し，創作活動とのつながりを意図した授業実践を試みた。

研究指導

院生１名（１年），学部生２名（３年）について個別指導と全体討議を行い，研究課題の明確化に努めた。特に，運動観察の視点については，合同ゼミ形式で，研究交流を図った。

その他の教育活動（学外を含む。）

三和村上杉小学校高学年とＰＴＡ対象健康づくり講師

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

作】①平成15年５月　新潟県高校ダンスフェスティバル　創作コンクール部門審査員

②平成15年８月　全日本高校・大学ダンスフェスティバル（神戸）　指導作品『I〇愛』発表

③平成15年12月　全国創作舞踊研究発表会（筑波）　指導作品『滅びゆく闇の王者』発表

発】①平成15年８月　『D. Best の表現論における“Criteria”について』（単）日本体育・スポーツ哲学会研究発表

共同研究の実施状況

①公立小学校の英語科導入に関する包括的開発研究　代表者：齋藤九一（本学）科学研究費補助金

②地域における高齢者指導システムの開発－仲間との交流を目指す運動プログラムの展開－　代表者：大橋奈希左　科学研究費補助金

学会活動への参加状況

①平成15年８月　日本体育・スポーツ哲学会出席

◎特色・強調点等

本年度は，７月20日から１月20日まで，愛媛大学牛山教授のもとで，内地研究員として，「体ほぐし・リズムダンスを入口とした創作ダンスの指導・支援」を課題として研究に取り組んだ。この研修で観察・開発した「仲間との交流」を目的とする運動課題は，科学研究費補助金を受けて取り組んでいる「高齢者の指導システム」の開発にも大きな示唆を与えてくれた。今後，異世代間交流を目指す中で，さらに開発・発展が期待できる。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①新潟県健康運動実践指導者認定試験委員②新潟県女子体育連盟常任理事

【生活・健康系教育講座（技術）】

石　田　文　彦（教　授）

〈教育活動〉

授　業

大学院の「金属加工学特論」では，日常的な金属加工の現象を，金属結晶を構成する原子の運動という視点から理解できるように心がけた。

学部の「金属加工法」の講義では毎回レポートの提出を，実習では製作図と製作物の提出を求め，授業内容の定着を図った。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

**論】**①平成15年７月：『明治期における石油製油技術の発展』（共著），技術と文明，13巻２号，pp. 1-28.

②平成15年11月：『日本と中国の伝統的石油井戸掘鑿技術』（単著），中国伝統技術国際研討会 , 無錫，中国，pp. 171-178.

③平成16年３月：『旅順工科大学と南満州鉄道株式会社』（単著），技術史教育学会誌，第５巻第１・２号，pp. 12-18.

④平成16年３月：『大正から昭和初期における石油製油技術の発展―ランプ油から動力用燃料油への転換―』（単著），技術と文明，14巻２号，pp. 1-31.

**発】**①平成15年５月：『旅順工科大学と南満州鉄道株式会社』（単），日本産業技術史学会第18回年会で発表

②平成15年11月：『日本と中国の伝統的石油井戸掘鑿技術』（単），中国伝統技術国際研討会，無錫，中国で発表

学会活動への参加状況

①６月27～28日：日本産業技術史学会第18回年会に出席，②11月21～23日：中国伝統技術国際研討会，無錫，中国に出席

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①上越術総合研究所理事として講演会等を企画・実行した。

川　崎　直　哉（教　授）

〈教育活動〉

授　業

【観点１】教育方法及び成績評価面での取組

○授業形態，学習（研究）指導法等の教育方法に関する取組状況

情報科学教育特論や電気技術実験実習では，独自に製作した制御教育用教材などを授業で活用することによって，興味を高める工夫を行なっている。また，学生のレベルに応じて授業内容を分かりやすいよう説明しているが，当初の計画より遅れがちになる傾向がある。

○成績評価法に関する取組状況

成績評価基準については，シラバスや最初の授業であらかじめ学生に周知している。成績評価については，授業の属性に合わせて，期末試験の他，レポートや出席等も考慮して厳格に行っている。

【観点２】教育の達成状況

○進学や就職などの卒業（修了）後の進路の状況から判断した取組状況

学部は，平成15年度に本学としてはじめて，技術分野配属学生の卒業生を送り出した。研究室からは１名の学部卒業生が小学校教員採用試験を，１名の大学院修了生が中学校教員（技術）採用試験を受験した。学部卒業生は正規採用されなかったため，現在は臨時教員として教育現場で経験を積んでいる。また，大学院修了生は正規採用され，現在は新潟県の中学校教員として頑張っている。これ以外に，現職派遣学生が修了した。

研究指導

【観点１】学部

学部の研究指導ついては，今年度はじめて卒業研究の最終年度の指導を行った。技術分野の中心である「ものづくり」を意識した卒業研究で内容的にも満足するものとなった。また，臨床的な実践力の修得のため授業場面のビデオを利用するなどして指導を行った。

【観点２】大学院

臨床的な実践力という面からは，例えば学卒大学院生については修士論文の研究とは別に，中学校教育現場で技術分野の授業実践を半年間行わせるなど，臨床的な実践力の修得に努めさせ，併せて定期的に専門的な研究指導を行った。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

**発】**①平成15年８月：『グループウェアソフトを利用した生徒によるデータベースの作成』（共）日本産業技術教育学会第46回全国大会

②平成15年８月：『ＰＩＣを用いた制御用ボードの開発とその応用』（共）日本産業技術教育学会第46回全国大会

③平成15年11月：『教材用自律走行ロボットの製作と実践』（共）日本産業技術教育学会第16回北陸支部大会

④平成15年11月：『状態観測雑音を前提とするＬＱ制御問題』（共）第11回電気学会東京支部茨城支所研究発表会

学会活動への参加状況

①計測自動制御学会学術講演会（８月４日～６日），②日本産業技術教育学会第46回全国大会（８月９日，10日），③第11回電気学会東京支部茨城支所研究発表会（11月29日），④電気学会システム・制御技術委員会委員，⑤日本産業技術教育学会常任編修委員・理事

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①ロボカップジャパンオープン2003新潟実行委員会委員（５月１日～５日），②小中学生ロボット工作教室講師（９月20日，21日），③第１回ロボカップジュニア上越地区大会実行委員長（11月23日）

平　田　晴　路（教　授）

〈教育活動〉

授　業

大学院の技術科教育方法特論，技術科教育教材分析演習では，研究成果を基にして，実践に直接関係して役立ち，具体的な内容となるよう，鋭意心がけた。木材加工学実験実習では，受講者が各自のテーマを基にして創意工夫を行い，また適切な加工方法を検討して，椅子，壁掛け時計などを製作・完成させた。

学部の木材加工法Ⅰ，Ⅱの授業では，中学校技術・家庭科での指導内容に直接関係する内容で授業を行い，また，特にその基礎に重点を置いて指導した。CD ケース，椅子を製作させて完成の喜びを体得させ，その経験が教師となって生徒を指導するときに活かせるよう心がけた。

研究指導

大学院２年生（秋田県から派遣の現職中学校技術・家庭科技術分野担当教諭）に対して，「技術科の授業における人格形成に関する教師等の意識」と題する修士論文の研究指導を行った。その院生は研究成果の一

部を日本産業技術教育学会第16回北陸支部大会で発表した。また，大学院１年生（私費中国人留学生）に対しては，修士論文研究として，木材の心材化による硬さの変化に関する指導を行った。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

①平成15年８月：平成15年度新潟県教育職員免許法認定講習講師として「木材加工（製図及び実習を含む。）」を担当した。

②平成15年９月：信州大学教育学部非常勤講師として「木材加工基礎」を担当した。

③平成16年２月：信州大学教育学部非常勤講師として「木材加工学」を担当した。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成15年６月：『両刃のこぎりの縦びきにおける身体の疲労について』（共著）　日本産業技術教育学会誌第45巻第２号　PP. 75-81

**発】**①平成15年11月：『技術科の授業における人格形成に関する教師の意識』（共）　日本産業技術教育学会第16回北陸支部大会

②平成15年11月：『技術科の授業における人格形成に関する生徒の意識』（共）　日本産業技術教育学会第16回北陸支部大会

**共同研究の実施状況**

①『手びきのこぎりのひき曲がりに関する研究Ⅳ』（他大学教官との共同研究）

②『２進数理解における２進－10・16進数変換器の効果について』（教育現場との共同研究）

**学会活動への参加状況**

①日本産業技術教育学会評議員，②日本木材学会林産教育強化委員，③11月18日：日本産業技術教育学会第16回北陸支部大会出席

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①２月：「家庭，技 術・家庭科を語る会」講師（『のこぎりびきについて』を講演，②３月：「上越技術と家庭科教育の会」会報 No.27「少人数学級への思い」を執筆

**黎　　子　椰**（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

学部「中国語・中国事情Ⅰ」の授業においては，中国の歌，詩，映画などを紹介し，「私の見た中国」という課題を与えた。その中で関心を持っている問題についての調査を行わせ，より一層異文化に対する理解と関心を深めることができるようにした。また，履修生全員（74名）に「聞く，話す，読む，書く」の演習を繰り返させながら，日常的によく使う基本語句，文型を身に付けられるような授業を心がけた。

**研究指導**

大学院生３人の修士論文，学部生２人の卒業論文を指導した。学部の研究指導においては，教育に関わる臨床的な実践力を修得させるために，レゴブロックを利用した問題解決学習の授業実践や，コミュニケーションロボットを現場に適用する教育実践を行わせるように工夫した。

大学院の研究指導においては，２人の現職派遣教員が教育現場から持ち込んできた課題を修士論文のテーマとし，より高度な臨床的な実践力を修得させるように努めた。院生と学部生はそれぞれの研究成果を学会で計４件口頭発表した。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

論】①平成15年５月：『５軸加工機における回転軸系の運動誤差原因の診断に関する研究（第１報）－回転誤差の診断法と診断手順－』（共著）精密工学誌第68巻第５号 pp.703-709

②平成15年６月：『カム式位置決め装置の残留振動の抑制を考慮したカム曲線の最適化』（共著）日本機械学会論文集Ｃ編第69巻第682号 pp.1684-1690

③平成15年７月：『拮抗型ワイヤ駆動機構における内力の回転剛性に及ぼす影響』（共著）日本機械学会論文集Ｃ編第69巻第683号 pp.1798-1840

④平成16年２月：『非円形断面ＮＣ輪郭加工のための最適アルメデス螺線補間法』（共著）日本機械学会論文集Ｃ編第70巻第690号 pp.531-538

発】①平成15年８月：『技術とものづくり「立体構想ソフト」の試作』（共）日本産業技術教育学会第46回全国大会講演要旨集 p.20

②平成15年８月：『インターネットを利用したコミュニケーションロボットの試作』（共）日本産業技術教育学会第46回全国大会講演要旨集 p.24

③平成15年８月：『パートタイム自立型制御を用いたロボットの試作と協同制御』（共）日本産業技術教育学会第46回全国大会講演要旨集 p.25

④平成15年８月：『技術教員養成における CAD/CAM 教育』（単）日本産業技術教育学会第46回全国大会講演要旨集 p.75

⑤平成15年10月：『回転送り軸の運動精度に関する研究（第２報）―回転軸の位置偏差測定法―』（共）2003年度精密工学会秋季大会学術講演会講演論文集 p.162

⑥平成15年10月：『一輪車に乗るためのバランスの取り方に関する力学的検討』（共）第24回バイオメカニズム学術講演会 SOBIM2003講演予稿集 pp.33-36

⑦平成15年11月：『最適アルメデス螺線補間工具経路による輪郭加工誤差』（共）日本機械学会鹿児島地方講演会講演論文集 pp.89-90

⑧平成15年11月：『一輪車に乗るための太田式指導法に関する力学的検討（第１報）バランスの取り方について)』（共）日本産業技術教育学会第16回北陸支部大会講演論文集 p.18

⑨平成16年３月：『マルリメディアを利用したディーゼルエンジンの学習教材の開発－燃料噴射技術を中心とした学習－』（共）日本機械学会関東支部第10回総会講演会講演論文集 pp.281-282

共同研究の実施状況

①バーチャルリアリティ機能を有する旋盤操作技能教育・訓練用シミュレータの開発　代表者：黎　子椰　科学研究補助金基盤研究Ｃ，

②５軸マシニングセンタの運動精度の評価法に関する研究　代表者：垣野義昭（京都大学教授）サーボ研究会

③問題解決学習のカリキュラムと教材の開発　研究協力者：佐野浩（新潟県荒川中学校教諭）

学会活動への参加状況

①平成15年８月９日～10日：日本産業技術教育学会第46回全国大会出席，②平成15年10月４日～５日：第24回バイオメカニズム学術講演会出席，③平成15年11月８日：日本産業技術教育学会北陸支部大会出席

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①上越市中小企業研究開発等支援資金融資委員会委員

大　森　康　正（講　師）

〈教育活動〉

授　業

大学院では，最近の研究成果を取り込んで内容構成を研究し，マルチメディアの活用，情報処理センターに導入されている講義支援システムを用いて，授業の記録などを映像で配信するなど，内容の理解を高める工夫や，予習・復習が容易になるような工夫を行った。

学部では，最近の学説や理論など中心に原理原則についてわかりやすくなるように内容構成を研究し，実際の講義では大学院と同様に講義支援システムを活用し，内容の理解を高める工夫や，予習・復習が容易になるような工夫を行った。

研究指導

生活・健康系講座（技術）修士課程在籍の院生３名，技術分野在籍の学部生2名の研究指導を行った。主な研究内容は，適応型ヘルプデスクシステムの開発，ID に基づく教材開発，情報モラルに関する教材開発，GIS の教育への応用，３D アニメーションを活用した史跡教材の開発など，である。その成果の一部は日本産業技術教育学会で発表している。

その他の教育活動（学外を含む。）

①平成15年４月～６月：新潟県立看護短期大学非常勤講師として「情報管理学」を担当した。

◎特色ある点等

情報通信機器を用いて学生が授業および研究上の注意点，学習目標，その日の授業内容などをわかりやすく伝えるように教育方法の研究を行い実施した。また，システムを用いて評価も行った。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

発】①平成15年11月：不登校生徒や教室に入れない生徒のための遠隔授業システムの基本構想（共）日本産業技術教育学会北陸支部研究発表会

②平成15年11月：適応型ヘルプデスクシステムにおけるユーザ・レベルの設定方法について（共）日本産業技術教育学会北陸支部研究発表会

③平成16年１月：e-learning システムを活用した講義に対する学生評価について　（単）日本産業技術教育学会第19回情報分科会

④平成16年１月：産業技術教育学会第19回情報分科会にて第２セッションの座長を行った

学会活動への参加状況

①11月８日：日本産業技術教育学会北陸支部大会出席，②１月24～25日：日本本産業技術教育学会情報分科会出席，③３月９～11日：　情報処理学会全国大会出席，④３月23～24日：　電子情報通信学会ソサエティ大会出席

◎特色・強調点等

本年度は，科学研究費補助金「教師研修を対象とした適応型遠隔教育支援システムに関する研究」（研究代表者：大森康正）を中心に，遠隔教育支援システムに関する研究を行い，学外の研究者とともに，技術教育における遠隔教育のあり方について議論を行った。特に，遠隔教育では難しい実験実習の方法や適応型教育システムにおける知識の表現方法について特徴がある。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①11月：NEC　C&C ユーザ会において講義支援システムの紹介と実践例および評価に関しての講師を務め

た，②電子情報通信学会知能ソフトウェア工学研究専門委員会委員，③先進的教育用ネットワークモデル地域事業推進委員（上越市），④新潟県スクールネット防犯連絡協議会委員，⑤三和村高度情報化推進委員会委員

**◎社会への寄与等**

・上越市や三和村などの各委員会の委員として，地域の情報化における政策形成，地域の教育ネットワークの構築に積極的にかかわった。また，研修会などの講師として遠隔教育を実施しようと考えている各機関の情報技術の向上に寄与した。

**【生活・健康系教育講座（家庭）】**

**大　瀧　ミドリ**（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

【観点１】教育方法及び成績評価面での取り組み

○授業形態，学習（研究）指導法等の教育方法に関する取り組み状況

大学院の児童学研究セミナーでは，学部３・４年生，博士課程の研究生の参加を認めたため，多様な視点から内容のある発展的なゼミを行うことが出来た。

また，大学院の子どもの家庭教育論では，ここ数年恒例にしていた受講者の提出したレポートを使用する紙上討論会を授業と並行して行うことができなかった。来年度はぜひ取り入れたいと考えている。

学部では，「保育学実習」について時間的余裕の必要性を昨年度の学生から指摘された。今年度は，実習時の各自のビデオ映像の編集作業を簡素化した。多くの学生から「今迄で一番勉強した」との評価を得ることができた。来年度も今年の授業運営を踏襲したいと考えている。

また，学部の「保育学」では，今年度も乳幼児と保護者の生活の一部分を実際に体験するため市民プラザに見学にゆく時間を確保した。この手法は，授業の導入として効果的であると受講学生から評価を得た。昨年度の反省から開講時間を午前中に組むことを試みたが，本年度は不可能であった。来年また検討したいと考えている。

○成績評価法に関する取り組み状況

受講者に対して成績評価方法は明示したが，評価基準を明示しなかった。今後検討したい。

【観点２】教育の達成状況

○進学や就職などの卒業（修了）後の進路の状況から判断した取り組み状況

ゼミに所属していた学部４年生２名は，全員第一希望の職種に正規採用になった。１名は公立小学校教諭，１名は私立幼稚園の教諭である。ゼミでは就職に関して具体的な指導はしていない。しかし，私のゼミは，手抜きできないとの「うわさ」が学生間に広まっており，ゼミを希望する学生自体，かなり「根性」のある学生という特長を有している可能性がある。また，プレスメント・プラザで就職指導を定期的・継続的に受けたことが，彼等の就職には非常に有効であったものと推察している。

ゼミに所属していた大学院生２年生の学生は，在学中に隣県の公立保育園保育士の採用試験に合格し就職したため，2年間大学院を休学し，本年度復学したものである。幸いにも職場の理解を得て，無事に修了することができた。　学部３・４年生及び大学院生の合同ゼミを行うことは，相互的な学びだけではなく適度な緊張感を学部４年生と大学院の２年生に与えており，それらが彼らのやる気を支えているようにも思われる。

**研究指導**

【観点１】学部

母親と子どもの遊び場面におけるものの操作における生活文化の伝承に関する分析を行うことを目的に研究指導をおこなった。１名の学生が交通事故に遭いその後遺症に悩まされるなど，身体的・精神的にかなり厳しい状況におかれていた。しかし，ビデオ映像を１コマレベルで分析する作業をこなし，卒業研究を纏め上げ，感動の涙を流していた。研究を纏め上げる過程で習得した諸能力は，当該学生の他者関係のダイナミクスを捉える目を育むことができたと確信している。

【観点２】大学院

修士課程の学生には，データの収集，データ整理及び分析のための統計処理と結果の解釈，論文作成，プレゼンテーション等について実践的指導を行った。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

①平成15年８月：宇都宮大学非常勤講師（大学院）として「児童学特論演習」を担当した。

**◎特色ある点等**

①ゼミに所属する学部生と大学院生の合同ゼミ形式で授業を行うことで，学習の相乗効果を上げることができた。特に，良好な人間関係を基礎にして授業を行うことができたため，学習効果を上げることができた。

②講義・実習・ゼミのいずれにおいても実際の子どもたちの姿に触れる時間を確保することで，学習対象の実像を視野に入れた学習を重視している。

③講義では一方向の授業になら無いように，優秀なレポートを当該学生の許可を得て，教材として受講者全員に配付することを行っている。レポートのコピー配付という静的な手法による情報提供は，授業時の学生の発言とは異なった学習効果をもたらすことを実感している。他教官にも推奨したい学習手法である

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成15年９月：『保育園児のままごと遊びの継続時間と既得知識における経時敵変化』（共著） 上越教育大学研究紀要　第23巻１号　pp.275-286

②平成16年３月：『保育園児のままごと遊びにおける意味知識の経時的変化』（共著） 上越教育大学研究紀要　第23巻２号　pp.731-740

**他】**①平成16年３月：『子どもが生活文化を体得する過程に関する実証的研究』（単著） 平成12－15年度科学研究費補助金研究成果報告書

**共同研究（幼，小，中，高等学校及び特殊教育諸学校教員との共同研究を含む）の実施状況**

①生活情報を活用したマルチメディア教材の開発と評価法に関する実践的研究　代表者：滝山桂子（上越教育大学教授）上越教育大学研究プロジェクト

**学会活動への参加状況**

①６月28－29日：日本家庭科教育学会第46回大会出席，②国際幼児教育学会理事，③日本家政学会評議員

**◎特色・強調点等**

スクリプトに関する研究及び生活文化を体得する過程に関する研究では，縦断的に40組を超える母子を研究対象としてマイクロ・アナリシスの手法を駆使し，子どもが生活文化を体得する過程について微細な分析を行った。他に例を見ない先進的なものである。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①家事調停委員（最高裁判所），②ベビー健康プラザ相談員（上越市），③育児ボランティア講座講師（上越

健康福祉環境事務所），④上越青少年問題協議会委員（上越市）

◎社会への寄与等

・家事調停委員として特に子どもの最善の利益が考慮されるように調停に関わった。

・ベビー健康プラザ相談員及び育児ボランティア講座講師として地域の育児支援に関わった。

## 佐　藤　悦　子（教　授）

### 〈教育活動〉

#### 授　業

学部の製作実習では，履修者が製作技術や製作経験が様々であるため，製作に必要な基礎技術・技法を理解し，習得できるように見本やビデオ等を積極的に取り入れ授業を行った。また，昨年度に引き続いて外部業者の協力を得てミシンとロックミシン操作を安全にかつ適正に取り扱えるよう解説し，操作実習を兼ねた講習を授業内に取り入れた。学部の被服学関連の授業は，講義・実験・実習の内容を関連づけて構成しているが，以前よりスリム化した内容・履修形態であるため，どこまで必要な内容をクリアできるかが課題である。専門セミナーでは，昨年度の内容を学生と共に見直し，改善できることを検討しながら授業計画を立てて実施した。

大学院授業では，履修学生の希望を取り入れ，教科を意識した内容構成とし，特に演習形態を多く取り入れた。

#### 研究指導

衣服の着脱動作ならびに被服商品の消費性能に関する研究として，学生が生活に密着した事象から課題を見い出し，研究テーマに発展できるよう心がけて指導を行っており，この点が特色でもある。本年度は，学部学生では，季節感のある服装を色彩の観点からとらえ，季節感と嗜好色の関連性を明らかにするための指導助言を行った。大学院生では，衣服のボタンかけはずし動作とボタンの位置設定との関わりについて明確にするための指導・助言を行った。また，本年度は，セミナー共通の課題として「衣生活」に関する事象を取り上げ，各自の課題からアプローチを試み，検討・討議した。

#### その他の教育活動（学外を含む。）

教職講座Ⅳ「教員採用試験直前講座」家庭（衣生活）講師

### 〈研究活動〉

#### 研究成果の発表状況

**論】**①平成 16 年２月：「越後の縞木綿―幕末から明治期の縞帳調査を中心として―」（共）　新潟県生活文化研究会誌，No.10

**発】**①平成 15 年 11 月：「衣服のボタンかけはずしにおける所要時間と動作特性」（共）　日本衣服学会第 55 回年次大会研究発表

#### 学会活動への参加状況

①平成 15 年 11 月８日：日本衣服学会第 55 回年次大会出席　②平成 16 年３月 27 日：日本家政学会被服心理学部会春季セミナー出席

### 〈社会との連携〉

#### 社会的活動状況

①日本繊維製品消費科学会北陸支部幹事，　②日本家政学会被服心理学部会地区委員

滝　山　桂　子（教　授）

〈教育活動〉

授　業

【観点１】　方法

担当する３つの大講義は，適正な授業規模ではなく，よりよい教育サービスの提供が困難であった。よって，次のような対策を講じた。即ち，学生の学習意欲と集中力を途絶えさせないために，大学で本年設置した大型プロジェクターと講義支援システムを活用した。後者を用いて，毎回ミニ・レポートを課し，質問の機会を与え，次回の授業でフィード・バックするという方法を導入した。

【観点２】　進路

本ゼミに所属した卒業生２人・修了生１人は，全員，現役で就職できた（教員２，企業１）。いずれも家庭分野で身につけた専門的知識・技術を社会に還元する機会を得ることができた。

研究指導

【観点１】　学部

食品ＣＭに対する注視状況の克明な記録からCMの特徴を分析した。食教育のレデイネスとして，視聴者の実態の捉え方についての研究指導を行った。

【観点２】　大学院

授業分析に質的分析を導入するための指導を行った。即ち，学習者の本音にアプローチする手法として自由記述を分析するテキストマイニング法を試行的に実施した。また，定義型自由記述文の調査から，食生活に浸透している中食を取り上げ，これに対する価値認識構造図作成について指導した。

◎特色ある点等

研究指導では，学生・院生が望む研究テーマに沿った指導を実施した。また，授業分析の方法として，学習者の本音にアプローチする方法であるテキストマイニング法，視線分析について試行した。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

**論】**①平成15年10月：『テレビ放映された食品ＣＭの実態分析－機能的ベネフィットと心理的ベネフィットに着目して－』（共著）日本家政学会誌 第54巻第10号　pp.855-866

**業】**①平成15年４月：『子どもの主体的な学びを引き出すための家庭科の授業を求めて（2）－小学校家庭科「体のため，買い物上手になろう」の授業における導入の工夫』（共著）家庭科教育第77巻４号 家政教育社 pp. 65-72

②平成15年６月：『生活資源と暮らしの営みに関わる授業開発　2－8わかりやすい生活情報を考えよう』生活主体を育む家庭科カリキュラムの理論と実践 日本家庭科教育学会家庭科カリキュラム研究会 pp.118-123

**発】**①平成15年10月：『生活システムの概念を導入した中学生の衣生活情報の実態分析』（共）日本家庭科教育学会平成15年度例会研究発表

**他】**①平成15年９月：『生活情報を活用したマルチメデイア教材の開発と授業実践－児童・生徒の生活課題に根ざして－』（共著）平成13－14年度上越教育大学研究プロジェクト報告書（研究代表者 滝山桂子）全127p　pp. 3- 7, pp.84-108

②平成16年３月：『生活情報の活用による選好評価の変容を測定する方法の開発－マルチメデイア教材を用いて－』（単著）平成14－15年度科学研究費補助金研究成果報告書（研究代表者 滝山桂子）

**共同研究の実施状況**

①生活情報を活用したマルチメディア教材の開発と評価法に関する実践的研究　代表者：滝山桂子　上越教育大学プロジェクト研究，②北陸地区における家庭科カリキュラム研究　代表者：荒井紀子（福井大学教授）日本家庭科教育学会支部研究

**学会活動への参加状況**

①北陸地区開催日本家庭科教育学会全国大会の実行委員　②日本家庭科教育学会編集査読委員

**◎特色・強調点等**

人間が生活価値を追求するために役立つ生活情報に着目し，この所在と伝達の実態の解明に注目している点で独創的である。本年は，食情報の一つとしてテレビＣＭを取り上げ論文にまとめた。生活情報を教育的情報に発展させることが出来，この所在と伝達についての研究は，教育実践に貢献できる。

**立屋敷　かおる**（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

平成13年度から開始されたカリキュラムを履修した学生が４年生となり，新カリキュラムを一通り実践した。この経験から，新カリキュラムは教員養成に必要な内容のミニマムエッセンシャルを満たすことが極めて難しいことがより明らかとなった。授業科目の増設あるいは単位数の増加も視野に入れて検討することが必要との感を一層深めた。大学院特論では，昨年度に引き続き自身の研究を軸にして食を総合的に取り上げ，教養的な内容に専門的な内容を加えて講義している。大学院特別実験では小・中学校の授業を視野に入れた内容を加えている。

栄養教諭の制度化に関してタイムリーな講座を学部，大学院ともに開催する必要を感じつつ，具体的な方策に至らなかった。今後，単年度あるいは短期的に授業を開設しやすいシステムの構築が具体化するよう切望している。

**研究指導**

昨年度に引き続き，学部生，院生が研究を通してものの見方や考え方，洞察力などを錬磨することを目標とした。学部，大学院ともに，各自の研究課題と学校教育や教科との関連について明確にし，常に認識するよう指導した。また，研究課題と併行して，学校教育における食の教育や栄養教諭の制度化などについて共通のセミナー課題として取り上げ，様々な観点より検討・考察することを課した。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

①新潟県立看護大学非常勤講師「臨床栄養学」（30時間）

②新潟県立看護短期大学専攻科非常勤講師「保健栄養論」（20時間）

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**① Food deprivation-induced changes of liver cytosolic alcohol dehydrogenase activities in infant, adult and aged rats.（共）Japanese Journal of Physiology, 53 (Supplement)　in press (2004)

② Comparisons among three life-stages in capsaicin-induced changes of plasma energy substrate levels in rats.（共）Japanese Journal of Physiology, 53 (Supplement)　in press (2004)

③ Species- and sex-differences of mouse liver cytosolic alcohol dehydrogenase activities.（共）Japanese Journal of Physiology, 53 (Supplement)　in press (2004)

④グルココルチコイド投与と身体懸垂による骨格筋 dipeptide レベルの応答特性.（共）体力科学　52

p. 839(2003)

⑤ラットの骨格筋の重量とタンパク質量に及ぼす絶食の影響.（共）体力科学　52　p. 858(2003)

⑥β2アゴニスト投与によるラット血漿内エネルギー基質レベルの量－応答特性.（共）体力科学　52　p. 918(2003)

⑦グルココルチコイドによるラット血漿内エネルギー基質レベルの変動.（共）体力科学　52　p. 922(2003)

⑧絶食によるラット血漿内エネルギー基質レベルの応答－幼齢期，成熟期，高齢期の比較－.（共）体力科学　52　p. 927(2003)

**発】**①小・中学生における箸と鉛筆の持ち方とそれらの持ち方の関連.（共）日本調理科学会平成15年度大会研究発表要旨集 p. 59(2003)

②食に関わる動作における利き手と非利き手のパフォーマンスの差とトレーニング効果.（共）日本調理科学会平成15年度大会研究発表要旨集 p. 59(2003)

**共同研究の実施状況**

①β2アゴニストおよび糖質コルチコイドによるエルゴジェニック効果の分子生理学的研究，平成14－16年度科学研究費補助金（基盤研究（B)(2)）研究，代表者：今泉和彦（早稲田大学教授）

**学会活動への参加状況**

①９月４日～５日：日本調理科学会平成15年度大会（神奈川）出席，　②９月19日～21日：第58回日本体力医学会大会（静岡）出席，　③日本生理学会評議員，日本体力医学会評議員，日本運動生理学会評議員

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①上越市食の安全を考える市民会議委員

**得　丸　定　子**（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

学部の授業では，家庭科の指導法，教材に関すること，「いのち教育」，食生活に重点を置いた生命健康教育に関する授業を展開した。大学院の授業では，「Death Education」の教科書の英書講読を中心に「いのち教育」について多面的に検討した。

**研究指導**

学部学生の研究は「いのち教育」の教材開発に取り組み，授業実践をおこなった。大学院学生は，自殺予防教育と子どものターミナル・ケアに関する授業法・教材研究について検討した。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

教職講座：平成16年１月教職講座Ⅱ「家庭」担当

**◎特色ある点等**

生命尊重教育，心の教育，生きる力と関連する「いのち教育」の教育活動を行った。「死生学」を根底に置く「いのち教育」の取り組みは教育の基礎となる重要な内容であり，社会的・時代的要請があるものの，我が国の学校教育ではまだ草創的段階である。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成15年６月：『「いのちと生活」の授業ア・ラ・カルト』（共著），『生活主体を育む　家庭科カリ

キュラムの理論と実践所収，pp.35-45

②平成15年９月：『「日本的いのち教育」のためのマルチメディア教材開発～自殺・トラウマに関する教材～』（共著），平成15年度松下視聴覚教育助成成果報告集，pp.73-84

③平成15年９月：『死別のトラウマに関する教材開発』（共著），教材学研究（日本教材学会），pp.173-176

④平成16年１月：『葬送儀礼・慣習にみられる「いのち教育」―昭和初期から高度成長期以前における葬送儀礼の意義―』（共著），日本家庭科教育学会誌 （日本家庭科教育学会），46巻４号，pp.340-350

⑤平成16年２月：『Death Education in Japan』（単著），『The proceedings of the international seminar “Why should we do death preparation education?”』（KOREA）所収，pp.61-82

⑥平成16年３月」『大人もこどもも「いのち教育」を』（単著），新潟県教育月報648号（新潟県），pp.４- ５

⑦平成16年３月：『スピリチュアル・ケアとスピリチュアル・エデュケーション』（単著），ターミナルケア14巻２号（三輪書店），p. 85

⑧平成16年２月14日：『Effect of Rooibos Tea (Aspalathus linearis) Extract on Lipid Peroxidation in Vitamin E Deficient Rats』(共著)，ITEL Letters on batteries , New Technologies & Medicine, Vol. 5, No. 1 (2004)

**発】**①平成15年５月：『「いのち教育」におけるスピリチュアリティについて～定義の考察とＣＤ－ＲＯＭ教材の開発～』（共） 日本家政学会第55回大会

②平成15年６月：『予後不良の子どもに関する看護教育～教材開発と授業実践・評価～』（共）日本家庭科教育学会第46回大会

③平成15年６月：『自殺予防教育への取り組みの試案』（共）日本家庭科教育学会第46回大会

④平成15年６月：『ペットロスの視点からみた「いのち教育」の展開』（単）日本家庭科教育学会第46回大会

⑤平成15年11月：『子供のターミナルケアに関する個人学習用 CD － ROM 教材の開発』（共）第27回日本死の臨床研究会年次大会

⑥平成15年11月：『「いのち教育」におけるスピリチュアリティについて』（共）第27回日本死の臨床研究会年次大会

⑦平成15年11月：『ペットロスの視点からみた「いのち教育」』（共）第27回日本死の臨床研究会年次大会

⑧平成15年11月：『「少年犯罪予防教育」のための教材開発と授業実践』（共）第27回日本死の臨床研究会年次大会

☆⑨平成16年２月：The international seminar “Why should we do death preparation education?” (Korea) にて「日本の Desth Education」に関する講演

**他】**①平成16年３月：平成14年度～ 15年度科学研究費補助金研究成果報告書「日本と近隣諸国における「いのち教育」の比較検討」作成

②平成15年６月：「家庭科カリキュラムの理論と実践」日本家庭科教育学会北陸地区カリキュラム研究会編作成

**共同研究の実施状況**

①日本と近隣諸国における「いのち教育」の比較検討　代表者：得丸定子（上越教育大学助教授） 平成15年度科学研究費補助金，②学校教育における自殺予防教育の取り組み　代表者：得丸定子　平成15年度日本

教育大学協会研究補助金，③「いのち教育」における宗教性・スピリチュアリティの関係性と具現について　代表者：得丸定子　平成15年度上越教育大学研究プロジェクト，④福祉・環境・ジェンダーを視点とした家庭科の横断的カリキュラムの構造化と授業開発　代表者：荒井紀子　平成15年度科学研究費補助金

**学会活動への参加状況**

①11月８～９日：日本宗教学会第62回学術大会出席，　②平成14年度日本死の臨床研究会企画委員，　③The International Association for Near-death Studies 2003 North American Conference 出席，　④5th Asia Pacific Hospice Conference 出席

**国内外の学術賞の受賞状況**

①2月28日：Letter of Gratitude 受　賞（Korean Organ & Tissue Program）『Why should we do death preparation education ？』

**◎特色・強調点等**

日本的「いのち教育」のあり方を探るため，漢字，儒教，仏教等の文化を基底に共有していると考えられる近隣諸国における「いのち教育」に関する調査研究や，「いのち教育」とスピリチュアリティの関係性の検討は先駆的な取り組みであり，「いのち教育」の新たな展開に貢献できるものと考えられる。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①上越市情報公開・個人情報保護審査会委員，②上越市住民基本台帳事務に係る本人確認情報保護及び苦情処理委員会委員，③日本家庭科教育学会北陸地区会カリキュラム検討委員会委員，④「富山・生と死を考える会」世話人，⑤日本死の臨床研究会企画委員，⑥５月22日長野県総合研修センターにおける「生徒指導専門研修講座」講師，⑦７月４日，16日，29日：「新潟県女性財団地域セミナー　in 糸魚川」講師，⑧８月18－19日：新潟県立看護大学「いのちと看護を考える会」と共同で「第4回いのち教育実践のための研修講座」を新潟県立看護大において開催，⑨11月８－９日：第53次新潟県教育研究集会第８分科会の共同研究者，⑩11月26日：青海町男女参画事業職員研修会講師，⑪２月28日：「International Seminar :Why should we do death preparation education?」講師

**◎社会への寄与等**

・上越市情報公開・個人情報保護審査委員，上越市住民基本台帳事務に係る本人確認情報保護及び苦情処理委員会委員として，市民への情報公開に関する審議に積極的にかかわった。

・「第４ 回いのち教育実践のための研修講座」を開催し，「いのち教育」の実践をめざす全国の市民，小・中・高等学校教員，大学教員等の研修・研鑽に寄与した。

**細　江　容　子**（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

【観点１】教育方法及び成績評価面での取り組み

○授業形態，学習（研究）指導方法等の教育方法に関する取り組み状況

学習への動機付け：家庭経営学領域（家族関係，家庭経済）であるので，学生が日常生活の中で，特に日頃，疑問に思う身近な事柄をとらえながら授業の導入を行い，知識の習得と同時に，そのような問題がなぜ生じるかを考えさせる授業の展開によって，思考力や判断力を育てる授業を展開した。

学習・研究目標確立のための指導：将来，家庭科の教員として授業を行う可能性のある学生たちに対し授業での知識の習得と同時に，思考力や判断力を育てるために，ディベートや発表などの時間を設けて授業を

展開した。

事前・事後の学習：文献，資料等の提示により事前・事後の学習をさらに深める方法をとった。

○成績評価法に関する取り組み状況

各授業における学習目標を知識，思考，判断，表現，意欲といった項目を基に，その目的達成のための授業の計画と方法を考え，その視点から成績評価をおこなうと同時に，学生からの授業評価を得ることで，自己の授業改善を行った。

**研究指導**

【観点１】学部

教育に関する臨床的な実践力習得のための指導：各授業における学習目標を知識，思考，判断，表現，意欲といった項目を基に，その目的達成のための授業計画と方法によって，学生が教育現場に出た時の新指導要領での評価基準への学生自身の応用も可能となる授業の展開を図った。

【観点２】大学院

教育に関するより高度な臨床的実践力習得のための指導：大学院においては特に思考力を身に付けることをねらいとし，レポートの報告やディスカッションを多く行う授業を実施した。また，指導・研究内容に関わる国際会議に出席する事により，最新の研究・教育に関する内容について，指導できるように努力した。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

①出前講座講師（東京都教育委員会，テーマ「家族と福祉」）

**◎特色ある点等**

授業においては，導入部とその展開に関する方法を工夫する中で，学生達が授業に興味・関心を持つことが出来るようにすると同時に，学生の長所を積極的に評価し，学生の意欲を引き出すための努力を行った。そのことがとりもなおさず，学生達が児童・生徒を指導する教育現場において，役立つことと考えた。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**著】**①平成15年３月１日『少子化社会の家族と福祉』（共著）ミネルヴァ書房

**発】**①平成15年11月25日，The 7th Asia/Oceania Regional Congress of gerontology，"Toward Spouse and Evaluation of Sex Life on the Part of Middle-Aged and Elderly Women"

②第23回家政学会家族関係学部会セミナー，「子どものウェルビーイングと家族・地域社会についての実証的研究」（家族関係学部会研究活動委員会　代表：長津美代子，群馬大学，事務局：細江容子）

**他】**①平成15年３月10日『若者が〈社会的弱者〉に転落する日』（単著）家庭経営学研究 No 39

**国際研究プロジェクトへの参加状況**

①「東北アジアにおける高齢者扶養と高齢者のウェルビーイング」（代表：Shu-Tzu Cheen, Shhih Chien University，事務局：細江容子），②「Cross-Cultural Studies on Family Life Education」（代表：Shu-Tzu Cheen, Shhih Chien University，事務局：細江容子）

**学会活動への参加状況**

①第12回日本家族社会学会出席，②第23回家政学会家族関係学部会出席

**◎特色・強調点等**

The 7th Asia/Oceania Regional Congress of gerontology，"Toward Spouse and Evaluation of Sex Life on the Part of Middle-Aged and Elderly Women" の研究は，家族，夫婦関係のあり方に関する西洋文化圏との差異を示す結果であり，西洋文化圏の研究者から大変興味深い研究であるとの評価を受けた。また，国際比較調査等で高齢者扶養や介護の研究を行う中で，高齢者のウェルビーイングがコミュニティー形成の在り方と深い

関わりを持つとの認識にいたった。さらに，このコミィニィテー形成は子どもの社会力とも関係しており，子ども，高齢者のウェルビーイングに関する研究を行っているところである。これらの研究はまだ十分に研究が行われていない分野であり，調査・研究の結果が，社会に貢献できるとの強い認識を持っている。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①高等学校学習指導要領評価基準策定委員会委員（国立教育政策研究所），②上越市労働協議会委員（新潟県上越市労政事務所）

◎社会への寄与等

・高等学校学習指導要領評価基準策定委員会委員（国立教育政策研究所）として，新学習指導要領の評価基準の策定に当たると同時に，上越市労働協議会委員として，上越市の労働問題（特に若年労働，女性労働）に積極的に関わった。

光　永　伸一郎（助教授）

〈教育活動〉

授　業

食という身近な問題を，科学的視点からとらえることに重点をおいて授業を行った。学部授業では，家庭科の授業を進めるうえで必要と思われる食に関する基礎知識を解説するとともに，特定保健用食品など話題性の高いものについても言及した。大学院授業では，食についての興味を発展させることに主眼をおいた。マスコミで取り上げられることの多いテーマを優先的に取り入れ，その科学的背景を体系的に理解できるような解説を行った。

研究指導

卒業研究の指導は，食物（特に穀類）を扱った実験を中心に行った。単にデータを得るための繰り返し実験は排除し，教育現場でも応用することの可能な基礎実験を中心に指導を行った。研究の過程において得られたデータについては，議論の時間を十分に確保した。卒業研究を通して，ひとつの自然現象を解明し，それを文章としてまとめるまでの一連の作業をマスターできるように配慮した。

その他の教育活動（学外を含む。）

全学１年生対象の体験学習において，主食である穀類の栄養や文化について紹介した。その内容については，十分な専門性をもたせたうえで，１年生にも理解可能な平易なものになるよう心がけた。また，学生にとって目新しいいくつかの穀類については，実際に調理をしながら解説した。

また，４年指導生が担当した教育実習の授業は必ず参観し，特に実験部分の実施にあたっては，器具類の補助や適切な助言を提供した。

◎特色ある点等

講義内容と実験との整合性に重点をおいた。講義においても具体的に食品や実験器具を提示するといった工夫をした。食研究の現状や，食の抱える将来の問題点について，効率的に理解できるよう，教科書・資料等を厳選した。特に，食物関連の新聞記事については，タイムリーな話題をピックアップし，分かりやすい解説を加えた。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

**論】**①平成16年：『Regulatory Mechanisms of $\alpha$ -amylase expression in germinating rice seeds』（共著）Current Topics in Plant Biology（印刷中）

②平成16年３月：『クリ緑葉からのゲノム DNA の単離』（共著）上越教育大学研究紀要　第23巻　第２号　pp.741-751.

③平成15年７月：『酸処理にともなう小麦種子内のα－アミラーゼ活性の変動を明らかにし，酸性雨による種子品質の劣化を防止する』（単著）エリザベス・アーノルド富士財団　平成14年度報告書　pp.97-103.

**◎特色・強調点等**

研究に用いたイネ，クリ，コムギは，いずれもデンプン種子を有する植物性食品である。デンプンは主要なエネルギー源であり，いずれの研究活動も食科学領域における重要性は大である。内容的には貯蔵デンプンの合成・分解について分子レベルで解析しており，学術的価値も高い。また，デンプン種子は実験教材に用いられることも多いため，これら研究成果は教育現場にも反映することができる。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①平成15年９月：上越市環境情報センター主催「おとなの環境教室」において，「食と環境問題」のセクションを担当した。

**◎社会への寄与等**

・上越市環境情報センター主催の「おとなの環境教室」において，「食と環境問題」という題目のもとに，講演を行った。また，そのなかで「食品と環境に関する実験」と題して，米のとぎ汁に含まれる汚染物質に関する実験を行った。

**藤　木　一　浩**（助　手）

**〈教育活動〉**

**授　業**

学部３年生対象の授業科目「被服学実験」において，昨年度に引き続いて，界面活性剤の性質を理解する上で重要な「乳化の型の判別」及び「乳化力」の実験項目について，望ましい結果が得られるように実験操作を改善し，学習効果や内容の理解を高める工夫を行った。授業に際しては，実験の前に事前準備のレポートを課し，コメントを付して返却することで，学生自身が実験の目的を正確に把握するとともに内容の理解度を高められるように工夫した。また，学部１年生対象の授業科目「体験学習」において，高分子材料のリサイクルに関する講義と簡単な実験を担当した。この授業においては，経済及び技術の発展による我々の豊かな日常生活と，それに伴う環境に与える負荷との関連性について，常に問題意識を持てるように学習内容を配慮した。

大学院生対象の「被服学特別実験Ⅰ，Ⅱ」では，実験操作の目的を事前レポートとして調べさせ，コメントを付して返却することにより，実験結果と対比させて内容を正確に理解できるように工夫した。

いずれの授業においても，試薬や実験器具の取り扱い方，及び実験操作の仕方については詳細に説明し，安全確保に対する認識を各自が十分に身につけるように配慮した。また，次年度以降の授業内容や方法の改善に反映させるべく，授業に対する感想や意見・要望等を自由に記述させた。

成績評価法に関する取組としては，レポートの書き方等に関する指導を十分に行い，特に提出の締切期日を厳格にして，評価対象の重要項目とした。しかしながら，評価基準の明示については曖昧であったと思われる点もあるので，昨年度に引き続き今後の課題としたい。

**その他の教育活動**

教職直前講座において，家庭科被服領域の授業担当補助の任に当たった。

◎特色ある点等

実験実施前に，実験目的や操作を予習させる目的で事前レポートを課し，誤っている部分等は添削するとともに注意事項等のコメントを付して，必ず実験前に学生に返却している。これは，学生が実験操作を正確に把握し，安全に実験を行うことが出来るように配慮しているとともに，返却したレポートが，そのまま実験中の記録ノートとしても使用できるようにすることで，理解を高められるように意図しているからである。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

**論】**①平成15年６月：「Composite of synthetic mica with polymers：grafting of polymers with controlled molecular　weight onto synthetic mica by use of living polymer cation」（共著）*Composite Interfaces* Vol. 9 pp.467-476

**発】**①平成15年５月：「配位子交換反応を利用してカーボンナノファイバー表面へ導入したカルボキシル基を利用したポリマーのグラフト反応」（共）　第52回高分子学会年次大会研究発表

②平成15年５月：「両親媒性ポリマーをグラフトしたカーボンブラックから作製した抵抗体による溶液中の溶質センシング機能」（共）　第52回高分子学会年次大会研究発表

③平成15年９月：「グラフト化によるカーボンナノファイバーの表面機能化」（共）　第52回高分子討論会研究発表

④平成15年10月：「カーボンナノファイバー表面へのポリマーのグラフト反応とその電気特性」（共）第52回高分子学会北陸支部研究発表会研究発表

⑤平成16年３月：「ポリマーグラフト化カーボンナノチューブの分散性」（共）　日本化学会第84春季年会研究発表

共同研究の実施状況

①グラフト重合による高分子機能材料の合成に関する研究　共同研究者：坪川紀夫（新潟大学工学部・超域研究機構教授）

学会活動への参加状況

上記『研究成果の発表状況』の「学会等における口頭発表」の項に記した各学会に出席した。（全４学会）

◎特色・強調点等

次世代を担う基幹技術の一つとされるナノテクノロジーにおいて，非常に重要な材料として注目を集めているカーボンナノチューブを用いて，昨年度に引き続いて研究を実施した。これまで困難とされてきた，カーボンナノチューブ表面のπ電子系を損なうことなくナノチューブの表面を改質する新規な方法について更に研究を掘り下げ，新機能を有する複合材料を開拓する際の実用・応用面で，いくつかの重要な成果が得られている。

【芸術系教育講座（音楽）】

池　田　　操（教　授）

〈教育活動〉

授　業

学部の「音楽」における歌唱指導では，学生の実態を把握し，まず基本となる声の出し方，歌い方，発音の仕方から導入，選曲に留意し効果を確認しながらポイントを明確にし指導した。大学院の「重唱」，「独唱」の授業では基礎的歌唱技能並びに表現上のポイントとなる歌唱技法の収得を目指しながら，学校現場へ

の応用を念頭に外国曲に加え日本の歌も積極的に取り上げ指導した。

**研究指導**

学部の声楽を専門に学ぶことが始めての学生には「理論と実践」を重視し，身体と呼吸・共鳴・発音の原理から導入，基礎的発声法のトレーニングを行い歌唱法の基礎技能を養いながら指導した。また選曲に留意し外国曲に加え日本歌曲を研究テーマとした。

大学院で論文を指導した学生は２名で，うち１名は現職教員である。論文内容は共に演奏法を含む。音響分析をとおした検証や詩とことばと音楽との関係，詳細な楽曲分析，作曲意図にまで踏み込み考察を加えるなど研究項目設定に意を用い指導した。現職教員である１人は，新潟県音楽コンクール声楽部門優秀賞，TIAA クラシック音楽コンサート奨励賞，レスプレンデルコンクール声楽部門第3位入賞を果たし，修了時に優秀学生として表彰された。

**◎特色ある点等**

実技系の研究は理論に加えその裏付けとなる実践研究が重要な位置を占める。研究指導においては，個々の研究テーマは異なってもその根底にあるものは指導法を念頭においた歌唱法の追求であり優れた成果を得ている。また，研究論文において，１人は歌声の音響分析も取り入れ，きわめて実証性の高い研究成果を得た。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**演】**①平成15年４月：「日本歌曲その流れをたどって　そのＸ」（旧東京音楽学校奏楽堂，主催：東京室内歌劇場）

②平成15年６月：池田操ソプラノリサイタル　（横浜市市民文化会館関内ホール，主催：首都オペラ）

③平成15年11月：グルッペ・ムーゼンゾーン第２回演奏会　（田端文士村記念ホール，主催：グルッペ・ムーゼンゾーン）

④平成15年12月：声楽コンサート　（上越教育大学講堂）

**発】**①平成15年10月：歌唱支援システムに関する基礎研究ー口のあけ方に着目した歌声の分析ー（第24回バイオメカニズム学術講演会）バイオメカニズム学会（共）

②平成15年10月：歌唱支援システムの基礎研究ー姿勢の変化による歌声の分析（第24回バイオメカニズム学術講演会）バイオメカニズム学会（共）

**在外研究の状況**

①平成15年８月25日～９月25日までベルリン芸術大学教授フランク・マウス氏のもとでドイツ・リートの演奏法を研究した。

**◎特色・強調点等**

オペラ，ドイツリート，日本歌曲の演奏研究を継続しておこなっている。４月に演奏した日本歌曲研究では中田喜直の「マチネ・ポエティクによる四つの歌曲」全曲を，６月のリサイタルでは長年研究を続けているドイツリートと芸術歌曲並びに民謡を含む日本の歌をプログラミングし，また，ドイツ・リートの研究では，11月にシューベルト，シューマン，R．シュトラウスの作品を演奏した。「歌声の音響分析」も継続して研究しているものであり，今年度は共同研究の成果を第24回バイオメカニズム学術講演会にて発表した。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①新潟県音楽コンクール実行委員会委員，②平成15年６月：2003年第38回新潟県音楽コンクール予選会声楽部門審査員（長岡リリックホール），③平成15年７月：2003年第38回新潟県音楽コンクール本選会審査員（新潟市民芸術文化会館），④平成15年８月：NHK 合唱コンクール上越地区大会審査員（上越文化会館）

工　藤　智　昭（教　授）

〈教育活動〉

授　業

声楽関係の授業では，独唱，合唱ともに，豊かな歌唱表現を実現するための発声法，特に高音域の拡張と音質の充実，音色の変化への対応などを重点的に指導した。また，合唱の授業では，音色，リズム，ダイナミック等技術面における統一性と質の向上，音楽性の調和を目標に指導した。音楽劇関係の授業では，創作音楽劇及び，既成の作品を公演することを目標に，歌唱，演技，演出にわたる諸要素を，呼吸法，身体表現法，感情移入法などの技術を用いて総括的に演習を行った。なお，これらの授業を通して，卒業後の進路に対応するために，教師としては，児童・生徒への実践的指導力を，また，社会人として，一般の合唱団での指導者や指揮者としての役割を果たせる能力をも身に付けさせるように取組んだ。

研究指導

学部学生に対しては，卒業研究の指導を中心に，声楽発声法や歌唱法について，学生自身の体験のみならず，理論的な理解を深めることにより，実践的指導力を身に付けさせるよう工夫した。その結果，試演会，声楽コンサート，卒業演奏会などにおいて，技術の向上や表現内容の深まりを確認できた。大学院生に対しては，修士論文に関連する声楽や音楽劇表現法，演技･演出法の研究に関する指導を行い，その結果，諸演奏会において，格段の進歩と充実の結果を確認できた。

その他の教育活動（学外を含む。）

平成15年７月，11月：新潟大学非常勤講師として，「舞台芸術」（集中講義）の授業を担当した。

◎特色ある点等

学生自身の能力を高めると同時に，どのような立場においても，先導的，指導的な働きかけができるように，人間理解や技術の習得，及び理論の解明等を目標とした。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

**演】**①平成15年８月：第11回稲声会　ＶＯＣＡＬ　ＣＯＮＣＥＲＴ(独唱)　前橋市民文化会館

②平成15年11月：テノールリサイタル(独唱)　上越教育大学講堂

③平成15年11月：高田木曜会合唱団　創立50周年記念演奏会(指揮)　上越文化会館

④平成16年２月：信濃の国 大合唱～オペラ「玄蕃之丞物語」(演出)　塩尻市文化会館

**審】**①平成15年10月：第６回全国「花嫁人形」合唱コンクール(審査)　新発田市民文化会館

**指】**①平成15年９月～16年２月：オペラ「てかがみ」（合唱指導）　上越文化会館

**講】**①平成16年２月：平成15年度新潟県中学校合唱講習会　新潟県合唱連盟（講師）　上越教育大学附属中学校

◎特色・強調点等

演奏における音楽の質を高めるとともに，特にオペラにおいては視覚的な要素を含め，聴く者に感動を与える表現内容と表現方法を，独創的に，発展的に用いた点、更には、広い視野と深い洞察を両立させるように努めたことである。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①平成15年９月～16年３月：上越市民オペラ合唱団音楽監督　上越文化会館，②平成15年４月～16年３月：長野県教員による声楽研究会 講師

◎社会への寄与等

・公的機関や一般市民の合唱活動、オペラ活動に対し，積極的に指導を行い、また，講師を務める等，十分に寄与していると考える。

後　藤　　丹（教　授）

〈教育活動〉

授　業

学部１年の「体験学習Ⅰ・コンサートを創ろう」では７名の教官による連携授業をコーディネートし，10月に学生たちと一緒になって全員が出演するコンサートを創り上げた。同じく１年次のブリッジ「音楽」では通年でＣクラスを担当した。２年次の「楽曲分析法」では実践的な音楽的思考力を養うために個人的指導を多く取り入れた。学部４年の「音楽劇創作演習」では学生の自主性を考慮しつつ細かな指導を行ない２月の一般公演を実現させた。大学院「作品分析Ｂ」ではモーツァルトのオペラ「フィガロの結婚」をさまざまな観点から分析した。情報表現演習は他コースの２人の教官とともに集中講義で行い，ビデオ制作の主として音楽面を担当した。成績評価は出席数を重視し，また普段の授業への参加状況も加味しつつ行なった。

研究指導

学部のゼミは３年次生３人を担当。和声課題を課して毎週添削した他，鑑賞，分析などにより多様な音楽的教養が身に付くように考えた。大学院ゼミでは２人のM1に論文執筆の準備としての資料蒐集の方法や方向性等をアドバイスしたほか，卒業制作に向けての作曲技法の指導を行なった。

その他の教育活動（学外を含む。）

新潟大学において教養科目である「音楽Ｃ」（第1期）および「音楽Ｄ」（第2期）の授業を担当した。「音楽Ｃ」ではミュージカルの歴史，「音楽Ｄ」ではモーツァルトの生涯と作品について講義を行なった。また２月には下越の吹奏楽講習会で高校生への演奏指導を行なった。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

著】①平成15年５月：混声合唱組曲《みまかれる美しきひとに》（単著）　全音楽譜出版社

②平成15年11月：《小さな灯台への道》ピアノ曲集「こどもたちへ」　カワイ出版

作】①平成15年４月：《葡萄の房は風にゆれて》（Vn.Vc.Pf.）カーブ・ドッチ（巻町）

②平成15年11月：《小さな灯台への道》（Pf.）紀尾井ホール（東京）

③平成15年11月：朗読音楽《はんの木のみえるまど》（Vc.Pf.）　同《しろいセーターのおとこの子》（Fl.Pf.）同《白い花のさく木》（Fl.Cl.Hn.Vc.Pf.）　ＤＶＤ「杉みき子の世界」高田文化協会

④平成15年11月：混声合唱曲《風に》《冬がくる》《生命の詩をうたうとき》高田木曜会合唱団創立50周年記念演奏会，上越文化会館大ホール

⑤平成15年12月：《風が運んだ歌》（Pf.）福井商工会議所ホール

⑥平成16年２月：《CASSIOPEIA EXPRESS》（管楽八重奏）新潟県民会館

共同研究の実施状況

①上越市立大手町小学校６年生の組曲創作の編曲および指導（平成16年３月）

学会活動への参加状況

①５月30日：日本音楽表現学会（広島）に出席

◎特色・強調点等

作品制作に力を注ぎさまざまな編成の音楽を作曲し各地で初演することができた。また前年に書いた混声合

唱組曲《みまかれる美しきひとに》を全音楽譜出版社から刊行することができた。授業関係では学生が興味を持って授業に参加できるよう，常に教材や授業方法，構成等を工夫してきた。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①新潟県音楽コンクールの運営委員及び審査員としての活動（主として平成15年６～７月），②新潟国際情報大学の校歌作曲（平成15年４月），③新潟県立柏崎翔洋中等学校の校歌作曲（平成15年４月），④新潟県立上越総合技術高等学校の校歌作曲（平成15年４月），⑤小川未明文学賞授賞式での自作演奏 ( 平成15年11月 )，⑥高田木曜会合唱団創立50周年記念演奏会での自作指揮 ( 平成15年11月 )

**重　嶋　　博**（教　授）

〈教育活動〉

授　業

学部においては，指名して質問したり課題に答えさせたりし，毎時間の終わりには質問をして４，５行の記述を提出させたりすることによって，個々の学生の音楽科教育への関心と理解度を捉えるとともに学生の評価の一助としている。

大学院においては，学生に音楽科教育の今日的な課題を発表させる機会を多く取るようにし，教育実践に直接結びつく授業の展開に努めた。

研究指導

学部においては，学校教育の中の音楽の授業では何を基礎・基本とすべきかを，現実の学校の実態に触れることを通して考えさせ，実際に学校現場の教師による子どもの実態を踏まえた指導方法について講義・演習を行った。

大学院においては，実際の学校現場の実践に基づいた意見や考えを発表できるように配慮し，授業が音楽科の授業改善に結びつくようにした。

その他の教育活動の実施状況

①平成15年９月：金沢大学教育学部非常勤講師として「音楽科教育論Ⅰ」を担当した。

〈研究活動〉

業】①平成16年３月：「中学校「音楽」の教育課程の改善・充実」（単著）『教職研修』３月号，教育開発研究所

②平成16年３月：「第４章音楽学習の評価　１評価の目的と種類」（単著）『改訂新版　初等音楽教育法』音楽之友社

学会活動への参加状況

①平成15年11月18日～ 19日：日本音楽教育学会第33回大会出席

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①平成15年７月30日～ 31日：平成15年度新潟県免許法認定講習において「教育課程及び指導法に関する科目，音楽の指導法」を講義，②日本音楽教育学会常任理事，③音楽教育史学会編集委員

茂手木　潔　子（教　授）

〈教育活動〉

授　業

日本音楽の実技授業を充実させるため，学部では「合奏Ｃ」「独唱Ⅲ」を開設し，箏の合奏・日本の伝統的な歌唱の授業（いずれも非常勤講師による集中を含む）を実施。大学院では，日本音楽の学校における指導に焦点を当てた授業を「音楽学演習」で試み，授業過程，課題発表，院生のレポートを簡易な記録集として作成し，受講生に配布した。「日本音楽研究」では，院生の希望により歌舞伎座の舞台見学と演奏家との懇談会を実現。９月－10月の海外出張中の授業は，学生と相談の上，土日に４時限の集中授業を行なった。また，15年度の人間教育学セミナーのまとめ役を勤めた。

研究指導

平成15年度は，卒論５名（４年生３名３年生２名），修士論文３名（２年生２名，１年生１名）を指導。２年生のうち一人は国費留学生で，英文論文執筆を指導。

その他の教育活動（学外を含む。）

①４月～７月：本学の中国人研究生の指導

②７月22日～ 29日：学術振興会奨学金で来日したモンペリエ大学（フランス）博士課程学生の指導（日本の楽器の材質の研究）

③８月５日～ 12月３日：アムステルダム大学（オランダ）修士課程の学生の個人レヴェルでの受け入れ及び修士論文の指導（天台声明の実践的研究）

④下保倉小学校児童，本学雅楽部，月影雅楽保存会などとともに浦川原村顕聖寺にて演奏会「地球と大学の交流コンサート第２回宴」を実施

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

**著】**①平成15年６月高萩保冶編『音楽学習のフロンティア』（共著）玉川大学出版部の中で「日本の伝統音楽に親しむ」（pp.123－148）を執筆

**論】**①平成15年12月：「日本音楽の指導のために」（単著）財団法人音楽文化創造編『季刊　音楽文化の創造』2003　Winter31　pp.44-47

**他】**①6月28日～ 29日　科研報告書のための会議に出席　東京学芸大学澤崎真彦教授研究室他

②7月３日，10日，17日　長岡市中央公民館主催「伝統芸能鑑賞しりーず　歌舞伎のなかの音楽」講師（長岡市中央公民館４階教室）

③平成15年８月「多様な思考を育てるために－日本の伝統的な音具を用いた試み－」新潟県私学教育研修会編　特色教育部会「新時代における私学の多様化」の講演記録：A4版6ページ CD 版刊行

④平成15年10月「インテリジェンスあふれる純正律の遊び」CD『玉木宏樹邦楽器傑作集　いちめんの菜の花　西潟昭子』巻頭言を執筆　有限会社アルキ制作

⑤平成15年11月「日本の音と音楽療法の接点」（共著）音楽之友社『音楽療法誌　MT　the ミュージックセラピー　2003　秋』pp.14-17

⑥11月２日　地域と大学との交流コンサート第2回　「宴」企画･監修（浦川原村顕聖寺境内及び本堂）

⑦平成16年１月11日　講演「獅子もの」（東京都新宿区　現代邦楽研究所公開講座）

⑧平成16年３月20日　講演「越後の酒屋唄」（朝日酒造主催「あさひ日本酒塾」にて）

⑨平成16年３月25日「おもちゃが奏でる日本古来の音楽」のタイトルで，フジサンケイビジネスアイ31面記事にインタビューが掲載された。

学会】①平成15年５月10日東洋音楽学会・日本音楽学会合同例会シンポジウム「音楽を教えるということ」パネリスト（お茶の水女子大学）

②5月11日　記号学会全国大会出席（大阪大学）

③7月26日　東洋音楽学会・日本音響学会音楽音響研究会合同例会を主催（上越教育大学音楽棟）。司会を一部担当

**国際研究プロジェクトへの参加状況**

①６月23日　本学主催「フルブライト・メモリアル基金米国教育者訪問」でのレクチャー。題目は，「Cultivating a Flexible Way of Thinking in Music Teachers through the Idea of Japanese Traditional Sound Sources.」（上越教育大学大会議室）

②９月20日～10月19日：国際交流基金・文化庁文化部芸術文化課芸術団体重点支援事業助成「素浄瑠璃ヨーロッパ公演」演出補および解説者。（ドイツ各地では演出補と記録を担当，パリ日本文化会館，ローマ日本文化会館，オスロ芸術劇場の4回の舞台公演では日本語及び英語の解説20分を担当），パリでは文楽の世界遺産審査員を聴衆に迎えた。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①平成15年３月　文化庁文化審議会専門委員（文化財部会）

②平成15年４月　文化庁芸術団体重点支援事業等協力者会議審査委員・新進芸術家国内研修制度選考委員（副主査）

③平成15年10月　独立行政法人日本芸術文化振興会国立劇場調査事業委員会委員（現在に至る）

④平成15年10月　独立行政法人日本芸術文化振興会雅楽・声明公演専門委員会委員（主査，現在に至る）

⑤文部科学省教科用図書検定調査審議会委員（平成11年度より継続中。平成15年度より副委員長）

⑥国際交流基金公演課コンサルタント

⑦月影雅楽保存会顧問　など

**山　形　忠　顯**（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

学部のブリッジ科目「音楽」では，楽典，ソルフェージュ，小学校の歌唱共通教材の演習により，小学校教員に必要な音楽学習指導の基礎技能の習得；ブリッジ科目「声楽基礎」では，声楽曲鑑賞，歌唱音声発唱法，合唱，独唱の演習により声楽関連科目の履修に必要な歌唱基礎技能の習得；専門科目「独唱Ⅰ」，「独唱Ⅱ」では，初等中等音楽科教育の現場における歌唱学習指導に必要な声楽曲分析能力と範唱能力の習得を図り，成果を得た。

大学院の「児童発声研究」では，児童生徒の歌唱音声の変遷についての知識，歌唱音声発唱の音響面・生理面・構音面についての知識，歌唱学習指導の実践事例研究に基づいた歌唱音声の学習指導法の習得；「独唱」では，日本歌曲，イタリア歌曲，ドイツ歌曲，オペラ・アリアについて，楽曲分析（歌唱部分，伴奏部分）と舞台語構音を重視した高度な演奏表現力の習得を図り，成果を得た。

**研究指導**

「卒業研究」における研究演奏の指導では，学校教育現場における音楽科学習指導を目途とした実践的な声楽曲分析研究と，多様な歌唱学習指導の実践事例研究を基盤に，「声楽特別研究Ⅰ」，「声楽特別研究Ⅱ」で演習した歌唱技能を伸張し，的確な作品解釈と個性的な独唱表現力の習得を図り，成果を得た。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

①兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科教授（併任）として，授業科目「音楽教育課程特別研究」，「人間の成長と芸術活動」，「課題研究」の指導，及び，学校教育学博士学位論文の研究指導を行い，成果を得た。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**作】**①平成15年６月：2003年第38回新潟県音楽コンクール予選会声楽部門審査員（長岡リリックホール）

②平成15年７月：2003年第38回新潟県音楽コンクール本選会審査員（新潟市民芸術文化会館）

**学会活動への参加状況**

①平成15年５月25日：日本声楽発声学会第77回例会出席　②平成15年11月23日：日本声楽発声学会第78回例会出席　③平成15年度芸術教育実践学会理事

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①新潟県音楽コンクール実行委員会声楽部門2003年度委員　②平成16年２月６日：新潟県音楽コンクール功労賞

**山　本　茂　夫**（教　授）　※附属実技教育研究指導センター

**〈教育活動〉**

**授　業**

【観点１】教育方法及び成績評価面での取り組み

○授業形態，学習（研究）指導法等の教育方法に関する取組状況

学部のブリッジ「音楽」では授業計画案を作成し，関係教官との連係を密にして円滑な運営を行った。「合奏Ⅱ」では初めての試みとしてギターを取り挙げ，学生の積極的な授業参加を得て成果を得た。

○成績評価法に関する取組状況

年度当初と終わりに関係教官と話し合いを持ち，評価の客観性を明確にした。

【観点２】教育の達成状況

○進学や就職などの卒業（修了）後の進路の状況から判断した取組状況

一人は臨時採用待ち，一人は一般企業に就職した。両者とも一般の音楽団体などにおいて，これまでの指導内容を生かして活躍するものと期待される。

**研究指導**

【観点１】学部

基本的には実技指導であるが，なぜそのような演奏に結びつくのか理論的裏づけを検討することで，実践における応用力を養った。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

①教職講座の音楽実技指導，②岐阜大学，群馬大学，宇都宮大学，茨城大学の管弦打楽器専攻の教官・学生との研究交流会（茨城大学），③上越教育大学吹奏楽団第21回定期演奏会指揮（上越文化会館）

**◎特色ある点等**

①大学院では主任論文指導教官としての責を果たすため，積極的に論文執筆の指導を行った。毎年開催している他大学の管弦打楽器専攻学生と教官との交流会では，学生の研究の指針となるよう教官も演奏に参加した。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

論】①平成15年６月：木管楽器のレガート奏法（単著）日本管打・吹奏楽学会研究紀要第13号

学会活動への参加状況

①平成15年５月：日本音楽表現学会参加

◎特色・強調点等

木管楽器のレガート奏法について異音，息，音色・音量，特別な方法，楽器のコンディション等の観点から述べ，特に生徒・学生が陥りやすい「タンギングさえしなければレガート奏」という考え方を戒めた。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①上越地区吹奏楽連盟理事，②上越文化会館企画委員会委員長

◎社会への寄与等

・上越文化会館企画委員会委員長として会の議長を務め，意見の取りまとめを行った。

・上越地区バンドフェスティヴァルにおいて，城北中，城東中，本学吹奏楽団合同バンドの指揮を行い，合奏技術の向上と交流を図った。（上越文化会館）

・本学吹奏楽団を率いて市内小学校にて鑑賞教室を行った。

・中学校バンドやファゴットの指導を行った。

・院生を率いてリコーダーアンサンブルの演奏を松之山小・中学校で行った。

・きよさと会館や大島中学校において山本茂夫ファゴット演奏会を行った。

・新井市内において市民向けコンサートを行った。

阿　部　亮太郎（助教授）　※附属実技教育研究指導センター

〈教育活動〉

授　業

・「表現・相互行為教育演習」（３名で分担）では，教育の場面および表現領域での問題の存在について，学生に自分自身の体験を遡らせて考える授業を行った。他の教科専門科目でも，単に「現場で役立つ専門性」という観点だけでなく，動機を含め体験そのものを重視し，また実践場面の中で課題を発見する力の養成に重点を置いている。時には模擬授業を取り入れながら，場面の見取りの能力の向上をはかっている。

・「楽曲分析Ａ」（院）では，意味の生成のプロセスの解明が，即楽曲分析であるという今までの方針を踏襲した授業を行った。

・「実践場面分析演習」のあり方の考察に力を入れた。

研究指導

・場面から離れた一面的な客観性に偏らず，意味の生成に即した考え方を欠かさないようにしている。また，音楽や授業の場面に於いては，待った無しの状況下で問題が起こるので，決められた課題の解決だけなく，“思わぬ課題”の発見能力の向上を心がけている。

◎特色ある点等

・動機や感動も含め，体験に即した考え方を，あらゆる授業の局面に生かそうとしている。

・「教える」「行動する」「表出する」だけでなく，その場で「どう受け取るか」も重視している。

・実践場面に即した授業を行うことが，大学による学生の実践力の実態把握の改善にも役立っている。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

作】①平成15年12月：《終わりの風》（ヴィブラフォン独奏のための作品）

②平成16年２月：《祝婚の譜》（ホルン群と日本太鼓のための作品）

③平成15年８月：《大きな古時計》（小編成吹奏楽のための編曲）

共同研究（幼，小，中，高等学校及び特殊教育諸学校教員との共同研究を含む）の実施状況

①「教科臨床「音楽」立ち上げのための授業分析の方法の研究」 研究代表者：阿部亮太郎（本学助教授） 本学研究プロジェクト ②「相互コミュニケーション科目「表現」の授業評価システムの構築に基づく教育内容及び方法の開発研究」 研究代表者：西村俊夫（本学教授） 本学研究プロジェクト

学会活動への参加状況

①５月30日：日本音楽表現学会出席

◎特色・強調点等

・創作が，決して技法の択一に陥らず，ある「意味」が定立する契機の模索でもあるようなあり方が特色と言える。言うまでもないが，器楽作品から校歌や授業の課題に至るまで，最上の質の音楽を目指している。

・積極的に研究プロジェクトに参画し，表現系科目のカリキュラム構想の基礎的な考察に力を入れた。

〈社会との連携〉

◎社会への寄与等

・地域の授業研究会に頻繁に参加し，課題の発見の方法をともに模索した。

・越路西小学校校歌の作曲に関連し，越路町を訪問し，各種打ち合わせ，練習指導等を行った。

・高田木曜会合唱団での自作の再演に関連し，ピアノを担当した。一部練習指導も行った。

植　村　幸　生（助教授）

〈教育活動〉

授　業

(1) 前年度同様，受講生への円滑な情報告知のために，ＷＥＢサイトを開設し運用している。

(2) 成績評価に関しては，基準を可能な限りシラバスに明記し厳格に運用するようつとめているが，一部科目では不徹底であったことを反省する。

研究指導

(1) 音楽分野4年生１名の卒業研究（論文），及び大学院修士課程芸術系コース２年生１名（外国人留学生）の修了論文の指導を担当した。そのうち修論１篇の成果は学会の定例研究会で発表された。指導にあたっては，研究史と実証性を尊重する研究態度が養われるよう心がけた。

(2) 卒論・修論執筆マニュアルの改訂版を当該学生に配布して研究指導に生かしている。同マニュアルを通じて，卒論・修論に取り組む学生に対して，おのずと学習目標を提示することになっていると考える。

(3) 前年度同様，上記ＷＥＢサイトを在学生・修了生の研究題目・業績の公開にも活用している。

その他の教育活動（学外を含む。）

①平成15年４月：新潟産業大学人文学部非常勤講師として「韓国・朝鮮文化論／文化史Ａ・Ｂ」（Ａは前期，Ｂは後期）を担当。

②平成15年７月：上越教育大学附属中学校「わくわく大学デー」にて特別授業「インドネシアのガムラン音楽をやってみよう」を実施。

③平成15年８月および平成16年１月：東京外国語大学外国語学部非常勤講師として「アジア文化論Ⅰ講義／東アジア地域文化論」（集中講義）を担当。

④平成16年２月：沖縄県立芸術大学非常勤講師として「民族音楽学演習」（音楽学部開設科目）および「民族音楽学研究」（大学院修士課程開設科目）の一部（集中講義）を担当。

**◎特色ある点等**

通常の授業および論文指導においては，音楽文化の多様性を偏見なく認識させること，学生個人に学的探究への関心をもたせること，その探究に必要なルールを身につけさせることに特に留意し，そのために専攻分野における筆者の研究成果を必要に応じて活用している。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成15年３月：「日本人による台湾少数民族音楽の研究：田辺・黒沢・小泉の業績を中心に」『上越教育大学研究紀要』22(2)，301-313頁。（単著）［昨年度分の補遺］

②平成15年４月：「『宣廳日記』を通してみる内吹の様相：正祖・純祖代を中心に」［本文韓国語］『東洋音楽　Tongyang umak』（ソウル大学校付設東洋音楽研究所）24号，131-147。（単著）

③平成15年11月「朝鮮宮廷音楽の楽譜化にみる『近代の体験』」『韓国朝鮮の文化と社会』２号，59-80頁。（単著）

**発】**①平成15年11月：「韓国伝統音楽の音楽学校と競演大会の相互関係：パンソリを中心に」日本音楽学会第54回大会パネルディスカッション。

②平成15年11月：「朝鮮・韓国の打楽器アンサンブル「サムルノリ」の音楽科教育における教材化をめぐって」（京都教育大学教育実践総合センター第14回セミナー）シンポジウムにパネリストとして参加。

**共同研究の実施状況**

①アジア・オセアニアにおける音楽のグローバル化とローカル化に関する民族学的研究　代表者：山田陽一（京都市立芸術大学）　科学研究費（海外学術調査）補助金。

②日本コロムビアの「外地」録音に関するディスコグラフィー的研究　代表者：細川周平（東京工業大学）　国立民族学博物館共同研究。

**学会活動への参加状況**

①（社）東洋音楽学会理事，東日本支部委員。②韓国・朝鮮文化研究会理事。③平成15年10月25日～26日：東洋音楽学会第54回大会出席。④平成15年11月９日：日本音楽学会第54回大会出席，発表。

**在外研究の状況**

①平成16年３月：韓国　アジア音楽におけるグローバル化とローカル化の民族学的研究（科学研究費補助金）

**◎特色・強調点等**

⑴韓国をフィールドとし，歴史学と人類学の方法を援用しながら，伝統音楽の持続と変容，及び近代における伝統音楽の再認識という問題に取り組んでいる。昨年度からはそのフィールドを中国朝鮮族へと拡大しつつある。⑵朝鮮後期軍楽制度の研究（上記論文②）は，韓国でも未開拓の分野であるが，研究成果を日韓両国の学界に示すことで，多面的かつ妥当な評価がなされるようつとめている。その結果として，音楽学分野における日韓の学術交流にいくばくかの貢献をなしつつある。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①平成15年６月：本学公開講座講師「はじめてのジャワ・ガムラン」(5回，本学音楽棟101教室)。②福岡アジア文化賞推薦委員

◎社会への寄与等

(1) 公演およびそれを支援する活動を通じて，韓国の音楽文化の多様性と独自性を日本の聴衆に伝える活動に従事している。

(2)「上越ガムランの会」を主宰し，県内外の現職教員及び一般市民を対象に，ジャワ・ガムランの定期的な練習会を持ち指導にあたっている。

小 川 昌 文（助教授）

〈教育活動〉

授 業

【観点１】教育方法及び成績評価面での取組

○授業形態，学習（研究）指導法等の教育方法に関する取組状況

(1) 学生の興味関心を尊重し，学習意欲を高めるように身近な問題からアプローチしている。

(2) 最初の講義の時には必ずシラバスを配付し，それぞれの講義の目的と内容，そして評価の方法を通知している。

(3) 一方的な講義形態を取るのではなく，適宜その時のトピックについて自由な意見や主張を学生が発表する機会を作っている。

(4) 講義の時間外において，学生の演奏の練習にできる限り立ちあい，適宜アドバイスを行なった。

(5) 講義の時間外において，当該講義に関しての質問に対応，また発表等の準備の方法や内容について指示，示唆を行なった。

○成績評価法に関する取組状況

大学院においては，履修学生の発想を尊重し，企画力，構成力，文章力，取材力等をトータルに把握，評価することを意図した。したがってすべての授業においてレポートを課し，上記の点を中心に評価した。また，評価後は，必ずコメントを入れて返却し，今後の改善点を通知した。

【観点２】教育の達成状況

○進学や就職などの卒業（修了）後の進路の状況から判断した取組状況

卒業論文の指導を担当した学生（いわゆるゼミ生）は３名。卒業後，１名は上越教育大学大学院進学，１名は石川県小学校常勤講師，１名は新潟県長岡市の放送関係の会社に就職した。

研究指導

【観点１】学部

卒業論文を指導した学生は３名。2003年６月，中学校教育実習の際，実習に参加した全員の授業を観察し，指導を行なった。さらに，卒業論文研究は音楽心理学系統２本，アンケートによる実態調査によるもの１本を指導した。

【観点２】大学院

修士論文を指導した学生は６名。うち，現職教員３名。現職以外の院生は教職を目指しており，修士論文研究は高度な実践力を養うための基礎的能力やコンセプトに関連するものとして，それぞれ指導を行なった。現職教員による修士論文は小学校の音楽科教育の問題を論じたものが２本，音楽教育の哲学的研究が１

本である。現職教員以外の修士論文は，音楽の嗜好と音楽経験，年齢，性差の関係に関するもの１本，音楽科学習指導案についての研究が１本，第３次学習指導要領期における音楽鑑賞教育に関する研究が１本であった。

**その他の教育活動**

〈教職講座〉

平成15年６月７日および26日に教員採用試験直前講座を各１時間，講義等301教室において実施した。

〈教育実習〉

中学校４年次の教育実習は，音楽コースの学生が配属されている中学校のうち，５校を訪問，授業観察を行なった。上越教育大学附属中学校においては13日間の実習中，５日間訪問した。

**◎特色ある点等**

卒業論文，修士論文研究指導においては，学生，院生個人個人の興味を最大限に尊重し，能力と適性に応じて研究のオリジナリティが見られるように指導している。特に，大学院のゼミ生には現職教員が３人含まれ，ゼミ全体の教育実践力の強化および推進に貢献している。また，ホームページにおいて，教官の経歴，業績，講義内容，ゼミ生，行事，今後の予定等の情報を公開し，プライバシーに配慮しつつ情報公開を推進している。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**著】**①音楽教育事典（日本音楽教育学会）音楽之友社　2004.3　編集委員を務める。執筆項目は以下の通り。「現代音楽計画」「ハワイ音楽カリキュラム」「唱法」「オペレッタ」「ルーサー・ホワイティング・メーソン」「アブラハム・シュワドロン」「ジョン・ハラー」「デイビッド・エリオット」

**論】**①北米を中心とした音楽教育学研究における理論と実践の関係　上越教育大学研究紀要　第23巻，第２号　pp.655-671.

**作】**〈指導・審査歴〉

・研究会講師

①東頸城郡学校教育振興協議会音楽部門指導者研究会「歌唱指導についての研究」（浦川原村下保倉小学校）2003.7.2

②千葉市教育研究会音楽部会研修会　「合唱・発声指導法研修会」（千葉市文化センター６階スタジオ）2003.8.19

・新潟県委嘱講師

①平成15年度新潟県教育職員免許法認定講習「小学校教科の指導法（音楽），中学校教科の指導法（音楽）」2003.7.30-8.1

・指導助言者

①平成15年度上越教育大学附属中学校教育研究協議会　「自分を知り，世界とのかかわりを深める教育の創造」（第2年次）　音楽科「表現力や完成を自らはぐくむ資質，能力の育成」題材「伝えようメッセージ」上越教育大学附属中学校2003.10.10

**発】**①2003.5.24　「学校音楽教育と NHK 全国学校音楽コンクール」　日本合唱指揮者協会 (JCDA) セミナー Vol.10　北とぴあ第一研修室（国内シンポジウムにおけるパネリスト）

②2003.6.7　Music Teacher Education in Japan-Structure, Problems, and Perspectives-The Philosophy of Music Education International Symposium V, Lake Forest,U.S.A.（公募審査による論文発表）

**共同研究（幼，小，中，高等学校及び特殊教育諸学校教員との共同研究を含む）の実施状況**

①附属中学校教諭 長谷川 泰山 氏，附属小学校教諭 岡村 芳恵 氏と継続して，教育実習に関する共同研究を行っている。

**国際研究プロジェクトへの参加状況**

①共同研究　音楽と統合学習に関する日米比較研究　サウスカロライナ大学　スティーブン・ジンスキー助教授　継続中

**学会活動への参加状況**

〈参加状況〉　日本音楽教育学会全国大会（神戸）2003.11.13.　ラウンドテーブル研究発表

〈学会役職〉　①日本音楽教育学会音楽教育事典編集委員　②IPSME（国際音楽教育哲学学会役員）

〈国内学会の企画〉　上記「JCDA セミナー」においては，企画参与として日本合唱指揮者協会の事務局長と連携をとりつつシンポジウムの企画，立案に関わった。

〈学会誌の編集〉日本音楽教育学会から2004.3発行された「音楽教育事典」の編集委員として編集作業に関わった。

**在外研究の状況**

文部科学省在外研究（短期）により，平成15年10月29日より同12月15日までアメリカ合衆国に滞在して研修を行った。調査研究題目は「アメリカ合衆国における音楽教員養成カリキュラム研究の動向」訪問したのは，インディアナ大学（インディアナ州ブルーミントン市），ニューヨーク大学（ニューヨーク州ニューヨーク市），マイアミ大学（フロリダ州マイアミ市），UCLA（カリフォリニア州ロスアンジェルス市）であった。

**◎特色・強調点等**

昨年度以来，教員養成カリキュラムの改善にむけて，特に教育実習のありかたの改善に取り組んでいる。アメリカ合衆国の制度と比較し，相違点，相似点を単にピックアップするだけでなく，実際の授業の記録を元に分析し，その現象の根拠や要因を探り，わが国の教育実践への示唆を得ようとしている点は，他には見られない研究である。また，音楽科教育，音楽教育学を担当する大学教員として，実際の教育現場の理解は不可欠であるとし，2004年２月26日に中頸城郡頸城村立南川小学校の５年１組の音楽指導を行った。来年度以降も，上越地区をはじめ様々な学校において自らが音楽の授業を行いながら現場について学ぶと共に，大学と学校教育現場のコミュニケーションを密にしていきたいと思っている。

**酒　井　　創**（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

学部における演奏技術基礎科目が２年次のみとなり，十分な技術習得が困難な状況下で，各学生の実態にそくして応用力を身につけることを目標に置き，指導を行った。卒業演奏研究では，演奏の安定化と表現意図の明確化に力点を置き指導を行った。

大学院の「ピアノ演奏研究」の授業では，とりあげたテクストの作曲意図を精細に把握する理解力の向上とともに，応用力を培うようにつとめた。

**研究指導**

修士論文作成のために，学生本人の演奏表現上の本質的な問題点が，資料の考察で遊離しないように，常に連動させて指導を行った。

◎特色ある点等

授業・研究指導にあたって，「音響」という抽象的であるがゆえに捉えにくい世界で演奏表現についてまわる問題点を，自身で見つけて修整する能力を培うように指導を心がけている。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

作】①平成15年７月「酒井　創　レクチャー・ピアノ演奏会」（I・S・O東京）

②平成16年２月「工藤智昭　テノール・リサイタル」（上越教育大学講堂）

◎特色・強調点等

イタリア歌曲とオペラの作品傾向が全く異なるものが混在する例を見ない構成であり，特に管弦楽的表現を工夫した。

共同研究（幼，小，中，高等学校及び特殊教育諸学校教員との共同研究を含む）の実施状況

①「教科臨床「音楽」立ち上げのための授業分析の方法の研究」　研究代表者：阿部亮太郎（本学助教授）　本学研究プロジェクト

②相互コミュニケーション科目「表現」の授業評価システムの構築に基づく教育内容及び方法の開発研究」　研究代表者：西村俊夫（本学教授）　本学研究プロジェクト

時　得　紀　子（助教授）

〈教育活動〉

授　業

学部３年次必修「初等音楽科指導法」，80名ずつ週２回の講義では，低・中・高学年の発達段階を踏まえた，音楽の諸活動をふんだんに取り入れた。少人数のグループに分割することで，全員が主体的に実践事例を数多く体験することを可能にした。また，グループ・ディスカッションを踏まえて，指導法の改善にも学生に工夫を促し，実習での授業を想定した音楽の基礎技能の習得に導かれたと考える。ブリッジ科目「音楽」では，１年生全員に総合芸術の醍醐味を肌で感じてもらうべく，音と映像による鑑賞のみならず，同じく１年生有志による生の演奏を講義に取り入れ，表現活動の楽しさ，臨場感を体得させることに努めた。

大学院対象の「総合学習と音楽科のかかわり」および「総合芸術と表現活動」では，受講生の多くを現職が占め，かつ専門教科領域も校種も幼，小，中，高，養護学校と多岐に渡る受講生であった為，学校校現場での鑑賞指導を想定しつつも，広い視野から著名な作品とされる総合芸術の教材を鑑賞する機会を取り入れた。さらに，地元上越文化会館での歴史に残る演目となった，小澤征爾指揮，喜歌劇「こうもり」では，受講生と共に徹夜でチケットを入手した。本番の生演奏を経て，超一流の演奏がもたらした生演奏の感動，歓びを多くの受講生がレポートに記した。

研究指導

学部４年次の４名および，学部３年次の４名の卒論指導に携わった。学部４年次のゼミ生は４名全員が就職，もしくは進学を果たした。カワイ音楽教室講師，私立幼稚園保育士，一般企業，本学大学院へ４名共が早期に内定を得ていた。公立学校の採用試験を終えた直後から，幅広い選択肢にチャレンジし続けることをアドヴァイスした。その結果，学生を現役で就職に導くことができたものと考える。

卒論指導の一環では，上越教育大学附属幼稚園，および市内の明照幼稚園を学生と共に参観した。継続した園児の行動観察から，音と園児の関わりに関した論文を仕上げた。また，総合的な学習をテーマとした２名の学生は，コンピュータを生かした授業実践と音楽科と他教科のかかわった総合学習の実践について，上越市立高志小学校での授業を継続して参観し，考察をまとめた。また，楽曲分析を主とした論文の考察を

行った学生は，さらなる作曲の知識を得ることを希望し，本学大学院進学に至った。

大学院修士論文指導では，中学校現職，本学学部第一期生の院生を担当した。修論のテーマは本学名誉教授の伊藤温氏が提唱する，幼児教育の「イトー・システム」についての手法を小，中学校の現場での実践に応用する試みについての考察であった。長野，埼玉，四国などの学校現場における，伊藤氏の指導場面の授業観察では可能な限り院生と共に出かけ，修論の資料収集，助言にあたった。

**その他の教育活動（学生・院生の授業の一環としての学習促進の取り組み）**

①平成16年２月　ブロードウェイ・ミュージカル“ＲＥＮＴ”日本公演　於：厚生年金会館大ホール15名の学部生および２名の大学院生を引率，の一環として観劇。

②平成15年９月　“ＳＴＯＭＰ”新潟公演　於：りゅうとぴあ劇場，本学学生を対象とした鑑賞ツアーを企画。学部生60名，院生20名，併せて80名が参加。授業の一環として引率した。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

新潟大学教育人間科学部附属長岡小学校，上越教育大学附属小学校，上越市立高志小学校，お茶の水女子大学附属小学校（教科名「アート」の授業の試み）その他多数の研究先進校において，音楽科や総合的な学習の時間の一環としての表現活動の実践指導，助言。

**◎特色ある点等（本学の学生・院生が涯学習としての表現芸術の学びに繋げていくために）**

豊かな表現活動の指導者となるには，多くの優れた生の演奏を鑑賞，体験することが大変重要であると考える。よって，本学学生に県内での著名な演奏会への参加を促し，チケットは欧米並の学生価格で鑑賞が可能になるよう尽力した。“STOMP”新潟公演では，学生寮と新潟市民芸術文化会館の往復バスを委託し，遠距離を克服。結果的に80名もの参加が実現できた。この“STOMP”は，１年次の「体験学習」の授業の一環でもあり，観劇後には本学講堂で1年生が実演した。また，多くの受講生が本物の舞台を体験した感動など，鑑賞の成果を感想レポートに記していた。

学外のみならず，学内での各種の学生による演奏発表への参加，鑑賞を呼びかけた。学園際の後夜祭では，学生の要請を受け，継続してパフォーマンスの審査委員を務めてきている。平成16年度新設に向けて，有志学生の要望から，ダンスのサークルを立ち上げており，顧問として運営面の助言，舞踊資料の提供に務めた。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**著】**①平成16年３月：『改訂新版中等科音楽教育法』（共著）音楽之友社

**作】**①平成16年１月：『第３回内宮教室卒業生コンサート』ソプラノ独唱（ピアノ，ヴァイオリン，チェロの伴奏による）長岡リリックホール，コンサート大ホール

②平成15年５月：指導講師。新潟県立教育センター『小学校音楽科指導発展講座』「学級担任が行なう楽しい音楽授業」新潟県小学校教員研修。２日間連続，全12時間の講座を単独で担当

③平成15年６月：指導講師。長野県松本市立旭町小学校『全校音楽発表会』に向けた，全校音楽指導，全学年の合唱指導および合奏指導，講評

④平成15年７月：招待講師。Teachers College, Columbia University　M.A. Program in TESOL. Title:“Trends in Language Teaching”

⑤平成16年３月：指導講師。『埼玉県ちくみ幼稚園，公開音楽発表会』ミュージカルおよび合唱指導，講評

**他】**①平成15年11月：「サンクトペテルブルグ放送交響楽団」（単著）新潟日報芸術欄

**共同研究の実施状況**

①創造的な音楽学習の実践の成果に関する共同研究を継続。「東京学芸大学附属竹早小学校卒業生を対象と

した，追跡調査をもとに」共同研究者　名古屋女子短大助教授小林田鶴子

**国際研究プロジェクトへの参加状況**

①異文化理解教育に関する日米（米国においては，マイノリティーの子どもたちを対象とした）比較研究
Teachers College, Columbia University, Prof. Sandra Epps (Chief)

**学会活動への参加状況**

①５月27日～29日：平成15年度日本教育大学協会全国音楽部門大学部会第28回全国大会出席。（主催校：広島大学）②７月４日～７月６日：日本カリキュラム学会（於：上越教育大学）大会運営実行委員として企画運営に参画　③日本学校音楽教育学会紀要「学校音楽研究」の編集，研究プロジェクト参画

**◎特色・強調点等**

総合的な学習と音楽科がかわる表現活動をテーマに研究を継続してきた。これまでの研究先進校の実践事例を踏まえ，幼稚園や小学校の現場における，さまざまな表現活動の実践指導に積極的に関わることができた。

音楽，図工，の教科編成では表現活動を補いきれないと考えた研究先進校から生まれて来ている、「ドラマ科」，や「アート」の時間といった新しい試みの動向に今後も継続して研究の提携を図って行きたい。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①上越文化会館企画委員　②上越文化・スポーツ振興基金審査会委員

**◎社会への寄与等**

・上越文化会館企画委員として，上越文化会館で上演される演奏会が，小，中，高校，大学生にとって学ぶことの多い演目，教育的にも有意義な演奏家の招聘に積極的に寄与した。その結果，平成15年度以降，サンクトペテルブルグ放送交響楽団や，ベルリン交響楽団などの招聘が決定した。

・上越文化・スポーツ振興基金審査会委員として，特に市民や学生の団体による音楽活動のために基金が運用されるよう，提案，かつ支援に努めた。

**平　野　俊　介**（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

【観点１】教育方法及び成績評価面での取組

○授業計画，学習（研究）指導法等の教育方法に関する取組状況

演奏実技に関する授業では音楽科の教員が身に付けておくべきピアノの基本的な奏法の習得に重点を置いた。その上で，各学生の演奏表現力をさらに向上させることを目指した。各学生の音楽表現力が一層深まるように，個々の学生の技能の到達度や適性を綿密に見極めた上で学習目標や課題を考え，指導内容が教育の場での実践力や応用力の育成に繋がることを考慮し，授業内容を組み立てた。

○成績評価法に関する取組状況

各授業ごとの課題に対する学生の熱意ある取り組みを，第一に評価することとし，学部では授業の最終回に行った試験での結果を，大学院では最終的な楽曲の習得状況も含めて評価した。その際，演奏楽曲の難易度によるのではなく，あくまでも各学生の学習目標の到達度を重視した。

【観点２】教育の達成状況

○進学や就職などの卒業（修了）後の進路の状況から判断した取組状況

今年度の卒業・修了生のほとんどが教職，及び音楽を指導する職に就くことができた。これらの職を遂行していく上でも，各人が演奏表現力を備えていることは不可欠である。特にピアノは音楽教育の場で有用

な楽器であるため，大学の器楽教員には，その演奏力を学生に習得させる責任がある。今年度の器楽ゼミ卒業・修了生に対してもこのことを十分に認識して，指導にあたった。

**研究指導**

学部生３名に対しては，基本的な演奏表現力をしっかりとおさえた上で，さらに多様な表現の可能性があることを理解させるよう努めた。また，楽曲の演奏表現を掘り下げて考えていくことが，音楽の実技指導の場で生かすことができる実践力の育成にも繋がっていることを理解させた。

大学院では1名のピアノに関連する修論指導にあたった。研究が院生が将来希望している教職の中での実践力や応用力に繋がるよう努め，その上で専門研究として価値を持つ内容である必要性を認識させた。

**◎特色ある点等**

器楽指導の内容が専門のみに片寄ることなく，学生の卒業修了後の仕事の中での実践に生かされるように努めた。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**演】**①平成15年12月：『声楽コンサート』でピアノ伴奏。他

**◎特色・強調点等**

今年度は独唱・合唱，及び管楽器のピアノ伴奏を数多く行った。声楽や他の楽器とのアンサンブルを行うことで，実技の指導にも生かすことができる多くの発見があった。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①平成15年８月：中部地区教職員研修会でファッゴットの伴奏，②平成15年11月：大島中学校音楽鑑賞教室でファッゴットの伴奏及びピアノ独奏，③新潟県音楽コンクールピアノ部門実行委員，④高田木曜会合唱団のピアノを担当

**上　野　正　人**（助　手）

**〈教育活動〉**

**授　業**

実技授業では，学生個々の問題点を示し，それを克服する課題を示すことにより学生の授業時外での自主練習を促す指導を行った。その結果，各学生が自己の課題へより積極的に取り組むようになり，学習効果が著しく向上した。

**研究指導**

私の考える臨床的な実践力とは，学習者の状態を見抜き適切な指導を行う事のできる能力である。この点から，専門である声楽指導技術の臨床的能力の向上のために，自己の技能向上の過程を深く分析し，実践にいかせるよう，指導を行った。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

・平成15年５月～１月：信州大学教育学部非常勤講師として「歌唱指導法 A」「歌唱法演習 A」「独唱法 A」「歌唱法基礎 A」を担当した。

・平成15年12月：本学音楽コースにて声楽を専攻する学部生，院生及び声楽担当教官による『声楽コンサート』の企画，運営，演奏を行った。

**◎特色ある点等**

特色ある点として，声楽指導の臨床的指導力の向上のために課題とその克服のための練習法，そしてその検

証を重点に指導を行った点にある。この指導法により，学生は，単なる演奏技法の習得に留まらず，それを他者への指導に生かすべき視点をもって課題に取り組むため，より実践的な能力を会得している。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

**論】**①平成15年９月：J.S.バッハ《カンタータ第82番“我は満ちたれり [Ich habe genug]”BWV82》の研究 上越教育大学研究紀要第23巻第１号

**作】**①平成15年６月：『平成15年度合唱祭における「高田木曜会合唱団」・「合唱団雪ん子」・「上越ふれあい混声合唱団」の指揮』上越文化会館

②平成15年８月：『新潟県うたごえ交流会における「合唱団雪ん子」の指揮』新井市ふれあい会館

③平成15年８月：『オペラサマーコンサート（独唱)』新潟県民会館

④平成15年10月：『合唱団「ななかまど」招待演奏（独唱)』妙高村農業研修センター

⑤平成15年11月：『2003年日本のうたごえ祭典における「合唱団雪ん子」の指揮』長野県県民会館

⑥平成15年11月：『高田木曜会50周年記念演奏会　指揮』上越文化会館

⑦平成15年12月：『オペラ「てかがみ」竹田勇一役　演唱』六日町文化会館

⑧平成16年３月：『上野正人バリトンリサイタル』リージョンプラザ上越コンサートホール

◎特色・強調点等

今年度の研究で特筆すべき点は，独唱による研究演奏発表とともに，指揮者としての研究演奏発表を行った点にある。特に，コンクールを兼ねている「2003年日本のうたごえ祭典」に新潟県代表として「合唱団雪ん子」の指揮をおこない好評を博し，また高田木曜会合唱団の演奏会では，上越地区では初となるモーツァルト《レクイエム》の全曲演奏を指揮し，地域音楽文化の発展に寄与している事が上げられる。そして，独唱者としてオペラ《てかがみ》において主役である竹田勇一役を，深い音楽分析と性格描写をもって演じ，高い評価を得た事も今年度の特筆すべき点である。

〈社会との連携〉

社会的活動状況

①高田木曜会合唱団　指導・指揮，　②合唱団「ゆきん子」　指導・指揮，　③上越オペラ合唱団音楽監督・指揮，　④長岡市立黒条小学校アウトリーチ小中学校出前コンサート

◎社会への寄与等

・継続して複数のアマチュア合唱団の指導を行なうことによって，音楽の普及と，生涯学習としての「合唱」の普及に寄与している。

・㈶長岡市芸術文化振興財団の企画によるアウトリーチ小中学校出前コンサートに出演し，児童・生徒へCDなどの録音からでは味わえない，生の音楽に触れる機会を提供した。

・新潟県文化振興財団に制作によるオペラ事業に演奏者として参加し，地域文化の発展に寄与した。

**宇　野　哲　之**（助　手）

〈教育活動〉

授　業

学部授業では「指揮法Ⅰ」「指揮法Ⅱ」「弦楽器表現法Ⅰ」「器楽基礎（弦楽器)」，大学院では「弦楽器演奏研究（独奏)」「室内楽研究A」の授業を行った。また学部授業「音楽」では，指揮法，器楽（リコーダー)，ピアノ認定の授業を行い，「体験学習Ⅰ」では弦楽器の授業を行った。研究プロジェクト「表現・状況的教育方法演習」の授業を共同で行い，音楽パフォーマンスの指導を行った。大学院授業では「教育実践

場面分析演習『音楽』」を共同で行った。

**研究指導**

学部学生１名（チェロ）の実技指導を行った。

**◎特色ある点等**

授業，研究指導では，学生が学習内容をすぐに理解し実践できるよう，常に独創的な工夫を行っている。また授業の流れを常に感じ，テンポよく行うことを心掛けている。多人数の授業でもできる限りマンツーマンの指導を行っている。研究プロジェクト「表現・状況的教育方法演習」では，音楽の枠を離れ，映像を教材にした授業を行った。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**作】**①平成15年４月：『春の彩り　ピアノトリオの夕べ』巻町カーブドッチ・コンサートホール

②平成15年８月：『宇野哲之チェロ演奏会』群馬県嬬恋村芸術の家ホール

③平成15年９月：『茨城の名手・名歌手たち　第14回』茨城県水戸芸術館

④平成15年11月：『DVD《雪の町に生まれた物語》杉みき子の世界』音楽演奏担当　高田文化協会

⑤平成15年12月：『第17回　ドルチェ・エ・ムジカ』横浜市イギリス館

⑥平成16年１月：『清水美和ピアノリサイタル』茨城県ひたちなか文化会館

**◎特色・強調点等**

『茨城の名手・名歌手たち　第14回』では，参加多数の厳しいオーディションに合格し，アンサンブル部門唯一の出場であり，過去の室内楽における研究の成果を十分に活用することができた。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①平成15年６月：『第38回新潟県音楽コンクール』　指導・審査　新潟市音楽文化会館，②平成15年4月～平成16年３月：新潟県音楽コンクール弦楽部門実行委員（新潟県・新潟市・長岡市・上越市ほか）

**◎社会への寄与等**

長期にわたり新潟県音楽コンクールの審査員，実行委員を務めることによって新潟県の弦楽器教育に貢献した。また，『DVD《雪の町に生まれた物語》杉みき子の世界』の製作に音楽演奏担当として参加し，上越地域の文化活動に貢献した。

**【芸術系教育講座（美術）】**

**太　田　將　勝**（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

（学部）図画工作科指導法，中等美術科指導法（教材，過程），博物館資料論，総合演習芸術社会教育論

（大学院）美術科教育論，美術教育特論，美術科教育教材開発演習，教育実践場面分析演習

学校および社会教育の現場を考慮し，近未来において活用可能な知見を伝えるとともに，教材および授業内容の設定についても，学校・社会教育の現場における実践的意義と効果を重視した。いわゆる現場主義に立ち，細部に至るまで空論や概念に終わらせず，具体性をもたせるよう工夫した。教育現場や現場の授業担当者の協力を得て進めることも多かった。博物館関連の科目では，芸術史学の調査や方法を伝えるとともに，学生が行政機関としての公立美術館に任用された場合を想定。在野的・前衛的な内容・方向を含む近現代の美術の調査・研究，その成果である展覧会の企画を，行政等の状況に整合させながら，いかに推進すべ

きかについて，学生共々論じ合い，模索した。モデル（模型）を多用した。

**研究指導**

上越，ニューヨーク両市の小学校4校の協力を得て，同一指導案，同一授業計画にもとづく，小学校図画工作科授業を計画，本学大学院学生が４校の授業を担当した。厳密な意味での比較研究としては成立しがたかったが，当該学生はこの研究授業の成果を学位論文にまとめ，修了した。近県から派遣された現職教員の研究生には，美術教育と総合教育との連携のテーマにもとづく資料を収集・提供，関係の事項の集約に協力した。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**論】**①平成15年４月，「 久保貞次郎論― 」(『上越教育大学研究紀要』)

②平成15年９月「久保貞次郎論―ライトとミラーの周辺―」（『上越教育大学研究紀要』23-1）

③平成15年12月「造形芸術・美術は教科たりえるか」（『理論心理学研究』5-1）

**他】**①新聞紙上での展覧会案内・評論

**学会活動への参加状況**

①大学美術教育学会，　②美術史学会，③日本理論心理学会

**在外研究の状況**

①５月９日～５月15日：アメリカ合衆国ニューヨーク市　日米児童画展開催準備会，研究授業（２校）実施

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①日本ジュニア美術協会諮問委員会委員，　②国際ジュニア美術館設立準備委員会委員，③上越芸術総合研究所理事，④上越市美術品収集委員，⑤海上保安署図画コンクール審査委員，⑥高田文化協会理事，⑦妙高四季彩ジュニア展審査員，⑧新潟県絵画版画コンクール審査員，⑨上越美術研究会講師，⑩自治体職員採用試験出題採点委員，⑪東北美術懇話会委員，⑫仙台坪沼総合学習プロジェクト委員，⑬上越・ニューヨーク国際児童画展開催実行委員会事務局

**風　巻　孝　男**（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

学部：「表現と鑑賞」の授業では，美術家の幼・少年期に焦点を合わせ，同時に児童の表現を参照しながら，個性と様式発展（発達段階）をキーワードとして造形的表現の意味について理解させるよう努めた。さらに時代様式について，個人様式の発展のプロセスとの類似性を指摘し，また西洋美術との比較を通して東洋的・日本的美について理解を深めるよう授業内容を工夫した。「芸術社会教育論」では，自然と美術，宗教と美術，アニメ・マンガの三テーマを取り上げ，人間生活と美術とのかかわりについて考察した。成績評価は，鑑賞力テストおよびレポート提出によって行なった。

大学院 ( 修士課程 ) :「西洋美術史」では，フリードリヒとカールスを中心テーマとして取り上げ，美的教育に情熱を傾けたシラーやゲーテ，またフリードリヒ・シューレーゲル，ノヴァーリス等の芸術観との関連から古典主義，ロマン主義の美術について考察した。成績評価はレポート提出によって行なった。

**研究指導**

大学院 ( 修士課程 )　修論指導は，美輪明宏の表現活動について論じたものが１件であった。

◎特色ある点等

授業内容は，教育的視点に留意すると同時に，学生とのコミュニケーションを図るべく努めた。美術家を取り上げるにしても，特にその幼・少年期に着目して，表現の意味を考察し，またフリードリヒやカールスの風景画を扱うにしても，彼らの自然観に着目し，現代において省察すべきシラーやゲーテの自然観にも言及した。美術とは，自然，宗教，生活等人生に深く根ざした活動であり，人間学そのものといっても過言ではない。教育的，人間学的立場から授業内容を設定すべく努力している。

〈研究活動〉

研究成果の発表状況

**論】**①平成15年９月：『フリードリヒに帰せられた諸作の真贋に関する論考(3)－二葉のセピア画《墓のある風景》と《墓穴の側の梟》－』(単著)　上越教育大学研究紀要　第23巻　第１号　pp.315-327

◎特色・強調点等

本研究は，フリードリヒに帰せられた諸作の真贋に関するこれまでの研究の継続であり，日本，ドイツの研究者に注目されている。

学会活動への参加状況

①大学美術教育学会の論文審査委員として1編の論文審査にあたる。

**西　村　俊　夫**（教　授）

〈教育活動〉

授　業

【観点１】教育方法及び成績評価面での取組

○授業形態，学習（研究）指導法等の教育方法に関する取組状況

全学共通科目の複数教官による授業においては，適宜検討会議等を行い授業の内容等の検討を行っている。教科に関する科目では，前回授業の提出レポートや課題を資料として授業内容を検討している。

○成績評価法に関する取組状況

実習・演習の授業では提出課題と合わせて制作プロセスでの様々な工夫や発見の状況を加えて総合的に評価している。

【観点２】教育の達成状況

○進学や就職などの卒業（修了）後の進路の状況から判断した取組状況

研究室の学部卒業生１名は現在本学の科目等履修生となっている。修士課程修了生4名（内2名は現職派遣大学院生）の進路は，教員１名，臨時採用教員１名である。今後はさらに教員就職者を増やすよう指導してゆく方針である。

研究指導

【観点１】学部

学部２年次の授業では地域の小学校と連携し，造形遊びを内容とする活動を行った。授業及び卒業研究では学生一人ひとりの興味・関心を大切にし，それぞれの能力や良さを十分に発揮できるにように指導した。

【観点２】大学院

修士課程学習臨床科目の授業では，地域の小学校と連携して具体的な授業実践を伴った教材開発研究を行った。修士論文作成のセミナーでは，研究発表及び討論の充実に注力した。博士課程においては，研究テーマにそった学会誌投稿論文の作成および学会口頭発表の指導を行った。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

①山形大学教育学部非常勤講師，　②滋賀大学教育学部非常勤講師

**◎特色ある点等**

美術授業の他に全学共通の相互コミュニケーション科目，学習臨床に関する科目と多様な授業を行っている。大学院の学習臨床に関する科目では，地域の小学校の協力を得て受講生が十分な論議の上で計画した研究授業を行うという実験的授業を行っている。研究室には，博士課程，修士課程，学部それぞれの学生がおり，常に教育・研究に関する交流が行われている。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**作】**①平成15年７月：『松代町第一区民会館ワークショップ～ひとの－あいだ－ばしょ～』 大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ2003　新潟県松代町

②平成15年９月：『杉のかたち (C)-03』 第67回新制作展　東京都美術館

③平成16年３月：『杉のかたち (D)-04』 木のかたち4　高田図書館市民ギャラリー

**発】**①平成15年８月：第７回美術教育実践学会美術教育シンポジウムコーディネーター

②平成15年９月：第７回芸術教育実践学会パネリスト

**共同研究の実施状況**

①相互コミュニケーション科目「表現」の教育内容及び方法の開発と教育実践の理論の構築に関する研究
代表者：西村俊夫　上越教育大学研究プロジェクト

**学会活動への参加状況**

①９月21日：第７回芸術教育実践学会出席，10月３日～５日：第42回大学美術教育学会出席　②８月18日：第７回美術教育実践学会・美術教育シンポジウムの企画　③平成15年度大学美術教育学会副理事長　④平成15年度大学美術教育学会学会誌委員長

**◎特色・強調点等**

『松代町第一区民会館ワークショップ～ひとの－あいだ－ばしょ～』は西村ゼミ（12人）が松代中学校１年の総合学習と連携して生徒（38人）と共に半年間活動したワークショップで，新しい造形教育のかたちをつくりだすことができた。大学美術教育学会では，副理事長及び学会誌委員長を務め，学会及び美術教育の発展に努力した。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①平成16年２月：第44回新潟県児童生徒絵画・版画コンクール審査員

**◎社会への寄与等**

・新潟県児童生徒絵画・版画コンクールという展覧会の審査を通して県内の美術教育関係者と交流をするとともに県の美術教育の発展を支援している。

**福　岡　奉　彦**（教　授）　※附属実技教育研究指導センター

**〈教育活動〉**

**授　業**

○授業形態･･学習 ( 研究 ) 指導法等の教育方法に関する取組状況

上越教育大学に入学してくる学生の多くは教員養成の学生である。将来を担う教師としての核の教育を，実践と理論の往還関係の中から学生たちが学びとれるように授業を構築している。

○成績評価法に関する取組状況

学部生，大学院生とも，絵画という専門性の意義を様式論だけでなく，教育現場での効用性の面からも学生たちが理解できるように授業を構築している。その後の成績評価基準は，指導教官だけではなく実技を担当している複数の教官と学生たちが参加した合評会を開き，教官たちと学生たちの自由な対話の中から客観的に評価を経験できる評価方法をとっている。

○進学や就職などの卒業（修了）後の進路の状況から判断した取組状況

院生のゼミ生のうち１人は，院生の２年間，連続して上越教育大学の優秀学生として大学から表彰され，実技制作では昭和会展（日動画廊），新制作協会展（全国公募・東京都美術館）等をはじめとして入選，受賞をし，育英短期大学の助手として採用された。

学部生のゼミ生の１人は当大学の大学院へ進学し，もう１人は科目履修生として当大学に残っている。

**研究指導**

学部では，ものを見る眼，作品を観る眼を通して自分自身を見つめる眼＝子どもたちを見る眼を養い，教育という場を通して子どもたちを育てる力がもてるように，基礎的実技を通して個々のイメージの領域を広げられるように行っている。又，卒業研究をとうして制作と制作レポートを課し，その研究が教育実践へ発展できるように配慮した指導をおこなっている。

大学院生の各授業では，表現の多様性，表象のおもしろさやイメージの拡大表現の分析等を通して，新たな鑑賞教育と制作表現の往還を具体化し，そこから生まれる新しい教材開発も生みだせるように行っている。また，美術という専門性にとっての制作の意味性を考察しつつ，実技の指導を行った。

院生の１人と科目履修生の１人を町田市立国際版画美術館で開催された第28回全国大学版画展（大学版画学会主催）へ作品を出品させた。

また，科目履修生は画廊企画で，新潟市と上越市の２ケ所で１版多色刷り技法の銅版画で作品発表の手段として個展を開催させた。

**◎特色ある点等**

将来，教育を預かる現場の教師として，子どもたちの多様化が進むなか，美術という教育で培ったイメージの拡大を持つことにより，いろいろな場面での子どもたちの個性，特色を見極め，現場での教育機能の充実をはかれるように，また，与えられた役割りを担っていけるように行っている。そして作品の発表では，社会と美術館と大学の一体化を図る意義を体験させ，今日の教育状況における新しい学習の意味を知らせている。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**作】**①平成15年４月　油彩画『雪譜』F120号ほか23点で「福岡奉彦油彩画個展」として開催する。（福岡・三越ギャラリー企画）

②平成15年５月　油彩画『アマリリス』60×30ｃｍ，『人形』60×30ｃｍ，『アスパラガス』F10号の３点を「第７回　Present ー時ー展」へ出品する。（京都・ギャラリーヒルゲート企画）

③平成15年６月　油彩画『水の寝床』F200号，油彩画『人形』M10号の２点を「彩象2003展」へ出品する。（埼玉県立近代美術館・後援　埼玉教育委員会，テレビ埼玉，埼玉新聞社）

④平成15年10月　油彩画『群』F200号を「第71回独立美術協会展」へ会員として出品する。（東京都美術館）

⑤平成16年１月　油彩画『悲華』F200号を「新潟の美術2004・作家100人展」へ招待出品する。（新潟県立万代島美術館）

⑥平成16年１月　油彩画『羽音』F200号が「県民の美の財産展」として展示される。（新潟県立近代

美術館）

⑦平成16年２月　油彩画『風渡る』F100号，『アスパラガスと林檎』P10号，『アマリリス』F10号の３点を「第２回 EVOLUTION16展」へ出品する。（日本橋・高島屋ギャラリー企画，なんば大阪高島屋，名古屋高島屋）

**◎特色・強調点等**

作品発表は批評文等によってある種の完結を迎えることもある。

・「第71回独立美術協会展」（東京都美術館）へ出品した『群』F200号・油彩画に対して，平成15年10月25日新潟日報紙上に美術評論家藤島俊会氏の批評文が掲載される。

また，MADO 美術の窓 2003.12. №243の P324に作品写真と批評文が掲載される。

・「第２回 EVOLUTION16展」（日本橋・高島屋企画，なんば大阪高島屋，名古屋高島屋）へ出品した『風渡る』F100号・油彩画に対して，平成16年４月11日発行・新美術新聞の［この展覧会，この一点］の欄に油井一人氏・選による作品写真と批評文が掲載される。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

・平成15年６月　新潟県立近代美術館収集委員会

平成15年度美術品収集の候補作品の閲覧と柏崎美術館建設予定に関する討議等行う。　尾崎　正明（東京国立近代美術館副館長），幸福　輝（国立西洋美術館学芸課長），宮田　亮平（東京芸術大学美術学部長）ほか４名による委員会である。

・平成15年12月　新潟県立近代美術館収集委員会

平成15年度後期美術品収集の候補作品の閲覧，討議と今後の美術品収集の討議等行う。

**増　谷　直　樹**（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

【観点１】教育方法及び成績評価面での取組

教育方法に関する取り組み状況

２年次におこなっている造形基礎は短期間に集中的に効率をあげるように２時限続きの３時間授業としていたが，他コースの学生が受講できないケースが続出したため，本年度は前期１時限の授業に変更した。また学生達の視野を広げかつ新たな興味を持たせることを目標として，伝統的な絵画技法の解説と制作を行う授業を２年次に開講している。３年次の絵画表現 A の内容については油彩画のみでなく日本画，版画も受講できるようにし広がりを持ったカリキュラムに変更した。

成績評価

どの授業においても授業の冒頭およびシラバスにおいて学習目標や授業計画を解説し，最終日に各授業で制作した作品を教室内に展示し，複数の教官および学生達が参加して合評会を開き，討論をしながら作品を評価しその後教官が協議し成績を決定している。この方法は学生が自分の作品を他者と比較しながら客観的に評価する経験を持つことが出来る優れた評価方法と考えている。

【観点２】取り組み状況

伝統絵画技法の授業は学生達の興味と創造力を引き出し，新しい教育実践力を育む大きな効果があったと考える。

**研究指導**

【観点１】学部

自分自身が美術に真剣に向き合い創作活動することによりはじめて教育にかかわる臨床的な実践ができるとの考えの基に，動機付けや創造性に留意して指導を行った。どの授業についても学生は指導の理念を良く理解し積極的にかつ意欲的に制作に取り組んでいる。

【観点２】大学院

院生２年の修士論文の指導を行なった。院生１年については２名の論文指導を行っている。

**その他の教育活動**

平成15年10月　社会教育の一環として上越市の開講する小林古径亭における市民講座において講演を行った。

自分が美術に向き合い，創作活動をおこなうことによってはじめて教育にかかわる臨床的な実践ができるとの考えを基に実技教育を行っている。中でもテンペラ，フレスコ等の古典技法の実習は絵画教育の実践に新しい広がりを加えるものと考えフランス，イタリーでの研修の成果を生かし内容の一層の充実を計っている。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

①平成15年10月　『思い出のトレド』F130,『カルカッソンヌの下町』F80,『ゴルド』F80等４点　グループプシケ展　シロタ画廊　（銀座）

**在外研究の状況**

①平成15年３月～４月　フランス　カルカッソンヌ，トゥールーズ，アルビ地方，においてロマネスク美術，ロートレック研究及び制作活動を行った。

**◎特色**

研究活動として絵画制作および西洋画技法，組成に関する研究を継続して行っている。中でも西洋の古典絵画技法の研究に関しては長期間のイタリー，フランスなどにおいて現地研修を行っており，その積み重ねによる研究の蓄積と先進性があり，我が国の絵画教育実践の新しい展開に寄与するものと考えている。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①上越市市展運営委員，　②新潟県展委員，③妙高四季彩展審査員

美術を自己表現の手段の一つとして，それを生きがいとしている人が数多くおり，社会教育，生涯教育の果たす役割は大きい。市展，県展の委員等として，また美術クラブなどの講師として市民の作品の指導などを行うことにより，地域の生涯教育，社会教育におおきく寄与していると考えている。

**山ノ下　堅　一**（教　授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

ブリッジ科目「図画工作」では，分担担当テーマを「見ることと伝えること」として，視覚伝達デザインについて学習方法を提示し実践した。昨年度授業開始時学生にデザインについて記述させたところ，学生のデザイン概念が「つくる」ことに偏っていたことから，デザイン作業以前の構想段階の重要性を示唆することを念頭に授業を進めた。特に，デザインメディアを共有する「見る人」への眼差しの重要性を要点としてデザインの意味を講義し，演習に入った。

**研究指導**

学部「デザインワーク１」「デザインワーク２」において，コンピュータによるビジュアルデザイン制作方法を取り入れ，情報の収集，選択，加工を実習し，視覚的情報発信・受信の意味を検討しながら作品制作を行った。

外国人研究生を受け入れている。研究生は中国内モンゴル師範大学美術コース卒でデザイン教育研究を志していることから，デザイン教育について，実習と文献研究を主に行っている。

**〈研究活動〉**

**学会活動への参加状況**

①10月３日～５日：第42回大学美術教育学会「旭川大会」出席，平成14年度学会理事

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①上越市美術展覧会運営委員（上越市），②にいがたデジコングランプリ実行委員・審査委員

**阿　部　靖　子**（助教授）

**〈教育活動〉**

**授　業**

本年度は，教育実地研究Ⅲ（初等教育実習，３年）の分離･分割方式導入の２年目にあたり，昨年度の反省に基づき図画工作科指導法の授業内容と授業形態を再検討し，教育実習と深く結びついた授業のあり方をさらに模索した。また，大学院と学部の連携授業である「実践場面分析演習Ⅰ及びⅡ」は，前期に学部４年生が，後期に学部３年生が，それぞれ大学院１年生とともに行う授業であるため，学部生の教育実習を授業の実践的内容としてどのように取り入れるか，検討し，実際に試みることができた。その結果，大学院1年生と学部３，４年生が互いに学びあうことのできる新しい授業の試みとして，今後さらに発展させていくことができると思われる。

さらに，全学共通の授業として学部１年生の「体験学習」を分担する中で，教員養成大学に入学したばかりの学生にとって重要な授業内容と方法について，検討を重ねながら，授業を実施することができた。

**研究指導**

指導を担当した大学院学生１名は，他大学からの学部卒業生で，教員志望であったため，２年目の本年度は近隣の中学校の非常勤講師として勤めながら，その教育実践と調査を加えた修士論文をまとめることができた。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

教職講座（図画工作）担当。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**作】**①平成15年４月　モニュメント「大地から大地へ」 新潟オートリサイクルセンター設置（上越市）

②平成15年５月 「ふくれたカタチ」 日本美術家連盟　新潟県会員展　2003 （長岡市）

③平成15年７月 「花の雫」 第４回桜の森彫刻コンクール（秋田） 準賞受賞

④平成15年９月 「だけど，大きいのが好きですか」 第24回国際インパクトアートフェスティバル2003（京都市美術館）

⑤平成15年９月～11月 “Step forward slowly” 第14回ダンテスカ国際彫刻ビエンナーレ （イタリア）（ダンテスカ美術館収蔵）

⑥平成15年10月「あなたの心もお金も好き」 第３回袋小路展 （画廊企画招待出品）（仙台市）

⑦平成15年11月 「鮭」 桑取川鮭孵化場設置（上越市）

**共同研究（幼，小，中，高等学校及び特殊教育諸学校教員との共同研究を含む）の実施状況**

①新潟県中頸城郡妙高村立大鹿小学校でのPTA主催「ふれあい活動」における講演とワークショップ指導，②新潟県青海町立市振小学校壁画ワークショップ協力

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①新潟県森林審議会委員（新潟県），②新潟県都市公園整備計画検討委員会委員（新潟県），③都市計画審議会委員（上越市），④建築審査会委員（上越市），⑤景観審議会委員（上越市），⑥環境審議会委員（上越市），⑦環境影響評価検討委員会委員（上越市），⑧子ども発明工夫・模型工作展実行委員会副委員長（上越市），⑨上越市第５次総合計画検討委員（上越市），⑩景観アドバイザーなど。特に，本年度新設された景観アドバイザー制度は，市の景観条例に基づく届け出制度による色彩などの指導，助言を目的とするもので，市の景観形成の質を高めることに貢献した。また，本年度は，第22回全国児童画コンクールの審査委員として審査にあたった（東京）。

他に，委員以外の地域社会への貢献として ①上越市商店街主催の第３回越後高田「花ロード」の展示及びワークショップに，美術コース学部２年生とアートワーク部員と参加し，市民に喜ばれる展示とワークショップを行うことができた。②上越市の祭り「謙信公祭」において子どもたちを対象とした「巨大パネルに絵を描こう」というイベントをアートワーク部員とともに行った。③直江津港に面した殺風景な工場の壁面をよりよい景観に変える事業の一環として依頼を受け，工場の壁面（高さ3.2m×幅64m）に，アートワーク部員とともに絵を描き，豊かな環境づくりに貢献した。

**髙 石 次 郎**（助教授）

**〈教育活動〉**

**授 業**

「体験学習（人間教育学関連科目）」では，陶芸のプロセスを経験する他に，地域の縄文土器研究グループの協力を得た縄文土器作り及び野焼き，街の活性化のための行事への参加を行った。「表現・状況的教育方法演習（相互コミュニケーション科目）」では，専門や所属の異なる4人の教官が連携をしながら表現をテーマとして教育やコミュニケーションについて，ビデオ作品制作・パフォーマンス・プレゼンテーションを行い，学びの中での表現の理解を促す授業を展開させた。「図画工作（ブリッジ科目）」では，粘土を机上に延ばしたり上方に伸ばしたりし，粘土と人の関係（専門性）が学校教育場面へ繋がることを学習した。「工芸表現Ｂ」では，石膏による鋳型を作り磁器鋳込み成形を行い，陶芸のプロセスにある発見や工夫・技術を体験した。「陶芸研究（大学院）」では，粘土から陶芸作品までの過程を追いながら，素材・プロセス・技術と作ること・人との関係について学習した。また，美術コース以外の派遣学生の受講が多いために，陶芸をベースとしながらも学校教育の話題が多く活発な授業が展開できた。「工芸表現Ｂ」「陶芸研究」では，ガラス工房を訪問し，吹きガラスの体験を行った。「意味生成表現特論」では，３人の教官がそれぞれの意味生成をテーマにした講義を行った後に，受講生による発表を行った。「造形表現カリキュラム開発特論」では，子ども・学び・遊び・造形・意味生成をキーワードとして，充実した協議を積み重ねた後に，地域の小学校３年３クラスで行う共同研究授業を行った。また，地域の中学校美術教諭の授業見学及び講演も行った。共同研究授業の前後には，その小学校の担任教諭との意見交流の場を設けた。

**研究指導**

学部生と大学院生と研究生を交えて，ゼミ形式で学校教育や陶芸制作及び論理について発表及びディスカッションを行った。また，地域の小学校での造形活動や地域住民との造形活動の企画・運営を行うことで子ども・保護者・教諭・住民の実際に触れた。これらの活動に参加しながら，そこでの出来事によって美術や造形活動が状況的にどのように学習として成り立つかを学んだ。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

①春日小学校（６年１～４組）ＰＴＣ活動で校舎沿い歩道塀の上にタイルを作り設置した。

②大地の芸術祭「越後妻有アートトリエンナーレ」にゼミ生及び卒業・修了生が参加した。

**◎特色ある点等**

陶芸関係の授業では，技術の伝達や作品主義に傾倒しすぎないようにしながら，陶芸文化と人間との関係に目を向け，陶芸を通して教育や社会へと繋がっていくことを大切にした。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**作】**①平成15年７月～８月：大地の芸術祭「越後妻有アートトリエンナーレ」/「器でかかわりタイ」（新潟県松代町）

②平成15年11月：新潟のやきもの展（新潟市　雪梁舎美術館）

③平成16年２月：個展　アートサロン環（新潟市），＋　ギャラリーレクチャア

**発】**①平成15年10月：研究発表Ⅰ（古部寛・高石次郎），研究発表Ⅱ（笠川真由美・高石次郎）第42回大学美術教育学会研究発表大会（北海道旭川市）

**共同研究（幼，小，中，高等学校及び特殊教育諸学校教員との共同研究を含む）の実施状況**

①『つくること表すことによる「生きる力」としての学びの基礎理論の構築と教育の体系化』代表者：西野範夫科学研究費補助金，②『相互コミュニケーション科目「表現」の授業評価システムの構築に基づく教育内容及び方法の研究開発』代表者：西村俊夫　学内研究プロジェクト，③『小学校の協力を得た図画工作科・カリキュラムの研究－「意味生成表現特論」「造形表現カリキュラム開発特論」』代表者：高石次郎　学内研究プロジェクト

**学会活動への参加状況**

①平成15年10月：第42回大学美術教育学会及び研究発表大会出席（北海道旭川市），②平成15年８月：第７回美術教育実践学会シンポジウム企画運営（新潟県松代町），③美術教育実践学会事務局長

**◎特色・強調点等**

大学の授業と地域の小学校を連携させた共同研究授業の在り方が，より学生や小学校の教諭が積極的に深い考察を伴って参加する実践的な研究として展開することを目指している。また，そこで陶芸や美術が学習の中でどのような役割を担えるか・位置づけになるかを研究している。

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①本学公開講座講師，②妙高四季祭博物園「手づくり看板コンテスト」審査委員，③春日小学校評議員及びＰＴＡ幹事，④上越市美術展覧会運営委員

**洞　谷　亜里佐**（助教授）　※附属実技教育研究指導センター

**〈教育活動〉**

**授　業**

「ものを見ること，対象と対話することからの写生描写」に重点をおき，写生による発見の楽しさや神髄に迫ることで自分らしさとは何か，という主観的な表現方法を模索していく授業の展開に心がけた。ブリッジ科目「図画工作」では，自然を見ること感じることから自分を探ってみる行為を行い，そこから絵画表現の可能性についての作品作りをしてみた。

「表現・〈子ども〉の活動」は80人授業という大人数のためグループに分かれた指導を行い，学生同志での研究チェックを行うと共に，ティーチングアシスタントの協力により，個々の表現への助言に気を配ることができた。ここでは言葉以外のコミュニケーションの授業として様々な角度から身体を開放して自分を表現する活動を行った。

「絵画表現」「伝統絵画と鑑賞」では，日本画，東洋絵画を精神性，表現技法，素材などの多方面からの分析を文献や作品を通して研究し，模写などで古典絵画を読み取ることを試みた。

また，『ものづくりの原点』というテーマで玉屋庄兵衛さんをお迎えし，表現する発想と科学の結びつきや，日本人の精神性に触れる授業が展開できた。

「日本画研究」では，日本画の素材研究と表現の可能性について自由制作の上で展開していった。

**研究指導**

授業以外の積極的な研究活動の成果として，平成15年10月上越市展入選（１名・奨励賞受賞），平成16年２月東京春季創画展入選（１名）の学生指導をおこなう。

**その他の教育活動（学外を含む。）**

富山大学教育学部の非常勤講師として，「絵画技術演習．日本画」を担当した。

**〈研究活動〉**

**研究成果の発表状況**

**作】**①平成15年４月：『海の女たち』（変150号）再興第87回院展　新潟三越

②平成15年４月：『春のおとずれ』（F20号）第５回雄雄会　銀座松坂屋（名古屋）

③平成15年９月：『海の朝』（変150号）再興第88回院展　東京都美術館　各地巡回

④平成16年１月：『移りゆく』（F50号）2004長湫会　日本橋高島屋　名古屋巡回

⑤平成16年２月：『華』（M30号）うづら会　日本橋三越

⑥平成16年３月：『家路』（変60号）第60回春の院展　日本橋三越

**〈社会との連携〉**

**社会的活動状況**

①平成15年12月小林古径邸美術講演会，実技センター講演会『ものづくりの原点』玉屋庄兵衛講演会企画

②平成15年10月より小林古径邸美術講座絵画教室（４回）上越市企画部文化振興課

②平成16年２月第44回新潟県児童生徒絵画コンクール審査員

④上越市美術展覧会運営副委員長

**◎社会への寄与等**

・小林古径邸利活用アドバイザー（上越市文化企画振興課）

# 第三章　資　　料　　編

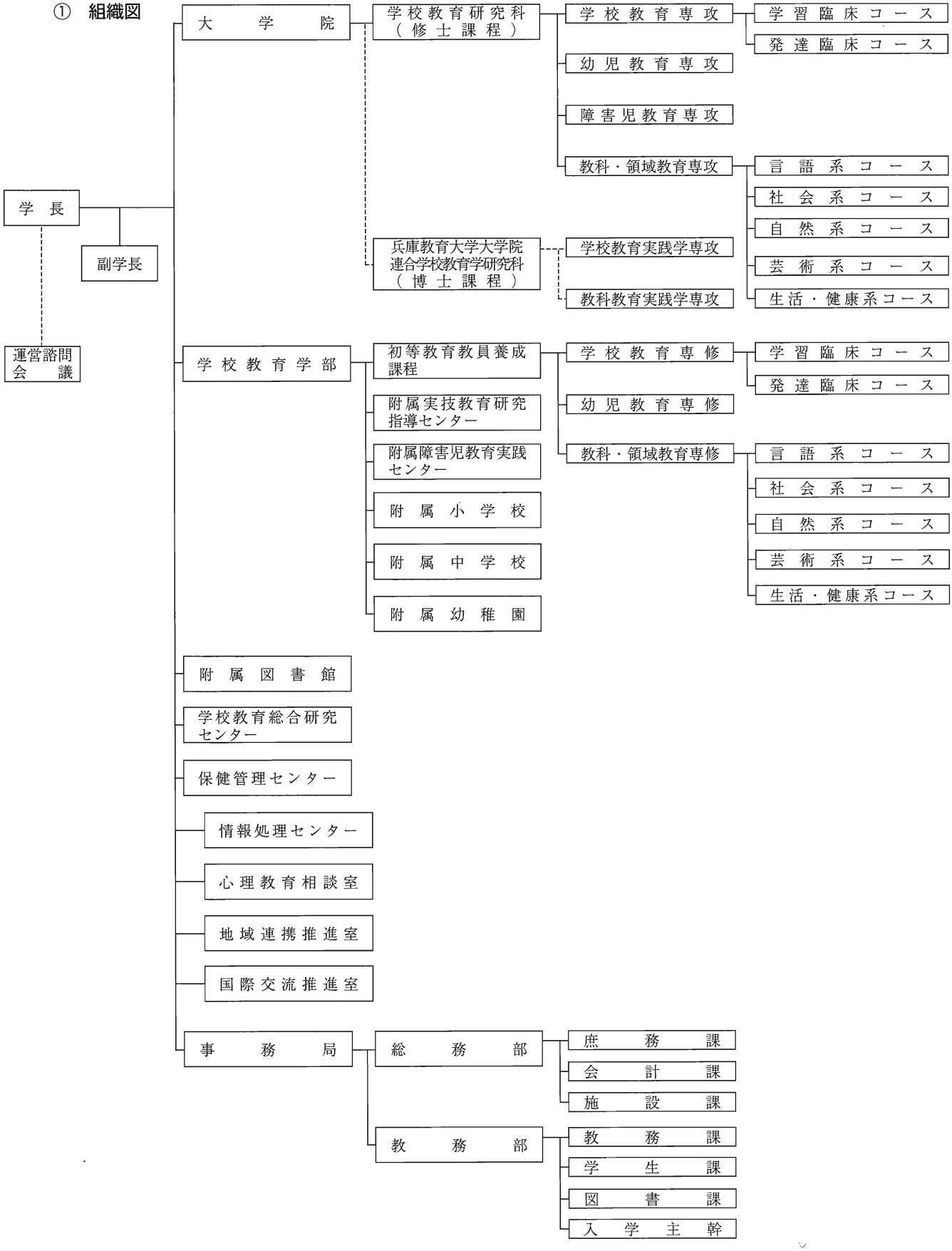
# 第三章　資　　料　　編

## 1　管理運営

※平成15年５月１日現在

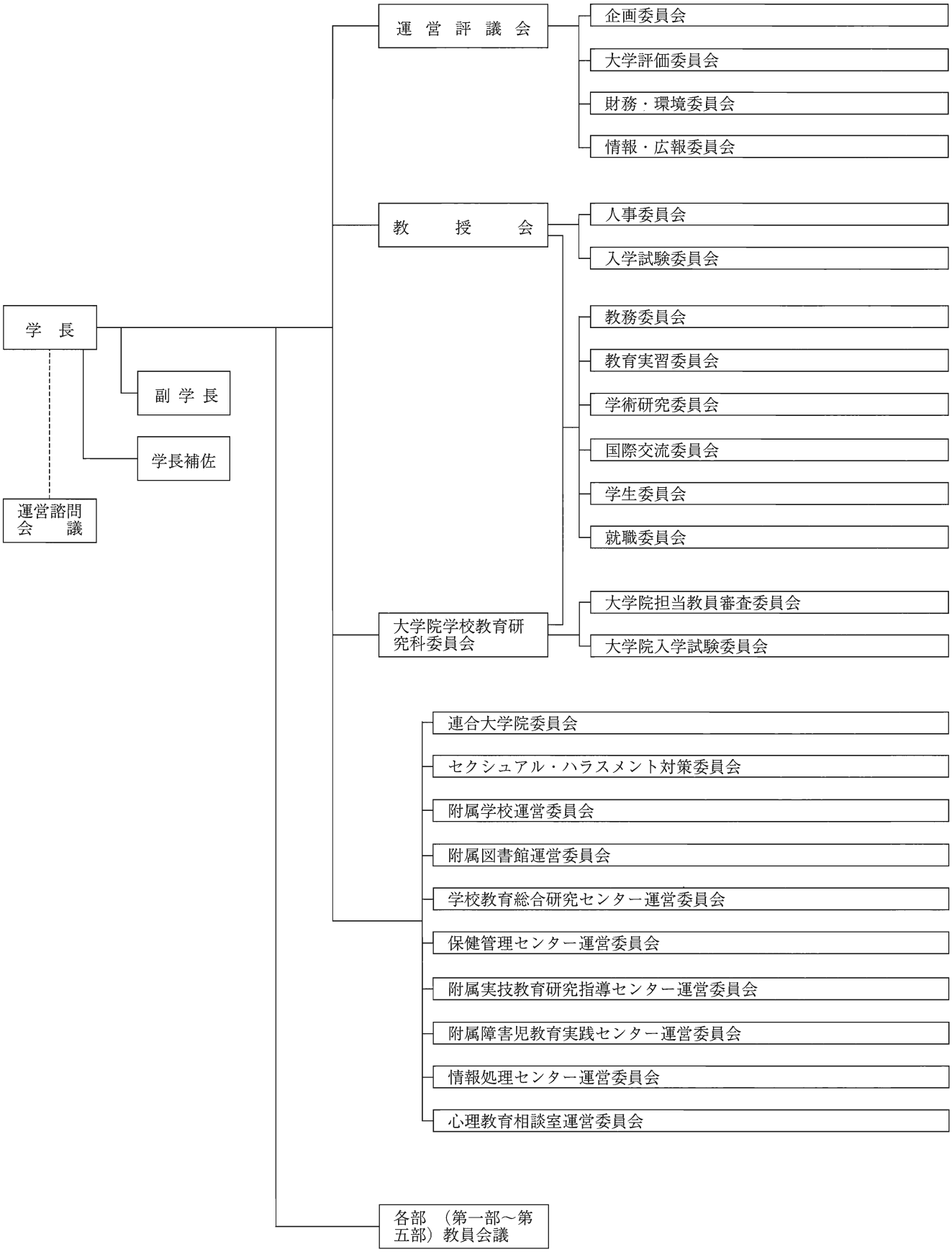
### (1)　管理運営機構

#### ①　組織図



② 運営図

※平成15年５月１日現在



### ⑵ 運営諮問会議

#### ① 第７回議事概要

○日　　時　　平成15年６月13日（金）　11:00～15:10

○場　　所　　如水会館（東京都千代田区一ツ橋２－１－１）

○出 席 者　　蓮見　音彦　委員長　（和洋女子大学特任教授）

加藤　　章　副委員長（盛岡大学長）

井内慶次郎　委員　　（東京国立博物館運営協力会会長）

黒羽　亮一　委員　　（常磐大学教授）

木浦　正幸　委員　　（上越市長）

佐久間舜二　委員　　（株式会社ＷＯＷＯＷ代表取締役会長）

佐々木正峰　委員　　（独立行政法人国立科学博物館長）

髙橋　信雄　委員　　（髙助合名会社社長）

山岸　　宏　委員　　（前新潟県小学校長会会長）

○欠 席 者　　小原　芳明　委員　　（学校法人玉川学園理事長・玉川大学長）

平山　征夫　委員　　（新潟県知事）

○本学出席者　　渡邉学長，小宮副学長，髙田副学長，高橋事務局長，堀江総務部長，髙田教務部長，稲葉庶務課長，佐藤会計課長，市村教務課長，後藤庶務課専門員，佐藤庶務課専門職員，細谷庶務課企画法規係長，中村庶務課専門職員

○会議次第

１　開　会

蓮見委員長から，第７回上越教育大学運営諮問会議の開会が告げられた。

２　学長挨拶

４月１日付けで交代した学長他の紹介があった後，渡邊学長から，本会議出席等への謝辞及び国立大学法人化に向けた本学の対応状況の説明並びに引き続き指導助言等をお願いしたい旨の挨拶があった。

３　配付資料確認・日程説明

総務部長から，本会議の配付資料の確認及び日程説明があった。

４　第６回議事概要確認

蓮見委員長から，前回（第６回）議事概要については，資料１のとおり前回出席の委員から既に確認をいただいているが，改めて確認願いたい旨の説明があった。また，本議事概要を大学のホームページにより公表する旨の説明があった。

５　議　事

⑴ 諮問事項「国立大学法人としての上越教育大学の中期目標・中期計画について」

①　諮問の趣旨及び国立大学法人法案審議の概要等について

蓮見委員長から，諮問事項「国立大学法人としての上越教育大学の中期目標・中期計画について」等について説明願いたい旨の発言があり，渡邊学長から「諮問の趣旨」，高橋事務局長から「国立大

学法人化の作業スケジュール」及び「国立大学法人法案審議の概要」について，それぞれ資料に基づき説明があった。

〈質疑応答〉

大学から説明のあった国立大学法人法案審議の概要等について，各委員及び大学側から次の質疑応答があった。（以下，◎は各委員からの発言を示し，●は大学からの発言を示す。）

◎　昨日の朝刊の論説に，国立大学の法人化に関して非常に厳しい批判が出ていた。文部科学省の支配強化につながる可能性があるというテーマだった。大学に対する評価に応じて資金供給の基準が変わってくる。そこを握っている文部科学省の統制が強くなるという心配が社説として出ており，本来多様な価値観の共存が不可欠であり，教育や研究の質やレベルを客観的に評価するのが難しいのに，文部科学省が大臣の立場で評価する形になっているのを大学側はなぜ黙って見ているのか，という厳しい評価であった。このような批判に対して答えられるものを我々は持ってないといけないと考えるが，いかがか。

●　６月10日，11日に開催された国立大学協会総会においても，法人化の問題についていろいろな意見があったが，国の政策として法律的に通った部分については，認めざるを得ないだろうという判断であった。その中で具体的に動きをしていく時に，そのような危惧やあるいは齟齬があるとかいろいろ問題が出てきている。そういう問題について，国立大学協会として法律が通る前に異議や意見を申し立てないでいいのかという意見が出てきた。今の新聞の受け止め方も一つのスタンスだろうし，国立大学協会の中でも統一した見解にはなっていないが，基本的には法案が通るということを一つの流れとして認めざるをえないということであり，その中で出てきている具体的な問題等は，再来週以降の臨時の学長会議で国立大学協会としての意見具申をまとめるというふうに伺っている。

◎　配付資料の衆議院附帯決議は，評価の問題に触れているが，この問題は非常に重要な問題である。透明性のある基準に従って，大学の自主性・自立性を尊重して行われるべきことは当然のことであるが，実際にはいろいろ問題がある。大学法人評価委員会が行う評価では，経営等については直接に大学法人評価委員会が評価を行うが，教育研究については，先に大学評価・学位授与機構が評価を行い，その結果を参考にし，それを尊重して大学法人評価委員会が評価を行うことになっている。大学法人評価委員会や大学評価・学位授与機構がどんな評価をするのかが問題だが，それは未だ検討中ではっきりしていない。大学法人評価委員会は，法律ができないと人選もできないから，未だメンバーも分からないし，どういう評価をするのか委員会が立ち上がってから検討されることになるようだ。大学評価・学位授与機構でも検討をしているが，未だ案がまとまっていない。実際問題として一時期に 80 いくつの国立大学を一斉に評価するという場合に，具体的にどういうことができるのだろうか。そういうことが未だ見えていない。大学の方々も不安に思われるのも当然のことである。おいおい固まっていくことになるわけだが，その過程で附帯決議の趣旨やいろいろな議論が活かされるように，関係の方々がしっかり睨んでいかなければいけないと思っている。

◎　簡単に言えば参議院で審議中だからこそ，論議が必要だという姿勢が論説にあった。国会の論戦の時に，法人化問題は「火事場泥棒的な」という表現があった。どのような意味か私も良く分から

なかったが，それは文部科学省が，大学側がもたもたしている間に，はっきりとした筋道をつけようとしているのではないかということで，火事場泥棒という言葉を使ったようである。大学側がもっとしっかりしないと，そういう意味では，支配し易いというか，今までも大学の問題点はたくさんあったから，それをすっきりさせる理由で，大学側のコントロールをしようというように取れる。そのような意見は実際にはあり得ないと思うけれど，心配だった。目的がはっきりした上越教育大学は，方向性が決まっているからこそ，逆に言えば大学の目的をはっきり６年計画の中期計画・目標，プランにも盛り込めるように作っておくべきではないか。

② 中期目標・中期計画に関する原案策定の基本的な考え方について

蓮見委員長から中期目標・中期計画に関する原案策定の基本的な考え方について説明願いたい旨の発言があり，小宮副学長から資料に基づき説明があった。

【主な説明事項】

ア 大学の進むべき方向と背景

イ 懸案事項への対応に当たっての考慮事項

ウ 中期計画期間中の大学運営の方針

エ 教育研究の方針

オ 学生支援の方針

カ 地域貢献，国際交流の方針

キ その他教育研究組織，人事，財務等

〈質疑応答〉

中期目標・中期計画の基本的な考え方について，各委員及び大学側から次の質疑応答があった。

◎ 中期目標をどう考えているのか。非常に総花的になっているんではないかという不安がある。

◎ 文部科学省から示された項目を見ると，総花的に成らざるを得ないと思うが，かなり大学の特色を打ち出していこうという意気込みが伝わってくる。

◎ 今，現職教員の派遣がどんどん減っていて修士課程の定員が満たされてない。その問題に対する危機感が全然出ていないんではないかという気がする。

修士課程を修了して現場に出ている優秀な人材を，再組織するようなプランをもっと出した方がいいと思う。私立大学ではやれないことを上越教育大学はできるのではないか。例えば，優秀な教師を見つけて，引っ張ってきて活性化させるとか，ハンティングをやるべきである。６年一貫コースはまだ実現していないが，エリート方式でもいいから上越教育大学は絶対教師になれるコースをやるといったことをスローガンとして掲げられことができれば，刺激的な改革になると思う。

● 修士課程を修了して学校現場に戻った後に，再度博士課程に修学して更に教育力を高めていく。学校現場へ戻って指導職になれば，指導職に合わせた研修も含めてできるような方策も採っていきたい。修学する現職教員を細く長く，附属学校と連携して実際に教師としてやってもらい教育力を高めた上で，本学の教員として契約するとか，そういったライフスタイルも併せて，ダイナミックな循環として考えている。

◎ 教員採用枠が減り，教員養成学部を卒業してもすぐには正規教員として就職できず，臨時採用教

員を２～３年やって，やっと本採用になる者が多い。その２～３年間を無駄にしない方法として，臨時採用教員と修士課程への修学をセットしたものを考えて，上越教育大学がやれば，これは皆の求めているものである。

● 是非，考えたいと思う。

〈午後の部開始〉

蓮見委員長から，午後の部を開始する旨の発言があり，中期目標・中期計画について大学から説明をお願いした上で，意見を伺いたい旨の発言があった。

③ 中期目標・中期計画案について

高橋事務局長から，上越教育大学の中期目標・中期計画案について資料に基づき説明があった。

【主な説明事項】

ア 大学の基本的な目標

イ 大学の教育研究等の質の向上に関する目標及び目標を達成するための措置

ウ 業務運営の改善及び効率化に関する目標及び目標を達成するための措置

エ 財務内容の改善に関する目標及び目標を達成するための措置

オ 社会への説明責任に関する目標及び目標を達成するための措置

カ その他業務運営に関する重要目標及び重要目標を達成するための措置

〈意見等〉

蓮見委員長から，上越教育大学の中期目標・中期計画案について各委員から意見等をお願いしたい旨の発言があり，各委員から次のとおり発言があった。

◎ 大学の進むべき方向と背景について，現在は経済至上主義となっており，あらゆることが慌ただしく動き過ぎているが，基本的な問題として日本人の人間としての劣化，文化の劣化という現象が起こっているのではないか。状況を把握するにはそれが基本ではないかと思う。所得倍増政策を昭和35年から打ち，高度経済成長になった時に，所得倍増政策を起案された諸先輩と話をする機会があった。その時に気づかなかったことが二つあり，一つは，科学技術の進歩がこんなに速いと思わなかったこと。もう一つは，公害対策についての配慮が非常に不十分だったこと。この２点を言っておられたが，大学問題を考えていく際に，科学技術の進歩やＩＴ化へのスピード，こういった想像できないような変化がどんどん押し寄せてきている。この変化に振り回されては仕方がないので，これをどう察知し，前を見るかというのは大変なことだが，世の中の変化のテンポが想像以上に速いということがある。もう一つは所得倍増政策の時は，公害対策に対する配慮がなかったと言うが，バブルの崩壊後，人間の劣化とかそういう面に非常な問題が生じているのではないかという，この二つの点はいろいろな面を考えるにおいて基本ではないかと思う。

第２に，上越教育大学を巡る状況のところで，国立大学に対する期待の多様化，地域貢献・国際貢献とあるが，国からの要請という問題をどのように心得るか。法人化後の国立大学のあるべき姿として，タックスペイヤーに対しても国家的な要請をどう捉えるかということが基礎にないと意味をなさないと思う。先程の説明に，昭和53年発足以来4,000人の修士を生み出し，2,600人が教員として現場にいるということであったが，上越教育大学は，初心において志したところに，もし是正

を要することがあるならば是正するべきであるが，この基本目標は堅持して然るべきであろうと思う。

「学長のリーダーシップと効果的な法人・大学運営，戦略的な資源配分。学長の健全なリーダーシップを支える意見開陳システム」とあるが，開陳される意見をこなすことも必要だが，内外からの大学への要請を捉えることが大事である。特に，行政・財政が国立大学に何を求めているのかということ。それから，教員の任命権者である県や市町村の教育委員会が何を求めているのかということ。これは本来把握するべきことであり，それに合わせて新しい意見開陳システムを考えるということでなければ，本末転倒だろうと思う。

教養教育のことがあるが，これは基本的に重要なことなのでよろしくお願いしたい。特に生涯学習社会における教育であり，アメリカのある医科大学が，修業年限はNot 4years. But40 years.ということを揚げているそうである。医師の修業年限は，まさに40年だと思う。本学の目指すところも，修業年限Not 4years.であり，4年にあらず中心は修士であり，修士を中心としながら，40年修業年限という位の全体の見方が必要であり，その基礎を培うのが教養教育であると思う。

アドミッション・ポリシーについては，県を超え，国全体，留学生までを含んだアドミッション・ポリシーという視野に拡大された方がよいのではないか。

また，研究資金など資金面が大事になってくると思う。科学研究費をどのように獲得するか，チャレンジする方法論を確立しないと，研究費が回ってこない。

知的財産であるが，もっと大学に，教材を作る能力があっていいと思う。教材を考える能力，そこまで考えなければ子供の教育を考えたことにならないと思う。特にＩＴ時代で，これだけ情報社会になっているが，教育的観点でこなすという点で非常に遅れている。教育現場からどうすれば教育向けのものができるのかということを主張しないと，ＩＴ社会に流されてしまう恐れを痛感する。教育界からものを言うならば，本学あたりから言ってもらいたいと思う。

本学設置後しばらくして国立妙高少年自然の家ができた。本学の赤倉野外活動施設も造ってもらった。野外活動の指導者をここで養成ができないか。野外指導を学問として本格的に追求しているところは少ないので，持てる財産は，是非活かしていただきたい。

情報公開に関連して，教育の現場についての番組を作る時のデータベースが，上越教育大学に行けば一番あるというようにしてもらいたい。これは私自身の経験であるが，教養番組・教育番組はデータが少なく作りにくい。マスコミに提供できるようなデータベースを作ることも一つの方法だと思うので，検討してほしい。

施設設備の整備及び安全管理に関連して，国立大学の施設の欠点は，夜間に暗かったり，トイレが汚かったりする。女性に対する安全面等の配慮が不十分であり，女性にとって非常に快適なキャンパスにしていただきたい。

◎　最初に，地域貢献・国際貢献の充実とあるが，全国貢献がないとの指摘があったが，全く同感であり，新教員養成大学が西日本に二つ，東日本に一つできたわけであるが，実際に大学院に入ってくる学生は，北陸辺りを境に北は圧倒的に本学であり，西は兵庫とか鳴門に行くわけであるが，各県に教員養成大学・学部があるが，統廃合があると言われており，本学は残る力があると思うので，総体的に弱体化すればそれがまた活きてくるという形になるので，頭に入れておいた方がいいと思う。

教員養成学部の現存する課題への対応として，新潟大学とのことを掲げてあるが，適切な指摘で

あり，今回は，10くらい大学再編の提案があるわけだが，全部法人化していくわけだから，中期目標が終わって一巡した頃には，又国立大学の統廃合とか，内容の再編成などの課題ということが起こらないわけではないので，こういったことを掲げてあるのは適切だと思う。

また，１年制修士課程，専門職大学院，６年制一貫大学などの検討について掲げているが，学部と通算して５年でも良いのではないかと思う。工学部などでは以前から学部３年からマスターに繋げて，５年間でマスターを出すというようなことを言っている。教員養成の場合も学部・修士の一貫教育なら，５年間あれば十分ではないか。現職教員を対象とした１年制修士課程とか，もちろん２年制もあってもいいと思うが，やはり，都道府県の方が財政事情その他で，研修定員の確保が難しく予算もできるだけ広く有効に使いたいということは良く分かるし，大学院も多様な展開を考えていくべきではないかと思う。少しでも学部以上の教育の受けた教員の数が多い方がいいと思うので，異論もあるかとは思うが，あえて主張する。

最近ファカルティ・ディベロップメント，教員相互の学内における研修評価などが盛んになっている。総合科目等で多数の教員が協力して，一つの科目を持つようなことなどが行われているので，もっと教員同士が開かれた状況になり，本当の自己研修をしていくというようなことが，中期計画に掲げることができると思うので，具体的な目標を定めて掲げたら良いと思う。

もう一つは，初等・中等教育に関する，東日本の代表的な教員養成大学であると同時に，その教員は社会教育にも対応できる教員であったり，また，社会教育の仕事をした人が学校に帰ってくると都合が良かったり，そういう意味で生涯学習とか生涯教育，社会教育面の講座が前から足りなかったと思うので，社会教育主事の育成にも少し目を開いた方がいいのではないか。

最後に，経営協議会などには外部の人も入るようだが，辛口の人を人選するような運営を学長が考えていただきたい。

◎　上越教育大学が持っている能力を最大限にこの目標・計画の中に，細かく学外の人に分かるように明記することが必要ではないか。自分だけが分かっているのではなくて，人に見せてどう理解してもらうか。そのことによって，評価が自然に高まるのではないか。

大学は，時代背景に合わせてどういう教員養成をしていくかが第一義の役目であるが，これから21世紀の大学の役割はもっと意味深いものがあると感じている。それは，国や地域が求める教員の養成や教員が抱えている課題に対して応える能力が，上越教育大学の中に秘められていると思っている。したがって，それを自分だけが分かっているのではなくて，よその人から理解してもらえるような表し方，見せ方というものを工夫してほしい。アドミッション・ポリシーとかダイナミックとか，いろいろと言葉が踊っているような気がするが，普通の人が見てもわかるような分かり易さを求めてほしいと感じる。

教育委員会からの派遣教員が，財政的な厳しさから減ってきていると言うが，学校現場では，非常に困ってノイローゼ気味になっている先生方が多い。都道府県の教育委員会へのアプローチだけではなくて，大学に相談窓口を設置しＰＲすることによって，現場のトラブルを相談に来る。それを逆に，大学が蓄積することで，教育現場で起きていることを察知し，分析して処方箋をデザインしていく。現在の教育現場の問題の蓄積により，更に解決する処方箋を作る能力を高めることができるという，両面にプラスなので，大学に相談窓口を設置してほしい。

最終的に中期目標・中期計画は評価の対象になるので，どんな場面でも上越教育大学が生き残れるような作戦を考えていく必要がある。そういう意味で，上越教育大学が持っているパワー・能力

を，全てこの中に出しきれればいいのではないかと思う。

社会問題化していることの解決策を大学と官との連携によって見つけ出したいということで，市が窓口になり，上越教育大学と県立看護大学との連携の中で，少子化等の社会問題化している点について，例えば子供の数を増すために何をどう解決したらいいかということは誰も触れていない。そういう社会問題について，学術的に堀下げて，私達行政と一緒に，チャレンジしてほしい。地域との連携，地域貢献とあるが，ここに掲げたものが全て評価の対象に繋がると考えるので，このことを細かく書いても差し支えない。

上越教育大学は現場の教員や教員の卵の人達と共に，地域と連携をしながら，地域貢献をしている姿をしっかり作っていただければ，必ず評価が高まり，それが生き残り作戦に成功することだと思う。見せ方，作り方に反映してもらえば幸いである。

◎　特徴的な言葉は，臨床研究，得意分野，トップランナー，特色とか出ているが，これはまさに何か他とは違うものを創り出そうとしている表現として，この中にあるのだと思うが，ここをうまくやればトップランナーになれる，あるいは，こういう分野をうまくやればトップランナーになれるといった点が見えてこないので気がかりである。

このような厳しい環境にあると，どうやって人を集めるか，教育した人をどうやって売り込むかということもある。それともう一つは売り込んだ人達がどうやって現場で活躍して評判を出してくれるか。それが結果的には，人を集める方に循環して，あの先生の出た所なら行こうかとか，先生自らが推薦してくれることになると思う。それは何か，他の学校とは違うというものがあるのだろうと思う。その何か違うものをどう取り出すかが，中期計画の最大の課題だろうと思うけれども，その辺が何かを，今までのご説明では，私には分からなかったので心配している。

もう一つ，売り込む先を新しく開拓できないのかということがある。新しい事業も大切なことだが，例えば企業などにどうやって売り込むかどうかといったことを考えるのも，一つの大学の在り方ではないかなと感じる。よそと何かが違うというものをどう創り出すかということが，厳しい環境の中で生き残る上で大切なプロセスで，それをどう描くかが課題になると思う。

この中期計画が終わる2010年には，日本はかなりＩＴ化社会に変わり，ＩＴ技術が社会を変えていくと同時に，教育を変えていくのではないかと思う。それは今まで限界があったものを打ち破ることができ，ＩＴを駆使してできなかったことができるようになると思う。そういうＩＴ技術を真っ先に取り入れて教育に活かすということが，これから生き残る・勝つために大事な要素であると思う。

中期計画についてはこの二つであるけれども，もう一つ企業に携わる人間として教育について考えるのは，どういう子供を育てるのかは基本であるが，どうも日本人は国際的な場に立つと非常に欠陥が目立つ。これからの社会は，国際的な環境の中で仕事をすることが日本でも求められてくるし，海外でも当たり前な時代になっていく。その時に日本人の欠陥は，ディスカッションができないことである。言葉の問題だけではない。日本の教育も小学校くらいから議論をさせる。そして自分たちの思想を出し合って，それは感情的ではなくて，冷静にいい議論をしあってお互いの立場を確かめながら，できれば一つの結論に結びつくという教育が普段から成されていれば，企業に取っては大変に良い人材といえる。語学だけの問題ではなくて，それ以上に自分の主張を正しく伝える。相手の意見を聞きながら，自分の主張を貫くという訓練をきちんとしないといけないのではないかと最近痛切に感じている。

◎　統合に当たり大事なことは，現在教員について大学院修士課程レベルの研修が求められているけれど，それが，地理的制約を超えてどの程度まで充実した形で実現できるかである。また，再三議論が出ているように現在学校が抱える様々な課題がある。不登校やいじめ等の問題など学校現場が抱える課題に対して様々な形で教員養成大学が果たしてきた役割を，地理的条件の中でどれだけ充実した形で継続し，発展していくことができるのかという問題もある。そういう課題に，どう解決策を見いだせるかが大事なことだと考えている。

もう一つ，統合にあたって考えておかなければならないのは，単科大学が持つメリットというものもあると思う。単科であるがゆえの制約もあるとは思うが，教員養成学部として，総合大学の中に入ったときに，例えば法人化によって全学的な視野に立って，資源配分を行うというような場合，教員養成学部がどれだけのウエートを持って，大学の中で自己存在を主張でき，評価されるのかという問題もある。そういった観点から，単科大学が持つ意味も，より充実した教員養成を資金面・資源面から考えていく場合にはあり得るとも思うわけで，教員養成大学･学部の統合に当たっては，かなり慎重な検討が必要ではないかと思う。

国立大学法人化が持つ問題点であるが，法人化に当たっては国費で大学が支えられていることから，入口と出口については国が一定の管理をし，その間の道行きについてはそれぞれの法人の裁量性を高めて，より自主的・自立的な運営ができるようにするということに，眼目がある。入口については中期目標・中期計画により国が関与するといった新たな仕組みが導入される。出口については，国立大学法人評価委員会の評価，あるいは組織の在り方の見直しもあるわけである。これも従来なかった仕組みとして，今回の法人化に伴って導入されるわけである。その意味においては，国の関与次第で非常に難しい問題が出てくることは考えられるが，国の関与が適切なものとなるように，いわば国と大学とがお互いに協力・調整しあいながら，より良い教育研究を進める上でのいわば担保処置を国としても講ずるということになっている。大学としては，そのような国の対応というものに十分注意をしながら，自主性・自律性を持って大学運営を行い，引き続き教育研究の充実を図られるように，お互いに連携・協力しあってやっていくことが大事なように思う。

大学の中期目標・計画の期間は６年になっている。したがって，６年後の社会の在り方，そこに占める大学の役割，６年後の姿を想定して，それに年次計画で近づいていくことが，本来の中期目標・計画のあるべき形だと思う。言うのは易しいが，現実に構想するのは難しいという問題があるが，少なくとも考え方としてはこのような考え方に立たないといけないのではないか。その意味では，現在と断絶するというかジャンプするようなものが中期目標・中期計画の中に必要ではないかと思っている。上越教育大学も苦労して中期目標・計画案を作ったと思うが，率直に言えば現状から次第次第に，６年後へ向かっていくという色彩が見られるような感じもする。この点は難しいけれど，出発点としては６年後どうなのかということから構想するということを考えていただければと思っている。

それから具体の中期目標・中期計画の中身であるが，今後の教員養成ということを考えた場合，教員養成だけではなくて大学教育で，どういう人材を育成するのかということの問題について，かつて大学審議会の答申では，課題探求能力を多く持った人材を養成するということを言っている。ある事態に直面した時に，それを総合的に判断しどのような行動，振る舞いをするか自ら考え決定し，そして実際に動ける人間を育てていくといったことである。

今の学生達，子供たちを見た場合に一番感じることは，ある物事を多面的に，総合的に見ていく

力が非常に弱いと思う。これからの教師を養成する場合，あらゆる角度から物事を総合的に見られる力が大事ではないか。そういう教育をどのようにして実現していくのかということの教育の在り方，もちろん教育内容・教育方法も含めて，その部分をもう少し強く打ち出せないものかと思っている。

それと６年一貫教育ということがかなり強く言われているが，少なくとも現在の学校教育法体系の中では，教員養成は４年で行うとなっている。そして就職して，実際に様々な課題に直面する。その課題を持って，再び修士課程においてより実践的な解決方法を考え，あるいは教育を受けることによって，自分を高めていくことが長い教員人生を考える上で良いという考え方に立って構想がなされているわけであり，そういう考えに立つからこそ，大学院修士課程における研修が可能なように大学院修学休業制度が創設された。だとすると，６年一貫教育を主張するのであれば，それが持つメリット，どういう点でそれが必然なのか，望ましいのかということについて，もう少し明確な説明がいるのではないか。

他方において，博士課程については是非積極的にご検討いただきたいと思っているのは，現在の教員養成大学・学部の教官を見た時に，ほとんどの方々が教員養成とは直接関わらない形で，大学教育を受けた方が教員養成学部の教官となっている。したがって，教員養成学部が果たすべき役割，例えば，学校現場と大学とが一体となって，実践的な教育をやっていくとか，更に，新構想教育大学が理想とした事柄に積極的に関わる，そういう使命感といったようなことについて，必ずしも十分な認識を持たないで，教官になる方が少なくはないだろうと思っている。そのような大学教官の養成のされ方をみた時に，やはり目的意識を持った博士課程といった構想も大事なように思われる。

現職教員の研修の場としての修士課程であるが，専門職大学院については，高度専門職業人の育成ということもあり，研究指導に関わる部分については，カリキュラムからすぽっと抜けるような形になっている。現職教員の研修といった点では，大学院で論文を作成することが真に必要なのかということについても，そろそろ議論があってもいいのではないかと思っている。

いずれにしても，今後の教員養成に関して，おそらく国際化が進むはずである。我が国の国民としての日本の伝統的文化・歴史について十分理解し，そのことに誇りを持っていけるような教員を育てなければならないし，またそういう教員であって始めて，子供たちに対する規律の指導等も十分に行えると思う。したがって教員養成大学・学部については，我が国の歴史や文化，風土といったものに誇りを持った人材を育成していって欲しいと思う。

◎　まず，衆議院文教科学委員会の附帯決議に，「国立大学は地域の教育，文化，産業等の基盤を支えている役割にも十分配慮すること。」とあるが，まさしく地域との関わりあいというのは，法人化していく上で非常に大事な部分だろうと思うし，大学が地域に貢献するというならば，逆に地域が大学に対して何ができるのかということ，この両方が必要であると思う。そのことが上越教育大学らしさや特色になるとすれば存続意義が増し，地域との密接な関わり合いが更に深くなる。こういうことをお互いにやっていくことが必要なんだろうということを感じた。

前々市長が言っていたが，直江津と高田が合併し上越市となった結果どのような効果があったのかを検証する会議で，「最大の効果は上越教育大学ができたことです。」とおっしゃった。それだけ地域と密着してでき上がった大学なんだということを記憶した。まさにこの大変革の時に，思い出す必要があると思った。

最後に，市町村合併があり，上越市も議会を含めて大変であるが，平成17年までに形を造って10年間位動くだろう。その後どうなるかというと，県のレベルでどういう枠組みを作っていくかという修正問題が必ず出てくるわけで，これは超長期的というふうになると思うが，この上越という地域はこれを見据えていかなければいけないと思う。そのことも踏まえ，中期計画の中にも，周辺の大学・教育学部との連携ということも入っていると思うが，もちろん今の時期は連携していって，その中で上越教育大学ができることが最大の特色になっていくわけであるから，最終的には連携から吸収へという考えの方が良い。上越教育大学を中心に，教育系の学部が一緒になっていけるくらいの目標を持っていた方が，上越教育大学がこれから発展していく上では大事なことと思っている。

◎　資料を拝見し，教育大学が目指すべき柱として，一つは教員養成，それから教育研究開発，この両方を一対としていくのが，上越教育大学の使命ではないかと感じている。そういった点で見ると，上越教育大学の懸案事項は，どちらかというと大学運営に偏っているような感じがする。全国的なレベルで，上越教育大学は教員になるための魅力ある勉強ができそうだということがわかる，そういったものに応えるための懸案事項が，もっとあってもいいと感じた。

二つ目は，中期目標・中期計画（案）の中の，学部教育の目標・計画の所で，どういう子供をこれからの教育で育てていくか，そのために教員は何を求められるのかという観点で考えてみると，折角目標の中に，まさに今の教員，子供の状況等，教員の望まれる資質が示されていながら，学部教育の記述にそれが伺えない，弱いんではないか。つまり，「教育者としての使命感と教育愛に支えられた豊かな教養を培う教育と捉え，専門教育と対置せず，それと有機的連携を図ることを基本とする。」となっているが，どういう資質を持った教員養成をしていくかという点が弱い。使命感・教育愛に満ちた豊かな教員が必要であるが，今の学校の状況を考えると，なかなか学部を出て現場の即戦力になるような教員を育てることは難しいようだ。学部４年間できちんとした基礎を身に付け，しかも，現代の教育課題に対する意見を持っている人材が必要であろうと思う。そこのところが，少し物足りないという感じがしている。

三つ目に，教育研究方針の（２）教員養成，（３）現職教員研修は分かるが，（１）の共通というのがわかりにくい。ここのところに，上越教育大学が目指そうとする教育研究・研究体制・組織とかが入ってくるのだろうと思うが，もう少し分かり易い表現はないかと感じる。

四つ目であるが，卒業生・修了生との連携については，先生方と修士を修了した現場教員との間の繋がりがあると思うが，もっと組織的に大学全体として現場教育の課題を吸い上げていくような取組みをすれば，その中から大学の研究の内容・方向が出てくるのではないか。それが現場との連携の大事なことではないか。今後是非，組織的にやっていく方法を考えて欲しいと思う。

それからもう一つ，このことと関連して，附属学校以外の公立学校との共同研究をすることも，考えてみたらどうか。実際の学校現場は，課題を解決するための方向とか，対策を見つけたいというふうに思っているが，自分たちの力だけでは限界がある。単なる方向・方策だけではなく，基本的な理念に関わるものを求めている。そういうところを与えるのが，最先端の大学ではないかなという気がしている。

最後に，上越教育大学はこういう研究教育をしているというものを，積極的に発声して，大学の魅力をもっと発信していくようなものも必要ではないかなと思う。多くの教育系大学で学びたいという学生のためにも，是非，上越教育大学に行きたいというふうに思わせるような発信をしていた

だければと思う。

◎　教員の意識転換を，はっきり打ち出した方がいいのではないかと思う。教員一人一人が大学改革といって毎年やってきていて，やや疲れている。それを今度は，もう少し集約して，これだけをやるというものが６年間だというふうに，絞り込みした方がいいのではないか。６年間は短いので，中期目標に，教職員にきちんと目的を持ってという意味で，うたったほうがいいと思う。

それから，一般の開放性の中の教員養成というのもあるわけで，その関係をどう捉えるかといった点が，やはりKing of Kings.ではないけれど，教員の中の教員としての，自信とプライドが持てる，みんなを引っ張っていくくらいの，主幹学校ではないけれど，そういう意味の教員のエリートというか，これからは意識的に中核を持たないといけないと思う。横並びの平等ではない，みんなを踏まえて引っ張っていけるような，リーダーシップを持った教員養成という意味であれば，誤解されないような教員養成になれるような気がする。

私立大学の良いところは，例えば，玉川大学が文学部から切り離して教育学部をはっきり出している。玉川大学は今や教員養成学部を包み込む方向であり，あえて強気なのか開き直りなのか分からないが，そこがおもしろい。全面広告を打って玉川大学はこうやっているぞという，やり方を学ぶべきところがあるのではないか。

創造性のない教師はだめだと思う。工夫する，考えて新しいものを創るという創造性はどこで養われるのか。その人が持っているＤＮＡもあるのかもしれないが，上越教育大学は創造性を開発できるようなメリットを持った大学にして欲しいと思っている。

◎　二つだけ申し上げたいと思う。一つは，中期目標・中期計画に，原案策定の基本的な考え方を書き込んで，背景がもっと理解できるようにした方が良いのでないかと思われるということである。

もう一つは，本学の特色をもう少しはっきりだすことはできないかということである。教育学部が40いくつあり，そのすべてに学部とマスターコースがあるわけだが，学部とマスターの学生の割合を考えると，三つの新教育大学は特に大学院に大きな比重がある。それからドクターコースでは，東京学芸大学を基幹とするものと新教育大学で組織するものとがある。この二つのことを結びつけて考えると，三つの新教育大学は大学院に重点があり，ドクターコースをも備えているということで，他の教育学部とは異なった位置にあるということになる。また，一般に大学は研究中心の大学，教育中心の大学，教養教育中心の大学などといくつかに種類分けされる。教育学部は，このうちで教育中心の大学とされることが多いが，やはり大学として研究も重要である。教育に関しても大学において最先端の研究が行われなければならないところであるが，それをどこが担うのかと言えば，その位置づけからして三つの新教育大学が果たす役割が大きいはずである。これらの大学は研究にも相当のウエイトを置くべきであり，教育にかかわる最先端の研究はそこでしかできないのではないか。現場とのダイナミックな交流に基づいた研究に比重がある大学という特色をもう少しはっきり出せたらよいと思う。

６　閉　会

①　蓮見委員長から，第７回上越教育大学運営諮問会議の閉会が告げられ，併せて，本日の議事概要のまとめ方・公表については前回と同様としたい旨及び次回の開催日程について総務部長から説明がある旨の発言があった。

② その他

ア 総務部長から，次回の会議については１１月頃開催を予定していること，及び後日各委員の御都合を伺い，日程調整の上，決定したい旨の説明があった。

イ 渡邊学長から，本日の多くの御意見・御助言等に対する謝辞が述べられ，閉会となった。

② 第８回議事概要

○日　　時　　平成15年12月16日（火） 11:00～14:40

○場　　所　　ホテル　センチュリーイカヤ（上越市中央１－２－７）

○出　席　者　　蓮見　音彦　委員長　（和洋女子大学特任教授）
加藤　　章　副委員長（盛岡大学長）
井内慶次郎　委員　　（東京国立博物館運営協力会会長）
黒羽　亮一　委員　　（常磐大学教授）
木浦　正幸　委員　　（上越市長）
佐々木正峰　委員　　（独立行政法人国立科学博物館長）
髙橋　信雄　委員　　（髙助合名会社社長）
林　　尚彦　委員　　（新潟県中学校長会会長）

○欠　席　者　　小原　芳明　委員　　（学校法人玉川学園理事長・玉川大学長）
佐久間舜二　委員　　（株式会社ＷＯＷＯＷ代表取締役会長）
平山　征夫　委員　　（新潟県知事）

○本学出席者　　渡邉学長，小宮副学長，髙田副学長，若井運営評議会委員，大悟法運営評議会委員，星名運営評議会委員，齋藤運営評議会委員，川崎運営評議会委員，戸北運営評議会委員，田中運営評議会委員，中川運営評議会委員，梶原事務局長，堀江総務部長，髙田教務部長，ほか事務局関係職員

○会議次第

１　開　会

蓮見委員長から，第８回上越教育大学運営諮問会議の開会が告げられた。

２　学長挨拶

林委員及び梶原事務局長の紹介があった後，渡邊学長から，本会議出席等への謝辞及び国立大学法人化に向けた本学の対応状況並びに引き続き指導助言等をお願いしたい旨の挨拶があった。

３　配付資料確認・日程説明

総務部長から，本会議の配付資料の確認及び日程説明があった。

４　第７回議事概要確認

蓮見委員長から，前回（第７回）議事概要については，資料１のとおり前回出席の委員から既に確認をいただいているが，改めて確認願いたい旨の説明があった。また，本議事概要を大学のホームページにより公表する旨の説明があった。

５　議　事

諮問事項「国立大学法人上越教育大学の在り方について」

蓮見委員長から，諮問事項「国立大学法人上越教育大学の在り方について」の説明を願いたい旨の発言があった。

① 諮問の趣旨

渡邊学長から「諮問の主旨」について，資料に基づき説明があった。

② 上越教育大学中期目標・中期計画（素案）の概要等の説明

小宮副学長から，上越教育大学中期目標・中期計画（素案）の概要，法人化後の運営組織案等について，資料に基づき説明があった。

【主な説明事項】

ア 上越教育大学中期目標・中期計画（素案）の概要等

イ 法人化後の運営組織案（学長選考会議，役員会，経営協議会，教育研究評議会，教授会の組織及び審議事項等）

③ 法人化に向けての新たな取組についての説明

渡邉学長から，法人化に向けての新たな取組について，資料に基づき説明があった。

【主な説明事項】

ア 大学院長期履修学生制度を利用した初等教育教員免許取得プログラムの導入

イ 小学校英語教育部門の設置

ウ 理科野外観察指導者養成部門の創設

エ 養護教諭教育専修（専攻）等の設置

オ 特務担当職員の配置

カ １年制コース，遠隔教育授業，６年一貫教育及び専門職大学院の検討

④ 意見及び質疑応答

大学から説明のあった中期目標・中期計画（素案）の概要，法人化後の運営組織案及び法人化に向けての新たな取組等について，各委員及び大学側から次の意見及び質疑応答があった。（以下，◎は各委員からの発言を示し，●は大学からの発言を示す。）

◎ 検討事項に加えて欲しいこととして，今までに本学を卒業して，学校現場で働いている方々を中心に，「教育とは何か」というようなことを，上越教育大学から，教育界へ提言するような大学になって欲しい。教育現場で頑張っている卒業生・修了生を年に１回くらい上越に呼び，パネルディスカッションや全国規模の教育研究会を，同窓会などのネットワークを通じて計画し，教育の世界に提言していくような大学になれば，更に上越教育大学の存在意義が拡大されるのではないかと思う。是非，検討していただければありがたい。 【木浦委員】

● 上越市でパネルディスカッションやシンポジウムを開催して，教育に関する提言ができることなどが望まれるが，現在，沖縄から北海道まで，本学の修士課程修了者が約4,000人近くになってきた。その中には2,000人以上の現職の先生がおり，北海道や東北などに講演に行くと，その中に必ず10人から15人くらいのメンバーがいる。同窓会が本学の大きなバックアップになることが期待され，同窓会をきちんとした規模で組織し，運営してもらうことを検討している。そのネットワークを通じながら検討していきたい。

◎　「特務担当職員の配置」に関して，配置は大変結構であるが，「教員調整定員の活用」とか「職員」とも書いてあるが，これは教員としての定員であるが職員で埋めるという意味であるのか，教員の身分の人がこういうことをやるのか。

●　平成12年から，大学として預かっていた調整定員があり，これは，本学がパワーアップするために新たなところに用いるということで，前学長の時から運用していた定員であり，これを用いる。教員か，職員かということであるが，今の段階では教員の定員を用いた業務担当の職員ということである。この辺は微妙なところであるが，そういう意味で学内外から学長が選考して，学長の任期の中でやっていただく。法人化後は，性格が少し変わってくると思われる。

◎　学内外からというところが，いろいろに読めるということであろう。

●　業務としての学生支援担当は，他の国立大学で，本年４月から予備校の先生を助教授で採用して，担当させている例がある。本学は，助教授で採るところまでは検討が及ばなかったが，業務担当ということで，教育・研究とは切り離した形で，学長直属に置くことにしている。

◎　法人化後の運営組織案について，各種の委員会は，学長を中心とした教員組織で行っていくわけだが，法人化後の各種委員会の中に事務職員がどのような形で入るのか。教員は，教育研究活動を行っているが，組織化の中で事務方ともっと積極的に連携しないと，意見だけが先行して具体化の手続きが遅れる。私立大学に出てみてよく分かったが，事務方と一体でないと進まないということが必ず出てくる。法人化後の運営組織を考える場合に，特にここが問題ではないかと心配している。例えば教育研究評議会の組織のところに，「教育研究評議会が定めるところにより，学長が指名した事務局職員若干人」とあるだけである。これでは，事務職員の意識向上のためにも，少し弱いのではないか。もっと，教員と事務職員が一緒になって組織が機能するような大学にならないと，無駄が多く，熱意はあっても，具体化に繋がらない。その辺をもっとはっきり打ち出してもいいと思う。

●　御指摘は，とても重要なことで，お示しした運営組織図は，既存の各種委員会を教育研究評議会の下に置く方向で検討しているが，運用面でも，そのことを検討していかないといけない。これは，いくつかの部門で４月から実行していきたいと思っているが，例えば今回，特務担当の３人には，事務方と学長団，それから教官とのインターフェースとしての役割を十分に果たすことが期待される。今後，事務局の職員の研修を含め，法人化に向けてどう変わっていくか，教官と同じようにやっていかないといけない。今のところ，具体案の提示までには至ってないが，非常に重要なことと認識している。

●　やはり，学生支援や公開講座・出前講座も含めての地域連携などを考えた時に，教員と事務職員とは一体となった組織として機能を強化していかないと，うまくいかないと思うので，御指摘のあったことを視野に入れながら，検討したい。

◎　大学院長期履修学生制度は，非常に意味のあるプランだと思うが，これは教員免許を持っていな

い院生を受け入れて，１種免許状を取得する形であるが，専修免許状についてはどのようにお考えか。

● 教員免許状を持っていない者が入学した場合も，この制度を利用して学部在籍時に取っていなかった免許状を取得させると同時に，修士課程を履修することによって修了時には専修免許状も持って，２種免許状から専修免許状まで持った教員として学校現場へ送り出したいというプログラムである。

◎ つまり，元々中学校教諭免許状を持っている者が入学し，それが専修免許状になるだけではなくて，小学校教諭免許状も取って，それで専修免許状と１種免許状も両方持って修了できるという趣旨であるか。

● 従来の修士課程は，学部への入学時から教職への志があって学部卒業時に１種免許状を取得した者を受け入れてきたが，それは当然維持するわけであるが，学生時代は教員を志していなかったが，社会人になってから，教師になりたいという意欲を持つに至った者を受け入れて，単に免許を与えるだけでなくて，修士課程を修めて，専修免許状も持った質の高い教員を教育現場へ提供するという趣旨のプログラムである。

◎ それは，一種の進路変更であり，それに対する考え方が甘いのではないか。例えば法学部を卒業して社会に出てから，やはり教師になりたいというならば，それを生かした特別な教員として，つまり法学など専門の学を専攻した者を教員にする場合は，身に付けたメリットを生かした形でユニークな教員，教員養成課程出身者とは違った特色のある教員を養成するという積極的な目的であれば，意味がある。そうでないと，今の厳しい教員採用状況の中で，教員志望者を増やしていくという矛盾になる。ただ教師の幅を広げるだけでは，狭い採用間口に，また，志願者を増やすという印象を社会に与えてしまうのではないか。

● このシステムは，御指摘と同様の趣旨である。通常は，高校を卒業して教職への進路決定をして大学に入学してくるが，一方で，大学へ入学した時には，教師を目指していなかったが，その後，教育に興味を持つ者はいる。その人達は，他の道でいろいろ力を付け，身に付けている資質を更にこのシステムに参加することによって，教育の現場で生かすことができるようなポテンシャルを付加して，最終的に本学学部からのストレートマスターの修了者にも劣らない知識や資質を持った教師として提供できるプログラムにしたいと思っている。趣旨は，社会経験などで身に付けた経験や技術を，教員の世界で生かしたいという動機付けを持った者に，このプログラムを提供することによって，教師になる道を提供したいと思っている。

◎ 長期履修学生制度を利用して修業年限を３年とするのは，今の趣旨を生かして２年では足りないので，３年にしたのか。

● これは修士課程の学生として受け入れるので，本来，入学してカリキュラムをこなし，修士論文を創るまで２年かかる。教員免許状を所持していない者に，本来なら学部時代に取得する単位を取

得して，免許の要件を満足させようとすると，２年の間にそれも同時にというのは，かなり負荷がかかり，それを強要すれば詰め込み式の，形だけの教育になってしまうということで，教員養成学部からのストレートマスターと同等の質を持った教員にするためには，大学院の履修期限を１年延長して，３年かけて教員免許状取得のための必要要件を満足させながら，なおかつ修士課程の学生として研鑽も積んでいただく。そのためには，３年間が必要であるという趣旨を，兵庫教育大学が実際に立案して，本学も後追いで実施したいということである。

◎　兵庫教育大学とまったく同じでは特色にならない，違うところも出すべきである。

●　兵庫教育大学は小学校教員免許状だけでスタートするが，鳴門教育大学は免許状の種類を増やす形で計画を進めている。上越教育大学は，更にそれ以上の工夫を凝らすことを検討しているところであり，まず明確に違うところは，兵庫教育大学は小学校教員免許状だけを目指しているが，上越教育大学の新しいシステムでは，それ以外の免許状も本人の持っているポテンシャルに更に付け加える形で，学生の選択の幅も増やせる仕組を提案することとしている。

◎　運営組織の中の教授会についての質問である。非公務員型であるから，教育公務員特例法の適用外となり，教員の選考等に関する権限は無くなるわけであるが，ここに示された運営組織案には教授会の審議事項として，教員の選考に関する事項とあり，従来の教授会と同じような人事システムを採るようになっている。教員人事に関しては，従来と同様に行っていく考えか。　国立大学法人法による意思決定システムは，少数の執行部が大学の組織運営について責任を負う形を採っているわけで，その一つの大きな眼目としては多くの教官については，大学運営からある程度離れて，教育研究に十分に取り組んでいただきたいというところにもあるわけだが，それを考えた時に，教授会の審議事項については従来以上のきちんとした形で精選する必要があるであろうと思っているが，教授会の在り方をどのように考えているか伺いたい。

また，事務局の扱いについて，今回の法人化を契機に，総合大学などにおいては理事の数が多いこともあり，理事の担当業務ごとに，事務局の各部を付ける形で事務局体制を作る所がかなり多くある。その考え方は，やはり少数の執行部ということもあり，理事のリーダシップが非常に大きな意味を持つことになる。従って，その理事は事務局にきちんと支えられて，仕事を果たしていくことが妥当であろうという考え方に立つものであると思っているが，同時にそれを通して，事務局自体の企画立案機能を高めていくこと，教官と事務官とが一体となって，適切な大学運営を果たしていくところにあると思われる。本学の場合は単科大学であり，事務局組織を分割して考えるのは難しい，理事の下に付けるのは難しいという事情もあると思われるが，理事のリーダーシップを支える事務体制として，どのようなことを今後行うのか，また，事務局の企画能力を高めて，教官と一体となって機能する仕組みをどのように作っていくかということについては，かなり慎重に検討していく必要があるのではないか。

もう一点は，法人化に向けての新たな取組の中で，「小学校における英語の教科化に関する英語教育部門の設置」とあるが，この対象として想定する学生は，どのような者を念頭に置いているのか。また，「養護教諭教育専修の設置等」とあるが，この養護教諭及び栄養教諭の需要見込みはどの程度あるか，伺いたい。

● 教授会については，現在のところ教育研究評議会と教授会の位置付けをどうするかが一つの大きな課題であり，検討していくこととしている。御意見も踏まえて検討を進めたい。

● 教授会の位置付けについて，教育研究評議会との関係から，教授会に残す部分の最大のポイントは，おそらく身分に関する問題だろうと思う。その部分は，現段階では教授会に残さざるを得ないであろうということが，検討の基本になっている。

養護教諭に関しては現在，新潟県養護教諭の会が北陸地域のヘッドになっているが，かなりの需要があり，課題としては，養護教諭は１校に１人しか配置されていないことであるが，最近は１校に２人配置のところも増えてきており，私どもの見通しとしては，年間５人くらいは確実に超えるニーズがあると考えている。特に，北陸地域だけでも，それだけのニーズが見込まれ，加えて，是非上越教育大学において，専修免許状が取得できるようにして欲しいという，会からの要望書による要請を受けているところである。

● 小学校英語教育の対象者は，地域の公立小学校教員と本学学部の言語系コース英語分野から大学院に進学して小学校の教員を目指す者，それと，海外経験の豊かな一般人で，基本的な英語能力は持っているが，教えた経験がない人などに，教室内で使う英語を学んでもらったり，子供の発達段階などについての理論的なことを教えたり，ゲーム利用のテクニックなどについて講習を行う。小学校の先生が修士課程の英語分野に来る場合，現在は修士論文を全て英語で書くことになっている。現在も小学校の現職の先生が英語のコースにも在籍しており，実践経験も知識も豊かであるが，50～100ページもの論文を英語で書き上げることが，非常にプレッシャーになる。その場合は，日本語で修士論文を書いてもいいのではないかと考えている。

⑤ 午後の部開始

蓮見委員長から，午後の部を再開する旨の発言があり，国立大学法人上越教育大学の在り方について，新たな取組や法人化後の上越教育大学に期待することなどを含めて，幅広く御意見を伺いたい旨の発言があった。

◎ 法人化に向けての新たな取組の検討案は，現に取り組んでいること，あるいはこれから取り組もうとしていること，それぞれ考え抜かれた案であって，是非実現していただきたい。ただ，新しいことをやるのにはコストがかかり，リスクがあり，トラブルがある。特に，それぞれのことについてのコストをどうするか，また諸刃の剣のようなことがあるから，それぞれがリスクを持っている。トラブルも出ると思う。でもそこは，柔軟にこの方向でお願いしたい。

特務担当職員のことであるが，どのように研究協力の活動を支援し，バックアップするかということが，サービス行政としてあるわけだが，このことについて２点申し上げる。一つは，私の関係している大学は，全卒業生のほとんどが同窓会に入っており，全卒業生に“バックアップ”という雑誌を，年に２回ほど送っている。その雑誌の数ページに，現教官の研究論文リストが載せてある。これは先生方にとっても大変なことだと思うが，年に２～３回，どういう研究をやっていて，どういう論文を書いているかというリストが全部でる。これを全卒業生が見ることのできる状態にしてバックアップしている。本学同窓生へのバックアップをどのように行うかを，是非よく考えていただきたい。

それと，大学においてもっとも支援を行わなければならないのは，教員の研究に対する支援だと思う。これは，先程の説明では研究費の確保ということで出ているが，研究支援をする組織を成功させたところは，教官の学位取得数や科学研究費の獲得額が変わる。やはり支援活動のうちで，一番の基本は研究と教育であり，特に研究であるという点は，考えていただきたい。

大学院学生の研究活動を支える費用面を考えたとき，これまでは，講座研究費と学生研究費の両方があり，研究経費と教育経費は分けてあったわけであるが，大学院学生に対する指導の際には，与えたテーマについて学生が研究の際に必要なコストを準備できるかということが，最大の問題ではないかということを，ある工学部に対して申し上げた。従来長い間，研究経費と学生経費の２種類でやってきたわけだが，これから新しい法人になった時に，特に院生に対してのコストをどうするかということは，是非考えていただきたいと思う。

教授会や事務局体制については，大変難しいと思うが，問題から逃げないで，どうすることが一番本学として適切か，ある意味では，本学独特のものでもいいと思う。国立大学の制度が教育公務員特例法の関係も含めて，国家公務員で無くなるという，従前想定していなかったことが起こっており，その制度改正を受け入れるのは容易ではないと思う。長い間，我が国の大学が持っていた慣習的なものがあり，教授会がそれに当たる。新しい制度ができたので，新しいブレンドを慣習法の方からも考えて，ブリッジを架けなければいけないと思うが，その際に，従来慣行的にやったことについて，尊重するべき，自信をもって継承するべき問題は何かということもはっきりした方がよい。そして新しい制度のブレンドを，新しく考えるブリッジを架けるということではないかと思う。

全国的に見て，上越教育大学に来ている学生の出身地，その性格，そういうものが非常に素朴で，非常に実直なものがあり，教員として最も大事な心を持った学生が多いのではないかという気がしている。これから上越教育大学が第２のスタートを切るに当たって，上越教育大学が持っている学生の特質なり，地域の温かい支えであるとか，そういった本学にあるプラス面を是非，積極的に生かして，ゴーイングマイウェイなところもあっていいとは思うが，上越教育大学らしい大学になって欲しいと思う。

◎　まず，「法人化に向けての新たな取組」であるが，私も，このようなことは全部やった方がよい考えていて，学部の段階で教員を志さなかった人に，３年間教育してということはよいと思う。

特務担当職員のことも，従来の教育職員でも事務職員でもない，隙間部分と言うか，従来も国際交流や留学生の世話など，入試の関係などではそのような業務があったが，これから，新しい大学では，そのようなところが大事になっていくと思われるので，よいのではないかと思う。

法人化後の運営組織図のところで，約 90 の大学が法人化するわけだから，ひな形のようなものがあって，法律に書いてあることを文章にし，図にするとこのようになると思うが，役員会の重要な機能として「学部・課程，その他重要な組織設置・廃止に関する事項」とあり，特に重要な組織の設置・廃止等は人事が関係してくるわけだが，ここに人事が入ると読むのかどうか。やはり人事とか教職員の勤務条件等に関する事項に関しては，これは法律の問題であるが，役員会の中に勤務条件・人事その他，人事のことはきちんと分かるように項目を置いた方が良かったと思う。

教授会は，国立大学法人法では触れておらず，学校教育法に規定しているものだけである。教員の選考は，従来は教育公務員特例法に基づいて，国立大学においては，大学管理機関として教授会が行っていたわけである。やはり教授会の一番の役割は，「学生の入学・卒業，その他在籍に関する事項等」であるから，教員の選考は，教育に関することの次にするべきであり，審議事項の最初

に教員の採用に関して掲げてあるのは，おかしいと思う。それから教員の選考ではなくて，教員の勤務条件に関する人事事項とした方がよいと思う。

上越教育大学だけでなくて，全国の大学の問題なのかもしれないが，実線が学長から教授会へ下りているが，役員会から下りていない。役員会で決まったことを学長が実施するから，学長から引いておけばよいのかもしれないが，その辺が，よく分からない。また，教育研究評議会と教授会の間は何故点線なのかもよく分からない。上越教育大学に対してだけではなくて，法人化の一連の作業に対する意見として申し上げる。

従来の慣行として良いものは尊重する方がよいと思うが，ここに記されているように，小学校の英語の先生が必要であるとか，いろいろ大学も学部・課程だけでなくて，組織の設置・廃止は，かなり柔軟に，時代に応じてやっていかなければいけない。それに当然人事が当てはまるわけであるから，時代の進展に柔軟に対応しうるような，人事システムを考えていただきたい思う。

◎　地域連携とか市民のレベルからのお話をする。先ず，上越教育大学の役割は，どのような教員が現場で望まれているのかという教員のあるべき姿を把握して，現場が欲している教員を育てることが，一番大切である。そのニーズを集める機能として，同窓会や各県市町村の教育委員会などを通じて，しっかりと現場の声を吸い上げるための仕組造りを行うことが大事なポイントではないか。その上で教員の再生工場と新たに教員を目指す者の場の２本立てが，上越教育大学の使命ではないかと感じる。それを鮮明に打ち出し，全国に本学の考え方が通じるように，ＰＲしていけば，ここを目指す生徒はしっかりと認識し，選択して入学してくることが，はっきりと見え，学生が集まって困るくらいになると思う。そのような方向で同窓会などを使っていただければと思う。

もう１点は，地域貢献について，各種審議会・委員会委員など，行政に対して上越教育大学の先生方から，力をお借りしている分野はたくさんあるが，他に小・中・高等学校などに単独で，私どもの分からない点で貢献されていることが数多くあると思う。それらの地域貢献事業をまとめていただいて，市民など，外に向けてもアピールすることが，必要になってくるのではないか。上越教育大学ならでは，その先生ならではの地域貢献の仕方をまとめて，情報発信することによって，上越教育大学の更なる役割というものが出てきたり，評価が高まっていくと思う。地域貢献の事項を取りまとめて，情報を提供していただくことは，非常に大事なことではないかと感じる。

３点目は，運営諮問会議で意見を聞くことは大変大事なことであるが，上越市でもパブリックコメントをさせていただいたが，市民へホームページなどを通じて，上越教育大学の法人化に向けての取組を発表し，ある期間を設けて市民からのパブリックコメントとして，生活者として大学教育に何を望むのか，声を集めることも大変重要なポイントではないか。上越教育大学が法人化に向けてどのような大学になっていくのかを，きちんと市民に説明すれば，市民ができる支援や協力の方法も出てくると思う。もっと，地域貢献の中でこのような役割を果たして欲しいという，ニーズが出てくるのではないか。生活者・市民のパブリックコメントなどを通して，意見も聞いていただくとよい。広島大学で産官学連携についての意見を市民に求めたら，餅を持っても熱くない手袋を発案して欲しいと問合せがあり，それが既に製品化されたりとか，市民は，大学と全く関係のないことを考えるようだが，しかし究極的には大学のためになるような質問や提案などがいろいろ出てくると思う。上越市にある大学から，世界や日本全国に情報を発信することは，市民にとっても嬉しいことであり，地域からどう支援してもらうかということに直接繋がるので，パブリックコメント

などを通じて，上越教育大学の在り方や法人化に向けての資料等を，素案でも差し支えないのでホームページ等で発表していただきたい。

◎　今後の大学に対する財政措置を考えた場合に，運営費交付金などによって財政基盤を支えながら，特色ある大学教育改革に対する支援などのように，国公私立大学を通じた政策的な補助金，あるいは科学研究費等の競争的資金などによって，教育研究を支援していくことになるであろう。もちろん，大学が国費によって支えられていることには，変わりはないのであるが，運営費交付金自体も評価によって，次期中期目標期間の交付額に反映させるということもあるわけで，いずれにしても，自己収入を確保することが，今後大きな課題になるであろう。従来と変わって，自己収入が即そのまま，大学として支出できる資金となってくるわけで，その点に，十分配慮していくことが大事ではないかと思っている。同時に，資金をどう使うかが大きな意味を持ち，運営費交付金は，渡しきりの資金であるから，それをどのような形で学内に配分し使うかに，大学の見識が問われるわけである。法人化に伴って新たな取組が種々あり，意義のあることだと思うが，これを実現させるためにはコストがかかり，そうなると，既存事業の適切な見直しが必要となってくる。その際，その事業の成果を挙げる上で，どの程度経費がかかったのかという費用対効果を，十分に見極めていくことも必要ではないか。それらによって，意思決定していくことも念頭に置きながら，考えていかなければならないケースもありうると思う。また，あらゆる分野について，経費を見直すことも考えていかなければならないと思う。その際に，管理部門については，従来，国立大学については，事務職員の数も含めてかなり管理部分に経費をかけてきているが，私学と比較した場合に，ウェイトがかなり重くなっている。もう一度その必要性等も含め，十分に検討していくことも必要ではないかと思う。

もう一つ，大学で教員を養成するに当たり，一般的には実践的指導力と豊かな人間性を持った教員の養成ということが言われている。この中期目標にも，高い実践的指導力を持った教員養成について記載しているが，この実践的指導力を持った教員をどう養成するのかということについて，もう少しカリキュラム上で明確にできないのであろうかと思っている。

すなわち，学校現場に様々な問題が生起する，それに対して，どう関わればその問題は解決できるのかという，研究者と学校現場，あるいは教育委員会等と一体となった研究実践がいるのであろう。それらをうまくカリキュラムの中に取り入れられないか。あるいは，学生自身を現実の課題に直面させるようなことは，不可能であろうか。例えば，学生をティーチングアシスタントとして，活用するような方法は可能だろうか。実践的指導力を育てるというのであれば，それに相応しいようなカリキュラムの工夫が，もう少し必要ではないか。

豊かな人間性の関連で言えば，教員に社会性云々ということも指摘されるわけであるが，これからの社会を子供達が生きていくわけであるから，そういう指導をする教員として，例えば環境問題，情報の問題，人権の問題，あるいは国際問題などの諸問題について，自分の考えや対応の仕方について，きちんと自分の意見を言えるような教員でなければならないと思う。子供を指導する上で，教員養成の課程における教養教育としてきちんと取り組んでいくことが，豊かな人間性を育てる上でも，必要なのではないかと思っており，そのようなカリキュラム，あるいは教育方法等について，もう少し具体的に考えられないか。

法人化後の大学運営に当たっては，私学と違って，学長が国立大学法人の長であり，同時に国立大学法人が設置する大学の長でもあって，その法人と大学の最終的な責任者の権限を持ち，その意

味において経営と教学を分離しないで一体的に運営するところに特色がある。同時に学長と理事によって役員会が構成される。そして，審議機関として，経営協議会と教育研究評議会が置かれている形になっているわけであり，その意味では，学外者を含めて比較的に少数の執行部で，大学運営が行われるところに，大きな特色がある。そうすれば，従来の運営の中で，きちんと守らなければならないものは守らなくてはならないけれど，やはり従来，弊害としてよく言われることは，学内民主主義とか，手続きに非常に時間がかかって，機動的な対応ができないとかいろいろな指摘があるわけであり，そういう指摘をきちんと是正するような，組織運営の在り方について，この際徹底的な見直しをして，考えておく必要があるのではないかと思っている。その点で，もう少しブラッシュアップする必要があるのではないかと思っており，気になるのは，教育研究評議会の構成が非常に大人数になっている。これで本来予定されている審議が適切にできるかということについては，若干疑問なしとしないところがある。評議員は，全学的視点に立って，審議決定等に対して寄与していくことが求められているが，評議員は学部や研究科等を代表してその意見を反映するものとしてあるわけであるから，教授会の意向を踏まえた形で，教育研究評議会が運営されていく面もあるわけで，全学的立場と学部等を代表する立場，その間の調整がうまくいくように，もう少し教育研究評議会の在り方を考えたほうが，より実際的な大学運営が行えるのではないか。

◎　これまで，大学と地域との関係として，主に地域経済の視点から，地域経済における大学の存在というようなことについて意見を申し上げてきた。この運営諮問会議を通して，私自身も大学と地域との関わり方を見つめ直し，かなりの密着度があることを再認識した。法人化に向けて，上越教育大学自身も見直しの良いチャンスというタイミングで捉えていると思うが，地域としても大学を見直す良い時期だと思う。上越市にとって本学がなければ地域戦略は考えられないくらい，大きな位置付けがあると思う。それは，これまで地域と関係を作ってきた実績であり，今後も法人化に向けて，本学が更に地域になくてはならない大学として位置付けて欲しい，そのために，地域として何ができるか，地域経済として何ができるかということを考える。大学は，更に良い大学を創って発展していくことが，地域に貢献できることだと思うので，今後ともよろしくお願いしたい。

法人化に向けての新たな取組として，小学校の英語の先生の養成がある。これは時代が小学校で英語を教える。そのために小学校の先生方に対して教育をしなければならないということだと思うが，なぜ小学校で英語を教えなければならないのかということに対して，異論を言う人が結構いる。英語など教える前に，もっと国語と算数をしっかりとか，中学校からでいいのでは，と言う声がある。専門家ではないので，子供達の学力低下はどれくらいで，何を基準にして，どこと比較してということはよく分からないが，少なくとも日本人である以上は，国語をしっかり勉強しなくてはいけないということが基本だろうと思う。やもすると新しい教育とか，新しい教育のシステムとか，もちろん変化する時代のなかで，教育というものを常に進化させなければならないということはあるかもしれないが，基本的なこれだけは崩せないというものがあると思う。これは，大学の特徴になるようなものではないのかもしれないが，きちんと押さえるべきところは押さえているというところも，大事なことではないか。

◎　中期目標を見て，優れた実践力を備えた教員というところが，学校現場にいても一番ポイントであると，常々思っている。学力低下という話も出たが，今それと同時に意欲の低下ということが言われる。今の子供達に将来の日本，読めない・読みにくい変化の大きいこの中で，確固とした自分

の目標を持つ，そういうものを掴めないままいくことに，意欲の低下が結びつくのだろうと思う。教員の一つの資質としては，いわゆる生徒にとって自分を励まし続ける気力とか意志力，物事を解明する意気込み，心をゆり動かす感動とか，あるいは新しいものを創り出す創意などを高める指導力や熱意によって，子供達の意欲を高めるための要素になるのではないか。逆に言えば，今そういうことが弱いということを実感している。子供達に本当に自信を持って，愛情を持って希望を語る教師が少ないという気がする。

教育実習生が私の学校にも来る。２週間３週間の教育実習は，子供達が，一生懸命協力するので，その間は自分は本当に自信を持ったつもりで，もう４月から一人前として教壇に立てるような錯覚を起こしてしまうことがある。実際に，教壇に立った場合に，教育実習のように自分の考えている理想どおりにいかないことがたくさんある。教育実習の在り方についても，単に今のやり方だけでなく，ティームティーチングの中で，もう少しいろいろな目を磨くことなどを含めて，現在の方法を更に充実させることについて，学校現場も一緒になって考えていかなければいけないと思っている。今，県の教育委員会も教員の行政研修，企業研修などを行っている。この目的は，教師は社会性に乏しいとか，視野が狭いとか言われていることへの，一つの研修の場として設けているわけだが，確かにこのことは大きいと思う。学校の常識は，世の中の非常識などと言われないようしなければならないわけである。法人化に向けての新たな取組は良いことであるが，もう一つ，このことがきっちりと機能する土台と言うか，そこの人間創りを何処でどのように行っていけばいいのか，ということを感じる。教員は当然，生徒よりも遙かに知識も深いし，ある部分のテクニックはあるのだが，それを子供にどのようにして伝えたらいいか分からないのが，現状だと思う。そういう意味で，「優れた実践力を備えた教員」という言葉が，新鮮で魅力に感じたわけだが，これは元来当然ある必要なことだと思う。

小学校英語教育の話があったが，今は国語そのものの言語が云々されているし，いわゆる基礎基本という部分と，新しくいろいろと加えていく部分としての，不易と流行のバランスをうまくとっていく必要があると考えるわけである。

地域に上越教育大学があることは，現場の教員にとっては本当に喜びであるし，いろいろな点で指導をいただいており，関わりも深く校長としても大変ありがたい。今後ともこのような機会を更に拡大していただきながら，いわゆる魅力ある教師を大学も現場も，どのようにして育てたらいいのかということを，一緒に考えていきたい思っている。

◎　法人化が今までの上越教育大学の連続発展の上にあると思うが，相当意識を変えていかなければならないということを痛感している。学長団は真剣に検討をしてるが，先生方のところを廻ると「結局はあまりどこも変わらないだろう。」というムードがある。実際に他の運営諮問会議に行っても，上の人は一生懸命になっている割に，教員自身の意識が変わっていないのではないかという不安がある。これは真剣に考えなければならないことであると思う。

先程，指摘のあった，大学運営システムのプランの中で教授会はこれでいいのか，実際は中身が変わるという意識を教授会が持つのかどうか。新しいシステムの上での，教育研究評議会の性格は，今までのような面倒な問題を評議会に任して，教授は教育と研究に専念できるような体制として教授会の権限を縮小されていくことを認めざるを得ない。そこで，教授会が抱えてきた問題点をもっと整理して，核になる重要な部分を，教育研究評議会を通して上げていくような自覚を持った形で教授会を考えていくこと。これは重要な問題と考える。

話に出た費用対効果などのことは，これまで国立大学の教員はほとんど考えてなかったと思うし，運営についても，経営と教学の関係のような意識は，まずなかった。私も私学に出て初めて分かったことであるが，教学は学長が行って，経営は理事会が行う関係で来た背景も多少あるわけであり，例えば，学長が教育内容充実のために，教員をもっとこの分野に増やしたいということを，教員の総意として決めたとしても，これは現在の人件費から考えて採れないとはっきりと言われてしまった場合，教学の立場からは強く言い切れない弱さを抱えていることを予想しておいたほうがいい。

教授会の審議事項の順序についての話もあったが，人事に関する問題と，教育研究評議会の中での教員人事に関する事項の関係は，コストが制約されてくると，人事を論ずる前提としての，コストの問題が今までは考えもしなかったことで，負担がかかってくることは十分に予想される。だから，教授会から経営に関することにも，発言のルートがあっても良いのではないかとも感じた。経営のことも考えないと，人事を提案できない，増やせない，充実できないという問題も必ず生じてくるという意味で，教授会の審議事項を整理したとしても，人事の問題についての経営との関係は，どこかで出口を作っておかなければならない。教育研究評議会をやるべきだということになれば，そこに教授会の意見をどうやって繋げるか，点線の関係では足りないと考える。

同窓会の話が出たが，本学と新潟大学の教育学部の問題はどうなっているのか，難しい問題があることは予想できる。既にこの30年くらいの間に，本学の卒業生は，公孫会という高田師範学校以来のクラブに入っているが，常盤会という新潟大学系の会にも本学の卒業生はたくさん入ってきている。相互の交流は積極的に行われていて，むしろ同窓会の方から動きだして，もう少し真剣に地域連携を進めるために，両大学の関係について，同窓会をパイプにした交流から，大学にプレッシャーをかけるような戦略も考えていいのではないか。同窓会はそういう意味で，出身大学だけで固まった同窓会ではなくて，新潟県全体の同窓会として動き出すと，大学間の連携も活発になるということを考えても良い時期ではないかと思う。大学は何をしていると，同窓会の方から働きかけることもあってもいいのではないか。これは実際に動きのある話であり，新潟県の指導部にいた方からも，もう両大学が混在していて，もう少し筋の通った，新潟県の地域のために生かすべきだという意見があるそうである。そういうところを是非くみ取っていただきたい。

ストレートマスターにも現職教員に劣らない力を付ける方法として，学部と大学院修士課程の６年一貫教育を検討して，実際に現場を体験することを付け加えることなど，本学の特徴になるようなカリキュラムが考えられていいのではないかと思う。盛岡大学の卒業生を本学の修士課程に送り込んだ結果，実践的な力が付いて評価が非常に高かったが，ただ，教員採用試験の一次は通ったけれど，二次は落ちてしまうという現実がある。これは，それを大学院に求めても無理で，本人が頑張らないといけないわけだが，そういう力量の育成も含めたストレートマスターの強力な養成を，考えていかなければならない。それに現職も刺激を受けると思っている。

教育と研究の両方にウェイトがあり，まずは研究であるということはそのとおりであるが，学生に対するエネルギーの注ぎ方は，教官のキャパシティーが同じだから，学生の教育をほどほどにして，自分の研究に重点を置くということをしなければ，研究論文が増えていかないという現実もあり，徹底した学生教育をやると，どうしても研究論文が書けなくなるので，例えば５年以上勤めた人には，半年の研究のゆとりを与える，あるいは，10年間勤めた人には１年間研究期間を与える。給料を支給したままで，在外でも内地でも，研究留学のチャンスを，あるいは制度を取り入れることで，意欲が湧いてくる。これは法人化の機会に，是非やっていただければと思っている。教育と研究のバランスは，そういう形で調整をしながらやっていかなければならないと思う。

◎　法人化に向けての新しい教育・研究への取組と組織改革についての説明を主に伺ったわけであるが，法人化してどうなるかということが，私どもはある意味懸念していて，ある面はまだ懸念が残っている。最初に学長から国立大学協会の話があったが，また重要な懸念が浮上してきているというところであろう。それと同時に法人化によって国立大学では今までなかなかできなかったことが，できるようになる。そういう方向に積極的に動いていけるようになるという，大きなメリットを，ある面で具体的に示していただき，大変嬉しく思った。上越教育大学は，以前からいろいろな面で積極的な取組をしてきたと思うが，新たな取組の中では，大変積極的な方向を出して，そういうことを容易に展開できるようになるようなことのメリットを是非出していっていただきたい。

組織改革については，いろいろな意見があり難しいと思う。確かに，この改革の趣旨は大学がもっと素早い動きができるように，少数の者が中心になって，運営をしていく体制を創るといったことが重要な点であるが，その中で，教授会をどのような意味合いのものにするのかということについては，やはりいろいろなことを考えなくてはいけないと思う。少数の者と役職者が中心になって動かしていくことはよいが，教授会が果たしていた，多くの教員が，いろいろと意見を言う中で，参加意識を高めていくという役割があった。そこを，新しい教授会の元でどう継承していくかは，大事な点であろう。もう一つ，その中から次の世代のリーダーを養成していくということがあって，やはり仕事をしながら成長していくわけであり，次の役職者や学長を育てていかなければならない。そこが，うまく動いていくようにしないと，大学の組織体として続いていかなくなってしまう。リーダー養成という役割を教授会が果たしてきたところもあるので，この機能をどのように継承していくかも，考えなければならない。効率的な運営と，長期的な大学としての活性化を，どのようにして実現していくのかという大変難しいことだとは思うが，工夫が必要ではないか。その点で組織についても，先程の説明のような，次々に新しい取組をすることができるわけだが，かなり可塑性のあるものとして考えることができるのではないか。理想の形を考えて，必ずそこに持っていくのも良いのかも知れないが，ある意味でステップバイステップで，組織を動かしていくことも可能なのではないかと思っており，そのような工夫もあるのではないか。

もう１点は，法人化に伴って一番の心配は財政問題だと思う。今，国立大学協会でも問題にしているところであるが，運営費交付金という形があって，それが年々一律の割合で削減されていくという話になっている。それから６年間の実績に基づいて評価されて，次の６年間はまたそれが変わっていくような形になる。運営費交付金は大きな額であるから，大学の財政の大きな柱になるが，それがある意味で大変不安定な要素を持っている。その点が法人化して私学と同じようになるという意見もあるが，かなり違うところである。私学は頑張って学生を集めて，授業料がたくさん入ればある程度安定した収入になるが，運営費交付金は自分の大学の評価も，努力ではあるが，外がどのように評価してくれるかにより，大学自体で決まっていかないところがあって，外から決められることが体制上できてしまう。そこが，大変懸念されるところである。そこで，運営費交付金以外の外部資金を頼りにしなければならないということになるわけで，今まで国立大学の場合は，科学研究費と委任経理金，若干の受託研究費などで，研究経費を補ってきたが，とりわけ教員養成大学の場合は，科学研究費はともかく，委任経理金はあまり入ってこない。これまで外部資金が乏しかった経緯があり，それをかなり増やしていかないとならないであろう。そこにこれからどう取り組んでいくかが大事な点ではないか。どこで稼いでくるのかは，いろいろあると思うが，やはり大学は，研究成果に基づいて知的財産をうまく活用して，収益を上げていくようなこと。それから知的財産

を築く過程で，外からの資金援助を仰ぐといったこと。このようなことを考えていかなければならないと思う。産官学連携が広がりつつあり，この間，学術会議も係わって，第３回の産学官連携サミットを開催したが，全国の大学に案内して，産業界や官公庁からも参加いただいたが，残念ながら教員養成大学からはほとんど参加がなかった。これからはその辺にも手を広げていかなければならないのではないか。どういう形で産業界から寄付金を集めるかということも，考えていかなければならないと思う。その辺は今まではあまりやってこなかった思うので，そういう面でのバックアップ体制について，市長や財界の方々から，いろいろ知恵をいただきながら，財政面でのバックアップ体制を築いて，運営費交付金は減っていっても，動じない体制を作っていかないといけないと感じている。しかし，非常に積極的なこれからの方向性のような説明があり，心強く思っており，これからも是非頑張っていただきたい。

６　閉　会

①　蓮見委員長から，第８回上越教育大学運営諮問会議の閉会が告げられ，本日の議事概要のまとめ方・公表については前回と同様としたい旨，併せて本会議の最終回に当たり，４年間にわたり委員の方々から御協力いただいたことへの謝辞及び今後とも本学へ御支援いただきたい旨の挨拶があった。

②　渡邊学長から，本日の多くの御意見・御助言等に対する謝辞並びに４年間８回にわたる本会議における貴重な御意見等に対しての，蓮見委員長を始めとする委員の方々への感謝の言葉が述べられて閉会となった。

## (3) 職員数等

### ① 定員・現員

平成15年５月１日現在

| 区　分 | 学　長 | 副学長 | 教　授 | 助教授 | 講　師 | 助　手 | 計 | 教　頭 | 教　諭 | 養護教諭 | 小　計 | 事務局職員 | 合　計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 定　員 | 1 | 2 | 95 | 73 | | 22 | 193 | 3 | 33 | 3 | 232 | 108 | 340 |
| 学　長 | 1 | | | | | | 1 | | | | 1 | | 1 |
| 副　学　長 | | 2 | | | | | 2 | | | | 2 | | 2 |
| 学校教育部 | | | 67 | 60 | 14 | 12 | 153 | | | | 153 | | 153 |
| 学校教育総合研究センター | | | 2 | 1 | 4 | | 7 | | | | 7 | | 7 |
| 保健管理センター | | | 1 | | | | 1 | | | | 1 | | 1 |
| 附属実技教育研究指導センター | | | 3 | 5 | | | 8 | | | | 8 | | 8 |
| 附属障害児教育実践センター | | | 1 | 1 | | 1 | 3 | | | | 3 | | 3 |
| 附属小学校 | | | | | | | | 1 | 15 | 1 | 17 | | 17 |
| 附属中学校 | | | | | | | | 1 | 15 | 1 | 17 | | 17 |
| 附属幼稚園 | | | | | | | | 1 | 3 | 1 | 5 | | 5 |
| 事　務　局 | | | | | | | | | | | | 104 | 104 |
| 現　員　計 | 1 | 2 | 74 | 67 | 18 | 13 | 175 | 3 | 33 | 3 | 214 | 104 | 318 |
| 欠　員<br>（欠員率（％）） | | | 21<br>(22.1) | 6<br>(8.2) | △18 | 9<br>(40.9) | 18<br>(9.3) | | | | 18<br>(7.7) | 4<br>(3.7) | 22<br>(6.4) |

② 教員の任用状況

| 発令年月日 | 区分 | 異動事項 | 氏名 | 現旧（官）職 |
|---|---|---|---|---|
| 15. 4. 1 | 昇任 | 学長 | 渡邉　隆 | 副学長 |
| 〃 | 〃 | 副学長 | 小宮三彌 | 教授（障害児教育講座） |
| 〃 | 〃 | 副学長 | 髙田喜久司 | 教授（学習臨床講座） |
| 〃 | 併任 | 附属図書館長 | 若井彌一 | |
| 〃 | 〃 | 学校教育総合研究センター長 | 戸北凱惟 | |
| 〃 | 〃 | 保健管理センター所長 | 佐藤　誠 | |
| 〃 | 〃 | 学校教育学部学部主事 | 大悟法　滋 | |
| 〃 | 〃 | 〃　〃 | 星名信昭 | |
| 〃 | 〃 | 〃　〃 | 齋藤九一 | |
| 〃 | 〃 | 〃　〃 | 川崎直哉 | |
| 〃 | 〃 | 〃　〃 | 風巻孝男 | |
| 〃 | 〃 | 〃　附属実技教育研究指導センター長 | 下西善三郎 | |
| 〃 | 〃 | 〃　附属障害児教育実践センター長 | 我妻敏博 | |
| 〃 | 〃 | 〃　附属小学校長 | 加藤泰樹 | |
| 〃 | 〃 | 〃　附属中学校長 | 田中　博 | |
| 〃 | 〃 | 〃　附属幼稚園長 | 大山美和子 | |
| 〃 | 〃 | 運営評議会委員 | 渡邉　隆 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 小宮三彌 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 髙田喜久司 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 若井彌一 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 大悟法　滋 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 星名信昭 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 齋藤九一 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 川崎直哉 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 風巻孝男 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 戸北凱惟 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 田中　博 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 中川清隆 | |
| 〃 | 委嘱 | 情報処理センター長 | 室谷利夫 | |
| 〃 | 降任 | 教授（学習臨床講座） | 増井三夫 | 副学長 |
| 〃 | 配置換 | 教授（言語系教育講座（外国語）） | 加藤雅啓 | 教授（附属実技教育研究指導センター） |
| 〃 | 採用 | 教授（学校教育総合研究センター） | 内田一成 | 愛知学院大学文学部教授 |
| 〃 | 昇任 | 助教授（生徒指導総合講座） | 大前敦巳 | 講師（生徒指導総合講座） |
| 〃 | 配置換 | 助教授（附属実技教育研究指導センター） | 平野七濤 | 助教授（言語系教育講座（外国語）） |
| 〃 | 復職 | | 井沢功一朗 | 講師（心理臨床講座） |
| 15. 4. 2 | 採用 | 講師（学校教育総合研究センター） | 小林毅夫 | |
| 15. 8. 1 | 昇任 | 教授（附属実技教育研究指導センター） | 平野七濤 | 助教授（附属実技教育研究指導センター） |
| 15.10. 1 | 〃 | 教授（学習臨床講座） | 山崎貞登 | 助教授（学習臨床講座） |
| 〃 | 〃 | 助教授（言語系教育講座（国語）） | 中里理子 | 講師（言語系教育講座（国語）） |
| 15.11. 1 | 採用 | 教授（学習臨床講座） | 藤岡達也 | 大阪府立香里丘高等学校教諭（大阪府教育センター指導主事） |
| 15.12. 1 | 昇任 | 教授（言語系教育講座（外国語）） | 前川利広 | 助教授（言語系教育講座（外国語）） |
| 16. 1. 1 | 〃 | 教授（学校教育総合研究センター） | 濁川明男 | 助教授（学校教育総合研究センター） |
| 16. 2. 1 | 〃 | 信州大学教育学部助教授 | 酒井英樹 | 講師（言語系教育講座（外国語）） |
| 〃 | 〃 | 助教授（学校教育総合研究センター） | 井上久祥 | 講師（学校教育総合研究センター） |
| 〃 | 採用 | 講師（附属障害児教育実践センター） | 丸山昭生 | |

| 発令年月日 | 区分 | 異動事項 | 氏名 | 現旧（官）職 |
|---|---|---|---|---|
| 16. 3.31 | 転任 | 教授（学習臨床講座） | 朝倉啓爾 | 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官 |
| 〃 | 退職 | 辞職 | 小宮三彌 | 副学長 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 岡充夫 | 助教授（芸術系教育講座（美術）） |
| 〃 | 〃 | 定年 | 二谷貞夫 | 教授（学習臨床講座） |
| 〃 | 〃 | 〃 | 南舘忠智 | 教授（幼児教育講座） |
| 〃 | 〃 | 〃 | 山形忠顯 | 教授（芸術系教育講座（音楽）） |
| 〃 | 〃 | 〃 | 工藤智昭 | 教授（芸術系教育講座（音楽）） |
| 〃 | 〃 | 〃 | 重嶋博 | 教授（芸術系教育講座（音楽）） |
| 〃 | 〃 | 〃 | 三浦望慶 | 教授（生活・健康系教育講座（保健体育）） |
| 〃 | 〃 | 〃 | 砥堀雅信 | 教授（生活・健康系教育講座（保健体育）） |

(4) 予算及び決算

① 国立学校特別会計

ア 歳入

| 区分 | 平成15年度 | |
|---|---|---|
| | 予算額 | 決算額 |
| 授業料及び入学検定料 | 2,013,000円 | 727,766,000円 |
| 授業料 | 0 | 589,103,300 |
| 入学料及び検定料 | 0 | 138,033,400 |
| 講習料 | 2,013,000 | 629,300 |
| 産学連携等研究収入 | 2,800,000 | 0 |
| 雑収入 | 92,910,000 | 89,239,954 |
| 学校財産貸付料 | 11,058,000 | 7,278,544 |
| 公務員宿舎貸付料 | 9,518,000 | 9,774,921 |
| 寄宿料 | 47,026,000 | 47,004,500 |
| 用途指定寄附金受入 | 23,652,000 | 23,652,000 |
| その他 | 1,656,000 | 1,529,989 |
| 合計 | 97,723,000 | 817,005,954 |

イ 歳出

| 区分 | 平成15年度 | |
|---|---|---|
| | 予算額 | 決算額 |
| 国立学校 | 4,101,879,000円 | 4,065,223,018円 |
| 人件費 | 3,008,968,000 | 2,972,316,038 |
| 物件費 | 1,092,911,000 | 1,092,906,980 |
| 施設整備費 | 524,845,000 | 524,845,000 |
| 合計 | 4,626,724,000 | 4,590,068,018 |

② 一般会計（歳出）

| 区分 | 平成15年度 | |
|---|---|---|
| | 予算額 | 決算額 |
| 文部科学本省 | 26,138,200円 | 26,138,190円 |

## (5) 広報刊行物一覧

| 名　称 | 発行内容（概要） | 発行部数 | 配布先 |
|---|---|---|---|
| 上越教育大学概要（平成15年度） | 大学全般にわたっての概略を統計的にまとめたもの | 部<br>3,000 | 文部科学省，各国立大学，教育関係機関，来学者，職員 |
| 上越教育大学学報第83号～第87号 | 学内の運営等について，必要な事項を学内外に周知するため，学内規則，人事異動，一般通報事項等を掲載したもの | 500 | 文部科学省，各国立大学，教育関係機関，職員 |
| 上越教育大学学園だより<br>No.59，No.60 | 学部・大学院の研究・教育活動及び学生生活の現況，本学の活動を学内外に広く紹介するためまとめたもの | 4,500<br>5,000 | 文部科学省，教育関係機関，各国立大学，職員，大学院学生，学部学生，学部学生保護者 |
| 上越教育大学<br>News Letters<br>No.9～No.11 | 大学改革の取組状況，就職，教育研究活動等，最新の大学の活動状況をまとめたもの | Web上で公開 | |
| 平成16年度上越教育大学案内 | 学部受験生向けに大学の教育活動及び学生生活に関する事項をまとめたもの | 8,000 | 各国立大学，各高等学校，教育関係機関，受験希望者 |
| 平成16年度上越教育大学大学院案内 | 大学院受験生向けに大学の教育活動及び学生生活に関する事項をまとめたもの | 14,550 | 各国立大学，教育関係機関，受験希望者 |
| 上越教育大学年次報告書<br>（平成14年度版） | 大学全般にわたっての活動状況をまとめたもの | 500 | 文部科学省，各国立大学，教育関係機関，職員 |
| 学校教育総合研究センター要覧2003 | センターの事業概要を紹介したもの | 500 | 教育関係機関，来所者，職員 |
| 学校教育総合研究センターニュースNo.3 | センターの活動状況を紹介したもの | 650 | 文部科学省，各国立大学教育センター，教育関係機関，大学院学生，職員 |
| 学校教育総合研究センター年報第3号（平成15年度版） | センターの研究報告及び事業報告をまとめたもの | 600 | 文部科学省，各国立大学教育センター，資料提供教育関係機関，職員 |
| 学校要覧<br>（附属小学校） | 教育目標，校歌，活動，沿革，職員，児童，学校行事，研究，校舎配置図，PTA等をまとめたもの | 500 | 文部科学省，教育関係機関，来校者，職員 |
| 学校要覧<br>（附属中学校） | 教育目標，沿革，任務，研究年譜，校時表，学校運営組織，年間行事計画，生徒会，部活動・クラブ，校舎・施設等をまとめたもの | 550 | 文部科学省，教育関係機関，来校者，職員 |
| 幼稚園要覧<br>（附属幼稚園） | 設立の概略，本園の使命，教育目標，重点目標，園児，職員，施設・設備等をまとめたもの | 1,000 | 文部科学省，教育関係機関，来園者，職員 |

(6) **土地・建物の概要**

| 区分 | 建物 名称 | 建面積㎡ | 延面積㎡ | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 山屋敷地区 (356,019㎡) | 本部事務局 | 733 | 2,162 | |
| | 附属図書館 | 945 | 3,196 | |
| | 講義棟 | 828 | 2,193 | |
| | 実験棟 | 573 | 1,152 | |
| | 大学会館 | 1,641 | 2,217 | |
| | 講堂 | 1,045 | 1,078 | |
| | 自然棟 | 912 | 6,393 | |
| | 第2講義棟 | 298 | 1,021 | |
| | 情報処理センター | 242 | 483 | |
| | 人文棟 | 1,516 | 9,340 | |
| | 音楽棟 | 741 | 2,829 | |
| | 美術棟 | 1,526 | 3,862 | |
| | 体育棟 | 594 | 1,723 | |
| | 小体育館 | 636 | 1,214 | |
| | 体育館 | 1,404 | 1,404 | |
| | スポーツ科学実験棟 | 286 | 800 | |
| | 職員研修センター | 402 | 402 | |
| | 附属障害児教育実践センター | 660 | 1,159 | |
| | 学生宿舎 | 4,451 | 17,856 | 世帯…40戸用2棟<br>単身…60人用3棟, 80人用1棟<br>100人用1棟,120人用3棟 |
| | 国際学生宿舎 | 472 | 1,918 | |
| | 職員宿舎 | 380 | 1,814 | 1棟30戸（B型15戸, C型15戸） |
| | 附属幼稚園 | 625 | 625 | |
| | 課外活動共用施設 | 203 | 397 | |
| | 設備機械棟 | 438 | 688 | |
| | プール附属棟 | 189 | 189 | |
| | その他 | 1,315 | 1,530 | |
| | 計 | 23,055 | 67,645 | |
| 西城地区 (36,390㎡) | 学校教育総合研究センター | 893 | 1,864 | |
| | 附属小学校校舎 | 2,292 | 4,750 | |
| | 附属小学校体育館 | 600 | 600 | |
| | その他 | 433 | 433 | |
| | 計 | 4,218 | 7,647 | |
| 本城地区 (50,127㎡) | 附属中学校校舎 | 2,064 | 4,239 | |
| | 附属中学校体育館 | 934 | 2,157 | |
| | その他 | 475 | 475 | |
| | 計 | 3,473 | 6,871 | |
| 赤倉地区 (1,871㎡) | 赤倉野外活動施設 | 282 | 529 | |
| | 計 | 282 | 529 | |
| その他 (7,340㎡) | 西城研修所 | 73 | 98 | |
| | 西城宿舎 | 924 | 1,953 | 9棟33戸（B型15戸, C型18戸） |
| | 北城宿舎 | 452 | 1,341 | 1棟12戸（D型12戸） |
| | その他 | 19 | 19 | |
| | 計 | 1,468 | 3,411 | |
| 合計 | | 32,496 | 86,103 | |

## 2　教育・研究活動等

### (1)　平成１６年度　入学者選抜試験状況

#### ①　大学院学校教育研究科

ア　専攻・コース別

| 専攻・コース | | 入学定員 | 前期募集 | | | | | 後期募集 | | | | | 第２次募集 | | | | | 合計 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 募集人員 | 応募者 | 受験者 | 合格者 | 入学者 | 募集人員 | 応募者 | 受験者 | 合格者 | 入学者 | 募集人員 | 応募者 | 受験者 | 合格者 | 入学者 | 応募者 | 受験者 | 合格者 | 入学者 |
| 学校教育専攻 | | 102 | 107 | (67)143 | (67)140 | (66)103 | (66) 90 | 23 | (5) 28 | (5) 24 | (4) 16 | (4) 14 | 8 | | | | | (72)171 | (72)164 | (70)119 | (70)104 |
| 学習臨床コース | | 約60 | 約55 | (26) 45 | (26) 44 | (26) 45 | (26) 41 | 15 | (1) 7 | (1) 7 | (1) 7 | (1) 6 | 8 | | | | | (27) 52 | (27) 51 | (27) 52 | (27) 47 |
| 発達臨床コース | | 約42 | 約36 | (22) 29 | (22) 29 | (29) 40 | (29) 33 | 6 | (3) 7 | (3) 7 | (3) 7 | (3) 6 | | | | | | (25) 36 | (25) 36 | (32) 47 | (32) 39 |
| 臨床心理学コース | | 約18 | 約16 | (19) 69 | (19) 67 | (11) 18 | (11) 16 | 2 | (1) 14 | (1) 10 | 2 | 2 | | | | | | (20) 83 | (20) 77 | (11) 20 | (11) 18 |
| 幼児教育専攻 | | 10 | 8 | 2 | 2 | 3 | 1 | 7 | 1 | 1 | 1 | | 6 | | | | | 3 | 3 | 4 | 1 |
| 障害児教育専攻 | | 30 | 25 | (5) 17 | (5) 16 | (5) 21 | (5) 15 | 9 | (1) 7 | (1) 7 | (1) 8 | (1) 4 | 2 | 2 | 2 | 1 | 1 | (6) 26 | (6) 25 | (6) 30 | (6) 20 |
| 教科・領域教育専攻 | | 140 | 115 | (37) 68 | (37) 67 | (37) 65 | (36) 60 | 75 | (1) 35 | 31 | 30 | 24 | 46 | 8 | 8 | 7 | 6 | (38)111 | (37)106 | (37)102 | (36) 90 |
| 言語系コース | 国語 | 約25 | 約20 | (8) 9 | (8) 9 | (8) 8 | (8) 8 | 11 | 3 | 3 | 3 | 2 | 8 | | | | | (8) 12 | (8) 12 | (8) 11 | (8) 10 |
| | 英語 | | | (3) 6 | (3) 6 | (3) 6 | (3) 5 | | (1) 1 | | | | | 1 | 1 | 1 | | (4) 8 | (3) 7 | (3) 7 | (3) 5 |
| 社会系コース | | 約25 | 約20 | (7) 12 | (7) 12 | (7) 12 | (7) 10 | 13 | 8 | 7 | 6 | 5 | 8 | 2 | 2 | 1 | 1 | (7) 22 | (7) 21 | (7) 19 | (7) 16 |
| 自然系コース | 数学 | 約30 | 約25 | (5) 7 | (5) 7 | (5) 7 | (5) 7 | 17 | 3 | 3 | 3 | 2 | 12 | | | | | (5) 10 | (5) 10 | (5) 10 | (5) 9 |
| | 理科 | | | (4) 7 | (4) 6 | (4) 6 | (4) 6 | | 3 | 2 | 2 | 2 | | 1 | 1 | 1 | 1 | (4) 11 | (4) 9 | (4) 9 | (4) 9 |
| 芸術系コース | 音楽 | 約30 | 約25 | (2) 8 | (2) 8 | (2) 8 | (2) 8 | 12 | 5 | 5 | 5 | 4 | | | | | | (2) 13 | (2) 13 | (2) 13 | (2) 12 |
| | 美術 | | | (3) 11 | (3) 11 | (3) 10 | (2) 8 | | 7 | 7 | 7 | 6 | | | | | | (3) 18 | (3) 18 | (3) 17 | (2) 14 |
| 生活・健康系コース | 保健体育 | 約30 | 約25 | (3) 5 | (3) 5 | (3) 5 | (3) 5 | 22 | 4 | 3 | 3 | 3 | 18 | 2 | 2 | 2 | 2 | (3) 11 | (3) 10 | (3) 10 | (3) 10 |
| | 技術 | | | 1 | 1 | 1 | 1 | | | | | | | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | 2 | 2 | 2 |
| | 家庭 | | | (2) 2 | (2) 2 | (2) 2 | (2) 2 | | 1 | 1 | 1 | | | 1 | 1 | 1 | 1 | (2) 4 | (2) 4 | (2) 4 | (2) 3 |
| 合計 | | 300 | 255 | (109) 230 | (109) 225 | (108) 192 | (107) 166 | 114 | (7) 71 | (6) 63 | (5) 55 | (5) 42 | 62 | 10 | 10 | 8 | 7 | (116) 311 | (115) 298 | (113) 255 | (112) 215 |

注）1　（　）内は、現職教員（３年以上の教職経験を有する者）を内数で示す。
　　2　応募者及び受験者欄は第１志望のみの数であり、合格者及び入学者欄は第２志望の合格・入学者を含めた数である。

イ　都道府県別

| 区分 | 前期募集 | | | | 後期募集 | | | | 第２次募集 | | | | 合計 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 応募者 | 受験者 | 合格者 | 入学者 | 応募者 | 受験者 | 合格者 | 入学者 | 応募者 | 受験者 | 合格者 | 入学者 | 応募者 | 受験者 | 合格者 | 入学者 |
| 北海道 | 3 | 3 | 1 | 1 | (3) 3 | (2) 2 | (2) 2 | (2) 2 | | | | | (3) 6 | (2) 5 | (2) 3 | (2) 3 |
| 青森 | (3) 4 | (3) 4 | (3) 4 | (3) 3 | | | | | | | | | (3) 4 | (3) 4 | (3) 4 | (3) 3 |
| 岩手 | (1) 3 | (1) 3 | (1) 3 | (1) 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | | | | | (1) 5 | (1) 5 | (1) 5 | (1) 4 |
| 宮城 | (1) 8 | (1) 8 | (1) 6 | (1) 5 | 2 | 2 | 1 | 1 | | | | | (1) 10 | (1) 10 | (1) 7 | (1) 6 |
| 秋田 | (3) 3 | (3) 3 | (3) 3 | (3) 3 | 1 | 1 | 1 | 1 | | | | | (3) 4 | (3) 4 | (3) 4 | (3) 4 |
| 山形 | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | 2 | 2 | 1 | | | | | 3 | 3 | 3 | 2 |
| 福島 | (3) 4 | (3) 4 | (3) 4 | (3) 4 | | | | | | | | | (3) 4 | (3) 4 | (3) 4 | (3) 4 |
| 茨城 | (2) 5 | (2) 5 | (2) 5 | (2) 3 | 1 | 1 | 1 | | | | | | (2) 6 | (2) 6 | (2) 6 | (2) 3 |
| 栃木 | (3) 5 | (3) 4 | (3) 3 | (3) 3 | 1 | 1 | 1 | 1 | | | | | (3) 6 | (3) 5 | (3) 4 | (3) 4 |
| 群馬 | (5) 7 | (5) 6 | (5) 5 | (5) 5 | 1 | 1 | 1 | | | | | | (5) 8 | (5) 7 | (5) 6 | (5) 5 |
| 埼玉 | (2) 5 | (2) 4 | (2) 3 | (2) 3 | 1 | 1 | 1 | | | | | | (2) 6 | (2) 5 | (2) 4 | (2) 3 |
| 千葉 | (3) 7 | (3) 7 | (3) 6 | (3) 6 | 2 | 2 | 2 | | | | | | (3) 9 | (3) 9 | (3) 8 | (3) 6 |
| 東京 | (4) 31 | (4) 30 | (4) 21 | (4) 19 | 6 | 5 | 5 | 4 | 1 | 1 | 1 | 1 | (4) 38 | (4) 36 | (4) 27 | (4) 24 |
| 神奈川 | (3) 5 | (3) 4 | (2) 3 | (1) 1 | 3 | 3 | 3 | 3 | | | | | (3) 8 | (3) 7 | (2) 6 | (1) 4 |
| 新潟 | (46) 74 | (46) 74 | (46) 65 | (46) 59 | (2) 18 | (2) 15 | (1) 13 | (1) 12 | 4 | 4 | 3 | 3 | (48) 96 | (48) 93 | (47) 81 | (47) 74 |
| 富山 | (2) 2 | (2) 2 | (2) 2 | (2) 2 | 3 | 3 | 2 | 2 | | | | | (2) 5 | (2) 5 | (2) 4 | (2) 4 |
| 石川 | (4) 5 | (4) 5 | (4) 5 | (4) 5 | 2 | 1 | 1 | 1 | | | | | (4) 7 | (4) 6 | (4) 6 | (4) 6 |
| 福井 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 山梨 | 7 | 7 | 7 | 5 | 1 | 1 | 1 | | | | | | 8 | 8 | 8 | 5 |
| 長野 | (12) 13 | (12) 13 | (12) 13 | (12) 12 | | | | | | | | | (12) 13 | (12) 13 | (12) 13 | (12) 12 |
| 岐阜 | (3) 5 | (3) 5 | (3) 4 | (3) 4 | 1 | 1 | | | | | | | (3) 6 | (3) 6 | (3) 4 | (3) 4 |
| 静岡 | (5) 7 | (5) 7 | (5) 6 | (5) 6 | (1) 3 | (1) 2 | (1) 1 | (1) 1 | | | | | (6) 10 | (6) 9 | (6) 7 | (6) 7 |
| 愛知 | (1) 4 | (1) 4 | (1) 2 | (1) 1 | 1 | 1 | | | | | | | (1) 5 | (1) 5 | (1) 2 | (1) 1 |
| 三重 | | | | | 1 | 1 | 1 | 1 | | | | | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 滋賀 | | | | | | | | | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 京都 | 2 | 2 | 1 | | 1 | 1 | 1 | 1 | | | | | 3 | 3 | 2 | 1 |
| 大阪 | 1 | 1 | | | (1) 1 | (1) 1 | (1) 1 | (1) 1 | | | | | (1) 2 | (1) 2 | (1) 1 | (1) 1 |
| 兵庫 | 1 | 1 | 1 | | | | | | 1 | 1 | 1 | | 2 | 2 | 2 | |
| 奈良 | 1 | 1 | 1 | 1 | | | | | | | | | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 和歌山 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 鳥取 | (1) 1 | (1) 1 | (1) 1 | (1) 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | | | | | (1) 2 | (1) 2 | (1) 2 | (1) 2 |
| 島根 | | | | | 1 | 1 | 1 | | | | | | 1 | 1 | 1 | |
| 岡山 | 2 | 2 | 2 | 2 | | | | | | | | | 2 | 2 | 2 | 2 |
| 広島 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 山口 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 徳島 | 1 | 1 | 1 | | 2 | 2 | 2 | | | | | | 3 | 3 | 3 | |
| 香川 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 愛媛 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 高知 | 1 | 1 | 1 | | | | | | | | | | 1 | 1 | 1 | |
| 福岡 | (1) 1 | (1) 1 | (1) 1 | (1) 1 | | | | | 1 | 1 | 1 | 1 | (1) 2 | (1) 2 | (1) 2 | (1) 2 |
| 佐賀 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 長崎 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 熊本 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 大分 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 宮崎 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 鹿児島 | 1 | 1 | 1 | 1 | | | | | | | | | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 沖縄 | (1) 4 | (1) 4 | (1) 4 | (1) 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | | | | | (1) 5 | (1) 5 | (1) 5 | (1) 3 |
| 外国 | 6 | 6 | 6 | 5 | 9 | 8 | 7 | 6 | 2 | 2 | 1 | 1 | 17 | 16 | 14 | 12 |
| 計 | (109) 230 | (109) 225 | (108) 192 | (107) 166 | (7) 71 | (6) 63 | (5) 55 | (5) 42 | 10 | 10 | 8 | 7 | (116) 311 | (115) 298 | (113) 255 | (112) 215 |

注）１（　）内は、現職教員（３年以上の教職経験を有する者）を内数で示す。

ウ　現職教員(教職経験年数３年以上)
の教職経験年数別

| 教職経験年数 | 応募者 | 受験者 | 合格者 | 入学者 |
|---|---|---|---|---|
| 3 | | | | |
| 4 | | | | |
| 5 | (1) 3 | (1) 3 | (1) 3 | (1) 3 |
| 6 | 4 | 4 | 4 | 4 |
| 7 | 5 | 5 | 5 | 4 |
| 8 | 3 | 3 | 3 | 3 |
| 9 | (1) 3 | (1) 3 | (1) 3 | (1) 3 |
| 10 | (1) 5 | (1) 5 | (1) 5 | (1) 5 |
| 11 | 14 | 14 | 14 | 14 |
| 12 | (2) 14 | (2) 14 | (2) 14 | (2) 14 |
| 13 | (5) 14 | (5) 14 | (5) 14 | (5) 14 |
| 14 | (3) 12 | (3) 12 | (3) 12 | (3) 12 |
| 15 | (3) 9 | (3) 9 | (3) 9 | (3) 9 |
| 16 | (3) 8 | (3) 8 | (3) 8 | (3) 8 |
| 17 | 6 | 6 | 6 | 6 |
| 18 | 5 | 5 | 5 | 5 |
| 19 | 3 | 2 | 2 | 2 |
| 20 | 3 | 3 | 3 | 3 |
| 21 | | | | |
| 22 | | | | |
| 23 | | | | |
| 24 | | | | |
| 25 | 1 | 1 | | |
| 26 | (1) 1 | (1) 1 | (1) 1 | (1) 1 |
| 27 | | | | |
| 28 | (1) 1 | (1) 1 | (1) 1 | (1) 1 |
| 29 以上 | 2 | 2 | 1 | 1 |
| 計 | (21) 116 | (21) 115 | (21) 113 | (21) 112 |

注）１　（ ）内は女子で内数である。
　　２　教職経験年数の３は，３年０月から３年11月までを示す。(以下同様)

エ　現職教員(教職経験年数３年以上)
の年齢別

| 年　齢 | 応募者 | 受験者 | 合格者 | 入学者 |
|---|---|---|---|---|
| 25 | | | | |
| 26 | | | | |
| 27 | (1) 1 | (1) 1 | (1) 1 | (1) 1 |
| 28 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 29 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 30 | 3 | 3 | 3 | 3 |
| 31 | 5 | 5 | 5 | 5 |
| 32 | (1) 2 | (1) 2 | (1) 2 | (1) 1 |
| 33 | 6 | 6 | 6 | 6 |
| 34 | (2) 13 | (2) 13 | (2) 13 | (2) 13 |
| 35 | (3) 15 | (3) 15 | (3) 15 | (3) 15 |
| 36 | (1) 13 | (1) 13 | (1) 13 | (1) 13 |
| 37 | (3) 9 | (3) 9 | (3) 9 | (3) 9 |
| 38 | (7) 16 | (7) 16 | (7) 16 | (7) 16 |
| 39 | (1) 5 | (1) 5 | (1) 5 | (1) 5 |
| 40 | 9 | 9 | 9 | 9 |
| 41 | 4 | 4 | 4 | 4 |
| 42 | 5 | 5 | 5 | 5 |
| 43 | 1 | | | |
| 44 | | | | |
| 45 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 46 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 47 | | | | |
| 48 | | | | |
| 49 | (1) 1 | (1) 1 | (1) 1 | (1) 1 |
| 50 以上 | (1) 4 | (1) 4 | (1) 2 | (1) 2 |
| 計 | (21) 116 | (21) 115 | (21) 113 | (21) 112 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 平均年齢 | (39.6)38.6 | (39.6)38.5 | (39.6)37.5 | (39.6)37.5 |

注）（ ）内は女子で内数である。

オ　現職教員（教職経験年数３年以上）の学校種別

| 区分 | | 応募者 | | | | | | | 受験者 | | | | | | | 合格者 | | | | | | | 入学者 | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 計 | 小 | 中 | 高 | 特 | 幼 | 他 | 計 | 小 | 中 | 高 | 特 | 幼 | 他 | 計 | 小 | 中 | 高 | 特 | 幼 | 他 | 計 | 小 | 中 | 高 | 特 | 幼 | 他 |
| 学校教育専攻 | | 72 | 37 | 23 | 11 | 1 | | | 72 | 37 | 23 | 11 | 1 | | | 70 | 36 | 23 | 10 | 1 | | | 70 | 36 | 23 | 10 | 1 | | |
| | 学習臨床 | 27 | 12 | 11 | 4 | | | | 27 | 12 | 11 | 4 | | | | 27 | 12 | 11 | 4 | | | | 27 | 12 | 11 | 4 | | | |
| | 発達臨床 | 25 | 15 | 6 | 4 | | | | 25 | 15 | 6 | 4 | | | | 32 | 17 | 9 | 6 | | | | 32 | 17 | 9 | 6 | | | |
| | 臨床心理学 | 20 | 10 | 6 | 3 | 1 | | | 20 | 10 | 6 | 3 | 1 | | | 11 | 7 | 3 | | 1 | | | 11 | 7 | 3 | | 1 | | |
| 幼児教育専攻 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 障害児教育専攻 | | 6 | 3 | 2 | | 1 | | | 6 | 3 | 2 | | 1 | | | 6 | 3 | 2 | | 1 | | | 6 | 3 | 2 | | 1 | | |
| 教科・領域教育専攻 | | 38 | 14 | 17 | 7 | | | | 37 | 14 | 16 | 7 | | | | 37 | 14 | 16 | 7 | | | | 36 | 14 | 16 | 6 | | | |
| 言語系 | 国語 | 8 | 4 | 3 | 1 | | | | 8 | 4 | 3 | 1 | | | | 8 | 4 | 3 | 1 | | | | 8 | 4 | 3 | 1 | | | |
| | 英語 | 4 | | 4 | | | | | 3 | | 3 | | | | | 3 | | 3 | | | | | 3 | | 3 | | | | |
| 社会系 | | 7 | 1 | 4 | 2 | | | | 7 | 1 | 4 | 2 | | | | 7 | 1 | 4 | 2 | | | | 7 | 1 | 4 | 2 | | | |
| 自然系 | 数学 | 5 | 3 | 2 | | | | | 5 | 3 | 2 | | | | | 5 | 3 | 2 | | | | | 5 | 3 | 2 | | | | |
| | 理科 | 4 | 2 | | 2 | | | | 4 | 2 | | 2 | | | | 4 | 2 | | 2 | | | | 4 | 2 | | 2 | | | |
| 芸術系 | 音楽 | 2 | | 2 | | | | | 2 | | 2 | | | | | 2 | | 2 | | | | | 2 | | 2 | | | | |
| | 美術 | 3 | | 1 | 2 | | | | 3 | | 1 | 2 | | | | 3 | | 1 | 2 | | | | 2 | | 1 | 1 | | | |
| 生活・健康系 | 保健体育 | 3 | 3 | | | | | | 3 | 3 | | | | | | 3 | 3 | | | | | | 3 | 3 | | | | | |
| | 技術 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 家庭 | 2 | 1 | 1 | | | | | 2 | 1 | 1 | | | | | 2 | 1 | 1 | | | | | 2 | 1 | 1 | | | | |
| 合計 | | 116 | 54 | 42 | 18 | 2 | | | 115 | 54 | 41 | 18 | 2 | | | 113 | 53 | 41 | 17 | 2 | | | 112 | 53 | 41 | 16 | 2 | | |

（注）１　小－小学校，中－中学校，高－高等学校，特－特殊教育諸学校，幼－幼稚園，他－その他

２　応募者及び受験者欄は第１志望のみの数であり，合格者及び入学者欄は第２志望の合格・入学者を含めた数である。

## ② 学校教育学部

### ア 都道府県別

| 区分 | 推薦による選抜（募集人員 50人） | | | | 個別学力検査等による選抜（募集人員 110人） | | | | 私費外国人留学生特別選抜（募集人員 若干人） | | | | 計（募集人員 160人） | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 応募者 | 受験者 | 合格者 | 入学者 | 応募者 | 受験者 | 合格者 | 入学者 | 応募者 | 受験者 | 合格者 | 入学者 | 応募者 | 受験者 | 合格者 | 入学者 |
| 北海道 | | | | | (1) 1 | (1) 1 | | | | | | | (1) 1 | (1) 1 | | |
| 青森 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 岩手 | (6) 9 | (6) 9 | 1 | 1 | 3 | 3 | 2 | 1 | | | | | (6) 12 | (6) 12 | 3 | 2 |
| 宮城 | (1) 2 | (1) 2 | 1 | 1 | (1) 1 | (1) 1 | | | | | | | (2) 3 | (2) 3 | 1 | 1 |
| 秋田 | (3) 4 | (3) 4 | (1) 1 | (1) 1 | (3) 5 | (2) 4 | | | | | | | (6) 9 | (5) 8 | (1) 1 | (1) 1 |
| 山形 | (3) 3 | (3) 3 | | | (8) 14 | (7) 13 | (3) 5 | (2) 4 | | | | | (11) 17 | (10) 16 | (3) 5 | (2) 4 |
| 福島 | (5) 7 | (5) 6 | (1) 1 | (1) 1 | (13) 14 | (12) 13 | (6) 6 | (6) 6 | | | | | (18) 21 | (17) 19 | (7) 7 | (7) 7 |
| 茨城 | (2) 2 | (2) 2 | | | (2) 4 | (2) 4 | | | | | | | (4) 6 | (4) 6 | | |
| 栃木 | (7) 13 | (7) 13 | (2) 3 | (2) 3 | (11) 20 | (9) 16 | (3) 8 | (3) 6 | | | | | (18) 33 | (16) 29 | (5) 11 | (5) 9 |
| 群馬 | (6) 8 | (6) 8 | (1) 2 | (1) 2 | (16) 21 | (16) 21 | (2) 3 | (2) 3 | | | | | (22) 29 | (22) 29 | (3) 5 | (3) 5 |
| 埼玉 | (1) 3 | (1) 3 | (1) 2 | (1) 2 | 1 | 1 | | | | | | | (1) 4 | (1) 4 | (1) 2 | (1) 2 |
| 千葉 | (3) 4 | (3) 4 | 1 | 1 | (1) 5 | (1) 4 | 2 | 2 | | | | | (4) 9 | (4) 8 | 3 | 3 |
| 東京 | (2) 2 | (2) 2 | | | (2) 5 | (2) 5 | 1 | 1 | | | | | (4) 7 | (4) 7 | 1 | 1 |
| 神奈川 | (1) 2 | (1) 2 | | | (3) 7 | (2) 6 | 1 | 1 | | | | | (4) 9 | (3) 8 | 1 | 1 |
| 新潟 | (62) 88 | (62) 88 | (14) 17 | (14) 17 | (105) 184 | (92) 169 | (20) 32 | (19) 31 | | | | | (167) 272 | (154) 257 | (34) 49 | (33) 48 |
| 富山 | (17) 22 | (17) 22 | (1) 1 | (1) 1 | (30) 42 | (28) 40 | (11) 13 | (7) 9 | | | | | (47) 64 | (45) 62 | (12) 14 | (8) 10 |
| 石川 | (12) 19 | (12) 19 | (1) 2 | (1) 2 | (20) 31 | (18) 29 | (5) 8 | (5) 8 | | | | | (32) 50 | (30) 48 | (6) 10 | (6) 10 |
| 福井 | (10) 16 | (10) 15 | (2) 2 | (2) 2 | (12) 20 | (11) 19 | (5) 8 | (4) 7 | | | | | (22) 36 | (21) 34 | (7) 10 | (6) 9 |
| 山梨 | (2) 5 | (2) 5 | | | (4) 8 | (4) 8 | (1) 1 | (1) 1 | | | | | (6) 13 | (6) 13 | (1) 1 | (1) 1 |
| 長野 | (35) 48 | (35) 48 | (7) 13 | (7) 13 | (49) 83 | (43) 72 | (16) 28 | (14) 24 | | | | | (84) 131 | (78) 120 | (23) 41 | (21) 37 |
| 岐阜 | (1) 2 | (1) 2 | (1) 1 | (1) 1 | (2) 5 | (1) 4 | (1) 2 | (1) 2 | | | | | (3) 7 | (2) 6 | (2) 3 | (2) 3 |
| 静岡 | (4) 7 | (3) 6 | | | (8) 11 | (8) 11 | (2) 4 | (1) 2 | | | | | (12) 18 | (11) 17 | (2) 4 | (1) 2 |
| 愛知 | 2 | 1 | | | (9) 14 | (9) 14 | (4) 6 | (3) 5 | | | | | (9) 16 | (9) 15 | (4) 6 | (3) 5 |
| 三重 | 1 | 1 | | | 2 | 2 | 2 | 2 | | | | | 3 | 3 | 2 | 2 |
| 滋賀 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 京都 | | | | | (1) 1 | (1) 1 | | | | | | | (1) 1 | (1) 1 | | |
| 大阪 | | | | | 2 | 2 | 2 | | | | | | 2 | 2 | 2 | |
| 兵庫 | | | | | (2) 6 | (2) 6 | 1 | 1 | | | | | (2) 6 | (2) 6 | 1 | 1 |
| 奈良 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 和歌山 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 鳥取 | (1) 1 | (1) 1 | | | (1) 1 | (1) 1 | | | | | | | (2) 2 | (2) 2 | | |
| 島根 | (2) 4 | (2) 4 | | | (2) 2 | (2) 2 | | | | | | | (4) 6 | (4) 6 | | |
| 岡山 | (2) 3 | (2) 3 | | | | | | | | | | | (2) 3 | (2) 3 | | |
| 広島 | | | | | (1) 3 | (1) 3 | (1) 2 | 1 | | | | | (1) 3 | (1) 3 | (1) 2 | 1 |
| 山口 | | | | | (1) 2 | (1) 2 | | | | | | | (1) 2 | (1) 2 | | |
| 徳島 | 1 | 1 | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | |
| 香川 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 愛媛 | (1) 1 | (1) 1 | | | 2 | 2 | | | | | | | (1) 3 | (1) 3 | | |
| 高知 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 福岡 | | | | | (1) 1 | (1) 1 | | | | | | | (1) 1 | (1) 1 | | |
| 佐賀 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 長崎 | 1 | 1 | 1 | 1 | (2) 5 | (2) 4 | (1) 2 | (1) 2 | | | | | (2) 6 | (2) 5 | (1) 3 | (1) 3 |
| 熊本 | (1) 1 | (1) 1 | | | (1) 1 | (1) 1 | | | | | | | (2) 2 | (2) 2 | | |
| 大分 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 宮崎 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 鹿児島 | (1) 1 | (1) 1 | | | 2 | 2 | | | | | | | (1) 3 | (1) 3 | | |
| 沖縄 | (1) 1 | (1) 1 | (1) 1 | (1) 1 | (3) 3 | (2) 2 | | | | | | | (4) 4 | (3) 3 | (1) 1 | (1) 1 |
| その他 | | | | | 1 | 1 | | | | | | | 1 | 1 | | |
| 計 | (192) 283 | (191) 279 | (33) 50 | (33) 50 | (315) 533 | (283) 490 | (81) 139 | (69) 119 | 0 | − | − | − | (507) 816 | (474) 769 | (114) 189 | (102) 169 |

(注) 1 課程は，初等教育教員養成課程である。
2 ( )内は女子で内数である。

イ　高等学校卒業年度別

| 高等学校卒業年度 | 平成16年3月高校卒 | 平成15年3月高校卒 | 平成14年3月高校卒 | 平成13年3月高校卒 | 平成12年3月以前高校卒 | 外国の学校卒 | 専修学校高等課程卒 | その他（検定等） | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 応募者数 | (464)<br>710 | (42)<br>93 | (1)<br>6 | 3 | 1 | | | 3 | (507)<br>816 |
| 入学者数 | (82)<br>124 | (19)<br>40 | (1)<br>4 | | | | | 1 | (102)<br>169 |

（注）1（　）内は女子で内数である。

2「高校卒」には，中等教育学校卒業者を含む。

(2) 在学者数

① 大学院学校教育研究科

ア 専攻・コース別

平成15年5月1日現在

| 区分 | | | 1年次 | | | | | | 2年次 | | | | | | 合計 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 現職教員 | | 外国人留学生 | | その他 | 計 | 現職教員 | | 外国人留学生 | | その他 | 計 | 現職教員 | | 外国人留学生 | | その他 | 計 |
| 学校教育専攻 | 学習臨床コース | | 7 | 34 | 3 | 5 | 2 15 | 12 54 | 1 | 41 | 2 | 2 | 7 14 | 10 57 | 8 | 75 | 5 | 7 | 9 29 | 22 111 |
| | 発達臨床コース | | 7 | 34 | 1 | 1 | 4 13 | 12 48 | 4 | 29 | | | 8 22 | 12 51 | 11 | 63 | 1 | 1 | 12 35 | 24 99 |
| | 計 | | 14 | 68 | 4 | 6 | 6 28 | 24 102 | 5 | 70 | 2 | 2 | 15 36 | 22 108 | 19 | 138 | 6 | 8 | 21 64 | 46 210 |
| 幼児教育専攻 | | | | | | | 3 3 | 3 3 | | | | | 4 6 | 4 6 | | | | | 7 9 | 7 9 |
| 障害児教育専攻 | | | 4 | 5 | 1 | 1 | 7 15 | 12 21 | 4 | 11 | | 1 | 4 10 | 8 22 | 8 | 16 | 1 | 2 | 11 25 | 20 43 |
| 教科・領域教育専攻 | 言語系コース | 国語 | 2 | 8 | 1 | 1 | 5 8 | 8 17 | 2 | 11 | | | 4 9 | 6 20 | 4 | 19 | 1 | 1 | 9 17 | 14 37 |
| | | 英語 | 2 | 5 | | | 1 3 | 3 8 | | 5 | 1 | 1 | 2 4 | 3 10 | 2 | 10 | 1 | 1 | 3 7 | 6 18 |
| | 社会系コース | | 1 | 8 | 2 | 3 | 2 4 | 5 15 | 1 | 6 | 1 | 4 | 1 8 | 3 18 | 2 | 14 | 3 | 7 | 3 12 | 8 33 |
| | 自然系コース | 数学 | | 5 | | | 2 3 | 2 8 | | 4 | | | 5 | 9 | | 9 | | | 2 8 | 2 17 |
| | | 理科 | | 6 | | | 1 6 | 1 12 | | 2 | | | 1 4 | 1 6 | | 8 | | | 2 10 | 2 18 |
| | 芸術系コース | 音楽 | 1 | 3 | | | 3 3 | 4 6 | 2 | 5 | 2 | 2 | 7 9 | 11 16 | 3 | 8 | 2 | 2 | 10 12 | 15 22 |
| | | 美術 | 2 | 4 | | | 2 4 | 4 8 | | 2 | | | 5 12 | 5 14 | 2 | 6 | | | 7 16 | 9 22 |
| | 生活・健康系コース | 保健体育 | 1 | 11 | | | 3 6 | 4 17 | | 10 | | | 5 11 | 5 21 | 1 | 21 | | | 8 17 | 9 38 |
| | | 技術 | | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 3 | | 4 | | 3 | 2 | 9 | | 5 | 1 | 4 | 3 | 1 12 |
| | | 家庭 | 1 | 2 | | | 3 4 | 4 6 | | | 1 | 1 | 7 7 | 8 8 | 1 | 2 | 1 | 1 | 10 11 | 12 14 |
| | 計 | | 10 | 53 | 4 | 5 | 22 42 | 36 100 | 5 | 49 | 5 | 11 | 32 71 | 42 131 | 15 | 102 | 9 | 16 | 54 113 | 78 231 |
| 合計 | | | 28 | 126 | 9 | 12 | 38 88 | 75 226 | 14 | 130 | 7 | 14 | 55 123 | 76 267 | 42 | 256 | 16 | 26 | 93 211 | 151 493 |

注) ■は，女子で内数である。

イ　都道府県別

平成15年5月1日現在

| 区分 | 1年次 | 2年次 | 計 |
|---|---|---|---|
| 北海道 | 2 | 4 | 6 |
| 青　森 | 2 | 5 | 7 |
| 岩　手 | 4 | 11 | 15 |
| 宮　城 | 6 | 5 | 11 |
| 秋　田 | 3 | 3 | 6 |
| 山　形 | 3 | 1 | 4 |
| 福　島 | 4 | 4 | 8 |
| 茨　城 | 1 | 3 | 4 |
| 栃　木 | 2 | 3 | 5 |
| 群　馬 | 7 | 8 | 15 |
| 埼　玉 | 9 | 12 | 21 |
| 千　葉 | 6 | 10 | 16 |
| 東　京 | 20 | 24 | 44 |
| 神奈川 | 5 | 3 | 8 |
| 新　潟 | 72 | 88 | 160 |
| 富　山 | 3 | 4 | 7 |
| 石　川 | 13 | 13 | 26 |
| 福　井 | | | |
| 山　梨 | 7 | 2 | 9 |
| 長　野 | 18 | 16 | 34 |
| 岐　阜 | 3 | 5 | 8 |
| 静　岡 | 5 | 7 | 12 |
| 愛　知 | 7 | 5 | 12 |
| 三　重 | 3 | | 3 |
| 滋　賀 | | | |
| 京　都 | 1 | | 1 |
| 大　阪 | 1 | 4 | 5 |
| 兵　庫 | 1 | | 1 |
| 奈　良 | 1 | | 1 |
| 和歌山 | | | |
| 鳥　取 | | | |
| 島　根 | | | |
| 岡　山 | 1 | 2 | 3 |
| 広　島 | | 2 | 2 |
| 山　口 | | | |
| 徳　島 | | | |
| 香　川 | 1 | | 1 |
| 愛　媛 | | | |
| 高　知 | | | |
| 福　岡 | 1 | 3 | 4 |
| 佐　賀 | | 1 | 1 |
| 長　崎 | | 2 | 2 |
| 熊　本 | | | |
| 大　分 | | | |
| 宮　崎 | 1 | | 1 |
| 鹿児島 | | 1 | 1 |
| 沖　縄 | 1 | 2 | 3 |
| 外　国 | 12 | 14 | 26 |
| 計 | 226 | 267 | 493 |

ウ　現職教員の年齢・教職経験年数・学校種別

平成15年5月1日現在

| 年齢 | 教職経験年数 | | | | | 学校種別 | | | | | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 3～5年 | 6～10年 | 11～15年 | 16～20年 | 21年以上 | 幼稚園 | 小学校 | 中学校 | 高等学校 | 特殊学校 | |
| 24歳以下 | | | | | | | | | | | |
| 25 | | | | | | | | | | | |
| 26 | | | | | | | | | | | |
| 27 | 1 | | | | | | 1 | | | | 1 |
| 28 | 1 | | | | | | | 1 | | | 1 |
| 29 | 1 | 2 | | | | | | 1 | 1 | 1 | 3 |
| 30 | | 6 | | | | | 3 | 2 | | 1 | 6 |
| 31 | 1 | 5 | | | | | 1 | 4 | | 1 | 6 |
| 32 | | 4 | | | | | 2 | 1 | 1 | | 4 |
| 33 | | 5 | 6 | | | | 6 | 3 | | 2 | 11 |
| 34 | | 3 | 14 | | | | 7 | 7 | 3 | | 17 |
| 35 | | 1 | 23 | | | | 11 | 8 | 5 | | 24 |
| 36 | 1 | | 36 | | | | 18 | 14 | 3 | 2 | 37 |
| 37 | | 2 | 27 | | | | 10 | 15 | 4 | | 29 |
| 38 | 1 | 1 | 21 | 6 | | | 13 | 12 | 3 | 1 | 29 |
| 39 | | 1 | 6 | 18 | | | 10 | 9 | 5 | 1 | 25 |
| 40 | | | 5 | 17 | | | 10 | 9 | 2 | 1 | 22 |
| 41歳以上 | | | 5 | 26 | 10 | | 13 | 13 | 12 | 3 | 41 |
| 計 | 6 | 30 | 143 | 67 | 10 | | 105 | 99 | 39 | 13 | 256 |

## ② 学校教育学部

ア　専修・コース別

平成15年5月1日現在

| 区分 | | | 1年次 | | | 2年次 | | | 3年次 | | | 4年次 | | | 合計 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 |
| 学校教育専修 | 学習臨床コース | 教育方法臨床分野 | − | − | − | 1 | | 1 | 3 | 1 | 4 | 1 | 1 | 2 | 5 | 2 | 7 |
| | | 学習過程臨床分野 | − | − | − | 4 | 7 | 11 | 5 | 6 | 11 | 4 | 7 | 11 | 13 | 20 | 33 |
| | | 情報教育分野 | − | − | − | 2 | 1 | 3 | | | | 2 | 4 | 6 | 4 | 5 | 9 |
| | | 総合学習分野 | − | − | − | 1 | 4 | 5 | | 5 | 5 | 2 | 1 | 3 | 3 | 10 | 13 |
| | 発達臨床コース | 生徒指導総合分野 | − | − | − | 5 | 4 | 9 | 3 | 7 | 10 | 3 | 7 | 10 | 11 | 18 | 29 |
| | | 心理臨床分野 | − | − | − | 1 | 10 | 11 | 3 | 7 | 10 | 4 | 6 | 10 | 8 | 23 | 31 |
| | 学校教育専修 | | − | − | − | − | − | − | − | − | − | 2 | | 2 | 2 | | 2 |
| | 計 | | − | − | − | 14 | 26 | 40 | 14 | 26 | 40 | 18 | 26 | 44 | 46 | 78 | 124 |
| 幼児教育専修 | | | − | − | − | 1 | 13 | 14 | | 12 | 12 | 2 | 8 | 10 | 3 | 33 | 36 |
| 教科・領域教育専修 | 言語系コース | 国語分野 | − | − | − | 3 | 14 | 17 | 5 | 12 | 17 | 7 | 10 | 17 | 15 | 36 | 51 |
| | | 英語分野 | − | − | − | 2 | 9 | 11 | 2 | 8 | 10 | 4 | 5 | 9 | 8 | 22 | 30 |
| | 社会系コース | | − | − | − | 13 | 6 | 19 | 9 | 7 | 16 | 8 | 7 | 15 | 30 | 20 | 50 |
| | 自然系コース | 数学分野 | − | − | − | 8 | 5 | 13 | 3 | 10 | 13 | 13 | 3 | 16 | 24 | 18 | 42 |
| | | 理科分野 | − | − | − | 5 | 5 | 10 | 7 | 1 | 8 | 3 | 5 | 8 | 15 | 11 | 26 |
| | 芸術系コース | 音楽分野 | − | − | − | 2 | 10 | 12 | 4 | 9 | 13 | 2 | 12 | 14 | 8 | 31 | 39 |
| | | 美術分野 | − | − | − | 4 | 4 | 8 | 5 | 1 | 6 | 2 | 5 | 7 | 11 | 10 | 21 |
| | 生活・健康系コース | 保健体育分野 | − | − | − | 9 | 7 | 16 | 12 | 2 | 14 | 6 | 5 | 11 | 27 | 14 | 41 |
| | | 技術分野 | − | − | − | 6 | | 6 | 4 | | 4 | 6 | | 6 | 16 | | 16 |
| | | 家庭分野 | − | − | − | 1 | 5 | 6 | 2 | 7 | 9 | 4 | 8 | 12 | 7 | 20 | 27 |
| | 計 | | − | − | − | 53 | 65 | 118 | 53 | 57 | 110 | 55 | 60 | 115 | 161 | 182 | 343 |
| 合計 | | | 61 | 110 | 171 | 68 | 104 | 172 | 67 | 95 | 162 | 75 | 94 | 169 | 271 | 403 | 674 |

（注）　学校教育専修の６つの分野は，12年度からの区分である。

専修・コースへの所属は２年次からである。

イ　都道府県別

平成15年5月1日現在

| 区分 | 1年次 | | 2年次 | | 3年次 | | 4年次 | | 合計 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 人数 | 比率 | 人数 | 比率 | 人数 | 比率 | 人数 | 比率 | 人数 | 比率 |
| 北海道 | 1 | 0.6% | 3 | 1.7% | 1 | 0.6% | 2 | 1.2% | 7 | 1.0% |
| 青森 | 3 | 1.8% | 4 | 2.3% | 1 | 0.6% | 1 | 0.6% | 9 | 1.3% |
| 岩手 | 6 | 3.5% | 1 | 0.6% | 3 | 1.9% | 5 | 3.0% | 15 | 2.2% |
| 宮城 | 1 | 0.6% | 1 | 0.6% | 1 | 0.6% | | | 3 | 0.4% |
| 秋田 | 2 | 1.2% | | | 2 | 1.2% | 2 | 1.2% | 6 | 0.9% |
| 山形 | 6 | 3.5% | 4 | 2.3% | 5 | 3.1% | 1 | 0.6% | 16 | 2.4% |
| 福島 | 4 | 2.3% | 4 | 2.3% | 2 | 1.2% | 4 | 2.4% | 14 | 2.1% |
| 茨城 | 1 | 0.6% | 1 | 0.6% | 1 | 0.6% | | | 3 | 0.4% |
| 栃木 | 3 | 1.8% | 6 | 3.5% | 6 | 3.7% | 3 | 1.8% | 18 | 2.7% |
| 群馬 | 5 | 2.9% | 2 | 1.2% | 4 | 2.5% | 2 | 1.2% | 13 | 1.9% |
| 埼玉 | 2 | 1.2% | 2 | 1.2% | 1 | 0.6% | | | 5 | 0.7% |
| 千葉 | 1 | 0.6% | | | | | 3 | 1.8% | 4 | 0.6% |
| 東京 | 1 | 0.6% | 2 | 1.2% | | | 2 | 1.2% | 5 | 0.7% |
| 神奈川 | 1 | 0.6% | 1 | 0.6% | 2 | 1.2% | 1 | 0.6% | 5 | 0.7% |
| 新潟 | 35 | 20.5% | 42 | 24.4% | 32 | 19.8% | 42 | 24.9% | 151 | 22.4% |
| 富山 | 12 | 7.0% | 17 | 9.9% | 17 | 10.5% | 18 | 10.7% | 64 | 9.5% |
| 石川 | 19 | 11.1% | 19 | 11.0% | 18 | 11.1% | 16 | 9.5% | 72 | 10.7% |
| 福井 | 11 | 6.4% | 7 | 4.1% | 13 | 8.0% | 10 | 5.9% | 41 | 6.1% |
| 山梨 | 1 | 0.6% | 2 | 1.2% | 1 | 0.6% | 1 | 0.6% | 5 | 0.7% |
| 長野 | 17 | 9.9% | 17 | 9.9% | 16 | 9.9% | 22 | 13.0% | 72 | 10.7% |
| 岐阜 | 4 | 2.3% | 5 | 2.9% | 2 | 1.2% | | | 11 | 1.6% |
| 静岡 | 6 | 3.5% | 4 | 2.3% | 5 | 3.1% | 2 | 1.2% | 17 | 2.5% |
| 愛知 | 10 | 5.8% | 5 | 2.9% | 7 | 4.3% | 10 | 5.9% | 32 | 4.7% |
| 三重 | 2 | 1.2% | 3 | 1.7% | 3 | 1.9% | 2 | 1.2% | 10 | 1.5% |
| 滋賀 | 4 | 2.3% | 2 | 1.2% | 2 | 1.2% | 1 | 0.6% | 9 | 1.3% |
| 京都 | 2 | 1.2% | 3 | 1.7% | 1 | 0.6% | | | 6 | 0.9% |
| 大阪 | | | | | | | 1 | 0.6% | 1 | 0.1% |
| 兵庫 | | | 5 | 2.9% | 2 | 1.2% | | | 7 | 1.0% |
| 奈良 | | | | | | | | | | |
| 和歌山 | 1 | 0.6% | | | 1 | 0.6% | | | 2 | 0.3% |
| 鳥取 | 1 | 0.6% | | | | | 1 | 0.6% | 2 | 0.3% |
| 島根 | 1 | 0.6% | 2 | 1.2% | 1 | 0.6% | 1 | 0.6% | 5 | 0.7% |
| 岡山 | 2 | 1.2% | | | 2 | 1.2% | 1 | 0.6% | 5 | 0.7% |
| 広島 | 3 | 1.8% | 1 | 0.6% | | | 2 | 1.2% | 6 | 0.9% |
| 山口 | | | 1 | 0.6% | | | 2 | 1.2% | 3 | 0.4% |
| 徳島 | | | 1 | 0.6% | 1 | 0.6% | | | 2 | 0.3% |
| 香川 | | | | | | | | | | |
| 愛媛 | | | | | | | | | | |
| 高知 | | | 1 | 0.6% | | | | | 1 | 0.1% |
| 福岡 | | | | | 1 | 0.6% | 2 | 1.2% | 3 | 0.4% |
| 佐賀 | | | | | | | | | | |
| 長崎 | 2 | 1.2% | 1 | 0.6% | 4 | 2.5% | 1 | 0.6% | 8 | 1.2% |
| 熊本 | | | | | 1 | 0.6% | 1 | 0.6% | 2 | 0.3% |
| 大分 | | | | | 1 | 0.6% | 1 | 0.6% | 2 | 0.3% |
| 宮崎 | 1 | 0.6% | 1 | 0.6% | 2 | 1.2% | 1 | 0.6% | 5 | 0.7% |
| 鹿児島 | | | 1 | 0.6% | | | 3 | 1.8% | 4 | 0.6% |
| 沖縄 | | | | | | | 2 | 1.2% | 2 | 0.3% |
| 外国 | | | 1 | 0.6% | | | | | 1 | 0.1% |
| 合計 | 171 | － | 172 | － | 162 | － | 169 | － | 674 | － |

（注）比率は，小数点第２位を四捨五入で算出したものである。

### ③ 科目等履修生等

ア　科目等履修生

平成15年5月1日現在

| 区　　分 | 男 | 女 | 計 |
|---|---|---|---|
| 大学院学校教育研究科 | | 2 | 2 |
| 学 校 教 育 学 部 | 20 | 7 | 27 |
| 計 | 20 | 9 | 29 |

イ　特別聴講学生

平成15年5月1日現在

| 男 | 女 | 計 |
|---|---|---|
| 1 | | 1 |
| | | |
| 1 | | 1 |

ウ　研究生

平成15年5月1日現在

| 区　　分 | 男 | 女 | 計 |
|---|---|---|---|
| 大学院学校教育研究科 | 16 | 15 | 31 |

エ　特別研究学生

平成15年5月1日現在

| 男 | 女 | 計 |
|---|---|---|
| | | 0 |

### ④ 外国人留学生

ア　国・地域別

平成15年5月1日現在

| 国・地域名 | 大学院(修士課程) | | 学部学生 | | 特別聴講学生 | | 研究生 | | 合　　計 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 国費 | 私費 | 国費 | 私費 | 国費 | 私費 | 国費 | 私費 | 国費 | 私費 | 計 |
| 中　　国 | 1 | 19 (1) | | 1 | | | | 10 | 1 | 30 (1) | 31 (1) |
| 台　　湾 | | 2 | | | | | | | | 2 | 2 |
| 韓　　国 | | 2 | | | | | 1 | 1 | 1 | 3 | 4 |
| マレイシア | 1 | | | | | | | | 1 | | 1 |
| インドネシア | | 1 | | | | | 1 | | 1 | 1 | 2 |
| タ　　イ | | | | | | | 1 | | 1 | | 1 |
| ミャンマー | | | | | | | 1 | | 1 | | 1 |
| サウジアラビア | | | | | | | 1 | | 1 | | 1 |
| アメリカ合衆国 | | | | | | 1 | | | | 1 | 1 |
| ブ ラ ジ ル | 1 | | | | | | | | 1 | | 1 |
| 計 | 3 | 24 (1) | | 1 | | 1 | 5 | 11 | 8 | 37 (1) | 45 (1) |

※（ ）内は兵庫教育大学大学院連合学校教育研究科(博士課程)在籍者で内数。

イ　在籍者一覧

| 国費・私費の別 | 国・地域名 | 氏名 | 性別 | 在籍身分 | 在籍期間 | 所属講座等 | 指導教官<br>クラス担当教官 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 私費 | 中国 | 趙　斯琴<br>ちょう・しきん | 女 | 大学院２年 | 平成 12.4 - 平成 16.3 | 学習臨床 | 山崎貞登　助教授 |
| 私費 | 中国 | 門和沙日娜<br>むんけさりな | 女 | 大学院２年 | 平成 13.4 - 平成 16.3 | 学習臨床 | 二谷貞夫　教授 |
| 私費 | ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ | Lalan Erlani<br>ララン，エルラニ | 男 | 大学院２年 | 平成 14.4 - 平成 16.3 | 障害児教育 | 河合　康　助教授 |
| 私費 | 中国 | 季　倩<br>き・　せん | 女 | 大学院２年 | 平成 14.4 - 平成 16.3 | 英語 | 平野絹枝　教授 |
| 私費 | 中国 | 陳　廷棟<br>ちん・ていとう | 男 | 大学院２年 | 平成 14.4 - 平成 16.3 | 社会系教育 | 鈴木敏紀　教授 |
| 私費 | 中国 | 哈斯格日楽<br>はすげりれ | 女 | 大学院２年 | 平成 13.4 - 平成 16.3 | 社会系教育 | 茨木智志　助教授 |
| 私費 | 中国 | 李　林<br>り・　りん | 男 | 大学院２年 | 平成 14.4 - 平成 16.3 | 社会系教育 | 下里俊行　助教授 |
| 私費 | 中国 | 李　忠権<br>り・　ちゅうけん | 男 | 大学院２年 | 平成 13.4 - 平成 16.3 | 社会系教育 | 下里俊行　助教授 |
| 国費<br>（研究留学生） | ブラジル | BISPO,IEDA<br>ビスポ・イエダ | 女 | 大学院２年 | 平成 12.10 - 平成 16.3 | 音楽 | 茂手木潔子　教授 |
| 私費 | 中国 | 包　玉梅<br>ぼう・　ゆうめい | 女 | 大学院２年 | 平成 14.4 - 平成 16.3 | 音楽 | 植村幸生　助教授 |
| 私費 | 中国 | 王　承<br>おう・　しょう | 男 | 大学院２年 | 平成 13.4 - 平成 16.3 | 技術 | 大森康正　助教授 |
| 私費 | 中国 | 趙　志松<br>ちょう・ししょう | 男 | 大学院２年 | 平成 14.4 - 平成 16.3 | 技術 | 黎　子椰　助教授 |
| 私費 | 中国 | 李　文勝<br>り・　ぶんしょう | 男 | 大学院２年 | 平成 13.4 - 平成 16.3 | 技術 | 川島章弘　教授 |
| 国費<br>（研究留学生） | マレイシア | LOW,SOO PENG<br>ロウ，スー　ピン | 女 | 大学院２年 | 平成 13.4 - 平成 16.3 | 家庭 | 細江容子　助教授 |
| 私費 | 中国 | 烏日楽瑪<br>うるるま | 女 | 大学院１年 | 平成 14.4 - 平成 17.3 | 学習臨床 | 大悟法　滋　教授 |
| 私費 | 韓国 | 申　明宇<br>シン・　ミョンウ | 男 | 大学院１年 | 平成 15.4 - 平成 17.3 | 学習臨床 | 和井田清司　助教授 |
| 私費 | 韓国 | 趙　潤児<br>チョウ・ユナ | 女 | 大学院１年 | 平成 14.4 - 平成 17.3 | 学習臨床 | 田島弘司　助教授 |
| 私費 | 中国 | 布　和<br>ぶ・　ほ | 男 | 大学院１年 | 平成 14.4 - 平成 17.3 | 学習臨床 | 中野靖夫　教授 |
| 私費 | 台湾 | 林　紜卉<br>りん・うんかい | 女 | 大学院１年 | 平成 14.4 - 平成 17.3 | 学習臨床 | 松本　修　助教授 |
| 私費 | 中国 | 陳　小云<br>ちん・しょううん | 女 | 大学院１年 | 平成 14.4 - 平成 17.3 | 生徒指導総合 | 杵淵俊夫　教授 |
| 国費（哈爾濱協定）<br>（研究留学生） | 中国 | 唐　鶴英<br>とう・　かくえい | 女 | 大学院１年 | 平成 14.10 - 平成 17.3 | 障害児教育 | 我妻敏博　助教授 |
| 私費 | 台湾 | 呂　暁雁<br>ろ・　ぎょうがん | 女 | 大学院１年 | 平成 14.4 - 平成 17.3 | 国語 | 小埜裕二　助教授 |
| 私費 | 中国 | 王　鑫<br>おう・　しん | 女 | 大学院１年 | 平成 15.4 - 平成 17.3 | 社会系教育 | 赤羽孝之　教授 |
| 私費 | 中国 | 崔　莉<br>さい・　り | 女 | 大学院１年 | 平成 14.4 - 平成 17.3 | 社会系教育 | 鈴木敏紀　教授 |
| 私費 | 中国 | 陳　毅夫<br>ちん・　こくふ | 男 | 大学院１年 | 平成 14.4 - 平成 17.3 | 社会系教育 | 鈴木敏紀　教授 |
| 私費 | 中国 | 劉　燁<br>りゅう・　えん | 女 | 大学院１年 | 平成 13.4 - 平成 17.3 | 技術 | 平田晴路　助教授 |
| 私費 | 中国 | 孫　欣<br>そん・　しん | 女 | 学部２年 | 平成 14.4 - 平成 18.3 | 生徒指導 | 大前敦巳　助教授 |
| 私費 | 中国 | 周　志誠<br>しゅう・しせい | 男 | 研究生 | 平成 13.10 - 平成 15.9 | 生徒指導総合 | 杵淵俊夫　教授 |

| 国費・私費の別 | 国・地域名 | 氏名 | 性別 | 在籍身分 | 在籍期間 | 所属講座等 | 指導教官<br>クラス担当教官 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 私費 | 中国 | 額尔敦木靖<br>えるどむと | 男 | 研究生 | 平成 14.4 - 平成 16.3 | 学習臨床 | 中野靖夫　教授 |
| 私費 | 中国 | 包　格日楽吐<br>ぼう・げりらと | 男 | 研究生 | 平成 14.4 - 平成 15.3 | 美術 | 山ノ下堅一　教授 |
| 私費<br>(哈爾濱協定) | 中国 | 金　　淑　子<br>きむ・　よしこ | 女 | 研究生 | 平成 14.10 - 平成 15.9 | 社会系教育 | 鈴木敏紀　教授 |
| 私費 | 中国 | 金　　銀　煥<br>じん・　いんほあん | 男 | 研究生 | 平成 14.10 - 平成 15.9 | 国語 | 高本條治　助教授 |
| 私費 | 韓国 | 尹　　貞　蘭<br>ユン・　チョンラン | 女 | 研究生 | 平成 14.10 - 平成 15.9 | 国語 | 小埜裕二　助教授 |
| 国費<br>(研究留学生) | 韓国 | 朴　　宰　用<br>パク・　チェヨン | 男 | 研究生 | 平成 14.10 - 平成 16.3 | 学習臨床 | 二谷貞夫　教授 |
| 私費 | 中国 | 岳　　立　偉<br>がく・　りつい | 女 | 研究生 | 平成 12.4 - 平成 16.3 | 幼児教育 | 南館忠智　教授 |
| 私費 | 中国 | 茹　　宾<br>るー　　びん | 男 | 研究生 | 平成 15.4 - 平成 16.3 | 音楽 | 茂手木潔子　教授 |
| 私費 | 中国 | 劉　　婷<br>りゅう・　らん | 女 | 研究生 | 平成 15.4 - 平成 16.3 | 社会系教育 | 鈴木敏紀　教授 |
| 私費 | 中国 | 崔　　曙　日<br>さい・　しょにち | 男 | 研究生 | 平成 15.4 - 平成 16.3 | 国語 | 高本條治　助教授 |
| 私費 | 中国 | 陳　　冬　青<br>ちん・　とうせい | 女 | 研究生 | 平成 15.4 - 平成 16.3 | 社会系教育 | 河西英通　助教授 |
| 国費<br>(教員研修留学生) | インドネシア | Muhamad Said,<br>Bahtiar<br>ﾑﾊﾏﾄﾞ ｻｲﾄﾞ・<br>ﾊﾞﾃｨｱｰﾙ | 男 | 研究生 | 平成 15.4 - 平成 16.3 | 学習臨床 | 和井田清司 助教授 |
| 国費<br>(教員研修留学生) | タイ | Phuttanathian,<br>Sureerat<br>ﾊﾟｯﾀﾅﾃｨｱﾝ・ｽﾘﾗｯﾄ | 女 | 研究生 | 平成 15.4 - 平成 16.3 | 生徒指導総合 | 荻原克男　助教授 |
| 国費<br>(教員研修留学生) | ミャンマー | Cho, San Lwin<br>ﾁｮ･ｻﾝ ﾙｨﾝ | 女 | 研究生 | 平成 15.4 - 平成 16.3 | 社会系教育 | 志村　喬　講師 |
| 国費<br>(教員研修留学生) | サウディアラビア | Samarkandi, Nabeel<br>Shamsuddin<br>ｻﾏﾙｶﾝﾃﾞｨ･ﾅﾋﾞｰﾙ<br>ｼｬﾑｽﾃﾞｨｰﾝ | 男 | 研究生 | 平成 15.4 - 平成 16.3 | 英語 | 大場浩正　助教授 |
| 私費<br>(短期留学推進制度) | アメリカ | Jon Craig Barch<br>ｼﾞｮﾝ ｸﾚｲｸﾞ ﾊﾞｰﾁ | 男 | 特別聴講学生 | 平成 14.10 - 平成 15.9 | 理科 | 庭野義英　助教授 |

## 兵庫教育大学大学院連合学校教育研究科（博士課程）学生

| 国費・私費 | 国籍 | 氏名 | 性別 | 在籍身分 | 在籍期間 | 所属講座等 | 指導教官 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 私費 | 中国 | 牛　　志　奎<br>ぎゅう・しかい | 男 | 大学院３年 | 平成 8.11 - 平成 16.3 | 学校教育<br>実践学 | 若井弥一　教授 |

※　本表における氏名の表記は，文部科学省の国費外国人留学生申請書の様式に準じ，姓，名（ミドルネーム）の順に統一する。

## (3) 修了者・卒業者数

### ① 大学院学校教育研究科（専攻・コース別）

平成16年3月31日現在

| 区分 | | | 昭和59年度～平成14年度 | | | | | | | | 平成15年度 | | | | | | | | 累計 | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 現教職員 | | 外国人留学生 | | その他 | | 計 | | 現教職員 | | 外国人留学生 | | その他 | | 計 | | 現教職員 | | 外国人留学生 | | その他 | | 計 | |
| 学校教育専攻 | 教育基礎コース | | 18 | 141 | 4 | 5 | 25 | 49 | 47 | 195 | — | — | — | — | — | — | — | — | 18 | 141 | 4 | 5 | 25 | 49 | 47 | 195 |
| | 教育経営コース | | 10 | 133 | 4 | 8 | 7 | 37 | 21 | 178 | — | — | — | — | — | — | — | — | 10 | 133 | 4 | 8 | 7 | 37 | 21 | 178 |
| | 教育方法コース | | 14 | 295 | | 1 | 5 | 11 | 19 | 307 | — | — | — | — | — | — | — | — | 14 | 295 | | 1 | 5 | 11 | 19 | 307 |
| | 生徒指導コース | | 14 | 241 | | | 10 | 16 | 24 | 257 | — | — | — | — | — | — | — | — | 14 | 241 | | | 10 | 16 | 24 | 257 |
| | 学習臨床コース | | 11 | 68 | 2 | 2 | 3 | 18 | 16 | 88 | 1 | 41 | 2 | 2 | 6 | 12 | 9 | 55 | 12 | 109 | 4 | 4 | 9 | 30 | 25 | 143 |
| | 発達臨床コース | | 13 | 56 | | | 5 | 10 | 18 | 66 | 4 | 28 | | | 7 | 21 | 11 | 49 | 17 | 84 | | | 12 | 31 | 29 | 115 |
| | 計 | | 80 | 934 | 10 | 16 | 55 | 141 | 145 | 1,091 | 5 | 69 | 2 | 2 | 13 | 33 | 20 | 104 | 85 | 1,003 | 12 | 18 | 68 | 174 | 165 | 1,195 |
| 幼児教育専攻 | | | 6 | 15 | 5 | 7 | 51 | 90 | 62 | 112 | | | | | 3 | 5 | 3 | 5 | 6 | 15 | 5 | 7 | 54 | 95 | 65 | 117 |
| 障害児教育専攻 | | | 30 | 191 | 1 | 1 | 104 | 204 | 135 | 396 | 4 | 10 | | 1 | 3 | 9 | 7 | 20 | 34 | 201 | 1 | 2 | 107 | 213 | 142 | 416 |
| 教科・領域教育専攻 | 言語系コース | 国語 | 30 | 172 | 6 | 12 | 52 | 94 | 88 | 278 | 2 | 11 | | | 3 | 8 | 5 | 19 | 32 | 183 | 6 | 12 | 55 | 102 | 93 | 297 |
| | | 英語 | 10 | 83 | 1 | 1 | 28 | 63 | 39 | 147 | | 5 | 1 | 1 | 2 | 4 | 3 | 10 | 10 | 88 | 2 | 2 | 30 | 67 | 42 | 157 |
| | 社会系コース | | 11 | 267 | 6 | 9 | 22 | 124 | 39 | 400 | 1 | 6 | 1 | 4 | 1 | 6 | 3 | 16 | 12 | 273 | 7 | 13 | 23 | 130 | 42 | 416 |
| | 自然系コース | 数学 | 9 | 170 | | 1 | 14 | 53 | 23 | 224 | | 4 | | | | 5 | | 9 | 9 | 174 | | 1 | 14 | 58 | 23 | 233 |
| | | 理科 | 9 | 249 | | 1 | 12 | 69 | 21 | 319 | | 2 | | | 1 | 4 | 1 | 6 | 9 | 251 | | 1 | 13 | 73 | 22 | 325 |
| | 芸術系コース | 音楽 | 40 | 88 | 1 | 3 | 81 | 123 | 122 | 214 | 2 | 5 | 2 | 2 | 7 | 8 | 11 | 15 | 42 | 93 | 3 | 5 | 88 | 131 | 133 | 229 |
| | | 美術 | 13 | 95 | 14 | 25 | 75 | 158 | 102 | 278 | | 2 | | | 5 | 12 | 5 | 14 | 13 | 97 | 14 | 25 | 80 | 170 | 107 | 292 |
| | 生活・健康系コース | 保健体育 | 15 | 215 | | 4 | 28 | 103 | 43 | 322 | | 10 | | | 4 | 9 | 4 | 19 | 15 | 225 | | 4 | 32 | 112 | 47 | 341 |
| | | 技術 | 1 | 62 | 6 | 14 | 2 | 37 | 9 | 113 | | 4 | | 3 | | 2 | | 9 | 1 | 66 | 6 | 17 | 2 | 39 | 9 | 122 |
| | | 家庭 | 18 | 18 | | | 62 | 68 | 80 | 86 | | | 1 | 1 | 5 | 5 | 6 | 6 | 18 | 18 | 1 | 1 | 67 | 73 | 86 | 92 |
| | 計 | | 156 | 1,419 | 34 | 70 | 376 | 892 | 566 | 2,381 | 5 | 49 | 5 | 11 | 28 | 63 | 38 | 123 | 161 | 1,468 | 39 | 81 | 404 | 955 | 604 | 2,504 |
| 合計 | | | 272 | 2,559 | 50 | 94 | 586 | 1,327 | 908 | 3,980 | 14 | 128 | 7 | 14 | 47 | 110 | 68 | 252 | 286 | 2,687 | 57 | 108 | 633 | 1,437 | 976 | 4,232 |

（注）網掛けの部分（各欄左側の斜体数字）は，女子で内数。

② 学校教育学部（専修・コース別）

平成16年3月31日現在

| 区分 | | | 昭和59年度～平成14年度 | | | 平成15年度 | | | 累計 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 |
| 学校教育専修 | 学習臨床コース | 教育方法臨床 | | | | | 1 | 1 | | 1 | 1 |
| | | 学習過程臨床 | | | | 4 | 7 | 11 | 4 | 7 | 11 |
| | | 情報教育 | | | | 2 | 4 | 6 | 2 | 4 | 6 |
| | | 総合学習 | | | | 2 | 1 | 3 | 2 | 1 | 3 |
| | 発達臨床コース | 生徒指導 | | | | 3 | 6 | 9 | 3 | 6 | 9 |
| | | 心理臨床 | | | | 4 | 6 | 10 | 4 | 6 | 10 |
| | 学校教育専修 | | 207 | 334 | 541 | 1 | | 1 | 208 | 334 | 542 |
| | 計 | | 207 | 334 | 541 | 16 | 25 | 41 | 223 | 359 | 582 |
| 幼児教育専修 | | | 47 | (2) 198 | (2) 245 | 2 | 8 | 10 | 49 | (2) 206 | (2) 255 |
| 教科・領域教育専修 | 言語系コース | 国語 | 115 | (2) 334 | (2) 449 | 7 | 9 | 16 | 122 | (2) 343 | (2) 465 |
| | | 英語 | | | | 4 | 5 | 9 | 4 | 5 | 9 |
| | 社会系コース | | (1) 271 | 194 | (1) 465 | 8 | 7 | 15 | (1) 279 | 201 | (1) 480 |
| | 自然系コース | 数学 | 209 | 224 | 433 | 12 | 3 | 15 | 221 | 227 | 448 |
| | | 理科 | 197 | 196 | 393 | 3 | 5 | 8 | 200 | 201 | 401 |
| | 芸術系コース | 音楽 | 65 | 259 | 324 | 2 | 12 | 14 | 67 | 271 | 338 |
| | | 美術 | 95 | (2) 155 | (2) 250 | 2 | 5 | 7 | 97 | (2) 160 | (2) 257 |
| | 生活・健康系コース | 保健体育 | 202 | 232 | 434 | 6 | 5 | 11 | 208 | 237 | 445 |
| | | 技術 | | | | 6 | | 6 | 6 | | 6 |
| | | 家庭 | 8 | 232 | 240 | 4 | 8 | 12 | 12 | 240 | 252 |
| | 計 | | (1) 1,162 | (4) 1,826 | (5) 2,988 | 54 | 59 | 113 | (1) 1,216 | (4) 1,885 | (5) 3,101 |
| 合計 | | | (1) 1,416 | (6) 2,358 | (7) 3,774 | 72 | 92 | 164 | (1) 1,488 | (6) 2,450 | (7) 3,938 |

（注）（ ）内は外国人留学生で内数である。

学校教育専修の６つの分野並びに教科・領域教育専修の英語及び技術分野は，平成12年度入学者からの区分である。

## (4) 休学者・退学者数

### ① 大学院学校教育研究科（専攻・コース別）

| 区分 | | | 休学者 | | | | | | | | | | | | 退学者 | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 1年次 | | | | 2年次 | | | | 計 | | | | 1年次 | | | | 2年次 | | | | 計 | | | |
| | | | 現職教員 | 外国人留学生 | その他 | 計 | 現職教員 | 外国人留学生 | その他 | 計 | 現職教員 | 外国人留学生 | その他 | 計 | 現職教員 | 外国人留学生 | その他 | 計 | 現職教員 | 外国人留学生 | その他 | 計 | 現職教員 | 外国人留学生 | その他 | 計 |
| 学校教育専攻 | 学習臨床コース | | | | | | 1 | | (1)1 | (1)2 | 1 | | (1)1 | (1)2 | | | | | | | | | | | | |
| | 発達臨床コース | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | 2 | 1 | | | 1 | 1 | | 2 | 3 |
| | 計 | | | | | | 1 | | (1)1 | (1)2 | 1 | | (1)1 | (1)2 | | | 2 | 2 | 1 | | | 1 | 1 | | 2 | 3 |
| 幼児教育専攻 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 障害児教育専攻 | | | | | | | 1 | | | 1 | 1 | | | 1 | | | | | 1 | | | 1 | 1 | | | 1 |
| 教科・領域教育専攻 | 言語系コース | 国語 | | | | | | | (1)1 | (1)1 | | | (1)1 | (1)1 | | | | | | | | | | | | |
| | | 英語 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 社会系コース | | | | 1 | 1 | | | 1 | 1 | | | 2 | 2 | | | | | | | | | | | | |
| | 自然系コース | 数学 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 理科 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 芸術系コース | 音楽 | | | | | | | 1 | 1 | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | |
| | | 美術 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 生活・健康系コース | 保健体育 | | | | | | | (1)3 | (1)3 | | | (1)3 | (1)3 | | | (1)2 | (1)2 | | | (1)1 | (1)1 | | | (2)3 | (2)3 |
| | | 技術 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 家庭 | | | | | | | (2)2 | (2)2 | | | (2)2 | (2)2 | | | (1)2 | (1)2 | | | | | | | (1)2 | (1)2 |
| | 計 | | | | 1 | 1 | | | (4)8 | (4)8 | | | (4)9 | (4)9 | | | (2)4 | (2)4 | | | (1)1 | (1)1 | | | (3)5 | (3)5 |
| 合計 | | | | | 1 | 1 | 2 | | (5)9 | (5)11 | 2 | | (5)10 | (5)12 | | | (2)6 | (2)6 | 2 | | (1)1 | (1)3 | 2 | | (3)7 | (3)9 |

（注）（　）は女子で内数である。

## ② 学校教育学部（専修・コース別）

| 区分 | | | 1年次 | | | 2年次 | | | 3年次 | | | 4年次 | | | 合計 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 |
| 学校教育専修 | 学習臨床コース | 教育方法 | − | − | − | | | | | | | | | | | | |
| | | 臨床分野 | − | − | − | | | | | | | | | | | | |
| | | 学習過程 | − | − | − | | | | | | | | | | | | |
| | | 臨床分野 | − | − | − | | | | | | | | | | | | |
| | | 情報教育 | − | − | − | | | | | | | | | | | | |
| | | 分野 | − | − | − | | | | | | | | | | | | |
| | | 総合学習 | − | − | − | | | | | | | | | | | | |
| | | 分野 | − | − | − | | | | | | | | | | | | |
| | 発達臨床コース | 生徒指導 | − | − | − | | | | | | | | 1 | 1 | | 1 | 1 |
| | | 総合分野 | − | − | − | | | | | | | | | | | | |
| | | 心理臨床 | − | − | − | | | | | | | | | | | | |
| | | 分野 | − | − | − | | | | | | | | | | | | |
| | 学校教育専修 | | − | − | − | − | − | − | − | − | − | 1 | | 1 | 1 | | 1 |
| | | | − | − | − | − | − | − | − | − | − | 1 | | 1 | 1 | | 1 |
| | 計 | | − | − | − | | | | | | | 1 | 1 | 2 | 1 | 1 | 2 |
| | | | − | − | − | | | | | | | 1 | | 1 | 1 | | 1 |
| 幼児教育専修 | | | − | − | − | | | | | | | | | | | | |
| | | | − | − | − | | | | | | | | | | | | |
| 教科・領域教育専修 | 言語系コース | 国語分野 | − | − | − | | | | | | | | 1 | 1 | | 1 | 1 |
| | | | − | − | − | | | | | | | | | | | | |
| | | 英語分野 | − | − | − | | | | | 1 | 1 | | | | | 1 | 1 |
| | | | − | − | − | | | | | | | | | | | | |
| | 社会系コース | | − | − | − | | | | | | | | | | | | |
| | | | − | − | − | | | | | | | | | | | | |
| | 自然系コース | 数学分野 | − | − | − | | | | | | | | | | | | |
| | | | − | − | − | | | | | | | 1 | | 1 | 1 | | 1 |
| | | 理科分野 | − | − | − | | | | | | | | | | | | |
| | | | − | − | − | | | | | | | | | | | | |
| | 芸術系コース | 音楽分野 | − | − | − | | | | | | | | 1 | 1 | | 1 | 1 |
| | | | − | − | − | | | | | | | | | | | | |
| | | 美術分野 | − | − | − | | | | | | | | 1 | 1 | | 1 | 1 |
| | | | − | − | − | | 1 | 1 | 1 | | 1 | | | | 1 | 1 | 2 |
| | 生活・健康系コース | 保健体育 | − | − | − | | | | | | | | | | | | |
| | | 分野 | − | − | − | | | | | | | | | | | | |
| | | 技術分野 | − | − | − | | | | | | | | | | | | |
| | | | − | − | − | | | | | | | | | | | | |
| | | 家庭分野 | − | − | − | | | | | | | | | | | | |
| | | | − | − | − | | | | | | | | | | | | |
| | 計 | | − | − | − | | | | | 1 | 1 | | 3 | 3 | | 4 | 4 |
| | | | − | − | − | | 1 | 1 | 1 | | 1 | 1 | | 1 | 2 | 1 | 3 |
| 合計 | | | 1 | 1 | 2 | | | | | 1 | 1 | 1 | 4 | 5 | 2 | 6 | 8 |
| | | | | 1 | 1 | | 1 | 1 | 1 | | 1 | 2 | | 2 | 3 | 2 | 5 |

（注）　上段は休学者数，下段は退学者数である。
学校教育専修の６つの分野並びに教科・領域教育専修の英語及び技術分野は，平成12年度入学者からの区分である。
専修・コースへの所属は２年次からである。

## (5) 各教員の担当授業科目・授業時間数一覧

〈学習臨床講座〉

| 職名 | 氏名 | 授業科目名（△印は大学院授業科目を示す。） | 毎週授業時間数 講義 | 演習 | 実験実習実技 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 教授 | 二谷貞夫 | 総合学習と体験学習 | 0.33 | | | 0.33 |
| | | 生活科体験演習 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | 生活科と総合学習 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 総合学習カリキュラム開発論 | 0.33 | | | 0.33 |
| | | 国際教育概論 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 総合学習セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「総合的学習」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 総合学習セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「総合的学習」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「総合的学習」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「総合的学習」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 総合学習原論 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | △ 国際理解教育特論 | 0.13 | | | 0.13 |
| | | △ 総合学習基礎研究セミナーⅠ | | 1 | | 1 |
| | | △ 総合学習基礎研究セミナーⅡ | | 1 | | 1 |
| | | △ 総合学習応用研究セミナーⅠ | | 1 | | 1 |
| | | △ 総合学習応用研究セミナーⅡ | | 1 | | 1 |
| | | 計 | 2.29 | 8.83 | | 11.12 |
| 教授 | 大悟法滋 | 体験学習 | | | 0.18 | 0.18 |
| | | ボランティア体験 | | | 0.33 | 0.33 |
| | | 野外体験演習 | | 1 | | 1 |
| | | 地域社会環境と学校 | 1 | | | 1 |
| | | 博物館概論 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 地域環境教育演習 | | 1 | | 1 |
| | | 形態学 | 1 | | | 1 |
| | | 総合学習セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「総合的学習」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 博物館実習 | | | 1.5 | 1.5 |
| | | 学習指導と学校図書館 | 0.25 | | | 0.25 |
| | | 総合学習セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「総合的学習」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「総合的学習」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「総合的学習」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 総合的学習特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 地域環境学習特論 | 0.33 | | | 0.33 |
| | | △ 地域環境学習演習 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | △ 総合学習基礎研究セミナーⅠ | | 1 | | 1 |
| | | △ 総合学習基礎研究セミナーⅡ | | 1 | | 1 |
| | | △ 総合学習応用研究セミナーⅠ | | 1 | | 1 |
| | | △ 総合学習応用研究セミナーⅡ | | 1 | | 1 |
| | | △ 植物学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 形態学実験 | | | 1 | 1 |
| | | 計 | 5.08 | 10.83 | 3.01 | 18.92 |
| 教授 | 戸北凱惟 | 学習場面観察基礎 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 理科教材開発論 | 1 | | | 1 |
| | | 教育臨床演習Ⅰ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 学習臨床ｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞ基礎Ⅰ | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 臨床的学習過程・開発セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「学習過程臨床」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 教育臨床演習Ⅱ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 学習臨床ｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞ基礎Ⅱ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 臨床的学習過程・開発セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「学習過程臨床」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「学習臨床」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「学習臨床」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 学習臨床カウンセリングⅠ | | 0.14 | | 0.14 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | △ 学習臨床カウンセリングⅡ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 臨床教育開発演習Ⅰ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 臨床教育開発演習Ⅱ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 臨床的学習過程・開発研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 臨床的学習過程・開発研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 1 | 10.15 | | 11.15 |
| 教　授 | 中　野　靖　夫 | 体験学習 | | | 0.18 | 0.18 |
| | | 教育情報演習 | | 2 | | 2 |
| | | 情報科学概論 | 0.2 | | | 0.2 |
| | | 情報教育セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「情報教育」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「情報教育」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「情報教育」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 教育情報学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 情報教育研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 情報教育研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 1.2 | 8.6 | 0.18 | 9.98 |
| 教　授 | 増　井　三　夫 | 比較学校史 | 1 | | | 1 |
| | | ヨーロッパ史認識論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「教育方法」 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「教育方法」 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | △ 比較学校史特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 教育方法学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 教育方法学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3 | 4.66 | | 7.66 |
| 教　授 | 川　村　知　行 | 人間教育学セミナー（教職の意義） | | 0.06 | | 0.06 |
| | | 体験学習 | | | 0.18 | 0.18 |
| | | 文化体験演習 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | 伝統絵画表現と鑑賞 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | 日本美術史論 | 1 | | | 1 |
| | | 博物館概論 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 地域社会学習法 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 地域文化学習論 | | 1 | | 1 |
| | | 美術理論・美術史実地研究 | | | 1 | 1 |
| | | 総合学習セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「総合的学習」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 博物館実習 | | | 1.5 | 1.5 |
| | | 総合学習セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「総合的学習」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「総合的学習」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「総合的学習」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 地域教育特論 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | △ 地域教育演習 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | △ 総合学習基礎研究セミナーⅠ | | 1 | | 1 |
| | | △ 総合学習基礎研究セミナーⅡ | | 1 | | 1 |
| | | △ 総合学習応用研究セミナーⅠ | | 1 | | 1 |
| | | △ 総合学習応用研究セミナーⅡ | | 1 | | 1 |
| | | △ 芸術学 | 1 | | | 1 |
| | | △ 美術史教育基礎研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | △ 美術史教育応用研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3.5 | 14.42 | 2.68 | 20.6 |
| 教　授 | 山　崎　貞　登 | 総合学習と体験学習 | 0.33 | | | 0.33 |
| | | 総合学習カリキュラム開発論 | 0.33 | | | 0.33 |
| | | 中等技術科指導法（基礎論） | 1 | | | 1 |
| | | 環境教育概論 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 中等技術科指導法（課程論） | 1 | | | 1 |
| | | 総合学習セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「総合的学習」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 実践セミナーⅠ「技術」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 中等技術科指導法（学習論） | 1 | | | 1 |
| | | 総合学習セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 技術科教育セミナーⅡ | | 2 | | 2 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 実践セミナーⅡ「総合的学習」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 実践セミナーⅡ「技術」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「総合的学習」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「総合的学習」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 総合学習原論 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | △ 環境教育特論 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | △ 環境教育演習 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | △ 総合学習基礎研究セミナーⅠ | | 1 | | 1 |
| | | △ 総合学習基礎研究セミナーⅡ | | 1 | | 1 |
| | | △ 総合学習応用研究セミナーⅠ | | 1 | | 1 |
| | | △ 総合学習応用研究セミナーⅡ | | 1 | | 1 |
| | | △ 技術科教育原理特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 技術科教育教材開発演習 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | △ 技術科教育研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 6.16 | 13.84 | | 20 |
| 教　授 | 西　川　　純 | 理科と学習過程 | | 1 | | 1 |
| | | 学習場面観察基礎 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 理科学習過程論 | 1 | | | 1 |
| | | 教育臨床演習Ⅰ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 学習臨床ｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞ基礎Ⅰ | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 臨床的学習成立セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「学習過程臨床」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 教育臨床演習Ⅱ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 学習臨床ｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞ基礎Ⅱ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 臨床的学習成立セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「学習過程臨床」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「学習臨床」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「学習臨床」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 学習臨床カウンセリングⅠ | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 学習臨床カウンセリングⅡ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 臨床教育開発演習Ⅰ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 臨床教育開発演習Ⅱ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 学習と相互行為特論 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | △ 理科学習過程特論 | 0.5 | 0.5 | | 1 |
| | | △ 臨床的学習成立研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 臨床的学習成立研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2 | 11.65 | | 13.65 |
| 助教授 | 小　林　　恵 | 教育課程論（総合的学習を含む。） | 1 | | | 1 |
| | | 教科・教材基礎論 | 1 | | | 1 |
| | | 教育課程論セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「教育方法」 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | 実践セミナーⅡ「教育方法」 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「教育方法」 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「教育方法」 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | △ 現代教育課程特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 教育方法学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 教育方法学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3 | 7.32 | | 10.32 |
| 助教授 | 和井田　清　司 | 人間教育学セミナー（教職の意義） | | 0.06 | | 0.06 |
| | | 授業臨床学入門 | 1 | | | 1 |
| | | 学習指導論 | 1 | | | 1 |
| | | 授業研究法 | 1 | | | 1 |
| | | 教育方法学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「教育方法」 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | 教育方法学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「教育方法」 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「教育方法」 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「教育方法」 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | △ 学習指導特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 授業研究法特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 教育方法学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 教育方法学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 計 | 5 | 9.38 | | 14.38 |
| 助教授 | 北　條　礼　子 | 総合演習（多文化社会論） | | 0.25 | | 0.25 |
| | | 国際教育概論 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 総合学習セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「総合的学習」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 総合学習セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「総合的学習」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「総合的学習」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「総合的学習」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 国際理解教育特論 | 0.13 | | | 0.13 |
| | | △ 国際理解教育演習 | | 1 | | 1 |
| | | △ 総合学習基礎研究セミナーⅠ | | 1 | | 1 |
| | | △ 総合学習基礎研究セミナーⅡ | | 1 | | 1 |
| | | △ 総合学習応用研究セミナーⅠ | | 1 | | 1 |
| | | △ 総合学習応用研究セミナーⅡ | | 1 | | 1 |
| | | △ 英語科教育研究法演習 | | 1 | | 1 |
| | | △ 英語科教育評価特論 | 1 | | | 1 |
| | | 計 | 1.63 | 10.75 | | 12.38 |
| 助教授 | 田　島　弘　司 | 日本語・日本事情Ⅰ | | 1 | | 1 |
| | | 日本語・日本事情Ⅱ | | 1 | | 1 |
| | | 総合演習（多文化社会論） | | 0.25 | | 0.25 |
| | | 国際交流セミナー | | 1 | | 1 |
| | | 国際交流体験演習 | | 1 | | 1 |
| | | 総合学習セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「総合的学習」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 総合学習セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「総合的学習」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「総合的学習」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「総合的学習」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 国際理解教育特論 | 0.13 | | | 0.13 |
| | | △ 日本語教育特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 日本語教育演習 | | 1 | | 1 |
| | | △ 総合学習基礎研究セミナーⅠ | | 1 | | 1 |
| | | △ 総合学習基礎研究セミナーⅡ | | 1 | | 1 |
| | | △ 総合学習応用研究セミナーⅠ | | 1 | | 1 |
| | | △ 総合学習応用研究セミナーⅡ | | 1 | | 1 |
| | | 計 | 1.13 | 13.75 | | 14.88 |
| 助教授 | 松　本　健　義 | 表現・相互行為教育演習 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 保育・造形表現の指導法 | | 1 | | 1 |
| | | 創造行為と学習過程 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 学習場面観察基礎 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 学習場面臨床学 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 教育臨床演習Ⅰ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 学習臨床ｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞ基礎Ⅰ | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 美術表現学習過程論 | 1 | | | 1 |
| | | 臨床的学習成立セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「学習過程臨床」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 教育臨床演習Ⅱ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 学習臨床ｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞ基礎Ⅱ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 学習と相互行為 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 臨床的学習成立セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「学習過程臨床」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 学習臨床カウンセリング基礎 | | 0.25 | | 0.25 |
| | | △ 学習臨床学特論 | 0.2 | | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「学習臨床」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「学習臨床」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 学習場面臨床学特論 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | △ 学習場面臨床学演習 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | △ 学習臨床カウンセリングⅠ | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 学習臨床カウンセリングⅡ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 臨床教育開発演習Ⅰ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 臨床教育開発演習Ⅱ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 造形表現学習過程特論 | 0.5 | 0.5 | | 1 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | △ 創造行為と相互作用特論 | 0.5 | 0.5 | | 1 |
| | | △ 臨床的学習成立研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 臨床的学習成立研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | △ 子どもの造形的表現論 | 1 | | | 1 |
| | | 計 | 4.7 | 13.57 | | 18.27 |
| 助教授 | 松　本　　修 | 国語科と学習過程 | | 1 | | 1 |
| | | 美術学習過程と造形遊び | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 教育実地研究Ⅱ（授業基礎研究） | | 0.4 | | 0.4 |
| | | 学習場面観察基礎 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 教育臨床演習Ⅰ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 学習臨床ｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞ基礎Ⅰ | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 国語学習過程論 | 1 | | | 1 |
| | | 文学受容と意味生成 | 0.17 | 0.17 | | 0.34 |
| | | 言語行為と意味生成 | 0.25 | 0.25 | | 0.5 |
| | | 臨床的学習過程・開発セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「学習過程臨床」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 学校図書館ﾒﾃﾞｨｱの構成 | 1 | | | 1 |
| | | 教育臨床演習Ⅱ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 学習臨床ｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞ基礎Ⅱ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 学習と言語 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 臨床的学習過程・開発セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「学習過程臨床」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 学習臨床カウンセリング基礎 | | 0.25 | | 0.25 |
| | | △ 学習臨床学特論 | 0.2 | | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「学習臨床」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「学習臨床」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 学習臨床カウンセリングⅠ | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 学習臨床カウンセリングⅡ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 臨床教育開発演習Ⅰ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 臨床教育開発演習Ⅱ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 学習と言語特論 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | △ 国語学習過程特論 | 0.5 | 0.5 | | 1 |
| | | △ 国語カリキュラム開発特論 | 0.5 | 0.5 | | 1 |
| | | △ 臨床的学習過程・開発研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 臨床的学習過程・開発研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 5.12 | 13.22 | | 18.34 |
| 助教授 | 中　村　光　一 | 創造行為と学習過程 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 数学的経験と学習過程 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | 学習場面観察基礎 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 教育臨床演習Ⅰ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 学習臨床ｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞ基礎Ⅰ | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 幾何学と探究過程 | 0.25 | 0.25 | | 0.5 |
| | | 臨床的学習過程・開発セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「学習過程臨床」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 教育臨床演習Ⅱ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 学習臨床ｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞ基礎Ⅱ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 数学教材開発論 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 臨床的学習過程・開発セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「学習過程臨床」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 学習臨床カウンセリング基礎 | | 0.25 | | 0.25 |
| | | △ 学習臨床学特論 | 0.2 | | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「学習臨床」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「学習臨床」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 学習臨床カウンセリングⅠ | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 学習臨床カウンセリングⅡ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 臨床教育開発演習Ⅰ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 臨床教育開発演習Ⅱ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 算数・数学カリキュラム開発特論 | 0.25 | 0.25 | | 0.5 |
| | | △ 臨床的学習過程・開発研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 臨床的学習過程・開発研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 1.2 | 11.73 | | 12.93 |
| 助教授 | 布　川　和　彦 | 学習場面観察基礎 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 算数科指導法 | 0.5 | 0.5 | | 1 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 教育臨床演習Ⅰ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 学習臨床ｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞ基礎Ⅰ | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 数学学習過程論 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 解析学と探究過程 | 0.25 | 0.25 | | 0.5 |
| | | 臨床的学習成立セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「学習過程臨床」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 教育臨床演習Ⅱ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 学習臨床ｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞ基礎Ⅱ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 臨床的学習成立セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「学習過程臨床」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 学習臨床カウンセリング基礎 | | 0.25 | | 0.25 |
| | | △ 学習臨床学特論 | 0.2 | | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「学習臨床」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「学習臨床」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 学習場面臨床学演習 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | △ 学習臨床カウンセリングⅠ | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 学習臨床カウンセリングⅡ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 臨床教育開発演習Ⅰ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 臨床教育開発演習Ⅱ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 算数・数学カリキュラム開発特論 | 0.25 | 0.25 | | 0.5 |
| | | △ 臨床的学習成立研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 臨床的学習成立研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 1.7 | 11.9 | | 13.6 |
| 講師 | 髙野浩志 | 教育情報演習 | | 2 | | 2 |
| | | 情報科学概論 | 0.2 | | | 0.2 |
| | | 情報教育演習 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 教育ネットワーク演習 | | 1 | | 1 |
| | | 情報教育セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 情報科学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「情報教育」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「情報教育」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「情報教育」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 情報教育実践演習 | | 1 | | 1 |
| | | △ 情報科学教育特論 | 0.33 | | | 0.33 |
| | | △ 情報教育研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 情報教育研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 0.53 | 13.1 | | 13.63 |

〈生徒指導総合講座〉

| 職名 | 氏名 | 授業科目名（△印は大学院授業科目を示す。） | 毎週授業時間数 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 講義 | 演習 | 実験実習実技 | 計 |
| 教授 | 杵淵俊夫 | 総合演習（子どもの校外生活と地域父母組織） | | 1 | | 1 |
| | | 教育本質論 | 1 | | | 1 |
| | | 教育学研究法 | 1 | | | 1 |
| | | 発達臨床思想 | 1 | | | 1 |
| | | 教育実地研究Ⅵ（生徒指導論） | 0.05 | | | 0.05 |
| | | 生徒指導基礎セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | 生徒指導基礎セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 教育学研究法特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 発達臨床思想特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 生徒指導基礎研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 生徒指導基礎研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 5.05 | 9.4 | | 14.45 |
| 教授 | 若井彌一 | 教育と法規 | 1 | | | 1 |
| | | 教育実地研究Ⅵ（生徒指導論） | 0.05 | | | 0.05 |
| | | 生徒指導の制度・経営セミナーⅠ | | 2 | | 2 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 実践セミナーⅠ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | 人権と教育行政 | 1 | | | 1 |
| | | 生徒指導の制度・経営セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 学校の危機管理特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 教育法規特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 人権と教育行政特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 生徒指導の制度・経営研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 生徒指導の制度・経営研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 5.05 | 8.4 | | 13.45 |
| 教　授 | 西　　穣　司 | 教師・授業文化論 | 1 | | | 1 |
| | | 学校組織論 | 1 | | | 1 |
| | | 教育実地研究Ⅵ（生徒指導論） | 0.05 | | | 0.05 |
| | | 生徒指導の制度・経営セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | 学校経営と学校図書館 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 生徒指導の制度・経営セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 教師の職能発達特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 学校経営特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 生徒指導の制度・経営研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 生徒指導の制度・経営研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 4.55 | 8.4 | | 12.95 |
| 教　授 | 古　賀　一　博 | 比較教育学 | 1 | | | 1 |
| | | 教育実地研究Ⅵ（生徒指導論） | 0.05 | | | 0.05 |
| | | 生徒指導の制度・経営セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | 生徒指導の制度・経営セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 比較教育制度特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 教育内容行政特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 生徒指導の制度・経営研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 生徒指導の制度・経営研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3.05 | 8.4 | | 11.45 |
| 助教授 | 三　村　隆　男 | 教育実地研究Ⅵ（生徒指導論） | 0.05 | | | 0.05 |
| | | 教育実地研究Ⅶ（進路指導論） | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 生徒指導法セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | 進路指導基礎演習 | | 1 | | 1 |
| | | 生徒指導法セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 進路指導特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 進路指導演習（進路相談演習） | | 1 | | 1 |
| | | △ 生徒指導法研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 生徒指導法研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 1.55 | 10.4 | | 11.95 |
| 助教授 | 石　田　美　清 | 人間教育学セミナー（教職の意義） | | 0.06 | | 0.06 |
| | | 教育実地研究Ⅳ（特別活動の指導法） | 1 | | | 1 |
| | | 教育実地研究Ⅵ（生徒指導論） | 0.05 | | | 0.05 |
| | | 生徒指導法セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | 生徒指導法セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 特別活動特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 生徒指導法研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 生徒指導法研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | △ 生徒指導演習 | | 1 | | 1 |
| | | 計 | 2.05 | 9.46 | | 11.51 |
| 助教授 | 荻 原 克 男 | 教育実地研究Ⅵ（生徒指導論） | 0.05 | | | 0.05 |
| | | 生徒指導の制度・経営セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | 現代社会と学校 | 1 | | | 1 |
| | | 生徒指導の制度・経営セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 教育政策特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 生徒指導の制度・経営研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 生徒指導の制度・経営研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.05 | 8.4 | | 10.45 |
| 助教授 | 林 泰 成 | 道徳の指導法 | 1 | | | 1 |
| | | 教育実地研究Ⅵ（生徒指導論） | 0.05 | | | 0.05 |
| | | 学校ﾓﾗﾙﾄﾚｰﾆﾝｸﾞ基礎演習 | | 1 | | 1 |
| | | 生徒指導法セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | 生徒指導法セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 道徳教育特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 学校モラルトレーニング演習 | | 1 | | 1 |
| | | △ 生徒指導法研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 生徒指導法研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.05 | 10.4 | | 12.45 |
| 助教授 | 藤 田 武 志 | 教育社会学 | 1 | | | 1 |
| | | 生涯学習概論Ｂ | 1 | | | 1 |
| | | 教育実地研究Ⅵ（生徒指導論） | 0.05 | | | 0.05 |
| | | 学校文化論 | 1 | | | 1 |
| | | 生徒指導基礎セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | 生徒指導基礎セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 学校文化特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 教育実地調査分析演習Ⅰ | | 0.5 | | 0.5 |
| | | △ 教育実地調査分析演習Ⅱ | | 0.5 | | 0.5 |
| | | △ 生徒指導基礎研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 生徒指導基礎研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 4.05 | 9.4 | | 13.45 |
| 助教授 | 大 前 敦 巳 | 生涯学習概論Ａ | 1 | | | 1 |
| | | 教育実地研究Ⅵ（生徒指導論） | 0.05 | | | 0.05 |
| | | 生徒指導基礎セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | 生徒指導基礎セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「生徒指導」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 教育社会学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 教育実地調査分析演習Ⅰ | | 0.5 | | 0.5 |
| | | △ 教育実地調査分析演習Ⅱ | | 0.5 | | 0.5 |
| | | △ 生徒指導基礎研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 生徒指導基礎研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.05 | 9.4 | | 11.45 |

〈心理臨床講座〉

| 職名 | 氏名 | 授業科目名（△印は大学院授業科目を示す。） | 毎週授業時間数 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 講義 | 演習 | 実験実習実技 | 計 |
| 教授 | 田中　敏 | 学力診断論 | 1 | | | 1 |
| | | 心理統計解析 | 1 | | | 1 |
| | | 教育心理学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「心理臨床」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | 教育心理学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「心理臨床」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 学校心理解析法 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「学校心理」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「学校心理」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 学力診断学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 教育評価・統計解析演習Ⅰ | | 1 | | 1 |
| | | △ 教育評価・統計解析演習Ⅱ | | 1 | | 1 |
| | | △ 学校心理研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 学校心理研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | △ 解析学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3 | 12.8 | | 15.8 |
| 教授 | 加藤哲文 | 臨床心理学 | 1 | | | 1 |
| | | 臨床心理学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「心理臨床」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | 臨床心理学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「心理臨床」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 臨床心理援助法 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「臨床心理」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「臨床心理」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 応用行動分析学特論 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | △ 発達障害学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 心理アセスメント演習Ⅰ | | 1 | | 1 |
| | | △ 臨床心理演習 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | △ 臨床心理基礎実習Ⅰ | | | 0.33 | 0.33 |
| | | △ 臨床心理基礎実習Ⅱ | | | 0.33 | 0.33 |
| | | △ 臨床心理実習Ⅰ | | | 0.33 | 0.33 |
| | | △ 臨床心理実習Ⅱ | | | 0.33 | 0.33 |
| | | △ 臨床心理研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 臨床心理研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.5 | 10.6 | 1.32 | 14.42 |
| 助教授 | 阿部　勲 | 発達心理学 | 1 | | | 1 |
| | | 心理学研究法 | 1 | | | 1 |
| | | 一般心理学 | 1 | | | 1 |
| | | 教育心理学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「心理臨床」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | 教育心理学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「心理臨床」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 学校心理解析法 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「学校心理」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「学校心理」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 発達心理学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 学校心理研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 学校心理研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 4 | 8.8 | | 12.8 |
| 助教授 | 中山勘次郎 | 学習心理学 | 1 | | | 1 |
| | | 授業の心理学 | 1 | | | 1 |
| | | 心理学実験 | | | 0.67 | 0.67 |
| | | 心理学演習 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 教育心理学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「心理臨床」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | 教育心理学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 実践セミナーⅡ「心理臨床」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 学校心理解析法 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「学校心理」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「学校心理」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 学習心理学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 心理学特殊実験 | | | 0.67 | 0.67 |
| | | △ 学校心理研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 学校心理研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3 | 9.3 | 1.34 | 13.64 |
| 助教授 | 五十嵐　透　子 | 人間教育学セミナー（教職の意義） | | 0.06 | | 0.06 |
| | | 家庭看護学 | 1 | | | 1 |
| | | 教育実地研究Ⅴ（カウンセリング | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 臨床心理学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「心理臨床」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | 臨床心理学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「心理臨床」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「臨床心理」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「臨床心理」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ カウンセリング特論Ⅰ | 1 | | | 1 |
| | | △ 臨床心理基礎実習Ⅰ | | | 0.33 | 0.33 |
| | | △ 臨床心理基礎実習Ⅱ | | | 0.33 | 0.33 |
| | | △ 臨床心理実習Ⅰ | | | 0.33 | 0.33 |
| | | △ 臨床心理実習Ⅱ | | | 0.33 | 0.33 |
| | | △ 臨床心理研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 臨床心理研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.5 | 8.66 | 1.32 | 12.48 |
| 助教授 | 内　藤　美　加 | 教育心理学概論 | 1 | | | 1 |
| | | 心理学実験 | | | 0.67 | 0.67 |
| | | 心理学演習 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 認知心理学 | 1 | | | 1 |
| | | 教育心理学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「心理臨床」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | 教育心理学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「心理臨床」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 学校心理解析法 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「学校心理」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「学校心理」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 心理学特殊実験 | | | 0.67 | 0.67 |
| | | △ 教育心理学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 学校心理研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 学校心理研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3 | 9.3 | 1.34 | 13.64 |
| 助教授 | 藤　生　英　行 | 臨床心理学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「心理臨床」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | 臨床心理学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「心理臨床」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 臨床心理援助法 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「臨床心理」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「臨床心理」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 臨床心理学特論Ⅰ | 1 | | | 1 |
| | | △ 学校臨床心理学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 臨床心理基礎実習Ⅰ | | | 0.33 | 0.33 |
| | | △ 臨床心理基礎実習Ⅱ | | | 0.33 | 0.33 |
| | | △ 臨床心理実習Ⅰ | | | 0.33 | 0.33 |
| | | △ 臨床心理実習Ⅱ | | | 0.33 | 0.33 |
| | | △ 臨床心理研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 臨床心理研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2 | 9.1 | 1.32 | 12.42 |
| 助教授 | 越　　良　子 | 心理学実験 | | | 0.67 | 0.67 |
| | | 教育心理学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「心理臨床」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | 学級経営の心理学 | 1 | | | 1 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 教育心理学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「心理臨床」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 学校心理解析法 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「学校心理」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「学校心理」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 心理学特殊実験 | | | 0.67 | 0.67 |
| | | △ 社会心理学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 学級集団心理学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 学校心理研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 学校心理研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3 | 8.8 | 1.34 | 13.14 |
| 助教授 | 宮 下 敏 恵 | 教育実地研究Ⅴ(カウンセリング論) | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 臨床心理学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「心理臨床」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | 臨床心理学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「心理臨床」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「臨床心理」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「臨床心理」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 臨床心理学特論Ⅱ | 1 | | | 1 |
| | | △ 臨床心理基礎実習Ⅰ | | | 0.33 | 0.33 |
| | | △ 臨床心理基礎実習Ⅱ | | | 0.33 | 0.33 |
| | | △ 臨床心理実習Ⅰ | | | 0.33 | 0.33 |
| | | △ 臨床心理実習Ⅱ | | | 0.33 | 0.33 |
| | | △ 臨床心理研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 臨床心理研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 1.5 | 8.6 | 1.32 | 11.42 |
| 講 師 | 井 沢 功一朗 | 青年心理学 | 1 | | | 1 |
| | | 個性の心理学 | 1 | | | 1 |
| | | 臨床心理学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | △ 個性の発達心理学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 心理アセスメント演習Ⅱ | | 1 | | 1 |
| | | △ 投映法特論 | 1 | | | 1 |
| | | 計 | 4 | 3 | | 7 |
| 講 師 | 米 山 直 樹 | 臨床心理学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「心理臨床」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | 臨床心理学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「心理臨床」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「臨床心理」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「臨床心理」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 応用行動分析学特論 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | △ カウンセリング特論Ⅱ | 1 | | | 1 |
| | | △ 臨床心理演習 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | △ 臨床心理基礎実習Ⅰ | | | 0.33 | 0.33 |
| | | △ 臨床心理基礎実習Ⅱ | | | 0.33 | 0.33 |
| | | △ 臨床心理実習Ⅰ | | | 0.33 | 0.33 |
| | | △ 臨床心理実習Ⅱ | | | 0.33 | 0.33 |
| | | △ 臨床心理研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 臨床心理研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 1.5 | 9.1 | 1.32 | 11.92 |

〈学校教育総合研究センター〉

| 職 名 | 氏 名 | 授業科目名<br>(△印は大学院授業科目を示す。) | 毎週授業時間数 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 講 義 | 演 習 | 実験<br>実習<br>実技 | 計 |
| 教 授 | 濁 川 明 男 | 体験学習 | | | 0.18 | 0.18 |
| | | ボランティア体験 | | | 0.33 | 0.33 |
| | | 教育実地研究Ⅰ(観察・参加) | 0.16 | | | 0.16 |
| | | 総合学習と体験学習 | 0.33 | | | 0.33 |
| | | 教育実地研究Ⅱ(授業基礎研究) | | 0.9 | | 0.9 |
| | | 総合学習カリキュラム開発論 | 0.33 | | | 0.33 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 総合学習セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「総合的学習」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 社会教育演習Ⅰ | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 総合学習セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「総合的学習」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「総合的学習」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「総合的学習」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 地域環境学習特論 | 0.33 | | | 0.33 |
| | | △ 地域環境学習演習 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | △ 総合学習基礎研究セミナーⅠ | | 1 | | 1 |
| | | △ 総合学習基礎研究セミナーⅡ | | 1 | | 1 |
| | | △ 総合学習応用研究セミナーⅠ | | 1 | | 1 |
| | | △ 総合学習応用研究セミナーⅡ | | 1 | | 1 |
| | | 計 | 1.15 | 10.23 | 0.51 | 11.89 |
| 教　授 | 内　田　一　成 | カウンセリング基礎実習 | | | 2 | 2 |
| | | カウンセリング基礎演習 | | 1 | | 1 |
| | | △ 臨床心理基礎実習Ⅰ | | | 0.33 | 0.33 |
| | | △ 臨床心理基礎実習Ⅱ | | | 0.33 | 0.33 |
| | | △ 臨床心理実習Ⅰ | | | 0.33 | 0.33 |
| | | △ 臨床心理実習Ⅱ | | | 0.33 | 0.33 |
| | | △ 発達臨床心理学特論 | 1 | | | 1 |
| | | 計 | 1 | 1 | 3.32 | 5.32 |
| 教　授 | 南　部　昌　敏 | 情報科学概論 | 0.2 | | | 0.2 |
| | | 教育実地研究Ⅱ（授業基礎研究） | | 0.4 | | 0.4 |
| | | 教育工学 | 1 | | | 1 |
| | | 情報メディアの活用 | 1 | | | 1 |
| | | 情報教育セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「情報教育」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「情報教育」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「情報教育」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 教育実践研究方法論特講 | 1 | | | 1 |
| | | △ 教育工学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 教育メディア特別演習 | | 1 | | 1 |
| | | △ 情報教育研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 情報教育研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 4.2 | 8 | | 12.2 |
| 助教授 | 井　上　久　祥 | 教育情報演習 | | 2 | | 2 |
| | | 情報科学概論 | 0.2 | | | 0.2 |
| | | 情報教育演習 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 教育実地研究Ⅱ（授業基礎研究） | | 0.4 | | 0.4 |
| | | 情報教育論 | 1 | | | 1 |
| | | 情報教育セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「情報教育」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「情報教育」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「情報教育」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 情報教育特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 情報表現教育演習 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | △ 情報教育研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 情報教育研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.2 | 9.83 | | 12.03 |
| 講　師 | 釜　田　　聡 | 体験学習 | | | 0.18 | 0.18 |
| | | ボランティア体験 | | | 0.33 | 0.33 |
| | | 教育実地研究Ⅱ（授業基礎研究） | | 0.9 | | 0.9 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「総合的学習」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「総合的学習」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | 計 | | 1.12 | 0.51 | 1.63 |
| 講　師 | 小　林　毅　夫 | △ 実践場面分析演習Ⅰ「総合的学習」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「総合的学習」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | 計 | | 0.22 | | 0.22 |
| 講　師 | 石　川　　真 | 教育情報演習 | | 2 | | 2 |
| | | 情報教育セミナーⅡ | | 2 | | 2 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 実践セミナーⅡ「情報教育」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「情報教育」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「情報教育」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 情報教育方法特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 情報教育研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 情報教育研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 1 | 8.6 | | 9.6 |

〈幼児教育講座〉

| 職名 | 氏名 | 授業科目名（△印は大学院授業科目を示す。） | 毎週授業時間数 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 講義 | 演習 | 実験実習実技 | 計 |
| 教授 | 南舘忠智 | 生活 | 1 | | | 1 |
| | | 総合演習（子どもの心と教育） | | 0.2 | | 0.2 |
| | | 保育の心理と行動 | | 1 | | 1 |
| | | 子どもの心理・発達概論 | 1 | | | 1 |
| | | 生活科指導法 | 0.5 | 0.5 | | 1 |
| | | 子どもの学習支援方法論演習 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 子どもの発達理解セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「幼児」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | 幼稚園専修教育実習 | | | 0.4 | 0.4 |
| | | 子どもの発達理解セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「幼児」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「幼児教育」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「幼児教育」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 子どもの発達心理学 | 1 | | | 1 |
| | | △ 子ども理解の実践演習Ⅱ | | 0.5 | | 0.5 |
| | | △ 子どもの発達理解研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 子どもの発達理解研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3.5 | 11.5 | 0.4 | 15.4 |
| 教授 | 大山美和子 | 総合演習（子どもの心と教育） | | 0.2 | | 0.2 |
| | | 教育実地研究Ⅰ（観察・参加） | 0.08 | | | 0.08 |
| | | 教育実地研究Ⅰ（観察・参加） | 0.08 | | | 0.08 |
| | | 保育・音楽表現の指導法 | | 1 | | 1 |
| | | 子どもの保育・表現概論 | 1 | | | 1 |
| | | 音楽表現の基礎 | | | 1 | 1 |
| | | 幼児の音楽的表現 | 1 | | | 1 |
| | | 子どもの発達支援方法論演習 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | 子どもの表現セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「幼児」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | 幼稚園専修教育実習 | | | 0.4 | 0.4 |
| | | 子どもの表現セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「幼児」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「幼児教育」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「幼児教育」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 子どもの音楽的表現論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 子ども理解の実践演習Ⅰ | | 0.33 | | 0.33 |
| | | △ 子どもの表現研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3.16 | 8.66 | 1.4 | 13.22 |
| 教授 | 鈴木情一 | 総合演習（子どもの心と教育） | | 0.2 | | 0.2 |
| | | 保育・言葉の指導法 | | 1 | | 1 |
| | | 幼児理解と心の問題 | 1 | | | 1 |
| | | 子どもの表現と伝達 | 1 | | | 1 |
| | | 子どもの発達支援方法論演習 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | 子どもの発達理解セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「幼児」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | 読書と豊かな人間性 | 1 | | | 1 |
| | | 幼稚園専修教育実習 | | | 0.4 | 0.4 |
| | | 子どもの発達理解セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「幼児」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「幼児教育」 | | 0.2 | | 0.2 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「幼児教育」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 子どもの言葉の心理学 | 1 | | | 1 |
| | | △ 子ども理解の実践演習Ⅰ | | 0.33 | | 0.33 |
| | | △ 子どもの発達理解研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 子どもの発達理解研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 4 | 10.66 | 0.4 | 15.06 |
| 助教授 | 丸山良平 | 総合演習（子どもの心と教育） | | 0.2 | | 0.2 |
| | | 教育実地研究Ⅰ（観察・参加） | 0.08 | | | 0.08 |
| | | 教育実地研究Ⅰ（観察・参加） | 0.08 | | | 0.08 |
| | | 保育・人間関係の指導法 | | 1 | | 1 |
| | | 保育・環境の指導法 | | 1 | | 1 |
| | | 子どもの生活と環境 | 1 | | | 1 |
| | | 子どもの発達支援方法論演習 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | 子どもの生活環境セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「幼児」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | 幼稚園専修教育実習 | | | 0.4 | 0.4 |
| | | 子どもの生活環境セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「幼児」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「幼児教育」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「幼児教育」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 子どもの環境特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 子ども理解の実践演習Ⅰ | | 0.33 | | 0.33 |
| | | △ 子どもの生活環境研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 子どもの生活環境研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.16 | 11.66 | 0.4 | 14.22 |
| 助教授 | 木村吉彦 | 人間教育学セミナー（教職の意義） | | 0.06 | | 0.06 |
| | | 生　活 | 1 | | | 1 |
| | | 総合演習（子どもの心と教育） | | 0.2 | | 0.2 |
| | | 幼児・障害児教育原理 | 0.25 | | | 0.25 |
| | | 幼児の教育課程論 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 子どもの教育・保育概論 | 1 | | | 1 |
| | | 生活科体験演習 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | 生活科と総合学習 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 生活科指導法 | 0.5 | 0.5 | | 1 |
| | | 教育と保育の原理 | 1 | | | 1 |
| | | 生活科単元開発論 | 1 | | | 1 |
| | | 家庭の教育と育児 | 1 | | | 1 |
| | | 子どもの学習支援方法論演習 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 幼少関連・教育セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「幼児」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | 幼稚園専修教育実習 | | | 0.4 | 0.4 |
| | | 実践セミナーⅡ「幼児」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「幼児教育」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「幼児教育」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 幼小関連論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 子ども理解の実践演習Ⅱ | | 0.5 | | 0.5 |
| | | △ 幼小関連・教育研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 7.75 | 6.89 | 0.4 | 15.04 |

〈障害児教育講座〉

| 職名 | 氏名 | 授業科目名（△印は大学院授業科目を示す。） | 毎週授業時間数 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 講義 | 演習 | 実験実習実技 | 計 |
| 教授 | 星名信昭 | △ 障害児心理・生理検査法B | | | 1 | 1 |
| | | △ 障害児教育観察・参加B | | | 1 | 1 |
| | | △ 障害児聴能学論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 重複障害児指導法B | 1 | | | 1 |
| | | △ 障害児研究法演習B | | 1 | | 1 |
| | | △ 障害児教育実践学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 障害児教育実践学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 計 | 2 | 5 | 2 | 9 |
| 教　授 | 藤　原　義　博 | △　障害児心理・生理検査法C | | | 1 | 1 |
| | | △　障害児研究法C | 1 | | | 1 |
| | | △　障害児教育臨床実習ⅠC | | | 0.5 | 0.5 |
| | | △　障害児教育臨床実習ⅡC | | | 0.5 | 0.5 |
| | | △　障害児教育観察・参加C | | | 0.4 | 0.4 |
| | | △　情緒障害児指導法 | 1 | | | 1 |
| | | △　障害児応用教育臨床実習ⅠC | | | 0.5 | 0.5 |
| | | △　障害児応用教育臨床実習ⅡC | | | 0.5 | 0.5 |
| | | △　障害児研究法演習C | | 0.4 | | 0.4 |
| | | △　障害児教育実践学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △　障害児教育実践学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2 | 4.4 | 3.4 | 9.8 |
| 教　授 | 我　妻　敏　博 | 幼児・障害児教育原理 | 0.25 | | | 0.25 |
| | | △　実践場面分析演習ⅠB「障害児教育」 | | 1 | | 1 |
| | | △　実践場面分析演習ⅡB「障害児教育」 | | 1 | | 1 |
| | | △　障害児心理・生理検査法B | | | 1 | 1 |
| | | △　障害児心理学論B | 1 | | | 1 |
| | | △　障害児研究法B | 1 | | | 1 |
| | | △　障害児教育臨床実習ⅠB | | | 2 | 2 |
| | | △　障害児教育臨床実習ⅡB | | | 2 | 2 |
| | | △　障害児教育観察・参加B | | | 1 | 1 |
| | | △　聴覚障害児言語指導法 | 1 | | | 1 |
| | | △　障害児応用教育臨床実習ⅠB | | | 2 | 2 |
| | | △　障害児応用教育臨床実習ⅡB | | | 2 | 2 |
| | | △　障害児研究法演習B | | 1 | | 1 |
| | | △　障害児教育実践学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △　障害児教育実践学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3.25 | 7 | 10 | 20.25 |
| 教　授 | 大　庭　重　治 | △　障害児心理・生理検査法A | | | 1 | 1 |
| | | △　障害児心理学論A | 0.5 | | | 0.5 |
| | | △　障害児教育臨床実習ⅠA | | | 2 | 2 |
| | | △　障害児教育臨床実習ⅡA | | | 2 | 2 |
| | | △　障害児教育観察・参加A | | | 0.67 | 0.67 |
| | | △　視覚障害児心理学論 | 1 | | | 1 |
| | | △　重複障害児指導法A | 1 | | | 1 |
| | | △　障害児応用教育臨床実習ⅠA | | | 1 | 1 |
| | | △　障害児応用教育臨床実習ⅡA | | | 1 | 1 |
| | | △　障害児研究法演習A | | 0.67 | | 0.67 |
| | | △　障害児教育実践学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △　障害児教育実践学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.5 | 4.67 | 7.67 | 14.84 |
| 助教授 | 齋　藤　一　雄 | 人間教育学セミナー（教職の意義） | | 0.06 | | 0.06 |
| | | 幼児・障害児教育原理 | 0.25 | | | 0.25 |
| | | △　実践場面分析演習ⅠC「障害児教育」 | | 0.25 | | 0.25 |
| | | △　実践場面分析演習ⅡC「障害児教育」 | | 0.25 | | 0.25 |
| | | △　障害児教育学論 | 1 | | | 1 |
| | | △　障害児教育課程論C | 1 | | | 1 |
| | | △　障害児教育観察・参加C | | | 0.4 | 0.4 |
| | | △　知的障害児指導法 | 1 | | | 1 |
| | | △　障害児研究法演習C | | 0.4 | | 0.4 |
| | | △　障害児教育実践学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △　障害児教育実践学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3.25 | 4.96 | 0.4 | 8.61 |
| 助教授 | 河　合　　康 | 幼児・障害児教育原理 | 0.25 | | | 0.25 |
| | | △　実践場面分析演習ⅠA「障害児教育」 | | 1 | | 1 |
| | | △　実践場面分析演習ⅡA「障害児教育」 | | 1 | | 1 |
| | | △　障害児教育行政制度論 | 1 | | | 1 |
| | | △　障害児教育課程論A | 1 | | | 1 |
| | | △　障害児教育観察・参加A | | | 0.67 | 0.67 |
| | | △　障害児研究法演習A | | 0.67 | | 0.67 |
| | | △　障害児教育実践学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | △ 障害児教育実践学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.25 | 6.67 | 0.67 | 9.59 |
| 講師 | 藤井和子 | △ 実践場面分析演習ⅠC「障害児教育」 | | 0.25 | | 0.25 |
| | | △ 実践場面分析演習ⅡC「障害児教育」 | | 0.25 | | 0.25 |
| | | △ 障害児自立活動論 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | △ 障害児心理・生理検査法C | | | 1 | 1 |
| | | △ 障害児教育臨床実習ⅠC | | | 0.5 | 0.5 |
| | | △ 障害児教育臨床実習ⅡC | | | 0.5 | 0.5 |
| | | △ 障害児教育観察・参加C | | | 0.4 | 0.4 |
| | | △ 障害児言語指導法 | 1 | | | 1 |
| | | △ 障害児応用教育臨床実習ⅠC | | | 0.5 | 0.5 |
| | | △ 障害児応用教育臨床実習ⅡC | | | 0.5 | 0.5 |
| | | △ 障害児研究法演習C | | 0.4 | | 0.4 |
| | | △ 障害児教育実践学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 障害児教育実践学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 1.5 | 4.9 | 3.4 | 9.8 |
| 講師 | 笠原芳隆 | △ 実践場面分析演習ⅠC「障害児教育」 | | 0.25 | | 0.25 |
| | | △ 実践場面分析演習ⅡC「障害児教育」 | | 0.25 | | 0.25 |
| | | △ 障害児自立活動論 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | △ 障害児教育臨床実習ⅠC | | | 0.5 | 0.5 |
| | | △ 障害児教育臨床実習ⅡC | | | 0.5 | 0.5 |
| | | △ 障害児教育観察・参加C | | | 0.4 | 0.4 |
| | | △ 病弱・虚弱児指導法 | 1 | | | 1 |
| | | △ 障害児応用教育臨床実習ⅠC | | | 0.5 | 0.5 |
| | | △ 障害児応用教育臨床実習ⅡC | | | 0.5 | 0.5 |
| | | △ 障害児研究法演習C | | 0.4 | | 0.4 |
| | | △ 障害児教育実践学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 障害児教育実践学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 1.5 | 4.9 | 2.4 | 8.8 |
| 教授 | 土谷良巳 | △ 実践場面分析演習ⅠC「障害児教育」 | | 0.25 | | 0.25 |
| | | △ 実践場面分析演習ⅡC「障害児教育」 | | 0.25 | | 0.25 |
| | | △ 障害児心理学論C | 1 | | | 1 |
| | | △ 障害児教育臨床実習ⅠC | | | 0.5 | 0.5 |
| | | △ 障害児教育臨床実習ⅡC | | | 0.5 | 0.5 |
| | | △ 障害児教育観察・参加C | | | 0.4 | 0.4 |
| | | △ 重複障害児指導法C | 1 | | | 1 |
| | | △ 障害児応用教育臨床実習ⅠC | | | 0.5 | 0.5 |
| | | △ 障害児応用教育臨床実習ⅡC | | | 0.5 | 0.5 |
| | | △ 障害児研究法演習C | | 0.4 | | 0.4 |
| | | △ 障害児教育実践学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 障害児教育実践学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2 | 4.9 | 2.4 | 9.3 |
| 教授 | 恵羅修吉 | △ 障害児心理・生理検査法A | | | 1 | 1 |
| | | △ 障害児心理学論A | 0.5 | | | 0.5 |
| | | △ 障害児研究法A | 1 | | | 1 |
| | | △ 障害児教育観察・参加A | | | 0.67 | 0.67 |
| | | △ 障害児生理心理学論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 障害児応用教育臨床実習ⅠA | | | 1 | 1 |
| | | △ 障害児応用教育臨床実習ⅡA | | | 1 | 1 |
| | | △ 障害児研究法演習A | | 0.67 | | 0.67 |
| | | △ 障害児教育実践学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 障害児教育実践学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.5 | 4.67 | 3.67 | 10.84 |

〈言語系教育講座（国語）〉

| 職名 | 氏名 | 授業科目名（△印は大学院授業科目を示す。） | 毎週授業時間数 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 講義 | 演習 | 実験実習実技 | 計 |
| 教授 | 有澤俊太郎 | 人間教育学セミナー（教職の意義） | | 0.06 | | 0.06 |
| | | 国語（書写を含む。） | 0.13 | | | 0.13 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 国語基礎研究Ⅰ | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 国語基礎研究Ⅱ | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 初等国語科指導法 | 0.33 | 0.33 | | 0.66 |
| | | 国語科教育基礎セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |
| | | 学習指導と学校図書館 | 0.25 | | | 0.25 |
| | | 中等国語科指導法（授業論） | 1 | | | 1 |
| | | 国語科教育応用セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |
| | | △ 国語科教育特論Ｂ | 1 | | | 1 |
| | | △ 国語科教育演習Ａ | | 1 | | 1 |
| | | △ 国語科教育基礎研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | △ 国語科教育応用研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.97 | 9.91 | | 12.88 |
| 教　授 | 野　村　眞木夫 | 国　語（書写を含む。） | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 総合演習（ことばと社会） | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 国語基礎研究Ⅰ | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 国語基礎研究Ⅱ | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 国語学講読Ｃ | 1 | | | 1 |
| | | 国語学演習Ｃ | | 1 | | 1 |
| | | 国語学基礎セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |
| | | 国語学応用セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |
| | | △ 国語学特論Ｃ | 1 | | | 1 |
| | | △ 国語学演習Ｃ | | 1 | | 1 |
| | | △ 国語学基礎研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | △ 国語学応用研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.39 | 10.69 | | 13.08 |
| 教　授 | 下　西　善三郎 | 国　語（書写を含む。） | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 国語基礎研究Ⅰ | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 国語基礎研究Ⅱ | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 文学受容と意味生成 | 0.17 | 0.17 | | 0.34 |
| | | 国文学講読Ａ | 1 | | | 1 |
| | | 国文学基礎セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |
| | | 国文学演習Ａ | | 1 | | 1 |
| | | 国文学応用セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |
| | | △ 国文学特論Ａ | 1 | | | 1 |
| | | △ 国文学演習Ａ | | 1 | | 1 |
| | | △ 国文学基礎研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | △ 国文学応用研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.56 | 10.69 | | 13.25 |
| 助教授 | 髙　本　條　治 | 表現・人間学基礎論 | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 国　語（書写を含む。） | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 国語基礎研究Ⅰ | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 国語基礎研究Ⅱ | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 言語行為と意味生成 | 0.25 | 0.25 | | 0.5 |
| | | 国語学講読Ｂ | 1 | | | 1 |
| | | 国語学演習Ｂ | | 1 | | 1 |
| | | 国語学基礎セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |
| | | 国語学応用セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |
| | | △ 国語学特論Ｂ | 1 | | | 1 |
| | | △ 国語学演習Ｂ | | 1 | | 1 |
| | | △ 国語学基礎研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | △ 国語学応用研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.77 | 10.77 | | 13.54 |
| 助教授 | 中　里　理　子 | 国　語（書写を含む。） | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 国語基礎研究Ⅰ | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 国語基礎研究Ⅱ | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 国語学講読Ａ | 1 | | | 1 |
| | | 国語学演習Ａ | | 1 | | 1 |
| | | 国語学基礎セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |
| | | 国語学応用セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |
| | | △ 国語学特論Ａ | 1 | | | 1 |
| | | △ 国語学基礎研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | △ 国語学応用研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.39 | 9.52 | | 11.91 |
| 助教授 | 小　埜　裕　二 | 国　語（書写を含む。） | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 国語基礎研究Ⅰ | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 国語基礎研究Ⅱ | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 文学受容と意味生成 | 0.17 | 0.17 | | 0.34 |
| | | 国文学講読Ｂ | 1 | | | 1 |
| | | 国文学基礎セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |
| | | 国文学演習Ｂ | | 1 | | 1 |
| | | 国文学応用セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |
| | | △ 国文学特論Ｂ | 1 | | | 1 |
| | | △ 国文学演習Ｂ | | 1 | | 1 |
| | | △ 国文学基礎研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | △ 国文学応用研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.56 | 10.69 | | 13.25 |
| 助教授 | 押　木　秀　樹 | 国　語（書写を含む。） | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 総合演習（ことばと社会） | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 国語基礎研究Ⅰ | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 国語基礎研究Ⅱ | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 書写書道Ⅰ | | 1 | | 1 |
| | | 書写書道Ⅱ | | 1 | | 1 |
| | | 実践セミナーⅠ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |
| | | 国語科（書写）教育応用セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |
| | | △ 書写書道特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 書写書道演習 | | 1 | | 1 |
| | | △ 書写書道基礎研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | △ 書写書道応用研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 1.39 | 9.69 | | 11.08 |
| 講　師 | 渡　部　洋一郎 | 国　語（書写を含む。） | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 総合演習（ことばと社会） | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 国語基礎研究Ⅰ | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 国語基礎研究Ⅱ | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 中等国語科指導法（課程論） | 1 | | | 1 |
| | | 初等国語科指導法 | 0.33 | 0.33 | | 0.66 |
| | | 国語科教育基礎セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 学習指導と学校図書館 | 0.25 | | | 0.25 |
| | | 国語科教育応用セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「国語」 | | 0.13 | | 0.13 |
| | | △ 国語科教育特論A | 1 | | | 1 |
| | | △ 国語科教育演習C | | 1 | | 1 |
| | | △ 国語科教育基礎研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | △ 国語科教育応用研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.97 | 10.02 | | 12.99 |

〈言語系教育講座（英語）〉

| 職名 | 氏名 | 授業科目名（△印は大学院授業科目を示す。） | 毎週授業時間数 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 講義 | 演習 | 実験実習実技 | 計 |
| 教授 | 齋藤九一 | ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語ＡⅠ | | | 1 | 1 |
| | | ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語ＡⅡ | | | 1 | 1 |
| | | ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語ＢⅠ | | | 1 | 1 |
| | | 総合演習（ことばと社会） | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 英語基礎研究 | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 英米文学講読 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 英文学概論 | 1 | | | 1 |
| | | 英文学演習 | | 1 | | 1 |
| | | 英米文学基礎セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | 英米文学応用セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | 計 | 1.63 | 5.61 | 3 | 10.24 |
| 教授 | 平野絹枝 | ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語ＢⅠ | | | 1 | 1 |
| | | ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語ＢⅡ | | | 1 | 1 |
| | | コミュニケーション英語CⅡ | | | 1 | 1 |
| | | 英語基礎研究 | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 中等英語科指導法（教授法） | 1 | | | 1 |
| | | 英語科教育基礎セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | 英語科教育応用セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 英語科教育原理特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 英語科教育教材分析演習 | | 1 | | 1 |
| | | △ 英語科教育基礎研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | △ 英語科教育応用研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.13 | 9.44 | 3 | 14.57 |
| 教授 | 前川利広 | 人間教育学セミナー（教職の意義） | | 0.06 | | 0.06 |
| | | ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語ＡⅠ | | | 1 | 1 |
| | | ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語ＢⅡ | | | 1 | 1 |
| | | コミュニケーション英語CⅠ | | | 1 | 1 |
| | | 英語基礎研究 | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 英米文学講読 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 米文学概論 | 1 | | | 1 |
| | | アメリカ現代小説研究 | | 1 | | 1 |
| | | 英米文学基礎セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | 英米文学応用セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ アメリカ文学特論 | 1 | | | 1 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | △ アメリカ文学演習 | | 1 | | 1 |
| | | 計 | 2.63 | 6.5 | 3 | 12.13 |
| 教　授 | 加　藤　雅　啓 | ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語ＡⅠ | | | 1 | 1 |
| | | ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語ＢⅡ | | | 1 | 1 |
| | | コミュニケーション英語ＣⅡ | | | 1 | 1 |
| | | 英語基礎研究 | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 英語学概論 | 1 | | | 1 |
| | | 英文法 | 1 | | | 1 |
| | | 英語学基礎セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | 英語学応用セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 英語学演習 | | 1 | | 1 |
| | | △ 談話文法特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 英語学基礎研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | △ 英語学応用研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3.13 | 9.44 | 3 | 15.57 |
| 教　授 | 平　野　七　濤 | ドイツ語ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ基礎Ⅰ | | 2 | | 2 |
| | | ドイツ語ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ基礎Ⅱ | | 1 | | 1 |
| | | 総合演習（多文化社会論） | | 0.25 | | 0.25 |
| | | ドイツ語コミュニケーション応用Ⅰ | | 1 | | 1 |
| | | ドイツ語コミュニケーション応用Ⅱ | | 1 | | 1 |
| | | 比較文化Ａ | 1 | | | 1 |
| | | 比較文化Ｂ | 1 | | | 1 |
| | | 実践セミナーⅠ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | 実践セミナーⅡ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 国際理解教育特論 | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 計 | 2.13 | 5.69 | | 7.82 |
| 助教授 | 大　場　浩　正 | ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語ＢⅡ | | | 1 | 1 |
| | | コミュニケーション英語ＣⅠ | | | 1 | 1 |
| | | コミュニケーション英語ＣⅡ | | | 1 | 1 |
| | | 英語基礎研究 | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 中等英語科指導法（授業論） | 1 | | | 1 |
| | | 英語科教育基礎セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | 英語科教育応用セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 英語科教育コミュニケーション特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 英語科教育教材開発演習 | | 1 | | 1 |
| | | △ 英語科教育基礎研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | △ 英語科教育応用研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.13 | 9.44 | 3 | 14.57 |
| 講　師 | 酒　井　英　樹 | ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語ＡⅠ | | | 1 | 1 |
| | | ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語ＢⅠ | | | 1 | 1 |
| | | コミュニケーション英語ＣⅡ | | | 1 | 1 |
| | | 英語基礎研究 | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 中等英語科指導法（評価論） | 1 | | | 1 |
| | | 英語科教育基礎セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | 英語科教育応用セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 英語科教育方法演習 | | 1 | | 1 |
| | | △ 英語科教育言語習得・児童英語特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 英語科教育基礎研究セミナー | | 2 | | 2 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | △ 英語科教育応用研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | △ 英語科教育児童英語特論 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 計 | 2.63 | 9.44 | 3 | 15.07 |
| 講師 | 野地美幸 | ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語ＡⅡ | | | 2 | 2 |
| | | 総合演習（ことばと社会） | | 0.17 | | 0.17 |
| | | コミュニケーション英語ＣⅠ | | | 1 | 1 |
| | | 英語基礎研究 | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 英語音声学 | 1 | | | 1 |
| | | 英語学演習 | | 1 | | 1 |
| | | 英語学基礎セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | 英語学応用セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 英語学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 生成文法特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 英語学基礎研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | △ 英語学応用研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3.13 | 9.61 | 3 | 15.74 |
| 講師 | 若山真幸 | ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語ＡⅡ | | | 1 | 1 |
| | | ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語ＢⅠ | | | 1 | 1 |
| | | 総合演習（ことばと社会） | | 0.17 | | 0.17 |
| | | コミュニケーション英語ＣⅠ | | | 1 | 1 |
| | | 英語基礎研究 | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 英語史 | 1 | | | 1 |
| | | 英語ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ（ﾒﾃﾞｨｱ英語） | | 1 | | 1 |
| | | 英語学基礎セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | 英語学応用セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「英語」 | | 0.11 | | 0.11 |
| | | △ 英文法特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 生成文法演習 | | 1 | | 1 |
| | | △ 英語学基礎研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | △ 英語学応用研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.13 | 10.61 | 3 | 15.74 |
| 外国人教師 | ｶﾙﾃﾝﾊﾞｯｸ・ｷｬﾛﾘﾝ・ﾙｲｰｽﾞ | ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語ＡⅠ | | | 4 | 4 |
| | | ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語ＡⅡ | | | 4 | 4 |
| | | 英語ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ（会話） | | 1 | | 1 |
| | | 英語ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ（ﾗｲﾃｨﾝｸﾞ） | | 1 | | 1 |
| | | △ 現代英語特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 現代英語演習 | | 1 | | 1 |
| | | 計 | 1 | 3 | 8 | 12 |

〈社会系教育講座〉

| 職名 | 氏名 | 授業科目名（△印は大学院授業科目を示す。） | 毎週授業時間数 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 講義 | 演習 | 実験実習実技 | 計 |
| 教授 | 大嶽幸彦 | 人文環境研究 | 1 | | | 1 |
| | | 地図と地誌 | 1 | | | 1 |
| | | 地理教材開発論 | 0.33 | | | 0.33 |
| | | 国際地誌学 | 1 | | | 1 |
| | | 地誌学外書講読 | 1 | | | 1 |
| | | 地理学専門セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「社会」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 地理学専門セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「社会」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「社会」 | | 0.07 | | 0.07 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「社会」 | | 0.07 | | 0.07 |
| | | △ 地誌学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 地域研究実験 | | | 1 | 1 |
| | | △ 地理学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 5.33 | 6.3 | 1 | 12.63 |
| 教　授 | 鈴　木　敏　紀 | 総合演習（自然と人間） | | 0.5 | | 0.5 |
| | | アメリカ事情 | | 1 | | 1 |
| | | 経済学概説 | 1 | | | 1 |
| | | 公民教材開発論 | 0.2 | | | 0.2 |
| | | 経済学文献講読 | 1 | | | 1 |
| | | 経済学領域専門セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「社会」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 実践セミナーⅡ「社会」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「社会」 | | 0.07 | | 0.07 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「社会」 | | 0.07 | | 0.07 |
| | | △ 経済学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 経済学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 経済学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3.2 | 7.8 | | 11 |
| 教　授 | 藤　澤　郁　夫 | ラテン語 | | 1 | | 1 |
| | | 倫理学概説 | 1 | | | 1 |
| | | 公民教材開発論 | 0.2 | | | 0.2 |
| | | 倫理学文献講読 | 1 | | | 1 |
| | | 実践セミナーⅠ「社会」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 倫理学領域専門セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「社会」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「社会」 | | 0.07 | | 0.07 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「社会」 | | 0.07 | | 0.07 |
| | | △ 倫理学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 倫理学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3.2 | 5.3 | | 8.5 |
| 教　授 | 赤　羽　孝　之 | 社　会 | 0.33 | | | 0.33 |
| | | 地域と産業・社会 | 1 | | | 1 |
| | | 地理学実験 | | | 1 | 1 |
| | | 地域調査法Ｂ | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 地理教材開発論 | 0.33 | | | 0.33 |
| | | 経済地理学 | 1 | | | 1 |
| | | 地理学野外実験 | | | 1 | 1 |
| | | 地理学専門セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「社会」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 地理学専門セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「社会」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「社会」 | | 0.07 | | 0.07 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「社会」 | | 0.07 | | 0.07 |
| | | △ 人文地理学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 地理学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3.66 | 6.8 | 2 | 12.46 |
| 教　授 | 安　田　　尚 | 社会学概説 | 1 | | | 1 |
| | | 地域調査法Ｃ | | 1 | | 1 |
| | | 公民教材開発論 | 0.2 | | | 0.2 |
| | | 社会学文献講読 | 1 | | | 1 |
| | | 社会学領域専門セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「社会」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 実践セミナーⅡ「社会」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「社会」 | | 0.07 | | 0.07 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「社会」 | | 0.07 | | 0.07 |
| | | △ 社会学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 社会学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3.2 | 5.3 | | 8.5 |
| 教　授 | 山　本　友　和 | 社会科・公民科教育学基礎 | 1 | | | 1 |
| | | 初等社会科指導法 | 0.33 | 0.33 | | 0.66 |
| | | 社会科学習過程論 | 0.33 | | | 0.33 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 社会科・公民科指導法 | 1 | | | 1 |
| | | 社会科教育専門セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「社会」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 社会科教育専門セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「社会」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「社会」 | | 0.07 | | 0.07 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「社会」 | | 0.07 | | 0.07 |
| | | △ 社会科教育特論C | 1 | | | 1 |
| | | △ 公民科教育論 | 0.5 | 0.5 | | 1 |
| | | △ 社会科教育学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 社会科教育学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 4.16 | 9.13 | | 13.29 |
| 教　授 | 佐　藤　芳　徳 | 総合演習（自然と人間） | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 自然地理研究 | 1 | | | 1 |
| | | 地理学実験 | | | 1 | 1 |
| | | 地域調査法B | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 地理教材開発論 | 0.33 | | | 0.33 |
| | | 自然地理学 | 1 | | | 1 |
| | | 地理学野外実験 | | | 1 | 1 |
| | | 地理学専門セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「社会」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 地理学専門セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「社会」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「社会」 | | 0.07 | | 0.07 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「社会」 | | 0.07 | | 0.07 |
| | | △ 自然地理学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 地域研究実験 | | | 1 | 1 |
| | | △ 地理学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3.33 | 7.3 | 3 | 13.63 |
| 助教授 | 松　田　愼　也 | 宗教学概説 | 1 | | | 1 |
| | | 公民教材開発論 | 0.2 | | | 0.2 |
| | | 宗教学文献講読 | 1 | | | 1 |
| | | 宗教学領域専門セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「社会」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 宗教学領域専門セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「社会」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「社会」 | | 0.07 | | 0.07 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「社会」 | | 0.07 | | 0.07 |
| | | △ 宗教学特論 | 1 | | | 1 |
| | | 計 | 3.2 | 4.3 | | 7.5 |
| 助教授 | 河　西　英　通 | 社　会 | 0.33 | | | 0.33 |
| | | 日本史研究B | 1 | | | 1 |
| | | 地域調査法A | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 歴史・民俗資料演習 | | 1 | | 1 |
| | | 歴史教材開発論 | 0.33 | | | 0.33 |
| | | 日本近現代社会史認識論 | 1 | | | 1 |
| | | 日本史システム専門セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「社会」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 日本史システム専門セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「社会」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「社会」 | | 0.07 | | 0.07 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「社会」 | | 0.07 | | 0.07 |
| | | △ 地域教育演習 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | △ 日本史システム特論B | 1 | | | 1 |
| | | △ 日本史システム研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 日本史システム研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3.66 | 10.13 | | 13.79 |
| 助教授 | 浅　倉　有　子 | 日本史研究A | 1 | | | 1 |
| | | 文化体験演習 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | 地域調査法A | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 博物館資料論 | 0.25 | | | 0.25 |
| | | 歴史教材開発論 | 0.33 | | | 0.33 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 地域社会学習法 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 日本前近代社会史認識論 | 1 | | | 1 |
| | | 日本史システム専門セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「社会」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 日本史システム専門セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「社会」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「社会」 | | 0.07 | | 0.07 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「社会」 | | 0.07 | | 0.07 |
| | | △ 地域教育演習 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | △ 日本史システム特論A | 1 | | | 1 |
| | | △ 日本史システム研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 日本史システム研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 4.08 | 9.46 | | 13.54 |
| 助教授 | 下 里 俊 行 | 総合演習（多文化社会論） | | 0.25 | | 0.25 |
| | | ロシア語コミュニケーション | | 1 | | 1 |
| | | 世界史研究入門 | 1 | | | 1 |
| | | 歴史教材開発論 | 0.33 | | | 0.33 |
| | | ユーラシア史認識論 | 1 | | | 1 |
| | | 外国史システム専門セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「社会」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 外国史システム専門セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「社会」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「社会」 | | 0.07 | | 0.07 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「社会」 | | 0.07 | | 0.07 |
| | | △ 国際理解教育特論 | 0.13 | | | 0.13 |
| | | △ 外国史システム特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 外国史システム研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 外国史システム研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3.46 | 9.55 | | 13.01 |
| 助教授 | 小田桐 忍 | 日本国憲法 | 1 | | | 1 |
| | | 社 会 | 0.33 | | | 0.33 |
| | | 法律学概説 | 1 | | | 1 |
| | | 政治学概説 | 1 | | | 1 |
| | | 公民教材開発論 | 0.2 | | | 0.2 |
| | | 法律学文献講読 | 1 | | | 1 |
| | | 法律学領域専門セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「社会」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 実践セミナーⅡ「社会」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「社会」 | | 0.07 | | 0.07 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「社会」 | | 0.07 | | 0.07 |
| | | △ 法律学特論 | 1 | | | 1 |
| | | 計 | 5.53 | 2.3 | | 7.83 |
| 助教授 | 茨 木 智 志 | 社会科・地理歴史科教育学基礎A | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 初等社会科指導法 | 0.33 | 0.33 | | 0.66 |
| | | 社会科学習過程論 | 0.33 | | | 0.33 |
| | | 社会科・地理歴史科指導法A | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 社会科教育専門セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「社会」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 社会科教育専門セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「社会」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「社会」 | | 0.07 | | 0.07 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「社会」 | | 0.07 | | 0.07 |
| | | △ 社会科教育特論B | 1 | | | 1 |
| | | △ 地理歴史科教育論 | 0.25 | 0.25 | | 0.5 |
| | | △ 社会科教育学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 社会科教育学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.91 | 8.88 | | 11.79 |
| 講 師 | 志 村 喬 | 人間教育学セミナー（教職の意義） | | 0.06 | | 0.06 |
| | | 社会科・地理歴史科教育学基礎A | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 初等社会科指導法 | 0.33 | 0.33 | | 0.66 |
| | | 社会科学習過程論 | 0.33 | | | 0.33 |
| | | 社会科・地理歴史科指導法A | 0.5 | | | 0.5 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 社会科教育専門セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 社会科教育専門セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「社会」 | | 0.07 | | 0.07 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「社会」 | | 0.07 | | 0.07 |
| | | △ 社会科教育特論A | 1 | | | 1 |
| | | △ 地理歴史科教育論 | 0.25 | 0.25 | | 0.5 |
| | | △ 社会科教育学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 社会科教育学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.91 | 8.78 | | 11.69 |

〈自然系教育講座（数学）〉

| 職名 | 氏名 | 授業科目名（△印は大学院授業科目を示す。） | 毎週授業時間数 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 講義 | 演習 | 実験実習実技 | 計 |
| 教授 | 田中　博 | 解析学と探究過程 | 0.25 | 0.25 | | 0.5 |
| | | 微分積分学演習 | | 1 | | 1 |
| | | 確率論 | 1 | | | 1 |
| | | 解析学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「数学」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 解析学A | 1 | | | 1 |
| | | 解析学B | 1 | | | 1 |
| | | 解析学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「数学」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「数学」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「数学」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 解析学特論A | 1 | | | 1 |
| | | △ 解析学特論B | 1 | | | 1 |
| | | △ 解析学演習 | | 1 | | 1 |
| | | △ 解析学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 5.25 | 8.81 | | 14.06 |
| 教授 | 黒木伸明 | 算数 | 1 | | | 1 |
| | | 数学基礎演習Ⅰ | | 1 | | 1 |
| | | 代数学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「数学」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 代数学B | 1 | | | 1 |
| | | 代数学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「数学」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「数学」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「数学」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 代数学特論A | 1 | | | 1 |
| | | △ 代数学演習 | | 1 | | 1 |
| | | △ 代数学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 代数学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3 | 10.56 | | 13.56 |
| 教授 | 森　博 | 基礎微分積分学 | 1 | | | 1 |
| | | 微分積分学 | 1 | | | 1 |
| | | 幾何学と探究過程 | 0.25 | 0.25 | | 0.5 |
| | | 幾何学A | 1 | | | 1 |
| | | 幾何学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「数学」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 幾何学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「数学」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「数学」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「数学」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 幾何学特論A | 1 | | | 1 |
| | | △ 幾何学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 幾何学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 4.25 | 8.81 | | 13.06 |
| 教授 | 溝上武實 | 人間教育学セミナー（教職の意義） | | 0.06 | | 0.06 |
| | | 算数 | 1 | | | 1 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 数学基礎演習Ⅱ | | 1 | | 1 |
| | | 確率論と探究過程 | 0.25 | 0.25 | | 0.5 |
| | | 幾何学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「数学」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 幾何学C | 1 | | | 1 |
| | | 数理統計学 | 1 | | | 1 |
| | | 幾何学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「数学」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「数学」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「数学」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 幾何学特論B | 1 | | | 1 |
| | | △ 幾何学演習 | | 1 | | 1 |
| | | △ 幾何学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 幾何学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 4.25 | 10.87 | | 15.12 |
| 助教授 | 中　川　　仁 | 基礎線形代数学 | 1 | | | 1 |
| | | 線形代数学 | 1 | | | 1 |
| | | 代数学と探究過程 | 0.25 | 0.25 | | 0.5 |
| | | 代数学A | 1 | | | 1 |
| | | 計算機数学演習 | | 1 | | 1 |
| | | 代数学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「数学」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 代数学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「数学」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「数学」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「数学」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 代数学特論B | 1 | | | 1 |
| | | △ 代数学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 代数学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 4.25 | 9.81 | | 14.06 |
| 助教授 | 岩　崎　　浩 | 数学的経験と学習過程 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | 確率論と探究過程 | 0.25 | 0.25 | | 0.5 |
| | | 数学教育学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「数学」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 学習指導と学校図書館 | 0.25 | | | 0.25 |
| | | 数学教材開発論 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 数学科指導法 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 数学教育学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「数学」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「数学」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「数学」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 数学教育学特論A | 0.5 | | | 0.5 |
| | | △ 数学教育学特論B | 0.25 | | | 0.25 |
| | | △ 数学教育学特論演習 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | △ 数学教育学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 数学教育学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.25 | 9.64 | | 11.89 |
| 講　師 | 髙　橋　　等 | 数学的経験と学習過程 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | 算数科指導法 | 0.5 | 0.5 | | 1 |
| | | 数学学習過程論 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 代数学と探究過程 | 0.25 | 0.25 | | 0.5 |
| | | 数学教育学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「数学」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 数学科指導法 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 数学教育学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「数学」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「数学」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「数学」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 数学教育学特論A | 0.5 | | | 0.5 |
| | | △ 数学教育学特論B | 0.25 | | | 0.25 |
| | | △ 数学教育学特論演習 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | △ 数学教育学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 数学教育学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 計 | 2.5 | 10.14 | | 12.64 |

〈自然系教育講座（理科）〉

| 職名 | 氏名 | 授業科目名（△印は大学院授業科目を示す。） | 毎週授業時間数 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 講義 | 演習 | 実験実習実技 | 計 |
| 教授 | 森川鐵朗 | 理科 | 0.08 | | | 0.08 |
| | | 化学 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 化学実験 | | | 1 | 1 |
| | | 物理化学 | 1 | | | 1 |
| | | 化学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 実践セミナーⅡ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 科学情報教育特論 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | △ 物質化学実験 | | | 1 | 1 |
| | | △ 化学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.08 | 4.32 | 2 | 8.4 |
| 教授 | 西山保子 | 体験学習 | | | 0.18 | 0.18 |
| | | 理科 | 0.08 | | | 0.08 |
| | | 総合演習（自然環境） | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 物理学 | 0.33 | | | 0.33 |
| | | 物理学実験 | | | 0.67 | 0.67 |
| | | 光学 | 1 | | | 1 |
| | | 実践セミナーⅠ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 物性物理学 | 1 | | | 1 |
| | | 物理学習教材演習 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | 物理学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 光物性特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 物理学実験 | | | 0.67 | 0.67 |
| | | △ 物理教材研究 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | △ 物理教材実験 | | | 1 | 1 |
| | | △ 物理学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3.41 | 5.65 | 2.52 | 11.58 |
| 教授 | 室谷利夫 | 理科 | 0.08 | | | 0.08 |
| | | 理科研究法 | 0.25 | | | 0.25 |
| | | 物理学 | 0.33 | | | 0.33 |
| | | 物理学実験 | | | 0.67 | 0.67 |
| | | 実践セミナーⅠ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 現代物理学 | 1 | | | 1 |
| | | 物理学習教材演習 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | 物理学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 現代物理学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 物理学実験 | | | 0.67 | 0.67 |
| | | △ 物理学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.66 | 4.65 | 1.34 | 8.65 |
| 教授 | 中川清隆 | 理科 | 0.08 | | | 0.08 |
| | | 地学 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 地学実験 | | | 0.67 | 0.67 |
| | | 気象学 | 1 | | | 1 |
| | | 気象学実験 | | | 2 | 2 |
| | | 地学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 地学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 生命・地球システム教育演習 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 大気科学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 大気科学実験 | | | 2 | 2 |
| | | △ 地学野外実習 | | | 0.67 | 0.67 |
| | | △ 地学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 地学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.58 | 8.52 | 5.34 | 16.44 |
| 教　授 | 小　林　辰　至 | 人間教育学セミナー（教職の意義） | | 0.06 | | 0.06 |
| | | 理　科 | 0.08 | | | 0.08 |
| | | 理科教育学 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 理科学習過程論 | 1 | | | 1 |
| | | 理科教材開発論 | 1 | | | 1 |
| | | 初等理科指導法 | 1 | 1 | | 2 |
| | | 理科教育学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 実践セミナーⅡ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 理科教育内容・方法学特論 | 0.5 | 0.5 | | 1 |
| | | △ 理科教育課程開発特論 | 0.5 | 0.5 | | 1 |
| | | △ 生物教材研究 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | △ 理科教育学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 理科教育学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | △ 理科学習過程特論 | 0.5 | 0.5 | | 1 |
| | | △ 理科カリキュラム開発特論 | 0.5 | 0.5 | | 1 |
| | | 計 | 6.08 | 9.38 | | 15.46 |
| 教　授 | 高津戸　　秀 | 理　科 | 0.08 | | | 0.08 |
| | | 化学 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 化学実験 | | | 1 | 1 |
| | | 有機化学 | 1 | | | 1 |
| | | 化学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 実践セミナーⅡ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 有機化学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 物質化学実験 | | | 1 | 1 |
| | | △ 化学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.58 | 4.32 | 2 | 8.9 |
| 助教授 | 庭　野　義　英 | 理　科 | 0.08 | | | 0.08 |
| | | 理科研究法 | 0.25 | | | 0.25 |
| | | 理科教育学 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 理科指導法 | 1 | | | 1 |
| | | 理科指導法演習 | | 1 | | 1 |
| | | 理科教育学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 実践セミナーⅡ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 理科教育学特論Ⅰ | 1 | | | 1 |
| | | △ 理科教育学特論Ⅱ | 1 | | | 1 |
| | | △ 理科教育学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 理科教育学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3.83 | 7.32 | | 11.15 |
| 助教授 | 大　場　孝　信 | 理　科 | 0.08 | | | 0.08 |
| | | 地学 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 地学実験 | | | 0.67 | 0.67 |
| | | 地球物質科学 | 1 | | | 1 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 地球物質科学実験 | | | 2 | 2 |
| | | 地学野外実習 | | | 1 | 1 |
| | | 地学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 地学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 生命・地球システム教育演習 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 地球物質科学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 地球物質科学実験 | | | 2 | 2 |
| | | △ 地学野外実習 | | | 0.67 | 0.67 |
| | | △ 地学教材研究 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | △ 地学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 地学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.58 | 9.02 | 6.34 | 17.94 |
| 助教授 | 小　川　　茂 | 理　科 | 0.08 | | | 0.08 |
| | | 生物学 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 生物学実験 | | | 1 | 1 |
| | | 細胞学 | 1 | | | 1 |
| | | 生物学野外研究法 | | | 1 | 1 |
| | | 生物学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 生物学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 生命・地球システム教育演習 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 細胞学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 細胞学実験 | | | 2 | 2 |
| | | △ 生物学野外実習 | | | 1 | 1 |
| | | △ 生物教材研究 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | △ 生物学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 生物学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3.08 | 8.52 | 5 | 16.6 |
| 助教授 | 天　野　和　孝 | 体験学習 | | | 0.18 | 0.18 |
| | | 理　科 | 0.08 | | | 0.08 |
| | | 理科研究法 | 0.25 | | | 0.25 |
| | | 地学実験 | | | 0.67 | 0.67 |
| | | 博物館資料論 | 0.25 | | | 0.25 |
| | | 地圏環境進化学 | 1 | | | 1 |
| | | 地圏環境進化学実験 | | | 2 | 2 |
| | | 地学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 地学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 生命・地球システム教育演習 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 地圏環境進化学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 地圏環境進化学実験 | | | 2 | 2 |
| | | △ 地学野外実習 | | | 0.67 | 0.67 |
| | | △ 地学教材研究 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | △ 地学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 地学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.58 | 9.02 | 5.52 | 17.12 |
| 助教授 | 定　本　嘉　郎 | 理　科 | 0.08 | | | 0.08 |
| | | 物理学 | 0.33 | | | 0.33 |
| | | 物理学実験 | | | 0.67 | 0.67 |
| | | 実践セミナーⅠ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 物理学習教材演習 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | 物理学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 電磁物性特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 物理学実験 | | | 0.67 | 0.67 |
| | | △ 物理教材研究 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | △ 物理教材実験 | | | 1 | 1 |
| | | △ 物理学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 1.41 | 5.15 | 2.34 | 8.9 |
| 助教授 | 中村雅彦 | 理科 | 0.08 | | | 0.08 |
| | | 総合演習（自然環境） | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 理科研究法 | 0.25 | | | 0.25 |
| | | 生物学 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 生物学実験 | | | 1 | 1 |
| | | 生態学 | 1 | | | 1 |
| | | 生物学野外研究法 | | | 1 | 1 |
| | | 生物学野外実習 | | | 1 | 1 |
| | | 生物学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 生物学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「理科」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 生命・地球システム教育演習 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 動物学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 形態学実験 | | | 1 | 1 |
| | | △ 生物学野外実習 | | | 1 | 1 |
| | | △ 生物学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 生物学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.83 | 9.02 | 5 | 16.85 |

〈芸術系教育講座（音楽）〉

| 職名 | 氏名 | 授業科目名（△印は大学院授業科目を示す。） | 毎週授業時間数 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 講義 | 演習 | 実験実習実技 | 計 |
| 教授 | 山形忠顯 | 音楽 | | | 0.22 | 0.22 |
| | | 声楽基礎 | | 1 | | 1 |
| | | 独唱Ⅰ | | 0.33 | | 0.33 |
| | | 独唱Ⅱ | | 0.33 | | 0.33 |
| | | 歌唱表現法セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 歌唱表現法セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 独唱 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | △ 児童発声研究 | | 1 | | 1 |
| | | △ 声楽研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | | 9.31 | 0.22 | 9.53 |
| 教授 | 工藤智昭 | 音楽 | | | 0.22 | 0.22 |
| | | 独唱Ⅰ | | 0.33 | | 0.33 |
| | | 独唱Ⅱ | | 0.33 | | 0.33 |
| | | 歌唱表現法セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 合唱 | | 1.5 | | 1.5 |
| | | 音楽劇創作 | | 0.67 | | 0.67 |
| | | 歌唱表現法セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 独唱 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | △ 合唱 | | 1 | | 1 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | △ 音楽劇研究 | | 1 | | 1 |
| | | △ 声楽研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | | 11.48 | 0.22 | 11.7 |
| 教　授 | 重　嶋　　博 | 中等音楽科指導法（本質論） | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 中等音楽科指導法（授業論） | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 初等音楽科指導法 | 0.5 | 0.5 | | 1 |
| | | 音楽教育セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 中等音楽科指導法（実践応用論） | | 0.33 | | 0.33 |
| | | 音楽教育セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 音楽表現カリキュラム開発特論 | 0.17 | 0.17 | | 0.34 |
| | | △ 音楽科教育研究法 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | △ 音楽科教育論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 音楽教育研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 音楽教育研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.17 | 10.32 | | 12.49 |
| 教　授 | 池　田　　操 | 音　楽 | | | 0.22 | 0.22 |
| | | ソルフェージュA | | 0.33 | | 0.33 |
| | | ソルフェージュB | | 0.33 | | 0.33 |
| | | 独唱Ⅰ | | 0.33 | | 0.33 |
| | | 独唱Ⅱ | | 0.33 | | 0.33 |
| | | 歌唱表現法セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 歌唱表現法セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 独唱 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | △ 重唱 | | 1 | | 1 |
| | | △ 声楽研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | | 8.97 | 0.22 | 9.19 |
| 教　授 | 茂手木　潔　子 | 人間教育学セミナー（教職の意義） | | 0.06 | | 0.06 |
| | | 音　楽 | | | 0.22 | 0.22 |
| | | 総合演習（芸術社会教育論） | | 0.33 | | 0.33 |
| | | 日本音楽概論 | 1 | | | 1 |
| | | 音楽学B | 1 | | | 1 |
| | | 博物館資料論 | 0.25 | | | 0.25 |
| | | 合奏C | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 地域音楽研究 | 1 | | | 1 |
| | | 鑑賞教材分析 | 1 | | | 1 |
| | | 独唱Ⅲ | | 1 | | 1 |
| | | 音楽学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 音楽学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 国際理解教育特論 | 0.13 | | | 0.13 |
| | | △ 日本音楽研究 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | △ 音楽文化論A | 1 | | | 1 |
| | | △ 音楽学演習 | | 1 | | 1 |
| | | △ 音楽学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 音楽学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 5.38 | 11.71 | 0.22 | 17.31 |
| 教　授 | 後　藤　　丹 | 体験学習 | | | 0.18 | 0.18 |
| | | 音　楽 | | | 0.22 | 0.22 |
| | | 表現・＜子ども＞の活動 | | | 0.33 | 0.33 |
| | | 作曲基礎 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 楽曲分析法 | | 1 | | 1 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 作曲法 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 作曲セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 音楽劇創作 | | 0.67 | | 0.67 |
| | | 作曲セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 情報表現教育演習 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | △ 楽曲分析Ｂ | | 1 | | 1 |
| | | △ 作曲研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | | 10.32 | 0.73 | 11.05 |
| 教　授 | 山　本　茂　夫 | 音　楽 | | | 0.22 | 0.22 |
| | | ソルフェージュＡ | | 0.33 | | 0.33 |
| | | ソルフェージュＢ | | 0.33 | | 0.33 |
| | | 器楽基礎（管楽器） | | 1 | | 1 |
| | | 器楽基礎（弦楽器） | | 1 | | 1 |
| | | 合奏ＡⅠ | | 1 | | 1 |
| | | 合奏ＡⅡ | | 1 | | 1 |
| | | 指揮法Ⅰ | | 1 | | 1 |
| | | 指揮法Ⅱ | | 1 | | 1 |
| | | 管楽器表現法セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 弦楽器表現法セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 管楽器表現法セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 管楽器演奏研究（独奏） | | 1 | | 1 |
| | | △ 弦楽器演奏研究（独奏） | | 1 | | 1 |
| | | △ 器楽アンサンブル | | 1 | | 1 |
| | | △ 室内楽研究Ａ | | 1 | | 1 |
| | | △ 室内楽研究Ｂ | | 1 | | 1 |
| | | △ 器楽研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 器楽研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | | 21.98 | 0.22 | 22.2 |
| 助教授 | 酒　井　　創 | 音　楽 | | | 0.22 | 0.22 |
| | | 表現・＜子ども＞の活動 | | | 0.33 | 0.33 |
| | | ピアノ独奏Ⅰ（伴奏法を含む。） | | 0.5 | | 0.5 |
| | | ピアノ独奏Ⅱ | | 0.5 | | 0.5 |
| | | ピアノ独奏セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | ピアノ独奏セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ ピアノ演奏研究Ⅰ（独奏） | | 0.5 | | 0.5 |
| | | △ ピアノ演奏研究Ⅱ（アンサンブル） | | 0.5 | | 0.5 |
| | | △ 器楽研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 器楽研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | △ ピアノ演奏研究Ⅱ（伴奏） | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 計 | | 10.82 | 0.55 | 11.37 |
| 助教授 | 平　野　俊　介 | ピアノ独奏Ⅰ（伴奏法を含む。） | | 0.5 | | 0.5 |
| | | ピアノ独奏Ⅱ | | 0.5 | | 0.5 |
| | | ピアノ独奏セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | ピアノ独奏セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ ピアノ演奏研究Ⅰ（独奏） | | 0.5 | | 0.5 |
| | | △ ピアノ演奏研究Ⅱ（アンサンブル） | | 0.5 | | 0.5 |
| | | △ 器楽研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | △ 器楽研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | △ ピアノ演奏研究Ⅱ（伴奏） | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 計 | | 10.82 | | 10.82 |
| 助教授 | 小　川　昌　文 | 表現・状況的教育方法演習 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 中等音楽科指導法（本質論） | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 中等音楽科指導法（授業論） | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 音楽教育セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 中等音楽科指導法（実践応用論） | | 0.33 | | 0.33 |
| | | 音楽教育セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 学習と表現特論 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | △ 音楽表現カリキュラム開発特論 | 0.17 | 0.17 | | 0.34 |
| | | △ 音楽教材特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 音楽科教育研究法 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | △ 音楽教育の歴史と思想 | 1 | | | 1 |
| | | △ 音楽教育研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 音楽教育研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3.17 | 10.32 | | 13.49 |
| 助教授 | 時　得　紀　子 | 音　楽 | | | 0.22 | 0.22 |
| | | 初等音楽科指導法 | 0.5 | 0.5 | | 1 |
| | | 音楽教育セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 中等音楽科指導法（実践応用論） | | 0.33 | | 0.33 |
| | | 音楽教育セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 総合的学習と音楽科 | 1 | | | 1 |
| | | △ 総合芸術と表現活動 | 1 | | | 1 |
| | | △ 音楽教育研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 音楽教育研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.5 | 9.15 | 0.22 | 11.87 |
| 助教授 | 植　村　幸　生 | 韓国語コミュニケーション | | 1 | | 1 |
| | | アジア音楽概論 | 1 | | | 1 |
| | | 音楽学A | 1 | | | 1 |
| | | 音楽学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 音楽学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 音楽学概説 | 1 | | | 1 |
| | | △ 音楽文化論B | 1 | | | 1 |
| | | △ 音楽学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 音楽学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 4 | 9.32 | | 13.32 |
| 助教授 | 阿　部　亮太郎 | 表現・相互行為教育演習 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 音　楽 | | | 0.22 | 0.22 |
| | | ソルフェージュA | | 0.33 | | 0.33 |
| | | ソルフェージュB | | 0.33 | | 0.33 |
| | | 作曲基礎 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 作曲法 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 作曲セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 学習と表現 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 音楽劇創作 | | 0.67 | | 0.67 |
| | | 作曲セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「音楽」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 音楽表現カリキュラム開発特論 | 0.17 | 0.17 | | 0.34 |
| | | △ 作曲 | | 1 | | 1 |
| | | △ 楽曲分析A | | 1 | | 1 |
| | | △ 作曲研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 0.67 | 10.99 | 0.22 | 11.88 |

〈芸術系教育講座（美術）〉

| 職名 | 氏名 | 授業科目名（△印は大学院授業科目を示す。） | 毎週授業時間数 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 講義 | 演習 | 実験実習実技 | 計 |
| 教授 | 増谷直樹 | 造形基礎A | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 伝統絵画表現と鑑賞 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | 造形基礎C | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 絵画表現A | | | 2 | 2 |
| | | 絵画表現モデル実習 | | | 0.67 | 0.67 |
| | | 絵画表現セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | 絵画表現セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 西洋画研究A | | | 1 | 1 |
| | | △ 西洋画研究B | | | 1 | 1 |
| | | △ 日本画研究A | | | 1 | 1 |
| | | △ 絵画教育基礎研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | △ 絵画教育応用研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 計 | | 8.94 | 5.67 | 14.61 |
| 教授 | 山ノ下堅一 | 図画工作 | | 1 | | 1 |
| | | 造形表示A | | 0.25 | | 0.25 |
| | | 造形表示B | | 0.25 | | 0.25 |
| | | デザインワークⅠ | | 1 | | 1 |
| | | デザインワークⅡ | | | 2 | 2 |
| | | 現代デザイン論 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | デザイン表現セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | 実践セミナーⅡ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 視覚デザイン研究 | | | 2 | 2 |
| | | 計 | 0.5 | 4.9 | 4 | 9.4 |
| 教授 | 太田將勝 | 総合演習（芸術社会教育論） | | 0.33 | | 0.33 |
| | | 中等美術科指導法（教材論） | | 1 | | 1 |
| | | 博物館資料論 | 0.25 | | | 0.25 |
| | | 図画工作科指導法 | 0.5 | 0.5 | | 1 |
| | | 中等美術科指導法（過程論） | 1 | | | 1 |
| | | 実践セミナーⅠ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | 実践セミナーⅡ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 美術教育特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 美術科教育論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 美術科教育教材開発演習 | | 1 | | 1 |
| | | △ 美術科教育応用研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3.75 | 5.23 | | 8.98 |
| 教授 | 風巻孝男 | 総合演習（芸術社会教育論） | | 0.33 | | 0.33 |
| | | 表現と鑑賞 | | 1 | | 1 |
| | | 伝統絵画表現と鑑賞 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | 西洋美術史論 | 1 | | | 1 |
| | | 西洋美術史演習 | | 1 | | 1 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 美術理論・美術史実地研究 | | | 1 | 1 |
| | | 実践セミナーⅠ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | 実践セミナーⅡ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 芸術理論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 西洋美術史特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 美術史教育基礎研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | △ 美術史教育応用研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3 | 6.93 | 1 | 10.93 |
| 教　授 | 西　村　俊　夫 | 図画工作 | | 1 | | 1 |
| | | 表現・＜子ども＞の活動 | | | 0.33 | 0.33 |
| | | 造形基礎Ｂ | | 0.25 | | 0.25 |
| | | 造形表示Ａ | | 0.25 | | 0.25 |
| | | 造形表示Ｂ | | 0.25 | | 0.25 |
| | | 造形基礎Ｄ | | 0.25 | | 0.25 |
| | | 総合造形表現 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | デザイン行為と意味生成 | | 1 | | 1 |
| | | 現代デザイン論 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 工芸表現Ａ | | | 2 | 2 |
| | | 現代工芸論 | 1 | | | 1 |
| | | 工芸科指導法（過程論） | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 工芸表現セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | 工芸表現セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 造形表現カリキュラム開発特論 | 0.25 | 0.25 | | 0.5 |
| | | △ 意味生成表現特論 | 0.25 | 0.25 | | 0.5 |
| | | △ メディアデザイン研究 | | | 2 | 2 |
| | | △ 木工芸研究 | | | 2 | 2 |
| | | △ 工芸教育基礎研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | △ 工芸教育応用研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | △ 金工研究 | | | 0.5 | 0.5 |
| | | 計 | 2.5 | 12.4 | 6.83 | 21.73 |
| 教　授 | 福　岡　奉　彦 | 造形基礎Ａ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 伝統絵画表現と鑑賞 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | 造形基礎Ｃ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 絵画表現モデル実習 | | | 0.67 | 0.67 |
| | | 絵画表現セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | 絵画表現セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 西洋画研究Ａ | | | 1 | 1 |
| | | △ 西洋画研究Ｂ | | | 1 | 1 |
| | | △ 版画研究 | | | 2 | 2 |
| | | △ 絵画教育基礎研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | △ 絵画教育応用研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 計 | | 8.94 | 4.67 | 13.61 |
| 助教授 | 岡　　充　夫 | 彫塑表現Ⅰ | | 1 | | 1 |
| | | 身体表現モデル実習 | | | 2 | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | 彫塑表現セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △ 塑造研究Ⅰ | | | 2 | 2 |
| | | △ 塑造研究Ⅱ | | | 2 | 2 |
| | | 計 | | 3.4 | 6 | 9.4 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 助教授 | 阿　部　靖　子 | 表現・＜子ども＞の活動 | | | 0.33 | 0.33 |
| | | 中等美術科指導法（基礎論） | 1 | | | 1 |
| | | 図画工作科指導法 | 0.5 | 0.5 | | 1 |
| | | 中等美術科指導法（方法論） | | 1 | | 1 |
| | | 実践セミナーⅠ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | 実践セミナーⅡ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △　実践場面分析演習Ⅰ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △　実践場面分析演習Ⅱ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △　情報表現教育演習 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | △　地域環境学習特論 | 0.33 | | | 0.33 |
| | | △　地域環境学習演習 | | 0.33 | | 0.33 |
| | | △　美術科教育方法演習 | | 1 | | 1 |
| | | △　美術科教育教材分析演習 | | 1 | | 1 |
| | | △　美術科教育応用研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 1.83 | 6.56 | 0.33 | 8.72 |
| 助教授 | 高　石　次　郎 | 体験学習 | | | 0.18 | 0.18 |
| | | 表現・状況的教育方法演習 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 図画工作 | | 1 | | 1 |
| | | 美術学習過程と造形遊び | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 造形基礎Ｂ | | 0.25 | | 0.25 |
| | | 造形基礎Ｄ | | 0.25 | | 0.25 |
| | | 総合造形表現 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 工芸表現と意味生成 | | 1 | | 1 |
| | | 工芸表現Ｂ | | | 2 | 2 |
| | | 工芸科指導法（過程論） | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 工芸表現セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | 工芸表現セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △　実践場面分析演習Ⅰ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △　実践場面分析演習Ⅱ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △　造形表現カリキュラム開発特論 | 0.25 | 0.25 | | 0.5 |
| | | △　意味生成表現特論 | 0.25 | 0.25 | | 0.5 |
| | | △　陶芸研究 | | | 2 | 2 |
| | | △　工芸教育基礎研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | △　工芸教育応用研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | △　金工研究 | | | 0.5 | 0.5 |
| | | 計 | 1.5 | 12.4 | 4.68 | 18.58 |
| 助教授 | 洞　谷　亜里佐 | 人間教育学セミナー（教職の意義） | | 0.06 | | 0.06 |
| | | 図画工作 | | 1 | | 1 |
| | | 表現・＜子ども＞の活動 | | | 0.33 | 0.33 |
| | | 造形基礎Ａ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 伝統絵画表現と鑑賞 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | 造形基礎Ｃ | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 絵画表現Ｃ | | | 2 | 2 |
| | | 絵画表現モデル実習 | | | 0.67 | 0.67 |
| | | 絵画表現セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | 絵画表現セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △　実践場面分析演習Ⅰ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △　実践場面分析演習Ⅱ「美術」 | | 0.1 | | 0.1 |
| | | △　日本画研究Ａ | | | 1 | 1 |
| | | △　日本画研究Ｂ | | | 2 | 2 |
| | | △　絵画教育基礎研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | △　絵画教育応用研究セミナー | | 2 | | 2 |
| | | 計 | | 10 | 6 | 16 |

〈生活・健康系教育講座（保健体育）〉

| 職名 | 氏名 | 授業科目名（△印は大学院授業科目を示す。） | 毎週授業時間数 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 講義 | 演習 | 実験実習実技 | 計 |
| 教授 | 三浦望慶 | スノースポーツ | | | 0.11 | 0.11 |
| | | 運動の科学 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 野外運動Ａ（スキー） | | | 0.5 | 0.5 |
| | | バイオメカニクス | 1 | | | 1 |
| | | 体育解剖学 | 1 | | | 1 |
| | | 実践セミナーⅠ「保健体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 実践セミナーⅡ「保健体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 体育学研究法 | 0.08 | | | 0.08 |
| | | △ バイオメカニクス特論 | 1 | | | 1 |
| | | 計 | 3.08 | 0.46 | 0.61 | 4.15 |
| 教授 | 砥堀雅信 | 保育・健康の指導法 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 運動の科学 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 学校健康教育Ａ（救急措置を含む。） | 0.25 | | | 0.25 |
| | | 学校健康教育Ｂ（学校安全を含む。） | 1 | | | 1 |
| | | 中等保健科指導法（課程論） | 1 | | | 1 |
| | | 中等保健科指導法（教材論） | 1 | | | 1 |
| | | 実践セミナーⅠ「保健体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 学校健康教育Ｃ（小児保健・精神保健を含む。） | 1 | | | 1 |
| | | 学校保健セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「保健体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 体育学研究法 | 0.08 | | | 0.08 |
| | | △ 教育保健学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 教育保健学演習 | | 1 | | 1 |
| | | △ 学校保健学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 5.33 | 5.96 | | 11.29 |
| 教授 | 青木眞 | スノースポーツ | | | 0.11 | 0.11 |
| | | 体　育 | 0.1 | | 0.2 | 0.3 |
| | | 体育の科学 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | 初等体育科指導法 | 0.5 | 0.5 | | 1 |
| | | 体育学習過程論 | | 1 | | 1 |
| | | 体育教材開発論 | | 1 | | 1 |
| | | 中等保健体育科指導法（課程論） | 1 | | | 1 |
| | | 中等保健体育科指導法（授業論） | 1 | | | 1 |
| | | 実践セミナーⅠ「保健体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 保健体育科教育セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「保健体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 体育カリキュラム開発特論 | 0.5 | 0.5 | | 1 |
| | | △ 保健体育科教育特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 体育学研究法 | 0.08 | | | 0.08 |
| | | △ 学校体育経営管理特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 保健体育科教育研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 保健体育科教育研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 5.18 | 9.52 | 0.31 | 15.01 |
| 教授 | 加藤泰樹 | マリンスポーツ | | | 0.25 | 0.25 |
| | | スノースポーツ | | | 0.11 | 0.11 |
| | | 表現・相互行為教育演習 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 体　育 | 0.1 | | 0.2 | 0.3 |
| | | 体育の科学 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | 体育哲学 | 1 | | | 1 |
| | | 初等体育科指導法 | 0.5 | 0.5 | | 1 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 中等保健体育科指導法（教材論） | 1 | | | 1 |
| | | 中等保健体育科指導法（学習論） | 1 | | | 1 |
| | | 体育学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「保健体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 体育学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「保健体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 体育学研究法 | 0.08 | | | 0.08 |
| | | △ 体育学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 体育学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 4.68 | 7.19 | 0.56 | 12.43 |
| 教　授 | 伊　藤　政　展 | 運動の科学 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 体育心理学 | 1 | | | 1 |
| | | 体育測定評価 | | 1 | | 1 |
| | | 体育心理学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「保健体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 体育心理学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「保健体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 体育学研究法 | 0.08 | | | 0.08 |
| | | △ 体育心理学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 体育心理学実験 | | | 2 | 2 |
| | | △ 体育心理学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 体育心理学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.08 | 9.46 | 2 | 13.54 |
| 教　授 | 長　澤　靖　夫 | スポーツ実践 | | | 1 | 1 |
| | | マリンスポーツ | | | 0.25 | 0.25 |
| | | スノースポーツ | | | 0.11 | 0.11 |
| | | 表現・人間学基礎論 | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 保育・健康の指導法 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | 体育の科学 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | 運動学（運動方法学を含む。） | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 体操・器械運動 | | | 1 | 1 |
| | | 運動学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「保健体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 運動学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「保健体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 体育学研究法 | 0.08 | | | 0.08 |
| | | △ 運動学特論 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | △ スポーツ運動学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 運動観察法演習 | | 1 | | 1 |
| | | △ 運動方法学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 運動方法学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.21 | 10.02 | 2.36 | 14.59 |
| 教　授 | 佐　藤　　誠 | スノースポーツ | | | 0.11 | 0.11 |
| | | 生理学 | 0.33 | | | 0.33 |
| | | 衛生学・公衆衛生学 | 1 | | | 1 |
| | | 学校健康教育Ａ（救急措置を含む。） | 0.25 | | | 0.25 |
| | | 実践セミナーⅠ「保健体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 実践セミナーⅡ「保健体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 体育学研究法 | 0.08 | | | 0.08 |
| | | △ 運動生理学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 健康管理学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 健康管理学演習 | | 1 | | 1 |
| | | △ 健康管理学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3.66 | 3.16 | 0.11 | 6.93 |
| 助教授 | 榊　原　　潔 | 体験学習 | | | 0.18 | 0.18 |
| | | スポーツ実践 | | | 1 | 1 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | マリンスポーツ | | | 0.25 | 0.25 |
| | | スノースポーツ | | | 0.11 | 0.11 |
| | | 身体表現の基礎 | | | 0.5 | 0.5 |
| | | 運動の科学 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 運動学（運動方法学を含む。） | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 運動学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「保健体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 球技 | | | 1 | 1 |
| | | 運動学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「保健体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 体育学研究法 | 0.08 | | | 0.08 |
| | | △ 運動学特論 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | △ 運動方法学演習Ｃ（サッカー） | | 1 | | 1 |
| | | △ 運動方法学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 運動方法学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 1.08 | 9.46 | 3.04 | 13.58 |
| 助教授 | 清　水　富　弘 | スポーツ実践 | | | 1 | 1 |
| | | マリンスポーツ | | | 0.25 | 0.25 |
| | | スノースポーツ | | | 0.11 | 0.11 |
| | | 運動の科学 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 野外運動Ａ（スキー） | | | 0.5 | 0.5 |
| | | 野外運動Ｂ（カヌー） | | | 1 | 1 |
| | | 体育経営管理学 | 1 | | | 1 |
| | | 運動学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「保健体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 運動学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「保健体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 体育学研究法 | 0.08 | | | 0.08 |
| | | △ 運動方法学演習Ｆ（水泳･野外運動） | | 1 | | 1 |
| | | △ 運動方法学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 運動方法学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 1.08 | 9.46 | 2.86 | 13.4 |
| 助教授 | 直　原　　幹 | 表現・人間学基礎論 | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 体　育 | 0.1 | | 0.2 | 0.3 |
| | | 運動の科学 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 武道 | | | 1 | 1 |
| | | 生理学 | 0.33 | | | 0.33 |
| | | 運動生理学 | 1 | | | 1 |
| | | 運動学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「保健体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 生理学実験 | | | 2 | 2 |
| | | 運動学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「保健体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 体育学研究法 | 0.08 | | | 0.08 |
| | | △ 武道学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 運動方法学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 運動方法学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.64 | 8.46 | 3.2 | 14.3 |
| 助教授 | 土　田　了　輔 | スポーツ実践 | | | 1 | 1 |
| | | 表現・人間学基礎論 | 0.13 | | | 0.13 |
| | | 体育の科学 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | 運動学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「保健体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 球技 | | | 1 | 1 |
| | | 運動学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「保健体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「体育」 | | 0.08 | | 0.08 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 体育学研究法 | 0.08 | | | 0.08 |
| | | △ 運動方法学演習Ｄ（バスケットボール） | | 1 | | 1 |
| | | △ 運動方法学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 運動方法学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 0.21 | 9.52 | 2 | 11.73 |
| 助教授 | 市　川　真　澄 | スノースポーツ | | | 0.11 | 0.11 |
| | | 体　育 | 0.1 | | 0.2 | 0.3 |
| | | 運動の科学 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 生理学 | 0.33 | | | 0.33 |
| | | 陸上競技 | | | 1 | 1 |
| | | 運動学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「保健体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 運動学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「保健体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 体育学研究法 | 0.08 | | | 0.08 |
| | | △ 運動方法学演習Ｂ（陸上競技） | | 1 | | 1 |
| | | △ 運動方法学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 運動方法学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 0.51 | 9.46 | 1.31 | 11.28 |
| 講　師 | 大　橋　奈希左 | 人間教育学セミナー（教職の意義） | | 0.06 | | 0.06 |
| | | スノースポーツ | | | 0.11 | 0.11 |
| | | 体　育 | 0.1 | | 0.2 | 0.3 |
| | | 表現・＜子ども＞の活動 | | | 0.33 | 0.33 |
| | | 身体表現の基礎 | | | 0.5 | 0.5 |
| | | 体育の科学 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | 舞踊 | | | 1 | 1 |
| | | 運動学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「保健体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | 運動学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「保健体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「体育」 | | 0.08 | | 0.08 |
| | | △ 体育学研究法 | 0.08 | | | 0.08 |
| | | △ 運動方法学演習Ｅ（ダンス） | | 1 | | 1 |
| | | △ 運動方法学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 運動方法学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 0.18 | 9.58 | 2.14 | 11.9 |

〈生活・健康系教育講座（技術）〉

| 職　名 | 氏　　名 | 授　業　科　目　名<br>（△印は大学院授業科目を示す。） | 毎週授業時間数 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 講　義 | 演　習 | 実験<br>実習<br>実技 | 計 |
| 教　授 | 石　田　文　彦 | 金属加工法 | | 1 | | 1 |
| | | 実践セミナーⅠ「技術」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 実践セミナーⅡ「技術」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「技術」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「技術」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 金属加工学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 技術史・技術教育史特論 | 1 | | | 1 |
| | | 計 | 2 | 1.74 | | 3.74 |
| 教　授 | 川　崎　直　哉 | 人間教育学セミナー（教職の意義） | | 0.06 | | 0.06 |
| | | 電気工学概論 | 1 | | | 1 |
| | | 電気工学実験実習 | | | 1 | 1 |
| | | 栽培実習 | | | 1 | 1 |
| | | 基礎電気理論セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「技術」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 家庭電気・機械・情報 | 0.5 | | | 0.5 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 基礎電気理論セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「技術」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「技術」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「技術」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 情報科学教育特論 | 0.33 | | | 0.33 |
| | | △ 電気工学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 電気回路特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 電気技術実験実習 | | | 1 | 1 |
| | | △ 応用電気理論研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3.83 | 6.8 | 3 | 13.63 |
| 教　授 | 平　田　晴　路 | 木材手工具加工法 | | 1 | | 1 |
| | | 中等技術科指導法（原理･教材･授業論） | 1 | | | 1 |
| | | 木材機械加工法 | | 1 | | 1 |
| | | 実践セミナーⅠ「技術」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 実践セミナーⅡ「技術」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「技術」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「技術」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 木材加工学実験実習 | | | 1 | 1 |
| | | △ 技術科教育方法特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 技術科教育教材分析演習 | | 0.5 | | 0.5 |
| | | △ 技術科教育・木材加工研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 技術科教育・木材加工研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2 | 7.24 | 1 | 10.24 |
| 助教授 | 黎　　子　椰 | 中国語・中国事情Ⅰ | | 1 | | 1 |
| | | 製図法 | 1 | | | 1 |
| | | 機械工学概論 | 1 | | | 1 |
| | | 機械工学実習 | | | 1 | 1 |
| | | メカトロニクスセミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「技術」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | メカトロニクスセミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「技術」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「技術」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「技術」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 国際理解教育特論 | 0.13 | | | 0.13 |
| | | △ 機械工学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 機械工学実験実習 | | | 1 | 1 |
| | | △ メカトロニクス研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ メカトロニクス研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3.13 | 9.74 | 2 | 14.87 |
| 講　師 | 大　森　康　正 | 教育情報演習 | | 2 | | 2 |
| | | 情報科学概論 | 0.2 | | | 0.2 |
| | | 情報システム工学 | 1 | | | 1 |
| | | 情報科学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「技術」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | 情報システム工学演習 | | 1 | | 1 |
| | | 情報科学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「技術」 | | 0.17 | | 0.17 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「技術」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「技術」 | | 0.2 | | 0.2 |
| | | △ 情報科学教育特論 | 0.33 | | | 0.33 |
| | | △ 知識情報処理特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 応用情報システム工学演習 | | 1 | | 1 |
| | | △ 知識情報処理研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 知識情報処理研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 2.53 | 12.74 | | 15.27 |

〈生活・健康系教育講座（家庭）〉

| 職名 | 氏名 | 授業科目名（△印は大学院授業科目を示す。） | 毎週授業時間数 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 講義 | 演習 | 実験実習実技 | 計 |
| 教授 | 大瀧ミドリ | 人間教育学セミナー（教職の意義） | | 0.06 | | 0.06 |
| | | いのちのネットワーク論 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 保育学 | 1 | | | 1 |
| | | 保育学実習 | | | 1 | 1 |
| | | 家族研究法 | | 1 | | 1 |
| | | 保育学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「家庭」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 保育学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「家庭」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「家庭」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「家庭」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 子どもの家庭教育論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 児童学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 児童学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 児童学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3.5 | 9.62 | 1 | 14.12 |
| 教授 | 滝山桂子 | 中等家庭科指導法（課程論） | 1 | | | 1 |
| | | 中等家庭科指導法（指導論） | 1 | | | 1 |
| | | 実践セミナーⅠ「家庭」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 家庭科教育学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「家庭」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「家庭」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「家庭」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 家庭科教育学特論A | 1 | | | 1 |
| | | △ 家庭科教育学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 家庭科教育学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3 | 6.56 | | 9.56 |
| 教授 | 立屋敷かおる | 体験学習 | | | 0.18 | 0.18 |
| | | 人と生活 | 0.33 | | | 0.33 |
| | | 実践栄養学 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 調理の理論と実習 | 0.5 | | 1 | 1.5 |
| | | 食科学BⅠ | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 食科学BⅡ | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 食科学実験B | | | 1 | 1 |
| | | 食科学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「家庭」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 食科学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「家庭」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「家庭」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「家庭」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 食と生体機能特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 食科学特論B | 1 | | | 1 |
| | | △ 食科学特別実験B | | | 1 | 1 |
| | | △ 食科学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 食科学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 4.33 | 8.56 | 3.18 | 16.07 |
| 教授 | 佐藤悦子 | 人と生活 | 0.33 | | | 0.33 |
| | | 被服製作の理論と実習 | 0.5 | | 1 | 1.5 |
| | | 被服学 | 1 | | | 1 |
| | | 衣生活論A | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 被服学実験A | | | 1 | 1 |
| | | 被服学実験B | | | 1 | 1 |
| | | 被服学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「家庭」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 家庭電気・機械・情報 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 被服学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 実践セミナーⅡ「家庭」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「家庭」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「家庭」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 国際理解教育特論 | 0.13 | | | 0.13 |
| | | △ 被服構成学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 被服衛生・機構学特論 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | △ 被服学特別実験Ⅰ | | | 1 | 1 |
| | | △ 被服学特別実験Ⅱ | | | 1 | 1 |
| | | △ 被服学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 4.46 | 6.56 | 5 | 16.02 |
| 助教授 | 得丸定子 | 家庭 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | いのちのネットワーク論 | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 中等家庭科指導法（教材論） | 1 | | | 1 |
| | | 初等家庭科指導法 | 0.5 | 0.5 | | 1 |
| | | 家庭科教育学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「家庭」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 家庭科教育学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「家庭」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「家庭」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「家庭」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 家庭科教育論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 家庭科教育学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 家庭科教育学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 3.5 | 9.06 | | 12.56 |
| 助教授 | 細江容子 | 家族関係Ⅰ | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 家庭経済Ⅰ | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 家族関係Ⅱ | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 家庭経済Ⅱ | 0.5 | | | 0.5 |
| | | 家庭経営学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「家庭」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 家庭経営学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「家庭」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「家庭」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「家庭」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 家族関係学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 家庭経営学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 家庭経営学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 4 | 6.56 | | 10.56 |
| 助教授 | 光永伸一郎 | 人と生活 | 0.33 | | | 0.33 |
| | | 食科学A | 1 | | | 1 |
| | | 栄養生理科学 | 1 | | | 1 |
| | | 栄養生理・生化学 | 1 | | | 1 |
| | | 食科学実験A | | | 1 | 1 |
| | | 食科学セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅠ「家庭」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | 食科学セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 実践セミナーⅡ「家庭」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅰ「家庭」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 実践場面分析演習Ⅱ「家庭」 | | 0.14 | | 0.14 |
| | | △ 栄養科学特論 | 1 | | | 1 |
| | | △ 食科学特論A | 1 | | | 1 |
| | | △ 食科学特別実験A | | | 1 | 1 |
| | | △ 食科学研究セミナーⅠ | | 2 | | 2 |
| | | △ 食科学研究セミナーⅡ | | 2 | | 2 |
| | | 計 | 5.33 | 8.56 | 2 | 15.89 |

## (6) 平成15年度学位論文・卒業研究

### ① 大学院学校教育研究科修了者の学位論文題目一覧

| 所　属 | 学位論文題目 | 学生氏名 | 専門セミナー担当教官氏名 | 論文指導教官氏名 |
|---|---|---|---|---|
| 学校教育専攻（学習臨床コース） | 発話を促す話し合いの場に関する研究<br>－グループ学習におけるアイコンタクトと自己効力からの検討－ | 青山康郎 | 戸北凱惟 | 戸北凱惟 |
| | 総合的な学習の時間における学社融合・連携の推進が中学生の学力に与える影響に関する一考察 | 淺沼利行 | 北條礼子 | 川村知行 |
| | 総合的な学習における「森と水の関わり」に関する一考察 | 浅野一清 | 濁川明男 | 大悟法　滋 |
| | 及川平治の教育方法論を基盤とする「個性」を生かす授業の研究 | 阿部勝良 | 和井田清司 | 増井三夫 |
| | 立ち歩きによる学び合いの発展に関する研究 | 石崎　隆 | 西川　純 | 西川　純 |
| | ルーブリック開発作業による教師コミュニティでの学力観の共有 | 石関慶太 | 井上久祥 | 中野靖夫 |
| | ビオトープを活用した総合的な学習について | 稲葉紳一 | 大悟法　滋 | 大悟法　滋 |
| | 「関係論的視点に立つ授業」を基盤とするカリキュラム改造に関する研究 | 植松航一朗 | 二谷貞夫 | 二谷貞夫 |
| | 算数の授業において子どもが学習集団との関係を形成していく過程についての研究 | 大倉賢治 | 布川和彦 | 戸北凱惟 |
| | 子どもの行為からみた〈できごと世界〉の生成としての学びに関する研究 | 大島千枝 | 松本健義 | 戸北凱惟 |
| | 学習過程における集団の機能と構造に関する研究 | 太田秀人 | 西川　純 | 西川　純 |
| | 中学校数学における個に応じた働きかけについての研究<br>－教師の指導と生徒の学習の相互の変容を視点として－ | 太田浩一 | 布川和彦 | 戸北凱惟 |
| | 〈生きる－学ぶ〉をかたちづくる子どもの相互的かかわりに関する研究 | 岡部陽一 | 松本健義 | 戸北凱惟 |
| | 愛知県宝飯郡における環境教育についての一考察 | 小澤慎一 | 大悟法　滋 | 大悟法　滋 |
| | 高校生の共同作文編集における「個」と「他者」との関わり合いの研究 | 片桐史裕 | 西川　純 | 西川　純 |
| | 総合的な学習の時間における情報活動の分析的研究 | 片桐芳弘 | 南部昌敏 | 南部昌敏 |
| | 学習臨床的アプローチによる学びを促す教師のかかわりに関する研究 | 金崎鉄也 | 戸北凱惟 | 戸北凱惟 |
| | 博物館と学校を結ぶ地域の学習資源活用に関する研究<br>～信濃川火焔街道博学連携プロジェクトの実践を通して～ | 金子和宏 | 大悟法　滋 | 大悟法　滋 |
| | 野外学習における学びの支援のあり方に関する研究 | 加茂田繁広 | 大悟法　滋 | 大悟法　滋 |
| | アクション・リサーチを活用した「総合的な学習の時間」のカリキュラム開発に関する考察<br>－静岡県三島市をとりあげて－ | 菊地啓一 | 二谷貞夫 | 二谷貞夫 |
| | 上原専禄の平和思想に関する一研究<br>－独立・民族・教育を通じて－ | 北原憲康 | 二谷貞夫 | 二谷貞夫 |
| | 三面川から学ぶ体験活動プログラムに関する研究 | 木ノ瀬隆幸 | 大悟法　滋 | 大悟法　滋 |
| | 中学生の理科実験に対する意識の違いと学びの過程 | 粂田　哲 | 戸北凱惟 | 戸北凱惟 |
| | 国語科基礎学力の定着を図る学習に関する研究 | 桑原武史 | 松本　修 | 西川　純 |
| | 相互行為に基づく〈知〉の社会的生成に関する研究 | 小池　修 | 松本健義 | 戸北凱惟 |
| | 総合的な学習の時間における生きる力に関する研究<br>～関係性と自己効力感を視点として～ | 小池哲弥 | 田島弘司 | 川村知行 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 学習支援活動組織を活用した学びの様相 | 小関奈津子 | 戸北凱惟 | 戸北凱惟 |
| 異なる読みを媒介する学習過程の研究 | 小宮高弘 | 松本修 | 西川純 |
| 学校の情報化のための学校経営の方略に関する調査研究 | 近藤茂人 | 井上久祥 | 中野靖夫 |
| 子どもの生活における〈私〉と〈できごと〉の相互的なりたちに関する研究 | 阪田雄信 | 松本健義 | 戸北凱惟 |
| 被爆教師・末永浩における平和教育実践の成立と発展<br>－被害・加害・共生への深化過程に着目して－ | 坂本文香 | 和井田清司 | 増井三夫 |
| 高校生物におけるノート指導を通した生徒指導の実践的研究 | 佐藤誠也 | 戸北凱惟 | 戸北凱惟 |
| 総合的な学習における食材の活用に関する研究<br>～素材としてのダイコンの有効性～ | 佐藤靖子 | 大悟法滋 | 大悟法滋 |
| 「高等学校社会科」の「総合性」に関する研究 | 佐原智行 | 二谷貞夫 | 二谷貞夫 |
| 高等学校における総合学習・「Money 教育」に関する研究<br>－経済教育と消費者教育にかかわるカリキュラム開発をとおして－ | 清水啓 | 二谷貞夫 | 二谷貞夫 |
| 中学校の総合的学習における教師の支援に関する研究<br>～石垣島の漂着物をテーマとする総合的学習を通して～ | 鈴木光次郎 | 濁川明男 | 大悟法滋 |
| 桐を題材とした総合的な学習の時間におけるカリキュラム提案 | 田村悦子 | 濁川明男 | 川村知行 |
| 地域の教育力を生かした校外学習における総合的な学習への取り組み | 田村嘉規 | 大悟法滋 | 大悟法滋 |
| 中国の総合実践活動と日本の総合的学習に関する比較カリキュラム研究 | 趙斯琴 | 山崎貞登 | 川村知行 |
| 公立併設型中高一貫教育校における教育課程編成に関する研究 | 栂野宏 | 和井田清司 | 増井三夫 |
| 他者と関わり立ち上がる子どもの〈学び〉の臨床学的研究<br>～秦野市立上小学校の観察による事例研究～ | 内藤公彦 | 松本健義 | 戸北凱惟 |
| Discipline-Centered Curriculum に関する研究 | 内藤裕次 | 小林恵 | 増井三夫 |
| 相互作用・相互行為による学びの成立過程に関する臨床的研究 | 長坂直樹 | 松本健義 | 戸北凱惟 |
| 学びをつなげるまちづくり学習に関する研究 | 中澤広行 | 大悟法滋 | 大悟法滋 |
| 高等学校・総合学習における平和学習に関する一考察<br>－平和学習実践の検討を踏まえたカリキュラム開発の提唱を通して－ | 西尾理 | 二谷貞夫 | 二谷貞夫 |
| 子どもの〈生きるかたち〉としての学びの研究 | 西村浩一 | 松本健義 | 戸北凱惟 |
| 竹馬からひろがる総合的な学習 | 根岸昭博 | 川村知行 | 川村知行 |
| 「問い」のメカニズムと授業改善に関する研究 | 原文章 | 和井田清司 | 増井三夫 |
| 専門教科「情報」・ネットワークシステム実習教材の開発 | 平木勉 | 高野浩志 | 中野靖夫 |
| 「学習意欲」の質的転換を視座とした授業改善に関する研究 | 松澤徹 | 和井田清司 | 増井三夫 |
| 柿をとり入れた学習プログラムの構想 | 丸田敬根 | 大悟法滋 | 大悟法滋 |
| 中国の総合実践活動に関する一研究<br>－日本語教育の導入に向けて－ | 門和沙日娜 | 二谷貞夫 | 二谷貞夫 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | 「やぶを覆い尽すクズ（葛）」をテーマとした総合的学習のためのカリキュラム開発研究 | 横橋　円 | 濁川明男 | 川村知行 |
| | 「ひなまつり」から広がる総合学習 | 横山昌子 | 川村知行 | 大悟法　滋 |
| | 理科授業における学びのサポートに関する基礎的研究 | 吉田　正 | 戸北凱惟 | 戸北凱惟 |
| （発達臨床コース） | 子どもの学びの過程における評価(assessment)に関する研究<br>－公立A小学校対象の授業実践事例調査に基づいて－ | 石川優子 | 西　穣司 | 西　穣司 |
| | 生徒の暴力行為に対応するための教員の資質能力に関する研究<br>－中学校教員への聞き取り調査を通して－ | 石山　洋 | 石田美清 | 杵淵俊夫 |
| | 中学校における「道徳の時間」の役割と指導の進め方に関する理論的研究<br>－マルチモーダルアプローチの提案－ | 伊藤真哉 | 林　泰成 | 杵淵俊夫 |
| | 公立中学校における性教育改善に関する研究<br>－学校内外の連携協力体制づくりに焦点を当てて－ | 上田高之 | 古賀一博 | 古賀一博 |
| | 小学校高学年における共同体感覚を育む教師の言動に関する研究 | 小川和弘 | 林　泰成 | 杵淵俊夫 |
| | 向社会的な映像資料を活用した道徳授業が児童の役割取得能力に及ぼす影響に関する研究　－学校放送番組「さわやか3組」を活用した道徳授業の分析を通して－ | 小川雅裕 | 林　泰成 | 杵淵俊夫 |
| | ビデオによる「先輩の体験談」を中核とした進路学習プログラムの効果に関する研究<br>－進路選択過程に対する自己効力の変容を通して－ | 加藤　康 | 三村隆男 | 若井彌一 |
| | 「教師－生徒」関係に関する一考察<br>－教師に対する「役割期待」を手がかりにして－ | 後藤純二 | 藤田武志 | 若井彌一 |
| | 中学校における教員間の協働性に関する一考察<br>－相互作用における感情的側面に注目して－ | 澁谷徹也 | 荻原克男 | 若井彌一 |
| | 小学校におけるキャリア教育に関する研究<br>－静岡県沼津市立原東小学校のキャリア教育導入過程の事例を通して－ | 千葉　高 | 三村隆男 | 若井彌一 |
| | 小学校における組織文化変革に関する研究<br>－公立T小学校の教育課程開発の事例調査を通して－ | 本間　勲 | 西　穣司 | 西　穣司 |
| | 映像資料とインターネット掲示板を用いた道徳授業の効果に関する研究<br>－学校放送番組「虹色定期便」交流サイトプロジェクトにおける参与観察調査を通して－ | 牧野祐太郎 | 林　泰成 | 西　穣司 |
| | 中学校における勤労にかかわる体験的な学習に関する歴史的考察　日本進路指導協会研究委託校研究資料（昭和55・56年度から平成11・12年度分）の分析を通して | 松尾陽一 | 三村隆男 | 西　穣司 |
| | 小学校の道徳の時間におけるキャリア教育に関する研究<br>－『心のノート』に焦点をあてて－ | 谷島竜太郎 | 三村隆男 | 西　穣司 |
| | 開かれた生徒指導に向けての行動連携に関する基礎的研究<br>－長野市の中学校教員の意識調査を通して－ | 山極英夫 | 石田美清 | 古賀一博 |
| | 教育基本法第九条に関する研究 | 渡邉　彩 | 若井彌一 | 若井彌一 |
| | 若者の就労価値意識の変化とそれに対応した教養教育についての考察<br>－ポスト大衆教育社会における物質性から脱物質性への転換－ | 渡辺邦久 | 大前敦巳 | 古賀一博 |
| | 中学校における「モラル・スキル・トレーニング」プログラム開発 | 渡邉真魚 | 林　泰成 | 古賀一博 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 教員の多忙感に関する研究<br>－新潟県公立小・中学校教員を対象とした質問紙調査の分析を中心に－ | 佐々木　すみ子 | 古　賀　一　博 | 古　賀　一　博 |
| 識字の獲得による生き方の変化に関する研究<br>－日本人男性の生活史を通して－ | 阿　部　加奈子 | 藤　田　武　志 | 杵　淵　俊　夫 |
| ＡＣと共依存の項目開発と関連性の検討 | 青　木　理　恵 | 田　中　　敏 | 田　中　　敏 |
| ＡＤＨＤ児を担任する教師の指導行動に及ぼす親参加型行動コンサルテーションの効果 | 稲　見　康　明 | 加　藤　哲　文 | 加　藤　哲　文 |
| 青年期の自己像と他者関係および対人不安の関連 | 岩　崎　　朗 | 越　　良　子 | 田　中　　敏 |
| 保育士と親の子どもを捉える視点の差異とその心理的影響 | 岡　田　里　子 | 藤　生　英　行 | 藤　生　英　行 |
| 手の左右開閉動作が気分に及ぼす影響<br>－特性不安の観点から－ | 岡　畑　広　思 | 宮　下　敏　恵 | 藤　生　英　行 |
| 教師の児童認知の多様性が児童の級友関係に及ぼす影響 | 笠　松　幹　生 | 越　　良　子 | 田　中　　敏 |
| 通常学級における教師とのコンサルテーションを取り入れた行動サポートの考察<br>－不注意優勢傾向を示すＡＤＨＤ児への学習支援を通して－ | 金　平　弘之郎 | 米　山　直　樹 | 加　藤　哲　文 |
| 不登校児童をもつ担任教師への行動コンサルテーションに関する実践的研究 | 栗　林　俊　哉 | 加　藤　哲　文 | 加　藤　哲　文 |
| リミットセッティング場面における母子相互交渉と育児不安 | 櫻　井　広　太 | 米　山　直　樹 | 藤　生　英　行 |
| 学級集団内でのユーモアが学級風土と児童のメンタルヘルスに及ぼす影響 | 島　　弥　生 | 越　　良　子 | 田　中　　敏 |
| 購買スタイルと気分が商品の選択過程に及ぼす影響 | 新　里　彰　久 | 田　中　　敏 | 田　中　　敏 |
| 中学校入学時の不安・緊張に関する研究 | 杉　本　岳　子 | 米　山　直　樹 | 藤　生　英　行 |
| 小学生の対人不安傾向軽減に関する研究<br>－自己意識特性の観点から－ | 鈴　木　浩　文 | 宮　下　敏　恵 | 藤　生　英　行 |
| 現代の大学生における自己効力感と自意識が職業未決定に及ぼす影響 | 住　吉　英　明 | 阿　部　　勲 | 田　中　　敏 |
| 高校生の感動経験と学校生活諸側面との関連 | 関　谷　信　之 | 阿　部　．　勲 | 田　中　　敏 |
| 遊びの特性分析と欲求構造の探索 | 大　道　正　敬 | 田　中　　敏 | 田　中　　敏 |
| 中学生向け心の授業の教材開発 | 田之上　伸　久 | 田　中　　敏 | 田　中　　敏 |
| 集団社会的スキル訓練が児童の対人行動に及ぼす影響 | 寺　内　　真 | 加　藤　哲　文 | 加　藤　哲　文 |
| 授業妨害行動を示す児童を担任する教師へのコンジョイント行動コンサルテーションの効果 | 中　井　良　和 | 加　藤　哲　文 | 加　藤　哲　文 |
| 環境移行事態における高校１年生の学校ストレスと適応過程 | 西　澤　勝　美 | 五十嵐　透　子 | 加　藤　哲　文 |
| 抑うつ傾向と表情認知の関係について | 羽　田　　晋 | 藤　生　英　行 | 藤　生　英　行 |
| 親の発達と子どもや育児に対する感情との関連<br>：母親の育児経験と就業の影響 | 畑　中　祥　一 | 内　藤　美　加 | 田　中　　敏 |
| 高等学校における体験学習の心理的影響について<br>－友人関係・自己効力感との関係－ | 羽二生　喜　國 | 藤　生　英　行 | 藤　生　英　行 |
| 教員におけるストレスとハーディネスの関連 | 林　　祐　毅 | 中　山　勘次郎 | 田　中　　敏 |
| 親の自律性支援行動に影響を及ぼす被養育体験要因の検討 | 樋　口　晶　絵 | 中　山　勘次郎 | 田　中　　敏 |
| 高校生の問題行動の現状と背景に関する因果的分析 | 堀　　眞　樹 | 田　中　　敏 | 田　中　　敏 |
| 「ビスク法フォーカシング」における空間作り簡略法の効果<br>～小学生適用プログラムの提案～ | 前　山　和　彦 | 宮　下　敏　恵 | 藤　生　英　行 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | 日本人における心的動詞の概念構造<br>：類似性と拡張性判断およびテクスト内語使用 | 牧野高智 | 内藤美加 | 田中敏 |
| | 小学生の対人葛藤場面における自己調整機能の発達<br>－グループ活動における対人交渉能力の検討－ | 脇川知子 | 阿部勲 | 田中敏 |
| 幼児教育専攻 | 幼児のノンバーバル・コミュニケーションに関する研究 | 石井千宏 | 鈴木情一 | 鈴木情一 |
| | 幼児の運動能力の実態と運動に関する有能感との関係 | 及川直樹 | 丸山良平 | 大山美和子 |
| | 幼児の運動への積極性について<br>－基本的な動作との関わり－ | 久保貴之 | 鈴木情一 | 鈴木情一 |
| | 病棟保育士の現状と課題について | 佐藤ひとみ | 南舘忠智 | 南舘忠智 |
| | 幼児の物語絵本に対する好みと絵本環境の実態 | 下條和歌子 | 丸山良平 | 大山美和子 |
| 障害児教育専攻 | 知的障害児の主体性を引き出す授業における教師の支援に関する研究 | 飯田誠 | 笠原芳隆 | 我妻敏博 |
| | 知的障害児を対象とした物語理解を促すための劇の活用方法に関する事例的研究 | 今井友男 | 大庭重治 | 大庭重治 |
| | 知的障害児を対象とした書字学習支援における文通の活用に関する事例的研究 | 大澤宏規 | 大庭重治 | 大庭重治 |
| | 養護学校のセンター的役割の実施に対する教師のとらえの構造と関連要因<br>－北海道の養護学校教師を対象として－ | 大滝尚孝 | 笠原芳隆 | 我妻敏博 |
| | 福祉施設における知的障害者の示す行動問題と機能的に等価な選択機会の設定と選択技能の形成に関する検討 | 影山美由紀 | 藤原義博 | 藤原義博 |
| | 言語通級指導教室担当者の役割意識が実態把握に及ぼす影響 | 岸本恒宗 | 藤井和子 | 星名信昭 |
| | 東北地方における障害児者社会教育の現状と課題 | 工藤茂広 | 河合康 | 藤原義博 |
| | 養護学校教師の個別の指導計画作成における保護者との連携とその関連要因 | 小坂忠正 | 笠原芳隆 | 我妻敏博 |
| | 知的障害養護学校の体育における運動アセスメントの実施状況に関する研究<br>－体育の授業の実践報告による検討－ | 児玉明日美 | 大庭重治 | 大庭重治 |
| | 統合保育場面における保育者のニーズと実状に適合した支援方法の検討 | 庄司香織 | 藤原義博 | 藤原義博 |
| | 行動問題を示す発達障害児の家庭での歯磨きを支援するための個別指導の役割の検討 | 高野知紀 | 藤原義博 | 藤原義博 |
| | 長野県における通級指導教室担当教員と通常学級担任間の協力体制の構築に関する基礎的研究 | 田幸文博 | 藤井和子 | 星名信昭 |
| | 長野県松本尋常小学校における特別学級の設置・廃止の経緯に関する研究 | 中嶋忍 | 河合康 | 星名信昭 |
| | 知的障害養護学校における第三次産業を視野に入れた進路指導 | 蓮沼祐二 | 齋藤一雄 | 星名信昭 |
| | 新潟県の難聴通級指導教室の現状と問題点に関する調査研究<br>－教師・保護者・通級児を対象としたアンケートの結果から－ | 羽鳥百十子 | 我妻敏博 | 我妻敏博 |
| | 小学校特殊学級の昼休み交流における相互交渉を促進するための相互依存型集団随伴性の検討 | 桝谷聡 | 藤原義博 | 藤原義博 |
| | 通常の学級に在籍する軽度発達障害のある児童に対応した校内支援体制に関する学級担任の意識 | 室岡徳 | 惠羅修吉 | 大庭重治 |
| | 知的障害児を対象とした算数文章題における学習支援方法に関する事例的研究 | 矢嶋良恵 | 大庭重治 | 大庭重治 |
| | インドネシアと日本における教員養成系大学学生の障害児に対する理解・意識に関する比較研究 | ララン エルラニ | 河合康 | 我妻敏博 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | 聴覚障害児１名を対象にした「どのように」の読みとりに関する事例研究<br>－子どもの理解方略に合わせた指導を通して－ | 渡部明子 | 我妻敏博 | 我妻敏博 |
| 教科・領域教育専攻（言語系コース） | 夏目漱石『彼岸過迄』研究 | 青山高視 | 小埜裕二 | 下西善三郎 |
| | 短作文指導計画の作成に関する研究<br>－書けない子に配慮した検証授業を通して－ | 飯塚澄人 | 有澤俊太郎 | 有澤俊太郎 |
| | 中学校の国語科授業における形成的評価の研究<br>－評価カードの開発とその考察を通して－ | 池村和重 | 有澤俊太郎 | 有澤俊太郎 |
| | 手書き文字から受ける感性情報の研究 | 尾身良蔵 | 押木秀樹 | 野村眞木夫 |
| | 宮沢賢治童話研究<br>－自己犠牲の視点から－ | 鹿嶋実 | 小埜裕二 | 下西善三郎 |
| | 『雨月物語』の表現研究 | 菊田真由 | 野村眞木夫 | 野村眞木夫 |
| | 宮沢賢治『銀河鉄道の夜（初期形）』研究 | 栗原直行 | 小埜裕二 | 下西善三郎 |
| | 説明的文章における読み書き関連指導の研究<br>－論理的思考力の育成を図る指導過程－ | 佐川光男 | 渡部洋一郎 | 有澤俊太郎 |
| | 『万葉集』研究<br>－水辺の挽歌－ | 佐藤紗和子 | 下西善三郎 | 下西善三郎 |
| | 国語科教育における練習学習と発展学習システムの開発<br>－説得型スピーチにおける国語学力定着を図る学習システムの構築－ | 佐藤浩一 | 渡部洋一郎 | 有澤俊太郎 |
| | 太宰治「ロマネスク」研究 | 下村貴史 | 小埜裕二 | 下西善三郎 |
| | 『源氏物語』の研究<br>－「女」「女君」の呼称－ | 宅原万起子 | 下西善三郎 | 下西善三郎 |
| | 中学校国語科におけるスピーチの指導過程の研究<br>－対話的交流活動を取り入れて－ | 寺田奈緒子 | 有澤俊太郎 | 有澤俊太郎 |
| | 天草版『平家物語』の coso 研究<br>－衰退過程と用法の諸相を中心に－ | 徳永辰通 | 中里理子 | 野村眞木夫 |
| | 読者論の成果を生かした指導法の研究<br>－電子掲示板（ＢＢＳ）システムを利用して－ | 長階哲哉 | 有澤俊太郎 | 有澤俊太郎 |
| | Less Restrictive Talk の構造分析<br>－困難克服のストラテジーの考察を中心に－ | 中山英三 | 野村眞木夫 | 野村眞木夫 |
| | 西脇順三郎『Ambarvalia』研究 | 西本伸一 | 小埜裕二 | 下西善三郎 |
| | 小学校における批判的思考力の育成<br>－自己モニタリングを取り入れた学習過程－ | 廣田恵子 | 有澤俊太郎 | 有澤俊太郎 |
| | 小学校高学年における論理的思考力を育成するための討議法の研究 | 渡邉治樹 | 渡部洋一郎 | 有澤俊太郎 |
| | The Factors Interfering With Access to Metalinguistic Knowledge: Evidence from Oral Production in English by Japanese Junior High School Students | 新井謙司 | 大場浩正 | 平野絹枝 |
| | A Study of English Periphrastic Causative Constructions | 市川桃子 | 野地美幸 | 加藤雅啓 |
| | Against the Unaccusative Trap Hypothesis: Evidence from Adult Japanese Learners of English | 今井敦文 | 大場浩正 | 平野絹枝 |
| | The Acquisition of Articles in English as a Foreign Language: Comparing Chinese and Japanese Native Speakers | 季倩 | 大場浩正 | 平野絹枝 |
| | Testing the Aspect Hypothesis: The Acquisition of Progressive Marking by Japanese Learners of English | 菊池美香 | 大場浩正 | 平野絹枝 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | The Effects of Oral Reading for Japanese Junior High School Students: Focusing on its Relationships to Reading Comprehension, English Proficiency, and Awareness and Strategies of Oral Reading | 新澤　悟 | 平野絹枝 | 平野絹枝 |
| | A Study of Alternation of Word Order in Noun Phrases | 髙橋栄作 | 若山真幸 | 加藤雅啓 |
| | The Effects of Non-Native Speaker/Non-Native Speaker Interactions on Negotiation of Meaning and Development of Question Formation in the Second Language Classroom: Distribution of Proficiency Levels Among Pairs | 濵中直宏 | 酒井英樹 | 平野絹枝 |
| | Attending to Phonological Information and Orthographic Information in English Vocabulary Learning by Japanese Elementary School Students | 堀田　誠 | 酒井英樹 | 平野絹枝 |
| | The Instruction of Extensive Reading and Metacognitive Awareness of Reading Strategies for Japanese EFL Junior High School Students: The Effects on Comprehension and Awareness and Use of Reading Strategies | 松田英樹 | 平野絹枝 | 平野絹枝 |
| （社会系コース） | 「各種機関・企業のＩＳＯ（国際標準化機構）取得とその取組みに関する調査・研究」<br>－上越地域の機関・企業を中心に－ | 井部忠次 | 鈴木敏紀 | 鈴木敏紀 |
| | 共依存的師弟関係に関する一考察 | 宇野拓也 | 安田　尚 | 安田　尚 |
| | 戦国後期越後上杉氏の城館と権力<br>－上・中越地域から長野県北部地域を中心に－ | 遠藤公洋 | 浅倉有子 | 浅倉有子 |
| | 但馬地方における沿岸漁業と磯見漁に関する一考察 | 岡村　郁 | 下里俊行 | 佐藤芳徳 |
| | 女性の穢れ観の成立とジェンダー<br>－古代における「穢」と「罪」－ | 長田愛子 | 浅倉有子 | 浅倉有子 |
| | 長野県小学校社会科における伝統工業の教材化に関する研究 | 金子泰昭 | 山本友和 | 山本友和 |
| | 中学校社会科における地域史学習に関する研究<br>－「蒲原・沼垂・新潟からみた中世・戦国社会」を素材に－ | 島垣　武 | 浅倉有子 | 浅倉有子 |
| | 福岡市小学校社会科における国際理解教育のカリキュラム開発に関する研究<br>－韓国の生活文化の教材化を中心に－ | 陣川誠一 | 山本友和 | 山本友和 |
| | 企業の社会的責任に関する調査・研究<br>－新潟県トップ企業を中心として－ | 伊達恭子 | 鈴木敏紀 | 鈴木敏紀 |
| | 中国深圳市における産業構造及び貿易構造に関する研究 | 陳　廷棟 | 鈴木敏紀 | 鈴木敏紀 |
| | 「地理的な見方･考え方」に視座をおいた「都道府県」学習のあり方 | 戸田佳孝 | 志村　喬 | 大嶽幸彦 |
| | 福島県会津地方における郷土認識の形成過程<br>－「会津魂」･「会津精神」を中心に－ | 二瓶　信 | 河西英通 | 河西英通 |
| | 多民族国家中国におけるモンゴル民族教育に関する一考察<br>－多文化教育の観点から－ | 哈斯格日楽 | 茨木智志 | 赤羽孝之 |
| | シベリア鉄道沿線地帯の産業構成に関する一考察 | 李　林 | 下里俊行 | 赤羽孝之 |
| | 中国におけるクロポトキン思想の受容に関する一考察<br>－相互扶助論を中心に－ | 李　忠権 | 下里俊行 | 藤澤郁夫 |
| | 中世後期における信濃国人領主の研究<br>－高梨氏を中心として－ | 涌井　亮 | 浅倉有子 | 浅倉有子 |
| （自然系コース） | 数学活動における多様な考え方が学習観におよぼす影響について<br>－教員養成大学学部学生を対象として－ | 有坂　哲 | 黒木伸明 | 黒木伸明 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | 数学学習に困難を示す生徒の理解過程に関する実践的研究 | 滝澤　豊 | 岩崎　浩 | 溝上武實 |
| | 文字式のよさの指導に関する基礎的研究<br>－中学２・３年生を対象にした調査を手がかりにして－ | 大塚高央 | 岩崎　浩 | 溝上武實 |
| | ３つの素数の和について | 土屋信治 | 中川　仁 | 溝上武實 |
| | 球面定理について | 中村義治 | 森　博 | 森　博 |
| | 数学の授業における数学化のプロセスの評価に関する研究 | 日野昭彦 | 岩崎　浩 | 森　博 |
| | 台形の面積に関する教材研究 | 山城保史 | 黒木伸明 | 黒木伸明 |
| | メビウス変換とフラクタル集合 | 依田哲也 | 田中　博 | 田中　博 |
| | ２つの立方数の和について | 渡辺康一 | 中川　仁 | 田中　博 |
| | 新潟第三系の続成作用にともなうスメクタイトの緑泥石化について | 青木　実 | 大場孝信 | 中川清隆 |
| | チロシンによるマウス（ピンク･アイド･ダイリューション）表皮メラノサイトの分化促進機構について | 石塚研治 | 小川　茂 | 中川清隆 |
| | 小、中学校における生命倫理教育のカリキュラム開発に関する研究 | 奥田義将 | 庭野義英 | 小林辰至 |
| | Breeding System of Latham's Snipe | 重盛　究 | 中村雅彦 | 中川清隆 |
| | 他教科との比較にみる，小・中学校理科の課題と対処法の研究<br>－演習の導入による子どもの意識の変容について－ | 戸所雄彦 | 庭野義英 | 西山保子 |
| | カモ類における混群サイズの決定要因 | 柳澤雅子 | 中村雅彦 | 中川清隆 |
| （芸術系コース） | 第３次学習指導要領期における音楽鑑賞教育 | 會田容子 | 小川昌文 | 重嶋　博 |
| | 小学校音楽科の授業改善に関する研究<br>－実際の授業における指導目標・内容を中心にして－ | 小山　陽 | 重嶋　博 | 重嶋　博 |
| | ラフマニノフ《ピアノソナタ第２番》Op.36 における鐘の音の意味<br>－《合唱交響詩「鐘」》Op.35 と比較して－ | 折居はるか | 平野俊介 | 山本茂夫 |
| | 中学校を主とした音楽科学習指導案の研究<br>－形式・書式と授業の実際との関係－ | 公文理恵 | 小川昌文 | 重嶋　博 |
| | フーゴー・ヴォルフ作曲《メーリケ歌曲集》の研究 | 駒形加奈子 | 池田　操 | 池田　操 |
| | イタリア古典歌曲の研究<br>－カッチーニ・モンテヴェルディを中心として－ | 斎藤圭子 | 池田　操 | 池田　操 |
| | 音楽教育における「リアリティ」の生成<br>－現象学的アプローチによる「おんがく」の意味と「楽しさ」の本質－ | 斎藤　隆 | 小川昌文 | 重嶋　博 |
| | 音楽ジャンル嗜好形成のメカニズム<br>－経験，年齢，性差が及ぼす影響－ | 中澤加奈子 | 小川昌文 | 重嶋　博 |
| | An Analysis of Tôru Takemitsu's “In an Autumn Garden-Complete Version” for Gagaku | ビスポイエダ | 阿部亮太郎 | 茂手木潔子 |
| | 内モンゴルの語り物ホリボーにおける上演形態の変容 | 包　玉梅 | 植村幸生 | 茂手木潔子 |
| | 小学校音楽科担当教師の意識と学びに関する一研究 | 村治隆夫 | 小川昌文 | 重嶋　博 |
| | 「聴く」ということを重視した小学校音楽科指導の研究 | 吉川広美 | 小川昌文 | 重嶋　博 |
| | 音楽教育における「ITO SYSTEM」の展開とその価値について<br>－「人間根っ子教育」の実践を視点として－ | 葭本直樹 | 時得紀子 | 重嶋　博 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | 音楽と子どもをつなぐエデュケーション・プログラム<br>－イギリスにおけるプロの音楽家による事例を通して－ | 乗富晴子 | 重嶋博 | 重嶋博 |
| | 越後の瞽女唄《葛の葉子別れ》における詞章研究 | 堀江将之 | 茂手木潔子 | 茂手木潔子 |
| | 教育環境の多様化に伴う学校建築のあり方についての研究 | 井上貴博 | 阿部靖子 | 太田將勝 |
| | 日本絵画における空間表現についての一考察 | 上野典子 | 洞谷亜里佐 | 増谷直樹 |
| | 美輪明宏の表現活動 | 木村英恵 | 風巻孝男 | 風巻孝男 |
| | 「つくること」の問い直しによる造形美術教育の再考<br>－松代町ワークショップでの実践を手がかりに－ | 加賀﨑寛 | 西村俊夫 | 西村俊夫 |
| | 造形活動と私のあいだ | 笠川真由美 | 高石次郎 | 山ノ下堅一 |
| | 状況における捉え方の変化 | 古部寛 | 高石次郎 | 山ノ下堅一 |
| | つくることの意味と学びについての一考察 | 小坂寛子 | 西村俊夫 | 西村俊夫 |
| | 可能性をひらくかかわり<br>～図画工作科授業を考える～ | 小林清 | 西村俊夫 | 西村俊夫 |
| | 日本のアニメーションと日本絵巻についての一考察 | 齋藤勝亮 | 洞谷亜里佐 | 福岡泰彦 |
| | 小学校低学年児における絵画教育のあり方について<br>－アメリカ合衆国ニューヨーク市公立小学校での絵画教育と比較して－ | 佐藤貴道 | 太田將勝 | 太田將勝 |
| | 〈みる〉ということから考える表現 | 常光由香里 | 西村俊夫 | 西村俊夫 |
| | 平面における逆遠近的空間表現についての一考察 | 中野亮 | 増谷直樹 | 増谷直樹 |
| | 無言館<br>－戦没画学生を通した美術の一考察－ | 渡辺一洋 | 福岡泰彦 | 福岡泰彦 |
| | ドイツにおける美術鑑賞教育 | 矢島晋 | 風巻孝男 | 風巻孝男 |
| （生活・健康系コース） | 小学校高学年における「呼吸・姿勢マネジメント」に関する実践的研究 | 青柳剛 | 直原幹 | 伊藤政展 |
| | 体育授業における教師の身体的構えに関する研究 | 安東潤 | 加藤泰樹 | 加藤泰樹 |
| | 脳性マヒ児の歩行訓練におけるマルチメディアを活用した評価方法の有効性 | 大塚貴子 | 直原幹 | 伊藤政展 |
| | タイミング調節の学習における自己決定に基づくBandwidth フィードバックの効果について | 尾臺美彰 | 伊藤政展 | 伊藤政展 |
| | 水泳指導における指導者のエンパワーメントに関する研究 | 笠岡一行 | 清水富弘 | 加藤泰樹 |
| | 自然体験活動における態度変容に関する研究 | 金井順子 | 清水富弘 | 加藤泰樹 |
| | 体育における「かかわり」の意味解釈に関する研究 | 川尻優 | 青木眞 | 青木眞 |
| | めあて学習における運動量が学習意欲に及ぼす影響 | 木内良夫 | 伊藤政展 | 伊藤政展 |
| | 体育における問題解決学習の組織に関する研究 | 栗岩浩 | 青木眞 | 青木眞 |
| | 運動観察におけるマルチメディア教材を用いた画像情報の呈示とその情報評価過程 | 佐藤佳樹 | 直原幹 | 伊藤政展 |
| | 児童の短距離走における蛇行現象に関する実践的研究 | 須田裕明 | 伊藤政展 | 伊藤政展 |
| | バスケットボールゲームにおける劣勢傾向の回復について | 五十嵐円 | 土田了輔 | 佐藤誠 |
| | 体育の単元における学習過程の構成に関する研究 | 滝澤豊 | 青木眞 | 青木眞 |
| | スポーツ運動の「楽しさ」に関するモルフォロギー的研究 | 豊田智久 | 長澤靖夫 | 長澤靖夫 |
| | 中学校体育における選択制授業の運営に関する研究 | 中澤正明 | 青木眞 | 青木眞 |
| | 中学生剣道活動における礼法の指導実践とその教育的意義 | 藤井充晴 | 直原幹 | 伊藤政展 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | 陸上競技の試合場面における選手同士の関係について | 宮澤　充 | 加藤泰樹 | 加藤泰樹 |
| | 若者の性感染症予防行動に関する研究<br>－ケーススタディとアンケート調査を手がかりに－ | 小林美代子 | 砥堀雅信 | 砥堀雅信 |
| | 健康づくり情報と身体イメージ形成に関する研究 | 山口博之 | 砥堀雅信 | 砥堀雅信 |
| | 技術とものづくり学習をサポートするソフトウェアの開発 | 石塚秀明 | 黎　子椰 | 石田文彦 |
| | 適応型ヘルプデスクシステムに関する研究 | 王　承 | 大森康正 | 平田晴路 |
| | 自律型全方向移動ロボットの開発とその教材化に関する研究 | 神田博幸 | 川崎直哉 | 川崎直哉 |
| | 技術科の授業における人格形成に関する教師等の意識 | 須佐　保 | 平田晴路 | 平田晴路 |
| | マルチメディア技術を利用したディーゼルエンジンの学習教材の開発<br>－燃料噴射技術を中心とした学習－ | 趙　志松 | 黎　子椰 | 石田文彦 |
| | マイクロコントローラを用いた自律走行型ロボットの開発と教材化に関する研究 | 前田尊昭 | 川崎直哉 | 川崎直哉 |
| | 協同制御型ロボット教材とネットワークを活用する学習システムの構築 | 宮下博史 | 黎　子椰 | 石田文彦 |
| | 国際理解のための教材開発に関する研究<br>－内モンゴルの伝統的な服装・建築物－ | 李　文胜 | 大森康正 | 平田晴路 |
| | 協同的学びを重視した技術分野カリキュラムのデザイン | 須長輝夫 | 山崎貞登 | 川崎直哉 |
| | 生活システムの概念を導入した食生活における環境意識に関する研究<br>－中食を事例として－ | 鹿沼慶子 | 大瀧ミドリ | 大瀧ミドリ |
| | 高等学校福祉教育に期待される専門教科「福祉」の役割<br>－施設体験学習とその意義を中心に－ | 田中泰恵 | 細江容子 | 大瀧ミドリ |
| | 上衣のボタン位置がかけはずし動作に及ぼす影響<br>－成人女子と幼児の上肢動作の観察を通して－ | 三膳佑季子 | 佐藤悦子 | 佐藤悦子 |
| | 日本・台湾・マレーシアの高齢者介護に関する研究 | ロウ スー ピン | 細江容子 | 大瀧ミドリ |
| | 辛み成分によるラットの血漿エネルギー基質レベルの変化 | 若林ちひろ | 立屋敷かおる | 立屋敷かおる |
| | １～３才児のままごと遊びにおける母子相互作用の検討 | 笹島裕美子 | 大瀧ミドリ | 大瀧ミドリ |

② 学校教育学部卒業者の卒業研究題目一覧

| 所　　属 | 論　文　題　目 | 学　生　氏　名 | 論文指導教官氏名 |
|---|---|---|---|
| 学校教育専修<br>学習臨床コース<br>（教育方法） | 家庭における教育と学校に関する研究 | 大　澤　明日香 | 小　林　　恵 |
| 学校教育専修<br>学習臨床コース<br>（学習過程） | 子どもは新しい集団でどのように学ぶか | 海　村　由　紀 | 戸　北　凱　惟 |
| | 就学前の子どもの数概念 | 越　田　　綾 | 中　村　光　一 |
| | 集団で協力する学習場面における相互の関わり合いに関する研究<br>～音楽学習を例として～ | 左　古　雄一郎 | 西　川　　純 |
| | 学習場面における子どもの自己選択能力について | 佐々木　麻　衣 | 西　川　　純 |
| | 学習者による目標の決定と主体的な学びの研究 | 杉　本　慶　子 | 西　川　　純 |
| | 子どもの〈生きる〉できごと世界における意味生成過程 | 鈴　木　久美子 | 松　本　健　義 |
| | 読み語りの構造に関する研究 | 鈴　木　利矢子 | 松　本　　修 |
| | 造形的な創造活動にみられる子どもの学びに関する研究 | 高　木　三智子 | 戸　北　凱　惟 |
| | インタビュー活動に関する研究 | 天　満　　拓 | 松　本　　修 |
| | 子どもが自らの力で人間関係を形成していく過程について<br>－教師の働きかけによる子ども同士の関わりの変化に着目して－ | 目　黒　大　樹 | 西　川　　純 |
| | 算数、数学嫌い | 米　本　香太郎 | 中　村　光　一 |
| 学校教育専修<br>学習臨床コース<br>（情報教育） | 高校「情報A」における表計算ソフトスキル支援webサイトの製作と活用 | 五十嵐　勇　磨 | 髙　野　浩　志 |
| | 専門教科「情報」における動画編集学習支援webサイトの作成と活用 | 小　泉　朋　子 | 髙　野　浩　志 |
| | 教育情報化コーディネータ試験のネットワーク技術支援webサイトの製作と活用 | 小　勝　　望 | 髙　野　浩　志 |
| | 町の調べ学習を支援する教材の作成と活用 | 小　島　智　美 | 中　野　靖　夫 |
| | 意見交換の活性化を目的とした視覚情報を持つ電子掲示板システムの開発研究 | 髙　橋　拓　也 | 井　上　久　祥 |
| | 学習者の特性に着目した問題解決のためのグループ形成方法 | 埴　生　加奈子 | 井　上　久　祥 |
| 学校教育専修<br>学習臨床コース<br>（総合学習） | 沖縄県糸満市字潮平を題材とした地域学習のあり方に関する一考察<br>－門中を中心として－ | 金　城　亜樹乃 | 二　谷　貞　夫 |
| | 郊外ベッドタウンの二、三の問題について　－その夢と現実をみつめて－ | 宮　本　裕　介 | 二　谷　貞　夫 |
| | 「総合的な学習の時間」における地域素材の活用について<br>－新津市の石油を取り上げて－ | 山　村　典　之 | 二　谷　貞　夫 |
| 学校教育専修<br>発達臨床コース<br>（生徒指導） | 転校が及ぼす人格形成への影響に関する一考察 | 亀　田　真　介 | 林　　泰　成 |
| | 学習の理論に関する研究<br>－学力の構造に着目して－ | 北　原　真　司 | 西　　穣　司 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | 学校週５日制の導入にともなう地域の教育活動について<br>－新井市の自然体験学習を事例として－ | 後藤聖子 | 大前敦巳 |
| | 「学生による授業評価」に関する研究<br>－上越教育大学における取り組みをもとに－ | 佐藤久美子 | 三村隆男 |
| | 高校教育改革に伴う高校の多様化について<br>－東京都立高校を例に－ | 土谷新子 | 三村隆男 |
| | 思春期における摂食障害とボディイメージとの関係<br>－学校の健康指導においての問題点－ | 土谷美由紀 | 大前敦巳 |
| | 学校教育における新しい学力観と評価観に関する考察<br>－個人内評価に焦点をあてて－ | 永田旭 | 西穣司 |
| | 教育実習において進路変更をした学生の進路選択過程の研究 | 宮崎つばさ | 三村隆男 |
| | アニマル・セラピーの可能性と限界 | 村田祐子 | 林泰成 |
| 学校教育専修<br>発達臨床コース<br>（心理臨床） | 特性不安が欺瞞性認知に及ぼす影響<br>－発言内容の好意性との関連から－ | 池田大祐 | 宮下敏恵 |
| | 学校における居場所イメージの検討 | 石川もよ子 | 宮下敏恵 |
| | 相互依存型集団随伴性の基準の違いが大学生の協力行動に及ぼす影響 | 遠藤佑一 | 加藤哲文 |
| | 子どもをもつに至る意志決定過程の様相 | 岡田静香 | 田中敏 |
| | 美術科風景描画課題における「肯定的・矯正的フィードバック」が学習意欲に及ぼす影響 | 押田寛正 | 米山直樹 |
| | 高機能自閉症者に対する態度変容に及ぼす情報メディアの効果の検討 | 加藤敦子 | 加藤哲文 |
| | 活動意欲に及ぼす効果的競争の諸側面 | 笹弥真理 | 田中敏 |
| | 抑うつと社会的態度，時間的展望，統制の所在との関連について | 高柳伸哉 | 藤生英行 |
| | 強迫性傾向と完全主義との関連について | 中條裕子 | 藤生英行 |
| | 自己に向いた注意の硬着性と抑うつとの関係における男女差の検討 | 平瀬由佳 | 米山直樹 |
| 学校教育専修 | ソーシャルサポートの効果に及ぼす友人関係場面における目標志向性の影響 | 藤永悟 | 中山勘次郎 |
| 幼児教育専修 | 保護者による絵本の入手の実態について | 小澤志乃 | 南舘忠智 |
| | 子どもの歌う活動に関する保育者援助の研究 | 柿崎丈史 | 大山美和子 |
| | 幼稚園ホームページの分析と考察<br>－家庭との連携を中心に－ | 小林大児 | 南舘忠智 |
| | 幼児の自発的な表現活動の実態<br>－わらべうたを通して－ | 佐藤浩子 | 大山美和子 |
| | 幼児の身体表現活動における保育者援助について | 新谷奈保子 | 大山美和子 |
| | １歳児、２歳児への保育者の援助について<br>－抱っこ場面を中心に－ | 古田あすか | 南舘忠智 |
| | 幼児の読み聞かせられた物語絵本に対する応答について | 南佐智子 | 丸山良平 |
| | 園外保育における園児の地域の人々との交流 | 嶺井ゆかり | 南舘忠智 |
| | 幼児の図形の認識と命名の実態 | 渡邊絵里子 | 丸山良平 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | 幼児のリテラシー環境に関する研究 | 渡辺 由里子 | 鈴木 情一 |
| 教科・領域教育専修<br>言語系コース（国語） | 談話展開と言語意識の研究<br>－大学生のロールプレイを資料として－ | 飯森 玲子 | 野村 眞木夫 |
| | 『源氏物語　夕顔』研究 | 大石 尚栄 | 下西 善三郎 |
| | 芥川龍之介『藪の中』研究 | 岡野 孝弘 | 小埜 裕二 |
| | 板書の基礎技能向上に関する研究 | 加藤 亜紀 | 押木 秀樹 |
| | 二人間の会話における説明行為に関する研究 | 神田 靖大 | 高本 條治 |
| | 発話における意図の伝達に関する研究 | 倉井 伸太郎 | 高本 條治 |
| | 『伊勢物語』研究 | 倉茂 賀子 | 下西 善三郎 |
| | 中原中也の詩における〈月〉と〈道化〉研究 | 黒瀬 大昌 | 小埜 裕二 |
| | 新聞の人物紹介欄にみる女性を表す表現<br>－昭和中期以降の変遷－ | 小林 由佳 | 中里 理子 |
| | 『狭衣物語』研究 | 澤田 絵美 | 下西 善三郎 |
| | 多義語「あまし」の意味拡張<br>－「うまし」「からし」との比較を通して－ | 早川 真樹 | 中里 理子 |
| | 志賀直哉文学研究<br>－小動物の死を通して－ | 菱田 陽祐 | 小埜 裕二 |
| | 発想段階を重視した国語科作文指導に関する研究 | 堀内 陽子 | 渡部 洋一郎 |
| | 論理的思考力の育成に関する研究<br>－論理構造に着目した説明文の読み－ | 森岡 恵 | 有澤 俊太郎 |
| | 望ましい板書に求められる基礎的要素の研究 | 森本 光 | 押木 秀樹 |
| | ポーズの語用論的意味の期待性に関する調査・研究 | 山崎 晃 | 高本 條治 |
| 教科・領域教育専修<br>言語系コース（英語） | Development of CALL Materials for the Teaching of English Listening Skills Making Use of PowerPoint | 青木 太郎 | 酒井 英樹 |
| | 二重目的語構文の構造とその習得<br>：よりよい小学校英語活動の創造を目指して | 伊藤 創 | 野地 美幸 |
| | A Study on Passive Sentences in English Discourse | 伊藤 ひとみ | 加藤 雅啓 |
| | The Effects of Interactional Modifications on English Listening Comprehension by Japanese University Students | 遠藤 里子 | 酒井 英樹 |
| | On Humanitarianism in The Human Comedy : Homer and His family Bond | 嘉納 雅俊 | 前川 利広 |
| | The Learning Order of Grammatical Morphemes in English by Japanese Junior High School Students : Effects of English Education in Primary Schools | 塩谷 百合香 | 大場 浩正 |
| | Tom's Midnight Garden の研究 | 清水 愛 | 齋藤 九一 |
| | A Study On Present Perfect Tense in English Discourse | 武前 さやか | 加藤 雅啓 |
| | On William Saroyan's The Human Comedy | 柳澤 拓哉 | 前川 利広 |
| 教科・領域教育専修<br>社会系コース | 新潟市における学校ビオトープの地域的特徴とその活用 | 稲田 亜矢子 | 佐藤 芳徳 |
| | 『摂大乗論』における阿頼耶識説 | 小山田 政史 | 松田 愼也 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | カントの道徳論の研究 | 川浪剛志 | 藤澤郁夫 |
| | 日蓮の法難観 | 久保川陽介 | 松田愼也 |
| | 宮崎県における児童福祉施策の検討と教材化 | 酒井聡 | 山本友和 |
| | 遣隋使・遣唐使と東アジア情勢<br>－当時の外交関係記事に着目して－ | 坂﨑恵 | 浅倉有子 |
| | 近世における商品流通に関する研究<br>－信州問屋を中心に－ | 南雲隼人 | 浅倉有子 |
| | 加賀藩における賤民身分に関する一考察<br>－「かわた」から「えた」へ－ | 西村奈保美 | 浅倉有子 |
| | 近現代日本における剣道と戦争に関する一考察 | 西村直也 | 河西英通 |
| | 近現代北海道におけるアイヌ差別に関する一考察 | 畠三香子 | 河西英通 |
| | ポリネシア地域における異文化接触に関する一考察<br>－ジェームズ・クック航海日誌を中心に－ | 堀口ふみ香 | 下里俊行 |
| | 地域史教育における人物学習に関する一考察<br>－滋賀県彦根市と井伊直弼－ | 松本直也 | 河西英通 |
| | ベルクソン『道徳と宗教の二つの源泉』における道徳論 | 丸田麻美 | 藤澤郁夫 |
| | 砺波市におけるチューリップ球根栽培について | 吉岡志織 | 佐藤芳徳 |
| | 愛知県江南市における高齢者福祉施策の検討と教材化 | 吉田裕考 | 山本友和 |
| 教科・領域教育専修<br>自然系コース（数学） | 等角写像 | 今井輝彦 | 田中博 |
| | 確率を学ぶよさとその教材化に関する研究 | 海野高広 | 岩﨑浩 |
| | 「ユークリッド幾何学」の多角的なアプローチの研究 | 海老沼宏明 | 溝上武實 |
| | 「ユークリッド幾何学」の多角的なアプローチの研究 | 小林勇也 | 溝上武實 |
| | 数学科教育における教材の発展的な扱いについて | 篠原直人 | 黒木伸明 |
| | コーシーの積分定理 | 徳留信行 | 田中博 |
| | 子どもの算数・数学的活動の創発を促す教材に関する研究 | 中田直樹 | 髙橋等 |
| | つながりを大切にした算数教育の在り方に関する研究 | 仲村恵 | 岩﨑浩 |
| | 微分方程式とその応用 | 仲谷純子 | 森博 |
| | ガロア理論の基本定理 | 丸山聖治 | 中川仁 |
| | 微分方程式とその応用 | 宮下三加 | 森博 |
| | 定規とコンパスによる作図 | 宮本常徳 | 中川仁 |
| | 子どもの算数・数学的活動を導く教材開発研究 | 村松愼也 | 髙橋等 |
| | 線形微分方程式 | 中村浩志 | 田中博 |
| | 算数・数学における「理解」の仕組みについて | 濵本洋志 | 岩﨑浩 |
| 教科・領域教育専修<br>自然系コース（理科） | カラスのペリットの教材化に関する基礎的研究 | 梅澤洋子 | 中村雅彦 |
| | 卓球ボールの水平反発係数の測定 | 大崎貢 | 室谷利夫 |
| | 黄砂の発生源における表層物質と風送ダストとしての鉱物質エアロゾルの比較研究 | 岡泰子 | 大場孝信 |
| | 新潟県焼山の火山噴出物から見た噴火活動の特性 | 高木奈々子 | 大場孝信 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | 土壌動物による遺がいの消費過程の教材化に関する基礎的研究 | 松　原　静　香 | 中　村　雅　彦 |
| | ユズリハとエゾユズリハの生殖様式における比較研究 | 宮　原　美　充 | 小　川　　茂 |
| | 接合藻ミカヅキモ（Closterium）の細胞分裂期における核と葉緑体の挙動 | 八　木　ひとみ | 小　川　　茂 |
| | 位置エネルギーに関する教材研究 | 横　川　竜　也 | 西　山　保　子 |
| 教科・領域教育専修<br>芸術系コース（音楽） | 幼児と音のかかわりについて<br>～音楽的表現の育成に焦点を当てて～ | 伊　藤　美　幸 | 時　得　紀　子 |
| | 総合的な学習の時間と音楽科のかかわり | 垣　内　雅　文 | 時　得　紀　子 |
| | 合唱団員の楽曲の嗜好に関する一考察<br>～文部省唱歌『ふるさと』の編曲を題材として～ | 柴　田　航　平 | 時　得　紀　子 |
| | 小学校の課外活動におけるスクールバンドの指導 | 關　　良　枝 | 重　嶋　　博 |
| | 音楽科及び総合的な学習の時間におけるコンピュータ活用の有効性 | 空　　ゆかり | 時　得　紀　子 |
| | 『うつほ物語』に記された音の世界 | 髙　木　彩　子 | 茂手木　潔　子 |
| | 教員養成大学生の音楽嗜好とパーソナリティ<br>－ラウリングスの研究を土台として－ | 瀧　中　仁　美 | 小　川　昌　文 |
| | 音楽科の授業における評価について<br>～子どもの活動を中心にして～ | 中　村　絢　子 | 重　嶋　　博 |
| | 中学・高校の吹奏楽部におけるパーカッションの基礎練習の実際 | 新　関　由　佳 | 小　川　昌　文 |
| | 地域社会におけるサウンドスケープとしての時報サイレン | 平　野　亜　季 | 植　村　幸　生 |
| | 浄土真宗大谷派声明「正信偈」の研究 | 堀　井　三佳代 | 茂手木　潔　子 |
| | 歌唱学習のメカニズムとプロセス<br>－教師を目指す大学生はいかにして正しく歌えるようになるのか－ | 村　上　早　苗 | 小　川　昌　文 |
| | オペラ《カルメン》よりカルメンのアリアと私<br>～実践をもとに～ | 山　﨑　智　子 | 茂手木　潔　子 |
| | 幼少期における旋律認知に関する考察<br>～調性感覚形成を中心として～ | 仙　波　美　貴 | 小　川　昌　文 |
| 教科・領域教育専修<br>芸術系コース（美術） | 風景画による空間表現について | 岩　島　泰　子 | 洞　谷　亜里佐 |
| | 線と面による構成 | 上　野　美　香 | 福　岡　奉　彦 |
| | 身近な材料を用いた立体と空間の制作<br>－松代中学校一年生とのワークショップを手がかりに－ | 宇　野　亜希子 | 西　村　俊　夫 |
| | 行為からみる陶芸のあり方 | 田　中　三枝子 | 髙　石　次　郎 |
| | 伝統的な彫塑表現に関する考察及び彫塑制作<br>－人体の魅力－ | 横　山　拓　貴 | 岡　　充　夫 |
| | 絵画にみられる韓国の伝統衣装<br>－右衽・左衽をめぐって－ | 西　岡　はるか | 川　村　知　行 |
| | 初等教育における美術鑑賞教育 | 石　井　大　資 | 風　巻　孝　男 |
| 教科・領域教育専修<br>生活・健康系コース<br>（保健体育） | バスケットボールにおけるドリブルターン動作の観察と画像情報提示の有効性 | 秋　田　拓　也 | 直　原　　幹 |
| | 体育における内容の取り扱いの変化とその背景について | 大久保　裕　子 | 青　木　　眞 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | バレーボールのサービスコースの予測における視覚的手がかりについて | 朽木郁実 | 伊藤政展 |
| | チームスポーツにおける一選手の在り方についての一考察 | 佐藤喜男 | 加藤泰樹 |
| | サッカーの試合中における「声」について | 杉本丘人 | 榊原潔 |
| | 体育における人間形成の支援について | 高松寛志 | 加藤泰樹 |
| | 子どもの動きの発生に関わる支援について | 髙柳亜希子 | 長澤靖夫 |
| | バレーボールにおける普及の尺度 | 富所輝憲 | 土田了輔 |
| | バレーボールのサービスの正確性に及ぼす注意の内的・外的焦点化の影響 | 戸谷瞳 | 伊藤政展 |
| | バドミントンにおける対面コートの状況判断について | 山本悠介 | 榊原潔 |
| | 本学学生の生活習慣と健康観について | 吉田真奈美 | 砥堀雅信 |
| 教科・領域教育専修<br>生活・健康系コース<br>（技術） | 史跡のWeb３D学習題材の開発 | 小林健 | 大森康正 |
| | 技術科教育におけるポートフォリオ制作の効果 | 佐々木敦 | 山崎貞登 |
| | 教材化を見通したアミューズメント機器の設計と製作 | 佐藤和幸 | 川崎直哉 |
| | レゴブロックを利用した問題解決学習に関する研究 | 島田雅章 | 黎子椰 |
| | コミュニケーションロボットを利用した授業実践について | 清水貴之 | 黎子椰 |
| | 地域に着目したＧＩＳの利用と学校教育への導入 | 山本博和 | 大森康正 |
| 教科・領域教育専修<br>生活・健康系コース<br>（家庭） | １歳時のままごと遊びにおける母子のものの操作 | 天野里香 | 大瀧ミドリ |
| | 箸使用時における利き手と非利き手のパフォーマンスに対する視覚の関与 | 安藤知佳 | 立屋敷かおる |
| | テレビＣＭに対する視聴者の反応<br>－一般用医薬品を事例として－ | 伊倉里矢子 | 滝山桂子 |
| | 穀類の発芽種子に含まれる栄養素についての生化学的解析 | 伊藤能久 | 光永伸一郎 |
| | 服装の色と季節感<br>－嗜好色と季節感の重視傾向－ | 清塚理恵 | 佐藤悦子 |
| | イネヌカ層に含まれる栄養素についての生化学的解析 | 久須美恵里奈 | 光永伸一郎 |
| | ２歳時のままごと遊びにおける母子のものの操作 | 久保綾夏 | 大瀧ミドリ |
| | 現在の若者における死と死後の不安に対する一考察 | 小林輝紀 | 得丸定子 |
| | テレビＣＭに対する視聴者の反応<br>－茶系飲料を事例として－ | 中久美子 | 滝山桂子 |
| | 子どもの成長過程における「自分探し」についての一考察 | 沼田恵美理 | 得丸定子 |
| | 高等学校における福祉・ボランティア教育の実態と生徒の意識 | 向井康孝 | 細江容子 |
| | 子どものウェルビーイングと地域社会<br>～Ｓ地区における分析とそのモデルの作成～ | 吉田大輔 | 細江容子 |

(7) 教育職員免許状取得状況

① 平成15年度大学院学校教育研究科修了者

| 免許状の種類（教科） | | 平成15年度取得件数 |
|---|---|---|
| 小学校教諭専修免許状 | | 42 |
| 中学校教諭専修免許状 | （国　語） | 11 |
| | （英　語） | 3 |
| | （社　会） | 12 |
| | （数　学） | 6 |
| | （理　科） | 7 |
| | （音　楽） | 6 |
| | （美　術） | 8 |
| | （保健体育） | 5 |
| | （技　術） | 3 |
| | （家　庭） | 5 |
| 高等学校教諭専修免許状 | （国　語） | 10 |
| | （英　語） | 3 |
| | （地理歴史） | 7 |
| | （公　民） | 10 |
| | （数　学） | 6 |
| | （理　科） | 7 |
| | （音　楽） | 6 |
| | （美　術） | 8 |
| | （工　芸） | 3 |
| | （保健体育） | 5 |
| | （家　庭） | 5 |
| | （農　業） | 1 |
| | （福　祉） | 1 |
| 幼稚園教諭専修免許状 | | 11 |
| 盲学校教諭専修免許状 | | 1 |
| 養護学校教諭専修免許状 | | 5 |
| 養護学校教諭一種免許状 | | 2 |
| 合　計 | | 199 |

（注）新潟県教育委員会から一括授与されたものを掲載した。

② 平成15年度学校教育学部卒業者

| 免許状の種類（教科） | | 平成15年度取得件数 |
|---|---|---|
| 小学校教諭一種免許状 | | 163 |
| 中学校教諭一種免許状 | （国　語） | 19 |
| | （社　会） | 18 |
| | （数　学） | 18 |
| | （理　科） | 8 |
| | （音　楽） | 12 |
| | （美　術） | 11 |
| | （保健体育） | 9 |
| | （技　術） | 11 |
| | （家　庭） | 14 |
| | （英　語） | 12 |
| 中学校教諭二種免許状 | （美　術） | 1 |
| 高等学校教諭一種免許状 | （国　語） | 18 |
| | （地理歴史） | 15 |
| | （公　民） | 14 |
| | （数　学） | 18 |
| | （理　科） | 8 |
| | （音　楽） | 11 |
| | （美　術） | 9 |
| | （工　芸） | 2 |
| | （保健体育） | 9 |
| | （家　庭） | 14 |
| | （英　語） | 12 |
| 幼稚園教諭一種免許状 | | 56 |
| 幼稚園教諭二種免許状 | | 10 |
| 合　計 | | 492 |

（注）新潟県教育委員会から一括授与されたものを掲載した。

## (8) 科学研究費補助金等

### ① 科学研究費補助金

| 研究種目 | 研究代表者職・氏名 | 研究課題 | 金額（千円） |
|---|---|---|---|
| 基盤研究（B） | 助教授 松本 健義 | 子どもの学びの過程に対応する基礎・基本学習カリキュラムと教育実践の総合的研究 | 4,000 |
| | 助教授 中村 雅彦 | イワヒバリの雌の配偶者選択－雌の行動、父性、精子の運動、ホルモンレベルの統合－ | 2,800 |
| | 教授 南部 昌敏 | 作品の構造に着目した映像視聴能力・映像制作表現能力育成プログラムの開発と評価 | 2,500 |
| | 教授 二谷 貞夫 | 国際理解を中心とした総合的学習の内容構成に関する基礎的・実践的研究 | 7,800 |
| | 教授 齋藤 九一 | 公立小学校の英語科導入に関する包括的開発研究 | 4,800 |
| | 小計 | | 21,900 |
| 基盤研究（C） | 助手 山縣 耕太郎 | 北海道十勝地域における開拓期の人為的作用による自然環境への影響に関する検討 | 1,600 |
| | 講師 志村 喬 | 地図嫌いの発生要因の解明と地理教育による改善方法の検討 | 1,700 |
| | 教授 大瀧 ミドリ | 子どもが生活文化を体得する過程に関する実証的研究 | 1,100 |
| | 助教授 惠羅 修吉 | 発達障害児における聴覚的ならびに音韻的短期記憶の評価に関する基礎的研究 | 700 |
| | 助教授 下里 俊行 | 19世紀後半のロシアの絵入り新聞にみる東アジア表象にかんする基礎的研究 | 700 |
| | 教授 加藤 雅啓 | 談話における倒置構文に関する総合的研究－関連性理論、認知文法による考察 | 500 |
| | 助手 藤木 一浩 | 廃プラスチックを利用した無機／有機ナノ複合膜の合成とガス薄膜センサーへの応用 | 400 |
| | 助教授 直原 幹 | 教科「体育」における運動技能学習とマルチメディア活用の有効性に関する実践的研究 | 800 |
| | 助教授 黎 子椰 | バーチャルリアリティ機能を有する旋盤操作技能教育・訓練用シミュレータの開発 | 600 |
| | 助教授 布川 和彦 | 意味生成のプロセスとしての算数・数学の学習についての研究 | 1,200 |
| | 助教授 北條 礼子 | 言語学習における自律学習を目指す教授ツールとしてのポートフォリオ利用に関する研究 | 800 |
| | 教授 滝山 桂子 | 生活情報の活用による選好評価の変容を測定する方法の開発 | 700 |
| | 助教授 丸山 良平 | 幼児教育におけるインフォーマル算数習得の支援プログラムと指導法の開発 | 500 |
| | 助教授 大場 浩正 | 日本人英語学習者の文法能力発達メカニズムの解明に関する研究 | 500 |
| | 助教授 得丸 定子 | 日本と近隣諸国における「いのち教育」の比較検討 | 1,800 |
| | 教授 大庭 重治 | 障害児における書字指導プログラムの作成に関する基礎的研究 | 600 |
| | 助教授 山崎 貞登 | 自己評価システムを利用した技術科カリキュラム開発に関する教育実践研究 | 100 |
| | 助教授 藤生 英行 | 行為障害傾向を持つ子どもへの介入プログラム開発のための基礎研究 | 1,300 |
| | 助教授 中村 光一 | 臨床的手法による算数のカリキュラム開発に関する研究 | 800 |
| | 教授 藤岡 達也 | パートナーシップを重視した教員研修での自然体験プログラムの開発とその評価 | 1,162 |
| | 講師 大森 康正 | 教師研修を対象とした適応型遠隔教育支援システムに関する研究 | 1,500 |
| | 教授 古賀 一博 | 米国公立学校教員評価制度の法的原理と実際的態様に関する研究 | 800 |
| | 助教授 荻原 克男 | 現代教育改革政策の歴史的位相とその特質－戦後日本を対象とした教育行政史的研究－ | 700 |
| | 助教授 和井田 清司 | 高等学校における「総合的な学習の時間」の実践状況と初期評価に関する総合的調査研究 | 2,100 |
| | 教授 黒木 伸明 | 聴覚障害生徒の言語表現および論理的思考能力の育成に関する研究 | 2,000 |
| | 助教授 天野 和孝 | 新生代二枚貝化石の穿孔補食痕の時代的変遷－エスカレーションの検証に向けて－ | 1,300 |
| | 小計 | | 25,962 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 若手研究（B） | 助手 安藤知子 | 健康な教職認識を醸成する学校の組織的条件に関する研究 | 600 |
| | 助手 村中智彦 | 知的障害児の家庭及び学校生活場面における選択機会の調査研究 | 700 |
| | 助手 岡崎正和 | 全体論の立場からの中学校数学の導入過程の構成に関する研究 | 900 |
| | 講師 大橋奈希左 | 地域における高齢者指導システムの開発－仲間との交流を目指す運動プログラムの展開－ | 900 |
| | 助教授 宮下敏恵 | 感情制御過程に関する基礎的研究とその臨床的応用 | 2,700 |
| | 助教授 大前敦巳 | 日本型高等教育における学生の文化習得過程とその社会的支援に関する研究 | 600 |
| | 講師 米山直樹 | 公立中学校における軽度発達障害をもつ生徒への特別支援教育システムの開発 | 1,200 |
| | 小計 | | 7,600 |
| 合計 | | 38件 | 55,462 |

（注）分担者及び附属学校教官の研究を除く。

② 各種研究経費

| 経費名 | 採択対象 | 配分額（千円） |
|---|---|---|
| 地域貢献特別支援事業費 | 現職教員支援のための総合的「学校コンサルテーション」推進事業 | 5,973 |
| 教員養成学部フレンドシップ事業促進等経費 | 授業科目「体験学習」,「ボランティア体験」 | 1,063 |
| 大学開放推進経費「大学等地域開放特別事業（大学 Jr. サイエンス＆ものづくり）」 | 学びのひろばオンキャンパス | 373 |
| 研究基盤支援促進経費 | 機器分析分野，学術標本分野 | 115 |

③ 奨学寄附金

| 名称 | 研究代表者職・氏名 | 寄附者 | 金額（千円） |
|---|---|---|---|
| 上越教育大学における教育研究活動等への助成 | | 公孫会会長<br>丸田勲 | 1,500 |
| 附属小学校の教育・研究活動に対する助成 | | 上越教育大学学校教育学部附属小学校後援会会長<br>渡辺佐千雄 | 2,570 |
| 附属中学校の教育・研究活動に対する助成 | | 上越教育大学学校教育学部附属中学校後援会会長<br>池田孝市 | 4,000 |
| 附属幼稚園の教育・研究活動に対する助成 | | 上越教育大学学校教育学部附属幼稚園後援会会長<br>秋山恵子 | 1,632 |
| 「第３回特色ある教育実践校・園」優良校賞金 | | 上越教育大学学校教育学部附属幼稚園園長<br>大山美和子 | 100 |
| 海外教育研究助成 | | 公孫会会長<br>丸田勲 | 400 |
| 海外教育研究助成 | | 上越教育大学後援会会長<br>海野幹夫 | 200 |
| 海外教育研究助成 | | 上越教育大学大学院同窓会会長<br>新部嘉一 | 200 |
| 清水富弘助教授に対する学術研究助成 | 助教授<br>清水富弘 | 新潟県佐渡海洋深層水利活用組合 | 1,000 |
| ㈶漁港漁村建設技術研究所研究助成金 | 助教授<br>河西英通 | 上越教育大学社会系教育講座助教授河西英通 | 500 |
| 佐藤誠教授に対する学術研究助成 | 教授<br>佐藤誠 | 新潟スリープラボ㈱ | 200 |
| | | 帝人在宅医療東日本㈱ | 100 |
| 佐藤誠教授に対する学術研究助成 | 教授<br>佐藤誠 | フジ・レスピロニクス㈱ | 100 |
| | | フクダライフテック新潟㈱ | 300 |
| | | シミズメディカルケア㈱ | 50 |
| ㈶佐川交通社会財団交通安全調査研究振興助成金 | 教授<br>佐藤誠 | 上越教育大学保健管理センター<br>教授佐藤誠 | 4,350 |
| 得丸定子助教授への研究助成 | 助教授<br>得丸定子 | ㈱田辺アールアンドディー・サービス | 500 |
| ㈶緑育成財団ネパール植物研究寄附金 | 助手<br>五百川裕 | ㈶緑育成財団 | 500 |

| 名　　称 | 研究代表者職・氏名 | 寄　附　者 | 金　額（千円） |
|---|---|---|---|
| 東京財団 2003 年度研究助成 | 助教授<br>河　合　　康 | 上越教育大学障害児教育講座<br>助教授河合康 | 1,700 |
| 上越教育大学学校教育学部附属中学校教育活動助成金 | | 上越教育大学学校教育学部附属中学校後援会有志 | 3,750 |

## (9) 上越教育大学研究プロジェクト採択状況

| 区分 | 研究代表者職・氏名 | 研究プロジェクトの名称 | 研究費(千円) |
|---|---|---|---|
| 特定研究 | 教授 古賀 一博 | 学校指導職の養成・研修システムとカリキュラム開発に関する比較研究 | 4,790 |
| | 小計 | | 4,790 |
| 一般研究 | 助教授 北條 礼子 | 小学校英語のための小活動集に関するハンドブックの開発研究 | 1,444 |
| | 教授 加藤 哲文 | 軽度発達障害のある児童生徒を担当する通常学級教師への支援システムの構築に関する研究 | 1,410 |
| | 講師 藤井 和子 | 特別な教育的ニーズのある子どものための個別の教育支援計画作成の実践研究 | 1,360 |
| | 助教授 中村 雅彦 | 上越教育大学自然観察ハンドブックの作成 | 1,436 |
| | 助 手下村 博志 | 教員養成課程における自然環境を知るための理科実験教材の開発と環境教育プログラムの開発 | 1,418 |
| | 教授 西村 俊夫 | 相互コミュニケーション科目「表現」の教育内容及び方法の開発と教育実践の理論の構築に関する研究 | 1,406 |
| | 講師 小林 毅夫 | 佐渡の未来を切り開く学力とカリキュラム開発に関する総合的研究 | 1,434 |
| | 小計 | | 9,908 |
| 合計 | | | 14,698 |

### ⑽ 教員の外国出張等

#### ① 外国出張・海外研修

| 職　名 | 氏　名 | 渡航目的国 | 用　　務 | 期　　間 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 助　教　授 | 山崎　貞登 | マレーシア | International Council of Associations for Science Educaiton 国際会議出席 | 平成15年４月４日～<br>平成15年４月９日 | 海外研修 |
| 〃 | 小川　昌文 | 大韓民国 | 韓国音楽教育学会幹部との打合せ及び韓国の音楽教育の実践についての調査 | 平成15年４月７日～<br>平成15年４月10日 | 〃 |
| 教　　授 | 川村　知行 | 大韓民国 | 韓国教員大学校への短期留学に関する打合せ | 平成15年５月８日～<br>平成15年５月14日 | 外国出張 |
| 〃 | 太田　将勝 | アメリカ合衆国 | アメリカ美術教育資料収集及びニューヨークの小学校での授業見学･研究授業の実施 | 平成15年５月９日～<br>平成15年5月16日 | 海外研修 |
| 助　教　授 | 庭野　義英 | アメリカ合衆国 | アイオワ大学との交流協定更新 | 平成15年5月18日～<br>平成15年5月23日 | 外国出張 |
| 助　　手 | 村中　智彦 | アメリカ合衆国 | Association for Behavior Analysis学会出席 | 平成15年５月23日～<br>平成15年５月29日 | 〃 |
| 教　　授 | 藤原　義博 | アメリカ合衆国 | Association for Behavior Analysis 学会出席及び研究資料収集 | 平成15年５月23日～<br>平成15年５月29日 | 海外研修 |
| 〃 | 加藤　哲文 | アメリカ合衆国 | Association for Behavior Analysis 学会出席, 研究資料収集及び関係者との協議 | 平成15年５月23日～<br>平成15年５月29日 | 〃 |
| 講　　師 | 米山　直樹 | アメリカ合衆国 | Association for Behavior Analysis学会出席及び研究資料収集 | 平成15年５月23日～<br>平成15年５月29日 | 〃 |
| 助　教　授 | 小川　昌文 | アメリカ合衆国 | 音楽教育哲学学会研究発表及び研究打合せ | 平成15年６月３日～<br>平成15年６月10日 | 〃 |
| 助　　手 | 五百川　裕 | ネパール | ネパール国ムスタン地域の植物相調査における現地調査 | 平成15年６月16日～<br>平成15年７月15日 | 外国出張 |
| 助　教　授 | 山崎　貞登 | イギリス | PATT-13及び第４回CRIPT国際会議出席及びOCR試験局の現地調査 | 平成15年６月19日～<br>平成15年７月４日 | 海外研修 |
| 〃 | 田島　弘司 | 大韓民国 | 日本語教育の実践に関する調査及び国際理解教育の素材収集 | 平成15年６月20日～<br>平成15年６月23日 | 〃 |
| 教　　授 | 佐藤　　誠 | フィンランド | 第７回World Congress on Sleep Apneaにおける研究発表 | 平成15年６月29日～<br>平成15年７月４日 | 外国出張 |
| 講　　師 | 釜田　　聡 | 大韓民国 | 国際理解教育に関する資料収集及び韓国教員大学校，公州大学校師範学校及びソウル市立大学での研究打合せ | 平成15年7月７日～<br>平成15年７月10日 | 海外研修 |

| 職　名 | 氏　名 | 渡航目的国 | 用　　務 | 期　　間 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 助　　手 | 岡崎　正和 | アメリカ合衆国 | 第27回数学教育心理学会国際会議における研究発表及び「全体論の立場からの中学校数学の導入課程の構成」に関する研究打合せ | 平成15年７月11日～<br>平成15年７月22日 | 外国出張 |
| 教　　授 | 川村　知行 | 大韓民国 | 国際理解教育に関する研究打合せ | 平成15年７月15日～<br>平成15年７月17日 | 〃 |
| 〃 | 小埜　裕二 | フランス<br>ドイツ | フランスにおける日本近代文学受容に関する調査・研究及びドイツにおける日本近代文学（森鴎外・藤枝静男その他）に関する資料収集 | 平成15年７月17日～<br>平成15年７月30日 | 海外研修 |
| 外国人教師 | Kaltenbach<br>Carolyn<br>Luise | アメリカ合衆国 | ニューメキシコ大学において調査・研究及びアーバンプロミスアカデミースクールにおいて調査 | 平成15年７月22日～<br>平成15年８月21日 | 〃 |
| 講　　師 | 若山　真幸 | イスラエル | 古代ヘブライ語（聖書ヘブライ語）の資料収集 | 平成15年８月５日～<br>平成15年８月19日 | 〃 |
| 〃 | 釜田　　聡 | 大韓民国 | 歴史教育，教師教育に関する資料収集 | 平成15年８月11日 | 〃 |
| 助 教 授 | 下里　俊行 | フィンランド<br>スウェーデン | ロシア思想史の多面的包括的再構築にかかわる資料調査 | 平成15年８月12日～<br>平成15年８月31日 | 外国出張 |
| 〃 | 黎　　子椰 | 中国 | 共同研究の打合せ及び中国の技術科教育科教育に関する資料収集 | 平成15年８月12日～<br>平成15年８月29日 | 海外研修 |
| 教　　諭 | 長谷川　真 | 大韓民国 | 韓国交歓（訪問）生徒引率 | 平成15年８月22日～<br>平成15年８月25日 | 外国出張 |
| 〃 | 澤田　　靖 | 大韓民国 | 韓国交歓（訪問）生徒引率 | 平成15年８月22日～<br>平成15年８月25日 | 〃 |
| 養護教諭 | 矢沢　智子 | 大韓民国 | 韓国交歓（訪問）生徒引率 | 平成15年８月22日～<br>平成15年８月25日 | 〃 |
| 教　　授 | 齋藤　九一 | カンボジア | カンボジアの子どもたちに絵本を届ける活動の視察と国際理解教育のための資料収集 | 平成15年８月24日～<br>平成15年８月31日 | 海外研修 |
| 〃 | 池田　　操 | ドイツ | 声楽演奏法の研究及び研究資料の収集 | 平成15年８月25日～<br>平成15年10月５日 | 〃 |
| 助　　手 | 山縣耕太郎 | ロシア | 「環オホーツク陸域における環境変動と森林動態の解明」に関する永久凍土調査及び研究打合せ | 平成15年９月４日～<br>平成15年９月21日 | 外国出張 |
| 助 教 授 | 前川　利広 | カナダ | ブランドン大学との協定に関する打合せ及び留学生派遣の実地調査 | 平成15年９月13日～<br>平成15年９月22日<br>（９月14～15日除く） | 〃 |
| 〃 | 前川　利広 | アメリカ合衆国 | 外国語教育用教材作成のための資料収集 | 平成15年９月14日～<br>平成15年９月15日 | 海外研修 |

| 職　名 | 氏　名 | 渡航目的国 | 用　　務 | 期　　間 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 教　　授 | 加藤　雅啓 | オーストラリア | 平成15年度海外教育（特別）研究参加学生引率・指導 | 平成15年９月15日～<br>平成15年９月23日 | 外国出張 |
| 助　教　授 | 庭野　義英 | オーストラリア | 平成15年度海外教育（特別）研究参加学生引率・指導 | 平成15年９月15日～<br>平成15年９月23日 | 〃 |
| 専門職員 | 秋山由美子 | オーストラリア | 平成15年度海外教育（特別）研究参加学生引率 | 平成15年９月15日～<br>平成15年９月23日 | 〃 |
| 助　教　授 | 得丸　定子 | アメリカ合衆国 | エイジングと酸化ストレス，エイジング，死と教育に関する資料収集 | 平成15年９月16日～<br>平成15年９月27日 | 〃 |
| 〃 | 大場　浩正 | イギリス | ヨーロッパ第２言語習得学会に出席及び「日本人英語学習者の文法能力発達メカニズムの解明に関する研究」に関する資料収集 | 平成15年９月16日～<br>平成15年９月23日 | 〃 |
| 〃 | 濁川　明男 | イギリス<br>フランス | 環境教育を中心とした研究資料収集 | 平成15年９月17日～<br>平成15年９月25日 | 〃 |
| 講　　師 | 釜田　　聡 | イギリス<br>フランス | 環境教育を中心とした研究資料収集 | 平成15年９月17日～<br>平成15年９月25日 | 〃 |
| 教　　授 | 大悟法　滋 | アメリカ合衆国 | 国際理解教育に関する資料収集 | 平成15年9月18日～<br>平成15年９月30日 | 〃 |
| 〃 | 川村　知行 | アメリカ合衆国 | 国際理解教育に関する資料収集 | 平成15年9月18日～<br>平成15年９月30日 | 〃 |
| 〃 | 茂手木潔子 | オランダ<br>ドイツ<br>イタリア<br>フランス<br>ノルウェー | 日本文化（人形浄瑠璃）の音楽紹介及び解説 | 平成15年９月20日～<br>平成15年10月19日 | 〃 |
| 〃 | 古賀　一博 | 大韓民国 | 第10回日韓セミナーに出席 | 平成15年9月25日～<br>平成15年9月27日 | 〃 |
| 〃 | 三浦　望慶 | ドイツ | ミュンスター大学での資料収集及び国際スキーコロキウム出席 | 平成15年９月30日～<br>平成15年10月13日 | 海外研修 |
| 助　教　授 | 大場　孝信 | 中国 | 平成15年度科学技術振興調整費「地表面からの風送ダスト鉛直輸送量及び東アジア域の風送ダスト供給量と沈着量」による中国新疆ウイグル自治区策勒地区の観測地点での現地調査 | 平成15年10月10日～<br>平成15年10月20日 | 外国出張 |
| 〃 | 河合　　康 | インドネシア | インドネシアの障害児教育に関する研究打合せ及び資料収集 | 平成15年10月11日～<br>平成15年10月25日 | 〃 |
| 教　　授 | 川村　知行 | 大韓民国 | 平成15年度韓国教員大学校への短期留学に伴う学生引率 | 平成15年10月17日～<br>平成15年10月30日 | 〃 |
| 助　教　授 | 植村　幸生 | 大韓民国 | 平成15年度韓国教員大学校への短期留学に伴う学生引率 | 平成15年10月17日～<br>平成15年10月24日 | 〃 |

| 職　名 | 氏　名 | 渡航目的国 | 用　　務 | 期　　間 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 講　　師 | 釜田　　聡 | 大韓民国 | 平成15年度韓国教員大学校への短期留学に伴う学生引率 | 平成15年10月17日～<br>平成15年10月30日 | 外国出張 |
| 教　　授 | 大庭　重治 | アメリカ合衆国 | 大学における障害学生の受け入れシステムの構築に関する研究交流 | 平成15年10月19日～<br>平成15年11月1日 | 〃 |
| 助　教　授 | 小川　昌文 | アメリカ合衆国 | アメリカ合衆国における音楽教員養成カリキュラム研究の動向調査 | 平成15年10月29日～<br>平成15年12月15日 | 〃 |
| 養護教諭 | 五味川園子 | スペイン<br>フランス | 平成15年度国立大学・学部附属学校等教官海外派遣参加 | 平成15年11月12日～<br>平成15年11月28日 | 〃 |
| 教　　授 | 我妻　敏博 | 中国 | 中国における障害児教育の現状と課題に関する研究交流 | 平成15年11月16日～<br>平成15年11月24日 | 〃 |
| 助　教　授 | 庭野　義英 | アメリカ合衆国 | 理科教育における構成主義に関する日米比較研究の打合せ | 平成15年11月16日～<br>平成15年11月23日 | 海外研修 |
| 教　　授 | 二谷　貞夫 | 大韓民国 | 第４回韓国国際理解教育学会、第２回韓・日国際理解教育ワークショップにおける研究発表及び日韓国際交流に関する資料収集 | 平成15年11月21日～<br>平成15年11月24日 | 外国出張 |
| 助　教　授 | 田島　弘司 | 大韓民国 | 第４回韓国国際理解教育学会、第２回韓・日国際理解教育ワークショップにおける研究発表及び日韓国際交流に関する資料収集 | 平成15年11月21日～<br>平成15年11月24日 | 〃 |
| 講　　師 | 釜田　　聡 | 大韓民国 | 第４回韓国国際理解教育学会、第２回韓・日国際理解教育ワークショップにおける研究発表及び日韓国際交流に関する資料収集 | 平成15年11月21日～<br>平成15年11月24日 | 〃 |
| 教　　授 | 石田　文彦 | 中国 | 中国伝統技術国際会議に出席 | 平成15年11月21日～<br>平成15年11月27日 | 海外研修 |
| 助　　手 | 山縣耕太郎 | イギリス<br>ナミビア<br>イタリア | アフリカ半乾燥地域における環境変動と人間活動に関する調査及び研究打合せ | 平成15年11月21日～<br>平成15年12月22日 | 外国出張 |
| 助　教　授 | 小埜　裕二 | 大韓民国 | 日韓両国の大学における日本近代文学の教育方法に関する研究交流 | 平成15年11月30日～<br>平成15年12月６日 | 〃 |
| 学　　長 | 渡邉　　隆 | アメリカ合衆国 | アイオワ大学との交流協定（更新）調印及び教育事情実地視察 | 平成15年11月30日～<br>平成15年12月８日 | 〃 |
| 助　教　授 | 庭野　義英 | アメリカ合衆国 | アイオワ大学との交流協定（更新）調印及び教育事情実地視察 | 平成15年11月30日～<br>平成15年12月７日 | 〃 |
| 学　　長 | 渡邉　　隆 | 大韓民国 | 韓国教員大学校との学生交流及び研究者交流に関する打合せ | 平成16年１月18日～<br>平成16年１月20日 | 〃 |

| 職　名 | 氏　名 | 渡航目的国 | 用　　務 | 期　　間 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 助　教　授 | 植村　幸生 | 大韓民国 | 韓国教員大学校との学生交流及び研究者交流に関する打合せ | 平成16年１月18日～<br>平成16年１月20日 | 外国出張 |
| 学　　長 | 渡邉　　隆 | イギリス | グラスゴー大学との交流協定に関する打合せ及び教育事情実地視察 | 平成16年１月31日～<br>平成16年２月８日 | 〃 |
| 教　　授 | 加藤　雅啓 | イギリス | グラスゴー大学との交流協定に関する打合せ及び教育事情実地視察 | 平成16年１月31日～<br>平成16年２月８日 | 〃 |
| 講　　師 | 大森　康正 | イギリス | グラスゴー大学との交流協定に関する打合せ及び教育事情実地視察 | 平成16年１月31日～<br>平成16年２月８日 | 〃 |
| 〃 | 志村　　喬 | イギリス | 英国地理教育調査に関する研究交流 | 平成16年２月３日～<br>平成16年２月18日 | 〃 |
| 助　教　授 | 和井田清司 | 大韓民国 | 高校総合学習の韓国における状況に関する資料収集 | 平成16年２月15日～<br>平成16年２月18日 | 〃 |
| 〃 | 松本　　修 | 大韓民国 | 韓国における日本語教育・学習研究の実態調査 | 平成16年２月16日～<br>平成16年２月18日 | 海外研修 |
| 〃 | 庭野　義英 | 大韓民国 | 小学校中学校の理科の授業と教員養成に関する日本と韓国の比較研究の打合せ | 平成16年２月21日～<br>平成16年２月25日 | 〃 |
| 〃 | 得丸　定子 | 大韓民国 | 「日本と近隣諸国における『いのち教育』の比較検討」に関する韓国におけるシンポジウムにおける研究発表 | 平成16年２月26日～<br>平成16年３月２日 | 外国出張 |
| 〃 | 植村　幸生 | 大韓民国 | 大韓民国における音楽のグローバル化に関する調査 | 平成16年２月27日～<br>平成16年３月11日 | 〃 |
| 〃 | 和井田清司 | 中国 | 中国における総合学習・個性化教育の実践状況に関する研究交流 | 平成16年２月28日～<br>平成16年３月11日 | 〃 |
| 教　　授 | 山崎　貞登 | イギリス | 北アイルランドの総合的学習のカリキュラム調査 | 平成16年３月２日～<br>平成16年３月７日 | 〃 |
| 助　教　授 | 田島　弘司 | 中国 | 総合実践活動，国際理解教育，日本語教育の中国の学校・社会における調査資料収集 | 平成16年３月６日～<br>平成16年３月22日 | 〃 |
| 〃 | 北條　礼子 | 中国 | 国際理解教育と英語教育の中国の学校における調査資料収集 | 平成16年３月12日～<br>平成16年３月18日 | 〃 |
| 教　　授 | 川村　知行 | イタリア<br>フランス<br>ベルギー<br>オランダ | 国際理解教育に関する資料収集 | 平成16年３月19日～<br>平成16年３月31日 | 〃 |
| 助　教　授 | 植村　幸生 | 大韓民国 | 平成17年度以降の学生交流に関する準備 | 平成16年３月21日～<br>平成16年３月26日 | 〃 |

| 職　名 | 氏　名 | 渡航目的国 | 用　　務 | 期　　間 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 助　教　授 | 小林　　恵 | イタリア<br>フランス | 教育視察，学校見学 | 平成16年３月21日～<br>平成16年３月31日 | 海外研修 |
| 〃 | 洞谷亜里佐 | フランス<br>イタリア | フランス・イタリア個展絵画の研修及び絵画制作に関する資料の収集 | 平成16年３月23日～<br>平成16年４月２日 | 〃 |
| 教　　授 | 増谷　直樹 | フランス | 美術教育資料収集，研究制作 | 平成16年３月23日～<br>平成16年４月３日 | 〃 |
| 助　教　授 | 庭野　義英 | アメリカ合衆国 | プラグマティズムの自然観，科学観の研究の打合せ | 平成16年３月23日～<br>平成16年４月３日 | 〃 |
| 〃 | 阿部　靖子 | ドイツ<br>イギリス | 環境造形教育の研究 | 平成16年３月24日～<br>平成17年１月20日 | 外国出張<br>（在外研究員） |
| 教　　授 | 大嶽　幸彦 | アメリカ合衆国 | アメリカ合衆国の地誌に関する資料の蒐集と現地調査 | 平成16年３月27日～<br>平成16年４月５日 | 海外研修 |
| 〃 | 三浦　望慶 | アメリカ合衆国 | 第３回国際スキー科学学会（ICSS）に出席 | 平成16年３月28日～<br>平成16年３月31日 | 外国出張 |

② 内地研究員

| 職名 | 氏名 | 受入機関 | 研究題目 | 期間 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 講　　師 | 大橋奈希左 | 愛媛大学<br>教育学部 | 体ほぐし・リズムダンスを入り口とした創作ダンスの指導・支援 | 平成15年７月20日～<br>平成16年１月20日 | |

### (11) 非常勤講師等

#### ① 非常勤講師

ア　大学院学校教育研究科

| 授業科目名 | 時間数 | 担当教官 | 勤務先 | 日程 |
|---|---|---|---|---|
| カリキュラム構成特論 | 30 | 安彦忠彦 | 早稲田大学 | 9月18日(木)～9月21日(日) |
| 教育課程行政特論 | 30 | 辰野裕一 | 文部科学省 | 11月1日(土)～11月2日(日) |
| | | | | 11月15日(土)～11月16日(日) |
| 学習臨床学特論 | 15 | 西野範夫 | | 7月4日,7月11日,8月4～5日,9月5日,9月19日 |
| 学校教育相談特論 | 30 | 犬塚文雄 | 国立横浜大学 | 2月20日(金)～2月22日(日) |
| 学習場面臨床学特論 | 15 | 浜田壽美男 | 花園大学 | 7月19日(土)～7月20日(日) |
| 学習臨床カウンセリングⅠ | 15 | 山田富秋 | 京都精華大学 | 6月21日(土)～6月22日(日) |
| 学習と相互行為特論 | 15 | 上野直樹 | 国立教育政策研究所 | 12月6日(土)～12月7日(日) |
| 学習と言語特論 | 15 | 茂呂雄二 | 筑波大学 | 9月27日(土)～9月28日(日) |
| 学習と表現特論 | 15 | 西野範夫 | | 10月25日(土)～10月26日(日) |
| 情報化社会教育特論 | 30 | 山西潤一 | 富山大学 | 9月6日(土) |
| | | | | 9月13日(土)～9月14日(日) |
| 地域教育特論 | 15 | 高橋敏 | 国立歴史民俗博物館 | 12月13日(土)～12月14日(日) |
| 環境教育特論 | 15 | 猪瀬武則 | 弘前大学 | 7月28日(月)～7月29日(火) |
| 環境教育演習 | 15 | 猪瀬武則 | 弘前大学 | 7月26日(土)～7月27日(日) |
| 学校教育相談演習 | 30 | 清水幹夫 | 法政大学 | 7月25日(金)～7月28日(月) |
| 地域教育計画特論 | 30 | 葉養正明 | 東京学芸大学 | 9月18日(木)～9月20日(土) |
| 現代社会と子ども | 30 | 押木泉 | 新潟清陵大学 | 7月18日(金)～7月21日(月) |
| 心身医学特論 | 30 | 佐々木雄二 | 駒澤大学 | 7月30日(水)～8月1日(金) |
| 臨床薬理学特論 | 30 | 不破野誠一 | ふわの医院 | 2月4日,2月11日,2月18日 |
| 精神医学特論 | 30 | 十一元三 | 滋賀大学 | 3月4日(火)～3月6日(土) |
| 臨床心理実習Ⅱ | 2 | 大原薫 | 国立療養所犀潟病院 | 10月2日(木) |
| | 2 | 高塚理 | 国立療養所犀潟病院 | 10月16日(木) |
| 障害児病理学論C | 30 | 原美智子 | 群馬大学 | 7月29日(火)～7月31日(木) |
| 視覚障害児指導法 | 30 | 佐々木正晴 | 弘前学院大学 | 2月9日(月)～2月11日(水) |
| 言語障害児指導法 | 30 | 涌井豊 | 新潟医療福祉大学 | 7月22日(土)～7月24日(木) |
| 知的障害児心理学論 | 30 | 小松秀茂 | 東北芸術工科大学 | 2月20日(金)～2月22日(日) |
| 障害児授業論 | 30 | 永松裕希 | 信州大学 | 2月14日(土)～2月16日(月) |
| 国語学演習A | 30 | 長沼英二 | 明治大学 | 7月29日(土)～7月31日(木) |
| 数学教育学特論B | 30 | 山田篤史 | 愛知教育大学 | 2月16日(月)～2月17日(火) |
| | | 岡本光司 | | 2月18日(水)～2月19日(木) |
| 物理学特論A | 15 | 大嶋建一 | 筑波大学 | 9月25日(木)～9月26日(金) |
| 化学特論A | 15 | 蒲生啓司 | 高知大学 | 7月19日(土)～7月20日(日) |
| 理科教育学特論B | 15 | 原田(堀)哲夫 | 静岡大学 | 9月29日(月)～9月30日(火) |
| 「生命地球」特論A | 15 | 廣部知久 | 放射線医学研究所 | 7月28日(月)～7月29日(火) |
| 「生命地球」特論C | 15 | 宮本昌典 | 新潟大学 | 7月12日(土)～7月13日(日) |
| 無機・分析化学特論 | 30 | 林康久 | | 2月17日(火)～2月20日(金) |
| 日本音楽研究 | 15 | 福永千恵子 | | 9月18日(木)～9月19日(金) |
| 音楽学特論 | 15 | 吉川茂 | 九州芸術工科大学 | 2月16日(月)～2月17日(月) |
| 指揮法研究 | 30 | 伊藤浩史 | 新潟大学 | 7月18日(金)～7月19日(土) |
| | | | | 9月20日(土)～9月21日(日) |
| 造形心理学特論 | 30 | 近江源太郎 | 女子美術大学 | 9月24日(水)～9月26日(金) |
| 東洋美術史特論 | 15 | 星山晋也 | 早稲田大学 | 7月20日(日)～7月21日(月) |
| スポーツ学特論A | 30 | 寒川恒夫 | 早稲田大学 | 7月19日(土)～7月22日(火) |
| 保健体育科教育演習 | 30 | 丸山芳郎 | | 時間割組込(後期月3) |
| 被服学特別実験B | 30 | 坂本宗仙 | 東京服飾造形短期大学 | 10月23日(木)～10月25日(土) |
| | 949 | | | |

イ　学校教育学部

| 授業科目名 | 時間数 | 担当教官 | 勤務先 | 日　程 |
|---|---|---|---|---|
| 学習場面臨床学 | 15 | 浜田　壽美男 | 花園大学 | 7月18日(金)～7月19日(土) |
| 学習臨床カウンセリング基礎Ⅰ | 15 | 山田　富秋 | 京都精華大学 | 6月20日(金)～6月21日(土) |
| 学習と相互行為 | 15 | 上野　直樹 | 国立教育政策研究所 | 12月5日(金)～12月6日(土) |
| 学習と言語 | 15 | 茂呂　雄二 | 筑波大学 | 9月26日(金)～9月27日(土) |
| 学習と表現 | 15 | 西野　範夫 | | 10月24日(金)～10月25日(土) |
| 情報教育カリキュラム論 | 30 | 堀田　龍也 | 静岡大学 | 7月28日(月)～7月30日(水) |
| 情報基礎（実習を含む。） | 30 | 南雲　秀雄 | 新潟清陵大学 | 時間割組込(後期木3) |
| 文化体験演習 | 15 | 小島　幸雄 | 上越市教育委員会 | 9月22日(月)～9月23日(火) |
| 生活科体験演習 | 15 | 上原　進 | 上越市立高志小学校 | 7月16日(水)～7月17日(木) |
| 環境教育概論 | 15 | 梅野　正信 | 鹿児島大学 | 11月29日(土)～11月30日(日) |
| 同和教育 | 30 | 橘川　真彦 | 宇都宮大学 | 7月28日(月)～7月31日(木) |
| 学校教育相談基礎演習 | 30 | 稲垣　応顕 | 富山大学 | 7月17日(木)～7月19日(土) |
| 子どもの福祉 | 30 | 桜井　慶一 | 文教大学 | 7月29日(火)～7月31日(木) |
| 幼児の教育課程論 | 15 | 細井　房明 | 新潟工科大学 | 時間割組込(前期木3) |
| 漢文学講読 | 30 | 磯部　祐子 | 高岡短期大学 | 7月16日(水)～7月18日(金) |
| 初等国語科指導法 | 10 | 藤井　知弘 | 岩手大学 | 7月20日(日) |
| 中等国語科指導法（学習論） | 30 | 寺井　正憲 | 千葉大学 | 2月16日(月)～2月19日(木) |
| 合奏C | 15 | 竹澤　悦子 | | 7月28日(月)～7月29日(火) |
| 独唱Ⅲ | 15 | 西潟　昭子 | 現代邦楽研究所 | 2月23日(月)～2月24日(火) |
| 栽培学概論 | 15 | 池田　武 | 新潟大学 | 9月25日(木)～9月26日(金) |
| 住居学（製図を含む） | 30 | 神川　康子 | 富山大学 | 7月28日(月)～7月30日(水) |
| 住居空間とエイジング論 | 30 | 神川　康子 | 富山大学 | 9月18日(木)～9月20日(土) |
| 社会教育計画A | 30 | 板垣　和伸 | 長岡市立太田中学校 | 7月12日(土)～7月13日(日)<br>7月19日(土)～7月20日(日) |
| 社会教育計画B | 30 | 板垣　和伸 | 長岡市立太田中学校 | 12月6日(土)～12月7日(日)<br>12月13日(土)～12月14日(日) |
| 社会教育演習Ⅰ | 15 | 板垣　和伸 | 長岡市立太田中学校 | 8月4日(月)～8月5日(火) |
| 社会教育演習Ⅱ | 15 | 板垣　和伸 | 長岡市立太田中学校 | 2月14日(土)～2月15日(日) |
| 社会教育演習Ⅱ | 15 | 伊野　亘 | 国立妙高少年自然の家 | 2月16日(月)～2月17日(火) |
| | 565 | | | |

② 教員養成実地指導講師

ア　教職に関する科目（教育実習の事前及び事後指導に関するものは除く）

| 講師氏名 | 職　　名 | 授業科目名 | 授業の趣旨・概要 | 年間授業時間数 |
|---|---|---|---|---|
| 長野克水 | 上越市立高志小学校校長 | 人間教育学セミナー（教職の意義） | 教育実践の視点からの教職の意義 | 2 |
| 竹田靖乃 | 上越市立高田幼稚園教諭 | 人間教育学セミナー（教職の意義） | 教育実践の視点からの教職の意義 | 2 |
| 竹田幸雄 | 高柳町立高柳中学校校長 | 人間教育学セミナー（教職の意義） | 教育実践の視点からの教職の意義 | 2 |
| 高峯綾子 | 柏崎市立比角小学校教諭 | 人間教育学セミナー（教職の意義） | 教育実践の視点からの教職の意義 | 2 |
| 矢野利雄 | 前上越市立保倉小学校校長 | 人間教育学セミナー（教職の意義） | 教育実践の視点からの教職の意義 | 4 |
| 古澤良彰 | ＮＰＯ法人エコネット上越理事長 | 家庭 | 初等教育の家庭科における食生活，衣生活，住生活の指導に必要な基礎的事項について講義する。 | 2 |
| 板垣勝雄 | 新潟県立上越養護学校校長 | 幼児・障害児教育原理 | 肢体不自由養護学校の教育の実状 | 2 |
| 小杉敏勝 | 新潟県立高田養護学校校長 | 幼児・障害児教育原理 | 知的障害養護学校の教育の実状 | 2 |
| 小西　明 | 新潟県立高田盲学校校長 | 幼児・障害児教育原理 | 盲学校教育の実状 | 2 |
| 前田智子 | 新潟県立長岡聾学校教諭 | 幼児・障害児教育原理 | 聾学校の教育の実状 | 2 |
| 阿部　勉 | 上越市立大手町小学校教諭 | 初等国語科指導法 | 小学校の国語科教材の見方・扱い方について，実践的な立場から説述する。 | 2 |
| 上野有紀 | 大潟町立大潟町小学校教諭 | 初等国語科指導法 | 小学校の国語科教材の見方・扱い方について，実践的な立場から説述する。 | 2 |
| 古閑晶子 | 上越市立大町小学校教諭 | 初等国語科指導法 | 小学校の国語科教材の見方・扱い方について，実践的な立場から説述する。 | 2 |
| 松岡博志 | 上越市立黒田小学校教諭 | 初等国語科指導法 | 小学校の国語科教材の見方・扱い方について，実践的な立場から説述する。 | 2 |
| 山本浩昭 | 安塚町立安塚小学校教諭 | 算数科指導法 | 算数的活動を中心に据えた算数の指導と評価の実際 | 6×2 |
| 阿部　勉 | 上越市立大手町小学校教諭 | 生活科指導法 | 生活科についての理解を実践的に広げ深める。 | 2×2 |
| 青木善治 | 上越教育大学附属小学校教諭 | 生活科指導法 | 生活科についての理解を実践的に広げ深める。 | 2×2 |
| 近藤美保子 | 上越市立南本町小学校教諭 | 初等音楽科指導法 | 小学校音楽科における「歌唱」分野の授業の実践 | 2×2 |
| 近藤隆司 | 安塚町立安塚小学校教諭 | 初等音楽科指導法 | 小学校音楽科における「器楽」分野の授業の実践 | 2×2 |
| 渡辺由紀 | 上越市立国府小学校教諭 | 初等音楽科指導法 | 小学校音楽科における「音楽をつくって表現する」内容の授業の実践 | 2×2 |
| 濱口　剛 | 上越市花と緑のまちづくり協議会事務局長 | 図画工作科指導法 | 小学校教員養成（図画工作） | 4×2 |
| 星野浩一 | 上越市立東本町小学校教諭 | 初等体育科指導法 | 小学校体育の考え方・進め方を演習などを含めて学ぶ。 | 2×2 |
| 荒川圭子 | 柿崎町立柿崎小学校教諭 | 初等家庭科指導法 | 小学校家庭科の実際と理想，今後の在り方について，現場教師の立場で指導する。 | 2×2 |

| 講師氏名 | 職　　名 | 授業科目名 | 授業の趣旨・概要 | 年間授業時間数 |
|---|---|---|---|---|
| 高峯綾子 | 柏崎市立比角小学校教諭 | 初等家庭科指導法 | 小学校家庭科における「いのち教育」の実践的指導例を講義する。 | 2×2 |
| 池永文雄 | 明願寺住職 | 初等家庭科指導法 | 小学校家庭科における「いのち教育」について，埋葬儀礼の果たす現在的意義について講義をする。 | 2×2 |
| 佐藤　誠 | （株）桶孫代表取締役 | 初等家庭科指導法 | 小学校家庭科における「いのち教育」について，埋葬儀礼の果たす現在的意義について，現場からの報告・講演を行う。 | 2×2 |
| 岩崎　守 | 名立町立名立小学校校長 | 中等国語科指導法（授業論） | 中学校の国語科授業における授業計画の立て方について，実践的な立場から説述する。 | 2 |
| 鈴木正之 | 妙高村立妙高中学校校長 | 中等国語科指導法（授業論） | 中学校の国語科授業における授業計画の立て方について，実践的な立場から説述する。 | 2 |
| 上野有紀 | 大潟町立大潟町小学校教諭 | 中等国語科指導法（課程論） | 中学校の国語科授業におけるカリキュラム開発について実践的な立場から説述する。 | 2 |
| 松岡博志 | 上越市立黒田小学校教諭 | 中等国語科指導法（課程論） | 中学校の国語科授業におけるカリキュラム開発について実践的な立場から説述する。 | 2 |
| 荻野健一 | 上越教育事務所学校指導課指導主事 | 中等英語科指導法（評価論） | 英語科における測定と評価に関する理論と実践を学習する。 | 6 |
| 保坂淑子 | 三和村立三和中学校教諭 | 中等音楽科指導法（本質論） | 中学校音楽科における「表現」領域の授業の実践 | 4 |
| 土田弘志 | 柏崎市立瑞穂中学校教頭 | 中等音楽科指導法（実践応用編） | 学校教育現場における中学校音楽科の授業の実践 | 4 |
| 堀川紀夫 | 上越市立八千穂中学校校長 | 中等美術科指導法（過程論） | 中学校教員養成（美術） | 6 |
| 前山　忠 | 新井市立新井中学校教諭 | 中等美術科指導法（教材論） | 中学校教員養成（美術） | 6 |
| 古澤良彰 | ＮＰＯ法人エコネット上越理事長 | 中等技術科指導法（基礎論） | 技術科教材研究の実践に関する基礎論 | 4 |
| 藤田賢一郎 | 上越市立城西中学校教諭 | 中等技術科指導法（基礎論） | 技術科授業の構成と実践（特に情報技術とコンピュータ）に関する基礎論 | 2 |
| 古澤良彰 | ＮＰＯ法人エコネット上越理事長 | 中等技術科指導法（課程論） | 技術科のカリキュラム開発と実践 | 4 |
| 藤田賢一郎 | 上越市立城西中学校教諭 | 中等技術科指導法（課程論） | 技術科カリキュラムの構成と実践（特に情報技術とコンピュータ） | 2 |
| 山澤禎之 | 新井市立新井小学校教諭 | 中等家庭科指導法（教材論） | 家庭科における情報教育の在り方と強化におけるＰＣを利用した教材の作成方法を指導する。 | 6 |
| 長谷川新平 | 頸城村立南川小学校校長 | 教育工学 | 教育の目的に応じた学習を成立させるためのコミュニケーションを支援する環境や方略，メディア等の理論と実践に関わる教師としての基礎的力量の育成を図る。 | 5 |
| 渡邉正親 | 頸城村立大瀁小学校校長 | 教育工学 | 教育の目的に応じた学習を成立させるためのコミュニケーションを支援する環境や方略，メディア等の理論と実践に関わる教師としての基礎的力量の育成を図る。 | 5 |

| 講師氏名 | 職　　名 | 授業科目名 | 授業の趣旨・概要 | 年間授業時間数 |
|---|---|---|---|---|
| 三田村　貴　弘 | 清里村立菅原小学校教諭 | 理科指導法演習 | 小学校理科の指導に関する展開例・実践例及び注意点。 | 4 |
| 脇　川　幸　治 | 大潟町立大潟町小学校教諭 | 理科指導法演習 | 小・中学校理科の連続性に関する問題点・展開例及び注意点。 | 4 |
| 高　橋　英　雄 | 上越市立高田西小学校校長 | 数学教材開発論 | 子どもの学習過程の特性と数学内容の特性の双方を視野に入れた学習活動系列の開発について考察する。 | 8 |
| 臼　井　一　郎 | 上越市立大手町小学校校長 | 実践セミナーⅡ「美術」 | 小学校教員養成（図画工作） | 4 |
| 岡　村　範　雄 | 上越教育大学附属中学校教諭 | 学習場面観察基礎 | 子どもの学びの場面にのぞみながら，成り立ちと過程を観察・考察する。 | 4 |
| 菊　地　一　秀 | 上越教育大学附属中学校教諭 | 学習場面観察基礎 | 子どもの学びの場面にのぞみながら，成り立ちと過程を観察・考察する。 | 4 |
| 青　木　善　治 | 上越教育大学附属小学校教諭 | 学習場面観察基礎 | 子どもの学びの場面にのぞみ，その成り立ちと過程を観察し，子どもの学びの理論をとらえるための基礎的な実習を行う。 | 2 |
| 清　水　雅　之 | 上越教育大学附属小学校教諭 | 生活科指導法 | 生活科についての理解を実践的に広げ深める。 | 2×2 |
| 梅　澤　健　一 | 上越教育大学附属小学校教諭 | 生活科指導法 | 生活科についての理解を実践的に広げ深める。 | 2×2 |
| 尾　身　浩　光 | 白根市立白根小学校教諭 | 生活科指導法 | 生活科についての理解を実践的に広げ深める。 | 2×2 |
| 石　黒　和　仁 | 上越教育大学附属小学校教諭 | 生活科指導法 | 生活科についての理解を実践的に広げ深める。 | 2×2 |
| 石　黒　和　仁 | 上越教育大学附属小学校教諭 | 初等体育科指導法 | 小学校体育の考え方・進め方を演習などを含めて学ぶ。 | 2×2 |
| 岡　村　範　雄 | 上越教育大学附属中学校教諭 | 中等国語科指導法（授業論） | 中学校の国語科授業における授業計画の立て方について，実践的な立場から説述する。 | 2 |
| 澤　田　　靖 | 上越教育大学附属中学校教諭 | 中等英語科指導法（授業論） | 中学校の英語科授業における授業計画の立て方及び実践について学ぶ。 | 6 |
| 田　村　雅　人 | 上越教育大学附属中学校教諭 | 数学科指導法 | 「数学的活動」を中心に据えた数学の指導と評価の実際 | 6 |
| 長谷川　　真 | 上越教育大学附属中学校教諭 | 数学科指導法 | 問題解決的な数学の授業構成と展開の実際 | 6 |
| 長谷川　泰　山 | 上越教育大学附属中学校教諭 | 中等音楽科指導法（本質論） | 中学校音楽科における「鑑賞」領域の授業の実践 | 4 |
| 梅　山　猛　生 | 上越教育大学附属中学校教諭 | 中等技術科指導法（基礎論） | 技術科授業の構成と実践（特に技術とものづくり）に関する基礎論 | 4 |
| 梅　山　猛　生 | 上越教育大学附属中学校教諭 | 中等技術科指導法（課程論） | 技術科カリキュラムの構成と実践（特に技術とものづくり） | 4 |
| 百目鬼　香保里 | 上越教育大学附属中学校教諭 | 中等家庭科指導法（教材論） | 指導現場における家庭科教材の具体例・指導例について講義する。 | 4 |
| 小　川　唯　一 | 上越教育大学附属中学校講師 | 数学学習過程論 | 数学の内容を理解している子どもの学習過程を，授業のビデオデータなどを交えながら考察する。 | 8 |

イ　教科に関する科目

| 講師氏名 | 職　　名 | 授業科目名 | 授業の趣旨・概要 | 年間授業時間数 |
|---|---|---|---|---|
| 小　山　雅　広 | 上越市立大手町小学校教諭 | 生活 | 生活科教育実践についての基礎的な知識を提供する。 | 4 |
| 泉　　真　理 | 頸城村立大瀁小学校教諭 | 生活 | 生活科教育実践についての基礎的な知識を提供する。 | 4 |
| 小　山　雅　広 | 上越市立大手町小学校教諭 | 生活科と総合学習 | 小学校における生活科と総合学習の具体的な展開 | １０ |
| 稲　葉　浩　一 | 牧村立牧中学校教諭 | 学習指導と学校図書館 | 学校図書館の活用及びその指導内容・方法について，実践的な立場から説述する。 | 2 |
| 上　原　絵　里 | 上越市立戸野目小学校教諭 | 学習指導と学校図書館 | 学校図書館の活用及びその指導内容・方法について，実践的な立場から説述する。 | 2 |
| 田　中　由希子 | 大潟町立大潟町中学校教諭 | 学習指導と学校図書館 | 学校図書館の活用及びその指導内容・方法について，実践的な立場から説述する。 | 4 |
| 吉　越　　透 | 上越市立教育センター研究員 | 学習指導と学校図書館 | 学校図書館の活用及びその指導内容・方法について，実践的な立場から説述する。 | 2 |
| 新　井　智　普 | 上越教育大学附属小学校教諭 | 総合学習と体験学習 | 体験学習を核として総合学習の在り方と具体的な展開 | 2 |

ウ　教育実習の事前及び事後指導に関する科目

| 講師氏名 | 職　　名 | 授業科目名 | 授業の趣旨・概要 | 年間授業時間数 |
|---|---|---|---|---|
| 蒲　野　　衛 | 上越市立小猿屋小学校校長 | 教育実地研究Ⅱ（授業基礎研究） | ３年次における教育実習の事前指導として小学校の授業場面における情報メディアの活用の在り方と具体的方法を理解させる。 | 6 |
| 清　水　雅　之 | 上越市立東本町小学校教諭 | 教育実地研究Ⅱ（授業基礎研究） | ３年次における教育実習の事前指導として小学校の授業場面における情報メディアの活用の在り方と具体的方法を理解させる。 | 6 |
| 志　村　正　幸 | 新井市立新井北小学校教頭 | 教育実地研究Ⅱ（授業基礎研究） | ３年次における教育実習の事前指導として小学校の授業場面における情報メディアの活用の在り方と具体的方法を理解させる。 | 6 |
| 藤　田　賢一郎 | 上越市立城西中学校教諭 | 教育実地研究Ⅱ（授業基礎研究） | ３年次における教育実習の事前指導として小学校の授業場面における情報メディアの活用の在り方と具体的方法を理解させる。 | 6 |
| 森　澤　　勉 | 上越地区広域視聴覚教育協議会ライブラリー所長 | 教育実地研究Ⅱ（授業基礎研究） | ３年次における教育実習の事前指導として小学校の授業場面における情報メディアの活用の在り方と具体的方法を理解させる。 | 6 |
| 山　澤　禎　之 | 新井市立新井小学校教諭 | 教育実地研究Ⅱ（授業基礎研究） | ３年次における教育実習の事前指導として小学校の授業場面における情報メディアの活用の在り方と具体的方法を理解させる。 | 6 |
| 高　橋　恵　子 | 前板倉町立筒方小学校校長 | 教育実地研究Ⅱ（授業基礎研究） | 教育実習に向けて，学習指導上不可欠な基礎的能を１０グループに分けてグループ単位で実践に習得させる。板書指導とその構造化の指導を担当する。 | １０ |
| 吉　越　正　子 | 前上越市立上雲寺小学校校長 | 教育実地研究Ⅱ（授業基礎研究） | 教育実習に向けて，学習指導上不可欠な基礎的能を１０グループに分けてグループ単位で実践に習得させる。板書指導とその構造化の指導を担当する。 | １０ |
| 大　山　真鶴佳 | 上越市社会福祉協議会デイサービス生活相談員 | 事後指導「介護等体験」 | 高齢者の介護の在り方 | 2 |
| 丸　山　芳　郎 | 前上越教育大学教授 | 事後指導「介護等体験」 | 身体障害者の介護の在り方 | 2 |
| 葭　原　勝　利 | 上越市立稲田小学校校長 | 初等教育実習事前指導 | 小学校教師としての資質と実習に期待することについての講話。 | 2 |
| 戸　田　正　明 | 糸魚川市立糸魚川小学校教諭 | 教育実地研究Ⅱ（授業基礎研究） | ３年次における教育実習の事前指導として，小学校の授業場面における情報メディアの活用の在り方と具体的方法を理解させる。 | 4 |
| 赤　澤　節　子 | 上越教育大学附属小学校教諭 | 教育実地研究Ⅱ（授業基礎研究） | 教育実習に向けて，授業の構想とそれに基づく学習指導案の作成指導を行う。 | 2 |

| 講師氏名 | 職　　名 | 授業科目名 | 授業の趣旨・概要 | 年間授業時間数 |
|---|---|---|---|---|
| 岡　村　芳　恵 | 上越教育大学附属小学校教諭 | 教育実地研究Ⅱ（授業基礎研究） | 教育実習に向けて，音楽の授業構想とそれに基づく学習指導案の作成指導を行う。 | 5 |
| 石　黒　和　仁 | 上越教育大学附属小学校教諭 | 教育実地研究Ⅱ（授業基礎研究） | 教育実習に向けて，体育の授業構想とそれに基づく学習指導案の作成指導を行う。 | 5 |
| 青　木　善　治 | 上越教育大学附属小学校教諭 | 教育実地研究Ⅱ（授業基礎研究） | 教育実習に向けて，図工の授業構想とそれに基づく学習指導案の作成指導を行う。 | 5 |
| 田　村　　篤 | 上越教育大学附属小学校教諭 | 教育実地研究Ⅱ（授業基礎研究） | 教育実習に向けて，国語の授業構想とそれに基づく学習指導案の作成指導を行う。 | 5 |
| 泉　　豊 | 上越教育大学附属小学校教諭 | 教育実地研究Ⅱ（授業基礎研究） | 教育実習に向けて，社会科の授業構想とそれに基づく学習指導案の作成指導を行う。 | 5 |
| 林　　克　巳 | 上越教育大学附属小学校教諭 | 教育実地研究Ⅱ（授業基礎研究） | 教育実習に向けて，算数の授業構想とそれに基づく学習指導案の作成指導を行う。 | 5 |
| 八　木　秀　文 | 上越教育大学附属小学校教諭 | 教育実地研究Ⅱ（授業基礎研究） | 教育実習に向けて，理科の授業構想とそれに基づく学習指導案の作成指導を行う | 5 |
| 梅　澤　健　一 | 上越教育大学附属小学校教諭 | 教育実地研究Ⅱ（授業基礎研究） | 教育実習に向けて，生活科の授業構想とそれに基づく学習指導案の作成指導を行う。 | 5 |
| 星　山　　薫 | 上越教育大学附属小学校教諭 | 教育実地研究Ⅱ（授業基礎研究） | 教育実習に向けて，道徳の授業構想とそれに基づく学習指導案の作成指導を行う。 | 5 |
| 長谷川　　真 | 上越教育大学付属中学校教諭 | 中学校教育実習事前指導 | 中学校教育の現状と課題，中学校実習に当たっての学ぶべきこと，教員としての服務・義務等についての講話。 | 2 |
| 矢　澤　美　義 | 上越教育大学付属中学校教頭 | 中学校教育実習事後指導 | 実習における評価とこれからの卒業までの課題についての講話。 | 2 |

③ティーチング・アシスタント

| 授業科目名 | 担当教官 | 学期 | 曜日時限 | ティーチング・アシスタント名（修士課程） | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 専攻・コース | 学籍番号 | 氏名 | 任用期間 | 任用時間数 |
| 教育情報演習 A4・C1～3 | 中野靖夫 | 通年 | 月4 | 学校教育専攻<br>学習臨床コース | 155042L | 本間大輔 | 5月1日～<br>3月31日 | 60時間 |
| 教育情報演習 B4・C4・D4 | 高野浩志 | 通年 | 金3 | 教科・領域教育専攻<br>生活健康系コース（技術） | 145525H | 前田尊昭 | 5月1日～<br>3月31日 | 60時間 |
| 教育情報演習 A1～3 | 井上久祥 | 通年 | 木1 | 教科・領域教育専攻<br>生活健康系コース（技術） | 135520A | 須長輝夫 | 9月1日～<br>3月31日 | 60時間 |
| 教育情報演習 D1～3 | 石川　真 | 通年 | 月2<br>木2 | 教科・領域教育専攻<br>生活健康系コース（家庭） | 145526L | 前川瑞代 | 5月1日～<br>3月31日 | 60時間 |
| 教育情報演習 B1～3 | 大森康正 | 通年 | 金4 | 教科・領域教育専攻<br>生活健康系コース（技術） | 155518K | 樺澤崇 | 5月1日～<br>3月31日 | 60時間 |
| 体験学習B | 濁川明男外 | 不定期 | 土 | 教科・領域教育専攻<br>芸術系コース（美術） | 145465L | 井上貴博 | 5月1日～<br>3月31日 | 30時間 |
| 体験学習D | 西山保子外 | 不定期 | 土 | 教科・領域教育専攻<br>自然系コース（理科） | 155413A | 木下祐香 | 5月1日～<br>3月31日 | 30時間 |
| 体験学習E | 榊原　潔 | 不定期 | 土 | 教科・領域教育専攻<br>生活健康系コース（保健体育） | 145504E | 尾臺美彰 | 5月1日～<br>3月31日 | 30時間 |
| 体験学習F | 高石次郎 | 不定期 | 土 | 教科・領域教育専攻<br>芸術系コース（美術） | 155458A | 伊藤勇夫 | 5月1日～<br>3月31日 | 30時間 |
| 体験学習G | 立屋敷かおる外 | 不定期 | 土 | 教科・領域教育専攻<br>生活健康系コース（家庭） | 145534G | 若林ちひろ | 5月1日～<br>3月31日 | 15時間 |
| | | | | 教科・領域教育専攻<br>生活健康系コース（家庭） | 145532L | 三膳佑季子 | 5月1日～<br>3月31日 | 15時間 |
| 体験学習H | 天野和孝外 | 不定期 | 土 | 教科・領域教育専攻<br>自然系コース（理科） | 145410B | 青木実 | 5月1日～<br>3月31日 | 30時間 |
| 体験学習Ⅰ | 後藤丹外 | 不定期 | 水<br>3～4 | 教科・領域教育専攻<br>芸術系コース（音楽） | 145451L | 曾田容子 | 5月1日～<br>3月31日 | 15時間 |
| | | | | 教科・領域教育専攻<br>芸術系コース（音楽） | 145453G | 折居はるか | 5月1日～<br>3月31日 | 9時間 |
| 中国語・中国事情Ⅰ | 黎　子椰 | 前 | 月1 | 教科・領域教育専攻<br>生活健康系コース（技術） | 155518K | 樺澤崇 | 5月1日～<br>9月30日 | 30時間 |
| 韓国語コミュニケーション | 植村幸生 | 前 | 月1 | 学校教育専攻<br>学習臨床コース | 155022F | 申明宇 | 5月1日～<br>9月30日 | 13時間 |
| 表現・＜子ども＞の活動ＡＢ | 酒井　創外 | 前 | 金<br>1～2 | 教科・領域教育専攻<br>芸術系コース（美術） | 145475H | 常光由香里 | 5月1日～<br>9月30日 | 30時間 |
| 表現・＜子ども＞の活動ＣＤ | 酒井　創外 | 前 | 金<br>1～2 | 教科・領域教育専攻<br>生活健康系コース（保健体育） | 145503G | 大塚貴子 | 5月1日～<br>9月30日 | 30時間 |
| スポーツ実践A | 長澤靖夫外 | 前 | 水2 | 教科・領域教育専攻<br>生活健康系コース（保健体育） | 145504E | 尾臺美彰 | 5月1日～<br>9月30日 | 30時間 |
| スポーツ実践B | 長澤靖夫外 | 前 | 金2 | 教科・領域教育専攻<br>生活健康系コース（保健体育） | 145510K | 佐藤佳樹 | 5月1日～<br>9月30日 | 30時間 |
| スポーツ実践C | 長澤靖夫外 | 前 | 火2 | 教科・領域教育専攻<br>生活健康系コース（保健体育） | 145505B | 笠岡一行 | 5月1日～<br>9月30日 | 30時間 |
| スポーツ実践D | 長澤靖夫外 | 前 | 木2 | 教科・領域教育専攻<br>生活健康系コース（保健体育） | 145513C | 滝澤円 | 5月1日～<br>9月30日 | 30時間 |
| マリンスポーツ | 清水富弘外 | 前 | 集中 | 教科・領域教育専攻<br>生活健康系コース（保健体育） | 145505B | 笠岡一行 | 5月1日～<br>9月30日 | 30時間 |
| コミュニケーション英語ＣⅠ | 野地美幸 | 前 | 月2 | 教科・領域教育専攻<br>言語系コース（英語） | 145326B | 高橋栄作 | 5月1日～<br>9月30日 | 30時間 |
| 表現相互行為教育演習 | 加藤泰樹外 | 前 | 火1 | 教科・領域教育専攻<br>生活健康系コース（保健体育） | 145512F | 高橋浩二 | 5月1日～<br>9月30日 | 4時間 |

| 授業科目名 | 担当教官 | 学期 | 曜日時限 | ティーチング・アシスタント名（修士課程） | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 専攻・コース | 学籍番号 | 氏名 | 任用期間 | 任用時間数 |
| 音楽 | 山本茂夫外 | 通年 | 木３ | 教科・領域教育専攻<br>芸術系コース（音楽） | 145451L | 曾田容子 | 5月1日～<br>3月31日 | 16時間 |
| | | | | 教科・領域教育専攻<br>芸術系コース（音楽） | 145453G | 折居はるか | 5月1日～<br>3月31日 | 14時間 |
| 図画工作Ａ | 洞谷亜里佐外 | 前 | 金３ | 教科・領域教育専攻<br>芸術系コース（美術） | 145469B | 笠川真由美 | 5月1日～<br>9月30日 | 26時間 |
| 図画工作Ｂ | 洞谷亜里佐外 | 前 | 木１ | 教科・領域教育専攻<br>芸術系コース（美術） | 145469B | 笠川真由美 | 5月1日～<br>9月30日 | 26時間 |
| 図画工作Ｃ | 洞谷亜里佐外 | 前 | 火３ | 教科・領域教育専攻<br>芸術系コース（美術） | 145466J | 上野典子 | 5月1日～<br>9月30日 | 26時間 |
| 図画工作Ｄ | 洞谷亜里佐外 | 前 | 金５ | 教科・領域教育専攻<br>芸術系コース（美術） | 145466J | 上野典子 | 5月1日～<br>9月30日 | 26時間 |
| 算数科指導法ＡＢ | 布川和彦外 | 前 | 木２ | 教科・領域教育専攻<br>自然系コース（数学） | 155405M | 福島聡子 | 5月1日～<br>9月30日 | 15時間 |
| 算数科指導法ＣＤ | 布川和彦外 | 前 | 火２ | 教科・領域教育専攻<br>自然系コース（数学） | 155407H | 山岸麻里子 | 5月1日～<br>9月30日 | 15時間 |
| 初等家庭科指導法Ａ・Ｄ | 得丸定子 | 前 | 火１ | 教科・領域教育専攻<br>生活健康系コース（家庭） | 145529L | 鹿沼慶子 | 5月1日～<br>9月30日 | 14時間 |
| 初等家庭科指導法Ｂ・Ｃ | 得丸定子 | 前 | 火２ | 教科・領域教育専攻<br>生活健康系コース（家庭） | 155522H | 川島名美子 | 5月1日～<br>9月30日 | 14時間 |
| 国際交流体験演習 | 田島弘司 | 前 | 木５ | 学校教育専攻<br>学習臨床コース | 155041A | 堀井梢 | 5月1日～<br>9月30日 | 30時間 |
| 心理学実験 | 中山勘次郎外 | 前 | 木<br>３～４ | 学校教育専攻<br>発達臨床コース（心理臨床） | 145134M | 大道正敬 | 5月1日～<br>9月30日 | 30時間 |
| 造型基礎ＢＤ | 西村俊夫外 | 前 | 月４ | 教科・領域教育専攻<br>芸術系コース（美術） | 145471E | 小坂寛子 | 5月1日～<br>9月30日 | 30時間 |
| 国際交流セミナー | 田島弘司 | 後 | 木２ | 学校教育専攻<br>学習臨床コース | 155041A | 堀井梢 | 10月1日～<br>3月31日 | 30時間 |
| 表現・状況的教育方法演習 | 高石次郎 | 後 | 水１ | 教科・領域教育専攻<br>芸術系コース（美術） | 155458A | 伊藤勇夫 | 10月1日～<br>3月31日 | 40時間 |
| 表現・状況的教育方法演習 | 小川昌文 | 後 | 水１ | 教科・領域教育専攻<br>芸術系コース（音楽） | 155455H | 星奈津美 | 10月1日～<br>3月31日 | 40時間 |
| スノースポーツ | 市川真澄外 | 後 | 集中 | 教科・領域教育専攻<br>生活健康系コース（保健体育） | 145504E | 尾臺美彰 | 10月1日～<br>3月31日 | 30時間 |
| コミュニケーション英語ＡⅡ | 野地美幸 | 後 | 木２ | 教科・領域教育専攻<br>言語系コース（英語） | 145321A | 市川桃子 | 10月1日～<br>3月31日 | 30時間 |
| 保育・音楽表現の指導法 | 大山美和子 | 後 | 火３ | 幼児教育専攻 | 155201F | 谷鹿里菜 | 10月1日～<br>3月31日 | 30時間 |
| 保育・造形表現の指導法 | 松本健義 | 後 | 火２ | 学校教育専攻<br>学習臨床コース | 155004H | 稲嶺史 | 10月1日～<br>3月31日 | 30時間 |
| 書写書道Ⅰ | 押木秀樹 | 後 | 月２ | 教科・領域教育専攻<br>言語系コース（国語） | 155303J | 岡山佳代 | 10月1日～<br>3月31日 | 30時間 |
| 計算機数学演習 | 中川　仁 | 後 | 木４ | 教科・領域教育専攻<br>自然系コース（数学） | 145404J | 土屋信治 | 10月1日～<br>3月31日 | 30時間 |
| 英語コミュニケーションメディア英語 | 若山真幸 | 後期 | 月３ | 教科・領域教育専攻<br>言語系コース（英語） | 155318H | 河内健志 | 1月26日～<br>3月31日 | 10時間 |
| 野外運動Ａスキー | 清水富弘外 | 後期 | 集中 | 教科・領域教育専攻<br>生活健康系コース（保健体育） | 145505B | 笠岡一行 | 1月26日～<br>3月31日 | 30時間 |
| 彫塑表現Ⅰ | 岡　充夫 | 後期 | 木５ | 教科・領域教育専攻<br>芸術系コース（美術） | 145470G | 古部寛 | 1月26日～<br>3月31日 | 10時間 |
| 総合造形表現 | 西村俊夫外 | 後期 | 月５ | 教科・領域教育専攻<br>芸術系コース（美術） | 145471E | 小坂寛子 | 1月26日～<br>3月31日 | 10時間 |
| 伝統絵画表現と鑑賞 | 増谷直樹外 | 後期 | 火５ | 教科・領域教育専攻<br>芸術系コース（美術） | 145471E | 小坂寛子 | 1月26日～<br>3月31日 | 10時間 |

| 授業科目名 | 担当教官 | 学期 | 曜日時限 | ティーチング・アシスタント名（修士課程） | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 専攻・コース | 学籍番号 | 氏名 | 任用期間 | 任用時間数 |
| 工芸表現Ｂ | 高石次郎 | 通年 | 木５ | 教科・領域教育専攻<br>芸術系コース（美術） | 145469B | 笠川　真由美 | 1月26日～<br>3月31日 | 10時間 |
| 絵画表現Ｃ | 洞谷亜里佐外 | 後期 | 火４ | 教科・領域教育専攻<br>芸術系コース（美術） | 145471E | 小坂　寛子 | 1月26日～<br>3月31日 | 10時間 |
| デザインワークⅡ | 山ノ下堅一 | 後期 | 月４・５ | 教科・領域教育専攻<br>芸術系コース（美術） | 145475H | 常光　由香里 | 1月26日～<br>3月31日 | 10時間 |

| 授業科目名 | 担当教官 | 学期 | 曜日時限 | ティーチング・アシスタント名（博士課程） | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 専攻・講座 | 学籍番号 | 氏名 | 任用期間 | 任用時間数 |
| 生徒指導の制度・経営研究セミナーⅠ | 西　穣司 | 通年 | 火１ | 学校教育実践学専攻<br>学校教育方法連合講座 | D02102J | 小林　淳一 | 6月1日～<br>3月31日 | 69時間 |
| 生徒指導の制度・経営研究セミナーⅡ | 西　穣司 | 通年 | 水２ | 学校教育実践学専攻<br>学校教育方法連合講座 | D02102J | 小林　淳一 | 6月1日～<br>3月31日 | 68時間 |
| 障害児実践学セミナーXI（感覚障害補償応用論） | 星名信昭 | 通年 | 金５ | 学校教育実践学専攻<br>学校教育臨床連合講座 | D02201J | 加藤　哲則 | 6月1日～<br>3月31日 | 34時間 |
| 障害児心理・生理検査法Ｂ | 星名信昭 | 前期 | 金<br>3・4 | 学校教育実践学専攻<br>学校教育臨床連合講座 | D02201J | 加藤　哲則 | 6月1日～<br>9月30日 | 11時間 |
| 障害児研究法演習Ｂ | 星名信昭 | 後期 | 金<br>3・4 | 学校教育実践学専攻<br>学校教育臨床連合講座 | D02201J | 加藤　哲則 | 10月1日～<br>3月31日 | 17時間 |
| 実践場面分析演習Ⅰ「総合的学習」 | 二谷貞夫 | 前期 | 月５ | 教科教育実践学専攻<br>社会系教育連合講座 | D01401J | 狩野　聖子 | 6月1日～<br>9月30日 | 11時間 |
| 実践場面分析演習Ⅱ「総合的学習」 | 二谷貞夫 | 後期 | 月５ | 教科教育実践学専攻<br>社会系教育連合講座 | D01401J | 狩野　聖子 | 10月1日～<br>3月31日 | 17時間 |
| 総合学習セミナーⅡ | 二谷貞夫 | 通年 | 木３ | 教科教育実践学専攻<br>社会系教育連合講座 | D01401J | 狩野　聖子 | 6月1日～<br>3月31日 | 34時間 |
| 総合学習応用研究セミナーⅠ | 二谷貞夫 | 前期 | 木３ | 教科教育実践学専攻<br>社会系教育連合講座 | D01401J | 狩野　聖子 | 6月1日～<br>9月30日 | 21時間 |
| 木工芸研究 | 西村俊夫 | 前期 | 木<br>1・2 | 教科教育実践学専攻<br>芸術系教育連合講座 | D01601J | 飯田　史帆 | 6月1日～<br>9月30日 | 43時間 |
| 工芸表現Ａ | 西村俊夫 | 通年 | 木４ | 教科教育実践学専攻<br>芸術系教育連合講座 | D01601J | 飯田　史帆 | 6月1日～<br>3月31日 | 68時間 |
| メディアデザイン研究 | 西村俊夫 | 後期 | 月<br>1・2 | 教科教育実践学専攻<br>芸術系教育連合講座 | D02603J | 三浦　忠士 | 10月1日～<br>3月31日 | 68時間 |
| デザイン行為と意味生成 | 西村俊夫 | 後期 | 火４ | 教科教育実践学専攻<br>芸術系教育連合講座 | D02603J | 三浦　忠士 | 10月1日～<br>3月31日 | 34時間 |
| 造形表示Ａ・Ｂ | 西村俊夫 | 後期 | 火３ | 教科教育実践学専攻<br>芸術系教育連合講座 | D02603J | 三浦　忠士 | 10月1日～<br>3月31日 | 34時間 |
| 総合学習基礎研究セミナーⅠ | 山崎貞登 | 前期 | 木３ | 教科教育実践学専攻<br>生活・健康系教育連合講座 | D02702J | 磯部　征尊 | 6月1日～<br>9月30日 | 21時間 |
| 総合学習基礎研究セミナーⅡ | 山崎貞登 | 後期 | 木３ | 教科教育実践学専攻<br>生活・健康系教育連合講座 | D02702J | 磯部　征尊 | 10月1日～<br>3月31日 | 34時間 |
| 総合学習応用研究セミナーⅠ | 山崎貞登 | 前期 | 木３ | 教科教育実践学専攻<br>生活・健康系教育連合講座 | D01701J | 伊藤　大輔 | 6月1日～<br>9月30日 | 21時間 |
| 総合学習応用研究セミナーⅡ | 山崎貞登 | 後期 | 木３ | 教科教育実践学専攻<br>生活・健康系教育連合講座 | D01701J | 伊藤　大輔 | 10月1日～<br>3月31日 | 34時間 |
| 技術科教育教材開発演習 | 山崎貞登 | 前期 | 金２ | 教科教育実践学専攻<br>生活・健康系教育連合講座 | D02702J | 磯部　征尊 | 6月1日～<br>9月30日 | 21時間 |

### ④ リサーチ・アシスタント

（上越教育大学大学院学校教育研究科分）

| リサーチ・アシスタント | | | | | 研究プロジェクト等名 | 左の中心的組織名 | 研究プロジェクト代表者 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 所　　属 | 学籍番号 | 氏　　名 | 任用期間 | 研究補助業務担当時間数 | | | |
| 教科教育実践学専攻<br>生活・健康系教育連合講座 | D02702J | いそべまさたか<br>磯　部　征　尊 | ６月１日から<br>３月31日まで | 320<br>時間 | 技術科評価基準の開発とカリキュラム・デザイン | 学校教育研究科 | 山崎貞登助教授 |
| 学校教育実践学専攻<br>学校教育方法連合講座 | D01102J | ぎゅうしかい<br>牛　　志　奎 | ６月１日から<br>３月31日まで | 320<br>時間 | 日中教育法の改革動向・課題研究 | 学校教育研究科 | 若井彌一教授 |
| 教科教育実践学専攻<br>芸術系教育連合講座 | D02603J | みうら　ただし<br>三　浦　忠　士 | ６月１日から<br>３月31日まで | 320<br>時間 | 第２回大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ２００３参加「松代町商店街活性化アートプロジェクト」 | 学校教育研究科 | 西村俊夫教授 |
| 学校教育実践学専攻<br>学校教育臨床連合講座 | D02201J | かとうあきのり<br>加　藤　哲　則 | ６月１日から<br>３月31日まで | 320<br>時間 | 聴覚障害児の音楽受容に関する実験的検討 | 学校教育研究科 | 星名信昭教授 |
| 学校教育実践学専攻<br>学校教育方法連合講座 | D02102J | こばやしじゅんいち<br>小　林　淳　一 | ６月１日から<br>３月31日まで | 319<br>時間 | 教師の職能発達における自己省察の方法と効果に関する事例研究 | 学校教育研究科 | 西穣司教授 |

（兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科分）

| リサーチ・アシスタント | | | | | 研究プロジェクト等名 | 左の中心的組織名 | 研究プロジェクト代表者 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 所　　属 | 学籍番号 | 氏　　名 | 任用期間 | 研究補助業務担当時間数 | | | |
| 教科教育実践学専攻<br>生活・健康系教育連合講座 | D01701J | いとうだいすけ<br>伊　藤　大　輔 | ６月１日から<br>３月31日まで | 200<br>時間 | 学習者による授業評価と学びの内省を生かした授業改善研究システムの構築 | 連合学校教育学研究科 | 山崎貞登助教授 |
| 教科教育実践学専攻<br>芸術系教育連合講座 | D01601J | いいだ　し　ほ<br>飯　田　史　帆 | ６月１日から<br>３月31日まで | 200<br>時間 | 児童・生徒の生活において展開される表現行為を軸とする美術教育実践の開発研究 | 連合学校教育学研究科 | 西村俊夫教授 |

## ⑿ 公開講座等実施状況

### ① 公開講座

| 講座の種類・名称 | | 講師 | 実施期間 | 開設時間 | 定員 | 受講 | 実施場所 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 一般公開講座 | 原語で読む原始仏典 | 社会系教育講座<br>助教授　松　田　愼　也 | 5月6日(火)<br>5月13日(火)<br>5月20日(火)<br>5月27日(火)<br>6月3日(火)<br>6月10日(火)<br>6月17日(火)<br>6月24日(火)<br>7月1日(火)<br>7月8日(火)<br>10回 | 18:00<br>～<br>20:00<br>計20時間 | 20名 | 男3<br>女2<br>計5 | 学校教育総合研究センター |
| | 少年・少女剣道教室 | 生活・健康系教育講座<br>(保健体育)<br>助教授　直　原　　幹 | 5月7日(水)<br>5月14日(水)<br>5月21日(水)<br>5月28日(水)<br>6月4日(水)<br>6月11日(水)<br>6月18日(水)<br>6月25日(水)<br>8回 | 19:00<br>～<br>20:30<br>計12時間 | 30名 | 男16<br>女1<br>計17 | 柔・剣道場 |
| | 教科書の中の文学 | 学習臨床講座<br>助教授　松　本　　修<br><br>言語系教育講座（国語）<br>教　授　下　西　善三郎<br>助教授　小　埜　裕　二 | 5月14日(水)<br>5月21日(水)<br>5月28日(水)<br>6月4日(水)<br>6月11日(水)<br>6月18日(水)<br>6月25日(水)<br>7月2日(水)<br>7月9日(水)<br>7月16日(水)<br>10回 | 18:00<br>～<br>19:30<br>計15時間 | 30名 | 男2<br>女2<br>計4 | 学校教育総合研究センター |
| | 作成して学ぶ個別の指導計画（初級編・上級編） | 障害児教育講座<br>講　師　笠　原　芳　隆<br>講　師　藤　井　和　子 | 5月17日(土)<br>5月31日(土)<br>6月7日(土)<br>3回 | 10:00<br>～<br>12:00<br>13:00<br>～<br>16:00<br>計15時間 | 15名 | 男2<br>女11<br>計13 | 障害児教育実践センター |
| | スクールリーダーのための総合的な生徒指導の実践と理論 | 生徒指導総合講座<br>教　授　杵　淵　俊　夫<br>教　授　若　井　彌　一<br>教　授　西　　釋　司<br>教　授　古　賀　一　博<br>助教授　三　村　隆　男<br>助教授　石　田　美　清<br>助教授　荻　原　克　男<br>助教授　藤　田　武　志<br>助教授　大　前　敦　巳<br>助　手　安　藤　知　子 | 5月24日(土)<br>5月25日(日)<br>2回 | 10:00<br>～<br>12:00<br>13:00<br>～<br>16:00<br>計10時間 | 30名 | 男3<br>女3<br>計6 | 長岡市中央公民館 |
| | はじめてのジャワ・ガムラン | 芸術系教育講座（音楽）<br>助教授　植　村　幸　生 | 6月1日(日)<br>6月8日(日)<br>6月15日(日)<br>6月22日(日)<br>6月29日(日)<br>5回 | 13:00<br>～<br>16:00<br>計15時間 | 25名 | 男3<br>女6<br>計9 | 音楽棟 |
| | こころの不思議を探検しよう－高校生のための心理学入門－ | 心理臨床講座<br>助教授　中　山　勘次郎<br>助教授　越　　良　子<br>助教授　宮　下　敏　恵<br>講　師　米　山　直　樹 | 6月14日(土)<br>6月21日(土)<br>6月28日(土)<br>7月5日(土)<br>4回 | 9:30<br>～<br>12:00<br>計10時間 | 30名 | 男0<br>女5<br>計5 | 第2講義棟 |

| 講座の種類・名称 | | 講師 | 実施期間 | 開設時間 | 定員 | 受講者 | 実施場所 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 一般公開講座 | ロールプレイングで家族関係を考える | 生徒指導総合講座<br>助教授　林　　泰　成 | 6月21日(土)<br>6月28日(土)<br>7月5日(土)<br>7月12日(土)<br>4回 | 14:00<br>～<br>16:30<br>計10時間 | 20名 | 男0<br>女8<br>計8 | 第2講義棟 |
| | 楽しいドイツ語 | 言語系教育講座（外国語）<br>教　授　平　野　七　濤 | 9月4日(木)<br>9月11日(木)<br>9月18日(木)<br>9月25日(木)<br>10月2日(木)<br>10月9日(木)<br>10月16日(木)<br>10月23日(木)<br>10月30日(木)<br>11月6日(木)<br>10回 | 18:30<br>～<br>20:00<br>計15時間 | 30名 | 男5<br>女4<br>計9 | 第2講義棟 |
| | 陶芸－入門編－ | 芸術系教育講座（美術）<br>助教授　高　石　次　郎 | 9月21日(日) | 13:00<br>～<br>17:00 | 20名 | 男3<br>女8<br>計11 | 美術棟 |
| | | | 9月23日(火) | 10:00<br>～<br>12:00<br>13:00<br>～<br>17:00 | | | |
| | | | 10月19日(日)<br>3回 | 13:00<br>～<br>18:00<br>計15時間 | | | |
| | 越の文化を探るⅨ | 学習臨床講座<br>教　授　川　村　知　行<br><br>上越市教育委員会<br>生涯学習推進課<br>副課長　小　島　幸　雄 | 11月12日(水)<br>11月19日(水) | 18:30<br>～<br>20:30 | 40名 | 男8<br>女5<br>計13 | 学校教育総合研究センター |
| | | | 11月23日(日)<br>11月24日(月) | 見学<br>（1泊2日） | | | |
| | | | 12月3日(水)<br>5回 | 18:30<br>～<br>20:30<br>計15時間 | | | |

② **文化講演会**

| 回数 | 開催日時 | 会　場 | 演　題 | 講　師 | 学生 | 一般市民 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 5月10日(土)<br>14:00<br>～15:30 | 本学講堂 | 楽しく生きよう！シンプルライフ | (株)UFJ総合研究所<br>経済・社会政策部<br>部長兼主席研究員<br>森永卓郎 | 人<br>(%)<br>14<br>(6.4) | 人<br>(%)<br>204<br>(93.6) | 人<br>(%)<br>218<br>(100) |
| 2 | 10月25日(土)<br>14:00<br>～15:30 | 本学講堂 | 越後と親鸞 | 国際日本文化研究センター顧問小林古径記念<br>美術館名誉館長<br>梅原　猛 | 人<br>(%)<br>6<br>(1.3) | 人<br>(%)<br>457<br>(98.7) | 人<br>(%)<br>463<br>(100) |
| 合　計 | | | | | 20<br>(2.9) | 661<br>(97.1) | 681<br>(100) |

### ③　出前講座（地域貢献事業）

16機関から申込みがあり、以下のとおり20講座実施した。

| 申込者 | 講師 | テーマ名 | 受講対象者 | 実施日 | 受講者数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 妙高高原町立妙高北小学校 | 林泰成 | 道徳教育とカウンセリングを融合した「心の教育」の在り方 | 教員 | 6月30日(月) | 15名 |
| 新井市役所市民税務課 | 天野和孝 | 地層や化石からみた郷土の大地の生い立ち | 職員 | 5月28日(水) | 40名 |
| 上越市立直江津東中学校 | 伊藤政展 | 観ることで動作を学ぶ | 中学1～3年生 | 6月11日(水) | 400名 |
| | 藤田武志 | 社会の常識は非常識？ー社会について調べようー | 中学1～3年生 | 6月11日(水) | 150名 |
| 新潟県立六日町高等学校 | 大前敦巳 | 教員養成系の講義 | 高校生 | 6月14日(土) | 50名 |
| | 和井田清司 | 教育は未来への種まきー未完の教師修行ー | 高校生 | 11月13日(木) | 50名 |
| 上越市公立保育園職員研修会 | 榊原潔 | 運動遊び | 職員 | 8月27日(水) | 28名 |
| | 榊原潔 | 運動遊び | 職員 | 9月3日(水) | 52名 |
| 糸魚川市立下早川小学校 | 山崎貞登 | イギリスのポートフォリオ学習と評価基準 | 教員 | 6月16日(月) | 12名 |
| 柿崎町立柿崎小学校 | 林泰成 | 道徳教育とカウンセリングを融合した「心の教育」の在り方 | 教員 | 8月21日(木) | 18名 |
| 柿崎町立柿崎中学校 | 林泰成 | 道徳教育とカウンセリングを融合した「心の教育」の在り方 | 教員 | 7月31日(木) | 20名 |
| 上越市立直江津南小学校 | 長澤靖夫<br>加藤泰樹 | “からだの感じ”を大切にしたやさしい運動の指導法 | 教職員 | 8月11日(月) | 13名 |
| 上越市立雄志中学校 | 天野和孝 | 地層や化石からみた郷土の大地の生い立ち | 中学1年生 | 10月22日(水) | 91名 |
| 上越市立三郷小学校 | 青木眞 | これからの体育授業の考え方･進め方 | 教員 | 8月6日(水) | 11名 |
| 新井市教育委員会 | 大場孝信 | 上越の山々のおいたちと岩石の利用 | 地域住民 | 9月10日(水) | 45名 |
| 新潟県立糸魚川高等学校 | 河西英通 | 名曲･ヒット曲でたぐり寄せる戦後日本史① | 高校1年生 | 10月1日(水) | 50名 |
| | 大場孝信 | 隕石や火成岩からみる地球の進化 | 高校1年生 | 10月1日(水) | 50名 |
| 新潟県立小千谷高等学校 | 藤田武志 | 社会の常識は非常識？ー社会について調べようー | 高校2年生 | 10月10日(金) | 40名 |
| 妙高村教育委員会 | 鈴木情一 | コミュニケーション能力の発達と子ども理解 | 入学児童保護者 | 11月25日(火) | 35名 |
| 上越市教育委員会 | 和井田清司 | 対話に必要なディベート能力の向上 | 高校生 | 12月15日(月) | 8名 |

### ⑬ 厚生補導事業実施状況

| 名称 | 期日 | 内容 |
|---|---|---|
| 新入生オリエンテーション | 4月 | ○学部1年次学生<br>大学教育，教育課程と履修方法，海外教育研究及び海外派遣制度，クラス担当教官の指導，電子シラバス，合宿研修<br>○大学院1年次学生<br>大学院の教育･研究，教育課程と履修方法，海外教育特別研究及び海外派遣制度，個別指導<br>○共通<br>附属図書館，情報処理センター，附属実技教育研究指導センター，保健管理センター，セクシュアル･ハラスメントの防止，学生生活，学生生活への支援 |
| 新入生合宿研修 | 4月<br>（1泊） | ○学部1年次学生対象<br>遠足，ビデオ研修，レクリエーション指導，クラス活動Ⅰ･Ⅱ･Ⅲ，学生スピーチ大会，学生歌･学園歌指導，就職指導<br>［国立妙高少年自然の家］ |
| 就職指導 | 4月～6月<br>5月<br>6月<br>6月～7月<br>6月～11月<br>7月<br>7月<br>8月<br>12月<br>12月<br>12月～1月<br>2月～3月 | ○教員採用模擬試験<br>○教職講座Ⅲ<br>○教員採用試験直前講座<br>○教職講座Ⅳ<br>○教職講座Ⅰ<br>○就職ガイダンス<br>○企業･公務員ガイダンス<br>○特別教職講座Ⅱ<br>○教員採用模擬試験<br>○臨時任用教員ガイダンス<br>○教職講座Ⅱ<br>○特別教職講座Ⅰ |
| 教員養成課程学生合宿研修 | 10月<br>（1泊） | ○学部3年次学生対象<br>全体会①･②･③，クラス討議，グループ討議①･②，<br>ビデオ研修<br>［国立妙高少年自然の家］ |
| 課外活動団体リーダーズ･トレーニング研修 | 3月<br>（1泊） | ○課外活動団体の代表･副代表及びマネージャー等対象<br>ストレッチング，班別討議，全体討議，意見交換，自由討議<br>救急救命法講習会，テーピング講習会<br>［国立妙高少年自然の家］ |

## ⑭ 学生団体一覧

平成15年５月１日現在

| 区分 | 団体名 | 構成員数 | 顧問教官 | 代表責任者 所属 | 学年 | 氏名 | 課外活動団体認定 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 文化系 | 書道部 | 6 | 押木 秀樹 | 国語 | 3 | 鈴木 勇太 | ○ |
| | 紙ひこうき | 26 | 笠原 芳隆 | 生徒指導 | 3 | 佐々木綾乃 | ○ |
| | ちるど連 | 10 | 大山美和子 | 生徒指導 | 3 | 田村 絵美 | ○ |
| | 坐禅・不識会 | 9 | 田島 弘司 | 学習臨床 | M1 | 清水 雄介 | ○ |
| | 華道部 | 10 | 阿部 靖子 | 情報教育 | 4 | 小泉 朋子 | ○ |
| | せんせいのたまご倶楽部 | 12 | 庭野 義英 | 国語 | 3 | 大辻 隆一 | ○ |
| | 国際交流クラブ | 30 | 田島 弘司 | | D3 | 牛 志奎 | ○ |
| | ｱﾄﾞﾍﾞﾝﾁｬｰｻｰｸﾙ(JAC) | 12 | 木村 吉彦 | 体育 | 3 | 中村 豪宏 | ○ |
| | English Academy | 11 | 庭野 義英 | 音楽 | M2 | 中澤加奈子 | ○ |
| | 茶道部 | 17 | 洞谷亜里佐 | 社会 | 3 | 竹内 梢 | ○ |
| | 小計（10団体） | 143 | | | | | 小計（10団体） |
| 芸術系 | 演劇部 | 12 | 林 泰成 | 音楽 | 3 | 館 香菜恵 | ○ |
| | ﾓﾀﾞﾝ･ﾐｭｰｼﾞｯｸ･ｿｻｲｴﾃｨ | 25 | 庭野 義英 | 生徒指導 | 3 | 三木 雄太 | ○ |
| | 吹奏楽団 | 30 | 山本 茂夫 | 理科 | 3 | 渥美 裕史 | ○ |
| | 管弦楽団 | 18 | 後藤 丹 | 美術 | 3 | 石井 亮太 | ○ |
| | 混声合唱団 | 52 | 鈴木 敏紀 | 学習過程 | 3 | 小池 友理 | ○ |
| | 雅楽部 | 17 | 茂手木潔子 | 数学 | 3 | 谷口まどか | ○ |
| | バリ・ガムランクラブ | 20 | 植村 幸生 | 音楽 | 3 | 滝澤 陽子 | ○ |
| | 箏曲部 | 9 | 茂手木潔子 | 学習過程 | 2 | 牧野 由佳 | ○ |
| | 三絃部 | 17 | 茂手木潔子 | 音楽 | 3 | 館 香菜恵 | ○ |
| | アートワーク | 20 | 洞谷亜里佐 | 国語 | 3 | 渡邉 香織 | ○ |
| | Juen Music Performer | 14 | 後藤 丹 | 音楽 | 3 | 佐藤 彩 | |
| | 小計（11団体） | 234 | | | | | 小計（10団体） |
| 体育系 | ソフトテニス部 | 50 | 大山美和子 | 学習過程 | 3 | 川上 達也 | ○ |
| | 男子バレーボール部 | 14 | 佐藤 誠 | 英語 | 4 | 青木 太郎 | ○ |
| | 女子バレーボール部 | 12 | 佐藤 誠 | 体育 | 4 | 戸谷 瞳 | ○ |
| | 野球部 | 27 | 若井 彌一 | 総合学習 | 4 | 宮本 裕介 | ○ |
| | 卓球部 | 7 | 我妻 敏博 | 理科 | 2 | 佐原 友郎 | ○ |
| | 剣道部 | 8 | 直原 幹 | 社会 | 3 | 山科 亮太 | ○ |
| | 男子バスケットボール部 | 16 | 土田 了輔 | 数学 | 4 | 宮本 常徳 | ○ |
| | 女子バスケットボール部 | 8 | 土田 了輔 | 幼児 | 3 | 木暮 智子 | ○ |
| | 陸上競技部 | 13 | 市川 真澄 | 数学 | 3 | 松井 衛 | ○ |
| | ワンダーフォーゲル部 | 8 | 松田 愼也 | 体育 | 3 | 宮澤 暁生 | ○ |
| | 水泳部 | 12 | 清水 富弘 | 社会 | 3 | 竹内 梢 | ○ |
| | サッカー部 | 21 | 榊原 潔 | 体育 | 3 | 平野 秀憲 | ○ |
| | 弓道部 | 21 | 大悟法 滋 | 理科 | 3 | 小池 勇作 | ○ |
| | スキー部 | 7 | 三浦 望慶 | 生徒指導 | 3 | 佐藤 英次 | ○ |
| | バドミントン部 | 26 | 砥堀 雅信 | 社会 | 3 | 龍野 友太 | ○ |
| | ソフトボール部 | 20 | 青木 眞 | 国語 | 3 | 嶺 会理子 | ○ |
| | 体操部 | 10 | 長澤 靖夫 | 数学 | 3 | 太田 英 | ○ |
| | 硬式テニス部 | 35 | 下西善三郎 | 技術 | 3 | 谷内田 繁 | ○ |
| | ダンス部 | 11 | 長澤 靖夫 | 幼児 | 3 | 鈴木 瑛子 | ○ |
| | ハンドボール部 | 43 | 杵淵 俊夫 | 体育 | 3 | 立田 俊行 | ○ |
| | 女子サッカー部 | 11 | 榊原 潔 | 国語 | 3 | 高野 京 | ○ |
| | ラグビー部 | 25 | 川村 知行 | 生徒指導 | 3 | 佐藤 英次 | ○ |
| | アイスホッケー部 | 16 | 伊藤 政展 | 国語 | 4 | 山﨑 晃 | ○ |
| | なわとび一輪車クラブ | 10 | 榊原 潔 | 心理臨床 | 4 | 遠藤 佑一 | ○ |
| | 柔道部 | 6 | 鈴木 敏紀 | 理科 | 3 | 金井 司 | ○ |
| | 女子ｱｲｽﾎｯｹｰ部 | 16 | 伊藤 政展 | 英語 | 4 | 塩谷百合香 | ○ |
| | フットサルサークル | 15 | 高本 條治 | 社会 | 2 | 遠藤 純 | ○ |
| | 小計（27団体） | 468 | | | | | 小計（27団体） |
| 他 | 大学院学生協議会 | 493 | 星名 信昭 | 発達臨床 | M2 | 牧野 高智 | |
| | 小計（１団体） | 493 | | | | | |
| | 学生団体合計（49団体） | 1338 | | | | | 課外活動団体合計（47団体） |

### ⑮ 奨学金受給状況

#### ① 日本育英会

平成16年3月31日現在

| 区分 | | 奨学生数（種別・貸与月額）（人） | | | | 在籍者数（人） | 受給率（%） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 第一種 | | きぼう21プラン | 合計 | | |
| | | 自宅 | 自宅外 | | | | |
| 大学院 | 1年次 | 41 | | 6 | 47 | 89 | 52.8 |
| | 2年次 | 35 | | 5 | 40 | 125 | 32.0 |
| | 小計 | 76 | | 11 | 87 | 214 | 40.7 |
| 学部 | 1年次 | 1 | 33 | 25 | 59 | 171 | 34.5 |
| | | 34 | | | | | |
| | 2年次 | 0 | 23 | 24 | 47 | 172 | 27.3 |
| | | 23 | | | | | |
| | 3年次 | 2 | 24 | 24 | 50 | 161 | 31.1 |
| | | 26 | | | | | |
| | 4年次 | 0 | 35 | 29 | 64 | 168 | 38.1 |
| | | 35 | | | | | |
| | 小計 | 3 | 115 | 102 | 220 | 672 | 32.7 |
| | | 118 | | | | | |
| 合計 | | 194 | | 113 | 307 | 886 | 34.7 |

注１）貸与月額　第一種　大学院１年次　87,000円
大学院２年次　85,000円
大学院きぼう21プラン　50,000円，80,000円，100,000円，130,000円から選択
第一種　学　部１年次　自宅44,000円　自宅外50,000円
学　部２・３年次　自宅42,000円　自宅外48,000円
学　部４年次　自宅41,000円　自宅外47,000円
学部きぼう21プラン　30,000円，50,000円，80,000円，100,000円から選択

注２）在籍者数は，休学中の者も含む。なお，大学院は，現職教員及び外国人留学生を除いた数である。

② 日本育英会以外の奨学事業団体

平成16年3月31日現在

| 区分 | 貸与月額等（円） | 学部奨学生数（人） | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 1年次 | 2年次 | 3年次 | 4年次 | 合計 |
| 富山県奨学資金 | 42,000 | | | 1 | | 1 |
| 徳島県奨学金 | 41,000 | | 1 | | | 1 |
| 奄美奨学金 | 30,000 | | | | 1 | 1 |
| 名瀬市奨学金 | 30,000 | | | | 1 | 1 |
| 上越市奨学金 | 30,000 | | | 1 | | 1 |
| 石川県育英資金 | 41,000 | | 2 | 1 | | 4 |
| | 40,000 | | | | 1 | |
| 刈羽村奨学金 | 50,000 | 1 | | | | 1 |
| 東和町奨学生 | 30,000 | 1 | | | | 1 |
| 秋田県すこやか奨学金 | 60,000 | | | 1 | | 1 |
| 豊田市奨学金 | 年額400,000 | | | 1 | | 1 |
| けんしん奨学金 | 30,000 | | | | 1 | 1 |
| 三宅奨学金 | 20,000 | | | | 1 | 1 |
| 北銀奨学会 | 15,000 | | | | 1 | 1 |
| 新井市奨学金 | 30,000 | 1 | | | | 1 |
| 吉田奨学財団 | 20,000 | 1 | | | | 1 |
| 岐阜県奨学金 | 32,000 | | 1 | | | 1 |
| (財)長岡市米百俵財団奨学金 | 40,000 | | 2 | | | 2 |
| 南陽市育英事業奨学金 | 年額120,000 | | 1 | | | 1 |
| (財)本願寺派教学助成財団 | 年額80,000 | | | 1 | | 1 |
| 合計（人） | | 4 | 7 | 6 | 6 | 23 |
| 在籍者数（人） | | 171 | 172 | 161 | 168 | 672 |
| 受給率（%） | | 2.3 | 4.1 | 3.7 | 3.6 | 3.4 |

## ⑯ 授業料及び入学料免除実施状況

### ① 授業料免除

（平成15年度）

| 区分 | | | 免除者数（人） | | | 在籍者数（人） | 免除率（％） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 全額 | 半額 | 計 | | |
| 大学院 | 1年次 | 前期 | 9 | 2 | 11 | 103 | 10.7 |
| | | 後期 | 11 | 0 | 11 | | 10.7 |
| | 2年次 | 前期 | 12 | 1 | 13 | 133 | 9.8 |
| | | 後期 | 8 | 3 | 11 | | 8.3 |
| | 小計 | 前期 | 21 | 3 | 24 | 236 | 10.2 |
| | | 後期 | 19 | 3 | 22 | | 9.3 |
| 学部 | 1年次 | 前期 | 3 | 0 | 3 | 171 | 1.8 |
| | | 後期 | 1 | 0 | 1 | | 0.6 |
| | 2年次 | 前期 | 9 | 1 | 10 | 172 | 5.8 |
| | | 後期 | 12 | 0 | 12 | | 7.0 |
| | 3年次 | 前期 | 6 | 0 | 6 | 161 | 3.7 |
| | | 後期 | 7 | 2 | 9 | | 5.6 |
| | 4年次 | 前期 | 9 | 1 | 10 | 167 | 6.0 |
| | | 後期 | 8 | 1 | 9 | | 5.4 |
| | 小計 | 前期 | 27 | 2 | 29 | 671 | 4.3 |
| | | 後期 | 28 | 3 | 31 | | 4.6 |
| 合計 | | 前期 | 48 | 5 | 53 | 907 | 5.8 |
| | | 後期 | 47 | 6 | 53 | | 5.8 |

（注）1．授業料年額　　平成９・10年度入学者… 469,200円
　　平成11～15年度入学者… 520,800円
　　2．在籍者数は，平成15年５月１日現在の数で，休学者，都道府県教育委員会派遣の現職教員及び国費外国人留学生を除いた数

### ② 入学料免除

（平成15年度）

| 区分 | 免除者数（人） | | | 在籍者数（人） | 免除率（％） |
|---|---|---|---|---|---|
| | 全額 | 半額 | 計 | | |
| 大学院１年次 | 0 | 8 | 8 | 103 | 7.8 |
| 学部１年次 | 0 | 0 | 0 | 171 | 0.0 |
| 合計 | 0 | 8 | 8 | 274 | 2.9 |

（注）1．入学料額　平成15年度入学者 282,000円
　　2．在籍者数は，平成15年４月１日現在の数
　　3．大学院の在籍者数は，都道府県教育委員会派遣の現職教員及び国費外国人留学生を除く数

## ⑰ 学生宿舎・国際学生宿舎入居状況等

### ① 入居状況

平成15年5月1日現在

| 区分 | | | 学年 | 収容定員（人） | 在籍者（人） | 入居者（人） | 入居率（%） | 収容定員充足率(%) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 学生宿舎 | 単身用 | 学部 | 1 | 154 (90) | 171 (110) | 135 (90) | 78.9 (81.8) | 87.7 |
| | | | 2 | 360 (240) | 172 (104) | 126 (86) | 73.3 (82.7) | 99.7 |
| | | | 3 | | 162 (95) | 125 (81) | 77.2 (85.3) | |
| | | | 4 | | 169 (94) | 100 (64) | 59.2 (68.1) | |
| | | | 外国人留学生 | | ※1 (1) | ※1 (1) | 100.0 (100.0) | |
| | | | 修士 1 | | 【226 (75)】 | 1 (1) | 0.4 (1.3) | |
| | | | 修士 2 | | 【267 (76)】 | 7 (7) | 2.6 (9.2) | |
| | | | 修士 外国人留学生 | | ※25 (16) | ※2 (2) | 8.0 (12.5) | |
| | | | 小計 | 514 (330) | 674 (403) | 494 (329) | 73.3 (81.6) | 96.1 |
| | | 修士 | 1 | 90 (24) | 226 (75) | 88 (22) | 38.9 (29.3) | 97.8 |
| | | | 2 | 90 (24) | 267 (76) | 90 (25) | 33.7 (32.9) | 100.0 |
| | | | 外国人留学生 | | ※25 (16) | ※13 (6) | 52.0 (37.5) | |
| | | | 小計 | 180 (48) | 493 (151) | 178 (47) | 36.1 (31.1) | 98.9 |
| | | 大学院用 修士 | 1 | 26 (10) | 【226 (75)】 | 3 (1) | 1.3 (1.3) | |
| | | | 2 | | 【267 (76)】 | 2 (1) | 0.7 (1.3) | |
| | | | 小計 | | 【493 (151)】 | 5 (2) | 1.0 (1.3) | |
| | | 大学院用 博士 | 1 | | 4 (1) | 1 (1) | 25.0 (100.0) | |
| | | | 2 | | 6 (0) | 2 (0) | 33.3 (0.0) | |
| | | | 3 | | 8 (2) | 4 (2) | 50.0 (100.0) | |
| | | | 外国人留学生 | | ※1 (0) | ※1 (0) | 100.0 (0.0) | |
| | | | 小計 | | 18 (3) | 7 (3) | 38.9 (100.0) | |
| | | 大学院用 外国人留学生 | | | 【17 (7)】 | 1 (0) | 5.9 (0.0) | |
| | | 大学院用 計 | | 26 (10) | 511 (154) | 13 (5) | 2.5 (3.2) | 50.0 |
| | | 計 | | 720 (388) | 1,185 (557) | 685 (381) | 57.8 (68.4) | 95.1 |
| | 世帯用 | 修士 | 1 | 40 | 【226 (75)】 | 30 (4) | 13.3 (5.3) | 75.0 |
| | | | 2 | 40 | 【267 (76)】 | 34 (3) | 12.7 (3.9) | 85.0 |
| | | | 外国人留学生 | | 【※25 (16)】 | ※1 (1) | 4.0 (6.3) | |
| | | | 計 | 80 | 【493 (151)】 | 64 (7) | 13.0 (4.6) | 80.0 |
| 国際学生宿舎 | | 修士 | 1 | 42 | 【226 (75)】 | 13 (4) | 5.8 (5.3) | |
| | | | 2 | | 【267 (76)】 | 10 (0) | 3.7 (0.0) | |
| | | | 外国人留学生 | | 【※25 (16)】 | ※6 (4) | 24.0 (25.0) | |
| | | | 小計 | | 【493 (151)】 | 23 (4) | 4.7 (2.6) | |
| | | 博士 | 1 | | 【4 (1)】 | 0 (0) | 0.0 (0.0) | |
| | | | 2 | | 【6 (0)】 | 1 (0) | 16.7 (0.0) | |
| | | | 3 | | 【8 (2)】 | 0 (0) | 0.0 (0.0) | |
| | | | 小計 | | 【18 (3)】 | 1 (0) | 5.6 (0.0) | |
| | | 外国人研究生等 | | | 17 (7) | 13 (6) | 76.5 (85.7) | |
| | | 計 | | 42 | 546 (171) | 37 (10) | 6.8 (5.8) | 88.1 |
| 合計 | | | | 842 (388) | 1,202 (564) | 786 (398) | 65.4 (70.6) | 93.3 |

注）1　各欄の（ ）は、女子で内数
　　2　在籍者欄の【 】は、重複記載
　　3　外国人留学生欄の※印は、内数

② 居室状況

| 区分 | | | 広さ | 設備等 |
|---|---|---|---|---|
| 学生宿舎 | 単身用 | Ⅰ型（１棟） | 20㎡ | 約12畳分のＰタイル張り，２人で使用<br>机，椅子，本棚，ベッド，ロッカー，下駄箱等 |
| | | Ⅱ型（２～４棟） | 10㎡ | 約６畳分のＰタイル張り，個室<br>机，椅子，本棚，ベッド，ロッカー，下駄箱等 |
| | | 第一共用棟 | | 浴室（男女各１），談話室，機械室，事務室等 |
| | | 第二共用棟 | | 浴室（男女各１），機械室 |
| | 世帯用 | Ⅲ型（60戸） | 43㎡ | 和室２（11㎡，８㎡），台所（７㎡）<br>浴室，洗面所，便所他 |
| | | Ⅳ型（20戸） | 56㎡ | 和室３（13㎡，10㎡，７㎡），台所（７㎡）<br>浴室，洗面所，便所他 |
| 国際学生宿舎 | | 家族用居室 | 53㎡ | 洋室１（15㎡），和室１（15㎡），ＤＫ（13㎡）<br>浴室（便所付），洗面所他 |
| | | | | 洋室２（16㎡，14㎡），ＤＫ（13㎡）<br>浴室（便所付），便所，洗面所他 |
| | | 夫婦用居室 | 35㎡ | 洋室１（10㎡），和室１（12㎡），ＤＫ（６㎡）<br>浴室（便所付），洗面所，玄関収納庫他 |
| | | | | 洋室２（10㎡，12㎡），台所（６㎡），浴室（便所付），便所，洗面所，冷暖房用空調設備，ベッド，机･椅子，書棚，応接テーブル･椅子，食卓テーブル･椅子，食器棚，整理ダンス，玄関収庫，洗濯機･乾燥機，冷蔵庫，電気スタンド他 |
| | | 単身用居室 | 15㎡ | 個室台所，便所，冷暖房用空調設備，ベッド，机･椅子，書棚，洋服ダンス，食器棚，冷蔵庫，電気スタンド |
| | | | 18㎡ | 個室台所，浴室（便所付），冷暖房用空調設備，ベッド，机･椅子，書棚，洋服ダンス，食器棚，冷蔵庫，電気スタンド |
| | | 共用部分 | | 第一研修室（研修、会議用等），第二研修室（入居者交流の場），シャワー･洗濯室（単身用），事務室等 |

（注） 単身用学生宿舎においては、便所，洗面・洗濯室，補食室は共同の施設である。

## ⑱ 平成15年度修了者・卒業者就職状況

### ① 大学院学校教育研究科（現職教員を除く）

平成16年5月1日現在

| 区分 | | | | 教員就職者 | | | | | | 計 | 企業・官公庁 | 保育士 | 進学者 | その他（未就職等） | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 小学校 | 中学校 | 高等学校 | 幼稚園 | 盲・聾・養護学校 | 大学等 | | | | | | |
| 学校教育専攻 | 学習臨床 | | 男 | | 2(1) | | | 1 | | 3(1) | 1 | | | 2 | 6 |
| | | | 女 | 1 | 1(1) | | | | 1(1) | 3(2) | | | 1① | 4① | 8② |
| | | | 計 | 1 | 3(2) | | | 1 | 1(1) | 6(3) | 1 | | 1① | 6① | 14② |
| | 発達臨床 | | 男 | 5(3) | 3(3) | | | 1(1) | | 9(7) | 1 | | | 4 | 14 |
| | | | 女 | 3(2) | 2(2) | | | | | 5(4) | | | | 2 | 7 |
| | | | 計 | 8(5) | 5(5) | | | 1(1) | | 14(11) | 1 | | | 6 | 21 |
| 幼児教育専攻 | | | 男 | | | | | | | | | | | 2 | 2 |
| | | | 女 | | 1(1) | | | | | 1(1) | | | | 2 | 3 |
| | | | 計 | | 1(1) | | | | | 1(1) | | | | 4 | 5 |
| 障害児教育専攻 | | | 男 | 1 | | | | 2(2) | | 3(2) | | | | 4① | 7① |
| | | | 女 | | | | | 1(1) | | 1(1) | 1 | | | 1 | 3 |
| | | | 計 | 1 | | | | 3(3) | | 4(3) | 1 | | | 5① | 10① |
| 教科・領域教育専攻 | 言語系コース | 国語 | 男 | | 1(1) | | | | | 1(1) | | | 1 | 3 | 5 |
| | | | 女 | | | 2(2) | | | | 2(2) | | | | 1 | 3 |
| | | | 計 | | 1(1) | 2(2) | | | | 3(3) | | | 1 | 4 | 8 |
| | | 英語 | 男 | | | | | | 1(1) | 1(1) | | | | 1 | 2 |
| | | | 女 | | | 1 | | | 1 | 2 | | | | 1① | 3① |
| | | | 計 | | | 1 | | | 2(1) | 3(1) | | | | 2① | 5① |
| | 社会系コース | | 男 | | | 1 | | | | 1 | | | 1① | 6② | 8③ |
| | | | 女 | | | | | | | | | | | 2① | 2① |
| | | | 計 | | | 1 | | | | 1 | | | 1① | 8③ | 10④ |
| | 自然系コース | 数学 | 男 | | 2(1) | 2(2) | | | | 4(3) | | | 1 | | 5 |
| | | | 女 | | | | | | | | | | | | |
| | | | 計 | | 2(1) | 2(2) | | | | 4(3) | | | 1 | | 5 |
| | | 理科 | 男 | 1(1) | | 1 | | | | 2(1) | | | | 1 | 3 |
| | | | 女 | | 1(1) | | | | | 1(1) | | | | | 1 |
| | | | 計 | 1(1) | 1(1) | 1 | | | | 3(2) | | | | 1 | 4 |
| | 芸術系コース | 音楽 | 男 | | | | | | | | | | | 1 | 1 |
| | | | 女 | 1 | 2(2) | | | 1(1) | | 4(3) | | | | 5② | 9② |
| | | | 計 | 1 | 2(2) | | | 1(1) | | 4(3) | | | | 6② | 10② |
| | | 美術 | 男 | 2(1) | 1(1) | 1(1) | | | 1 | 5(3) | | | | 2 | 7 |
| | | | 女 | 2(1) | 2(2) | | | | | 4(3) | | | | 1 | 5 |
| | | | 計 | 4(2) | 3(3) | 1(1) | | | 1 | 9(6) | | | | 3 | 12 |
| | 生活・健康系コース | 保健体育 | 男 | | 2(1) | | | | | 2(1) | 1 | | | 2 | 5 |
| | | | 女 | 2(2) | | | | | | 2(2) | | | | 2 | 4 |
| | | | 計 | 2(2) | 2(1) | | | | | 4(3) | 1 | | | 4 | 9 |
| | | 技術 | 男 | | 1 | | | 1 | | 2 | | | | 3③ | 5③ |
| | | | 女 | | | | | | | | | | | | |
| | | | 計 | | 1 | | | 1 | | 2 | | | | 3③ | 5③ |
| | | 家庭 | 男 | | | | | | | | | | | | |
| | | | 女 | 1 | 1 | 2(2) | | | | 4(2) | | | 1① | 1 | 6① |
| | | | 計 | 1 | 1 | 2(2) | | | | 4(2) | | | 1① | 1 | 6① |
| 合計 | | | 男 | 9(5) | 12(8) | 5(3) | | 5(3) | 2(1) | 33(20) | 3 | | 3① | 31⑥ | 70⑦ |
| | | | 女 | 10(5) | 10(9) | 5(4) | | 2(2) | 2(1) | 29(21) | 1 | | 2② | 22⑤ | 54⑦ |
| | | | 計 | 19(10) | 22(17) | 10(7) | | 7(5) | 4(2) | 62(41) | 4 | | 5③ | 53⑪ | 124⑭ |

（注） 1 （ ）内は，育児休業，病休，産休教員の代替教員等，1年以内の期限付き教員で内数。
2 ○内は，外国人留学生で内数。
3 平成15年9月修了生女子2名を含む。

② 学校教育学部

平成16年5月1日現在

| 区分 | | | | 教員就職者 | | | | | | 企業・官公庁 | 保育士 | 進学者 | その他(未就職等) | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 小学校 | 中学校 | 高等学校 | 幼稚園 | 盲・聾・養護学校 | 計 | | | | | |
| 学校教育専修 | 学習臨床 | | 男 | 5(2) | | | | | 5(2) | 1 | | 1 | 1 | 8 |
| | | | 女 | 8(2) | 3(3) | | | | 11(5) | 1 | | | 1 | 13 |
| | | | 計 | 13(4) | 3(3) | | | | 16(7) | 2 | | 1 | 2 | 21 |
| | 発達臨床 | | 男 | 4(3) | | | | | 4(3) | | | 2 | 1 | 7 |
| | | | 女 | 4(2) | 1(1) | | | | 5(3) | 4 | | 1 | 2 | 12 |
| | | | 計 | 8(5) | 1(1) | | | | 9(6) | 4 | | 3 | 3 | 19 |
| | 学校教育 | | 男 | | | | | | | | | | 1 | 1 |
| | | | 女 | | | | | | | | | | | |
| | | | 計 | | | | | | | | | | 1 | 1 |
| 幼児教育専修 | | | 男 | 1 | | | | | 1 | | 1 | | | 2 |
| | | | 女 | | 1(1) | | 2(1) | | 3(2) | 1 | 3 | | 1 | 8 |
| | | | 計 | 1 | 1(1) | | 2(1) | | 4(2) | 1 | 4 | | 1 | 10 |
| 教科・領域教育専修 | 言語系コース | 国　語 | 男 | 4(3) | | 1(1) | | | 5(4) | 2 | | | | 7 |
| | | | 女 | 7(5) | | | 1(1) | | 8(6) | 1 | | | | 9 |
| | | | 計 | 11(8) | | 1(1) | 1(1) | | 13(10) | 3 | | | | 16 |
| | | 英　語 | 男 | 2(1) | 2 | | | | 4(1) | | | | | 4 |
| | | | 女 | 2(2) | | | | | 2(2) | 2 | | | 1 | 5 |
| | | | 計 | 4(3) | 2 | | | | 6(3) | 2 | | | 1 | 9 |
| | 社会系コース | | 男 | 5(2) | 1 | | | | 6(2) | | | | 2 | 8 |
| | | | 女 | 6(1) | | | | | 6(1) | 1 | | | | 7 |
| | | | 計 | 11(3) | 1 | | | | 12(3) | 1 | | | 2 | 15 |
| | 自然系コース | 数　学 | 男 | 2(1) | 6(4) | | | | 8(5) | | | 3 | 1 | 12 |
| | | | 女 | 1 | | | | | 1 | 2 | | | | 3 |
| | | | 計 | 3(1) | 6(4) | | | | 9(5) | 2 | | 3 | 1 | 15 |
| | | 理　科 | 男 | | | 2(2) | | | 2(2) | | | 1 | | 3 |
| | | | 女 | 2(2) | | 1(1) | | | 3(3) | | | | 2 | 5 |
| | | | 計 | 2(2) | | 3(3) | | | 5(5) | | | 1 | 2 | 8 |
| | 芸術系コース | 音　楽 | 男 | | | | | | | 1 | | 1 | | 2 |
| | | | 女 | 3(3) | | | 2 | | 5(3) | 2 | | 2 | 3 | 12 |
| | | | 計 | 3(3) | | | 2 | | 5(3) | 3 | | 3 | 3 | 14 |
| | | 美　術 | 男 | | | | | | | | | 2 | | 2 |
| | | | 女 | | | | 1(1) | | 1(1) | | | 2 | 2 | 5 |
| | | | 計 | | | | 1(1) | | 1(1) | | | 4 | 2 | 7 |
| | 生活・健康系コース | 保健体育 | 男 | 3(1) | | | | 1(1) | 4(2) | | | 1 | 1 | 6 |
| | | | 女 | 3(3) | 1(1) | | | | 4(4) | | | | 1 | 5 |
| | | | 計 | 6(4) | 1(1) | | | 1(1) | 8(6) | | | 1 | 2 | 11 |
| | | 技　術 | 男 | | 4(4) | | | | 4(4) | | | 2 | | 6 |
| | | | 女 | | | | | | | | | | | |
| | | | 計 | | 4(4) | | | | 4(4) | | | 2 | | 6 |
| | | 家　庭 | 男 | | 1(1) | | | | 1(1) | | | | 3 | 4 |
| | | | 女 | 2 | 1(1) | | 2 | | 5(1) | 2 | | | 1 | 8 |
| | | | 計 | 2 | 2(2) | | 2 | | 6(2) | 2 | | | 4 | 12 |
| 合　計 | | | 男 | 26(13) | 14(9) | 3(3) | | 1(1) | 44(26) | 4 | 1 | 13 | 10 | 72 |
| | | | 女 | 38(20) | 7(7) | 1(1) | 8(3) | | 54(31) | 16 | 3 | 5 | 14 | 92 |
| | | | 計 | 64(33) | 21(16) | 4(4) | 8(3) | 1(1) | 98(57) | 20 | 4 | 18 | 24 | 164 |

(注) 1　(　) 内は，育児休業，病休，産休教員の代替教員等，1年以内の期限付き教員で内数。
2　平成15年9月卒業生男子1名を含む。

## ③　都道府県別公立学校教員就職者数

平成16年5月1日現在

| 都道府県名 | 学部 | | | | | 大学院 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 県別出身者 | 採用試験結果 | | 就職状況 | | 県別出身者 | 採用試験結果 | | 就職状況 | |
| | | 受験者 | 合格者 | 正規 | 臨時 | | 受験者 | 合格者 | 正規 | 臨時 |
| | 人 | 人 | 人 | 人 | 人 | 人 | 人 | 人 | 人 | 人 |
| 北海道 | 2 | 5 | 2 | 2 | 1 | 2 | 2 | 0 | | |
| 青森 | 1 | 1 | 1 | 1 | | 4 | 3 | 1 | 1 | 1 |
| 岩手 | 5 | 3 | 0 | | 1 | 7 | 1 | 0 | | |
| 宮城 | 0 | 1 | 0 | | | 2 | 5 | 2 | 2 | 2 |
| 秋田 | 2 | 1 | 0 | | | 0 | 1 | 0 | | |
| 山形 | 1 | 1 | 0 | | | 0 | 4 | 0 | | 1 |
| 福島 | 4 | 5 | 0 | | 4 | 2 | 1 | 0 | | 1 |
| 茨城 | 0 | 0 | 0 | | | 1 | 5 | 0 | | 1 |
| 栃木 | 3 | 2 | 1 | 1 | 1 | 0 | 3 | 0 | | 2 |
| 群馬 | 2 | 1 | 0 | | 1 | 2 | 3 | 1 | 1 | |
| 埼玉 | 0 | 5 | 3 | 1 | | 5 | 1 | 0 | | |
| 千葉 | 3 | 3 | 1 | 1 | 1 | 5 | 3 | 0 | | |
| 東京 | 2 | 2 | 1 | 1 | | 20 | 4 | 2 | 2 | |
| 神奈川 | 1 | 8 | 4 | 2 | | 3 | 5 | 1 | 1 | |
| 新潟 | 42 | 46 | 11 | 10 | 17 | 39 | 20 | 3 | 3 | 13 |
| 富山 | 18 | 11 | 5 | 5 | 4 | 0 | 2 | 0 | | 2 |
| 石川 | 16 | 15 | 2 | 2 | 5 | 4 | 5 | 0 | | 2 |
| 福井 | 10 | 6 | 0 | | 6 | 0 | 1 | 0 | | |
| 山梨 | 1 | 0 | 0 | | | 2 | 0 | 0 | | |
| 長野 | 22 | 16 | 1 | 1 | 8 | 2 | 9 | 2 | 2 | 5 |
| 岐阜 | 0 | 0 | 0 | | | 5 | 1 | 1 | 1 | |
| 静岡 | 2 | 1 | 0 | | | 0 | 3 | 1 | 1 | 1 |
| 愛知 | 10 | 6 | 2 | 2 | 2 | 4 | 9 | 1 | | 3 |
| 三重 | 2 | 0 | 0 | | | 0 | 1 | 1 | 1 | |
| 滋賀 | 1 | 2 | 2 | 2 | | 0 | 0 | 0 | | |
| 京都 | 0 | 7 | 4 | 3 | | 0 | 3 | 1 | 1 | |
| 大阪 | 1 | 2 | 2 | 1 | | 4 | 0 | 0 | | |
| 兵庫 | 0 | 1 | 0 | | | 0 | 1 | 0 | | |
| 奈良 | 0 | 2 | 0 | | | 0 | 0 | 0 | | |
| 和歌山 | 0 | 0 | 0 | | | 0 | 0 | 0 | | |
| 鳥取 | 1 | 2 | 0 | | | 0 | 0 | 0 | | |
| 島根 | 1 | 0 | 0 | | 1 | 0 | 0 | 0 | | |
| 岡山 | 1 | 0 | 0 | | | 2 | 0 | 0 | | |
| 広島 | 2 | 1 | 0 | | | 2 | 0 | 0 | | |
| 山口 | 2 | 1 | 0 | | | 0 | 0 | 0 | | |
| 徳島 | 0 | 0 | 0 | | | 0 | 0 | 0 | | |
| 香川 | 0 | 0 | 0 | | | 0 | 0 | 0 | | |
| 愛媛 | 0 | 0 | 0 | | | 0 | 0 | 0 | | |
| 高知 | 0 | 0 | 0 | | | 0 | 0 | 0 | | |
| 福岡 | 2 | 1 | 0 | | | 2 | 0 | 0 | | |
| 佐賀 | 0 | 0 | 0 | | | 1 | 0 | 0 | | |
| 長崎 | 1 | 0 | 0 | | | 1 | 0 | 0 | | |
| 熊本 | 1 | 0 | 0 | | | 0 | 0 | 0 | | |
| 大分 | 1 | 0 | 0 | | | 0 | 0 | 0 | | |
| 宮崎 | 1 | 0 | 0 | | | 0 | 0 | 0 | | |
| 鹿児島 | 3 | 2 | 1 | 1 | | 1 | 2 | 0 | | 1 |
| 沖縄 | 2 | 2 | 0 | | 1 | 0 | 0 | 0 | | |
| 外国 | 0 | 0 | 0 | | | 14 | 0 | 0 | | |
| 合計 | 169 | 162 | 43 | 36 | 53 | 136 | 98 | 17 | 16 | 35 |

（注）1　県別出身者は，平成15年7月1日現在のものである。
2　受験者数，合格者数は，延べ人数である。
3　平成15年9月卒業者1名，修了者2名を含む。
4　大学院の出身県は，大学を卒業した都道府県である。

## ⑲ 学生健康診断受診・精神衛生相談実施状況（平成１５年度）

### ① 定期健康診断

| 区分 | | | 対象者数（人） | 受診者数（人） | 受診率（%） | 有所見者数（人） | 有所見者率（%） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大学院修士 | １年次 | 男子 | 151 | 149 | 98.7 | 10 | 6.7 |
| | | 女子 | 75 | 72 | 96.0 | 8 | 11.1 |
| | | 計 | 226 | 221 | 97.8 | 18 | 8.1 |
| | ２年次 | 男子 | 186 | 158 | 84.9 | 3 | 1.9 |
| | | 女子 | 74 | 60 | 81.1 | 0 | 0.0 |
| | | 計 | 260 | 218 | 83.8 | 3 | 1.4 |
| | 計 | 男子 | 337 | 307 | 91.1 | 13 | 4.2 |
| | | 女子 | 149 | 132 | 88.6 | 8 | 6.1 |
| | | 計 | 486 | 439 | 90.3 | 21 | 4.8 |
| 学部 | １年次 | 男子 | 61 | 61 | 100.0 | 1 | 1.6 |
| | | 女子 | 110 | 110 | 100.0 | 14 | 12.7 |
| | | 計 | 171 | 171 | 100.0 | 15 | 8.8 |
| | ２年次 | 男子 | 68 | 68 | 100.0 | 3 | 4.4 |
| | | 女子 | 104 | 103 | 99.0 | 1 | 1.0 |
| | | 計 | 172 | 171 | 99.4 | 4 | 2.3 |
| | ３年次 | 男子 | 67 | 63 | 94.0 | 0 | 0.0 |
| | | 女子 | 94 | 93 | 98.9 | 2 | 2.2 |
| | | 計 | 161 | 156 | 96.9 | 2 | 1.3 |
| | ４年次 | 男子 | 75 | 69 | 92.0 | 0 | 0.0 |
| | | 女子 | 92 | 92 | 100.0 | 1 | 1.1 |
| | | 計 | 167 | 161 | 96.4 | 1 | 0.6 |
| | 計 | 男子 | 271 | 261 | 96.3 | 4 | 1.5 |
| | | 女子 | 400 | 398 | 99.5 | 18 | 4.5 |
| | | 計 | 671 | 659 | 98.2 | 22 | 3.3 |
| 合計 | | 男子 | 608 | 568 | 93.4 | 17 | 3.0 |
| | | 女子 | 549 | 530 | 96.5 | 26 | 4.9 |
| | | 計 | 1,157 | 1,098 | 94.9 | 43 | 3.9 |

（注） 診断内容は，内科・眼科・耳鼻咽喉科，胸部間接撮影，血圧測定，尿検査及び身体測定（身長・体重・肥満度）である。

② 特別健康診断（学部１・４年次対象）（平成１５年度）

| 区分 | | | | 対象者数（人） | 受検者数（人） | 受検率（%） | 有所見者数（人） | 有所見者率（%） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 心電図検査 | | 学部１年次 | 男子 | 60 | 56 | 93.3 | 1 | 1.8 |
| | | | 女子 | 109 | 103 | 94.5 | 3 | 2.9 |
| | | | 計 | 169 | 159 | 94.1 | 4 | 2.5 |
| | | 学部４年次 | 男子 | 74 | 54 | 73.0 | 3 | 5.6 |
| | | | 女子 | 92 | 78 | 84.8 | 2 | 2.6 |
| | | | 計 | 166 | 132 | 79.5 | 5 | 3.8 |
| | | 合計 | 男子 | 134 | 110 | 82.1 | 4 | 3.6 |
| | | | 女子 | 201 | 181 | 90.0 | 5 | 2.8 |
| | | | 計 | 335 | 291 | 86.9 | 9 | 3.1 |
| 血液検査 | | 学部４年次 | 男子 | 74 | 53 | 71.6 | 1 | 1.9 |
| | | | 女子 | 92 | 75 | 81.5 | 5 | 6.7 |
| | | | 計 | 166 | 128 | 77.1 | 6 | 4.7 |
| 血液生化学検査 | ＧＯＴ ＧＰＴ γ-GTP | | 男子 | 74 | 53 | 71.6 | 1 | 1.9 |
| | | | 女子 | 92 | 75 | 81.5 | 2 | 2.7 |
| | | | 計 | 166 | 128 | 77.1 | 3 | 2.3 |
| | 血液脂質検査 | | 男子 | 74 | 53 | 71.6 | 1 | 1.9 |
| | | | 女子 | 92 | 75 | 81.5 | 2 | 2.7 |
| | | | 計 | 166 | 128 | 77.1 | 3 | 2.3 |

（注）有所見者には，保健管理センターで問診・指導を行い，必要に応じて再検査を実施した。

③ 精神衛生相談（平成１５年度）

| 区分 | | | 修学（人） | 情緒・性格（人） | 進路（人） | 友人（人） | 家庭（人） | 異性（人） | ＵＰＩ（人） | 合計（人） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大学院修士 | １年次 | 男子 | | 1 | | | | | | 1 |
| | | 女子 | 6 | 2 | | 2 | | | | 10 |
| | | 計 | 6 | 3 | | 2 | | | | 11 |
| | ２年次 | 男子 | | 36 | 3 | | | | | 39 |
| | | 女子 | 4 | 29 | 2 | 1 | | | | 36 |
| | | 計 | 4 | 65 | 5 | 1 | | | | 75 |
| | 計 | 男子 | | 37 | 3 | | | | | 40 |
| | | 女子 | 10 | 31 | 2 | 3 | | | | 46 |
| | | 計 | 10 | 68 | 5 | 3 | | | | 86 |
| 学部 | １年次 | 男子 | | 1 | | | | | 10 | 11 |
| | | 女子 | 3 | 12 | | | | | 14 | 29 |
| | | 計 | 3 | 13 | | | | | 24 | 40 |
| | ２年次 | 男子 | | | | | | | | |
| | | 女子 | | 24 | | | | | | 24 |
| | | 計 | | 24 | | | | | | 24 |
| | ３年次 | 男子 | | 1 | 2 | | 1 | | | 4 |
| | | 女子 | 10 | 24 | 2 | 3 | | 1 | | 40 |
| | | 計 | 10 | 25 | 4 | 3 | 1 | 1 | | 44 |
| | ４年次 | 男子 | 12 | | | | | | | 12 |
| | | 女子 | | 43 | 8 | | | 3 | | 54 |
| | | 計 | 12 | 43 | 8 | | | 3 | | 66 |
| | 計 | 男子 | 12 | 2 | 2 | | 1 | | 10 | 27 |
| | | 女子 | 13 | 103 | 10 | 3 | | 4 | 14 | 147 |
| | | 計 | 25 | 105 | 12 | 3 | 1 | 4 | 24 | 174 |
| その他 | | | | 2 | | | 3 | | | 5 |
| 合計 | | 男子 | 12 | 39 | 5 | | 1 | | 10 | 67 |
| | | 女子 | 23 | 134 | 12 | 6 | | 4 | 14 | 193 |
| | | 計 | 35 | 175 | 17 | 6 | 4 | 4 | 24 | 265 |

（注） UPIとは（University Personality Inventory：大学生精神健康調査）の調査に基づく相談件数である。

## ⑳ 附属図書館蔵書数・利用状況

### ① 蔵書数

ア　図書数の推移

| 区分 | | 和書 | 洋書 | 計 |
|---|---|---|---|---|
| 昭和56年度〜平成12年度 | 購入 | 146,732 | 37,137 | 183,869 |
| | 寄贈 | 28,382 | 4,205 | 32,587 |
| | 製本 | 19,556 | 14,833 | 34,389 |
| | その他 | 10,072 | 3,384 | 13,456 |
| | 計 | 204,742 | 59,559 | 264,301 |
| 平成13年度 | 購入 | 6,602 | 1,016 | 7,618 |
| | 寄贈 | 1,093 | 207 | 1,300 |
| | 製本 | 708 | 662 | 1,370 |
| | その他 | −2,635 | −29 | −2,664 |
| | 計 | 5,768 | 1,856 | 7,624 |
| 平成14年度 | 購入 | 5,981 | 901 | 6,882 |
| | 寄贈 | 1,371 | 26 | 1,397 |
| | 製本 | 1,017 | 504 | 1,521 |
| | その他 | −278 | −106 | −384 |
| | 計 | 8,091 | 1,325 | 9,416 |
| 平成15年度 | 購入 | 5,428 | 1,525 | 6,953 |
| | 寄贈 | 4,425 | 245 | 4,670 |
| | 製本 | 435 | 460 | 895 |
| | その他 | −2,335 | −384 | −2,719 |
| | 計 | 7,953 | 1,846 | 9,799 |
| 累計 | 購入 | 164,743 | 40,579 | 205,322 |
| | 寄贈 | 35,271 | 4,683 | 39,954 |
| | 製本 | 21,716 | 16,459 | 38,175 |
| | その他 | 4,824 | 2,865 | 7,689 |
| | 計 | 226,554 | 64,586 | 291,140 |

※−は廃棄分

イ　受入雑誌種類数

| 区分 | | 和書 | 洋書 | 計 |
|---|---|---|---|---|
| 平成12年度 | 購入 | 589 | 369 | 958 |
| | 寄贈 | 711 | 11 | 722 |
| | 計 | 1,300 | 380 | 1,680 |
| 平成13年度 | 購入 | 573 | 338 | 911 |
| | 寄贈 | 711 | 11 | 722 |
| | 計 | 1,284 | 349 | 1,633 |
| 平成14年度 | 購入 | 540 | 356 | 896 |
| | 寄贈 | 711 | 11 | 722 |
| | 計 | 1,251 | 367 | 1,618 |
| 平成15年度 | 購入 | 533 | 332 | 865 |
| | 寄贈 | 826 | 25 | 851 |
| | 計 | 1,359 | 357 | 1,716 |

② 利用状況（前年度比）

| 区分 | | | 平成14年度 | 平成15年度 | 増減（△） |
|---|---|---|---|---|---|
| 利用対象者数 | | 学部学生 | 715人 | 674人 | △41人 |
| | | 院生等 | 557 | 553 | △4 |
| | | 職員 | 343 | 318 | △25 |
| | | 学外者 | 534 | 664 | 130 |
| | | 計 | 2,149 | 2,209 | 60 |
| 開館日数及び時間数 | | 総開館日数 | 284日 | 288日 | 4日 |
| | | 時間外開館日数 | 224 | 225 | 1 |
| | | 総開館時間数 | 3,078h | 3,098h | △80h |
| | | 時間外開館時間数 | 1,143 | 1,161 | 13 |
| 入館者数 | | 総入館者数 | 94,668人 | 91,923人 | △2,745人 |
| | | 時間外入館者数 | 25,924 | 20,045 | △5,879 |
| 貸出業務 | 館外貸出人数 | 学部学生 | 7,435 | 6,110 | △1,325 |
| | | 院生等 | 12,732 | 12,801 | 69 |
| | | 職員 | 1,739 | 1,760 | 21 |
| | | 学外者 | 528 | 575 | 47 |
| | | 計 | 22,434 | 21,246 | △1,188 |
| | 館外貸出冊数 | 学部学生 | 14,727冊 | 11,879冊 | △2,848冊 |
| | | 院生等 | 29,060 | 29,506 | 446 |
| | | 職員 | 3,871 | 3,700 | △171 |
| | | 学外者 | 1,203 | 1,248 | 45 |
| | | 計 | 48,861 | 46,333 | △2,528 |
| | 学生当たり貸出冊数 | 学部学生 | 20.6 | 17.6 | △3.0 |
| | | 院生等 | 52.2 | 53.4 | 1.2 |
| 参考業務 | 文献複写受付 | | 3,548件 | 2,729件 | △819件 |
| | 参考業務 | 文献所在調査 | 449 | 296 | △153 |
| | | 事項調査 | 58 | 42 | △16 |
| | | 利用指導 | 1,200 | 678 | △522 |
| | | 計 | 1,707 | 1,016 | △691 |
| 相互協力 | 文献複写 | 受付 | 2,942 | 3,181 | 239 |
| | | 依頼 | 2,987 | 3,303 | 316 |
| | | 計 | 5,929 | 6,484 | 555 |
| | 相互貸借 | 貸出 | 780 | 650 | △130 |
| | | 借受 | 427 | 401 | △26 |
| | | 計 | 1,207 | 1,051 | △156 |

## ㉑ 附属学校在学児童・生徒・幼児数

平成15年5月1日現在

| 区分 | 入学(園)定員 | 総定員 | 学級数 | 児童・生徒・幼児数 | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 1学年（3歳児） | 2学年（4歳児） | 3学年（5歳児） | 4学年 | 5学年 | 6学年 | 計 |
| 附属小学校 | 80 | 480 | 12 | 59（29） | 67（37） | 67（36） | 62（33） | 79（47） | 70（36） | 404（208） |
| 附属中学校 | 120 | 360 | 9 | 120（61） | 111（51） | 113（58） | － | － | － | 344（170） |
| 附属幼稚園 | 3歳児 20<br>4歳児 15<br>5歳児 － | 20<br>35　90<br>35 | 3 | 22（12） | 31（14） | 27（11） | － | － | － | 80（37） |

（ ）内は，女子で内数である。

## 3　兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科

### (1)　平成 16 年度入学者選抜試験状況

| 区分 / 都道府県 | 志願者 | | | | | 受験者 | | | | | 合格者 | | | | | 入学者 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 上越 | 兵庫 | 岡山 | 鳴門 | 合計 | 上越 | 兵庫 | 岡山 | 鳴門 | 合計 | 上越 | 兵庫 | 岡山 | 鳴門 | 合計 | 上越 | 兵庫 | 岡山 | 鳴門 | 合計 |
| 北海道 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 青森 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 岩手 | | | | 1 | 1 | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | |
| 宮城 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 秋田 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 山形 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 福島 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 茨城 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 栃木 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 群馬 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 埼玉 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 千葉 | | | | 1(1) | 1(1) | | | | 1(1) | 1(1) | | | | 1(1) | 1(1) | | | | 1(1) | 1(1) |
| 東京 | 1 | | | | 1 | 1 | | | | 1 | | | | | | | | | | |
| 神奈川 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 新潟 | 3(1) | 1 | | | 4(1) | 3(1) | 1 | | | 4(1) | 1 | | | | 1 | 1 | | | | 1 |
| 富山 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 石川 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 福井 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 山梨 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 長野 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 岐阜 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 静岡 | 1 | | | | 1 | 1 | | | | 1 | 1 | | | | 1 | 1 | | | | 1 |
| 愛知 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 三重 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 滋賀 | | 1 | | | 1 | | 1 | | | 1 | | | | | | | | | | |
| 京都 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 大阪 | | 3(2) | | | 3(2) | | 3(2) | | | 3(2) | | 3(2) | | | 3(2) | | 3(2) | | | 3(2) |
| 兵庫 | | 6(4) | | 1 | 7(4) | | 6(4) | | 1 | 7(4) | | 6(4) | | 1 | 7(4) | | 5(3) | | 1 | 6(3) |
| 奈良 | | 2 | | | 2 | | 2 | | | 2 | | 2 | | | 2 | | 2 | | | 2 |
| 和歌山 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 鳥取 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 島根 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 岡山 | | | 4(3) | | 4(3) | | | 4(3) | | 4(3) | | | 3(2) | | 3(2) | | | 3(2) | | 3(2) |
| 広島 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 山口 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 徳島 | | | | 7(4) | 7(4) | | | | 7(4) | 7(4) | | | | 5(3) | 5(3) | | | | 4(3) | 4(3) |
| 香川 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 愛媛 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 高知 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 福岡 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 佐賀 | | | | 1(1) | 1(1) | | | | 1(1) | 1(1) | | | | 1(1) | 1(1) | | | | 1(1) | 1(1) |
| 長崎 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 熊本 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 大分 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 宮崎 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 鹿児島 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 沖縄 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 外国 | 1(1) | 1 | 1(1) | 2(1) | 5(3) | 1(1) | 1 | 1(1) | 2(1) | 5(3) | 1(1) | 1 | 1(1) | | 3(2) | | 1 | 1(1) | | 2(1) |
| 計 | 6(2) | 14(6) | 5(4) | 13(7) | 38(19) | 6(2) | 14(6) | 5(4) | 13(7) | 38(19) | 3(1) | 12(6) | 4(3) | 8(5) | 27(15) | 2 | 11(5) | 4(3) | 7(5) | 24(13) |

(注)（ ）内は女子で内数である。

### (2) 構成大学別配属学生数

平成15年５月１日現在

| 区分 | 学校教育実践学専攻 | | | | 教科教育実践学専攻 | | | | 合計 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | １年次 | ２年次 | ３年次 | 計 | １年次 | ２年次 | ３年次 | 計 | １年次 | ２年次 | ３年次 | 計 |
| 上越教育大学 | 2(1) | 2 | 2 | 6(1) | 2 | 4 | 4(2) | 12(2) | 4(1) | 6 | 6 | 18(3) |
| 兵庫教育大学 | 3(1) | 2(1) | 5(2) | 10(4) | 7(3) | 4(3) | 6(2) | 17(8) | 10(4) | 6(4) | 11(4) | 27(12) |
| 岡山大学 | 3(1) | 2(2) | 6(5) | 11(8) | 5 | 6(2) | 6(4) | 17(6) | 8(1) | 8(4) | 12(9) | 28(14) |
| 鳴門教育大学 | 1 | 3(1) | 3(3) | 7(4) | 4(1) | 2 | 9(5) | 15(6) | 5(1) | 5(1) | 12(8) | 22(10) |
| 合計 | 9(3) | 9(4) | 16(10) | 34(17) | 18(4) | 16(5) | 27(13) | 61(22) | 27(7) | 25(9) | 43(23) | 95(39) |

（注）（ ）内は女子で内数である。

### (3) 配属学生別指導教官

本学配属学生，平成15年５月１日現在

#### ① 学校教育実践学専攻

〈学校教育方法連合講座〉

| 学生氏名 | 性別 | 学年 | 主指導教官 | 副指導教官 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 木村松子 | 女 | 1 | 西　穣司（上越教育大学） | 古賀一博（上越教育大学） | 北神正行（岡山大学） |
| 小林淳一 | 男 | 2 | 西　穣司（上越教育大学） | 平野絹枝（上越教育大学） | 北神正行（岡山大学） |
| 牛　志奎 | 男 | 3 | 若井彌一（上越教育大学） | 西　穣司（上越教育大学） | 佐竹勝利（鳴門教育大学） |
| 松岡　律 | 男 | 3 | 若井彌一（上越教育大学） | 西　穣司（上越教育大学） | 杉尾　宏（兵庫教育大学） |

＜学校教育臨床連合講座＞

| 学生氏名 | 性別 | 学年 | 主指導教官 | 副指導教官 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 吉川和幸 | 男 | 1 | 藤原義博（上越教育大学） | 星名信昭（上越教育大学） | 藤田継道（兵庫教育大学） |
| 加藤哲則 | 男 | 2 | 星名信昭（上越教育大学） | 小宮三彌（上越教育大学） | 藤田継道（兵庫教育大学） |

#### ② 教科教育実践学専攻

＜社会系教育連合講座＞

| 学生氏名 | 性別 | 学年 | 主指導教官 | 副指導教官 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 狩野聖子 | 女 | 3 | 二谷貞夫（上越教育大学） | 浅倉有子（上越教育大学） | 髙橋　啓（鳴門教育大学） |
| 新木武志 | 男 | 3 | 二谷貞夫（上越教育大学） | 河西英通（上越教育大学） | 原田智仁（兵庫教育大学） |

＜自然系教育連合講座＞

| 学生氏名 | 性別 | 学年 | 主指導教官 | 副指導教官 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 久保田善彦 | 男 | 1 | 戸北凱惟（上越教育大学） | 西川　純（上越教育大学） | 松本伸示（兵庫教育大学） |
| 中村好則 | 男 | 1 | 黒木伸明（上越教育大学） | 森川鐵朗（上越教育大学） | 齋藤　昇（鳴門教育大学） |
| 池田仁人 | 男 | 2 | 戸北凱惟（上越教育大学） | 髙津戸　秀（上越教育大学） | 本間　均（兵庫教育大学） |
| 佐伯昭彦 | 男 | 2 | 黒木伸明（上越教育大学） | 西山保子（上越教育大学） | 齋藤　昇（鳴門教育大学） |
| 諏訪田文男 | 男 | 3 | 溝上武實（上越教育大学） | 黒木伸明（上越教育大学） | 丸林英俊（鳴門教育大学） |

＜芸術系教育連合講座＞

| 学生氏名 | 性別 | 学年 | 主指導教官 | 副指導教官 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 三浦忠士 | 男 | 2 | 西村俊夫（上越教育大学） | 山ノ下堅一（上越教育大学） | 福本謹一（兵庫教育大学） |
| 飯田史帆 | 女 | 3 | 西村俊夫（上越教育大学） | 山ノ下堅一（上越教育大学） | 福本謹一（兵庫教育大学） |

＜生活・健康系教育連合講座＞

| 学生氏名 | 性別 | 学年 | 主指導教官 | 副指導教官 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 磯部征尊 | 男 | 2 | 山崎貞登（上越教育大学） | 川崎直哉（上越教育大学） | 松浦正史（兵庫教育大学） |
| 伊藤大輔 | 男 | 3 | 山崎貞登（上越教育大学） | 川崎直哉（上越教育大学） | 松浦正史（兵庫教育大学） |
| 三浦　哲 | 男 | 3 | 三浦望慶（上越教育大学） | 川崎直哉（上越教育大学） | 後藤幸弘（兵庫教育大学） |

### (4) 平成15年度修了者及び学位論文

#### ① 修了者

| 専攻・連合講座名 | | 修了者数 | 左記修了者内訳 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 配属大学別 | | | |
| | | | 上越 | 兵庫 | 岡山 | 鳴門 |
| 学校教育実践学 | 学校教育方法 | 2 (2) | | | 1 (1) | 1 (1) |
| | 学校教育臨床 | 2 (1) | | 1 | 1 (1) | |
| 教科教育実践学 | 言語系教育 | | | | | |
| | 社会系教育 | 1 | 1 | | | |
| | 自然系教育 | 1 | 1 | | | |
| | 芸術系教育 | 3 (3) | | | 2 (2) | 1 (1) |
| | 生活・健康系教育 | 3 (1) | 1 | | 2 (1) | |
| 合計 | | 12 (7) | 3 | 1 | 6 (5) | 2 (2) |

(注)( ) 内は女子で内数である。

#### ② 修了者の学位論文題目一覧

| 専攻・所属連合講座名 | 学生氏名 | 配属大学 | 学位論文題目 |
|---|---|---|---|
| 学校教育実践学<br>学校教育方法 | 山下文代 | 鳴門教育大学 | ソーシャル・サポートが児童の攻撃性関連性格とストレス反応の関係に及ぼす影響 |
| | 佐々木　恵 | 鳴門教育大学 | 大学生におけるストレス・コーピングと精神健康の因果関係に関する実証的研究 |
| 学校教育実践学<br>学校教育臨床 | 佐藤和順 | 兵庫教育大学 | 幼稚園生活におけるジェンダー形成の多重構造に関する研究<br>－ジェンダー・バイアス・フェードアウト保育の構築－ |
| | 手島由紀子 | 岡山大学 | 知的障害者の自己決定に必要な学習と支援に関する研究 |
| 教科教育実践学<br>社会系教育 | 新木武志 | 上越教育大学 | 近現代の都市空間における歴史表象の研究：歴史表象分析による歴史認識の形成をめざして |
| 教科教育実践学<br>自然系教育 | 諏訪田文男 | 上越教育大学 | Astudyofgeneralizedmeteicproperties<br>(一般距離空間の属性の研究) |
| 教科教育実践学<br>芸術系教育 | 加藤晴子 | 岡山大学 | 「こもりうた」にみる音楽教育的機能<br>－音楽感覚の形成を視点とした教育実践への提案－ |
| | 高橋順子 | 岡山大学 | 日本における軍学の受容とその作品にみる日本的特徴に関する研究 |
| | 加納暁子 | 鳴門教育大学 | 演奏表現を中心とした音楽の指導内容とその学習に関する教育実践学的研 |
| 教科教育実践学<br>生活・健康系教育 | 胡　習之 | 岡山大学 | 水中収束衝撃波の塑性加工への応用 |
| | 伊藤大輔 | 上越教育大学 | 北アイルランドと日本の技術科カリキュラムのデザインに関する研究 |
| | 岡崎愉加 | 岡山大学 | 思春期の食生活が性成熟に与える影響 |

## 4　自己点検・評価関係規程等

### (1)　上越教育大学大学評価委員会規程

（平成 13 年 3 月 26 日　規程第 11 号）

**上越教育大学大学評価委員会規程**

（設置）

**第１条**　上越教育大学運営評議会規則（平成 12 年規則第２号）第９条第１項の規定に基づき，運営評議会の専門委員会として，上越教育大学大学評価委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（目的）

**第２条**　委員会は，上越教育大学（以下「本学」という。）の教育研究水準の向上を図り，本学の目的及び社会的使命を達成するため，教育研究活動等の状況について点検及び評価を行うとともに，本学の授業の内容及び方法の改善を図るための基本方針を策定し教育方法等の改善の推進を図ることを目的とする。

（審議事項）

**第３条**　委員会は，次の各号に掲げる事項を審議する。

(1)　大学評価に関する事項

(2)　ファカルティ・ディベロップメントの推進に関する事項

(3)　その他大学評価に関し，学長が必要と認めた事項

（組織）

**第４条**　委員会は，次の各号に掲げる者をもって組織する。

(1)　運営評議会委員

(2)　附属実技教育研究指導センター長

(3)　運営評議会委員以外の附属学校長

(4)　事務局長

（委員長等）

**第５条**　委員会に委員長を置き，学長をもって充てる。

２　委員会に副委員長を置き，委員長が指名した副学長とする。

（会議の招集及び議長）

**第６条**　委員長は，委員会を招集し，その議長となる。

２　副委員長は，委員長を補佐し，委員長に事故があるときは，その職務を代行する。

（定足数及び議決数）

**第７条**　委員会は，委員（公務出張を命じられた者を除く。）の３分の２以上の出席がなければ，議事を開くことができない。

２　議決を要する事項については，出席委員の過半数で決し，可否同数のときは，議長の決するところによる。

（委員以外の者の出席）

**第８条**　委員長は，必要があると認めたときは，委員以外の者を委員会に出席させ，意見を述べさせることができる。

（専門部会の設置）

**第９条**　委員会に，大学評価に関する事項を調査検討するため，大学評価専門部会を置く。

２　委員会に，ファカルティ・ディベロップメントの推進に関する事項を調査検討するため，ファカルティ・ディベロップメント推進専門部会を置く。

３　委員会は，必要があると認めたときは，前２項以外に専門部会を置くことができる。

４　専門部会に関し必要な事項は，委員会が別に定める。

（事務の処理）

**第 10 条**　委員会に関する事務は，事務局総務部庶務課及び教務部教務課において処理する。

（細則）

**第 11 条**　この規程に定めるもののほか，委員会の運営に関し必要な事項は，委員会が別に定める。

附　則

この規程は，平成 13 年４月１日から施行する。

### (2) 上越教育大学大学評価委員会大学評価専門部会細則

（平成13年3月26日　細則第10号）

**上越教育大学大学評価委員会大学評価専門部会細則**

（趣旨）

**第１条**　この細則は，上越教育大学大学評価委員会規程（平成13年規程第11号）第９条第４項の規定に基づき，大学評価専門部会（以下「専門部会」という。）に関し必要な事項を定める。

（所掌事項）

**第２条**　専門部会は，次の各号に掲げる事項を所掌する。

(1)　自己点検・評価に関する事項

(2)　第三者評価に関する事項

(3)　外部評価に関する事項

(4)　その他大学評価に関し必要な事項

（組織）

**第３条**　専門部会は，次の各号に掲げる者をもって組織する。

(1)　大学評価委員会委員長が指名した副学長

(2)　大学評価委員会委員若干人

(3)　各部から選出された教授各２人

(4)　総務部長

(5)　教務部長

(6)　学長が指名した教授若干人

（委員の委嘱及び任期）

**第４条**　前条第３号及び第６号に掲げる委員は，学長が委嘱する。

２　前項の委員の任期は，２年とし，再任を妨げない。ただし，欠員となったときの後任者の任期は，前任者の任期の残余の期間とする。

３　前項の規定にかかわらず，前条第６号に掲げる委員の任期の終期は，委員として委嘱された日の属する年度の翌年度の末日までとする。

（部会長等）

**第５条**　専門部会に部会長を置き，第３条に掲げる委員のうちから大学評価委員会委員長が指名する。

２　専門部会は，必要があると認めたときは，副部会長を置くことができる。

（会議の招集及び議長）

**第６条**　部会長は，専門部会を招集し，その議長となる。

２　部会長に事故があるときは，部会長があらかじめ指名した委員又は前条第２項により副部会長を置くときは，当該副部会長がその職務を代行する。

（委員以外の者の出席）

**第７条**　部会長は，必要があると認めたときは，委員以外の者を専門部会に出席させ，意見を述べさせることができる。

（事務の処理）

**第８条**　専門部会に関する事務は，事務局総務部庶務課において処理する。

（その他）

**第９条**　この細則に定めるもののほか，専門部会の運営に関し必要な事項は，大学評価委員会が別に定める。

附　則

１　この細則は，平成13年４月１日から施行する。

２　この細則施行後最初に委嘱する第３条第３号の委員のうち，各部各１人の委員の任期は，第４条第２項本文の規定にかかわらず，平成14年３月31日までとし，再任を妨げない。

### ⑶　上越教育大学大学評価委員会ファカルティ・ディベロップメント推進専門部会細則

（平成13年３月26日　細則第11号）

**上越教育大学大学評価委員会ファカルティ・ディベロップメント推進専門部会細則**

（趣旨）

**第１条**　この細則は，上越教育大学大学評価委員会規程（平成13年規程第11号）第９条第４項の規定に基づき，ファカルティ・ディベロップメント推進専門部会（以下「専門部会」という。）に関し必要な事項を定める。

（所掌事項）

**第２条**　専門部会は，ファカルティ・ディベロップメントの推進に関する事項を所掌する。

（組織）

**第３条**　専門部会は，次の各号に掲げる者をもって組織する。

⑴　大学評価委員会委員長が指名した副学長

⑵　大学評価委員会委員若干人

⑶　各部から選出された教授又は助教授（講師を含む。以下同じ。）各１人

⑷　教務部長

⑸　学長が指名した教授又は助教授若干人

（委員の委嘱及び任期）

**第４条**　前条第３号及び第５号に掲げる委員は，学長が委嘱する。

２　前項の委員の任期は，２年とし，再任を妨げない。ただし，欠員となったときの後任者の任期は，前任者の任期の残余の期間とする。

３　前項の規定にかかわらず，前条第５号に掲げる委員の任期の終期は，委員として委嘱された日の属する年度の翌年度の末日までとする。

（部会長等）

**第５条**　専門部会に部会長を置き，第３条に掲げる委員のうちから大学評価委員会委員長が指名する。

２　専門部会は，必要があると認めたときは，副部会長を置くことができる。

（会議の招集及び議長）

**第６条**　部会長は，専門部会を招集し，その議長となる。

２　部会長に事故があるときは，部会長があらかじめ指名した委員又は前条第２項により副部会長を置くときは，当該副部会長がその職務を代行する。

（委員以外の者の出席）

**第７条**　部会長は，必要があると認めたときは，委員以外の者を専門部会に出席させ，意見を述べさせることができる。

（事務の処理）

**第８条**　専門部会に関する事務は，事務局教務部教務課において処理する。

（その他）

**第９条**　この細則に定めるもののほか，専門部会の運営に関し必要な事項は，大学評価委員会が別に定める。

附　則

１　この細則は，平成13年４月１日から施行する。

２　この細則施行後最初に委嘱する第３条第３号に規定する委員のうち，第一部，第三部及び第五部から選出された委員の任期は，第４条第２項本文の規定にかかわらず，平成14年３月31日までとし，再任を妨げない。

# 第四章　大学評価・学位授与機構の大学評価

# 第四章　大学評価・学位授与機構の大学評価

## 1　大学評価・学位授与機構が行う大学評価について

大学評価・学位授与機構（以下「機構」という。）が行う評価は，大学及び大学共同利用機関（以下「大学等」）が競争的環境の中で個性が輝く機関として一層発展するよう，大学等の教育研究活動等の状況や成果を多面的に評価することにより，その結果を，①大学等にフィードバックし，教育研究活動等の改善に役立てるとともに，②社会に公表することにより，公共的機関としての大学等の教育研究活動等について，広く国民の理解と指示が得られるよう支援していくことを目的としている。

機構の評価は，平成12年度着手分から平成14年度着手分までを試行的実施期間としており，複数の評価手法に基づく多面的な評価として，全学的な事項に関する評価（全学テーマ別評価），各学部や研究科における教育研究活動の評価（分野別教育評価），各学部，各研究科，各附置研究所等における研究活動の評価（分野別研究評価）の三区分の評価を実施した。

## 2　評価報告書

大学評価・学位授与機構は，以下のとおり本学を対象として試行的実施期間における評価を行い，その結果を評価報告書として公表した。ついては，機構の了承をいただき同評価報告書を転載する。

◇全学テーマ別評価

| | |
|---|---|
| 平成12年度着手 | 教育サービス面における社会貢献 |
| 平成12年度着手継続分 | 教養教育 |
| 平成13年度着手 | 研究活動面における社会との連携及び協力 |
| 平成14年度着手 | 国際的な連携及び交流活動 |

◇分野別教育評価

| | |
|---|---|
| 平成13年度着手 | 教育学系（学校教育学部） |
| 平成13年度着手 | 教育学系（大学院学校教育研究科） |

# 「教育サービス面における社会貢献」評価報告書

（平成１２年度着手　全学テーマ別評価）

上　越　教　育　大　学

平成１４年３月

大学評価・学位授与機構

# ◇　大学評価・学位授与機構が行う大学評価

## ○大学評価･学位授与機構が行う大学評価について

### 1　評価の目的

大学評価・学位授与機構（以下「機構」）が実施する評価は，大学及び大学共同利用機関（以下「大学等」）が競争的環境の中で個性が輝く機関として一層発展するよう，大学等の教育研究活動等の状況や成果を多面的に評価することにより，①その教育研究活動等の改善に役立てるとともに，②評価結果を社会に公表することにより，公共的機関としての大学等の諸活動について，広く国民の理解と支持が得られるよう支援・促進していくことを目的としている。

### 2　評価の区分

機構の実施する評価は，平成 14 年度中の着手までを段階的実施（試行）期間としており，今回報告する平成 12 年度着手分については，以下の 3 区分で，記載のテーマ及び分野で実施した。

①　全学テーマ別評価（「教育サービス面における社会貢献」）
②　分野別教育評価（「理学系」，「医学系（医学）」）
③　分野別研究評価（「理学系」，「医学系（医学）」）

### 3　目的及び目標に即した評価

機構の実施する評価は，大学等の個性や特色が十二分に発揮できるよう，当該大学等の設定した目的及び目標に即して行うことを基本原則としている。そのため，大学等の設置の趣旨，歴史や伝統，人的・物的条件，地理的条件，将来計画などを考慮して，明確かつ具体的な目的及び目標が設定されることを前提とした。

## ○全学テーマ別評価「教育サービス面における社会貢献」について

### 1　評価の対象

本テーマでは，大学等が行っている教育面での社会貢献活動のうち，正規の課程に在籍する学生以外の者に対する教育活動及び学習機会の提供について，全機関的組織で行われている活動及び全機関的な方針の下に学部やその他の部局で行われている活動を対象とした。

対象機関は，設置者（文部科学者）から要請のあった，国立大学（政策研究大学院大学及び短期大学を除く 98 大学）及び大学共同利用機関（総合地球環境学研究所を除く 14 機関）とした。

各大学等における本テーマに関する活動の「とらえ方」，「目的及び目標」及び「具体的な取組の現状」については，「Ⅱ　教育サービス面における社会貢献に関する目的及び目標」に掲げている。

### 2　評価の内容・方法

評価は，大学等の現在の活動状況について，過去 5 年間の状況の分析を通じて，次の 3 項目の項目別評価により実施した。

1)　目的及び目標を達成するための取組
2)　目的及び目標の達成状況
3)　改善のためのシステム

### 3　評価のプロセス

①　大学等においては，機構の示す要項に基づき自己評価を行い，自己評価書（根拠となる資料・データを含む。）を機構に提出した。
②　機構においては，専門委員会の下に，専門委員会委員及び評価員による評価チームを編成し，自己評価書の書面調査及びヒアリングの結果を踏まえて評価を行い，その結果を専門委員会で取りまとめた上，大学評価委員会で評価結果を決定した。
③　機構は，評価結果に対する意見の申立ての機会を設け，申立てがあった大学等について，大学評価委員会において最終的な評価結果を確定した。

### 4　本報告書の内容

**「Ⅰ　対象機関の現況」**及び**「Ⅱ　教育サービス面における社会貢献に関する目的及び目標」**は，当該大学等から提出された自己評価書から転載している。

**「Ⅲ　評価結果」**は，評価項目ごとに，特記すべき点を「特に優れた点及び改善点等」として記述している。

また，「貢献（達成又は機能）の状況（水準）」として，以下の 4 種類の「水準を分かりやすく示す記述」を用いている。

- 十分に貢献（達成又は機能）している。
- おおむね貢献（達成又は機能）しているが，改善の余地もある。
- ある程度貢献（達成又は機能）しているが，改善の必要がある。
- 貢献しておらず（達成又は整備が不十分であり），大幅な改善の必要がある。

なお，これらの水準は，当該大学等の設定した目的及び目標に対するものであり，相対比較することは意味を持たない。

また，総合的評価については，各評価項目を通じた事柄や全体を見たときに指摘できる事柄について評価を行うこととしていたが，この評価に該当する事柄が得られなかったため，総合的評価としての記述は行わないこととした。

**「Ⅳ　評価結果の概要」**は，評価結果を要約して示している。

**「Ⅴ　意見の申立て及びその対応」**は，評価結果に対する意見の申立てがあった大学等について，その内容とそれへの対応を示している。

### 5　本報告書の公表

本報告書は，大学等及びその設置者に提供するとともに，広く社会に公表している。

# Ⅰ　対象機関の現況

上越教育大学は，新潟県上越市に位置し，昭和53年10月に開学した新構想の教員養成大学である。本学は，「教員の資質能力の向上と初等教育教員の養成と確保という社会的要請に応える」ことを目的に，主に初等中等教育諸学校教員に研究・研鑽の機会を提供する大学院と，初等教育教員の養成を行う学部を備えた「教員に開かれた大学院を中心とした新しい大学」として設立された。

本学は，大学院学校教育研究科（修士課程）（学生数 508人）と学校教育学部（学生数 745 人）で構成され，さらに構成大学として兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科（博士課程）（本学配属学生数 16 人）に参加している（平成13年5月1日現在）。

本学の教員数は 206人（うち附属学校教員 39人）で，教員組織は講座及び学内共同教育研究施設等で構成される５部組織である（平成13年 5月 1日現在）。平成13年度に部組織及び講座の再編を行い，次の構成となっている。

第一部：学習臨床講座，幼児教育講座，学校教育総合研究センター（平成 12 年度までは「学校教育研究センター」）
第二部：生徒指導総合講座，心理臨床講座，障害児教育講座，附属障害児教育実践センター
第三部：言語系教育講座，社会系教育講座，附属実技教育研究指導センター（言語系教育分野）
第四部：自然系教育講座，生活・健康系教育講座，保健管理センター，附属実技教育研究指導センター（体育教育分野）
第五部：芸術系教育講座，附属実技教育研究指導センター（音楽教育分野及び美術教育分野）

教育サービスを行っている大学附属施設等としては，附属図書館，学校教育総合研究センター，心理教育相談室並びに学校教育学部の附属施設として附属実技教育研究指導センター，附属障害児教育実践センター，附属小学校，附属中学校及び附属幼稚園が設置されている。

# Ⅱ　教育サービス面における社会貢献に関する目的及び目標

## 1．教育サービス面における社会貢献に関するとらえ方

【社会貢献活動の全体的位置付け】

本学は「開かれた大学」として，(1) 入学生，卒業・修了生，(2) 大学教育，(3) 研究活動，(4) 教育・研究の成果の発表，(5) 大学が行う社会教育，(6) 大学施設の開放などを通して，社会的貢献活動を行っている。また，「地域に開かれた大学」として，新潟県及び近隣地域の活性化とイメージアップ及び教育・文化レベルの向上に直接的・間接的に貢献しようと取り組んできた。このように，地域住民の教養を高め，地域文化の向上に資することは，豊富な教育・研究機能を持つ教員養成大学（新教育大学）として，本学が果たすべき当然の社会的使命である。

【教育サービス面における社会貢献のとらえ方】

本学は，学校を原点として，学校教育現場が抱える課題を見出し，発展的に解決できる研究力・実践力を具えた教員の養成を目指している。それを達成するためには，地域社会と密接な関係を持ち，教官のみならず大学院学生，学部学生が一丸となって地域社会の要請に応え，教育に関わる課題に積極的に取り組むという教育サービス面における社会貢献活動は，教員養成にとって不可欠なものであり，最も重要な活動の一つである。

一方，充実した教授陣と施設を備えた教員養成大学（新教育大学）として，本学は様々な教育サービスを通じて，広く全国及び地域の学校教育の活性化と現職教員の資質向上に貢献する責務を有している。

近年，大学が生涯学習の場として重要視され，教育・研究成果の社会的還元と貢献がより一層求められている。本学は，以上のような認識と使命感の下に，以下に示した様々な教育サービス面における社会的貢献活動を行っている。

【具体的な教育サービスの活動】

1　正規課程学生以外の修学制度

1）科目等履修生制度，2）特別聴講学生制度，3）特別研究学生制度，4）研究生制度，5）私学研修員，専修学校研修員，公立高等専門学校研修員及び公立大学研修員の受入れ制度

2　資格授与関係の講習会の開催

1）学校図書館司書教諭講習，2）新潟県教育職員免許法認定講習

3　公開講座・セミナー等の開催

1）文化講演会，2）公開講座，3）生涯大学システム「大学等連携講座」，4）いきいき県民カレッジへの協力，5）学校教育研究センター「公開講演会」，6）同センター「客員研究員講演会」，7）同センター「マルチメディアセミナー」，8）同センター「衛星通信を活用した研修講座」，9）同センター「ビデオ教材制作専門技術講習会」，10）附属実技教育研究指導センター「研究セミナー」，11）附属障害児教育実践センター「研修セミナー」，12）青年男女共同参画セミナー，13）附属学校における初任者研修等に係る宿泊研修

4　教育相談の実施

1）附属障害児教育実践センター「教育相談」，2）心理教育相談室

5　地域への教育支援と連携

1）附属障害児教育実践センター「地域への教育指導・助言」，2）青少年のための科学の祭典 2000 新潟大会への協力，3）附属学校園における研究協議会の開催，4）都道府県教育委員会との情報交換会

6　施設・設備の開放

1）上越教育大学フレンドシップ事業，2）学校教育研究センター「施設・設備の利用サービス」，3）附属図書館の開放，4）体育施設，講堂及び講義室等の開放

## 2．教育サービス面における社会貢献に関する目的及び目標

(1) 目　的

【基本的な方針】

本学は，「1　教育サービス面における社会貢献に関するとらえ方」に基づき，本学の充実した教授陣と施設，それを基にした豊富な教育・研究機能を十分に活用して，教育サービスを提供し，社会的に貢献する。

1）全国及び地域の学校教育の活性化と現職教員の資質向上に資する教育サービスを提供する。

2）地域の活性化とイメージアップ及び教育・文化レベルの向上に資する教育サービスを提供する。

【提供する内容及び方法の基本的な性格】

以上の基本方針に沿って，以下の内容を持った機会を教育サービスとして提供する。

1）正規課程学生以外の修学制度
2）資格授与関係の講習会の開催
3）現職教員を対象とした専門講座・セミナー等の開催
4）地域住民を対象とした文化講演会・公開講座等の開催
5）教育相談の実施
6）地域への教育支援と連携
7）施設・設備の開放

これらの内容を以下の方法によって提供する。

1）正規課程学生のための学習機会を，正規課程学生以外の者に対して広く提供する。
2）事業主体の要請に応えて，学校教育に関する資格取得を目的とした講習会の開催に協力する。
3）現職教員を対象とした各種講座やセミナーを開催する。
4）教官及び著名人による文化講演会・講習会・各種公開講座等を開催する。
5）教育相談活動を通して，就学前療育及び教育に関する専門的知識，技術及び支援を提供する。
6）地域の教育に関する行政機関や学校教育現場との連携・協力を通して，学校教育の改善・向上に資する資料や支援を提供する。
7）教官及び大学院・学部学生等の人材を，学校教育機関や地域の企画事業に派遣する。
8）附属施設・センターの諸活動と特色を生かした教育サービス事業を行う。
9）本学の施設・設備を地域住民に開放する。

【活動を通じて達成しようとする基本的な成果】

以上の活動を通じて達成しようとしている基本的な成果として，以下のことが期待される。

1）科目等履修生の単位取得の機会提供
2）現職教員の資質・能力の向上
3）地域の学校教育及び家庭教育への支援体制の構築及び充実
4）地域住民の生涯学習ニーズの充足
5）地域の教育・文化の活性化とレベルの向上
6）地域住民の大学への興味・関心の増進

**(2) 目　標**

上記の「目的」を達成するために以下の目標を設定する。

1　正規課程学生以外の修学制度
- 現職教員及び社会人等に対して，パートタイム形式で大学教育を受ける機会を拡充する。
- 履修制度を整備し，科目等履修生の単位取得を拡充する。
- 教育委員会と連携・協力し，現職教員に対して大学院レベルの専門的研究・教育の機会を提供する。
- 大学間の交流と協力を促進し，教育課程の内容を充実する。
- 他の機関に所属する者に修学研究の機会を提供する。

2　資格授与関係の講習会の開催
- 文部科学省及び教育委員会と連携・協力して資格認定講習を実施し，現職教員の資質を向上させる。

3　現職教員を対象とした専門講座・セミナー等の開催
- 現職教員に，最新の教育・研究等の成果等に関する情報を提供する。
- 外部の優れた実績を持つ教育関係の研究者・実践者による講座・セミナーを開催する。
- 現職教員に，本学の施設・設備を利用し，最新のメディア・機器を生かした教育実践に関する専門的知識・技術の習得機会を提供する。
- 音楽，美術，体育及び言語系教育に関わる専門的講座・セミナーを現職教員にも開放して，実技教育能力の向上に資する。
- 文部科学省及び教育委員会と連携・協力し，現職教員の資質向上のための研修プログラムを実施する。

4　地域住民を対象とした文化講演会・公開講座等の開催
- 文化講演会，公開講座を通して地域住民の学習意欲を高め，生涯学習の一層の振興を図る。
- 上越市と連携し，より効果的に広報を行い，地域住民の興味・関心に応える文化講演会の開催を図る。
- 市町村との連携・協力により，専門的な講座を開設する。
- 地域の青年男女ペアを対象として，男女共同参画を支援する。

5　教育相談の実施
- 発達及び心理教育相談を充実することで，就学前療育や学校関係者への支援と実践的な教育及び臨床的研究の推進に寄与する。

6　地域への教育支援と連携
- 市町村の就学前療育の運営体制の構築・改善に支援・協力し，地域療育の向上及び充実に寄与する。
- 今日的な課題を反映した研究主題を設定した附属学校園における研究協議会の開催を通して，地域の教育実践の向上に寄与する。
- 教員の養成，採用，研修について教育委員会と密接な連携・交流を図り，教員の資質の向上に寄与する。

7　施設・設備の開放
- 大学施設・設備を有意義に活用した事業を通して，子どもたちが学生と触れ合うことで地域住民の大学への興味・関心を増進する。
- 大学の施設・設備の利用サービスを促進する。
- 大学の施設・設備の開放制度を整備・充実し，教育研究の進展，学術文化の向上に寄与する。

## 3．教育サービス面における社会貢献に関する取組の現状

(1) 正規課程学生以外の修学制度

社会人，現職教員の内地留学，他大学の学生，他機関研修生等，多様な正規課程学生以外の修学ニーズに応えるために，1）科目等履修生制度（学部・大学院），2）特別聴講学生制度（学部・大学院），3）特別研究学生制度（大学院），4）研究生制度（大学院），5）私学研修員，専修学校研修員，公立高等専門学校研修員及び公立大学研修員の受入れ制度を整備している。

(2) 資格授与関係の講習会の開催

文部科学省及び新潟県教育委員会の依頼を受け，1）学校図書館司書教諭講習，2)新潟県教育職員免許法認定講習を開催している。

(3) 公開講座・セミナー等の開催

主として地域住民を対象に，近隣市町村と連携・協力して，1）文化講演会，2）公開講座，3）生涯大学システム「大学等連携講座」を開催し，4)「いきいき県民カレッジ」として登録されている。

学校教育研究センターでは，主として現職教員を対象に，5）著名な研究者を招聘した「公開講演会」，6）客員研究員による研究の内容・方法・成果等を情報提供する客員研究員講演会，7）マルチメディア教材制作に関するマルチメディアセミナー，8）衛星通信を活用した研修講座，9）ビデオ教材制作専門技術講習会を開催している。

附属実技教育研究指導センターでは，10）音楽，美術，体育及び言語系教育に関わる実技教育についての研究セミナーを市民にも開放して実施している。

附属障害児教育実践センターでは，11）障害児教育関係者に対して，障害児教育に関わる著名な教育・福祉関係の実践家や研究者を招聘した研修セミナーを開催している。

また，12）地域の青年男女ペアを対象とした青年男女共同参画セミナー，13）文部科学省から依頼された国立大学附属学校における初任者研修等に係る宿泊研修を実施している。

(4) 教育相談の実施

1）附属障害児教育実践センターで障害児を持つ親や教師等を対象とした教育相談を実施し，また，2）健常児の心理・行動面に関わる相談を行う心理教育相談室を開設している。

(5) 地域への教育支援と連携

1）附属障害児教育実践センターでの市町村の療育運営に対する教育指導・助言，2）青少年のための科学の祭典2000新潟大会への協力，3）附属学校園における研究協議会の開催，4）都道府県教育委員会との教員養成，人的交流，教員研修等の情報交換会を実施している。

(6) 施設・設備の開放

1）大学等地域開放特別事業として小学生を対象とした上越教育大学フレンドシップ事業「学びのひろば」の開催，2）学校教育研究センターの施設・設備の利用（文献資料の閲覧等）と開放，3）附属図書館の市民への開放，教育研究者への学外貸出，公共図書館等と連携した資料・情報の提供，4）公共団体及び教育・研究団体等を対象として体育施設，講堂及び講義室等の開放を実施している。

# Ⅲ　評価結果

## 1．目的及び目標を達成するための取組

上越教育大学においては，「教育サービス面における社会貢献」に関する取組として，科目等履修生・特別聴講学生・特別研究学生・研究生・私学研修員・専修学校研修員・公立高等専門学校研修員・公立大学研修員の受入れ，学校図書館司書教諭講習，教育職員免許法認定講習，公開講座・セミナー，教育相談，附属障害児教育実践センターでの市町村の療育運営に対する教育指導・助言，附属学校園における研究協議会，フレンドシップ事業，附属図書館や体育施設等の開放などが行われている。

ここでは，これらの取組を「目的及び目標を達成するための取組」として評価し，特記すべき点を「特に優れた点及び改善点等」として示し，目的及び目標の達成への貢献の程度を「貢献の状況（水準）」として示している。

### ◇特に優れた点及び改善点等

正規課程学生以外の研修制度として，「開かれた大学」という上越教育大学の特徴を生かし，社会人（主婦を含む），内地留学の現職教員，他大学の学生，他機関研修員等の多様な修学ニーズに応えるために，科目等履修生・特別聴講学生・特別研究学生・研究生・私学研修員・専修学校研修員・公立高等専門学校研修員・公立大学研修員を受け入れている。中でも，科目等履修生は開講されている講義・演習・実習等はすべて履修することができ，研究生に関しては全教官が受け入れることになっており，受入れ態勢が整っている点は，学習機会を正規課程学生以外の者に対し広く提供する取組として特色がある。

公開講座・セミナー等は，芸術分野や情報分野を中心とした内容の公開講座だけでなく，主に現職教員を対象とした研修の機会としての公開講演会（上手な叱り方・ほめ方等）やマルチメディアセミナー，さらに障害児教育に関する研究・実践活動を紹介するセミナー等を実施しており，教養番組から一般市民とともに参加する講座，教育相談で得られた臨床的経験・研究成果を内容とする教育系大学ならではの実践的なセミナーまでバラエティーに富んだ内容となっているだけでなく，衛星通信を活用するなど実施方法にも工夫が凝らされており，優れた取組である。

教育相談は，附属障害児教育実践センターにおいて障害児を持つ親や教師を対象とした教育相談を実施するとともに健常児の心理・行動面に関わる相談を行う心理教育相談室を開設し，地域・社会のニーズに応じた相談を受けている。

この取組は，教育関係講座と一体的に運営され，教育相談で獲得された知見や経験が，障害児教育講座や心理臨床講座に生かされるなど，臨床的体験・研究と講座を通じての教育とが有機的に繋がりあっている点で優れている。

附属学校園における研究協議会は，地域の教育実践の向上に寄与することを目標としたものであり，附属学校園という大学の持つ資源を活用し，大学ならではのリーダーシップを発揮して行っている点で特色がある。

また，運営にあたり，附属学校間の連携を図り，学部教官や公立学校の教員が参加する仕組みが整えられているだけでなく，その成果を研究会紀要等により公表している点で優れている。

施設・設備の開放については，学校教育研究センターの施設の利用と開放，附属図書館の市民への開放，教育研究者への学外貸出，公共図書館等と連携した資料・情報の提供，公共団体及び教育・研究団体等を対象とした体育施設，講堂及び講義室等の開放を実施しており，大学の持つ物的資源の地域への提供が幅広く行われている点は優れている。

青年男女共同参画セミナーは，平成９年度に文部科学省（当時文部省）の委託事業として実施した取組であるが，それが契機となり，当時の受講者を中心にグループが結成され，そのグループにより平成 10，11 年度と上越市と共催して継続実施された。平成 12 年度からは，事業実施にあたり上越教育大学の教官，学生が参画し，大学の後援事業となっている。この取組は，大学が実施した取組が契機となり地域に根付いたという点で，特色がある。

### ◇貢献の状況（水準）

取組は目的及び目標の達成に十分に貢献している。

## ２．目的及び目標の達成状況

ここでは，「１．目的及び目標を達成するための取組」の冒頭に掲げた取組の達成状況を評価し，特記すべき点を「特に優れた点及び改善点等」として示し，目的及び目標の達成状況の程度を「達成の状況（水準）」として示している。

**◇特に優れた点及び改善点等**

教育相談は，障害種別に見ると肢体不自由・重症心身，精神遅滞，難聴・聾，言語障害，自閉症・情緒障害，学習障害，聴覚障害等の多岐の分野にわたっているだけでなく，年間相談件数も，初期相談，定期相談及び継続指導の中で継続指導が最も高い実績を示し，平成８年から平成 12 年まで 60 件から 80 件程度で安定していることから，地域に定着しており，成果を上げている。

公開講座の受講者数は，ほぼ定員を充たす受講者が得られている講座もあるが，定員の半数を割り込んでいる講座が各年度に実施された講座の約 3 ～ 4 割程度見られ，改善の余地もある。

附属図書館の学外利用者数は，平成８年度 466 人，平成９年度 480 人，平成 10 年度 620 人，平成 11 年度 2，647 人，平成 12 年度 4，071 人と年々増加しており，また，学外利用者への貸出冊数も，平成８年度 203 冊，平成９年度 663 冊，平成 10 年度 576 冊，平成 11 年度 611 冊，平成 12 年度 748 冊と安定していることから，図書館開放は地域に定着しており，成果を上げている。

**◇達成の状況（水準）**

目的及び目標がおおむね達成されているが，改善の余地もある。

## ３．改善のためのシステム

ここでは，当該大学の「教育サービス面における社会貢献」に関する改善に向けた取組を，「改善のためのシステム」として評価し，特記すべき点を「特に優れた点及び改善点等」として示し，システムの機能の程度を「機能の状況（水準）」として示している。

**◇特に優れた点及び改善点等**

附属学校園において実施されている研究協議会は，協議会終了後にアンケート調査を実施し，学外者の意見や問題点等の把握を行い，その結果を自己評価することにより改善に結びつけており，把握した問題点や学外者の意見等を改善に結びつけるシステムとして優れている。

公開講座や文化講演会では，アンケート調査により問題点やニーズの把握を実施しているほか，公開講座委員会において問題点等を検討し，その後，全学的な委員会である自己評価等委員会に報告しており，問題点を改善に結びつけるシステムとして優れている。

教育サービスとして行われている活動全般について，公開講座や文化講演会，附属学校園の研究協議会以外の活動では社会のニーズや参加者等からの意見を把握する取組が実施されていないため，学外者の意見（社会のニーズ，サービス享受者の意見）等を把握するシステムの整備という点では改善の余地がある。

**◇機能の状況（水準）**

改善のためのシステムがおおむね機能しているが，改善の余地もある。

# Ⅳ　評価結果の概要

## １．目的及び目標を達成するための取組

**◇特に優れた点及び改善点等**

正規課程学生以外の受入れ制度は，科目等履修生は開講されているすべての講義等を履修することができ，研究生は全教官が受け入れることになっているなど，受入れ態勢が整っている点は，学習機会を正規課程以外の者に対し広く提供するための取組として特色がある。

公開講座・セミナー等は，芸術分野・情報分野を中心に講座の内容が多様性に富むばかりでなく，衛星通信を活用するなど実施方法にも工夫が凝らされている点で，優れている。

教育相談は，教育関係講座と一体的に運営され，教育相談で獲得された知見や経験が，障害児教育講座や心理臨床講座に生かされるなど，臨床的体験・研究と講座を通じての教育とが有機的に繋がりあっているという点で優れている。

附属学校園における研究協議会は，附属学校園という大学の資源を活用した，大学ならではのリーダーシップを発揮して行っている点で特色がある。また，その運営も，附属校や公立の教諭が参加する仕組みが整えられているだけでなく，成果を情報開示している点で優れている。

施設・設備の開放については，大学の持つ物的資源の地域への幅広い提供が行われている点は優れている。

青年男女共同参画セミナーは，それが契機となり男女共同参画に関する活動が地域に根付いたという点で特色がある。

**◇貢献の状況（水準）**

取組は目的及び目標の達成に十分に貢献している。

## ２．目的及び目標の達成状況

**◇特に優れた点及び改善点等**

教育相談は，相談件数は安定しており，取組は地域に定着しており，成果を上げている。

公開講座の受講者数は，ほぼ定員を充たしている講座もあるが，定員数を割り込む講座も見られる点では改善の余地もある。

附属図書館の開放は，学外利用者数が年々増加し，貸出冊数も安定していることから，地域に定着しており，成果を上げている。

**◇達成の状況（水準）**

目的及び目標がおおむね達成されているが，改善の余地もある。

## ３．改善のためのシステム

**◇特に優れた点及び改善点等**

附属学校園における研究協議会は，把握した問題点や学外者の意見等を改善に結びつけるシステムとして優れている。

公開講座や文化講演会では，問題点やニーズを把握し検討しており，問題点を改善に結びつけるシステムとして優れている。

教育サービスとして行われている活動全般について，学外者の意見（社会のニーズ，サービス享受者の意見）等を把握するシステムの整備という点では改善の余地もある。

**◇機能の状況（水準）**

改善のためのシステムがおおむね機能しているが，改善の余地もある。

# 「教養教育」評価報告書

## （平成１２年度着手継続分　全学テーマ別評価）

上　越　教　育　大　学

平成１５年３月

大学評価・学位授与機構

# ◇ 大学評価・学位授与機構が行う大学評価

## ○大学評価・学位授与機構が行う大学評価について

### 1　評価の目的

大学評価・学位授与機構（以下「機構」）が実施する評価は，大学及び大学共同利用機関（以下「大学等」）が競争的環境の中で個性が輝く機関として一層発展するよう，大学等の教育研究活動等の状況や成果を多面的に評価することにより，①その教育研究活動等の改善に役立てるとともに，②評価結果を社会に公表することにより，公共的機関としての大学等の諸活動について，広く国民の理解と支持が得られるよう支援・促進していくことを目的としている。

### 2　評価の区分

機構の実施する評価は，平成 14 年度中の着手までを試行的実施期間としており，今回報告する平成 13 年度着手分については，以下の 3 区分で，記載のテーマ及び分野で実施した。

①全学テーマ別評価（教養教育（平成 12 年度着手継続分），研究活動面における社会との連携及び協力）
②分野別教育評価（法学系，教育学系，工学系）
③分野別研究評価（法学系，教育学系，工学系）

### 3　目的及び目標に即した評価

機構の実施する評価は，大学等の個性や特色が十二分に発揮できるよう，当該大学等が有する目的及び目標に即して行うことを基本原則としている。そのため，大学等の設置の趣旨，歴史や伝統，人的・物的条件，地理的条件，将来計画などを考慮して，明確かつ具体的に目的及び目標が整理されることを前提とした。

## ○全学テーマ別評価「教養教育」について

### 1　評価の対象

本テーマでは，学部段階の教養教育（大学設置基準に示されている「幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い，豊かな人間性を涵養する」ための教育）について，各大学が整理した教養教育の目的及び目標を実現するための取組状況及びその達成状況等について，評価を実施した。

この定義から，本評価では一般教育的内容を全部又は一部含む教育を対象とし，教養学部等における専門教育は取り扱わなかった。

対象機関は，設置者（文部科学省）から要請のあった，国立大学（大学院のみを置く大学及び短期大学を除く 95 大学）とした。

### 2　評価の内容・方法

評価は，大学の現在の活動状況について，過去 5 年間の状況の分析を通じて，次の 4 つの評価項目により実施した。

①実施体制，②教育課程の編成，③教育方法，
④教育の効果

### 3　評価のプロセス

(1)　評価の準備のため，各大学の目的及び目標，取組状況等を調査し，実状調査報告書として平成 13 年 9 月に公表した。
(2)　大学においては，機構の示す要項に基づき自己評価を行い，自己評価書（根拠となる資料・データを含む。）を平成 14 年 7 月末に機構へ提出した。
(3)　機構においては，専門委員会の下に，専門委員会委員及び評価員による評価チームを編成し，自己評価書の書面調査及びヒアリングの結果を踏まえて評価を行い，その結果を専門委員会で取りまとめ，大学評価委員会で平成 15 年 1 月に評価結果を決定した。
(4)　機構は，評価結果に対する対象大学の意見の申立ての手続を行った後，最終的に大学評価委員会において平成 15 年 3 月に評価結果を確定した。

### 4　本報告書の内容

**「Ⅰ　対象機関の概要」，「Ⅱ　教養教育に関するとらえ方」及び「Ⅲ　教養教育に関する目的及び目標」**は，当該大学から提出された自己評価書から転載している。

**「Ⅳ　評価項目ごとの評価結果」**は，評価項目ごとに，「目的及び目標の達成への貢献の状況」（「目的及び目標で意図した実績や効果の状況」）として，活動等の状況と判断根拠・理由等を記述し，当該評価項目全体の水準を以下の 5 種類の「水準を分かりやすく示す記述」を用いて示している。

・十分に貢献している。
・おおむね貢献しているが，改善の余地もある。
・かなり貢献しているが，改善の必要がある。
・ある程度貢献しているが，改善の必要が相当にある。
・貢献しておらず，大幅な改善の必要がある。

（教育の効果の評価項目では，「貢献して」を「挙がって」と，「余地もある」を「余地がある」と記述している。）

なお，これらの水準は，当該大学の設定した目的及び目標に対するものであり，大学間で相対比較することは意味を持たない。

また，評価項目全体から見て特に重要な点を，「特に優れた点及び改善を要する点等」として記述している。

**「Ⅴ　評価結果の概要」**は，評価に用いた観点及び当該評価項目全体の水準等を示している。

**「Ⅵ　意見の申立て及びその対応」**は，評価結果に対する意見の申立てがあった大学について，その内容とそれへの対応を併せて示している。

**「特記事項」**は，各大学において，自己評価を実施した結果を踏まえて特記する事項がある場合に任意記述を求めたものであり，当該大学から提出された自己評価書から転載している。

### 5　本報告書の公表

本報告書は，大学及びその設置者に提供するとともに，広く社会に公表している。

## Ⅰ　対象機関の概要

※　大学から提出された自己評価書から転載

**1　機関名**：上越教育大学

**2　所在地**：新潟県上越市

**3　学部・研究科構成**

（学　部）学校教育学部

（研究科）大学院学校教育研究科

**4　学生総数及び教員総数**

（1）学生総数 1,224 名（うち学部学生数 715 名）

（2）教員総数　214 名（附属教員を含む。）

**5　特徴**

上越教育大学は，昭和 53 年 10 月に開学した新構想の教員養成系大学であり，主に初等中等教育諸学校教員に研究・研鑽の機会を提供する大学院と，初等教育教員の養成を行う学部を備えた「教員に開かれた大学院を中心とした新しい大学」として設立された。大学院学校教育研究科（修士課程）と学校教育学部初等教育教員養成課程で構成され，大学院の入学定員は 300 人，学校教育学部の入学定員は，平成 11 年度以前は 200 人，平成 12 年度以降は 160 人である。学校教育学部では，初等教育教員に必要とされる資質能力を培い，実践的な指導力を育成するために次の専修・コースを設けている。

○学校教育専修：学習臨床コース，発達臨床コース

○幼児教育専修

○教科・領域教育専修：言語系コース，社会系コース，自然系コース，芸術系コース，生活・健康系コース

平成 13 年度までの学部卒業生は 3,569 人を数え，その多くは学校教育の場で活躍している。特に，ここ 10 年の教員採用率は，常に全国でトップクラスを占めている。

本学の教員組織は，講座等で構成される 5 部組織であり，各部を構成する主な講座は以下のようである。

第一部：学習臨床講座，幼児教育講座，学校教育総合研究センター　第二部：生徒指導総合講座，心理臨床講座，障害児教育講座，附属障害児教育実践センター　第三部：言語系教育講座，社会系教育講座，附属実技教育研究指導センター（言語系教育分野）　第四部：自然系教育講座，生活・健康系教育講座，保健管理センター，附属実技教育研究指導センター（体育教育分野）　第五部：芸術系教育講座，附属実技教育研究指導センター（音楽教育分野及び美術教育分野）

各講座は大講座制をとり，関係専門分野の協力体制を確保し，弾力的な運営を図っている。

## Ⅱ　教養教育に関するとらえ方

※　大学から提出された自己評価書から転載

本学は，学則第 1 条で，「学校教育に係る諸科学の研究を推進するとともに，教育者としての使命感と教育愛に支えられた豊かな教養，高い学識及び優れた技能を合わせ備えた有為の教育者を養成すること」と，また第 23 条で，「学校教育学部は，学校教育に関する専門の学芸を教授研究し，広く豊かな知識を授けるとともに，教育実践の場における優れた指導能力を備えた初等教育教員を養成することを目的とする」と目的を明示しているように，創設当初から教養教育を「教育者としての使命感と教育愛に支えられた豊かな教養を培う教育」としてとらえ，専門教育とともに教育課程の柱として位置付けてきた。本来，豊かな教養と高い専門性は，密接な関連をもって身に付けるべき教員としての資質能力であり，このためには，教養教育と専門教育とを切り離して展開すべきではない。このような方針の下，本学では教養教育に対して以下のようなとらえ方をしている。

・教養教育は後に学ぶ専門教育と切り離された科目のみではなく，専門教育と有機的に結合した科目や学際的科目も積極的に組み込むべきとしてとらえている。

・専門教育と直接的に結合していない科目においても，教養教育と専門教育との系統性を重視した，いわゆる積み上げ方式的な教育課程を編成すべきとしてとらえている。

本学の教養教育に関するとらえ方は，専門教育と対置せず，専門教育と有機的連携を図るというものである。

情報化，国際化の流れの中で現代社会は急速に変化し，また学校教育の場では，いじめ，不登校，学力低下といった教育問題が顕在化してきている。本学は，こうした現状を踏まえ，今日的諸問題に立ち向かうことのできる，より質の高い教員の養成を目指して，平成 9 年度と平成 12 年度に教育課程全体の大幅な改革を行った。教養教育については上記のとらえ方を基に改革を行い，

(1) 平成 9 年度には，情報化，国際化といった社会の変化に対応できる能力や，学校教育の面から生涯学習社会に寄与できる教員としての資質能力の育成を，

(2) 平成 12 年度には，教育の原点である人間理解や，教育的情報活用能力と表現能力の育成を，

それぞれ教養教育の柱としてとらえた。これらはいずれも，教養教育を重視し，教養教育と専門教育の系統性と有機的連携も図ったものである。

# Ⅲ　教養教育に関する目的及び目標

※　大学から提出された自己評価書から転載

## 1　目的

教員は子どもたちの人間形成に大きな影響を及ぼすことから，優れた資質能力を備えたひとりの社会人でもあるという認識の下に，学則で掲げた目的のため全学的に取り組み，教養教育をそのための重要な柱として位置付けている。教養教育の基本的な目的は一貫して変わらないが，社会情勢やそれに基づく学校教育の場からの要請は時とともに変化し，それに伴って教養教育における具体的な課題も変化している。ここでは一貫して変わらない本学における教養教育の柱に加え，新たな課題に対応して平成12年度以降に加わった項目も併せて記述する。

（1）基本的な方針

教員として相応しい思考力と判断力，さらに情報化，国際化の進展や生涯学習社会等，多様に変化する社会情勢にも柔軟に対応できる資質能力を持った初等教育教員の基礎を，全学的な協力体制の下で構築することが，教養教育の基本的な方針である。さらに，従来に増して子どもたちを共感的に理解する観点が重要になってきていることから，平成 12 年度以降には人間に対する理解を深め，子どもたちの学習活動を総合的に支援できる基礎力を構築することが加わった。

（2）提供する教養教育の内容

教養教育によって学生が教職へのやりがいを認識し，その後の専門教育の積極的な学習につなげ，教員として必要な総合力の基礎を広く学ぶことができる内容を，適切な教育課程の下で提供することを目的としている。幅広く深い教養は思考力と判断力を育むという立場から，広い視野，柔軟な対応力，豊かな人間性と思いやりの心を持つ，人間としての基礎を培うことを目指している。

（3）提供する方法

学生が興味を持って積極的に学習できるように，授業形態や学習環境等にも工夫を凝らすと同時に，成績評価法にも留意する。

（4）達成しようとしている基本的な成果

初等教育教員を目指すという自覚が高まり，学習意欲の育成と同時に教員としての基礎的・一般的教養が身に付く。また，教員として必要な思考力と判断力，人間性等の育成も目指している基本的な成果である。

## 2　目標

（1）基本的な方針の達成に関する目標

・教養教育の方針を達成するために，原則として全学的な協力体制の下，必要な実施組織を構成する。
・必要事項の周知・公表を図ると同時に，改善のために耳を傾け，問題点があれば積極的に改善に取り組む。

（2）提供する教養教育の内容に関する目標

・教職への情熱と自覚を高め，大学での学習に期待と意欲を持たせる教養教育科目を開設する。
・人文，社会，自然，情報など幅広い領域での科目の開設と，それらを通じての思考力と判断力を育成する。
・幅広い国際的視野を育成する科目，及び生涯学習社会も見据えた健康やスポーツの体験的科目を導入する。
・社会の多様な問題を積極的に認識する態度を養う学際的科目や，現代の社会的課題を扱う科目を開設する。
・野外活動，ボランティア活動等の体験・実践を通して，豊かな人間性を育む科目を開設する。
・人間の心の理解を中心に，人間形成の過程を幅広く理解する科目を開設する。
・子どもたちが自己を表現する方法や，他者を認識する過程を，体験的に理解する科目を導入する。
・学生の学力の多様化に対応するため，教養的内容と専門的内容を併せ持った科目を導入する。
・以上の科目を適切な教育課程の編成の下で提供する。

（3）提供する方法に関する目標

・授業形態は，可能な限り受講学生数に配慮すると同時に，学生間の対話，意見発表等も積極的に導入する。
・学習環境の充実を図ると同時に，内容の提供の場として，野外や学外施設等も利用し，体験学習や実習等の授業方法も積極的に導入する。
・成績評価については，評価基準の明確化，評価の一貫性や厳格性に特に留意する。

（4）達成しようとしている基本的な成果に関する目標

・初等教育教員を目指す者としての自覚が高まり，自主的に学習し，自ら課題を解決する力への端緒となる。
・基礎的・一般的教養が身に付く。中でも，異文化・国際社会や健康・スポーツ等に対する理解が深まる。
・社会の要請を積極的に把握する態度が養われる。
・体験等を通じて未知の事柄を知る喜びを確認し，教職の意義とすばらしさを認識できる。
・多面的な視点からの人間理解が深まり，また，自己を表現する多様な方法に関する理解が深まる。

# Ⅳ　評価項目ごとの評価結果

## 1．実施体制

### ◇目的及び目標の達成への貢献の状況

#### 教養教育の実施組織に関する状況について

教育課程の編成するための組織としては，「企画委員会」と「教務委員会」が全体的な運営を行い，前者は，運営協議会の下に置かれ，学長を委員長とし，教育課程の編成方針や編成方法等を審議し，後者は，教授会及び研究科委員会の下に置かれ，第一部から第五部の教授等から選出された教員で構成され，教務に関する事項を審議する。授業科目の新設等は，各講座等から教務委員会へ提案する。実際の委員会の開催実績もあり，相応である。

教養教育を担当する教員体制としては，全学の教員が教養教育に関する「全学協力体制」を取る。また，授業科目の内容に応じた教員組織（クラス担当教員組織，講座・分野を越えた教員組織等）が編成され，それぞれの科目を担当している。実際の全学出動実績も確認できる。非常勤講師の比率は少なく，ほとんどの科目を専任教員が担当している。教官人事に当たっては，教育研究業績書に「教育上の能力に関する事項」の欄を設けているが，教養教育に関しての特段の配慮はなされていない。これらのことから相応である。

教養教育の実施を補助，支援する体制としては，ティーチング・アシスタント（TA）制度を運用，教養教育関係に優先的に配置している。また，定期試験監督者支援制度があり，TA やTA以外のスタッフも監督者として支援する体制をとっている。事務体制も相応である。これらのことから，相応である。

教養教育を検討するための組織としては，「企画委員会」と「教務委員会」がある。前者は教育のあり方に関する基本方針及び教育課程の大綱（枠組み）の検討・審議を行い，後者は授業科目全体の検討を行う。また，「改革構想特別委員会」では，教養教育のあり方についての抜本的な改革を行う。これらのことから，相応である。

#### 目的及び目標の周知・公表に関する状況について

目的及び目標の趣旨の教職員，学生等における周知としては，『概要』の配布とともに，全教職員が一堂に会する「合同部教員会議」で直接周知を図っている。学生には『履修の手引き』，『授業科目一覧』を配布し，オリエンテーションを行っている。新入生には合宿研修で説明する。これらのことから，相応である。

目的及び目標の趣旨の学外者への公表としては，『概要』，『案内』の他に，パンフレットを全国の関係機関に配布，毎年大学説明会を実施している。ウェブサイトにも掲載しており，アクセス数も少なくない。これらのことから，相応である。

#### 教養教育の改善のための取組状況について

学生による授業評価としては，「授業改善のためのアンケート調査」と「カリキュラム改善のためのアンケート調査」を実施している。前者は個々の授業評価について，前期・後期2回それぞれの終了時に実施され，後者は後期終了時に実施，対象を学部4年次学生と大学院2年次学生とする。何れもその集計は一覧の資料として全教員に配布され，86%の教員が自己評価レポートを提出している。授業方法の改善も見られ，相応である。

ファカルティ・ディベロップメント（FD）としては，「大学評価委員会」の下に「FD 推進専門部会」を設置している。同部会の下の「FD 事業実施検討 WG」と「授業評価等実施検討WG」で検討を行い，講演会は年2回実施している。新任の教職員には「新任職員研修会」を実施している。FD への参加人数は多いとはいえないが，学生の授業評価に対する教員の自己評価レポートなどと対応して，FD の改善に結びつけており，相応である。

取組状況や問題点を把握するシステムとしては，「企画委員会」，「教務委員会」が常設委員会として設置されており，役割を担っている。把握する方法として，学生による授業評価，卒業生へのアンケート調査，「意見箱」などがある。教養教育に関する組織として，教養教育研究会もある。また，「運営諮問会議」で学外から評価を受ける。これらのことから，相応である。

問題点を改善に結びつけるシステムとしては，全学的なことは「企画委員会」及び「教務委員会」が担い，特定の科目を検討する委員会も常設されている。抜本的な改革は「改革構想特別委員会」が担い，教養教育も含めたカリキュラム改革を実行するために，「教育システム改革推進部会」の下に，「教育課程ワーキング・グループ」を置いて対応している。特別委員会やワーキング・グループが臨時に組織され，臨機応変に改善に結びつけるシステムとなっている。これらのことから，相応である。

#### 貢献の程度（水準）

これらの評価結果を総合的に判断すると，目的及び目標の達成におおむね貢献しているが，改善の余地もある。

### ◇特に優れた点及び改善を要する点等

前後期それぞれ終了時に授業改善のためのアンケート調査が実施され，その結果を一覧にして教員に配布し，教員から提出された自己評価レポートなどと対応し，授業方法改善の取組が行われていることは，特色ある取組である。

## 2．教育課程の編成

### ◇目的及び目標の達成への貢献の状況

#### 教育課程の編成に関する状況について

教育課程の編成の内容的な体系性として，教育課程のコアは，a「人間教育学関連科目」（人間教育学セミナー，実践的人間理解科目，基礎的人間形成科目），b「相互コミュニケーション科目」（情報，表現），c「ブリッジ科目」で構成されている。これは平成 12 年度の改革によるもので，(1)「人間教育関連科目」で，「人間教育学セミナー」は教育の役割や教職の意義について認識を深めるもの，更に今日的教育問題を多面的に読み取る能力を身に付ける科目である。「実践的人間理解科目」は教育活動の基礎的資質の構成要素として不可欠な人間性を実践的に学ぶ科目である。「基礎的人間形成科目」は学校と家庭における子どもたちの活動と理解の仕方と人間形成の仕組みを学ぶ科目である。(2)「相互コミュニケーション科目」で，「情報」は教員として必要とされるコンピュータ等の情報機器についての基礎的理論や操作方法を体験的に習得させる科目である。「表現」は児童・生徒の表現方法を共感的に理解するために，言語や芸術等の表現行為を体験を通して実践的に学ぶ科目である。(3)「ブリッジ科目」は教科に関する専門科目の履修を学生が既に身につけている知識のレベルに合わせ，更に教科を学ぶ動機づけとなる科目である。単位制度に関しては，国内外の大学との互換制度，実用検定などの単位認定があるが，実績はない。これらのことから，相応である。

教育課程の編成の実施形態（年次配当等）の体系性としては，1 年次は，3 つのコアの基礎的科目を履修する。（「人間教育学関連科目」のうち「人間教育学セミナー」，「実践的人間理解科目」，「相互コミュニケーション科目」，「ブリッジ科目」），2 年次は，それらの科目に加え，新たに「基礎的人間形成科目」を履修し，1 年次の基礎から発展的な科目を履修する。例えば，「実践的人間理解科目」の体験学習では，1 年次に全員必修の「体験学習」を履修して，様々な種類の基礎的体験学習を行い，2 年次の「ボランティア活動」に生かすようにカリキュラムが組まれており，「ブリッジ科目Ⅰ」では，学生の学力に対応する基礎教養科目を，「ブリッジ科目Ⅱ」では専門的内容を併せもった教養教育科目となっていることから，1 年次から 2 年次への体系性が取られている。これらのことから，相応である。

教養教育と専門教育の関係としては，1 年次は教養教育科目を学びながら，各自希望する専修・コースについて検討を行い，2 年次には各専修・コースに所属し，必修の「ブリッジ科目Ⅱ」によって教養教育と教科の専門教育を橋渡しする科目となる。これらのことから，相応である。

#### 授業科目の内容に関する状況について

授業科目と教育課程の一貫性としては，例えば「人間教育学セミナー」では，教育の役割や教職の意義について認識を深めるもの，更に今日的教育問題を多面的に読み取る能力を身に付けることを教育目標としているが，「人間セミナーⅠ」では，1 年次に教師の使命感を身に付けることを目的とした「人間教育学セミナー（教職の意義）」を，「人間セミナーⅡ」では，2 年次ではこれをさらに発展させるために種々の教育・社会的問題点について検討することを目的とした「総合演習（多文化社会論）」を学ぶこととなっているなど，授業科目の内容と教育課程との相応の一貫性が見られ，相応である。

#### 貢献の程度（水準）

これらの評価結果を総合的に判断すると，目的及び目標の達成におおむね貢献しているが，改善の余地もある。

### ◇特に優れた点及び改善を要する点等

「ブリッジ科目」は，少人数教育で，高校から大学への転換教育を図り，また専門教育への進展を図る特色ある取組である。

## 3．教育方法

### ◇目的及び目標の達成への貢献の状況

#### 授業形態及び学習指導法等に関する取組状況について

授業形態（講義，演習など）としては，講義方法は内容により，1学年一斉の160名の授業から，2分割の80名，4分割の40名，8分割の20名，16分割の10名の授業があり，さらに個別の授業まで工夫されている。「体験学習」として，陶芸やコンサートの準備，農作業，山での森林管理など10項目が組まれている。以上のように演習科目，実験・実習・実技科目が半数を占め，一部にはディベート方式も取り入れられ，体験学習にはTAが多用されており，相応である。

学力に即した対応としては，ブリッジ科目Ⅰ「理科」では，「物理」，「化学」，「地学」，「生物」の授業クラスに分けて行われており，実技科目のブリッジ科目Ⅰ「音楽」，「図画工作」，「スノースポーツ」などの科目では，附属実技教育研究センターにより，個人的にチェック体制をとっている。これらのことから相応である。

授業時間外の学習指導法としては，平成14年度からオフィス・アワーを実施している。オフィス・アワーの教員と時間帯はシラバスに記載されている。また，プレイスメント・プラザは主に就職に関するサービスを行う施設であるが，1・2年次も随時利用でき，教養教育の学習や教職に対する意欲の向上に役立てている。これらのことから相応である。

シラバスの内容と使用法としては，平成10年から冊子方式を廃し，インターネットを通じて作成，閲覧する方式をとる。シラバスの中には，授業概要・目標，履修条件・注意事項，授業計画・内容などが丁寧に示されたものがあるが，予習等の授業時間外学習についての指示は十分でなく，一部問題があるが相応である。

#### 学習環境（施設・設備等）に関する取組状況について

授業に必要な施設・設備としては，講義棟，第2講義棟，人文棟，美術棟，音楽棟，体育棟，グランド，プール，情報処理センター，学校教育総合研究センター及び「教育実地研究Ⅰ（観察・参加）」における小・中学校，幼稚園の協力校園や野外施設等が用いられる。相応の整備状況，利用状況であり，相応である。

自主学習のための施設・設備としては，図書館の開館時間は，月曜日から金曜日は9時から22時まで，土曜日，期末試験及び教育実習期間中は日曜・祝日開館（11時から17時）としている。情報処理センターは，平日は20時まで開館している。教育情報訓練室には約70台のコンピュータが設置され学生は自主学習に利用できる。約80台のピアノを揃えた個人練習室，第一造形実習室，体育館，マットや一輪車などの運動器具を備えたトレーニング室，陸上競技場，テニスコート，柔・剣道場，ダンス室，プールなど，学生の自主学習に役立っている。相応の整備状況，図書館の利用状況であり，相応である。

学習に必要な図書，資料としては，附属図書館の蔵書数は平成13年度末で約27万冊。基本学術研究図書，学生用図書，雑誌等バックナンバー，シラバス掲載参考書，学生リクエスト図書を中心に収書。年間開館日数は約280日，年間入館者総数は約80,000名。平成13年度からは電子図書館的機能として，Web画面上からの図書の借り受けなどILL（図書館相互利用）の各種申込みサービスや各種電子ジャーナルへの接続を開始して，教室外での予習・復習・自主的学習のための環境の整備に取り組んでいる。図書・資料の充実と学生の活用の便を図っていることを，利用状況データは示しており，相応である。

教室で各35台を設置。平成14年度には新機種に更新予定である。一般講義室の床下に情報・電気関係配線等を設け，Windowsノートパソコン11台を配置したインテリジェントルームを設け，教養教育にも利用している。IT学習環境について，積極的な取組を行い，管理については，情報処理センターによっている。相応の整備状況，利用実績であり，相応である。

#### 成績評価法に関する取組状況について

成績評価の方法は，当該大学の調査によると，授業形態を問わず，試験，レポート，出席，授業態度，小テスト，課題，作品，技能検定など，複数の方法を用いて判定されている科目が79%を占めている。その成績評価の基準，方法等について，成績方法等がシラバスに明記されている。その基準は各教員に任され，基準が設定されていない。また，複数の教員が同一科目を担当する場合，教員の取り決め及び協議によって評価している。これらのことから，成績評価の一貫性は，一部問題があるが相応である。

成績評価の厳格性としては，出席数及び再試験の際の評価基準が設定されている。また，学生へのアンケート調査結果では成績評価基準が比較的明確で成績評価は納得のいくものであるとする回答の割合が低くないこと，複数の教員が同一科目を担当する場合の評価結果のばらつきが少ないこと，1・3年次終了後一定の単位を修得していない場合進級できない制度があることから判断すると，ほぼ厳格性が保たれており，相応である。

#### 貢献の程度（水準）

これらの評価結果を総合的に判断すると，目的及び目標の達成にかなり貢献しているが，改善の必要がある。

### ◇特に優れた点及び改善を要する点等

ここでは，前述の評価結果から，特に重要な点を，特に優れた点，特色ある取組，改善を要する点，問題点として記述することとしているが，該当するものがなかった。

## 4．教育の効果

### ◇目的及び目標で意図した実績や効果の状況

#### 履修状況や学生による授業評価結果から判断した教育の実績や効果について

学生の履修状況としては，必修科目及び選択必修科目について，履修数はそれぞれ29から30単位，4から8単位である。どちらとも単位取得率は90%を超えている。選択必修科目の中では，単位を取得している学生数には2倍から4倍のばらつきがある。顕著な例としては16倍の格差がある。個々の学生の登録状況は1年次生については必修科目を29科目，選択必修科目を5ないし6科目，合わせて34から35科目を登録している学生が67%である。そのうち必修科目の取得率は約96%，選択必修科目の取得率は100%に近い。成績は，必修科目及び選択必修科目で90%がAまたはBを取得している。しかし，教養教育科目である「ブリッジ科目」は全体的に成績評価が低く，特に「ブリッジ科目Ⅰ」のうち，算数・理科は20%が単位を落としている。これらの履修状況から判断して，相応である。

学生による授業評価結果としては，教養教育科目の授業評価のアンケート集計によると，受講したいと思っていた科目に対しては，講義内容に興味をもてたが67%，十分に理解できたが62%であるが，受講したくない科目を受講した場合の理解度は17%である。教養教育科目のうち，実践的人間理解科目について学生の評価は高く，後輩に勧めたいと応えた学生は82%に達している。一方ブリッジ科目と人間教育学セミナーにはもっと力を入れて欲しいとの要望が34%と25%である。これらの学生の評価結果から判断して，相応である。

#### 専門教育履修段階や卒業後の状況等から判断した教育の実績や効果について

教員の判断としては，教養教育科目を担当した教員のうち，約半数弱のアンケート調査の結果が報告されている。それによると，約50%の教員が教養教育は専門科目を学ぶ上で役に立ち，人間としての教養となるとしている。さらに，間接的なデータではあるが，77%の教員が学生による授業評価は授業改善に役立っており，87%の教員が受講生の理解度を確認しながら授業を進めていると回答している。専門教育実施担当教員（専門教育を担当する立場から）の判断としては，これらのアンケートの結果から判断すると，相応である。

専門教育履修段階の学生の判断としては，教養教育科目の意義として4年次生は，国際理解科目と，健康スポーツ科目の評価が比較的高く，情報関連科目がそれに次ぐ。今後重視すべき科目として情報関連科目と国際理解科目をあげている。教養科目として必要な基礎演習科目・人文系科目・自然系科目の評価が低い。さらに，アンケートでの「実用性」から教養教育の意義を問う設問については，基礎演習科目，社会系科目，自然系科目を極めて低く評価している。当該大学の「広い視野，柔軟な対応力，豊かな人間性」を育む教育という目的から判断すると，一部問題があるが相応である。

卒業後の状況から見た判断としては，平成13年度末に11年度以前のカリキュラムを履修した卒業生に対して，アンケート調査を実施した。回答数は101であり，回収率は25%である。これらの回答のうち，幼稚園・小学校・中学校・高等学校の教員として活躍している卒業生または目指している卒業生は65%を占める。有益性については「健康スポーツ科目」を最も高く評価し，「国際理解科目」がそれに次ぐ。これは専門教育履修段階の学生の判断と同様だが，人文系科目の評価は高めである。また，科目編成が異なっているゆえ一概にいえないが，担当教官の工夫については，教官の認識と差が見られる。これらのことから，相応である。

#### 実績や効果の程度（水準）

これらの評価結果を総合的に判断すると，目的及び目標で意図した実績や効果がかなり挙がっているが，改善の必要がある。

### ◇特に優れた点及び改善を要する点等

ここでは，前述の評価結果から，特に重要な点を，特に優れた点，改善を要する点，問題点として記述することとしているが，該当するものがなかった。

# Ⅴ　評価結果の概要

## 1．実施体制

この項目では，当該大学が有する目的及び目標に照らして，(1)教養教育の実施組織に関する状況，(2)目的及び目標の周知・公表に関する状況，(3)教養教育の改善のための取組状況の各要素について評価を行い，その結果を取りまとめている。

各要素の評価においては，教育課程の編成するための組織，教養教育を担当する教員体制，教養教育の実施を補助，支援する体制，教養教育を検討するための組織，目的及び目標の趣旨の教職員，学生等における周知，目的及び目標の趣旨の学外者への公表，学生による授業評価，ファカルティ・ディベロップメント，取組状況や問題点を把握するシステム，問題点を改善に結びつけるシステムの各観点に基づいて評価を行っている。

これらの評価結果を総合的に判断すると，目的及び目標の達成におおむね貢献しているが，改善の余地もある。

「特に優れた点及び改善を要する点等」としては，授業改善のためのアンケート調査結果を一覧にして教員に配布し，教員から提出された自己評価レポートなどと対応し，授業方法改善の取組が行われていることを特色ある取組として取り上げている。

## 2．教育課程の編成

この項目では，当該大学が有する目的及び目標に照らして，(1)教育課程の編成に関する状況，(2)授業科目の内容に関する状況の各要素について評価を行い，その結果を取りまとめている。

各要素の評価においては，教育課程の編成の内容的な体系性，教育課程の編成の実施形態（年次配当等）の体系性，教養教育と専門教育の関係，授業科目と教育課程の一貫性の各観点に基づいて評価を行っている。

これらの評価結果を総合的に判断すると，目的及び目標の達成におおむね貢献しているが，改善の余地もある。

「特に優れた点及び改善を要する点等」としては，「ブリッジ科目」を特色ある取組として取り上げている。

## 3．教育方法

この項目では，当該大学が有する目的及び目標に照らして，(1)授業形態及び学習指導法等に関する取組状況，(2)学習環境（施設・設備等）に関する取組状況，(3)成績評価法に関する取組状況の各要素について評価を行い，その結果を取りまとめている。

各要素の評価においては，授業形態（講義，演習など），学力に即した対応，授業時間外の学習指導法，シラバスの内容と使用法，授業に必要な施設・設備，自主学習のための施設・設備，学習に必要な図書，資料，IT学習環境，成績評価の一貫性，成績評価の厳格性の各観点に基づいて評価を行っている。

これらの評価結果を総合的に判断すると，目的及び目標の達成にかなり貢献しているが，改善の必要がある。

「特に優れた点及び改善を要する点等」としては，該当するものがなかった。

## 4．教育の効果

この項目では，当該大学が有する目的及び目標において意図する教育の成果に照らして，(1)履修状況や学生による授業評価結果から判断した教育の実績や効果，(2)専門教育履修段階や卒業後の状況等から判断した教育の実績や効果の各要素について評価を行い，その結果を取りまとめている。

各要素の評価においては，学生の履修状況，学生による授業評価結果，専門教育実施担当教員の判断，専門教育履修段階の学生の判断，卒業後の状況からみた判断の各観点に基づいて評価を行っている。

これらの評価結果を総合的に判断すると，目的及び目標で意図した実績や効果がかなり挙がっているが，改善の必要がある。

「特に優れた点及び改善を要する点等」としては，該当するものがなかった。

## ◇ 特記事項

※ 大学から提出された自己評価書から転載

本学の教育課程の特徴は，一般教養科目と教職関連科目及び専門教育科目相互の有機的な連携を図り，具体的には人間教育学関連科目，相互コミュニケーション科目，ブリッジ科目から構成される斬新な教養教育科目群と，教育実践科目そして専門教育科目という科目群を年次配当も含めてバランス良く配置したことである。

この内，教養教育については，本評価書の各評価項目でも触れたように，いずれも高い自己評価を下すことができた。中でも，1 年次前期に少人数クラスで行う「人間教育学セミナーⅠ（人間教育学セミナー（教職の意義））」は，新入生に対して担当教員が教職の意義や喜びを教え，情熱などを引き出す，教師への第 1 歩となる必修の演習科目であり，また，1 年次で一年間かけて野外活動等を通して体験的に実践力を学び，人間性を育む実験・実習科目である「体験学習」を必修科目として導入したことなどは，教員養成系大学における教養教育の先進的な形として特記すべきものである。全教員の 8 割以上が何らかの形で教養教育に関わり，そのため常に教養教育と専門教育の有機的な連携を念頭に置きながら授業を行っていることは，教員養成系大学の教員として望ましい形であり，上級学年での学習意欲の増大につながっていると考えられる。本学の教員就職率（臨時的任用を含む。）は，最近 5 年間を見ても平成 9 年度全国第 1 位，平成 10 年度全国第 2 位，平成 11 年度全国第 1 位，平成 12 年度全国第 5 位，平成 13 年度全国第 1 位と，常にトップクラスを安定して維持しており，教養教育が果たしている役割も極めて大きいと考えられる。

本学では，平成 12 年度の改組で，大学院を含めて，「学習臨床」と「発達臨床」という教育現場での実践力をキーコンセプトとした教育研究分野を設け，さらに現在，従来の教科領域についても「教科臨床」という新しい分野の立ち上げに取り組んでいる。それについては，本学のリーフレット『上越教育大学：学校教育のセンター・オブ・エクセレンス』で紹介している。本学は今後，学校教育の先進的な教育研究を行うために，教養教育と専門教育，さらには大学院における教育実践的な専門研究の間の連携を図りながら，それらの基礎となる教養教育の一層の充実を目指す所存である。

# 「研究活動面における社会との連携及び協力」評価報告書

（平成１３年度着手　全学テーマ別評価）

上　越　教　育　大　学

平成１５年３月

大学評価・学位授与機構

# ◇　大学評価・学位授与機構が行う大学評価

## ○大学評価・学位授与機構が行う大学評価について

### 1　評価の目的

大学評価・学位授与機構（以下「機構」）が実施する評価は，大学及び大学共同利用機関（以下「大学等」）が競争的環境の中で個性が輝く機関として一層発展するよう，大学等の教育研究活動等の状況や成果を多面的に評価することにより，①その教育研究活動等の改善に役立てるとともに，②評価結果を社会に公表することにより，公共的機関としての大学等の諸活動について，広く国民の理解と支持が得られるよう支援・促進していくことを目的としている。

### 2　評価の区分

機構の実施する評価は，平成 14 年度中の着手までを試行的実施期間としており，今回報告する平成 13 年度着手分については，以下の 3 区分で，記載のテーマ及び分野で実施した。

①全学テーマ別評価（教養教育（平成 12 年度着手継続分），研究活動面における社会との連携及び協力）
②分野別教育評価（法学系，教育学系，工学系）
③分野別研究評価（法学系，教育学系，工学系）

### 3　目的及び目標に即した評価

機構の実施する評価は，大学等の個性や特色が十二分に発揮できるよう，当該大学等が有する目的及び目標に即して行うことを基本原則としている。そのため，大学等の設置の趣旨，歴史や伝統，人的・物的条件，地理的条件，将来計画などを考慮して，明確かつ具体的に目的及び目標が整理されることを前提とした。

## ○全学テーマ別評価「研究活動面における社会との連携及び協力」について

### 1　評価の対象

本テーマでは，大学等が行っている社会貢献活動のうち，社会一般を対象として連携及び協力を意図して行われている研究活動面での社会貢献について，全学的（全機関的）組織で行われている活動及び全学的（全機関的）な方針の下に部局等において行われている活動を対象とした。

対象機関は，設置者（文部科学省）から要請のあった，国立大学（短期大学を除く 99 大学）及び大学共同利用機関（総合地球環境学研究所を除く 14 機関）とした。

### 2　評価の内容・方法

評価は，大学等の現在の活動状況について，過去 5 年間の状況の分析を通じて，次の 3 つの評価項目により実施した。

①　研究活動面における社会との連携及び協力の取組
②　取組の実績と効果
③　改善のための取組

### 3　評価のプロセス

(1)　大学等においては，機構の示す要項に基づき自己評価を行い，自己評価書（根拠となる資料・データを含む。）を平成 14 年 7 月末に機構に提出した。
(2)　機構においては，専門委員会の下に，専門委員会委員及び評価員による評価チームを編成し，自己評価書の書面調査及びヒアリングの結果を踏まえて評価を行い，その結果を専門委員会で取りまとめ，大学評価委員会で平成 15 年 1 月末に評価結果を決定した。
(3)　機構は，評価結果に対する対象大学等の意見の申立ての手続きを行った後，最終的に大学評価委員会において平成 15 年 3 月末に評価結果を確定した。

### 4　本報告書の内容

**「Ⅰ　対象機関の概要」，「Ⅱ　研究活動面における社会との連携及び協力に関するとらえ方」及び「Ⅲ　研究活動面における社会との連携及び協力に関する目的及び目標」**は，当該大学等から提出された自己評価書から転載している。

**「Ⅳ　評価項目ごとの評価結果」**は，評価項目ごとに，「目的及び目標の達成への貢献の状況」（「目的及び目標で意図した実績や効果の状況」）として，活動等の状況と判断根拠・理由等を記述し，当該評価項目全体の水準を以下の 5 種類の「水準を分かりやすく示す記述」を用いて示している。

・十分に貢献している。
・おおむね貢献しているが，改善の余地もある。
・かなり貢献しているが，改善の必要がある。
・ある程度貢献しているが，改善の必要が相当にある。
・貢献しておらず，大幅な改善の必要がある。

（「取組の実績と効果」の評価項目では，「貢献して」を「挙がって」と，「余地もある」を「余地がある」と記述している。）

なお，これらの水準は，当該大学等の設定した目的及び目標に対するものであり，大学等間で相対比較することは意味を持たない。

また，評価項目全体から見て特に重要な点を，「特に優れた点及び改善を要する点等」として記述している。

**「Ⅴ　評価結果の概要」**は，評価の対象とした取組や活動，評価に用いた観点，評価の内容及び当該評価項目全体の水準等を示している。

**「Ⅵ　意見の申立て及びその対応」**は，評価結果に対する意見の申立てがあった大学等について，その内容とそれへの対応を併せて示している。

**「特記事項」**は，各大学等において，自己評価を実施した結果を踏まえて特記する事項がある場合に任意記述を求めたものであり，当該大学等から提出された自己評価書から転載している。

### 5　本報告書の公表

本報告書は，大学等及びその設置者に提供するとともに，広く社会に公表している。

# Ⅰ　対象機関の概要

※　大学等から提出された自己評価書から転載

**1　機関名**：上越教育大学

**2　所在地**：新潟県上越市

**3　学部・研究科・附置研究所等の構成**

（学部）学校教育学部

（研究科）大学院学校教育研究科

（附置研究所等）研究連携を行っている施設：附属図書館，学校教育総合研究センター，心理教育相談室，附属実技教育研究指導センター，附属障害児教育実践センター，附属小学校，附属中学校，附属幼稚園

**4　学生総数及び教員総数**

①学生総数 1,224 名（うち学部学生数 715 名）

②教員総数　214 名（うち附属学校教員数 39 名）

**5　特徴**

本学は,「教員の資質能力の向上と初等教育教員の養成と確保という社会的要請に応える」ことを目的に，主に初等中等教育諸学校教員に研究・研鑽の機会を提供する大学院と，初等教育教員の養成を行う学部を備えた「教員に開かれた大学院を中心とした新しい大学」として昭和 53 年 10 月に設立された新構想の教育大学である。

このように新構想の教育大学であるということが本学の際立った特徴である。この特徴は，次の諸点に具体化されている。

その一は，学部段階の教育課程が，教育に関する実践的力量の育成を重視した構成となっていることである。このような教育課程の実施は，附属学校園及び公私立協力校園の全面的協力を得て行われている。

その二は，大学院段階の教育課程が，教員の研究成果を土台として，教育の現実や実践上の諸問題に対して積極果敢に対応することを意図したものであるということである。この点は，大学院での開講科目の名称等に顕著に表れている。

その三は，教育の現実的諸問題への対応を重視した教育研究組織の構成を行っていることである。現在は，5 部制の下に，10 講座（学習臨床，生徒指導総合，心理臨床，幼児教育，障害児教育，言語系教育，社会系教育，自然系教育，芸術系教育，生活・健康系教育の各講座）と学内共同教育研究施設等を擁している。

その四は，兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科（博士課程）の構成大学として教育の実践学的研究を組織的，計画的に進めていることである。

# Ⅱ　研究活動面における社会との連携及び協力に関するとらえ方

※　大学等から提出された自己評価書から転載

**1　「研究連携」に関するとらえ方**

本学は，前記「Ⅰ　対象機関の概要　5　特徴」において述べたように,「教員に開かれた大学院を中心とした新しい大学」，すなわち新構想の教育大学である。この創設の趣旨，さらには近時における大学に対する国家的及び社会的要請の動向をも踏まえ，本学では広範多岐にわたる教育（教養教育を含む），研究，教育サービス面における社会貢献（以下,「教育貢献」という。），研究活動面における社会との連携及び協力（以下,「研究連携」という。）の諸活動に積極的に取り組んでいる。

ところで，新構想の教育大学である本学の場合，研究連携の具体的な取組（社会との連携及び協力するための取組，研究成果の活用に関する取組の双方を含む）の形態及び内容は，実に多様である。文字通り，大学又は大学の教育研究組織を単位とするものだけではなく，学内における任意の研究会組織を単位とする取組もある。さらには，一見，教官の個人的取組のようにも判断されるものが全学的な基本方針や承認の下に進められている場合がある。

また,「研究」活動とはいっても，研究活動と教育活動とは，本来的に表裏一体のものであり，特に「教育」研究の連携の場合には，外見的には大学の主導の下で進められることが多く，これらの取組を教育活動としてだけでなく，研究連携の範囲に含めて自己点検・評価の対象としていくことが必要である。

このように，研究連携の内実は，大学の最も基本的な任務とされている教育活動，研究活動，さらには教育貢献との関連において優れて動態的に展開されているところから，本学における研究連携の全体をとらえて自己点検・評価していくためには，これを大学外部の研究機関（大学等を除く。）との連携・協力に限定することなく，教育貢献の諸活動との関連においても広角的にとらえて，可能な限り広範に取り上げていくことが妥当である。

兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科の構成大学であり学校教育の実践的研究の発展のためのパイオニア的な役割を担っている本学の場合，充実した教員と施設を資源として，教育貢献に積極的に取り組むことは勿論であるが，さらに進んで研究連携について，これを全学的な基本姿勢，あるいは方針の下に積極的に推進していくことが重要な社会的使命である。

## 2　取組や活動の現状

### 「社会と連携及び協力するための取組」

社会と連携及び協力するための取組として本学が行ってきているものは，大別すると，大学並びに附属教育研究施設及び講座等を単位とする取組，本学と外部機関・団体等との共同研究活動の取組，学内における任意的研究会組織の活動を通しての取組，その他に区分することができる。

これらの取組は，研究活動の内容でみると，その広さと深まりにおいて，当然のことながら多様である。これらの取組を統一の尺度や基準によって，優劣評価することは適切ではないと判断されるので，取組についての個々の重みづけや内容的な解説をすることをせずに，一括して掲げることにする。ここでは，上記の「その他」に属すると判断されるものは除いて掲げる。

(1) 大学並びに附属教育研究施設及び講座等を単位とする取組
  1)『研究者総覧』,『教育研究スタッフのプロフィール』（上越教育大学ホームページにも掲載),『大学院だより』等による研究情報の公開
  2)学校教育総合研究センターによる外部講師講演会及び「客員研究員講演会」並びに「研究セミナー」の開催
  3)附属実技教育研究指導センター及び附属障害児教育実践センターによる「研究セミナー」,「研修セミナー」等の開催
  4)附属学校園による教育研究協議会の開催
(2) 外部機関・団体等との共同研究活動の取組
  1)独立行政法人農業技術研究機構中央農業総合研究センターとの研究・教育に関する交流協定
  2)受託研究
  3)民間等との共同研究
(3) 学内の任意的研究会組織の活動を通しての取組
  1)上越教育大学国語教育学会，上越教育大学社会科教育学会，上越英語教育学会，上越教育経営研究会及び美術教育実践学会による研究大会の開催又は研究会誌の発行
  2)上越自立活動研究会によるフォーラムと研究会の開催

### 「研究成果の活用に関する取組」

本学において実施している「研究成果の活用に関する取組」は大別すると，(1)「社会からの要請・依頼に応える多様な分野における研究成果の活用」，(2)「大学自らの判断に基づく相談業務等の実施」，(3)「研究成果情報等の提供によるアカウンタビリティの遂行」に区分することができる。(1)は，研究成果の内容の広さと深まりにおいて多様であるが大学外部からの要請・依頼に大学として応ずるという点で共通している。(2)は，大学自らの判断に基づいて，法律に定める高等教育機関として，外部からの要請・依頼を待つまでもなく，当然にも実施すべき取組課題であるとの認識に基づくものである。(3)は，近時における高等教育機関としての研究的側面におけるアカウンタビリティに対する要請に応える性質のものである。これまでの主な取組を掲げると，次のとおりである。

(1) 社会からの要請・依頼に応える多様な分野における研究成果の活用
  1)各種審議会・委員会・審査会への参加
  2)スクールカウンセラーとしての学校現場への協力
  3)各種の教育研究会や研修事業等への協力
  4)地方公共団体の調査活動への協力
  5)産業界への技術移転
(2) 大学自らの判断に基づく相談業務等の実施
  1)心理教育相談室による心理・教育相談業務の実施
  2)附属障害児教育実践センターによる教育相談及び教育臨床業務の実施
(3) 研究成果情報等の提供によるアカウンタビリティの遂行
  1)『研究紀要』,『学位論文概要』,『年次報告書』,『学校教育総合研究センター年報』,『実技教育研究指導センター年次報告書』,『障害児教育実践センター紀要』等の発行
  2)学校教育総合研究センター『教育実践研究』の発行
  3)心理教育相談室による『上越教育大学心理教育相談研究』の発行
  4)芸術系美術教育講座による『上越教育大学美術教育研究誌　美と育』の発行
  5)修了制作展・修了演奏会の開催（公開）
  6)上越教育大学数学教室による『数学教育研究』及び『上越数学教育研究』の発行

# Ⅲ　研究活動面における社会との連携及び協力に関する目的及び目標

※　大学等から提出された自己評価書から転載

## 1　目的

本学は，「Ⅱ 研究活動面における社会との連携及び協力に関するとらえ方」の「1 「研究連携」に関するとらえ方」で述べたところに基づき，研究連携を積極的に推進する。

この研究連携の推進については，その全体を通して，本学が担っている基本的使命（学則第1条）並びに本学学部及び大学院が担っている基本的使命（学則第23条及び第53条）を踏まえつつ，次のような目的を設定する。

(1) 大学全体，附属教育研究施設等その他講座等の組織的取組による研究連携の積極的推進により，初等中等教育諸学校の教育現場が抱える諸問題の解決や実践的開発の促進に寄与する。

(2) 学外の民間企業，地方公共団体及び非営利的組織等との共同研究等の積極的推進により，大学の研究活動の活性化を促すとともに，地方公共団体の施策，事業の質的充実・向上に寄与する。

(3) 学会・研究大会事務局又は学内における任意的研究会組織等の活動による多様な分野における研究連携の積極的推進により，発展しつつある多様な学術研究についての学校教員等の理解の深化・向上に寄与する。

(4) 研究成果を活用した各種の相談業務の実施その他の研究連携により，研究成果を社会的に還元するという大学改革の時代的要請に応える。

(5) 研究成果情報及び研究者情報の公開・提供の積極的な推進により，全国的又は地域的な広まりにおける大学のアカウンタビリティの遂行に努める。

## 2　目標

上記の目的を実現するために，本学が行うべき研究連携については，以下に掲げる5つの目標を設定する。

(1) 大学並びに附属教育研究施設及び講座等の組織的取組による教育の分野における実践的又は理論的な研究連携の積極的推進を図る。

・学校教育総合研究センター，附属実技教育研究指導センター及び附属障害児教育実践センターによる研究又は研修セミナー事業等による研究連携

・附属学校園による教育研究公開等の事業による研究連携

・講座・教室等を単位とする研究会の開催及び研究誌発行による研究連携

(2) 教員の多様な分野における学術的研究の遂行に裏打ちされた学外の民間企業，地方公共団体等との共同研究等の積極的推進を図る。

・学外の民間機関との共同研究の推進

・学外の非営利機関との共同研究・研究協力

・受託研究等の受入れの推進

(3) 学内における任意的研究会組織等の取組による多様な分野における研究連携の積極的推進を図る。

・上越教育大学国語教育学会，上越教育大学社会科教育学会，上越英語教育学会，上越教育経営研究会，上越自立活動研究会及び美術教育実践学会等による研究大会等の開催又は研究会誌発行による研究連携

(4) 研究成果の活用を図る取組による研究連携の積極的推進を図る。

・大学における実践的・臨床的研究成果を活用した教育相談業務の実施による研究連携

・多分野における教員の専門的な研究成果や力量を活用しての国及び地方公共団体の各種審議会・委員会・審査会への参加，各種の教育研究会・研究（研修）事業への協力による研究連携

・教育・心理学等の実践的・臨床的研究成果を生かした教育現場との研究連携（スクールカウンセラー等）

・民間企業等を含む産業界への技術移転，地方公共団体及びその機関等の調査活動等への協力による研究連携

(5) 学内の研究成果情報及び研究者情報等の公開による研究連携の積極的推進を図る。

・『上越教育大学研究紀要』，『学位論文概要』，『上越教育大学年次報告書』，『学校教育総合研究センター年報』，『実技教育研究指導センター年次報告書』，『障害児教育実践センター紀要』発行等による研究成果情報の公開

・『研究者総覧』及び『教育研究スタッフのプロフィール』発行による研究者情報や研究動向の公開

# Ⅳ　評価項目ごとの評価結果

## 1．研究活動面における社会との連携及び協力の取組

### ◇目的及び目標の達成への貢献の状況

社会連携を円滑に支援する学内組織の窓口として,「地域連携推進室」と「国際交流推進室」を平成 14 年 4 月に新設した。「地域連携推進室」は，県下の教育委員会や各種団体との間で連絡協議会を開催し，地域との連携・協力体制を図っている。しかし「国際交流推進室」の社会連携はこれからである。総じて，取組を運営・実施する体制として相応である。

研究成果を活用する取組のうち，社会からの要請による活動と大学側からの自発的活動の多くが，学内の運営評議会及び企画委員会の運営の下でなされ，また，企画委員会兼業専門部会では社会連携を推進する兼業のあり方等に関しての調査・検討も行われており，取組を運営・実施する体制・方法として相応である。

研究者及び研究成果の情報発信については，大学概要や大学案内等の各種パンフレットを発行し，国内の教育・研究機関や大学，新聞・雑誌社等へ配布し，研究者並びにその研究情報の公開に努めているが，大学側からの一方向に終わっており，連携先のニーズを知りそれを汲み取る双方向的な情報の送受信のシステムが確立されるまでに至っていない。また，研究連携の目的や目標を大学の内外へ周知公表する統一的な広報体制も現時点で十分には整備されておらず，これらの点について問題がある。

大学附属教育研究施設や講座等が実施する各種講演会，セミナー，研究協議会等への参加者を，ホームページや商業雑誌，パンフレット等を通じて募っている。広報の方法として相応である。

予算処置を伴う各種受託研究や共同研究および審議会等については，学内の運営評議会の議を経て学長が承認し，承認後の予算受入れや事務手続き上の管理も組織的に行なわれている。各研究者が多様な研究連携のニーズに対し円滑に活動できるよう努めており，取組の支援体制として相応である。

学外関係機関の要請による，各種審議会委員，委員会委員等の兼業は，全国的な規模で行われている。また，研修会講師やスクールカウンセラー等の兼業は，主に新潟県上越地域からの要請により行われ，心理教育相談室や障害児教育実践センターでの心理相談，教育相談，教育臨床業務については，地域住民などに利用される地域性の高い活動となっている。全体として，公共性や地域性をいかした取組であり相応である。

受託研究においては，学内の施設やＸ線粉末回析装置等の設備などが活用されている。研究施設の管理は大学が行い，複数の学内スタッフにより利用されている。大学が有する資源の活用として相応である。

障害児教育実践センターや心理教育相談室による臨床，相談，研修業務や，附属図書館での研究資料や蔵書の開放を行っている。設備や人的・知的資源の活用として相応である。

**貢献の程度（水準）**

これらの評価結果を総合的に判断すると，取組は目的及び目標の達成にかなり貢献しているが，改善の必要がある。

### ◇特に優れた点及び改善を要する点等

学内の情報・広報委員会及び広報室では，大学概要や大学案内等の各種パンフレットを発行し，国内の教育・研究機関や大学，新聞・雑誌社等へ配布し，研究者並びにその研究情報の公開に努めているが，大学側からの一方向性の発信となっており，双方向的な情報のやりとりにまでは至っていない。また，広報と連携活動についての体制の整備へ着手していることは認められるが，現時点において社会との研究連携の体制や広報手段は各組織や個人に委ねられており，大学の組織体制全体での関わりが十分でない点は改善を要する。

## ２．取組の実績と効果

### ◇目的及び目標で意図した実績や効果の状況

「障害児教育実践センターセミナー」は，平成 11 年から 13 年までに 8 回の開催があり，平均して約 20 名程の参加者を得ている。また，各種附属学校においても，毎年研究協議会を開催し実績を積み重ねている。(①附属小学校:平成 9～13 年度で 9 回開催,参加者平均は約 800 名　②附属中学校:5 回開催,参加者平均は約 560 名　③附属幼稚園：5 回開催，参加者平均は約 200 名）連携・協力活動の実績として相応である。

教員個人の学術研究に裏打ちされた学外の企業や団体との共同研究は，まだ大きな効果を上げるにまでは至ってないが，受託研究については平成 9 年から 13 年の間に環境庁や新潟県庁等から 7 件受け入れており，連携・協力活動の実績として相応である。

「障害児教育実践センターセミナー」の参加者に対して実施したアンケートの結果,「日時」78%,「形式」86%,「テーマ」58%の満足度を得ている。一方,「案内送付」については 17%と，十分な満足度が得られていない点で改善の必要もあり，問題がある。

各種審議会等への参画や，スクールカウンセラー，講師としての教育研究会や研修事業等への協力などの社会からの要請に応える連携活動は，平成 9 年の 280 件から平成 13 年の 385 件へと大きく増加しており，研究成果の活用の実績として優れている。

心理・教育の相談業務のうち，附属障害児教育実践センターの相談受付件数は例年 50～70 件以上にのぼり，年間の相談・指導回数は，延べ約 600～700 回以上の実績を有している。また，平成 13 年 4 月から本格稼働した心理教育相談室も同様に稼働から 8 ヶ月間で, 41 件の来談者実績を有している。これらは研究成果の活用の実績として優れている。

審議会等への協力について，継続的な委員委嘱が全体の 1/4 となっており，協力先の満足が得られている点で相応である。

**実績や効果の程度（水準）**

これらの評価結果を総合的に判断すると，目的及び目標で意図した実績や効果がかなり挙がっているが，改善の必要がある。

### ◇特に優れた点及び改善を要する点等

心理・教育の相談業務のうち，附属障害児教育実践センターの相談受付件数は例年 50～70 件以上にのぼり，年間の相談・指導回数は，延べ約 600～700 回以上の実績を有している。また，平成 13 年 4 月から本格稼働した心理教育相談室も同様に稼働から 8 ヶ月間で, 41 件の来談者実績を有している。大学の心理・教育の相談サービスへの社会のニーズは高く，そのニーズに応えた社会連携が進められている点は特に優れている。

## 3．改善のための取組

### ◇目的及び目標の達成への貢献の状況

学内の評価委員会では，問題点の指摘とその改善策の提案を含んだ自己点検評価を実施し，実施組織毎にまとめた結果を公表するとともに，研究活動及び社会との連携に関する状況を調査し，その結果を年次報告書の中で公表している。改善の具体的実践を推進する学内の体制の整備までに至っていないものの，取組状況や問題点等を把握する体制や取組として相応である。

各種審議会等への参画や，スクールカウンセラー，講師としての教育研究会や研修事業等への協力などの社会からの要請に応える研究連携活動については,「兼業専門部会」において，実情調査が実施され取組状況が把握されている。取組状況を把握する体制としては相応である。

大学自らの判断に基づく相談業務等の実施については,「附属障害児教育実践センター」における「障害児教育実践センター運営委員会」,「心理教育相談室」における「心理教育相談室運営委員会」が，研究成果の活用に関する取組状況や問題点を把握する体制をとっており，体制の整備として相応である。

学外者を中心にした運営諮問会議を定期的に開催し意見等の把握に努めるとともに，新潟県や東京都の教育委員会との定期的な懇談会の開催への大学側からの働きかけを行い，合意を得ている。学外者の意見等を把握する体制として優れている。

「初等中等教育諸学校の教育現場が抱える諸問題の解決や実践的開発の促進に寄与する」という目的があるが，教育委員会等教育行政からの意見の把握が主で，広範囲の学外者としての教育現場の教師の意見やニーズを把握する取組が認められない点で問題がある。

セミナー等の活動において，アンケート調査等による連携・協力先の満足度の客観的把握が十分にはなされておらず問題がある。

大学の有する研究資源に関する情報を提供していくための体制の整備が不十分であるという問題点を把握し，それを受けて情報・広報委員会の中に電子情報専門部会と出版専門部会等を置き，報道関係の広報のための広報室を設置するなど，多面的な改善策を講じている。把握した問題点の改善として相応である。

教育委員会との情報交換会等を開催することにより，学外からの意見や問題点を把握し，研究成果の有効活用の改善を行っている。把握した意見や問題点の改善として優れている。

**貢献の程度（水準）**

これらの評価結果を総合的に判断すると，改善のための取組が目的及び目標の達成にかなり貢献しているが，改善の必要がある。

### ◇特に優れた点及び改善を要する点等

新潟県や東京都の教育委員会との定期的な懇談会の開催への大学側からの働きかけを行い，合意を得ている。このことは，研究成果の活用方法等に関連する提言を受ける機会として有効であることから特に優れている。

# Ⅴ　評価結果の概要

### １．研究活動面における社会との連携及び協力の取組

上越教育大学においては,「研究活動面における社会との連携及び協力」に関する取組や活動として，研究情報の公開，外部講師講演会及び客員研究員講演会並びに研究・研修セミナー等の開催，独立行政法人農業技術研究機構中央農業総合研究センターとの研究・教育に関する交流協定，受託研究，民間等との共同研究，フォーラム及び研究会の開催，各種審議会・委員会・審査会への参加，スクールカウンセラーとしての学校現場への協力，各種の教育研究会や研修事業等への協力，調査活動への協力，産業界への技術移転，心理・教育相談及び教育臨床業務の実施，研究成果情報等の提供などが行われている。

評価は，取組を運営・実施する体制，取組の内容と実施方法および地域性･公共性,大学が有する資源の活用，大学内周知と学外者への公表等の広報体制・範囲・方法の各観点に基づいて，取組や活動及びそれを実施するための体制が，目的及び目標の達成に貢献するものとなっているかについて行った。

これらの評価結果を総合的に判断すると，取組は目的及び目標の達成にかなり貢献しているが，改善の必要がある。

「特に優れた点及び改善を要する点等」としては，研究者並びに研究成果情報の発信について，連携先のニーズを知りそれを汲み取る双方向的な情報の送受信のシステムが確立されるまでに至っておらず，また，現時点において社会との研究連携の体制や広報手段は各組織や個人に委ねられており，大学の組織体制全体での関わりが十分でない点を改善を要する点として取り上げている。

### ２．取組の実績と効果

評価は，連携・協力活動の実績，連携先の獲得状況，連携・協力先と大学が得た満足度，研究成果の活用の実績の各観点に基づいて，当該大学での取組や活動の成果から判断して，目的及び目標において意図する実績や効果がどの程度挙がったかについて行った。

これらの評価結果を総合的に判断すると，目的及び目標で意図した実績や効果がかなり挙がっているが，改善の必要がある。

「特に優れた点及び改善を要する点等」としては，心理・相談サービスへの社会のニーズは高く，そのニーズに応えた社会連携が進められている点を特に優れた点として取り上げている。

### ３．改善のための取組

評価は，取組状況や問題点等を把握する体制の整備や取組，学外者の意見等を把握する体制の整備や取組，把握した意見や問題点の改善状況の各観点に基づいて,「研究活動面における社会との連携及び協力」に関する改善のための取組が適切に実施され，有効に改善に結びついているかについて行った。

これらの評価結果を総合的に判断すると，改善のための取組が目的及び目標の達成にかなり貢献しているが，改善の必要がある。

「特に優れた点及び改善を要する点等」としては，新潟県や東京都の教育委員会との定期的な懇談会の開催への大学側からの働きかけを行っている点を特に優れた点として取り上げている。

# Ⅵ　意見申立て及びその対応

当機構は，評価結果を確定するに当たり，あらかじめ当該機関に対して評価結果を示し，その内容が既に提出されている自己評価書及び根拠資料並びにヒアリングにおける意見の範囲内で，意見がある場合に申立てを行うよう求めた。機構では，意見の申立てがあったものに対し，その対応について大学評価委員会等において審議を行い，必要に応じて評価結果を修正の上，最終的な評価結果を確定した。

ここでは，当該機関からの申立ての内容とそれへの対応を示している。

| 申立ての内容 | 申立てへの対応 |
|---|---|
| **【評価項目】**　研究活動面における社会との連携及び協力の取組<br><br>**【評価結果】**　研究成果を活用する取組のうち，社会からの要請による活動と大学側からの自発的活動のほとんどが，学内の企画委員会兼業専門部会の承認もしくは運営の下でなされている。ただし，同専門部会は，兼業の実態の把握に基づく，兼業の許認可の業務が主で，社会連携を推進する兼業のあり方等に関する業務までは担っておらず，取組を運営・実施する体制・方法として問題がある。<br><br>**【意見】**　次のように修正願いたい。<br>研究成果を活用する取組のうち，社会からの要請による活動と大学側からの自発的活動の多くが，大学の組織的な審議（企画委員会及び運営評議会）を踏まえ，実施されている。ただし，社会連携を推進する兼業のあり方等に関する調査・検討は，企画委員会兼業専門部会が担っている。取組を運営・実施する体制・方法として相応である。<br><br>**【理由】**　評価結果のうち，特に「学内の企画委員会兼業専門部会の承認もしくは運営の下でなされている」，「同専門部会は，（中略）兼業の許認可の業務が主で」の部分は，記載内容として正確ではない。同専門部会の具体的な検討事項は，ヒアリング時に提出した資料のとおり，1）兼業の許可に関する本学の実情調査，2）兼業等の取扱いに関するガイドラインの策定等である。また，個々の兼業承認は学長が行っている。一方，自己報告書（12 頁）に記載した「大学の組織的な承認もしくは運営」の部分の「大学の組織的な」に相当する本学の学内組織は，学長をその長とする企画委員会及び運営評議会である。従って，上記意見のような記載が妥当であると考える。 | **【対応】**　左記の評価結果の記述を以下のとおり修正した。<br>『研究成果を活用する取組のうち，社会からの要請による活動と大学側からの自発的活動の多くが，学内の運営評議会及び企画委員会の運営の下でなされ，また，企画委員会兼業専門部会では社会連携を推進する兼業のあり方等に関しての調査・検討も行われており，取組を運営・実施する体制・方法として相応である。』<br><br>**【理由】**　自己評価書，ヒアリングでの意見について再確認の結果，申立ての内容が適切であると確認できたため修正した。 |
| **【評価項目】**　取組の実績と効果<br><br>**【評価結果】**　「障害児教育実践センターセミナー」の参加者に対して実施したアンケートの結果，セミナーの | **【対応】**　左記の評価結果の記述を以下のとおり修正した。 |

| 申立ての内容 | 申立てへの対応 |
| --- | --- |
| 「日時」については78%,「形式」は86%,「テーマ」は58%の満足度を得ているが,「案内送付」の17%については,十分な満足度が得られておらず,問題がある。<br><br>**【意見】** 「障害児教育実践センターセミナー」の参加者に対して実施したアンケートの結果,セミナーの「日時」については78%,「形式」は86%,「テーマ」は58%の満足度を得ている。一方,「案内送付」については17%の満足度であり,送付先の拡大を図るなどの改善の必要があるが,セミナー全体の実績としては相応である。<br><br>**【理由】** この段落の最後が「問題がある。」で終わっているので,「案内送付」についての問題であるのに,セミナー全体に対する評価のように受け取られかねない。アンケートの結果,セミナーの「日時」「形式」「テーマ」については十分な満足度が得られているので,それがわかるような記述が妥当と考える。 | 『「障害児教育実践センターセミナー」の参加者に対して実施したアンケートの結果,「日時」78%,「形式」86%,「テーマ」58%の満足度を得ている。一方,「案内送付」については17%と,十分な満足度が得られていない点で改善の必要もあり,問題がある。』<br><br>**【理由】** 観点ごとの判断は,目的及び目標に即して,これらで意図した実績や効果が「優れている」,「相応である」,「問題がある」により判断し,記載しているものである。<br>評価結果は,「案内送付」について十分な満足度が得られていない点で改善の必要もあることから「問題がある」としたものであり,一部誤解を招く表現であったため修正した。 |

## ◇ 特記事項

※ 大学等から提出された自己評価書から転載

本学大学院修士課程では，これまでに 3,741 名の修了生（昭和 59 年度から平成 13 年度の間）を世に送り出した。最近 5 年間では 1,178 名が修了し，彼等の修士論文のタイトルを分類すると，主に学校教育の内容と方法に関係する内容について研究を行ったものと各学問領域における専門的な内容について研究を行ったものとの割合は，約 60：40 であり，概ねバランスのとれたものといえる。また，修士課程の院生を指導した研究成果は，修士論文として纏めるに留まらず，広範囲にわたる関係学会誌等へも発表され（過去 5 年間で 474 報），学校教育関係者及び各学術分野関係者へ広く還元されている。特に，現在教育現場が抱える諸問題の解決に向けて，これらの成果が有効に活用される事が期待される。

また，連合大学院博士課程においても同様に，本学に配属になった院生を指導した研究成果が，広範囲にわたる関係学会誌等へ積極的に論文として発表され，各学術分野関係者及び学校教育関係者へ還元され，教育実践学の構築に少なからぬ貢献をしてきている。

本学の教官スタッフは，教育研究系，教科教育研究系及び教科専門研究系の教官とから構成されている。研究成果を通して社会と連携及び協力していくためには，博士課程をも有する本学としては，教官各人の研究水準が大学人として相応しく，かつ高いレベルで保たれる必要があり，その知的生産活動をもって初めて社会との連携及び協力が可能となる。間近に迫った国立大学法人化を視野に入れ，今後これまで以上に高水準の研究を維持するためのシステムや組織等の整備が必要である。

連合大学院博士課程の学校教育実践学専攻と教科教育実践学専攻においては，教育実践学の構築に向けた教育研究を進めている。一方，大学院修士課程では，教育実践学構築への貢献を視野に入れ，学校教育現場に根ざした，新しい世紀にふさわしい学校教育の開発的研究を目指し，学術諸分野の研究成果を踏まえ，「学習臨床研究」，「発達臨床研究」及び「教科臨床研究」の 3 分野の研究を推進する予定である。前者の 2 分野については，学校教育専攻の中に対応する 2 つのコースを設けて既にスタートしており，後者については，学内のコンセンサスを得つつ，従来の教科専門の研究領域を広げ，学校教育に貢献する研究を今後一層推進し，これらの研究成果を踏まえて，社会との連携及び協力を推進していく。

# 「国際的な連携及び交流活動」評価報告書

（平成１４年度着手　全学テーマ別評価）

上　越　教　育　大　学

平成１６年３月

大学評価・学位授与機構

# ◇　大学評価・学位授与機構が行う大学評価

## ○大学評価・学位授与機構が行う大学評価について

### 1　評価の目的

大学評価・学位授与機構（以下「機構」）が行う評価は，大学及び大学共同利用機関（以下「大学等」）が競争的環境の中で個性が輝く機関として一層発展するよう，大学等の教育研究活動等の状況や成果を多面的に評価することにより，その結果を，①大学等にフィードバックし，教育研究活動等の改善に役立てるとともに，②社会に公表することにより，公共的機関としての大学等の教育研究活動等について，広く国民の理解と支持が得られるよう支援・促進していくことを目的としている。

### 2　評価の区分

機構の行う評価は，今回報告する平成 14 年度着手分までを試行的実施期間としており，今回は以下の 3 区分で評価を実施した。

(1)　全学テーマ別評価（国際的な連携及び交流活動）
(2)　分野別教育評価（人文学系，経済学系，農学系，総合科学）
(3)　分野別研究評価（人文学系，経済学系，農学系，総合科学）

### 3　目的及び目標に即した評価

機構の行う評価は，大学等の個性や特色が十二分に発揮できるよう，教育研究活動等に関して大学等が有する目的及び目標に即して行うことを基本原則としている。そのため，目的及び目標が，大学等の設置の趣旨，歴史や伝統，規模や資源などの人的・物的条件，地理的条件，将来計画などを考慮して，明確かつ具体的に整理されていることを前提とした。

## ○全学テーマ別評価「国際的な連携及び交流活動」について

### 1　評価の対象機関及び内容

本テーマでは，大学等が行っている教育研究活動等を基盤とした国際的な連携や交流活動について，全学的（全機関的）な方針の下に部局等において行われている活動を対象とした。

対象機関は，設置者から要請のあった全国立大学（97 大学）及び大学共同利用機関（総合地球環境学研究所を除く 14 機関）並びに公立大学の一部（4 大学）とした。

評価は，大学等の現在の活動状況について，過去 5 年間の状況の分析を通じて，次の 3 つの評価項目により実施した。

(1)　実施体制
(2)　活動の内容及び方法
(3)　活動の実績及び効果

### 2　評価のプロセス

(1)　大学等においては，機構の示す要項に基づき自己評価を行い，自己評価書（根拠となる資料・データを含む。）を平成 15 年 7 月末に機構へ提出した。
(2)　機構においては，専門委員会の下に，専門委員会委員及び評価員による評価チームを編成し，自己評価書の書面調査及びヒアリングの結果を踏まえて評価を行い，その結果を専門委員会で取りまとめ，大学評価委員会で評価結果を決定した。
(3)　機構は，評価結果に対する対象大学等の意見の申立ての手続きを行った後，平成 16 年 3 月の大学評価委員会において最終的な評価結果を確定した。

### 3　本報告書の内容

**「Ⅰ　対象機関の概要」，「Ⅱ　目的」，「Ⅲ　国際的な連携及び交流活動に関する目標」，「Ⅳ　対象となる活動及び目標の分類整理表」**及び**「特記事項」**は，当該大学等から提出された自己評価書から転載している。

**「Ⅴ　活動の分類ごとの評価結果」**は，活動の分類ごとに，各評価項目での観点ごとの活動の状況・判断を記述している。「判断」は，目標を達成する上で，「優れている」，「相応である」，「問題がある」の3種類で示している。

**「Ⅵ　評価項目ごとの評価結果」**は，評価項目ごとに，「目的及び目標の達成への貢献の状況」，「目的及び目標で意図した実績や効果の状況」として，活動の分類ごとの状況を総合的に判断して，当該評価項目全体の水準を以下の5種類の「水準を分かりやすく示す記述」を用いて示している。

・十分に（貢献して又は挙がって）いる。
・おおむね（貢献して又は挙がって）いる。
・相応に（貢献して又は挙がって）いる。
・ある程度（貢献して又は挙がって）いる。
・ほとんど（貢献して又は挙がって）いない。

なお，これらの水準は，当該大学等の設定した目的及び目標に対するものであり，大学等間で相対比較することは意味を持たない。

また，評価項目ごとに，当該大学等の活動において特徴あるとみなされる点等を，「特に優れた点及び改善を要する点等」として記述している。

**「意見の申立て及びその対応」**は，評価結果に対する意見の申立てがあった大学等について，その内容とそれへの対応を併せて示している。

### 4　本報告書の公表

本報告書は，大学等及びその設置者に提供するとともに，広く社会に公表している。

# Ⅰ　対象機関の概要

※　大学等から提出された自己評価書から転載

**1　機関名**：上越教育大学

**2　所在地**：新潟県上越市

**3　学部・研究科等の構成**

（学　部）学校教育学部

（研究科）大学院学校教育研究科修士課程

兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士課程（構成大学）

（関連施設）附属図書館，学校教育総合研究センター，保健管理センター，附属実技教育研究指導センター，附属障害児教育実践センター，情報処理センター，心理教育相談室，附属小学校，附属中学校，附属幼稚園

**4　学生総数及び教員総数**

（学生総数）：学部 613 名，大学院 493 名（修士課程）

（教員総数）：214 名（附属教員を含む。）

（教員以外の職員総数）：104 名

**5　特徴**

本学は，新構想の教員養成大学であり，学生の海外研修派遣に関しては，設立当初から授業科目「海外教育（特別）研究」（2 単位）を設け，学部・大学院学生を対象に，協定校を中心とした海外研修を毎年実施してきた。平成 14 年度実施で 20 回目を迎える。また，協定校への短期留学生も毎年 1 名ないし 2 名を派遣してきた。その後，大学改革とともに学校教育の COE を目指して，国際交流の充実を図ってきた。

外国人留学生の受入れに関しては，本学では，アジアを主とした諸国・地域から毎年 40 名程度の国費・私費の外国人留学生が大学院・学部で学んでいる。「国際学生宿舎」は，外国人研究者及び留学生に生活の場を提供するとともに，国際交流の場として活用されている。さらに，日本語・日本事情担当教員による国際交流ネットワークが留学生と院生・学部生並びに地域との交流を深めている。

現在，外国人教師として外国語科目を担当する者が 1 名，その他に常勤の外国人教員（助教授）が在職している。後者の助教授は，国際理解に関する授業も担当している。

平成 14 年には，国際交流推進室を設置した。協定校担当のコーディネーター教員を配置して，交流を促進している。

# Ⅱ　目的

※　大学等から提出された自己評価書から転載

グローバル化時代に生きる新しい世代には，地球社会を担う責任ある個人としての自覚のもとに，学際的・複合的視点にたって自ら課題を探究し，論理的に物事をとらえ，自らの主張を的確に表現しつつ行動していくことのできる能力が必要とされる。また，その根底には，深く広い生命観や人間観の形成，自らの行為及びその結果に対する深い倫理的判断と高い責任感をもって行動する成熟度が求められる。初等中等教育教員養成を目的とする本学においては，そのような地球社会を担う責任ある個人をつくるために，国際理解の推進と国際協力の精神の醸成に寄与しうる異文化理解の精神をもった初等中等教育教員の養成を図るとともに，国際レベルの学校教育を実現し，我が国と諸外国相互の教育・研究の国際化・活性化を促す国際競争力をもった教育研究者を育てていく必要がある。その具体的内容を，以下の 4 点に記す。

(1) 高度情報化を伴う急速なグローバル化時代における高等教育が目指すべき方向として，国際的な通用性・共通性の向上と国際競争力の強化を図る必要がある。そのために研究者の受入れ・派遣といった学術交流を積極的に推進する。

(2) 異なる歴史的・文化的背景や価値観をもつ人々と共生する多文化共生時代を迎えた今日，自らが寄って立つ国や地域の歴史や伝統，文化を深く理解し，異なる文化的背景をもつ人々に対し，これを適切に説明し，理解を求めたり，主張したりする能力を学生が身に付ける必要がある。そのためにグローバルな知識や情報を吸収，発信し，対話，討論するためのコミュニケーション能力の育成を図る。

(3) グローバル化時代に求められる教養を重視した教育の改善策として，世界の多様な国と地域の歴史と伝統，文化に対する理解を深める必要がある。そのために異文化理解教育を重視し，各種教育プログラムを充実させ，学生の海外派遣，留学生の受入れなど教育面における国際連携・交流活動を促進する。

(4) 社会・経済・文化のグローバル化が進展し，国際的な流動性が高まっている今日，本学が培ってきた教育技術や研究水準を活かし，国際レベルの学校教育や知的国際貢献など，国際協力の視点に立った活動が社会的な使命として求められる。そのために留学生受入れの推進並びに大学間交流協定校との交流推進を図る。

# Ⅲ　国際的な連携及び交流活動に関する目標

※大学等から提出された自己評価書から転載

1. 学生の指導にあたる教員自身の国際感覚を高めるとともに，我が国の大学の「知」を積極的に海外に提供していく観点から，教員の海外派遣を充実する。
2. 国際感覚に富んだ若手の教員や研究者を育成する観点から，若手教員を積極的に海外へ送り出すようにする。
3. 本学の研究水準及び教育内容をより高度・精緻なものにするため，海外から優秀な研究者を招くとともに，海外の第一線の研究者との共同研究を推進する。
4. 協定校の研究者との共同研究の可能性を探るために，本学が独自に設けた「国際交流推進室」の協定校担当者（コーディネーター）を中心に情報を交換し，積極的に共同研究を推進する。
5. グローバル化が進展する状況においては，英語のみならず，中国語，ロシア語，ドイツ語，韓国語（朝鮮語）など外国語を駆使する能力が不可欠である。とりわけ英語は，現状において国際共通語として最も中心的な役割を果たしており，英語力はグローバルな知識や情報を吸収，発信し，対話，討論するための基本的な能力となる。諸外国語の習得を視野に入れた，外国語運用能力を学生が身に付けられるよう支援する。
6. 自らが寄って立つ国や地域の歴史や伝統，文化を深く理解し，また，世界の多様な国や地域の歴史や伝統，文化に対する理解を深めるために，初等中等教育教員養成大学である本学においては，これまでの教師教育に加え，異文化理解に関する教育・研究を実践し，異文化理解マインドを持った初等中等教育教員を養成していくことが必要である。その支援・促進を行う。
7. 教育現場において，豊かな国際感覚・国際協調の精神を持った子供を育成できる初等中等教育教員を養成するために，各種教育プログラムの開発を促進する。
8. 国際・地球社会で活躍できる人材を育成するために，異なる文化的背景を有する人々と共に学び生活することなどを通じて，学生に相手の立場を理解しようとする感覚を身に付けさせるとともに，国境を越えた適応能力を獲得させる必要がある。そのために学生の海外派遣を促進し支援する。
9. 留学生担当教員を配置し，留学生担当指導教員と連携して，留学生と教員，または留学生と学生の積極的な交流を通じ，大学全体で留学生を支援する協力体制を確立する。
10. 留学生が抱える諸問題をアンケート等を通じて明らかにし，地域と連携しながら留学生の生活・修学支援の推進を図る。
11. 国際的な連携を基にした研究・教育をより充実させるために，協定校との協定内容の見直しを図るとともに，本学の研究者交流及び留学生交流計画の実施に見合った協定校の数・国（地域）を検討し，交流の質的充実を図る。
12. 留学生交流を実のあるものとするために，派遣大学で取得した単位を本学の卒業要件単位として認定する，いわゆる単位互換制度を確立する。
13. 国際共同研究並びに国際会議における報告など研究教育面における交流を拡大し・深化させることによって，国際社会に貢献するとともに国際感覚豊かな初等中等教育教員づくりと大学改革を促進する。
14. 国際的な連携及び交流活動を組織的かつ機能的に推進するため，本学は「国際交流推進室」を設置した。国際交流推進室は，国際交流を全学で取り組むべき重要課題として位置づけることによって誕生した国際交流活動の中核的組織である。上記の目標を横断的かつ構造的に把握，円滑に推進し，目的を達成するために本推進室の充実を図る。

# Ⅳ　対象となる活動及び目標の分類整理表

※大学等から提出された自己評価書から転載

| 活動の分類 | 「活動の分類」の概要 | 対象となる活動 | 対応する目標の番号 |
|---|---|---|---|
| 教職員等の受入れ・派遣 | 学生の指導にあたる教員自身の国際感覚を高めるとともに，本学の「知」を積極的に海外に提供していく観点から，教員の海外派遣を充実させ，同時に本学の研究水準及び教育内容をより高度・精緻なものにするため，海外から優秀な研究者を招く活動を行っている。 | (1) 外国人研究者の受入れ・支援 | 3 |
| | | (2) 外国人教員の任用・支援 | 3,5 |
| | | (3) 教職員の派遣 | 1,2 |
| 教育・学生交流 | 教育現場において，豊かな国際感覚・国際協調の精神を持った子どもたちを育成できる初等中等教育教員，即ち異文化理解マインドを持った初等中等教育教員を養成するために行っている各種教育プログラム。また，教育・研究の国際化・活性化を促すために重要な役割を担う外国人留学生の受入れ・支援と地域交流。例えば，各種教育プログラムの中には，海外教育（特別）研究，韓国教員大学校との短期留学プログラム，異文化理解教育関係科目等が含まれる。 | (1) 海外協定校との教育交流活動 | 7,8,12,14 |
| | | (2) 学生の短期海外研修 | 7,8,14 |
| | | (3) 異文化理解教育 | 5,6,7 |
| | | (4) 外国人留学生の受入れ・支援 | 9,10,14 |
| | | (5) 地域と連携した外国人留学生交流支援 | 9,10,14 |
| 国際会議等の開催・参加 | 学校教育のCOEを目指し，異文化理解マインドを持った初等中等教育教員養成のための基盤事業として，各種の国際会議の開催を推進し，また，本学の担い手となる若手研究者を中心に国際会議等への参加を積極的に支援している。 | (1) 国際研究集会 | 13 |
| | | (2) 国際交流協定による国際会議，シンポジウム | 13 |
| | | (3) 国際学術組織との交流によるセミナー，ワークショップ | 13 |
| | | (4) その他，「国際会議等の開催・参加」に属する個別活動 | 1,2,13 |
| 国際共同研究の実施・参画 | 本学の研究水準をより広く高度なものにするために海外の研究者との様々な共同研究を積極的に推進すると共に，個別活動を支援している。 | (1) 国際共同研究事業（各種団体等） | 3,13 |
| | | (2) 科学研究費補助金による国際共同研究 | 3,13 |
| | | (3) 国際交流協定による国際共同研究 | 3,4,11,13,14 |
| | | (4) その他，「国際共同研究の実施・参画」に属する個別活動 | 3,4,13 |

# Ⅴ　活動の分類ごとの評価結果

## 1　教職員等の受入れ・派遣

### 実施体制

**実施体制の整備・機能**　国際交流の促進・支援に関して，平成 14 年に「国際交流推進室」を発足し，国際交流推進室会議のもとに，コーディネーター部会・留学生支援部会・研修プログラム部会の 3 部会を設置して，対応している。

外国人研究者の受入れについては，各部から選出された教員 2 名及び日本語日本事情担当専任教員，その他学長が指名した教員の計 17 名からなる国際交流委員会の審議を経て，教授会で決定される。支援を含めた受入れの実務は，教務課留学生・国際交流係で行われる。

交流協定締結校との受入れ・支援については，国際交流担当副学長を室長とし，学長指名による 28 名の教職員からなる国際交流推進室で行う。

外国人教員の任用については，庶務課人事係が窓口となり，教授会の議を経て，任用・任期を決定している。外国人教員の支援については，日本人教員と同様の体制をとっている。

教員の派遣については，留学生・国際交流係が窓口となり，国際交流委員会の議を経て決定している。

文部科学省在外研究員等の派遣の場合は，庶務課研究協力室が窓口となり，国際交流委員会の議を経て決定する。

以上から，この観点の状況は目標に照らして相応である。

**活動目標の周知・公表**　平成 14 年 6 月に，運営評議会において，国際交流・留学生交流のあり方で「学術交流の積極的推進」として「研究者の受入れ」及び「研究者の派遣」の推進が打ち出され，教授会及び各教員部会において趣旨や理念等の説明が行われ，交流協定校へも伝えている。

また，国際交流推進室の設置式を平成 14 年 7 月に，マスコミ・学外支援者を招いて行い，その中で「上越教育大学における国際交流・留学生交流のあり方」の基本方針の趣旨説明を行った。説明された基本方針は「積極的に異文化理解」「海外派遣も強化」といった見出しで「上越タイムス」その他多数のマスコミを通じて学外に公表・紹介された。

外国人研究者の受入れ案内及び教員の派遣案内については，文書配布以外にも，ポスターの掲示，電子メールの通知等で周知される。

以上から，この観点の状況は目標に照らして相応である。

**改善システムの整備・機能**　国際交流委員会や国際交流推進室コーディネーター部会からの意見聴取，受入れ教員からの要請，派遣教員からの報告書等により活動状況や問題点を，国際交流委員会や国際交流推進室推進会議が収集し，改善策を検討している。また，全学的な評価・改善機構である自己評価検討委員会が，年次報告書を自己点検することにより，年度ごとの当該活動の事業を見直している。

しかし，上記の委員会による自発的で独自の調査やヒアリングはあまり活発とは言えない。

以上から，この観点の状況は目標に照らして相応である。

### 活動の内容及び方法

**活動計画・内容**　外国人研究者の受入れ・支援に関しては，年次計画を策定するには至っていない。

教職員の派遣については，外部事業団体によって派遣が行われるものは定員があるため，定員枠に沿う形で募集案内を行うが，その他の派遣については量的な活動計画を策定していない。

外国人研究者の受入れについては，文部科学省の事業に基づく受入れ，日本学術振興会の事業に基づく受入れ，国際交流基金の事業に基づく受入れ，日本国際教育協会に基づく受入れ，交流協定に基づく受入れ，外国政府・国際機関その他公的機関の交流事業に基づく受入れ，その他学術研究の国際交流を推進する上で適当と認めた受入れを「上越教育大学外国人研究者規程」に基づき，行っている。

教職員の派遣は，学会等のための渡航，調査・研究のための渡航を行っている。

以上から，この観点の状況は目標に照らして相応である。

**活動の方法**　研究者の受入れ・派遣の充実をはじめとした国際交流活動のため，国際交流協定をアイオワ大学，北京師範大学，オックスフォード・ブルックス大学，グラスゴー大学，ブランドン大学，ハルビン師範大学，韓国教員大学校の 7 大学と締結している。また，各交流締結校との間にコーディネーター（協定校担当者）を任期を設けずに置くことにより，連携の継続性と強化に努めている。

外国人研究者への支援として，国際学生宿舎内に専用宿舎及び職員研修センター内に一時的に滞在可能な部屋を用意している。

資金の援助として，海外教育研究助成金及び海外教育特別研究助成金を奨学寄附金として確保している。そのために国際交流推進後援会を設立し，私費の外国人研究者へ研究費等の一部補助や若手研究員等の海外派遣充実を支援しており，また，上越教育大学大学院同窓会も資金支援を行っている。

平成 14 年度より「学長裁量経費における海外との研究交流の募集」が行っている。募集内容は「交流協定締結校やその他の大学・研究機関との研究交流を推進するため，教員を海外に派遣する航空費及び滞在費を支給」するものである。

以上から，この観点の状況は目標に照らして相応である。

**活動の実績及び効果**

**活動の実績**　外国人研究者の受入れについては，平成10年度2名，平成11年度3名，平成12年度2名，平成13年度2名，平成14年度4名の計13名である。国別に見ると，中国3名，イギリス3名，アメリカ2名，ドイツ1名，ロシア1名，カナダ1名，韓国1名，マレーシア1名と，少数ではあるがバランスはとれている。これらの内，交流協定締結校からの受入れは，平成10年度1名，平成11年度なし，平成2年度2名，平成13年度2名，平成14年度2名の計7名と半分以上を占めている。

外国人教員については，過去5年間に3名任用し，現在2名を任用中である。その内2名はアメリカからの任用である。

教員の派遣については，平成10年度50名，平成11年度57名，平成12年度81名，平成13年度72名，平成14年度73名であり，内訳は，学会等の参加，調査・研究，協定締結などの交流活動等である。なお，学会等の中には教育系単科大学であることから，演奏会発表や展覧会なども含まれている。また，交流活動には，協定校への表敬訪問，学生引率・指導，審査員などの活動が含まれている。なお，若手教員の明確な定義付けはなされていないが，上記の派遣人数のうち，助教授以下の教員の派遣人数は，平成10年度36名，平成11年度31名，平成12年度63名，平成13年度48名，平成14年度48名である。

以上から，この観点の状況は目標に照らして相応である。

**活動の効果**　外国人研究者の受入れについて，全教職員を対象に研究内容の発表や講演を通じて，全学に活動効果が行き渡るようにしている。なお，講演内容はおおむね高等教育に関するもので，教員養成という当該大学への社会的ニーズを反映したものであるといえる。

また，「研究交流報告書」及び「在外研究報告書」，外国人教員に対する授業評価アンケートから，「今後の教育大学間の連携・協力について，話合いができ，一定の協力・協定の意志を確認できた」，「各大学・訪問地の教授・関係者等から，全面的に非常に親切できめ細かな対応の歓待を受け，さらに，豊富な資料・情報提供，案内，説明を受けた。これらの報告は我が国における「いのち教育」の重要な参考資料となるであろう」，「ペーパーでの交流や国際会議での一時的な意見交換ではなく，普段の研究生活や研究スタイル，こだわり，悩みなどについて，特に若い研究者たちと親密に交流できたことは今後の私自身の研究にとって，特に，海外との大きな繋がりを実感できたという意味でも大変有意義であった」等の声が聞かれ，一定の成果が窺える。

以上から，この観点の状況は目標に照らして相応である。

## 2　教育・学生交流

**実施体制**

**実施体制**　「上越教育大学における国際交流・留学生交流のあり方」の基本方針を推進するため，国際交流委員会を設置している。

海外協定校との教育交流活動については，国際交流推進室の中に研修プログラム部会を設け，実施している。

また，協定校との連携を継続的かつ円滑に行うため，国際交流推進室の中にコーディネーター(協定校担当者)部会を設け，協定校毎に担当教員を配置している。

学生の短期海外研修については，国際交流委員会の中に学生交流専門部会を設け，実施している。

外国人留学生の受入れ・支援及び地域と連携した外国人留学生交流支援については，国際交流推進室の中に留学生支援部会を設け，また上越地区の国際交流を目的とした上越国際交流協会に教職員を幹事として3名派遣し，企画運営に携わっている。この協会は，もともと市長や学長などが加わった民間団体であったが，その後発展を遂げ，地域に根を下ろした国際交流活動を行っている。

留学生数の増加を受けて，担当教員の業務量が大幅に増加しているため，「留学生指導担当教官」の定員を平成14年度まで文部科学省へ要求していたが，現在では国際交流担当職員(副学長相当)の設置確保が決定している。

以上から，この観点の状況は目標に照らして相応である。

**活動目標の周知・公表**　国際交流推進室の設置式を平成14年に，マスコミ・学外支援者を招いて行い，その中で「上越教育大学における国際交流・留学生交流のあり方」の基本方針の趣旨説明を行った。

海外協定校との教育交流活動については，「大学間交流協定校との交流推進」を目標に掲げ，教授会及び各教員部会，学生にはオリエンテーション及び渡航前講義で，趣旨を説明している。

学生の短期海外研修については，「学生の海外派遣の充実」を目標に掲げ，周知している。また，「参加者募集案内」等を通じて，学生に目的や趣旨を周知し，修了後，活動報告をホームページに掲載している。

外国人留学生の受入れ・支援については，「留学生受入れの推進」を目標に掲げ，周知している。また，留学生には，入学時オリエンテーション等で周知している。

地域と連携した外国人留学生交流支援については，活動の案内等をメール等で留学生に周知している。また，上越国際交流協会が発行している「月刊情報 JOIN」及び約500名に配信されるメールマガジン「JOIN」に留学生・国際交流係が活動の案内の原稿を作成し，会員に周知している。また，会員以外には，活動の規模や内容に応じて地方新聞に案内を依頼している。

以上から，この観点の状況は目標に照らして相応である。

**改善システムの整備・機能**　学生の短期海外研修については，毎年報告書を作成し，成果と課題を明らかにした

上で，学生交流専門部会が改善を行う。

海外協定締結校との教育交流活動については，コーディネーターが，毎年1回以上各交流協定校へ出張し，相手校の関係者や当該国の留学生から直接話し合うことにより，活動状況や問題点を把握している。特に，韓国教員大学校については，終了後に，反省会を開き，参加した学生から直接意見を聴取し，次回への改善につなげている。

外国人留学生の受入れ・派遣については，全学的なアンケート調査を平成10年度及び14年度に，在籍している外国人留学生・卒業した外国人留学生・留学生指導員を対象に実施している。また，日常的には日本語日本事情担当教員，留学生・国際交流係，日本語担当講師（学外者）がミーティングを通して情報を収集し，状況に応じて，個別に対応したり，それぞれが所属する各種委員会を通じて改善を図っている。

地域と連携した外国人留学生交流支援について，日本語日本事情担当教員と留学生・国際交流係が，上越国際交流協会の幹事と留学生支援部会の構成員を兼ねることで，情報収集と改善とを行っている。

以上から，この観点の状況は目標に照らして相応である。

## 活動の内容及び方法

**活動計画・内容**　海外協定校との教育交流活動である海外教育研究は，「平成14年度海外教育（特別）研究タイムスケジュール」を策定し，実施している。

内容については，海外協定校との1年間の短期留学生の受入れ・派遣，韓国教員大学校との教育交流事業，授業科目「海外教育（特別）研究」による短期海外派遣，地域との留学生の交流について「上越教育大学国際交流のつどい」の開催を行う。

以上から，この観点の状況は目標に照らして相応である。

**活動の方法**　海外協定校との教育交流活動については，1年間の短期留学生の派遣・受入れを行っているが，平成13年度からは，韓国教員大学校と約2週間程度，学生の派遣及び留学生の受入れを行い，研修を行っている。資金については，「ロータリー米山奨学金」等の奨学寄附金から寄附を受けている。

単位互換制度については現在検討中であるが未だ実施されていない。

学生の短期海外研修については，「海外教育（特別）研究」を授業科目として開講し，年に1回実施している。資金については「国際交流推進後援会」から寄附を受けている。また，海外派遣を促進するため，相手国の言語を学ぶ機会を作る必要があるとの考えから，授業科目「韓国語」と「中国語」の開設，コーディネーターが顧問となっている「英語クラブ」の立ち上げ等を行い，アイオワ大学からの教員によって指導され，少人数ではあるが英語能力の向上に向かって努力している。また，国際交流推進室内に各海外交流協定校の留学案内等の資料を整理し，希望者に閲覧させている。

留学生に対する支援については，国際学生宿舎の整備，「ロータリー米山奨学金」や「上越国際交流協会奨学金」などの外部の奨学金の獲得などを行っている。

しかし，留学生指導担当教官は，現在未措置となっている。

地域と連携した外国人留学生交流支援については，年に1回「上越教育大学国際交流のつどい」を開催し，留学生，市民，日本人学生，大学職員との交流の場となっている。

「国費教員留学生指導教官」及び「留学生指導教官」の間に情報交換ネットワークを構築し，指導教員同士の情報交換，事務からの連絡等，留学生への指導に利用している。

以上から，この観点の状況は目標に照らして相応である。

## 活動の実績及び効果

**活動の実績**　海外協定校との教育交流活動のうち，短期留学生の派遣については，平成10年度1名，平成11年度1名，平成12年度1名，平成13年度0名，平成14年度1名の計4名である。受入れについては，平成10年度1名，平成11年度2名，平成12年度1名，平成13年度1名，平成14年度1名の計6名である。

また，平成13年度に開始した韓国教員大学校との受入れ・派遣については，平成13年度は派遣が10名，受入れが10名，平成14年度は派遣が0名，受入れが14名である。

学生の短期海外研修については，平成10年度イギリスへ30名，平成11年度アメリカへ28名，平成12年度中国へ35名，平成13年度韓国へ20名，平成14年度オーストラリアへ27名である。

外国人留学生の受入れについては，平成10年度27名，平成11年度31名，平成12年度41名，平成13年度39名，平成14年度45名である。

「上越教育大学国際交流のつどい」の参加者は，平成10年度100名，平成11年度100名，平成12年度110名，平成13年度110名，平成14年度120名である。

以上からこの観点の状況は目標に照らして，相応である。

**活動の効果**　海外協定校との教育交流活動及び学生の短期海外研修について，終了後の報告書や感想から，参加者等の成果や満足度が高いことがわかる。

韓国教員大学校との教育交流について，事後のアンケートから，学生が研修に満足していることがわかる。

外国人留学生の支援について，平成14年度にアンケートを行ったところ，「やや不満」が22.7%あるが，「やや満足」「非常に満足」を合わせて63.6%が満足している。

海外協定校への留学について，単位互換制度がないために帰国後留年を余儀なくされる学生もおり，留学への抑止力になっているが，当該大学はその問題を自覚し，改善に向けて現在努力している。

また，「外国人留学生に関する調査報告書－今後の支援

の在り方に向けて－第1回調査（平成14年度）」は，国際交流推進室・留学生支援部会によって報告されており，当該活動の効果の一端を知ることができる。

以上から，この観点の状況は目標に照らして相応である。

## 3　国際会議等の開催・参加

### 実施体制

**実施体制の整備・機能**　当該大学が国際会議等を開催する場合，その都度準備委員会等を発足させ，対応している。

国際会議等の参加については，教員の所属する学会を通して行われることが多く，国際交流委員会では，個別の案件について審議等は行っていない。

事務組織では，庶務課研究協力室が，国際研究集会の公募・申請等，及び科学研究費補助金の手続き並びに学長裁量経費に関する外国派遣の申込等を行っている。

また，教務課留学生・国際交流係が，交流協定に関するシンポジウム，外国への派遣等を行っている。

総じて，当該活動に関する実施体制は十分とは言えず，改善の余地がある。

以上から，この観点の状況は目標に照らして相応である。

**活動目標の周知・公表**　「上越教育大学における国際交流・留学生交流の在り方」の中で，「本学の担い手となる若手研究者を中心に国際会議等へ積極的に派遣する」との目標をたて，教授会や各教員部会において，学内に周知している。

各教員の個別の活動に関しては，学報並びに年次報告書に掲載し，周知している。

以上から，この観点の状況は目標に照らして相応である。

**改善システムの整備・機能**　改善システムとして国際交流推進室を設置しているが，端緒についたばかりである。国際会議では，実施終了後，担当者から報告書が提出され，次回の改善に活かしているが，情報の具体的な収集方法等については未だ確立しているとは言えず，改善の余地がある。

以上から，この観点の状況は目標に照らして相応である。

### 活動の内容及び方法

**活動計画・内容**　国際会議の開催に関して，明確な活動計画は策定しておらず，各教員による国際会議等への参加も，個々の教員の自主性に任せ，国際交流推進室を中心に支援している。

国際会議への参加は，国際研究集会，国際交流協定による国際会議・シンポジウム，国際学術組織との交流によるセミナー・ワークショップ，その他の会議に分けられる。

以上から，この観点の状況は目標に照らして相応である。

**活動の方法**　資金に関しては，科学研究費補助金の斡旋や申請書の記述方法の指導，国際交流推進後援会による寄附，学長裁量経費の適用などを行い，支援している。

以上から，この観点の状況は目標に照らして相応である。

### 活動の実績及び効果

**活動の実績**　大学で開催する国際研究集会として，平成10年度に2件，平成13年度に1件，平成14年度に1件開催している。

国際交流協定による国際会議については，平成10年度に1件，平成13年度に1件開催している。

国際学術組織との交流によるセミナー等については，平成12年度に4件参加している。

その他の国際会議への参加については，平成10年度18件，平成11年度16件，平成12年度45件，平成13年度22件，平成14年度24件である。

以上から，この観点の状況は目標に照らして相応である。

**活動の効果**　研究発表や報告書により，成果を社会に還元している。

また，交流による成果は，年次報告書に記載される他，「国際交流体験演習」や「国際理解教育演習」等の異文化理解科目や国際理解を深める科目の開設など，カリキュラム作成に反映している。なかでも，国際シンポジウム「東アジア地域における新しい歴史表象をめざして」のように，刊行物として市販された成果もある。

以上からこの観点の状況は目標に照らして相応である。

## 4　国際共同研究の実施・参画

### 実施体制

**実施体制の整備・機能**　国際共同研究については，教員の所属する学会を通して行われることが多く，国際交流委員会では，特に審議等は行っていない。

事務組織としては，教務課留学生・国際交流係が，国際交流協定による共同研究，庶務課研究協力室がその他の国際共同研究を担当している。

特に，米国理解プロジェクトは，学長が団長となってアメリカ東部を訪れるなど大きな事業であるが，この事業に対して教務課と会計課が支援を行っている。

以上から，この観点の状況は目標に照らして相応である。

**活動目標の周知・公表**　「上越教育大学における国際交流・留学生交流の在り方」の中で，「本学の研究水準を高度なものとするため，海外の第一線の研究者との共同研究を推進する」及び「協定校の研究者との共同研究の可能性を探るため，コーディネーターを中心に情報を交換し，積極的に共同研究を推進する」との目標をたて，教授会や各教員部会において，学内に周知している。

以上から，この観点の状況は目標に照らして相応である。

**改善システムの整備・機能**　交流校との共同研究に関する共同研究の情報や問題点等は，コーディネーターが収

集し，次回の実施に活かしている。

以上から，この観点の状況は目標に照らして相応である。

## 活動の内容及び方法

**活動計画・内容**　国際共同研究の実施・参画に関しては，基本的には各教員が所属する組織との関係において立案実行しているため，明確な活動計画は策定していないが，国際共同研究を実施・参画することは，当該大学の国際連携に寄与しているとの考えから，国際交流推進室を中心に支援を行っている。

内容的には，各種団体等との共同研究，科学研究費補助金による共同研究，交流協定による共同研究，その他の共同研究を行っている。

以上から，この観点の状況は目標に照らして相応である。

**活動の方法**　国際交流推進室にコーディネーターを置き，各協定校の研究者との共同研究の可能性を探るため，情報を交換する等の支援を行っている。特に最近では，アイオワ大学との共同研究を実施している。

資金に関しては，科学研究費補助金の斡旋，国際交流推進後援会による寄附，学長裁量経費の適用などを行っており，また，上越教育大学国際交流推進講演会を新規に設立し，資金援助を行っている。

また，米国理解を促す小中高等学校の教材開発と教員の国際感覚を磨くことを目的とし，米日財団の資金援助を受けて，「米国理解プロジェクト」を平成10年から当該大学で主体的に実施している。

以上から，この観点の状況は目標に照らして相応である。

## 活動の実績及び効果

**活動の実績**　各種団体等による国際共同研究は，平成10年度11件，平成11年度12件と，平成11年度以前に行われた米国理解プロジェクトへの参加教員が多かったため，例年に比べて多数であったが，平成12年度2件，平成13年度1件，平成14年度2件と例年並みに戻っている。他に多年度継続（上越教育大学米国理解プロジェクト研究）として1件実施している。

科学研究費補助金による国際共同研究は，平成12年度1件，平成13年度1件，平成14年度1件，他に多年度継続として1件の計4件である。

国際交流協定による国際共同研究については，平成12年度3件である。

その他の国際共同研究については，平成11年度4件，平成12年度4件，平成13年度5件，平成14年度6件，他に多年度継続として13件の計32件である。

以上から，この観点の状況は目標に照らして相応である。

**活動の効果**　当該大学の所属教員数に対して，参画者数は延べ68人であり，単科の教育大学としては多い。

また，教員各自が国際共同研究に参画することにより他文化理解が進み，異文化理解科目（「コミュニケーション英語」，「中国語・中国事情」，「アメリカ事情」，「韓国文化論」等）や国際理解を深める科目（「総合演習（多文化社会論）」，「国際交流体験演習」，「国際教育概論」，「国際理解教育演習」，「国際理解教育特論」，「アジア音楽概論」，「音楽文化論」等）の開設など，国際感覚豊かな初等中等教育教員づくりと大学改革に繋がっている。

以上から，この観点の状況は目標に照らして相応である。

# Ⅵ　評価項目ごとの評価結果

上越教育大学の「国際的な連携及び交流活動」について，当該大学の目的及び目標に照らして行った活動の分類（教職員等の受入れ・派遣，教育・学生交流，国際会議等の開催・参加，国際共同研究の実施・参画）ごとの評価結果を，評価項目単位で整理し，以下のとおり，評価項目ごとの評価を行った。なお，上記の活動の分類の他に，国際交流の促進・支援が当該大学より挙げられていたが，これについては，他の活動の分類との内容の重複があったため，活動の分類としては評価を行わなかった。

## 1　実施体制

評価は，実施体制の整備・機能，活動目標の周知・公表，改善システムの整備・機能の各観点に基づいて，目的及び目標の達成に貢献するものとなっているかについて行った。

### ◇目的及び目標の達成への貢献の状況

実施体制の整備・機能の観点では，国際的な連携及び交流活動に関して，国際交流委員会及び国際交流推進室と3つの専門部会（コーディネータ部会，留学生支援部会，研修プログラム部会）が中心となり，教務課留学生・国際交流係等の事務組織と連携しており，全ての活動の分類において「相応である」と判断した。

活動目標の周知・公表の観点では，平成14年度に国際交流推進室の設置式を行い，その中で「上越教育大学における国際交流・留学生交流のあり方」の基本方針の趣旨説明を行っており，全ての活動の分類において「相応である」と判断した。

改善システムの整備・機能の観点では，国際交流推進室を中心に，情報の収集及び改善を実施しているが，端緒についたばかりであり，全ての活動の分類において「相応である」と判断した。

これらの評価結果から，総合的に判断し，以下の水準とした。

**貢献の程度（水準）**

目的及び目標の達成に相応に貢献している。

### ◇特に優れた点及び改善を要する点等

国際交流推進室及びその下にコーディネーター部会，留学生支援部会，研修プログラム部会の3つの専門部会を設置し，国際的な連携及び交流活動に関して，情報の周知や問題点等の収集及び改善への検討など横断的かつ円滑に推進している点は，特色ある取組である。

## 2　活動の内容及び方法

評価は，活動計画・内容，活動の方法の各観点に基づいて，目的及び目標の達成に貢献するものとなっているかについて行った。

### ◇目的及び目標の達成への貢献の状況

活動の計画・内容の観点では，全ての活動の分類において「相応である」と判断した。

活動の方法の観点では，全ての活動の分類において「相応である」と判断した。

これらの評価結果から，総合的に判断し，以下の水準とした。

**貢献の程度（水準）**

目的及び目標の達成に相応に貢献している。

### ◇特に優れた点及び改善を要する点等

交流協定校である韓国教員大学校と相互の留学生を約2週間受入れ及び派遣を行う教育交流事業や，授業科目「海外教育（特別）研究」を開設し，年1回短期海外研修を実施している点は特に優れている。

## 3　活動の実績及び効果

評価は，活動の実績，活動の効果の各観点に基づいて，目的及び目標で意図した実績や効果がどの程度挙がったかについて行った。

### ◇目的及び目標で意図した実績や効果の状況

活動の実績の観点では，全ての活動の分類において「相応である」と判断した。

活動の効果の観点では，全ての活動の分類において「相応である」と判断した。

これらの評価結果から，総合的に判断し，以下の水準とした。

#### 実績や効果の程度（水準）

目的及び目標で意図した活動の実績や効果が相応に挙がっている。

### ◇特に優れた点及び改善を要する点等

ここでは，活動の分類ごとの評価結果から特に重要な点を，特に優れた点，改善を要する点，問題点として記述することとしていたが，該当するものがなかった。

## ◇ 特記事項

※ 大学等から提出された自己評価書から転載

多文化共生時代を迎えて，グローバル化とともに「教育の国際化」の進展が著しい 21 世紀の今日，正に大学は世界に開かれた存在であり，ユニバーサルな特色を如実に示さなければならない。また，我が国に対する国際的期待は強く，我が国の国際的に果たすべき役割も，ますます重要となってきている。特に国家の存立と繁栄を諸外国との円滑な関係の維持・発展に依存している我が国としては，各分野における国際交流を通じて，諸外国との間に相互理解を増進し，相互信頼に基づいた友好関係を築いていくことが極めて重要であることは言うまでもない。

我が国と諸外国相互の研究・教育の国際化・活性化をさらに促進するとともに，国際理解の推進と国際協調の精神の醸成に寄与するという観点から，多文化・多国籍社会を形成しつつある教育現場においては，国際理解・異文化理解教育が重要な課題となり，異文化理解マインドをもった教員への社会的要請が高まってきた。

異文化理解マインドを持った教員は，教育現場において，豊かな国際感覚・国際協調の精神を持った子どもたちを育成することになる。

教員養成大学である本学においては，これまでの教師教育に加え，今後は異文化理解に関する研究と教育を推進し，異文化理解マインドをもった教員を養成していくことが急務と考える。

また，単に国際理解・国際協調の精神を培うことに留まらず，教育内容・教育実践を通じての学術的な交流，共同研究などを通じての真の意味における教育の国際化を推進することが，ひいては，我が国の果たすべき国際的な役割の一貫であると考えられる。

初等教育教員養成課程という全教科をマスターし，教職生活を将来送る教師の資質として，異文化理解マインドを培うためには，これまで以上に英語をはじめ，諸外国語の習得が必要である。そのために，欧米諸国の諸大学との協定による短期留学生派遣に力を入れるとともに，多くの留学生を受け入れ，その研究生活を充実させ，本学学生の国際交流に向けてのコミュニケーション能力，特に発信能力に熟達する機会を増やさなければならない。

以上のことを踏まえて，さらに具体性を持った課題として次のような事項を掲げておきたい。

1. 欧米諸国との交流とともに，本学のある上越地域は日本海を挟んで，東北アジア諸国と接し，韓国・中国・極東ロシア・モンゴルなどとの国際連携を行うには地理的・歴史的な立地条件は，優位にある。現在の交流協定校である韓国教員大学校・ハルビン師範大学・北京師範大学など教員養成系大学との留学生交流，短期留学生交流をはじめ，学術交流・共同研究の将来性は十分に展望できる状況にある。
2. 本学学校教育学部附属中学校は，韓国ソウル市の中学校との交流を通じて，教員並びに生徒同士の国際交流を図りつつ，異文化理解マインドを培い，国際理解・国際協調の精神を育成してきた。今後，継続される日韓交流であるが，教育実践研究の立場からも日韓の大学研究者も加わり，教育の国際化の観点から，国際共同研究を推進することが考えられる。
3. 教員養成系単科大学が教員養成に特化して国際連携を行うためには，留学生指導担当教員を配置することが急務であるが，さらに，立ち上がったばかりの国際交流推進室の機構と活動の充実が期待される。

# 「教育学系」教育評価報告書

## （平成１３年度着手　分野別教育評価）

**上越教育大学学校教育学部**

平成１５年３月

大学評価・学位授与機構

# ◇ 大学評価・学位授与機構が行う大学評価

## ○機構の行う評価について

### 1　評価の目的

大学評価・学位授与機構（以下「機構」）が実施する評価は，大学及び大学共同利用機関（以下「大学等」）が競争的環境の中で個性が輝く機関として一層発展するよう，大学等の教育研究活動等の状況や成果を多面的に評価することにより，①その教育研究活動等の改善に役立てるとともに，②評価結果を社会に公表することにより，公共的機関としての大学等の諸活動について，広く国民の理解と支持が得られるよう支援・促進していくことを目的としている。

### 2　評価の区分

機構の実施する評価は，平成 14 年度中の着手までを試行的実施期間としており，今回報告する平成 13 年度着手分については，以下の 3 区分で，記載のテーマ及び分野で実施した。

① 全学テーマ別評価（教養教育（平成 12 年度着手継続分），研究活動面における社会との連携及び協力）
② 分野別教育評価（法学系，教育学系，工学系）
③ 分野別研究評価（法学系，教育学系，工学系）

### 3　目的及び目標に即した評価

機構の実施する評価は，大学等の個性や特色が十二分に発揮できるよう，当該大学等が有する目的及び目標に即して行うことを基本原則としている。そのため，大学等の設置の趣旨，歴史や伝統，人的・物的条件，地理的条件，将来計画などを考慮して，明確かつ具体的に目的及び目標が整理されることを前提とした。

## ○分野別教育評価「教育学系」について

### 1　評価の対象組織及び内容

このたびの評価は，設置者（文部科学省）から要請のあった 6 大学の学部，研究科（以下「対象組織」）を対象に実施した。

評価は，対象組織の現在の教育活動等の状況について，原則として過去 5 年間の状況の分析を通じて，次の 6 項目の項目別評価により実施した。

1) 教育の実施体制
2) 教育内容面での取組
3) 教育方法及び成績評価面での取組
4) 教育の達成状況
5) 学習に対する支援
6) 教育の質の向上及び改善のためのシステム

### 2　評価のプロセス

① 対象組織においては，機構の示す要項に基づき自己評価を行い，自己評価書（根拠となる資料・データを含む。）を機構に提出した。
② 機構においては，専門委員会の下に評価チームを編成し，自己評価書の書面調査及び対象組織への訪問調査を実施した。

なお，評価チームは，各対象組織により，教育目的及び目標に沿って評価項目の要素ごとに独自に設定された観点に基づき分析を行い，その分析結果を踏まえ，要素ごとに教育目的及び教育目標の実現に向けた貢献（達成又は機能）の程度を判断し，それらを総合的に判断した上で項目全体の水準を導き出した。

③ 機構は，これらの評価結果を踏まえ，その結果を専門委員会で取りまとめた上，大学評価委員会で評価結果を決定した。
④ 機構は，評価結果に対する意見の申立ての機会を設け，申立てがあった対象組織について，大学評価委員会において最終的な評価結果を確定した。

### 3　本報告書の内容

**「Ⅰ 対象組織の現況及び特徴」**，**「Ⅱ 教育目的及び目標」**及び**「◇ 特記事項についての所見」の「対象組織の記述」**欄は，対象組織から提出された自己評価書から転載している。

**「Ⅲ 評価項目ごとの評価結果」**は評価項目ごとに，貢献（達成及び機能）の状況を要素ごとに記述している。

また，当該評価項目の水準を，これらの状況から総合的に判断し，以下の 5 種類の「水準を分かりやすく示す記述」を用いて示している。

- 十分貢献（達成又は機能）している。
- おおむね貢献（達成又は機能）しているが，改善の余地もある。
- かなり貢献（達成又は機能）しているが，改善の必要がある。
- ある程度貢献（達成又は機能）しているが，改善の必要が相当にある。
- 貢献しておらず（達成又は整備が不十分であり），大幅な改善の必要がある。

なお，これらの水準は，対象組織の設定した教育目的及び目標に対するものであり，相対比較することは意味を持たない。

また，評価項目全体から見て特に重要な点を，「特に優れた点及び改善点等」として記述している。

**「Ⅳ 評価結果の概要」**は，評価結果を要約して示している。

**「Ⅴ 意見の申立て及びその対応」**は，評価結果に対する意見の申立てがあった対象組織について，その内容を転載するとともに，それへの機構の対応を示している。

**「◇ 特記事項についての所見」の「機構の所見」**欄は，対象組織が記述している特記事項について，評価項目ごとの評価結果を踏まえて所見を記述している。

### 4　本報告書の公表

本報告書は，大学等及びその設置者に提供するとともに，広く社会に公表している。

# Ⅰ　対象組織の現況及び特徴

※　対象組織から提出された自己評価書から転載

## 1．現況

（1）機関名　上越教育大学

（2）学部名　学校教育学部

（3）所在地　新潟県上越市山屋敷町１番地

（4）課程構成

初等教育教員養成課程（学校教育専修）
〃　（幼児教育専修）
〃　（教科・領域教育専修）

（5）学生数及び教員数

①　学生数

715名（初等教育教員養成課程）

②　教員数

214名（附属教員含む）

## 2．特徴

上越教育大学は，学校教育に関する理論的でかつ実践的な教育研究を推進するために，昭和53年10月に開学した，いわゆる「新構想の教育大学」である。教員には教科に関する専門的な学力はもちろんのこと，教育者としての使命感，人間愛に支えられた広い一般教養，教育の理念・方法及び人間の成長や発達についての深い理解，優れた教育技術等専門職としての高度な資質能力が必要不可欠である。本学は，これらの要請に積極的に応えるため，教育の最も基本を形成する初等教育教員の養成を行う学部と，初等中等教育諸学校教員に研究・研鑽の機会を提供する大学院（修士課程）を備えた「教員に開かれた大学院を中心とする新しい大学」として創設された。

学部の教育は，このような新構想の理念に基づき，特に１年次から４年次までの連続的で系統的な教育実習や専門セミナー等に代表される少人数教育システムの導入をはじめ，教育実践力の育成強化のための様々な活動を展開しており，本学独自の内容と方法を誇っている。創設20年あまりの歴史しかないものの，本学学部教育の成果は，各都道府県教育委員会等からも高く評価されており，近年における本学の教員採用率は常に１位ないしトップクラスを維持しているが，この点は，本学学部の刮目すべき実績並びに特徴である。また，大学院（修士課程）も，上記の本学設置の趣旨に基づき，主として初等中等教育の実践に関わる高度な総合的・専門的研究能力を育成し，学校教育の場における教育研究の推進者を養成すること（高度な「専門職業人」の育成）を目的として，「初等中等教育諸学校で３年以上の教職経験を有する者に入学定員枠の３分の２程度」を充て，現職教員の再教育に務めている。この点も，本学の大きな特徴の一つとして指摘できよう。

平成８年４月には，本学，兵庫教育大学，鳴門教育大学及び岡山大学を構成大学とする「兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科（博士課程）」が教員養成系大学・学部としては初めて設置された。この大学院（博士課程）は，各構成大学大学院（修士課程）の実績を踏まえつつ，学校教育における教育活動と教科の教育に関する実践的研究を行い，この分野における研究者と指導者を養成することを目的としている。上越教育大学は，かかる大学院（博士課程）の設置をもって，学部と大学院修士課程及び博士課程を擁する教育総合大学としての体制を整え，今日に至っている。教員養成系大学・学部として，数少ない博士課程を包摂した教育総合大学としての組織形態もまた本学の特徴である。

上越教育大学は，これまでの実績を踏まえつつも，激動する21世紀の教育を担い得る指導的な人材を，より積極的に育成するために，平成12年４月に専攻・コースの抜本的な再編，専攻別入学定員の変更等の改組を実施し，現在も継続してかかる改革を推進している。改革の基本理念は，新構想の理念を更に発展させ，特に現代の複雑さを増している教育諸問題と諸課題に臨床的に対処できる一層高度な教育研究の推進者を養成し，教育の実践・研究の両面において，我が国をリードすることのできる基幹的な大学・大学院となることを目指すものである。そのために展開されている「学部・大学院の連続的学習」や「学部学生と大学院学生との合同授業・共同研究」をはじめ，他の大学・学部には類をみない独創性豊かな種々の実践的・臨床的な教育研究活動は，まさに本学を象徴する特色の一つであろう。

このように，上越教育大学は，21世紀をリードする学校教育研究の拠点（センター・オブ・エクセレンス：COE）となり，日本の学校教育を先導的に改革し，その質的向上を図る新教育大学を目指している。

# Ⅱ　教育目的及び目標

※　対象組織から提出された自己評価書から転載

## 1．教育目的

本学学校教育学部は，初等教育教員に対する社会的要請に応えるべく，深い人間理解と豊かな学識を備えた初等教育教員を養成することを目的とする。そのため，教職への関心と意欲を持つ学生を全国から広く募り，臨床的考察に基づく人間理解と実践力とともに，人文科学・社会科学・自然科学・芸術・スポーツについてバランスのとれた専門的な能力を育成するような教員養成教育を提供することにより，教育者としての使命感と人間理解を含む深い学識に支えられた臨床的な実践力を持った初等教育教員を養成する。

## 2．教育目標

前項の目的で示した意図を実現し，教育に関わる臨床的な実践力を修得させるために取り組むべき教育目標として以下に示す具体的な課題を設定している。

(1) 教育の実施体制

・ファカルティ・ディベロップメントを推進し，関係講演会等の実施により充実を図る。
・大学概要，大学案内，各種広報関係書類等の充実を図り，その配付と周知を徹底する。
・アドミッション・ポリシーの明確化を図るとともに個性豊かな学生を選抜するための多様な入学者選抜方法を確立し，不断の検討・改善を行う。
・入試情報を開示し，大学説明会を効果的に実施する。
・初等教育教員を希望する者の入学を促進する。

(2) 教育内容面での取組

・学校教育における臨床的実践力を育成する科目の充実を図り，さらに大学院教育と連携したカリキュラムを開発する。
・十分な基礎学力を保証するとともに初等教育の教科専　門性を培い，さらに専門科目の橋渡しをする科目の充実を図る。
・ガイダンスを一層充実したものとすることによって，指導教官の選定の過程を明確にし，教育課程を効果的に展開する。
・シラバスの内容を定期的に点検し，充実に努める。
・１年次から実施される教育実地研究（教育実習）の充実を図る。
・教員養成実地指導講師による現職教員等を活用した科目を充実する。
・図書館の利用状況を把握し，蔵書の整備及び電子図書館的機能を充実する。

(3) 教育方法及び成績評価面での取組

・学生による授業評価を実施し，成績評価の基準を明確にする。
・情報処理センターを中核とした各種ネットワーク施設の運用を促進し，多様な授業での活用を図る。
・大学院学生をティーチングアシスタントとして積極的に利用する。

(4) 教育の達成状況

・教員に今後ますます必要とされてくる臨床的な実践力を身に付けさせる。
・留年者数を減じる。
・各種免許取得率を高める。
・卒業後の教育・研究活動の支援体制を充実する。

(5) 学習に対する支援

・教育相談・心理相談に係る支援体制を充実する。
・学生に児童・生徒とふれあい，共に学ぶ機会を提供する。
・学生の就職希望・内定状況等を把握し，就職指導を徹底する。
・県内外の教育行政担当者，教員を講師とする「教職講座」の充実を図る。
・学生の教室等における視聴覚機器，情報サービス機器の活用状況を把握し，整備・充実する。
・各種研修（新入生合宿研修及び教員養成課程学生合宿研修等）の充実を図る。

(6) 教育の質の向上及び改善のためのシステム

・学内外の研究者及び初等中等教育諸学校教員とともに実施する共同研究を促進する。
・学生による授業評価等を取り入れた評価システムを構築する。
・授業評価を積極的に公開し，授業に結びつける改善システムを構築する。
・教育研究支援経費等の配分がより効果的になるように改善する。
・本学教員の採用において人材を広く確保し得るように教員選考基準の見直しを図る。

# Ⅲ　評価項目ごとの評価結果

## 1．教育の実施体制

この項目では，対象組織における「教育の実施体制」について，「教育実施組織の整備に関する取組状況」，「教育目的及び目標の趣旨の周知及び公表に関する取組状況」及び「学生受入方針（アドミッション・ポリシー）に関する取組状況」の要素ごとに教育目的及び目標の実現に向けた貢献の程度を判断し，それらを総合的に判断した上で項目全体の貢献の程度を評価し，水準を導き出したものを示している。また，特に重要な点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

### ◇目的及び目標の実現への貢献度の状況

**【要素１】教育実施組織の整備に関する取組状況**

初等教育教員に対する社会的要請に応えるために教育組織を改善し，カリキュラムの再編を積極的に行っている点，とくに「実践的人間理解」，「教科の専門性」，「臨床的な教育実践力の育成」を柱とするカリキュラムの再編を行うなどの積極的な取組は，優れている。

学習臨床コース及び発達臨床コースの新設は，「臨床的な実践力を持った初等教育教員の養成」という教育目的に沿った，特色ある取組である。

教育課程を編成・改善する組織として，企画委員会や教育課程検討専門部会が置かれており，中心的役割を果たしている点は，評価できる。

教育実習実施組織体制として，教授会及び研究科委員会の専門委員会として教育実習委員会が置かれている。また「教育実地研究（教育実習）」として，教育実地研究Ⅰ～Ⅷ及び幼稚園専修教育実習の計九つの実習科目が用意され，１年次～４年次まで学生自身に多くの実習体験（参観を含む）を重ねており，機能している点は，評価できる。

創設以来，地元の幼・小・中学校（協力校）と本学との連携に基づく教育実習体制は，１校当たりの実習生の人数を少数に押さえ，学校教育活動に関して幅広く実習体験が十分になされるように配慮されており，優れた取組である。

協力校との連携・協力及び教育実習の改善・充実を図るために，教育実習協力校会議，教育実習連絡会及び教育委員会教育長会議が設けられおり，これらに基づいて，各年度の教育実習を反省・評価し，次年度の教育実習を計画する体制がとられており，優れた取組である。

「上越教育大学新任職員研修会」が開かれ，新任・転任以外の職員についても参加を呼びかけ，大学の現状，制度等についての研修の場，大学の教職員としての自覚を培う場が設けられているなど，大学教官のファカルティ・ディベロップメント（FD）に積極的に取り組んでいる点は，優れている。

**【要素２】教育目的及び目標の趣旨の周知及び公表に関する取組状況**

学内外（教職員を含む）に対する教育目標及び目標の趣旨の周知，公表に関する取組は，広報刊行物の配布，ホームページの活用など周知・公表のための創意工夫が行われ，優れている。入学希望者等利用する側の認識の高さについても訪問調査で確認された。

**【要素３】学生受入方針（アドミッション・ポリシー）に関する取組状況**

中核的・指導的な教員の養成を目指すという明確な目標に沿って，学生受入方針（アドミッション・ポリシー）が設定され，機能している点は，優れている。

大学の求める学生像，すなわち，＜個別学力検査等による選抜[前期日程]で求める学生像＞，＜個別学力検査等による選抜[後期日程]で求める学生像＞，＜推薦による選抜で求める学生像＞を明確にする取組は，優れている。

求める学生像にふさわしい学生受入方針に従った，前期日程，後期日程，推薦の各々の特色をもった多様な選抜方法の導入をしている。また，選抜方法の検討のために，「入学者選抜方法研究専門部会」を設け，追跡調査を行い選抜方法改善の努力がなされている点は，評価できる。

以上の状況から，教育の実施体制の項目全体の水準は，教育目的及び目標の達成に十分貢献している。

### ◇特に優れた点及び改善点等

教育実習実施組織体制は，１年次～４年次まで学生自身に多くの実習体験（参観を含む）を重ね，しかも附属学校と公立校の両者の実習を課している点は，優れている。

学内外（教職員を含む）に対する教育目標及び目標の趣旨の周知，公表に関する取組は，広報刊行物の配布，ホームページの活用など周知に向けた創意工夫が行われ，訪問調査の結果からも，優れた取組である。

中核的・指導的な教員の養成を目指すという明確な目標に沿って，学生受入方針（アドミッション・ポリシー）が策定され，機能している点は，優れている。

求める学生像を明確にし，学生入学選抜の方法も多様に特色のある方法を導入している点でも優れている。

## ２．教育内容面での取組

この項目では，対象組織における「教育内容面での取組」について，「教育課程の編成に関する取組状況」，「授業の内容に関する取組状況」及び「施設・設備の整備に関する取組状況」の要素ごとに教育目的及び目標の実現に向けた貢献の程度を判断し，それらを総合的に判断した上で項目全体の貢献の程度を評価し，水準を導き出したものを示している。また，特に重要な点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

### ◇目的及び目標の実現への貢献度の状況

**【要素１】教育課程の編成に関する取組状況**

臨床的実践力の育成を図るために，「教育実践科目」が多く開設されており，臨床的実践力を育成する科目は充実している。これは，「各教科の指導法」，「ガイダンス」，「教育実習」の３つの領域からなり，この３つの領域の指導を通して臨床的実践力を育成するという発想には教員養成に関する社会的要請の実現をめざすという意欲と創意・工夫がみられ，優れた取組である。

「実践セミナー」は，大学院の共通科目にある「実践場面分析演習」と連携しており，教育実習等での疑問点等を現職教員を含む大学院生と合同で討議することによって，臨床的力量を形成することを目指しており，特色ある取組である。

国内外の諸大学との単位互換協定を締結している。特に，平成 14 年度より学習内容の豊富化と幅広い知識修得のため放送大学と単位互換を開始した点は，評価できる。

**【要素２】授業の内容に関する取組状況**

十分な基礎学力を保証するとともに，初等教育全体にわたる教科専門性を培い，各専修・コースの専門科目への円滑な移行・履修を可能にする科目として，「ブリッジ科目」群を設定し，学生に提供している点は，優れている。

人間理解を，体験と観察・参加を通じて実践的に深める「人間教育学関連科目」と「教育実践科目」を関連させ，学部で展開されている各授業と教育実習とを効果的に連携させるという理念は，評価されるが，今後の課題として，「人間教育学関連科目」と「教育実践科目」を関連させ，学部で展開されている各授業と教育実習とを効果的に連携させるという理念が，どのように実現しているか。また，教育実地研究（教育実習）は，教育目的・目標の実現にどのような効果あげているか，その効果を証明するデータの蓄積が期待される。

教員を目指す学生にとって，実践的指導力に優れた現職教員の教育実践体験に触れることによる教育効果は大きい。それ故に，現職教員を積極的に活用した授業科目を設定し学生に提供している点は，優れている。

電子シラバスには，履修登録期限等を記した「学年暦」，「開設授業科目一覧」，「授業時間割」及び「授業概要・目標，履修条件・注意事項，授業計画・内容，成績評価の方法，教科書・参考書」が掲載されており，学生がそれぞれ授業等について検索し，その内容を把握した上で履修登録することができるようになっているが，シラバスの内容と活用法については，さらに充実させる必要がある。

**【要素３】施設・設備の整備に関する取組状況**

学生の学習支援機関として図書館は重要な機能をもっているが，図書館の開館時間はその重要な要素の１つであり，開館時間の延長（平日は 9 時から 22 時まで），電子図書館の充実などの取組は，優れている。

研究・教育情報関係については，情報処理センターが設置され，インターネット接続した学内ＬＡＮ（ＪＵＥＮシステム）が構築されている。また，各教室等にネットワークコンセントが設置され，常にインターネット接続が可能な環境が整えられ，学生は端末機器等接続申請を行うことでこのネットワークを容易に利用することができる体制は，優れている。

以上の状況から，教育内容面での取組の項目全体の水準は，教育目的及び目標の達成におおむね貢献しているが，改善の余地もある。

### ◇特に優れた点及び改善点等

「実践セミナー」は，大学院の共通科目にある「実践場面分析演習」と連携し，教育実習等での疑問点等を現職教員を含む大学院生と合同で討議することによって，臨床的力量を形成することを目指している点は，特色ある取組である。

臨床的実践力を育成する科目の充実，大学院教育と連携したカリキュラムの開発，十分な基礎学力の保証と初等教育全体にわたる教科専門性の涵養，各専修・コース専門の科目への橋渡しを担う科目の充実，教育実地研究（教育実習）の充実は，優れた取組である。

電子シラバスには，履修登録期限等を記した「学年暦」，「開設授業科目一覧」，「授業時間割」及び「授業概要等」が掲載されており，学生がそれぞれ授業等について検索し，その内容を把握した上で履修登録することができるようになっているが，シラバスの内容と活用法については，さらに充実させる必要がある。

## ３．教育方法及び成績評価面での取組

この項目では，対象組織における「教育方法及び成績評価面での取組」について，「授業形態，学習指導法等の教育方法に関する取組状況」，「成績評価法に関する取組状況」及び「施設・設備の活用に関する取組状況」の要素ごとに教育目的及び目標の実現に向けた貢献の程度を判断し，それらを総合的に判断した上で項目全体の貢献の程度を評価し，水準を導き出したものを示している。また，特に重要な点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

### ◇目的及び目標の実現への貢献度の状況

**【要素１】授業形態，学習指導法等の教育方法に関する取組状況**

授業形態については，１年次から演習・実習に重点を置いて，初等教育教員を目指す大学としての体験重視の方向性を打ち出している。また，授業規模（人数）を授業内容によって分類しバランスを考慮しており，優れた取組である。

現職教員を含む大学院生が加わる授業において，積極的に討論がなされることにより，臨床的な実践力の充実が図られ，学部学生，大学院生，大学教官のそれぞれに影響を与えており，特に優れた点である。

専任教官が学生の質問や相談を受ける「オフィスアワー」の開設，学生の主体的な自主学習に対する支援体制の整備（例，教職講座の開設，フレンドシップ事業の展開）を行っており，優れた取組である。

学年末に学生の履修状況を把握し，履修状況が思わしくない学生に対しては，専修・コースのクラス担当教官あるいはゼミ指導教官を通じて履修指導を個別に行い，次年度の計画的な履修を促している。また，２年次及び４年次進級の条件を設定し，初等教育教員にとって必要な知識・技能の修得を保証するよう努めるとともに，卒業時においては本学の担う社会的役割を果たすための教育的対応として再試験制度を導入するなど工夫されており，優れた取組である。

教育実習への配慮として，１年次から４年次へと連続した教育実地研究Ⅰ～Ⅷが設定され，大学教員に加え，現職校長や元校長等の参加により，実習と有機的に結びつけた講義・演習を行っている点は，優れた取組である。

数多く採用された教員養成実地指導講師による講義は，臨床的な内容や技能を多く含み，これらの講義も教育実習を直接支えるものとなっている。実習後においても，実習時の授業のビデオを視聴して議論するという講義も行い，講義・演習と実習とが関連付くよう工夫されており，優れた取組である。

**【要素２】成績評価法に関する取組状況**

成績の判定に用いる評価基準を得点化して明確にし，これを学部全体で共通のものとして利用している。また，各講義・演習・実習について，どのような手続きで成績評価を行うかについては，電子シラバスに掲載し，学生が履修を検討する際に知ることができるようにしている点は，評価できるが，なお工夫の余地がある。

成績評価の基準を全学生に配付する『履修の手引』に明記することで，一貫性を保つよう努めているほか，平成14年度より成績優秀者を学生表彰することで，学生がより良い成績を目指すことを奨励することにも努めている点は，評価できる。

**【要素３】施設・設備の活用に関する取組状況**

ほとんどの教室にビデオ機器が備えられ，教員や大学院学生が実際の学校現場を記録したビデオを学部の講義・演習・実習の中で積極的に教材として活用できるよう整備されている点は，優れている。

附属学校園において，教育実習時だけでなく，通常の講義・演習の中でも，授業等を学生に観察させるといった経験をできるだけ多く取り入れるよう努めている。また，附属実技教育研究指導センターについては，その利用を講義と連携させ，さらに実力認定を行っている。同センター主催の外部講師によるセミナーも，学生の実技指導の実力向上に貢献している。このほか，教育実習に直接関わる講義・演習には，学校教育総合研究センターが活用され，学生の実践力を高めるよう努めている点は，評価できる。

附属図書館では，初等・中等学校での授業，あるいは教育実習に関わるビデオ教材も備えており，各科指導法の講義等の際にこれらビデオ教材を指示することで，講義が臨床的実践力の育成に沿ったものとなるようにしており，優れた取組である。

附属図書館，学校教育総合研究センター及び Placement Plaza（就職相談室）には，教科書，教師用指導書等を配備し，学生が教育実習等に関わり教材研究をいつでも行えるようにしている。学校教育総合研究センターは，現職教員及び教育実習生の授業のビデオを多数収蔵し，ほとんどのビデオに対して学習指導案・授業記録等が添付され，学生が教育実習の準備をすることに役立っており，優れた取組である

以上の状況から，教育方法及び成績評価面での取組の項目全体の水準は，教育目的及び目標の達成におおむね貢献しているが，改善の余地もある。

### ◇特に優れた点及び改善点等

現職教員を含む大学院生が加わる授業において，積極的に討論がなされることにより，臨床的な実践力の充実が図られ，学部学生，大学院生，大学教官のそれぞれに影響を与えており，特に優れた点である。

成績の判定に用いる評価基準を得点化して明確にし，これを学部全体で共通のものとして利用している。また，各講義・演習・実習について，どのような手続きで成績評価を行うかについては，電子シラバスに掲載し，学生が履修を検討する際に知ることができるように工夫している点は，評価できるが，なお工夫の余地がある。

学生の理解度を高めるために，教材の活用や講義方法等の工夫，教室外での準備学習・復習等についての指示を与える等，自主学習への配慮，教育実習等の実施における配慮（実施時期・時間数，講義との関連）は，優れた取組である。

## ４．教育の達成状況

この項目では，対象組織における「教育の達成状況」について，「学生が身に付けた学力や育成された資質・能力の状況から判断した達成状況」及び「進学や就職などの卒業後の進路の状況から判断した達成状況」の要素ごとに教育目的及び目標に照らした達成の程度を判断し，それらを総合的に判断した上で項目全体の達成の程度を評価し，水準を導き出したものを示している。また，特に重要な点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

### ◇目的及び目標に照らした達成度の状況

**【要素１】学生が身に付けた学力や育成された資質・能力の状況から判断した達成状況**

平成９年度から平成13年度までの留年者数は，16人，18人，17人，17人，18人とほぼ横ばいで推移し，厳格な評価とともに指導が十分に行われている点は，評価できる。

小学校教諭免許取得率はほぼ100％を達成している。平成13年度の幼稚園教諭一種免許状取得者は前年比で 14 名増加している。また，平成13年度の中学校教諭一種免許状取得者は前年比で３名増加し，平成13年度の高等学校教諭一種免許状取得者数は148名と前年比で７名増加しているなど，資格取得の状況は優れている。

平成13年度に行った「学生の授業評価」において，ピラミッド型の授業配置，スムーズな授業履修や単位取得，実習・実践を重視したカリキュラム編成に高い評価が与えられている。

**【要素２】進学や就職などの卒業後の進路の状況から判断した達成状況**

最近５年間の教員就職率（臨時的任用を含む。以下同じ。）は，平成９年度全国１位，平成10年度全国２位，平成11年度全国１位，平成12年度全国５位，平成13年度全国１位と常にトップクラスを安定して維持している点は，優れている。

平成９年度から平成13年度までの大学院等の進学者数は，平成９年度の15名から平成13年度の32名へ着実に増加している。また，未就職等の人数は平成９年度65名，平成10年度56名，平成11年度40名，平成12年度40名，平成13年度25名と一貫して減少しており，評価できる。

以上の状況から，教育の達成状況の項目全体の水準は，教育目的及び目標が十分達成されている。

### ◇特に優れた点及び改善点等

平成９年～13年の国立教員養成大学・学部の「教員就職率ベスト５」に毎年入っている。しかも，１位が３回，２位が１回，５位が１回とトップラスの就職率である。教育の目的・目標の達成に向けた大学のたゆまぬ努力の証と言える。

## 5．学習に対する支援

この項目では，対象組織における「学習に対する支援」について，「学習に対する支援体制の整備・活用に関する取組状況」及び「学習環境（施設・設備）の整備・活用に関する取組状況」の要素ごとに教育目的及び目標の実現に向けた貢献の程度を判断し，それらを総合的に判断した上で項目全体の貢献の程度を評価し，水準を導き出したものを示している。また，特に重要な点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

### ◇目的及び目標の実現への貢献度の状況

**【要素１】学習に対する支援体制の整備・活用に関する取組状況**

授業科目履修等に関するガイダンスでは，入学時における新入生オリエンテーション，２年次以上には年度始めに在校生用オリエンテーションが実施され，年度末には単位修得状況の確認を行い，単位不足の学生に対する個別指導を実施する等の科目履修指導を入学時より継続的に行っている点は，優れた取組である。

２年次の専修・コース分けに対するガイダンスでは，１年次に専修・コース説明会を２回実施した上で３回にわたる希望調査が実施され，希望調査後には集計結果を公表してコース選択の便宜を図っている等，学生の不利益がないように考慮されている点は，優れている。

教官が学生の学習支援に対応するため，オフィスアワーを導入し，曜日・時間帯などの情報をホームページに掲載し学内外から閲覧できるように便宜を図っている点は，優れている。

新入生に対しては４月下旬に新入生合宿研修が実施され，１クラス10名程度のクラス毎の活動や全体行動を通して，学生相互及びクラス担当教官との親睦を図っている。精神衛生面では保健管理センターを中心にカウンセラー，アドバイザーの設置と連携体制の整備がされており，学生の様々な相談事に専門的な視点から対応できるようになっている。セクシュアルハラスメント関係では，ガイドラインを設けてセクシュアルハラスメント対策委員会を設置し，セクハラ相談の窓口となる相談員を数多く設置することにより対応しており，安心して学習に取り組めるよう配慮されている点は，評価できる。

事故・災害に対する対策・心得を記載した『安全の手引』を配付し，教育研究活動に関わる安全面の配慮を行っている点は，評価できる。

教職への意欲と理解，実践力の養成を目指して現職教員や教育行政担当者等による教職講演会，教職講座を実施している。３年次には教員養成課程学生合宿研修で，教育に関する講演を聞き，学生相互で教育に関する問題を討議する等の機会を用意している点は，優れている。

学校教育における教科教育，生活科や総合的学習等の基盤となる基礎体験学習を実施するとともに，学生が地域の子ども達とともに体験する活動を通して子ども達の気持を理解し，実践的指導力の基礎を身に付けるために，フレンドシップ事業を実施している点は，優れている。

**【要素２】学習環境（施設・設備）の整備・活用に関する取組状況**

ほとんどの教室にビデオ機器を設置し，100 人以上収容の教室にはビデオ機器・マイク・ＯＨＰを設置する等，整備を進めている。附属施設においても，学校教育総合研究センター，附属実技教育研究指導センターでパソコン・ＶＴＲ等の機器・器材の積極的整備を進めており，整備・活用に向けた取組として，優れている。

パソコン・プリンタ等を利用できる情報処理センターが，土・日・祝日等を除いて８時30分から22時まで開館（長期休業期間は17時まで）し，利用者の便宜を図っている点は，評価できる。

附属図書館では，図書・雑誌の整備，視聴覚資料・器材の整備のほか，館内に情報処理センター端末，マルチメディア端末，ＡＶブース等の機器を整備し，学生の自主的な学習の便宜を図っている点は，評価できる。

以上の状況から，学習に対する支援の項目全体の水準は，教育目的及び目標の達成に十分貢献している。

### ◇特に優れた点及び改善点等

授業科目履修等に関するガイダンスでは，入学時における新入生オリエンテーション，２年次以上には年度始めに在校生用オリエンテーションが実施されており，年度末には単位修得状況の確認を行い，単位不足の学生に対する個別指導を実施する等の科目履修指導を入学時より継続的に行っており，優れた取組である。

学生が安心して学習に取り組めるための精神面でのケア，相談に対する支援体制と，教員養成を標榜する大学としての教職への学習意欲を高める支援体制は優れている。

ほとんどの教室にビデオ機器を設置し，100 人以上収容の教室にはビデオ機器・マイク・ＯＨＰを設置する等，整備を進めている。附属施設においても，パソコン・ＶＴＲ等の機器・器材の積極的整備を進めており，取組として優れている。

## ６．教育の質の向上及び改善のためのシステム

この項目では，対象組織における「教育の質の向上及び改善のためのシステム」について，「組織としての教育活動及び個々の教員の教育活動を評価する体制」及び「評価結果を教育の質の向上及び改善の取組に結びつけるシステムの整備及び機能状況」の要素ごとに改善システムの機能の程度を判断し，それらを総合的に判断した上で項目全体の機能の程度を評価し，水準を導き出したものを示している。また，特に重要な点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

### ◇改善システムの機能の状況

**【要素１】組織としての教育活動及び個々の教員の教育活動を評価する体制**

運営評議会の下に財務・環境委員会が設置され，同委員会の審議と運営評議会の決定に基づいて，教育研究基盤校費の「学部学生数積算分」が，履修学生数及び単位数に基づき講義担当者の所属する講座に配分されている。特に，重点配分として大学独自の「教育研究支援経費」枠が設けられ，競争的な環境の創出のために，個々の教員の教育研究活動の結果に基づき関係予算が配分されており，特色ある取組である。

運営評議会の下の大学評価委員会の常設部会であるＦＤ（ファカルティ・ディベロップメント）推進専門部会が，平成 13 年度に学部学生による授業評価･カリキュラム評価を実施した。この授業評価，カリキュラム評価では，学生，教員それぞれの視点から評価を求める体制をとっており，優れた取組である。

教員採用において「教育業績」を重視するよう，教員選考基準が平成 13 年度に見直された。教育研究業績書において教育上の能力に関する事項として，「教育方法の実践例」，「作成した教科書，教材」，「当該教員の教育上の能力に関する大学等の評価」，「学生指導の実績」，「その他」の項目をたて，それに基づき教員選考を行っており，創意・工夫が認められる。

教員養成教育における実際の指導面での教育の充実を図るため，現職教員の能力を積極的に評価し，「幼稚園・小学校・中学校・高等学校等の現職教員，指導主事，社会福祉施設等において児童等の指導にあたっている者又はそれらの職にあった者」を，教員養成実地指導講師として積極的に採用しており，優れた取組である。

**【要素２】評価結果を教育の質の向上及び改善の取組に結び付けるシステムの整備及び機能状況**

学部学生による授業評価・カリキュラム評価を受けて，全教員にその結果を公開するとともに，フィードバックを求めた。併せて，自由記述による自己評価・改善レポートを全教員及び講座等に求め，その結果を報告書としてまとめられている点は，優れている。

「学生の授業評価」は授業とカリキュラムの改善にまで活用させるシステムを用意している，という発想は，大学の「教育に関する説明責任」を配慮した発想であり，その実現に向けた大学の今後の活動に期待する。

ＦＤ推進専門部会の下で，ＦＤの必要性を教員が共通に理解することを目的として，ＦＤの講演会が平成 13 年度に２回開催された。ＦＤ講演会は大学の評価活動の意義や必要性に対する教員の意識改革に向けた有効な取組であり，ＦＤ活動実践は大学の目的・目標の実現を目指したものである。ただし，全教職員の講演会への積極的参加に関しては課題を残している。

以上の状況から，教育の質の向上及び改善のためのシステムの項目全体の水準は，向上及び改善のためのシステムがおおむね機能しているが，改善の余地もある。

### ◇特に優れた点及び改善点等

重点配分として大学独自の「教育研究支援経費」枠が設けられ，競争的な環境の創出のために，個々の教員の教育研究活動の結果に基づき関係予算が配分されており，特色ある取組である。

教員の採用において人材を広く確保するための教員選考基準の設定及び基準に基づく選考実施を行っている点は，優れている。

学生の授業評価を「授業・カリキュラムの改善」等に生かす意図は認められる。特に，学生の評価を教員にフィードバックして自覚を問い，教員各自の自己評価と比較しようとしている点は，優れている。

ＦＤ推進専門部会の下で，ＦＤの必要性を教員が共通に理解することを目的として，ＦＤの講演会が平成 13 年度に２回開催された。ＦＤ講演会は大学の評価活動の意義や必要性に対する教員の意識改革に向けた有効な取組であり，ＦＤ活動実践は大学の目的・目標の実現を目指したものである。ただし，全教職員の講演会への積極的参加に関して課題を残している。

# Ⅳ　評価結果の概要

## １．教育の実施体制

教育実習実施組織体制は，１年次～４年次まで学生自身に多くの実習体験（参観を含む）を重ね，しかも附属学校と公立校の両者の実習を課している点は，優れている。

学内外（教職員を含む）に対する教育目標及び目標の趣旨の周知，公表に関する取組は，広報刊行物の配布，ホームページの活用など周知･公表のための創意工夫が行われ，優れている。

中核的・指導的な教員の養成を目指すという明確な目標に沿って，学生受入方針（アドミッション・ポリシー）が策定され，機能している点は，優れている。

以上の状況から，教育の実施体制の項目全体の水準は，教育目的及び目標の達成に十分貢献している。

## ２．教育内容面での取組

臨床的実践力を育成する科目の充実，大学院教育と連携したカリキュラムの開発，十分な基礎学力の保証と初等教育全体にわたる教科専門性の涵養，各専修・コース専門の科目への橋渡しを担う科目の充実，教育実地研究（教育実習）の充実は，優れた取組である。

電子シラバスには，履修登録期限等を記した「学年暦」，「開設授業科目一覧」，「授業時間割」及び「授業概要等」が掲載されており，学生がそれぞれ授業等について検索し，その内容を把握した上で履修登録することができるようになっているが，シラバスの内容と活用法については，さらに充実させる必要がある。

以上の状況から，教育内容面での取組の項目全体の水準は，教育目的及び目標の達成におおむね貢献しているが，改善の余地もある。

## ３．教育方法及び成績評価面での取組

現職教員を含む大学院生が加わる授業において，積極的に討論がなされることにより，臨床的な実践力の充実が図られ，学部学生，大学院生，大学教官のそれぞれに影響を与えており，特に優れた点である。

成績の判定に用いる評価基準を得点化して明確にし，これを学部全体で共通のものとして利用している。　学生の理解度を高めるために，教材の活用や講義方法等の工夫，教室外での準備学習･復習等についての指示を与える等，自主学習への配慮，教育実習等の実施における配慮（実施時期・時間数，講義との関連）は，優れた取組である。

以上の状況から，教育方法及び成績評価面での取組の項目全体の水準は，教育目的及び目標の達成におおむね貢献しているが，改善の余地もある。

## ４．教育の達成状況

平成９年～13年の国立教員養成大学・学部の「教員就職率ベスト5」に毎年入っている。教育の目的・目標の達成に向けた大学のたゆまぬ努力の証と言える。

以上の状況から，教育の達成状況の項目全体の水準は，教育目的及び目標が十分達成されている。

## ５．学習に対する支援

入学時における新入生オリエンテーション，２年次以上には年度始めに在校生用オリエンテーションが実施され，年度末には単位修得状況の確認を行い，単位不足の学生に対する個別指導を実施する等の科目履修指導を入学時より継続的に行っており，優れた取組である。

学生が安心して学習に取り組めるための精神面でのケア，相談に対する支援体制と，教員養成を標榜する大学としての教職への学習意欲を高める支援体制は，優れている。

ほとんどの教室にビデオ機器を設置し，100 人以上収容の教室にはビデオ機器・マイク・ＯＨＰを設置する等，整備を進めている。附属施設においても，パソコン等の機器・器材の積極的整備を進めており，取組として優れている。

以上の状況から，学習に対する支援の項目全体の水準は，教育目的及び目標の達成に十分貢献している。

## ６．教育の質の向上及び改善のためのシステム

重点配分として大学独自の「教育研究支援経費」枠が設けられ，個々の教員の教育研究活動の結果に基づき関係予算が配分されており，特色ある取組である。

教員の採用において人材を広く確保するための教員選考基準の設定及び基準に基づく選考実施を行っている点は，優れている。

学生の授業評価を「授業・カリキュラムの改善」等に生かす意図は認められる。特に，学生の評価を教員にフィードバックして自覚を問い，教員各自の自己評価と比較しようとしている点は，優れている。

ＦＤ推進専門部会の下で，ＦＤの必要性を教員が共通に理解することを目的として，ＦＤの講演会が平成13年度に２回開催された。ただし，全教職員の講演会への積極的参加に関して課題を残している。

以上の状況から，教育の質の向上及び改善のためのシステムの項目全体の水準は，向上及び改善のためのシステムがおおむね機能しているが，改善の余地もある。

## ◇　特記事項についての所見

※　「対象組織の記述」は，対象組織から提出された自己評価書から転載

### 対象組織の記述

本学は，新構想の教育大学としての20数年の実績をもとに，平成12年度に，教育職員養成審議会『新たな時代に向けた教員養成の改善方策について　第１次答申』(平成９年）の内容を先導的に具体化し，実践力を伴った高い教職専門性―臨床的実践力―を備えた人材の養成に着手している。

その特色は，人間理解・専門性・実践力の形成をコアとして，一般教養科目と教職関連科目及び専門教育科目相互の有機的な連携を図り，人間教育学関連科目，相互コミュニケーション科目，ブリッジ科目，教育実践科目そして専門科目という斬新な教育課程を編成したところにある。加えて，学校教育専修は学習臨床コースと発達臨床コースに再編された。

また，教育課程と教育の実績については各評価項目の（３）においていずれも高い自己評価を下すことができた。その特筆すべき事例は，体験学習の必修，実際の教育現場や現職教員院生との接点を多面的に用意する３/４年次必修科目「実践セミナー」を設けたこと及び教育実習についても，附属学校等受け入れ学校との協議を経て，学生が実習校で主体的かつ計画的に臨床的実践力の向上を図ることができるような制度を実施に移していること等である。

本学は平成12年度の改組で，大学院と共に，学習臨床と発達臨床の教育研究分野を設け，そして現在教科領域に於いても教科教育と教科専門を統合した「教科臨床」の立ち上げに取り組んでいる。本学は，学校教育学部独自の専門分野として，学習臨床，発達臨床及び教科臨床という新しい臨床系の教育研究分野を構築していく改革に着手している。

さらに，学部と大学院の教育研究を有機的に関連させながら，学校をフィールドとした教員養成大学特有の専門性の高いカリキュラムの開発に，他大学と連携協力しながら，先進的に取り組み，教員養成機能の充実を図っていきたいと考えている。

### 機構の所見

上越教育大学は，昭和53年の開学から今日まで，一貫して学校教育に関する理論的でかつ実践的な教育研究を実践し，その実績をふまえて平成12年度には抜本的，先導的な新構想の理念を実現させるための改組をおこない，実践力をもつ高い専門性（臨床的実践力）を備えた人材の育成に着手している。

より高度な教育研究の推進者育成と教育の実践・研究の両面において我が国をリードすることのできる大学となることを目指した先導的な大学編成と新構想理念（教育目的・目標）の実現をめざした大学の意欲的な取組みが行われている。

平成 12 年度に行われた新構想理念にもとづく大学再編の実現をめざして開発・導入された独創性豊かな種々の改革とその教育理念を実現するための様々な工夫と実践は，「より高度な教育研究の推進者育成と教育の実践・研究の両面において我が国をリードすることのできる大学」をめざす上越教育大学の気迫と意欲を具現しており，今後その成果が期待される。

# 「教育学系」教育評価報告書

## （平成１３年度着手　分野別教育評価）

**上越教育大学大学院学校教育研究科**

平成１５年３月

大学評価・学位授与機構

# ◇　大学評価・学位授与機構が行う大学評価

## ○機構の行う評価について

### 1　評価の目的

大学評価・学位授与機構（以下「機構」）が実施する評価は，大学及び大学共同利用機関（以下「大学等」）が競争的環境の中で個性が輝く機関として一層発展するよう，大学等の教育研究活動等の状況や成果を多面的に評価することにより，①その教育研究活動等の改善に役立てるとともに，②評価結果を社会に公表することにより，公共的機関としての大学等の諸活動について，広く国民の理解と支持が得られるよう支援・促進していくことを目的としている。

### 2　評価の区分

機構の実施する評価は，平成 14 年度中の着手までを試行的実施期間としており，今回報告する平成 13 年度着手分については，以下の 3 区分で，記載のテーマ及び分野で実施した。

① 全学テーマ別評価（教養教育（平成 12 年度着手継続分），研究活動面における社会との連携及び協力）
② 分野別教育評価（法学系，教育学系，工学系）
③ 分野別研究評価（法学系，教育学系，工学系）

### 3　目的及び目標に即した評価

機構の実施する評価は，大学等の個性や特色が十二分に発揮できるよう，当該大学等が有する目的及び目標に即して行うことを基本原則としている。そのため，大学等の設置の趣旨，歴史や伝統，人的・物的条件，地理的条件，将来計画などを考慮して，明確かつ具体的に目的及び目標が整理されることを前提とした。

## ○分野別教育評価「教育学系」について

### 1　評価の対象組織及び内容

このたびの評価は，設置者（文部科学省）から要請のあった 6 大学の学部，研究科（以下「対象組織」）を対象に実施した。

評価は，対象組織の現在の教育活動等の状況について，原則として過去 5 年間の状況の分析を通じて，次の 6 項目の項目別評価により実施した。

1）　教育の実施体制
2）　教育内容面での取組
3）　教育方法及び成績評価面での取組
4）　教育の達成状況
5）　学習に対する支援
6）　教育の質の向上及び改善のためのシステム

### 2　評価のプロセス

① 対象組織においては，機構の示す要項に基づき自己評価を行い，自己評価書（根拠となる資料・データを含む。）を機構に提出した。
② 機構においては，専門委員会の下に評価チームを編成し，自己評価書の書面調査及び対象組織への訪問調査を実施した。

なお，評価チームは，各対象組織により，教育目的及び目標に沿って評価項目の要素ごとに独自に設定された観点に基づき分析を行い，その分析結果を踏まえ，要素ごとに教育目的及び教育目標の実現に向けた貢献（達成又は機能）の程度を判断し，それらを総合的に判断した上で項目全体の水準を導き出した。

③ 機構は，これらの調査結果を踏まえ，その結果を専門委員会で取りまとめた上，大学評価委員会で評価結果を決定した。
④ 機構は，評価結果に対する意見の申立ての機会を設け，申立てがあった対象組織について，大学評価委員会において最終的な評価結果を確定した。

### 3　本報告書の内容

**「Ⅰ　対象組織の現況及び特徴」，「Ⅱ　教育目的及び目標」**及び**「◇ 特記事項についての所見」の「対象組織の記述」欄**は，対象組織から提出された自己評価書から転載している。

**「Ⅲ　評価項目ごとの評価結果」**は評価項目ごとに，貢献（達成及び機能）の状況を要素ごとに記述している。

また，当該評価項目の水準を，これらの状況から総合的に判断し，以下の 5 種類の「水準を分かりやすく示す記述」を用いて示している。

- 十分貢献（達成又は機能）している。
- おおむね貢献（達成又は機能）しているが，改善の余地もある。
- かなり貢献（達成又は機能）しているが，改善の必要がある。
- ある程度貢献（達成又は機能）しているが，改善の必要が相当にある。
- 貢献しておらず（達成又は整備が不十分であり），大幅な改善の必要がある。

なお，これらの水準は，対象組織の設定した教育目的及び目標に対するものであり，相対比較することは意味を持たない。

また，評価項目全体から見て特に重要な点を，「特に優れた点及び改善点等」として記述している。

**「Ⅳ 評価結果の概要」**は，評価結果を要約して示している。

**「Ⅴ 意見の申立て及びその対応」**は，評価結果に対する意見の申立てがあった対象組織について，その内容を転載するとともに，それへの機構の対応を示している。

**「◇ 特記事項についての所見」の「機構の所見」欄**は，対象組織が記述している特記事項について，評価項目ごとの評価結果を踏まえて所見を記述している。

### 4　本報告書の公表

本報告書は，大学等及びその設置者に提供するとともに，広く社会に公表している。

# Ⅰ　対象組織の現況及び特徴

※　対象組織から提出された自己評価書から転載

## １．現況

（１）機関名　上越教育大学

（２）研究科名　大学院学校教育研究科

（３）所在地　新潟県上越市山屋敷町１番地

（４）専攻構成

学校教育専攻
幼児教育専攻
障害児教育専攻
教科・領域教育専攻

（５）学生数及び教員数

①　学生数　　509名
②　教員数　　175名（附属教員含まない）

## ２．特徴

上越教育大学は，学校教育に関する理論的でかつ実践的な教育研究を推進するために，昭和53年10月に開学した，いわゆる「新構想の教育大学」である。教員には教科に関する専門的な学力はもちろんのこと，教育者としての使命感，人間愛に支えられた広い一般教養，教育の理念・方法及び人間の成長や発達についての深い理解，優れた教育技術など専門職としての高度な資質能力が必要不可欠である。本学は，これらの要請に積極的に応えるため，主として初等中等教育諸学校教員に研究・研鑽の機会を提供する大学院（修士課程）と，教育の最も基本を形成する初等教育教員の養成を行う学部を備えた「教員に開かれた大学院を中心とする新しい大学」として創設された。

大学院（修士課程）は，このような本学設置の趣旨に基づき，主として初等中等教育の実践に関わる高度な総合的・専門的研究能力を育成し，学校教育の場における教育研究の推進者を養成すること（高度な「専門職業人」の育成）を目的として，「初等中等教育諸学校で３年以上の教職経験を有する者に入学定員枠の３分の２程度」を充て，現職教員の再教育に務めている。現職教員で学問への積極的意欲ある者に対して，現職の身分と給与を確保したまま，研究・研鑽の機会を与えるこの制度は，本学大学院（修士課程）の極めて大きな特徴である。また，学部の教育課程も，上記の新構想の理念に基づき，特に教育実習の拡充をはじめとする教育実践力の育成強化を図っており，本学独自の内容と方法を誇っている。創設20年あまりの歴史しかないものの，その成果は各都道府県教育委員会等からも高く評価されており，近年における本学の教員採用率は常に１位ないしトップクラスを維持しているが，この点も本学の刮目すべき実績並びに特徴として指摘できよう。

平成８年４月には，本学，兵庫教育大学，鳴門教育大学及び岡山大学を構成大学とする「兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科（博士課程）」が教員養成系大学・学部としては初めて設置された。この大学院（博士課程）は，各構成大学大学院（修士課程）の実績を踏まえつつ，学校教育における教育活動と教科の教育に関する実践的研究を行い，この分野における研究者と指導者を養成することを目的としている。上越教育大学は，かかる大学院（博士課程）の設置をもって，学部と大学院修士課程及び博士課程を擁する教育総合大学としての体制を整え，今日に至っている。教員養成系大学・学部として，数少ない博士課程を包摂した教育総合大学としての組織形態もまた本学の特徴である。

上越教育大学は，これまでの実績を踏まえつつも，激動する21世紀の教育を担い得る指導的な人材を，より積極的に育成するために，平成12年４月に専攻・コースの抜本的な再編，専攻別入学定員の変更等の改組を実施し，現在も継続してかかる改革を推進している。改革の基本理念は，新構想の理念を更に発展させ，特に現代の複雑さを増している教育諸問題と諸課題に臨床的に対処できる一層高度な教育研究の推進者を養成し，教育の実践・研究の両面において，我が国をリードすることのできる基幹的な大学・大学院となることを目指すものである。そのために展開されている「学部・大学院の連続的学習」や「学部学生と大学院学生との合同授業・共同研究」をはじめ，他の大学・学部には類をみない独創性豊かな種々の実践的・臨床的な教育研究活動は，まさに本学を象徴する特色の一つであろう。

このように，上越教育大学は，21世紀をリードする学校教育研究の拠点（センター・オブ・エクセレンス：ＣＯＥ）となり，日本の学校教育を先導的に改革し，その質的向上を図る新教育大学を目指している。

# Ⅱ　教育目的及び目標

※　対象組織から提出された自己評価書から転載

## 1．教育目的

本学大学院は，学校教育研究科（修士課程）とし，初等中等教育の臨床的な実践力に関わる諸科学の総合的・専門的研究を推進するとともに，初等中等教育諸学校教員に対する資質能力の向上という社会的要請に応えるため，高度の学習と研究の機会を与えるものであり，目的として次の項目が挙げられる。

(1) 主として初等中等教育諸学校教員に対する再教育の機会を付与することで，学校教育に関する理論と方法を教授し，広い視野に立つ精深な学識を授ける。

(2) 初等中等教育の場において創造的な教育・研究に取り組む力量を形成させるとともに，実践力に富む指導的な初等中等教育諸学校教員の育成を行う。

## 2．教育目標

前項の目的で示した意図を実現し，教育に関わる臨床的な実践力を修得させるために取り組むべき教育目標として以下に示す具体的な課題を設定している。

(1) 教育の実施体制

・ファカルティ・ディベロップメントを推進し，関係講演会等の実施により充実を図る。
・大学概要，大学案内，各種広報関係書類等の充実を図り，その配付と周知を徹底する。
・入試情報を開示し，大学院説明会を効果的に実施する。
・初等中等教育諸学校における３年以上の教職経験を有する者の入学を促進する。
・入学時において希望している研究目的と課題が，入学後の学習と研究活動で円滑に達成されるよう配慮する。

(2) 教育内容面での取組

・学校教育における臨床的な実践力を総合的に研究対象とする科目の充実を図り，さらに学部教育と連携したカリキュラムを開発する。
・現職教員の実践的な指導力を高め，専門的な教育実践研究を推進する。
・ガイダンスを一層充実したものとすることによって，専門セミナー担当教官の選定の過程を明確にし，教育課程を効果的に展開する。
・シラバスの内容を定期的に点検し，充実に努める。
・ティーチングアシスタントによる学部の授業への関与を効果的に行い，教育・研究能力と指導力の向上を図る。
・図書館の利用状況を把握し，蔵書の整備及び電子図書館的機能を充実する。

(3) 教育方法及び成績評価面での取組

・教材開発等，教科の専門性を複数の多様な視点からとらえ直す共同研究を導入する。
・学校教育現場を含む学外での研究活動を促進し，学位論文等に効果的に反映させる。
・学位論文作成の指導過程を充実するとともに学位論文評価を厳密にする。
・情報処理センターを中核とした各種ネットワーク施設の運用を促進し，多様な授業での活用を図る。

(4) 教育の達成状況

・初等中等教育諸学校教員に今後ますます必要とされてくる臨床的な実践力を身に付けさせる。
・論文指導を充実し，学位論文の水準を高める。
・大学院学生による，教職免許及び各種資格の取得を支援する。
・学位論文の保存・公表と概要の外部への公表のシステムを充実する。
・大学院修了生の教育実践を支援する体制を整備・充実する。

(5) 学習に対する支援

・教育相談・心理相談に係る支援体制を充実する。
・大学院学生の就職指導を徹底する。
・留学生の学習と研究活動に対する支援を充実する。
・大学院研究室の活用状況を把握し，学習環境を整備・充実する。
・教室等における視聴覚機器，情報サービス機器を整備・充実する。

(6) 教育の質の向上及び改善のためのシステム

・学内外の研究者及び初等中等教育諸学校教員とともに実施する共同研究を促進する。
・大学院学生による授業評価を実施し，大学院の教育・研究を充実する。
・教育研究支援経費等の配分がより効果的になるように改善する。
・本学教員の採用において人材を広く確保し得るように教員選考基準の見直しを図る。

# Ⅲ　評価項目ごとの評価結果

## 1．教育の実施体制

この項目では，対象組織における「教育の実施体制」について，「教育実施組織の整備に関する取組状況」，「教育目的及び目標の趣旨の周知及び公表に関する取組状況」及び「学生受入方針（アドミッション・ポリシー）に関する取組状況」の要素ごとに教育目的及び目標の実現に向けた貢献の程度を判断し，それらを総合的に判断した上で項目全体の貢献の程度を評価し，水準を導き出したものを示している。また，特に重要な点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

### ◇目的及び目標の実現への貢献度の状況

**【要素１】教育実施組織の整備に関する取組状況**

専攻の構成については，４専攻・７コースで構成されているが，学部での専修・コースと連動した構成となっている点は，評価できる。

教育課程を編成・改善する組織として，教育課程検討専門部会が置かれている。この組織により，修士課程短期在学コースの検討，大学院設置基準第14条特例による昼夜開講制，教育課程の編成等が審議されており，組織として有効に機能している点は，評価できる。

教育実習は，主として障害児教育専攻において実施されている。大学院における教育実習は特色ある取組であり，実施体制として教育実習委員会が設置されており，検討状況からも有効に機能している点は，評価できる。

大学評価委員会に，ファカルティ・ディベロップメント（ＦＤ）推進専門部会，ＦＤ事業実施検討ワーキンググループや授業評価等実施検討ワーキンググループが整備されており，組織改善に取り組む努力が認められる。

学生による授業評価と教員による自己点検評価が行われており，教育目的及び目標の達成に向け積極的な取組がなされ，優れている。

**【要素２】教育目的及び目標の趣旨の周知及び公表に関する取組状況**

大学に関する広報活動として，各種刊行物，印刷物に教育目的及び目標の記載を行い，またホームページの情報も充実しており，目的及び目標の趣旨の周知及び公表に関する取組は，優れている。入学希望者等利用する側の認識の高さについても訪問調査で確認された

**【要素３】学生受入方針（アドミッション・ポリシー）に関する取組状況**

平成11年度から，大学院入学者の入学資格の弾力化を図るなど検討が行われ，継続的に制度改善がなされている。検討された内容が「上越教育大学概要」，「上越教育大学大学院案内」に求める学生像等として記載され，また大学卒業資格を有しない者にも門戸を開くための工夫を行うなど，特色ある取組がなされている。

学生受入方針の学内外への周知・公表については，各種刊行物を配付するほか，大学院説明会を東京会場・上越会場で行うなど，意欲的な取組が行われ，優れている。

「個別の入学資格審査」の導入により４年制大学以外の卒業者の受験を認めることが容易になったことや，選抜試験の日程に関して，学生の意見を参考にするなど弾力的な学生受入が図られていることは，優れた取組である。

学生の希望する研究目的と課題を達成させるための取組として，入学時のオリエンテーションを平成14年度から，説明時間を変更するなど、よりきめ細やかな工夫をしており、優れた取組である。

以上の状況から，教育の実施体制の項目全体の水準は，教育目的及び目標の達成に十分貢献している。

### ◇特に優れた点及び改善点等

平成 11 年度から，大学院入学者の入学資格の弾力化を図るなど検討が行われ，継続的に制度改善がなされている。検討された内容が「上越教育大学概要」，「上越教育大学大学院案内」に求める学生像等として記載され，また大学卒業資格を有しない者にも門戸を開くための工夫を行うなど，特色ある取組がなされている。

学生の希望する研究目的と課題を達成させるための取組として，入学時のオリエンテーションを平成14年度から，説明時間を変更するなど、よりきめ細やかな工夫をしており、優れた取組である。

## 2．教育内容面での取組

この項目では，対象組織における「教育内容面での取組」について，「教育課程の編成に関する取組状況」，「授業（研究指導を含む）の内容に関する取組状況」及び「施設・設備の整備に関する取組状況」の要素ごとに教育目的及び目標の実現に向けた貢献の程度を判断し，それらを総合的に判断した上で項目全体の貢献の程度を評価し，水準を導き出したものを示している。また，特に重要な点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

### ◇目的及び目標の実現への貢献度の状況

**【要素１】教育課程の編成に関する取組状況**

学校教育における臨床的な実践力を総合的に研究対象とする科目として，「子どもの学びに関する科目」と「子どものこころのケアに関する科目」が，共通科目の領域にそれぞれ２科目ずつ設定している。また，「臨床に関する授業科目」を導入し，学部教育より進んだ形式で実践的な教育を行なっている点は，優れている。

学部教育との融合を図る科目として「実践場面分析演習」を共通科目に設定している。この科目は，学部における初等教育実習や学部の専門科目の一つである「実践セミナー」との連携を図り，教育実習等を含む実践場面における教科指導及び生徒指導の分析を行う目的で設定されており，特色ある取組である。

現職教員を含む大学院生と学部学生が合同で討議を行い，学部学生とともに学び合うことによって，大学院生の実践的指導力を一層伸長させるという学部教育と連携した「独創的カリキュラム」の実践がなされており，優れた取組である

多様な研究方法と研究体系を学び，教育実践研究の推進を視座に入れた個々の修士論文研究に資するために開設された「教育研究入門セミナー」と，専門分野の基本概念や研究手法を生かして行われた教育実践学構築の成果について発表を行い，大学院学生がその発表についての討議に参加する「研究プロジェクト・セミナー」を設定している。研究の成果を大学院教育に還元できるようにする取組として，優れている。

**【要素２】授業（研究指導を含む）の内容に関する取組状況**

毎年度入学式終了後，２日間にわたって新入生オリエンテーションを行っている。大学院の教育・研究や教育課程，履修方法，附属施設の利用方法等についてのガイダンスを資料（『履修の手引』，『授業科目一覧』，『電子シラバス利用の手引』，『履修登録票の記入要領』等）に基づき行われるなど，入学後の研究および学習をより充実させるための大学の積極的な姿勢がうかがえ，優れた取組である。

電子シラバスには，履修登録期限等を記した「学年暦」，「開設授業科目一覧」，「授業時間割」，「授業概要・目標，履修条件・注意事項，授業計画・内容，成績評価の方法，教科書・参考書」及び「全教官研究テーマ一覧」が掲載されており，大学院学生がそれぞれ授業等について検索し，その内容を把握した上で履修登録することができるようになっており工夫が見られるが，シラバスの内容及び活用については，さらに充実させる必要がある。

指導者としての適性を有し，将来教員・研究者となることを予定している大学院生に，大学教育の充実及び指導者としての機会提供を図るため，ティーチング・アシスタント（ＴＡ）を実施しているが，大学院教育に組み込む工夫が望まれる。

**【要素３】施設・設備の整備に関する取組状況**

電子図書館的機能として，目録所在情報の電子化，国立情報学研究所との接続，各種電子ジャーナルとの接続，学内ＬＡＮ上へのサービスの提供，ＣＤ－ＲＯＭによるサービスの提供，ホームページ上からの文献複写依頼や学外図書借受サービス等が実施されている。附属図書館の利用状況データからも整備の充実が認められ，評価できる。

研究・教育情報関係について，情報処理センターが設置され，インターネット接続した学内ＬＡＮ（ＪＵＥＮシステム）が構築されている。大学院生には自宅からもアクセスも可能なシステムとなっており，研究上の多くの情報が入手できる点は，優れている。

大学院生が研究活動を行うために，各専攻・コースごとの人数に応じた広さの院生研究室が設置されており，室内には机といす，ロッカーが個々に用意されている。大学院生の学習スペースの確保に創意・工夫がなされ，評価できる。

以上の状況から，教育内容面での取組の項目全体の水準は，教育目的及び目標の達成におおむね貢献しているが，改善の余地もある。

### ◇特に優れた点及び改善点等

学部教育との融合を図る科目として「実践場面分析演習」を共通科目に設定している。この科目は，学部における初等教育実習や学部の専門科目の一つである「実践セミナー」との連携を図り，教育実習等を含む実践場面における教科指導及び生徒指導の分析を行おうとするものである。特色ある取組である。

電子シラバスには，履修登録期限等を記した「学年暦」，「開設授業科目一覧」，「授業時間割」，「授業概要等」及び「全教官研究テーマ一覧」が掲載されており，大学院生がそれぞれ授業等について検索し，その内容を把握した上で履修登録することができるようになっており工夫が見られるが，シラバスの内容及び活用についてはさらに充実させる必要がある。

## 3．教育方法及び成績評価面での取組

この項目では，対象組織における「教育方法及び成績評価面での取組」について，「授業形態，研究指導法等の教育方法に関する取組状況」，「成績評価法に関する取組状況」及び「施設・設備の活用に関する取組状況」の要素ごとに教育目的及び目標の実現に向けた貢献の程度を判断し，それらを総合的に判断した上で項目全体の貢献の程度を評価し，水準を導き出したものを示している。また，特に重要な点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

### ◇目的及び目標の実現への貢献度の状況

**【要素１】授業形態，研究指導法等の教育方法に関する取組状況**

学位論文の作成については，研究が狭い視野に制限されることのないよう，講座で中間発表会を設けるなどして，複数のゼミの教員や大学院生が共同で学位論文の内容を検討し，意見や疑問を交換することが広く行われており，優れた取組である。

講義・演習について，全学のカリキュラムは内外の研究論文の講読や最近の研究成果の解説などの理論的側面と，学校現場での観察あるいは観察データなどを取り込んだ展開，さらには現職教員が多数在籍するという特性を生かして理論的枠組みや学校現場での観察に関わる，より実践的な観点からの討議などが行われており，教育方法の工夫がなされ，評価できる。

研究科全体の大学院生に対し，臨床に関する授業科目を共通科目として開設し，そのうち４単位を必修として，臨床的なアプローチを行えるようにしている。また，各分野ごとに「実践場面分析演習」を１年次と２年次で必修とし，それらの成果が各専攻分野の研究に活かされるように配慮している点は，優れている。

障害児教育の研究に関わる大学院生については，大学院教育実習専門部会を設置し，協力校を交えた会議を定期開催しながら，その支援体制を改善するよう努めている点は，評価できる。

指導教員を決めるに際しては，入学直後に行われるコースごとのオリエンテーションではコースの目標を示すだけでなく，各教員の教育・研究の紹介とそれに関わる質疑，大学院学生との個別相談，２年次生からのアドバイスを含めるとともに，研究室変更の手続きについても説明を行っている。また，オリエンテーション後の数週間をかけて，大学院生が複数の教員を直接訪れ，希望する研究テーマやその教員の指導可能なテーマについて何度も相談し，自らの研究に最も適した教員を選定できるよう配慮している点は，優れている。

**【要素２】成績評価法に関する取組状況**

成績評価については，各教員が電子シラバスにあらかじめ掲載し，大学院生が履修にあたり知ることができるようにしている。成績評価の内容も筆記試験に全面的に依拠するよりも，口頭試験，レポートの提出，討議への参加の様子などから総合的に判断するよう努めている。成績評価を，単に筆記試験によるのではなく，出席点も含めて，授業への参加，レポート等により総合的に評価している点は，評価できる。

学位論文については，当該論文ごとに指導教員以外の２名の教員を含む計３名による審査委員会を設置し，そこでの審査に合格した者についてのみ口述試験を行うことで，学位授与者の質を保持するよう努めているが，審査項目をどこまで具体的に公開できるか，また，審査基準の公開の在り方については検討の余地がある。

学位論文未提出者及び学位論文に関わる年度末の試験に合格できなかった大学院生に対しては，次年度前期末にも学位論文審査及び試験ができる体制を整え，教育的配慮がなされている点は，評価できる。

**【要素３】施設・設備の活用に関する取組状況**

ほとんどの教室にビデオを視聴できるような設備が整えられており，こうした機材が講義・演習において広く活用されている。また，多くの大学院生研究室あるいはその近隣の実習室にビデオを編集するための機材が備えられ，講義の準備や研究の遂行のためにも活用されている点は，優れている。

情報処理センター内にマルチメディア処理室，音響データー分析室，応用処理室等を設け，各講座のビデオ機材では行いにくい処理がここで進められており，評価できる。

ＳＣＳシステムを活用した大学間遠隔共同講義を行い，そこでの討議などに大学院生も参加させることで，大学院学生が遠隔教育を学ぶだけでなく，実地に体験できる機会を設けている点は，評価できる。

以上の状況から，教育方法及び成績評価面での取組の項目全体の水準は，教育目的及び目標の達成におおむね貢献しているが，改善の余地もある。

### ◇特に優れた点及び改善点等

大学院の教育臨床研究を重視する教育方法の取組は評価できる。特に「学び」や「心のケア」についての臨床的アプローチの授業の共通科目化，「実践場面分析演習」の必修化等に大学院生の臨床的素地の育成に力を入れている点は，優れている。

学位論文については，当該論文ごとに指導教員以外の２名の教員を含む計３名による審査委員会を設置し，そこでの審査に合格した者についてのみ口述試験を行うことで，学位授与者の質を保持するよう努めているが，審査項目をどこまで具体的に公開できるか，また，審査基準の公開の在り方についての検討の余地がある。

## 4．教育の達成状況

この項目では，対象組織における「教育の達成状況」について，「学生が身に付けた学力や育成された資質・能力の状況から判断した達成状況」及び「進学や就職などの修了後の進路の状況から判断した達成状況」の要素ごとに教育目的及び目標に照らした達成の程度を判断し，それらを総合的に判断した上で項目全体の達成の程度を評価し，水準を導き出したものを示している。また，特に重要な点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

### ◇目的及び目標に照らした達成度の状況

**【要素１】学生が身に付けた学力や育成された資質・能力の状況から判断した達成状況**

教育の目的・目標を達成するための，教員の意欲的な授業実践は，特に優れている。

大学院が学部と連携した「実践場面分析演習」は，各専攻分野ごとに，指導教員，大学院生，学部学生が合同で学校現場の実践について論じ合う特色ある授業であり，教職の専門性を形成する上で，優れている。

平成10年度から13年度にかけての修士学位取得者は，それぞれ232名，210名，244名，246名で，当該年次生の95%以上の高取得率となっており，達成状況として優れている。なお，未取得者の論文指導体制は，現職に復帰した教員についても講座で支援する体制を整えて，指導教官が実際の指導を行っている。

**【要素２】進学や就職などの修了後の進路の状況から判断した達成状況**

現職派遣教員以外の修了生の内，公立学校教員希望者の受験率（受験者/現職教員を除く修了予定者）は平成９年度～平成13年度でみるとほぼ48%～57%で推移しており，同期間における教員採用率は40%～50%前後となっている。学校種別でみると，中等教育機関への採用が初等教育機関に比べて，ほぼ２倍になっている。全国的にみても厳しい教員採用環境の中で，高い教員採用率を維持していることは，大学院の高度な専門性教育が高い成果を収めている。

以上の状況から，教育の達成状況の項目全体の水準は，教育目的及び目標が十分達成されている。

### ◇特に優れた点及び改善点等

教育の目的・目標を達成するための，教員の意欲的な授業実践は，特に優れている。

大学院が学部と連携した「実践場面分析演習」は，各専攻分野ごとに，指導教員，大学院生，学部学生が合同で学校現場の実践について論じ合う特色ある授業であり，教職の専門性を形成する上で，優れている。

修士の学位の取得状況は当該年次生の 95%以上の高取得率となっており，達成状況として優れている。

## ５．学習に対する支援

この項目では，対象組織における「学習に対する支援」について，「学習に対する支援体制の整備・活用に関する取組状況」及び「学習環境（施設・設備）の整備・活用に関する取組状況」の要素ごとに教育目的及び目標の実現に向けた貢献の程度を判断し，それらを総合的に判断した上で項目全体の貢献の程度を評価し，水準を導き出したものを示している。また，特に重要な点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

### ◇目的及び目標の実現への貢献度の状況

**【要素１】学習に対する支援体制の整備・活用に関する取組状況**

授業科目及び専門セミナーに関するガイダンスは，新入生オリエンテーションで，全員に教育課程と履修方法に関する説明をした後，各専攻・コースごとにガイダンスを行い専門セミナーに関する説明等が個別に詳しく行われている点は，優れている。

学習を進める上での相談・助言体制は，各教員がオフィスアワーを設けており，授業の質問等に対応している。また，修士論文作成に対して丁寧な個別指導が行われており，相談・助言体制として優れている。

精神衛生面の支援では，保健管理センターを中心に専門のカウンセラーとアドバイザーが配置され，連携体制が整備されており，大学院学生の様々な相談事に専門的な視点から対応できるようになっている。セクシュアルハラスメントに対しては，学内に 26 名のセクハラ相談員を任命してセクハラ相談窓口を設けるとともに，防止と被害者救済のためのセクシュアルハラスメント対策委員会を設置して対応している。安心して学習に取り組めるよう配慮している点は，評価できる。

教育研究活動に関わる安全面の配慮としては，事故・災害に対する対策・心得等を記載した『安全の手引』を配付して，注意を促している点は，評価できる。

教員を希望する大学院学生に向けて教職への意欲と理解，実践力の養成を目指して現職教員や教育行政担当者等による教職講座を実施している。また，学校現場と直結した授業や科目を設けて，学校教育に対する学習意欲を高める支援が十分なされている点は，評価できる。

留学生に対する居住面での支援として留学生用の国際学生宿舎を設置している。日本語能力を向上させるために，正課の授業とは別に「日本語補講」を行い，個別にはチューター制度を設け，生活や研究活動，学生生活に言語面での支障がないよう支援している。留学生の学習援助の一つとして，留学生演習室を設け，パソコンや視聴覚教材を活用して個人指導や予習復習の個別学習ができるよう配慮している。修学案内や在留手続き等，大学内外の事柄に関する「外国人留学生のためのガイドブック」を配付している点は，評価できる。

**【要素２】学習環境（施設・設備）の整備・活用に関する取組状況**

ほとんどの教室にビデオ機器を設置し，とりわけ 100 人以上収容の教室には各種ビデオ機器･マイク･ＯＨＰを設置する等，整備を進めている点は，評価できる。

各専攻ごとに少人数で討議をしながら授業及び研究活動ができるような演習室，実験室，資料室等，研究活動に必要な施設が十分に整備されている。

パソコン・プリンタ等が利用できる情報処理センターを設置し，自由に学習のために利用できるよう土・日・祝日等を除いて８時 30 分から 22 時まで開館（長期休業期間は 17 時まで）して対応している点は，評価できる。

附属図書館では，館内に情報処理センター端末，マルチメディア端末，ＡＶブース等の機器を整備し，大学院学生の自主学習の場を提供している点は，評価できる。

以上の状況から，学習に対する支援の項目全体の水準は，教育目的及び目標の達成に十分貢献している。

### ◇特に優れた点及び改善点等

当大学の独自性とも言える臨床的な実践研究に力を入れた「研究プロジェクト関連科目」や「子どもの学び」「心のケア」に関する共通科目の設定は，学校教育問題に正面から取組み学習に対する支援として，特に優れている。

学習を進める上での相談・助言体制，学校教育に対する学習意欲を高める支援，留学生に対する支援，大学院学生が自主的に学習できる環境の整備・活用は優れている。

## 6．教育の質の向上及び改善のためのシステム

この項目では，対象組織における「教育の質の向上及び改善のためのシステム」について，「組織としての教育活動及び個々の教員の教育活動を評価する体制」及び「評価結果を教育の質の向上及び改善の取組に結びつけるシステムの整備及び機能状況」の要素ごとに改善システムの機能の程度を判断し，それらを総合的に判断した上で項目全体の機能の程度を評価し，水準を導き出したものを示している。また，特に重要な点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

### ◇改善システムの機能の状況

**【要素１】組織としての教育活動及び個々の教員の教育活動を評価する体制**

運営評議会の下に財務・環境委員会が設置され，学内の予算配分・調整等に関する事項を，所掌事項の一つとしている。同委員会の審議と運営評議会の決定に基づいて，教育研究基盤校費の「大学院学生数積算分」が，大学院学生所属する講座に配分されている。特に，重点配分として大学独自の「教育研究支援経費」枠が設けられ，競争的な環境の創出のために，個々の教員の教育研究活動の結果に基づき関係予算が配分されており，特色ある取組である。

運営評議会の下の大学評価委員会の常設部会であるファカルティ・ディベロップメント（ＦＤ）推進専門部会が，平成 13 年度に大学院学生による授業評価・カリキュラム評価を実施した。この授業評価，カリキュラム評価では，大学院学生の視点から評価を求める体制を採っており，優れた取組である。

教員採用において「教育業績」を重視するよう，教員選考基準が平成 13 年度に見直された。教育研究業績書において教育上の能力に関する事項として，「教育方法の実践例」，「作成した教科書，教材」，「当該教員の教育上の能力に関する大学等の評価」，「学生指導の実績」，「その他」の項目をたて，それに基づき教員選考を行っており，創意・工夫が認められる。

研究科委員会の下に大学院担当教員審査委員会が設置され，同委員会は，大学院担当教員としての適否を，当該教員の研究業績，教育業績及びその他の業績等を勘案して審査している点は，評価できる。

**【要素２】評価結果を教育の質の向上及び改善の取組に結び付けるシステムの整備及び機能状況**

教育実践の開発的研究を推進するために設けられた研究プロジェクトは，学内公募から選考・評価され，予算が配分される。この研究プロジェクトを担当する教員又は教員グループはその成果を授業科目「教育研究入門セミナー（必修２単位）」，「研究プロジェクト・セミナー（必修２単位）」として開設することとしており，評価に基づく授業の開設は，優れた取組である。

大学院学生による授業評価・カリキュラム評価を受けて，全教員にその結果を公開するとともに，フィードバックを求めた。併せて，自由記述による自己評価・改善レポートを全教員及び講座等に求め，その結果を報告書がまとめられた。学生による授業評価の結果を，全教員に公開し，フィードバックを求めるという発想は，学生による授業評価の結果を真摯に受け止め，授業改善を行う優れた方法であり，優れた取組である。

ＦＤ推進専門部会の下で，ＦＤの必要性を教員が共通に理解することを目的として，ＦＤの講演会が平成 13 年度に２回開催された。ただし，全教職員の講演会への積極的参加に関しては課題を残している。

大学の評価活動の意義に対する教員の意識改革，大学院学生による授業評価・カリキュラム評価を今後どのように生かすかは，今後の課題である。

以上の状況から，教育の質の向上及び改善のシステムの項目全体の水準は，向上及び改善のためのシステムがおおむね機能しているが，改善の余地もある。

### ◇特に優れた点及び改善点等

重点配分として大学独自の「教育研究支援経費」枠が設けられ，競争的な環境の創出のために，個々の教員の教育研究活動の結果に基づき関係予算が配分されており，特色ある取組である。

教員の採用において人材を広く確保するための教員選考基準，評価に基づく授業の開設は，優れた取組である。

教員サイドの教育実践の開発研究推進の研究プロジェクトに予算を点けて研究を促進する取組は，学校教育研究科として特色ある優れた取組である。

# Ⅳ　評価結果の概要

## １．教育の実施体制

平成11年度から，大学院入学者の入学資格の弾力化を図るなど検討が行われ，継続的に制度改善がなされている。検討された内容が「上越教育大学概要」等に求める学生像等として記載され，また大学卒業資格を有しない者にも門戸を開くための工夫を行うなど，特色ある取組がなされている。

学生の希望する研究目的と課題を達成させるための取組として，入学時のオリエンテーションを平成14年度から，説明時間を変更するなど、よりきめ細やかな工夫をしており、優れた取組である。

以上の状況から，教育の実施体制の項目全体の水準は，教育目的及び目標の達成に十分貢献している。

## ２．教育内容面での取組

学部教育との融合を図る科目として「実践場面分析演習」を共通科目に設定している。この科目は，学部における初等教育実習や学部の専門科目の一つである「実践セミナー」との連携を図り，教育実習等を含む実践場面における教科指導及び生徒指導の分析を行おうとするものである。特色ある取組である。

電子シラバスには，履修登録期限等を記した「学年暦」，「開設授業科目一覧」，「授業時間割」，「授業概要等」及び「全教官研究テーマ一覧」が掲載されており，大学院生がそれぞれ授業等について検索し，その内容を把握した上で履修登録することができるようになっており工夫が見られるが，シラバスの内容及び活用についてはさらに充実させる必要がある。

以上の状況から，教育内容面での取組の項目全体の水準は，教育目的及び目標の達成におおむね貢献しているが，改善の余地もある。

## ３．教育方法及び成績評価面での取組

大学院の教育臨床研究を重視する教育方法の取組は評価できる。特に「学び」や「心のケア」についての臨床的アプローチの授業の共通科目化，「実践場面分析演習」の必修化等に大学院生の臨床的素地の育成に力を入れている点は，優れている。

学位論文については，当該論文ごとに指導教員以外の２名の教員を含む計３名による審査委員会を設置し，そこでの審査に合格した者についてのみ口述試験を行うことで，学位授与者の質を保持するよう努めているが，審査項目をどこまで具体的に公開できるか，また，審査基準の公開の在り方についての検討の余地がある。

以上の状況から，教育方法及び成績評価面での取組の項目全体の水準は，教育目的及び目標の達成におおむね貢献しているが，改善の余地もある。

## ４．教育の達成状況

教育の目的・目標を達成するための，教員の意欲的な授業実践は，特に優れている。

大学院が学部と連携した「実践場面分析演習」は，各専攻分野ごとに，指導教員，大学院生，学部学生が合同で学校現場の実践について論じ合う特色ある授業であり，教職の専門性を形成する上で，優れている。

以上の状況から，教育の達成状況の項目全体の水準は，教育目的及び目標が十分達成されている。

## ５．学習に対する支援

当大学の独自性とも言える臨床的な実践研究に力を入れた「研究プロジェクト関連科目」や「子どもの学び」「心のケア」に関する共通科目の設定は，学校教育問題に正面から取組み学習に対する支援として，特に優れている。

学習を進める上での相談・助言体制，学校教育に対する学習意欲を高める支援，留学生に対する支援，大学院学生が自主的に学習できる環境の整備・活用は優れている。

以上の状況から，学習に対する支援の項目全体の水準は，教育目的及び目標の達成に十分貢献している。

## ６．教育の質の向上及び改善のためのシステム

重点配分として大学独自の「教育研究支援経費」枠が設けられ，個々の教員の教育研究活動の結果に基づき関係予算が配分されており，特色ある取組である。

教員の採用において人材を広く確保するための教員選考基準の設定及び基準に基づく選考実施，評価に基づく授業の開設などの取組は，優れている。

教員サイドの教育実践の開発研究推進の研究プロジェクトに予算を点けて研究を促進する取り組みは，学校教育研究科として特色ある優れた取組である。

以上の状況から，教育の質の向上及び改善のシステムの項目全体の水準は，向上及び改善のためのシステムがおおむね機能しているが，改善の余地もある。

## ◇ 特記事項についての所見

※ 「対象組織の記述」は，対象組織から提出された自己評価書から転載

### 対象組織の記述

大学院学校教育研究科は，主として初等中等の現職教員の研修を行う新構想の大学院として創設され，その20数年の実績をもとに，平成12年度に，教育職員養成審議会『修士課程を積極的に活用した教員養成の在り方について―現職教員養成の再教育の推進―　第２次答申』(平成10年)の内容を先導的に具体化した新たな教育研究に着手している。

その特色は，専門科目の履修に専攻枠の制限を外し，特に現職教員院生自らが実践上の課題を創意をもって解決するための最適な教育課程を組めるシステムを導入したことにある。このシステムに対する院生の評価は高い。更に実践場面における問題解決能力を養成する共通科目，とりわけ「実践場面分析演習」は本学が先進的に導入した専門科目であり，その成果は冊子にまとめられ，修士論文とともに研究実績報告となっている。

平成13年に本学が実施したアンケート調査「現職教員を対象とした大学院研修制度」では，大学院での研修に求める能力の養成について，教育に関する高度な研究能力と実践的能力が９割を占めており，そのために２年制大学院が相応しいとする割合が同様に９割を超えている（14条特例については３割強)。12年度実施の教育課程と履修方法は現職教員のかかるニーズに対応したものになっていると言えよう。

本学は平成12年度の改組で，学習臨床と発達臨床の教育研究分野を設け，そして現在教科領域においても教科教育と教科専門を統合した「教科臨床」の立ち上げに取り組んでいる。本学は，学習臨床，発達臨床及び教科臨床という新しい臨床系の教育研究分野の構築と，全国の学校現場における様々な課題及び改革に創意をもって取り組める指導的な人材養成の機能をパワーアップする作業に着手している。加えて，連合大学院（博士課程）の一層の充実を図るとともに，多様な勤務条件やバックグランドにある現職教員に対して研修機会を提供できる新しいプログラムやシステムを積極的に導入し，他大学と積極的に連携協力し，地域の教育課題に対応できる教育・研究機能の高度化にも努めていきたいと考えている。

### 機構の所見

上越教育大学大学院は，「教員に開かれた大学院」として昭和53年に創設され，また，平成12年度には専攻・コース等の再編・改組を行い，我が国の教員養成系の大学院をリードすることのできる大学院を目指した先進的，独創的な教育研究システムの開発，整備，充実に努めるとともに，学校教育の場における高度な実践的・臨床的な教育研究能力の育成を目的とした先導的で幅広い教育活動（教育研究指導，学習支援）が実践されている点は高く評価される。

特に，評価項目（１）「教育の実施体制」の要素３「学生の受入方針に関する取組状況」，評価項目（２）「教育内容面での取組」の要素１「教育課程の編成に関する取組状況」，及び評価項目（３）「教育方法及び成績評価面での取組」の要素１「授業形態，研究指導法等の教育方法に関する取組状況」など，学生（現職教員）の受入体制，高度な教育実践力・研究能力育成をめざしたカリキュラム開発，学生の学習・研究支援体制の整備と実践は，上越教育大学大学院の先導的，意欲的な教育目的・目標（教育理念）の達成を目指した教育実践として高く評価できる。

# あ　と　が　き

上越教育大学では，組織，運営，教育研究活動等全般にわたる年次報告書を昭和61年度（昭和60年度版）から作成・発行してきており，この平成15年度版で通算第19集を刊行するに至った。本報告書もこれまでと同様に，「年次報告書」の部分と「自己点検・評価報告書」の部分から構成されており，それが特色となっている。

平成16年４月から本学も国立大学法人となったため，この平成15年度版の年次報告書が国立大学としての最終年度の活動をまとめたものとなった。今後は本学も，国立大学法人大学評価委員会や大学評価・学位授与機構による中期目標・中期計画に対する年次評価や全体評価，さらには認証評価機関による大学評価などを受けることとなり，より一層明確な説明責任と活動全般が捕捉できる分かりやすい自己点検・評価報告書が求められる。そのため，本学では上述した今後の外部評価にも堪えられるような，自己点検・評価に関する新しい基準・方法を検討中であり，平成16年度版の年次報告書はそれらに基づいたものとなる予定である。

大学評価への要求が社会的に高まってきた背景には，単に評価そのもののみが求められているわけではなく，それをどう生かすかまで問われていることを忘れてはならない。特に自己点検・評価は単に点検・評価を行うことが目的ではなく，それらをもとに問題点を把握して，改善に結びつけることができて初めて大きな意味を持つ。つまり，大学評価に対する社会的な要求は，「特に問題点や課題がない」という評価結果で自己満足してほしいということではなく，常に変化している教育環境を背景に，取り組むべき課題を自ら積極的に掘り起こし，その課題を克服するために大学全体で努力してほしいというメッセージと捉えるべきである。そのため，問題点や改善すべき箇所を全構成員が大学全体の課題として共通認識できるような，「何のための評価か」が明確に理解できるような，自己点検・評価がこれまで以上に望まれる。

今後は本学もさまざまな外部評価を受けることになる。特に，中期目標・中期計画に基づいた国立大学法人評価は，今まで以上に成果についての評価が重視されるであろうし，それがひいては将来の本学全体の屋台骨に大きく関わってくることは容易に予想できる。そのため，その核となる自己点検・評価の重要性を大学構成員全体が認識し，積極的に関わって行く姿勢が問われている。

最後に，本報告書の作成に当たりご協力いただいた本学教職員各位に対して厚くお礼を申し上げるとともに，学内外の関係各位からのご意見・ご助言をいただきたく，この場を借りてお願い申し上げる次第である。

平 成 17 年 1 月

上越教育大学副学長
大学評価委員会委員長
川　崎　直　哉

# 大学評価委員会委員名簿

平成17年1月現在

| 氏　名 | 委員会組織における職名又は所属等 | 任　期 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 川崎直哉 | 副学長 | | 委員長 |
| 小林辰至 | 学校教育総合研究センター長（教授） | | |
| 増井三夫 | 第一部（教　授） | H16.4.1 ～ H17.3.31 | 副委員長 |
| 西　穣司 | 第二部（教　授） | H16.4.1 ～ H18.3.31 | |
| 河西英通 | 第三部（助教授） | H16.4.1 ～ H17.3.31 | |
| 中川清隆 | 第四部（教　授） | H16.4.1 ～ H18.3.31 | |
| 山ノ下堅一 | 第五部（教　授） | H16.4.1 ～ H17.3.31 | |
| 加藤泰樹 | 附属学校長（教　授） | H16.4.1 ～ H17.3.31 | |
| 梶原憲次 | 事務局長 | | |
| 堀江重雄 | 総務部長 | | |
| 髙田弘行 | 学務部長 | | |

上 越 教 育 大 学 年 次 報 告 書
第19集：平成15年度版

平成17年1月発行
編　集　上越教育大学大学評価委員会
発　行　上越教育大学
〒943-8512　上越市山屋敷町1番地
TEL（025）521-3658
（総務部 企画室 評価係）

